

青森県埋蔵文化財調査報告書 第118集

富沢(1)・(2)遺跡

昭和 63 年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第118集

富沢(1)・(2)遺跡

昭和63年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、むつ小川原開発事業予定地内の埋蔵文化財の保護と活用を図るため、昭和46年度から分布調査・試掘調査・発掘調査を実施してまいりました。

昭和62年度には、4遺跡の発掘調査を実施しましたが、本報告書は、縄文時代中期を主体とする富ノ沢(1)・(2)遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護と活用に、いささかでも資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、この調査の実施と報告書の作成にあたり、御指導・御協力賜りました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

青森県教育委員会

教育長 **本 間 茂 夫**

例 言

- (1) 本報告書は、昭和62年度に発掘調査を実施した、むつ小川原開発事業予定地内「富ノ沢(1)遺跡(青森県教育委員会登録番号 50048)、富ノ沢(2)遺跡(青森県教育委員会登録番号 50049)」の報告書である。
- (2) 本報告書の執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、その他は文末に付した。
- (3) 遺構内の焼土・ローム・炭化物・貼り床等はスクリーントーンを用いて示し、その都度図中に注記した。
- (4) 標準層序、遺構内堆積土の色調は『新版標準土色帖(小山・竹原編1967)』に基づいて、記載した。
- (5) 出土遺物には観察表を付した。表中の()内の数値は現存値である。
- (6) 竪穴住居跡の床面積の計測については、 $S = 1/20$ の実測図を用い壁の下端と床面との接点を基準として、プランメーターで3回測り、その平均値を使用した。なお、その数値は、床面(柱穴等含む)全体の面積である。
- (7) 図版縮尺は、原則として次のようにしたが、異なる場合には、その都度図中に示した。竪穴住居跡 1/60、土壌・焼土状遺構・屋外炉・ピット群 1/50、埋設土器 1/25
土器実測図・拓影図 1/2.5・1/3、剥片石器 1/1.5・1/2、礫石器 1/2.5・1/3
- (8) 引用・参考文献は一括収録した。
- (9) 資料の鑑定及び分析等は次の方々に依頼した。
- ・石質鑑定 青森県立八戸高等学校教諭 松山 力
 - ・樹種同定 前奈良教育大学教授 嶋倉巳三郎
 - ・放射性炭素年代測定 八戸工業大学助教授 村中 健
 - ・燐分析 八戸工業高等専門学校工業化学科教授 小山陽造
- (10) 本遺跡出土の遺物、実測図面、撮影写真等は、現在当センターで保管してある。
- (11) 各遺構の番号は富ノ沢(1)遺跡と同(2)遺跡を通じた一連のもので、発掘作業工程に係る調査順(富ノ沢(2)遺跡A地区・同B地区・富ノ沢(1)遺跡)に付したものである。
- (12) 発掘調査及び整理作業に際しては、下記の方々から教示を得た。
- 利部修・谷地薫・小田野哲憲・酒井宗孝・大沼忠春・船木義勝・熊谷常正・桜田隆・小林完・工藤竹久・児玉潤



有足土器



縄文時代中期土器

目 次

序	
例 言	
目 次	
第 章 調査に至る経過と調査要項	
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査要項	2
第 章 調査の概要	
第 1 節 調査の方法	4
第 2 節 調査の概要	5
第 3 節 遺物の分類	6
第 章 遺跡の地形と層序	
第 1 節 遺跡周辺の地形及び地質	9
第 2 節 遺跡内の層序	11
第 章 検出遺構と出土遺物	
第 1 節 富ノ沢 1 遺跡の検出遺構と出土遺物	19
1．検出遺構と遺構内出土遺物	19
(1) 土 壙	19
(2) 焼土状遺構	32
2．遺構外出土遺物	
(1) 土 器	34
(2) 石 器	52
第 2 節 富ノ沢 2 遺跡 A 地区の検出遺構と出土遺物	
1．検出遺構と出土遺物	
(1) 竪穴住居跡	62
(2) 土 壙	99
(3) 焼土状遺構	126
(4) 埋 設 土 器	127
(5) 屋 外 炉	129
2．遺構外出土遺物	
(1) 土 器	131

(2) 石 器	153
第3節 富ノ沢2遺跡B地区の検出遺構と出土遺物	
1. 検出遺構と遺構内出土遺物	
(1) 竪穴住居跡	175
(2) 土 壙	183
(3) 焼土状遺構	215
(4) ピット群	218
2. 遺構外出土遺物	
(1) 土 器	220
(2) 石 器	232
第 章 調査の成果	
1. 検出遺構	
(1) 竪穴住居跡	239
(2) 土 壙	249
(3) 焼土状遺構	250
(4) 埋設土器	250
2. 出土遺物	
(1) 土 器	
ア. 第 群土器(縄文時代早期)～第 群土器(縄文時代後期)について	251
イ. 第 群土器(弥生時代).....	251
ウ. 有足土器について	252
(2) 石 器	254
第 章 自然科学的分析	
(1) 炭化材樹種同定	258
(2) 年代測定	259
(3) 六ヶ所村富ノ沢2遺跡A地区第1号竪穴住居跡および埋設土器周囲の土壌中の無機リン酸 の含有量と残存脂質の脂肪酸組成	260
第 章 まとめ	267
引用・参考文献	269

図版 目次

第 1 図	六ヶ所村報告書関連遺跡位置図	8	第38図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 8)	45
第 2 図	遺跡周辺の地形分類図	9	第39図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 9)	46
第 3 図	遺跡内の土層柱状図	11	第40図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 10)	47
第 4 図	富ノ沢 1 遺跡・富ノ沢 2 遺跡 A・B 地区遺構配置図	附図	第41図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 11)	48
第 5 図	調査区全体図	16	第42図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 12)	49
第 6 図	富ノ沢 1 遺跡基本層序 1)	17	第43図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 13)	50
第 7 図	富ノ沢 1 遺跡基本層序 2)	18	第44図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 14)	51
第 8 図	第71号土壌	19	第45図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 1)	53
第 9 図	第72号土壌出土遺物	19	第46図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 2)	54
第10図	第72号土壌	20	第47図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 3)	55
第11図	第73号土壌	20	第48図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 4)	56
第12図	第74号土壌	21	第49図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 5)	57
第13図	第75号土壌	21	第50図	富ノ沢 2 遺跡 A 地区基本層序 1)	60
第14図	第76号土壌	22	第51図	富ノ沢 2 遺跡 A 地区基本層序 2)	61
第15図	第77号土壌	23	第52図	第 1 号竪穴住居跡 1)	64
第16図	第78号土壌	23	第53図	第 1 号竪穴住居跡 2)	65
第17図	第79号土壌	24	第54図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 1)	66
第18図	第80号土壌出土遺物	25	第55図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 2)	67
第19図	第80号土壌	26	第56図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 3)	68
第20図	第81号土壌	27	第57図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 4)	69
第21図	第83号土壌	27	第58図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 5)	70
第22図	第84号土壌	28	第59図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 6)	71
第23図	第85号土壌	28	第60図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 7)	72
第24図	第86号土壌	29	第61図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 8)	73
第25図	第87号土壌	30	第62図	第 2 号竪穴住居跡 1)	74
第26図	第88号土壌	30	第63図	第 2 号竪穴住居跡 2)	75
第27図	第89号土壌	31	第64図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 1)	76
第28図	第 6 号焼土状遺構	32	第65図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 2)	77
第29図	第 7 号焼土状遺構	32	第66図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 3)	78
第30図	第 8 号焼土状遺構	33	第67図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 4)	79
第31図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 1)	38	第68図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 5)	80
第32図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 2)	39	第69図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 6)	81
第33図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 3)	40	第70図	第 3 号竪穴住居跡	82
第34図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 4)	41	第71図	第 3 号竪穴住居跡出土遺物 1)	83
第35図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 5)	42	第72図	第 3 号竪穴住居跡出土遺物 2)	84
第36図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 6)	43	第73図	第 3 号竪穴住居跡出土遺物 3)	85
第37図	富ノ沢 1 遺跡遺構外出土土器 7)	44	第74図	第 4 号竪穴住居跡 1)	87
			第75図	第 4 号竪穴住居跡 2)	88
			第76図	第 4 号竪穴住居跡出土遺物 1)	88
			第77図	第 4 号竪穴住居跡出土遺物 2)	89

第78图	第4号竖穴住居跡出土遺物(3).....	90	第118图	第27号土壙.....	120
第79图	第4号竖穴住居跡出土遺物(4).....	91	第119图	第28号土壙.....	120
第80图	第4号竖穴住居跡出土遺物(5).....	92	第120图	第29号土壙.....	121
第81图	第8号竖穴住居跡出土遺物(1).....	94	第121图	第30号土壙.....	122
第82图	第8号竖穴住居跡(1).....	95	第122图	第31号土壙.....	122
第83图	第8号竖穴住居跡(2).....	96	第123图	第32号土壙.....	123
第84图	第8号竖穴住居跡出土遺物(2).....	97	第124图	第33号土壙.....	124
第85图	第8号竖穴住居跡出土遺物(3).....	98	第125图	第49号土壙.....	124
第86图	第8号竖穴住居跡出土遺物(4).....	98	第126图	第50号土壙.....	125
第87图	第1号土壙.....	99	第127图	第1号烧土状遺構.....	126
第88图	第2号土壙.....	100	第128图	第1号埋設土器.....	127
第89图	第2号土壙出土遺物.....	101	第129图	第1号埋設土器出土遺物.....	128
第90图	第5号土壙.....	101	第130图	第1号屋外炉.....	129
第91图	第6号土壙.....	102	第131图	第1号屋外炉出土遺物.....	130
第92图	第7号土壙.....	103	第132图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(1)...	135
第93图	第7号土壙出土遺物.....	103	第133图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(2)...	136
第94图	第9号土壙.....	104	第134图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(3)...	137
第95图	第10号土壙.....	105	第135图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(4)...	138
第96图	第10号土壙出土遺物.....	105	第136图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(5)...	139
第97图	第12号土壙.....	106	第137图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(6)...	140
第98图	第12号土壙出土遺物(1).....	107	第138图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(7)...	141
第99图	第12号土壙出土遺物(2).....	107	第139图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(8)...	142
第100图	第13号土壙.....	108	第140图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(9)...	143
第101图	第13号土壙出土遺物(1).....	109	第141图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(10)...	144
第102图	第13号土壙出土遺物(2).....	109	第142图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(11)...	145
第103图	第13号土壙出土遺物(3).....	110	第143图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(12)...	146
第104图	第15号土壙.....	110	第144图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(13)...	147
第105图	第16号土壙.....	111	第145图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(14)...	148
第106图	第20号土壙.....	112	第146图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(15)...	149
第107图	第21号土壙.....	113	第147图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(16)...	150
第108图	第22号土壙.....	114	第148图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(17)...	151
第109图	第23号土壙.....	115	第149图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(18)...	152
第110图	第23号土壙出土遺物(1).....	116	第150图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(1)...	158
第111图	第23号土壙出土遺物(2).....	116	第151图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(2)...	159
第112图	第23号土壙出土遺物(3).....	116	第152图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(3)...	160
第113图	第24号土壙.....	117	第153图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(4)...	161
第114图	第25号土壙.....	118	第154图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(5)...	162
第115图	第25号土壙出土遺物.....	118	第155图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(6)...	163
第116图	第26号土壙.....	119	第156图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(7)...	164
第117图	第26号土壙出土遺物.....	119	第157图	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土土器(8)...	165

第158図	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土石器9)..166	第198図	第53号土壌	198
第159図	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土石器10)..167	第199図	第54号土壌	198
第160図	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土石器11)..168	第200図	第54号土壌出土遺物1).....	199
第161図	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土石器12)..169	第201図	第54号土壌出土遺物2).....	199
第162図	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土石器13)..170	第202図	第55号土壌	199
第163図	富ノ沢2遺跡A地区遺構外出土石器14)..171	第203図	第56号土壌	200
第164図	富ノ沢2遺跡B地区基本層序	第204図	第57号土壌	201
第165図	第6号竪穴住居跡	第205図	第59号土壌	202
第166図	第6号竪穴住居跡出土遺物	第206図	第59号土壌出土遺物1).....	202
第167図	第7号竪穴住居跡	第207図	第59号土壌出土遺物2).....	202
第168図	第7号竪穴住居跡出土遺物1).....	第208図	第60号土壌	203
第169図	第7号竪穴住居跡出土遺物2).....	第209図	第61号土壌	203
第170図	第7号竪穴住居跡出土遺物3).....	第210図	第62号土壌出土遺物	204
第171図	第7号竪穴住居跡出土遺物4).....	第211図	第62号土壌	205
第172図	第34号土壌	第212図	第63号土壌	205
第173図	第35号土壌出土遺物1).....	第213図	第64号土壌	206
第174図	第35号土壌出土遺物2).....	第214図	第65号土壌	207
第175図	第35号土壌	第215図	第65号土壌出土遺物	207
第176図	第36号土壌	第216図	第66号土壌	208
第177図	第37号土壌	第217図	第67号土壌	208
第178図	第38号土壌	第218図	第68号土壌	209
第179図	第39号土壌	第219図	第69号土壌	209
第180図	第40号土壌	第220図	第70号土壌	210
第181図	第42号土壌	第221図	第82号土壌	211
第182図	第43号土壌	第222図	第7号竪穴住居跡ピット1	211
第183図	第43号土壌出土遺物1).....	第223図	第7号竪穴住居跡ピット2	212
第184図	第43号土壌出土遺物2).....	第224図	第7号竪穴住居跡ピット3	213
第185図	第44号土壌	第225図	第7号竪穴住居跡ピット4	213
第186図	第44号土壌出土遺物	第226図	第7号竪穴住居跡ピット5	214
第187図	第45号土壌	第227図	第2号焼土状遺構	215
第188図	第45号土壌出土遺物1).....	第228図	第3号焼土状遺構	215
第189図	第45号土壌出土遺物2).....	第229図	第3号焼土状遺構出土遺物	216
第190図	第46号土壌出土遺物	第230図	第4号焼土状遺構	216
第191図	第46号土壌	第231図	第5号焼土状遺構	217
第192図	第47号土壌	第232図	第1号ピット群	218
第193図	第48a号土壌	第233図	富ノ沢2遺跡B地区遺構外出土石器1)..224	
第194図	第48a号土壌出土遺物	第234図	富ノ沢2遺跡B地区遺構外出土石器2)..225	
第195図	第48b号土壌	第235図	富ノ沢2遺跡B地区遺構外出土石器3)..226	
第196図	第51号土壌	第236図	富ノ沢2遺跡B地区遺構外出土石器4)..227	
第197図	第52号土壌	第237図	富ノ沢2遺跡B地区遺構外出土石器5)..228	

第238図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 6)...229
第239図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 7)...230
第240図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 8)...231
第241図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 1)...234
第242図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 2)...235
第243図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 3)...236
第244図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 4)...237
第245図	富ノ沢 2 遺跡 B 地区遺構外出土石器 5)...238
第246図	縄文時代中期の竪穴住居跡炉変遷図240
第247図	県内縄文時代中期竪穴住居跡検出地域 ...241
第248図	有足土器253
第249図	石器組成254
第250図	石器の大きさ・重さ256
第251図	石器の大きさ・重さと石材傾向257
第252図	六ヶ所村富ノ沢 2 遺跡 A 地区第 1 号竪穴住居跡土壌試料採取位置図262

第253図	第 1 号竪穴住居跡土壌中の無機酸の濃度分布図253
第254図	第 1 号竪穴住居跡土壌試料の残存脂肪組成図253

表目次

第 1 表	竪穴住居跡一覧表240
第 2 表	青森県における縄文時代中期の竪穴住居跡 ...242
第 3 表	富ノ沢 1)(2 遺跡出土石器一覧表254
第 4 表	第 1 号竪穴住居跡土壌中の残存無機酸の含有量266
第 5 表	第 1 号竪穴住居跡土壌試料の残存脂肪酸組成表266

写真目次

写真1	富ノ沢1遺跡 遠景・基本層序・土壌	1	写真30	富ノ沢2遺跡A地区出土石器13)	30
写真2	富ノ沢1遺跡 土壌	2	写真31	富ノ沢2遺跡A地区出土石器1)	31
写真3	富ノ沢1遺跡 土壌・焼土状遺構	3	写真32	富ノ沢2遺跡A地区出土石器2)	32
写真4	富ノ沢1遺跡出土石器1)	4	写真33	富ノ沢2遺跡A地区出土石器3)	33
写真5	富ノ沢1遺跡出土石器2)	5	写真34	富ノ沢2遺跡A地区出土石器4)	34
写真6	富ノ沢1遺跡出土石器3)	6	写真35	富ノ沢2遺跡A地区出土石器5)	35
写真7	富ノ沢1遺跡出土石器4)	7	写真36	富ノ沢2遺跡A地区出土石器6)	36
写真8	富ノ沢1遺跡出土石器5)	8	写真37	富ノ沢2遺跡A地区出土石器7)	37
写真9	富ノ沢1遺跡出土石器6)	9	写真38	富ノ沢2遺跡A地区出土石器8)	38
写真10	富ノ沢1遺跡出土石器1)	10	写真39	富ノ沢2遺跡A地区出土石器9)	39
写真11	富ノ沢1遺跡出土石器2)	11	写真40	富ノ沢2遺跡A地区出土石器10)	40
写真12	富ノ沢2遺跡A地区 遠景・基本層序	12	写真41	富ノ沢2遺跡A地区出土石器11)	41
写真13	富ノ沢2遺跡A地区 竪穴住居跡1)	13	写真42	富ノ沢2遺跡A地区出土石器12)	42
写真14	富ノ沢2遺跡A地区 竪穴住居跡2)	14	写真43	富ノ沢2遺跡A地区出土石器13)	43
写真15	富ノ沢2遺跡A地区 竪穴住居跡3)	15	写真44	富ノ沢2遺跡A地区出土石器14)	44
写真16	富ノ沢2遺跡A地区 土壌	16	写真45	富ノ沢2遺跡B地区遠景・竪穴住居跡	45
写真17	富ノ沢2遺跡A地区 土壌・焼土状遺構・ 屋外炉	17	写真46	富ノ沢2遺跡B地区 竪穴住居跡・土壌	46
写真18	富ノ沢2遺跡A地区出土石器1)	18	写真47	富ノ沢2遺跡B地区 土壌1)	47
写真19	富ノ沢2遺跡A地区出土石器2)	19	写真48	富ノ沢2遺跡B地区 土壌2)	48
写真20	富ノ沢2遺跡A地区出土石器3)	20	写真49	富ノ沢2遺跡B地区 土壌・焼土状遺構・ ピット群	49
写真21	富ノ沢2遺跡A地区出土石器4)	21	写真50	富ノ沢2遺跡B地区出土石器1)	50
写真22	富ノ沢2遺跡A地区出土石器5)	22	写真51	富ノ沢2遺跡B地区出土石器2)	51
写真23	富ノ沢2遺跡A地区出土石器6)	23	写真52	富ノ沢2遺跡B地区出土石器3)	52
写真24	富ノ沢2遺跡A地区出土石器7)	24	写真53	富ノ沢2遺跡B地区出土石器4)	53
写真25	富ノ沢2遺跡A地区出土石器8)	25	写真54	富ノ沢2遺跡B地区出土石器5)	54
写真26	富ノ沢2遺跡A地区出土石器9)	26	写真55	富ノ沢2遺跡B地区出土石器1)	55
写真27	富ノ沢2遺跡A地区出土石器10)	27	写真56	富ノ沢2遺跡B地区出土石器2)	56
写真28	富ノ沢2遺跡A地区出土石器11)	28	写真57	富ノ沢2遺跡B地区出土石器3)	57
写真29	富ノ沢2遺跡A地区出土石器12)	29	写真58	富ノ沢2遺跡B地区出土石器4)	58
			写真59	有足土器	59
			写真60	富ノ沢2遺跡出土の炭化木	60

第 章 調査に至る経過と調査要項

第 1 節 調査に至る経過

むつ小川原地域の開発計画は、策定されてから20年の歳月が経過しようとしている。

昭和44年度、国は新全国総合開発を計画した。同年本県ではその計画に即応して「陸奥湾・小川原湖地域の開発」を発表した。その後昭和46年度に「むつ小川原地域開発構想の概要」(第一次基本計画)が発表された。それと同時に県教育委員会では、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の所在・範囲・性格などを確認するため分布・試掘調査を実施して逐次その成果を刊行してきた。

昭和49年には、むつ小川原開発第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路を含む工業基地利用図が公表された。昭和52年3月、第二次基本計画に係る環境影響評価報告書(環境アセスメント)が住民に示され、同年8月閣議了解を経てむつ小川原開発は本格的に着工される見通しとなった。

以来、この開発事業に係るむつ小川原開発株式会社所有地内の発掘調査は、次のように実施されて、それらの成果も次々に刊行されてきた。

昭和49・50年 新住区建設に伴う千歳(13)遺跡(青埋文報第27集 1976)。

昭和54・55年 石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館・発茶沢遺跡(青埋文第61集 1981、同第67集 1982)。

昭和56・57年 石油国家備蓄基地消火用水確保に係る弥栄平(2)遺跡(青埋文報第81集 1984)。

昭和58年 むつ小川原開発工業用地予定地に所在する大石平(1)遺跡(青埋文報第90集 1985)。

昭和59年 同じく大石平(1)・同(2)・沖附(1)・同(2)遺跡(青埋文報第97・100・101集 1986)。

昭和60年 同じく大石平(1)遺跡、弥栄平(4)5遺跡(青埋文報第103・106集 1987)。

昭和61年 同じ工業用地予定地に所在する上尾駸(1)遺跡A地区・同C地区・上尾駸(2)遺跡A～C地区・発茶沢(1)遺跡(青埋文報第112～116集 1988)。

昭和61年の11月17日、むつ小川原開発株式会社から、同社所有の工業用地予定地内に所在する富ノ沢(1)・同(2)・発茶沢(1)・表館(1)遺跡の発掘調査依頼が県教育委員会にあった。同年11月27日、県教育委員会は受託する旨回答した。そして昭和62年度の埋蔵文化財調査計画に組み入れられ、県埋文センターが調査を担当して実施することになった。

(北林八洲晴)

第2節 調査要項

1. 調査目的

むつ小川原開発事業に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2. 調査期間

昭和62年5月6日から同年7月27日まで

3. 遺跡名及び所在地

富ノ沢102遺跡 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駸字上尾駸

4. 調査対象面積及び調査面積

調査対象面積(10,000㎡)

調査面積7,000㎡(富ノ沢1遺跡2,220㎡富ノ沢2遺跡4,780㎡)

5. 調査委託者

むつ小川原開発株式会社

6. 調査受託者

青森県教育委員会

7. 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8. 調査協力機関

六ヶ所村 六ヶ所村教育委員会 上北教育事務所

9. 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教育学部教授

調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長

調査員 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授

高島成侑 八戸工業大学助教授

滝沢幸長 八戸市文化財審議会委員

新谷 武 青森県立木造高等学校稲垣分校教頭

松山 力 青森県立八戸高等学校教諭

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第三課長 北林八洲晴(現、調査第二課長)

調査第三課長 三宅 徹也(前、調査第二課主幹)

総括主査 山口 義伸(地質担当)

主査 成田 滋彦(現 総括主査)

主 事 奈良 昌毅

調査補助員 新谷幸三郎・高木悟・長谷部明美・平井真由美

なお、地質は総括主査山口義伸が担当した。

(成田 滋彦)

第 章 調査の概要

第 1 節 調査の方法

調査にあたっては、富ノ沢 2 遺跡が沢をはさんで台地がわかれている為に西側を富ノ沢 2) 遺跡 A 地区とし、東側の舌状台地を富ノ沢 2 遺跡 B 地区とした。発掘調査は、富ノ沢 2) 遺跡 A 地区 富ノ沢 2 遺跡 B 地区 富ノ沢 1 遺跡の順で実施した。

調査区の設定にあたっては、富ノ沢 2 遺跡 A・B 地区では工事用道路の中心杭である 40と 41の杭を基準線に用い、4 m四方のグリッドを設定した。南北の基準線はN 10° Eである。

富ノ沢 1 遺跡では、工事用道路の中心杭である 25と 26の杭を基準線に用い、富ノ沢 2) 遺跡同様に 4 m四方のグリッドを設定した。南北の基準線はN 36° Eである。

グリッドは、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を付し、その呼称は、北東隅の杭番号を使用し、例えばM 10区等と呼称した。グリッドの設定・呼称は、富ノ沢 2) 遺跡 A・B 地区が同一であり、富ノ沢 1 遺跡については別個に名称を付している。

調査はグリッド法を用いた分層発掘とし、遺物が含まれている第 a 層の遺物を記録した後、遺構確認面の第 a 層まで掘り下げた。

遺構の実測は、簡易遣り方測量で行い、竪穴住居跡・土壙を20分の 1 で他の遺構を10分の 1 の縮尺を用いて記録し図化した。

遺構の精査は、堆積土層の観察用断面を残し、竪穴住居跡は四分法、他の遺構は二分法を用いて層序ごとに掘り下げた。土層の注記には『標準土色帖』を使用した。

第2節 調査の概要

5月6日に調査区域内のグリッド設定を行った。

5月8日、調査関係機関の担当者、調査指導員、調査員及び埋蔵文化財調査センター職員による発掘調査についての打ち合わせ会議が六ヶ所村立中央公民館で開催された。

5月11日から調査を開始した。調査は調査区の西側の富ノ沢2遺跡から行い、西側の台地をA地区と呼称した。北側約50mの地点は、昭和48・49年度の二箇年の試掘調査（北林1974・1975）で縄文時代中期の遺構と多量の遺物が出土しているため、今回の調査地域も多量の遺物が出土することが予想された。

5月下旬に入って遺構が検出され始めたが、当初考えたほどの遺物量は出土しなかった。これは、本調査地域が牧草地（畑地）として利用されていたため、遺物包含層が削平されたことによると考えられた。

富ノ沢2遺跡A地区では、縄文時代中期（円筒上層d式）を主体とした竪穴住居跡・フラスコ状ピット・屋外炉・埋設土器を検出した。遺構配置等から試掘調査の際に検出された集落の外縁部に相当すると思われた。

6月に入り、富ノ沢2遺跡A地区の東側緩斜面の調査に入ったが、遺物・遺構等は何ら検出できず、調査の結果自然の谷地形と考えられた。

6月中旬、沢を隔てた舌状台地（富ノ沢2遺跡B地区）の調査に移行した。本調査区も台地全面が削平されており、第1層（耕作土）直下は遺構確認面であった。

富ノ沢2遺跡B地区では、舌状台地の先端部に土壌群、北側に竪穴住居跡が位置していた。

7月に入り、調査区西側の富ノ沢1遺跡の調査に移行した。K12調査区を中心として台地の下位面から多量の礫が出土し、配石遺構とも考えられたが、松山調査員により自然作用によって礫が集中した地域であると指摘された。

富ノ沢1遺跡では、土壌及び焼土状遺構が21基検出されたが、調査区西側部分に遺構が多く分布し、東側にいくに従って密度が薄くなっていた。また、包含層は極めて薄く、予想していたよりもはるかに粗掘り作業が進展した。

7月27日には予定されたすべての調査を終了し、器材・器具を整理し表館1遺跡に移動した。

（成田 滋彦）

第3節 遺物の分類

本報告書で取り扱った土器は、縄文時代早期・中期・後期・弥生時代の各時期である。便宜的に縄文時代早期を第 群土器・縄文時代中期を第 群土器・縄文時代後期を第 群土器・弥生時代を第 群土器と大別し、これを時期差・文様差などから種別を用い更に細別した。

第 群土器（縄文時代早期）

- 1 類土器 貝殻条痕・貝殻腹縁文のみられる土器で、吹切沢式に相当するもの。
- 2 類土器 早稲田 5 類に相当するもの。

第 群土器（縄文時代中期）

本群土器は、1 類～ 9 類に類別し、3 類土器は更に a～c 種に細別した。

- 1 類土器 貼り付け文と燃糸圧痕によって文様構成しており、円筒上層 b 式に相当するもの。
- 2 類土器 貼り付け文と刺突文によって文様構成しており、円筒上層 c 式に相当するもの。
- 3 類土器 貼り付け文を主体に文様構成しており、円筒上層 d 式に相当するもの。
 - a 種 弧状文様で横位方向に文様構成しているもの。
 - b 種 縦位と横位の文様を組み合わせた胸骨文タイプ。
 - c 種 縦位方向に粘土紐を貼りつけているもの。
- 4 類土器 沈線文を主体にして施文している土器で、円筒上層 e 式に相当するもの。
- 5 類土器 装飾性に乏しい粗製土器で、円筒上層 d～e 式に相当するもの。
- 6 類土器 隆起線で文様構成しており、大木 7 b・8 a 式に相当するもの。
- 7 類土器 榎林式に相当するもの。
- 8 類土器 中の平・最花式に相当するもの。
- 9 類土器 弥栄平 1 遺跡（三浦他 1986）中期 群～ 群土器に類似のもので、大木 10 式に併行するもの。

第 群土器（縄文時代後期）

- 1 類土器 縄文時代後期初頭の土器で、上尾駸 2 遺跡 A 地区（成田他 1988）第 群 1 類土器に類似のもの。
- 2 類土器 縄文を主体とした粗製土器であり、縄文時代中期後葉～後期初頭に相当するもの。

第 群土器（弥生時代）

本群土器は、施文文様の差から、a～d 種に細別した。いずれも念仏間式（大石平 1 群）に相当するものである。

- a 種 磨消縄文で文様帯を構成するもの。

- b種 刺突文を施文しているもの。
- c種 沈線文を施文しているもの。
- d種 縄文のみを施文しているもの。

石器

本遺跡からは、石鏃、石槍、石錐、石匙、石筥、不定形石器、磨製石斧、石錘、敲磨器類、石冠、礫器、石皿・台石が出土した。

石器は種類ごとに下記のように分類した。

A類 石鏃	B類 石槍	C類 石錐
D類 石匙	E類 石筥	F類 不定形
G類 石斧	H類 石錘	I類 敲磨器類
J類 石冠	K類 礫器	L類 石皿・台石類

石器観察表の石材の項目には、下記の略号を用いた。

玉 玉髄 頁 頁岩 珪 珪質頁岩 玉珪 玉髄質の珪質頁岩
 緑凝 緑色凝灰岩 粘 粘板岩 砂 砂岩 安 安山岩 閃 閃緑岩
 チャ チャート 鉄石 鉄石英 緑ホ 緑色ホルンフェルス 礫 礫岩

石器実測図中における表現方法のうち、スクリーン・トーンの使用部分は下記のとおりである。

(成田 滋彦・奈良 昌毅)



ケンマ



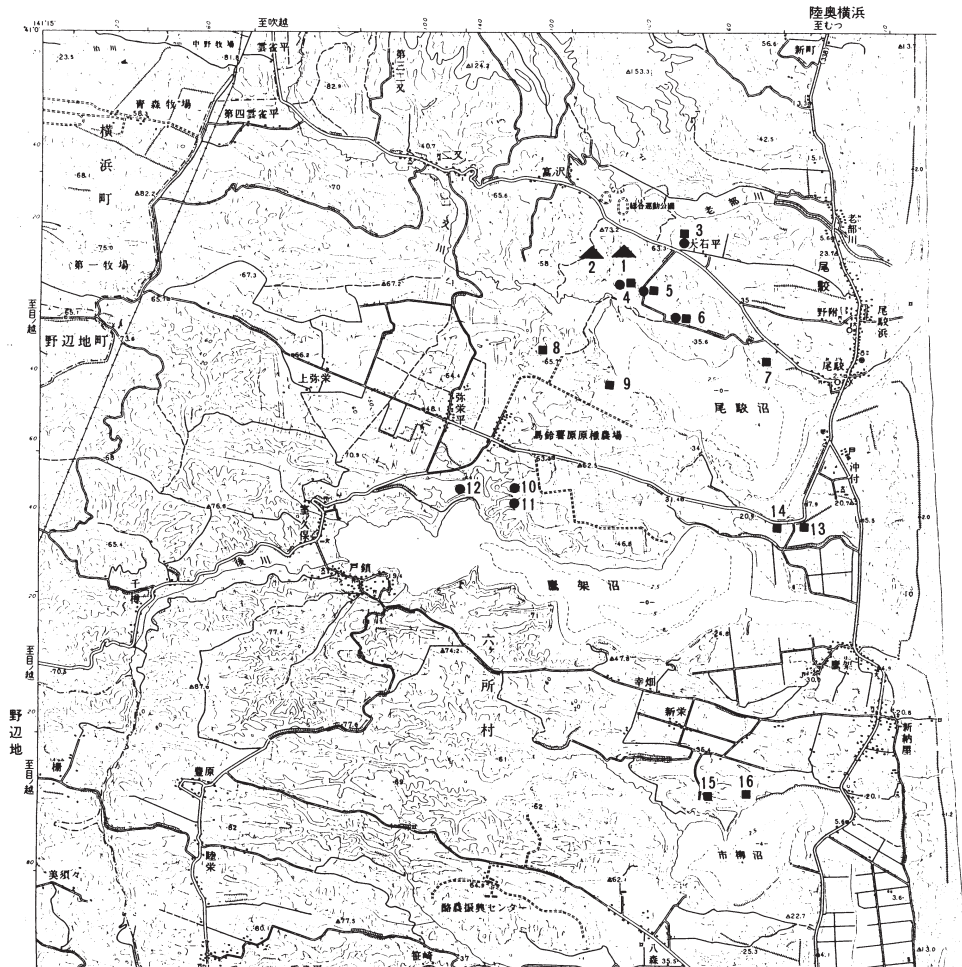
スリ



タタキ



クボミ



● 縄文時代中期 ■ 弥生時代

- | | | |
|----------------|----------------|-------------|
| 1. 富ノ沢(1)遺跡 | 8. 弥栄平(4)(5)遺跡 | 15. 幸畑(3)遺跡 |
| 2. 富ノ沢(2)遺跡 | 9. 沖 附(1)遺跡 | 16. 幸畑(1)遺跡 |
| 3. 大石平 遺 跡 | 10. 弥栄平(1)遺跡 | |
| 4. 上尾駁(1)遺跡A地区 | 11. 弥栄平(3)遺跡 | |
| 5. 上尾駁(2)遺跡A地区 | 12. 弥栄平(2)遺跡 | |
| 6. 上尾駁(2)遺跡C地区 | 13. 表 館(1)遺跡 | |
| 7. 家 前 遺 跡 | 14. 発茶沢(1)遺跡 | |

1 : 50,000地形図

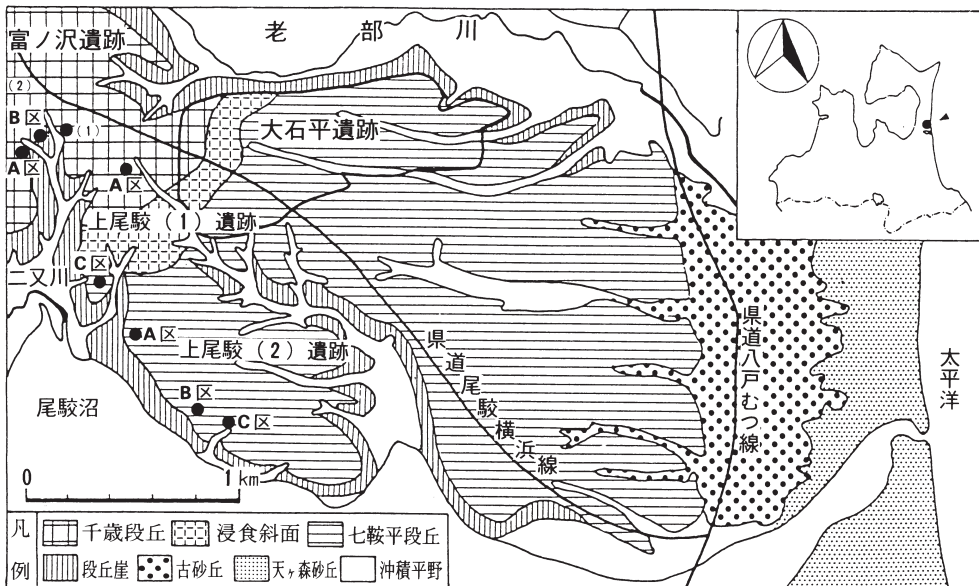
第1図 六ヶ所村報告書関連遺跡位置図

第 章 遺跡の地形と層序 (第 2・3 図)

第 1 節 遺跡周辺の地形及び地質 (第 2 図)

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあつて、この付近には北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸にはこれらの湖沼を閉塞するような形で天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高 5 ~ 23mにも及ぶ古砂丘が、同じく南北方向に200 ~ 300mの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となっていて防風・防砂林の役割を果たしている。また、この付近は海岸段丘の発達も顕著であつて、およそ 4 段の段丘面が確認できる。このうち、本遺跡が立地しているのは、下位から 2 段目の千歳段丘 (標高60 ~ 100m) である。

本遺跡の位置する地域は、北方には東流して太平洋に注ぐ老部川があり、南方には湖沼群のうち最北に位置する尾駮沼があつて、いずれも急峻な段丘崖で臨んでいる。その南北の幅はおよそ 2 km である。また、本地域の中央部及び西端には侵食谷があつて、いずれも尾駮沼に注いでいる。この地域に広く分布している段丘は最下位の七鞍平段丘 (標高12 ~ 50m) であり、北西方には千歳段丘が広く分布する。この七鞍段丘は 2 ~ 3 段に段化していて、全般的には比較的平坦な地形である。本遺跡の立地する千歳段丘は侵食谷の発達でかなり開析され起伏に富む状況であつて、小丘状の地形を呈している。なお、下位の七鞍平段丘とは比高約10mの急傾斜な侵食面でもって接している。



第 2 図 遺跡周辺の地形分類図

本遺跡は現汀線より約4.0km内陸側の、標高50～62mの地点に位置し、尾駮沼西端の尾駮沼に注ぐ二又川の支流（南流する侵食谷）の谷頭付近に立地している。この支流の谷底は遺跡周辺で約20m、尾駮沼付近で約50mとかなり深い。このため、遺跡周辺では段丘面の開析度が大きく起伏に富んでいる。本遺跡は、この支流の谷頭付近で枝分かれした東側の小谷を境にして、東側を富ノ沢1遺跡、西側を富ノ沢2遺跡と呼称している。

富ノ沢1遺跡は、二又川の支流の東側に位置する。この付近には開析によって生じた小丘状の千歳段丘が点在していて、そのうちの県道尾駮横浜線に最も近い小丘地に立地している。富ノ沢1遺跡の立地する小丘地の、南接の小丘地東斜面には上尾駮1遺跡A地区が立地し、また尾駮沼近くの侵食斜面及び七鞍平段丘には上尾駮1遺跡C地区が立地している。

富ノ沢2遺跡は、二又川の支流の西側と谷頭付近の枝分かれした小谷間に舌状に張り出した段丘上に立地している。西側の広範囲にわたって分布する段丘に位置しているのを富ノ沢2遺跡A地区、小谷間に張り出した段丘に位置しているのをB地区と呼称した（第2図）。

本調査区は、富ノ沢2遺跡A地区の立地する段丘北端から同B地区の立地する舌状台地の南端を通して富ノ沢1遺跡の立地する小丘地南端までの全長約450mである。路線幅はA区で約30mのほかは約10mであって、総面積は7,000㎡である。

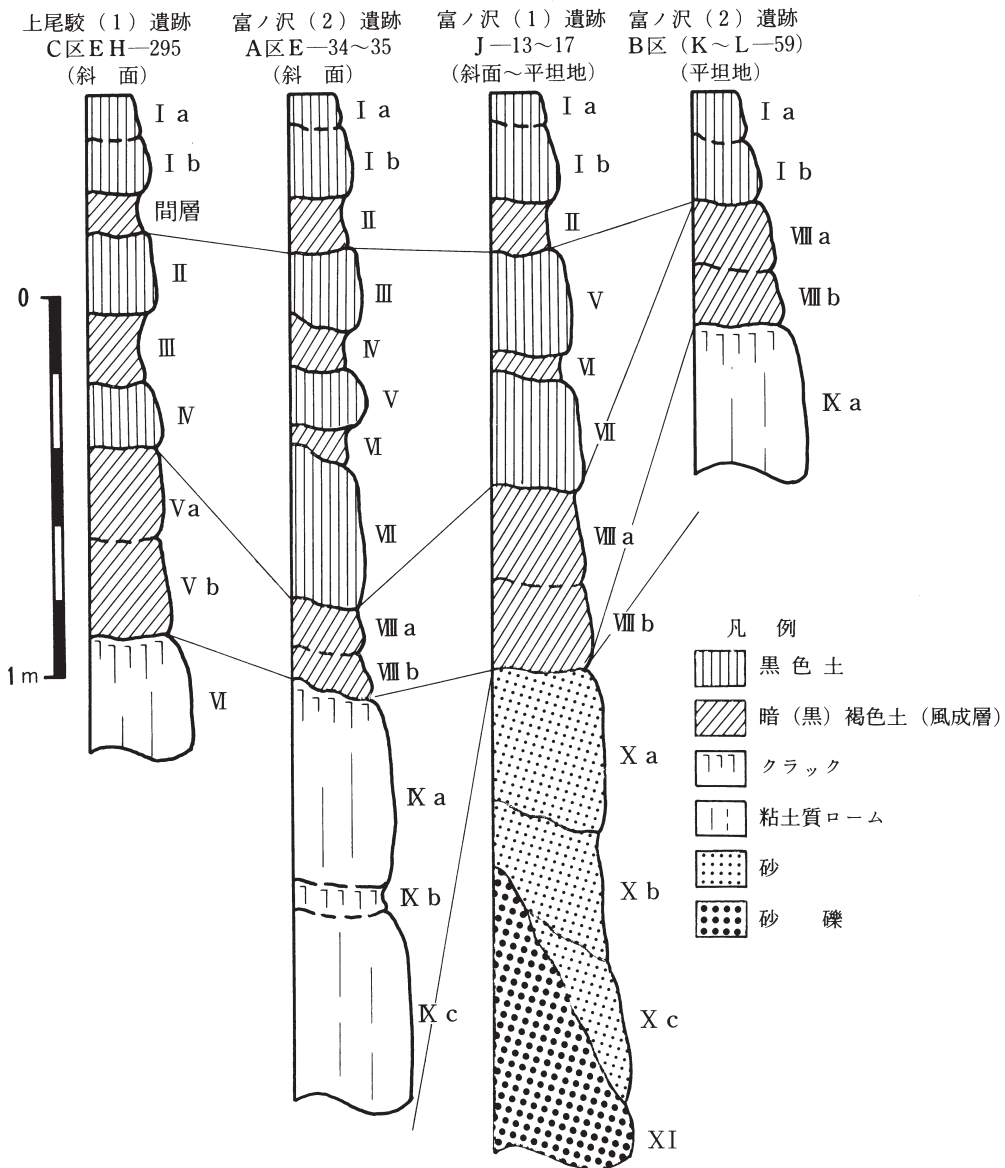
なお、本遺跡の東方の七鞍平段丘上には大石平遺跡、上尾駮2遺跡が立地している。

下北半島の頸部を構成する地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層と第四系下部洪積統の野辺地層である。泊安山岩類は安山岩質溶岩と同質角礫岩及び集塊岩からなり、老部川や尾駮沼に臨む段丘崖にみられるが、主に遺跡北方の山岳地に広く分布している。鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって、鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位層を不整合に覆っている。また、野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の新第三系を不整合に覆い、ほぼ水平に堆積している。なお、本層は段丘構成層に覆われている。

本遺跡の立地する千歳段丘の構成層は段丘砂礫層と火山灰層とからなり、野辺地層を不整合に覆っている。段丘構成層のうち、火山灰層はよく締まった粘土質の褐色火山灰で、層厚は1～2mと薄い。なお、尾駮沼以南で層状に堆積している。黄褐色ラピリ質（lapilli）浮石（千曳浮石）は、本調査区では確認できなかった。

第2節 遺跡内の層序(第3図)

遺跡内及び周辺遺跡の土層とその対比を第2図に示した。また、遺跡内のセクションを第3図に示した。本遺跡における土層の堆積状況を見ると、小丘地の平坦部では浸食作用及び耕作による削平で欠如する土層が目立ち、一次的な遺物包含層は確認できなかった。斜面から低地にかけては黒色土層が厚く堆積したり、崩落土をブロック状に包含したりしている。遺物も散在するが、すべて流れ込みであって一次的なものではない。各層の概略は次のとおりである。



第3図 遺跡内の土層柱状図

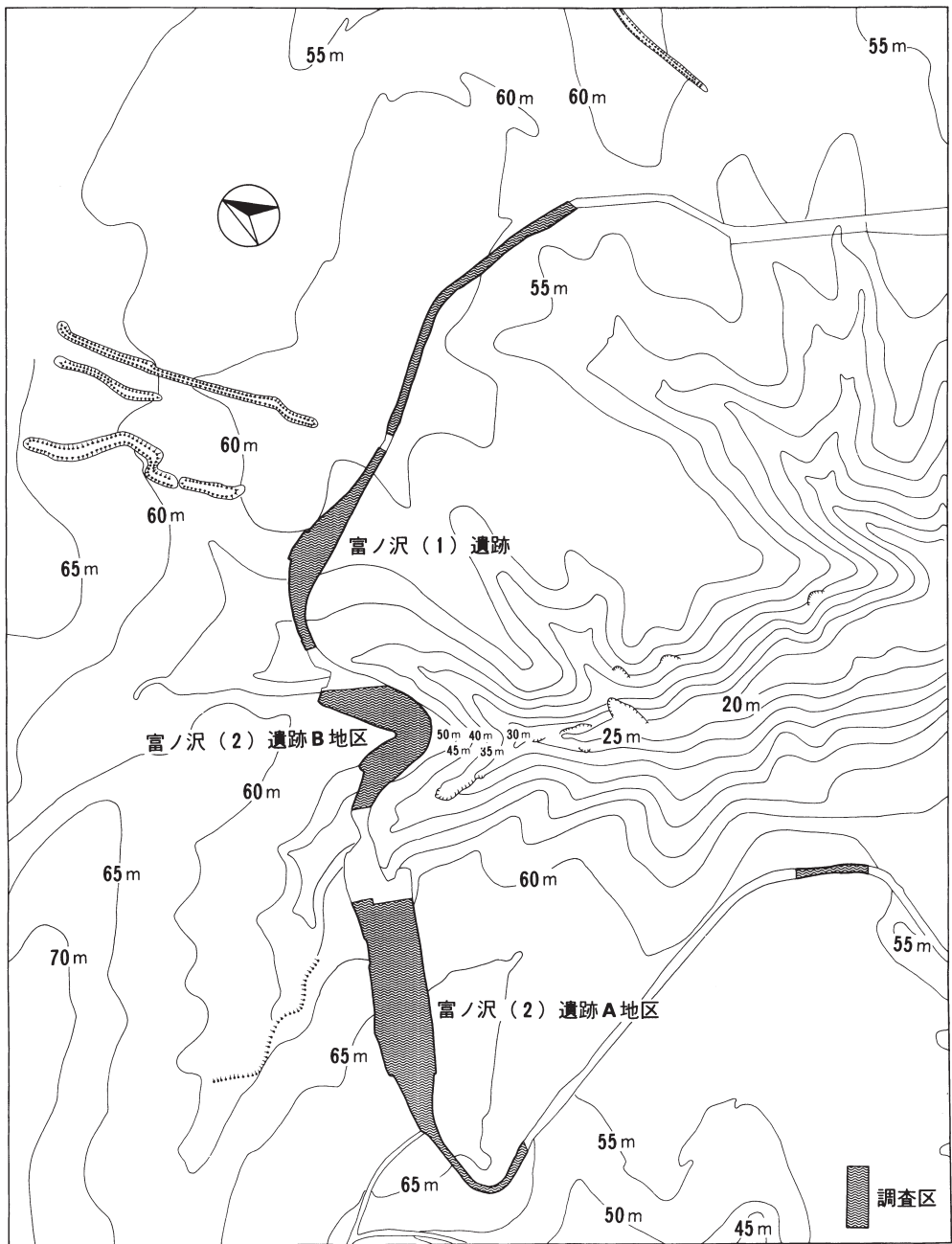
- 層 黒褐色土（15～25cm） 草根を多量に含み、全体的にしまりに欠けもろい。層相変化から分層できる。 a層は表土及び耕作土であり、多少かたさはあるが締まりに欠ける。乾くと灰黒色に変色する。 b層は粘性、湿性が多少あり、かたさはあるものもろい。乾くと格子状の割れ目が発達する。
- 層 暗褐色土（10～15cm） 風成堆積物であって、主に斜面から低地にかけて堆積する。ロームブロックを混入したり、砂質であったりして層相変化が著しい。
- 層 黒色腐植質土（0～20cm） 粘性、湿性は多少あるが、やや締まりに欠けかたくてもろい。斜面から低地にかけて堆積する。なお、下位の 層が崩落した包含層のところでは、本層はやや乱れた堆積をしている。本層及び上位の 層に縄文時代中期の遺物が散在するが、一次的な包含層とは考えにくく、むしろ流れ込みと思われる。
- 層 黒褐色土（10～20cm） 風成堆積物であって、主に斜面から低地にかけて堆積する。粘性、湿性は多少あるが、締まりに欠けソフトである。斜面において、一部暗褐色土の崩落をブロック状に混入している。
- 層 黒色腐植質土（10～20cm） 粘土質で締まりある。乾くと亀裂の大きいcrackが発達する。平坦地においてもレンズ状に一部確認できた。層相の特徴からみて、上尾駸1遺跡c区の 層に対比可能と考えられるが断定できない。上尾駸1遺跡c区での 層は、縄文時代後期以降の遺物包含層となっている。
- 層 明黒褐色土（約10cm） 風成堆積物であって、上位の 、 層よりも粘性、湿性がある。締まりもある。斜面から低地にかけて堆積する。
- 層 黒色粘土質土（30～50cm） 粘土質で締まりがある。谷状くぼ地にのみ堆積する。
- 層 黒褐色ローム質土（10～40cm） 漸移層である。全体的にローム粒の混入が多く、混入状況により分層できる。 a層はローム粒の混入が目立ち、色調が暗くやや土壌化している。 b層はロームブロックの混入が目立ち、かたく締まっている。なお、下位のローム層を欠如しているところでは砂岩、シルト岩、凝灰岩のブロック状に多量に混入している。
- 層 黄褐色ローム層（約100cm） 全体的によく締まった粘土質ロームである。最上部にはcrack帯がみられ、淡赤褐色を呈する。また、最上部から50～60cm下位のところにも暗赤褐色のcrack帯がみられ、3層に分層できる。最下位の c層には段丘砂礫層の砂が混入し砂質となっている。
- 層 中～粗粒砂層（100～150cm） 段丘砂礫層の上部に位置する。最上部（ a層）は緑灰色砂で小礫（安山岩、シルト岩等）を含む。 b層は灰褐色砂で葉理が発達している。 c層は灰白色砂で無層理でやや粘土質である。

層 礫層（50cm以上） 段丘砂礫層の下部に位置する。拳大～人頭大の円礫（安山岩、シルト岩、凝灰岩等）を多量に混入する。

ところで、本遺跡からは縄文時代中期の遺物が主に出土するが、一次的な遺物包含層は確認できなかった。遺物の出土層は 層及び 層であるが、平坦地の浸食や耕作による削平で攪乱されたために、あるいは流れ込みによるものであって一次的な包含層ではないと考えられる。本来的な包含層を 層と考えたいが、ただ近接する上尾駮1遺跡C区では本層相当層（層相の特徴から判断）から縄文時代後期以降の遺物が出土しているために矛盾がある。また、大石平遺跡（区、区）では本層相当層から縄文時代後期以降（上部）と前期（下部）の遺物が出土している。以上のことから、本遺跡での遺物包含層を特定するには今後の発掘調査に期待したい。

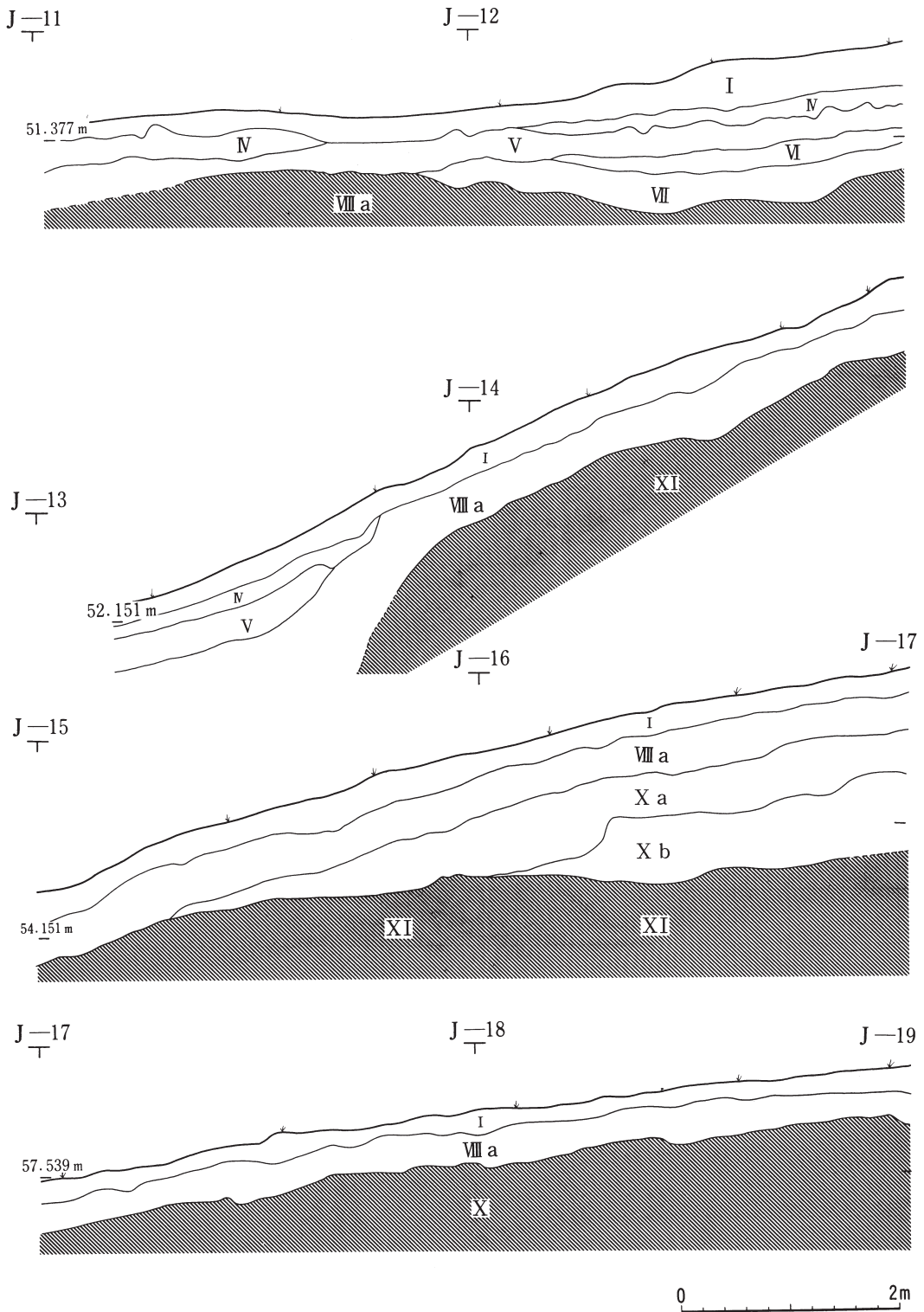
（山口義伸）

富ノ沢(1)遺跡

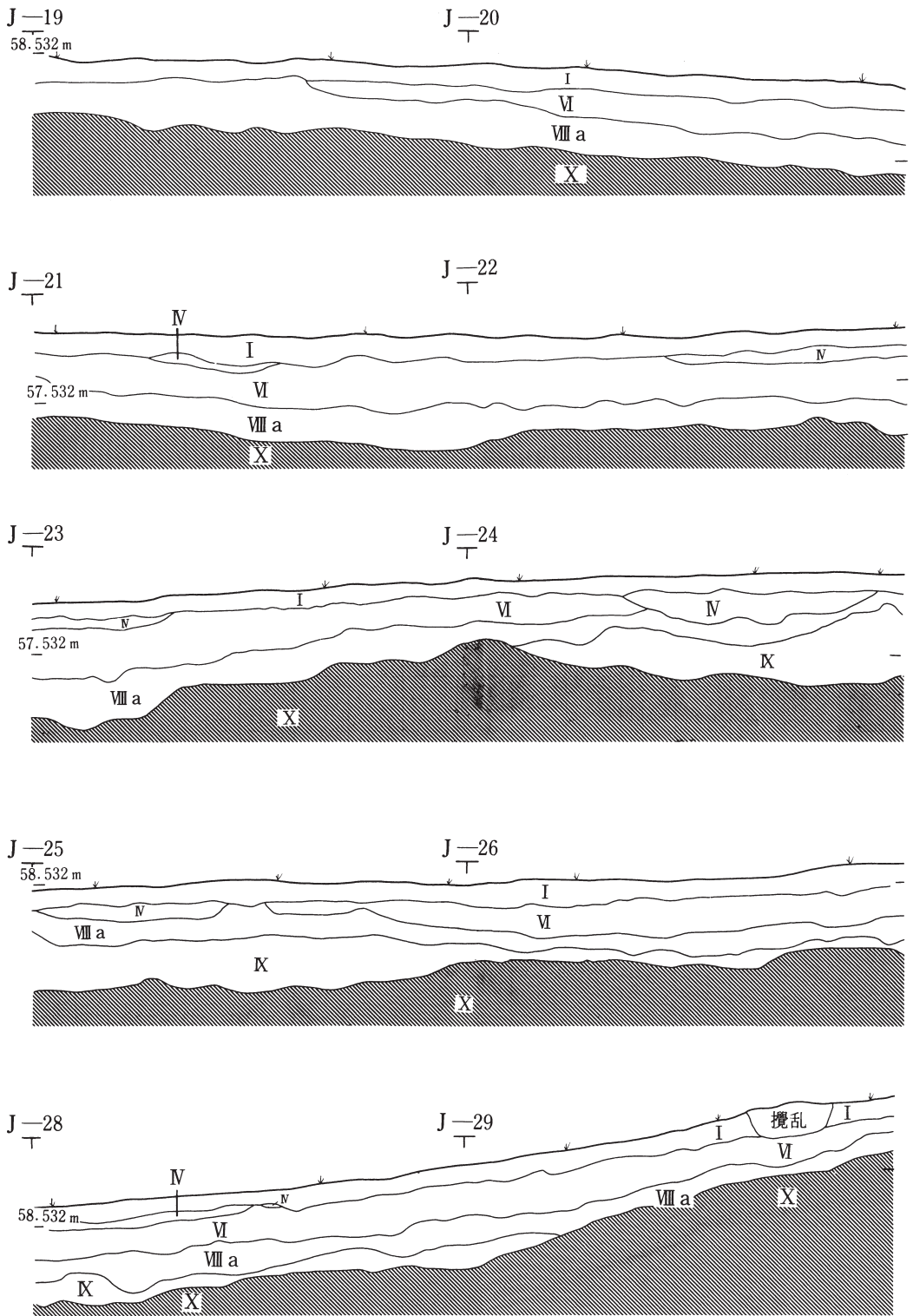


1000分の 1

第 5 図 調査区全体図



第6図 富ノ沢(1)遺跡基本層序(1)



第7図 富ノ沢(1)遺跡基本層序(2)

第 章 検出遺構と出土遺物

第 1 節 富ノ沢 1 遺跡の検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構と遺構内出土遺物

本地区で検出された遺構は、土壌18基・焼土状遺構 3 基である。各遺構の番号は、富ノ沢 2) 遺跡 B 地区に続くものである。

(1) 土壌

第71号土壌 (第 8 図)

位置と確認 調査区 H 62グリッドに位置している。第 a 層を精査中に円形の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

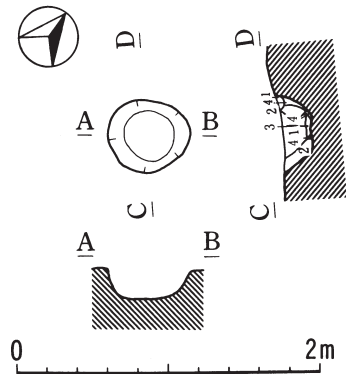
平面形・規模 平面形は全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は長径55cm・短径49cm・深さ20cmを測る。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、かたいつくりである。壁高は、東壁20cm・西壁18cm・南壁21cm・北壁22cmである。

底面 ほぼ平坦でかたくつくられている。

堆積土 4 層に分層できた。人為・自然堆積のいずれかは判断できなかった。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



(成田 滋彦)

第 8 図 第71号土壌

第71号土壌土層注記

第1層	暗 褐 色	10YR 3/4	褐色ブロック混入。しまり・粘性あり。
第2層	黄 褐 色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりなし、粘性あり。
第3層	褐 色	10YR 1/4	黒色土粒を含む。しまり・粘性あり。
第4層	黄 褐 色	10YR 5/6	ローム混入。しまり・粘性あり。

第72号土壌 (第 9・10図)

位置と確認 調査区 H - 29グリッドに位置する。基本層序第 層を精査中に黒褐色の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径 1 m36 cm・短径 1 m26cm・深さ32cmである。



第 9 図 第72号土壌出土遺物

第72号 土器観察表

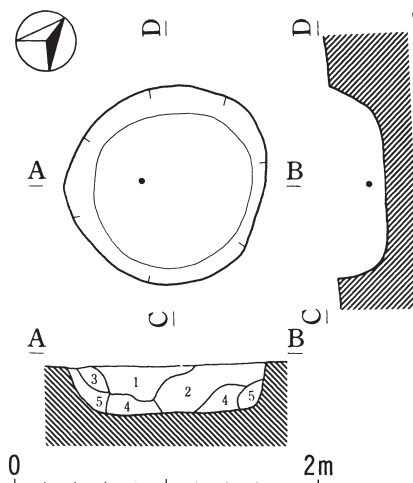
番号	地区・層位	部 位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	72土・1層	胴 部	縄文 (RL)、スス状炭付着	Ⅲ群2類

壁 すべて基本層序第 層を壁面としており、南・西壁が底面から上場にかけてほぼ垂直に立ち上がり、北・東壁は緩やかに立ち上がっている。

底面 全体的に起伏が少なくほぼ平坦で、かたいつくりである。

堆積土 堆積土は 5 層に分層できた。地山のロームを多く含み、また炭化物をわずかに含んでいる。

出土遺物 遺物は、第 1 層から土器が 1 片出土した。



第10図 第72号土壌

第72号土壌土層注記

第1層	黒 褐色	10YR 3/2	ローム粒を多量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	暗 褐色	10YR 3/4	炭化粒を少量、ローム粒を多量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第3層	にぶい黄褐色	10YR 5/4	ロームブロックを多量に混入する。しまりややあり、粘性なし。
第4層	黒 褐色	10YR 3/2	炭化材を微量・ローム粒も多量に含む。しまり・粘性ややあり。
第5層	褐 色	10YR 5/4	ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。

第73号土壌 (第11図)

位置と確認 調査区 H - 29グリッドに位置する。基本層序第 層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

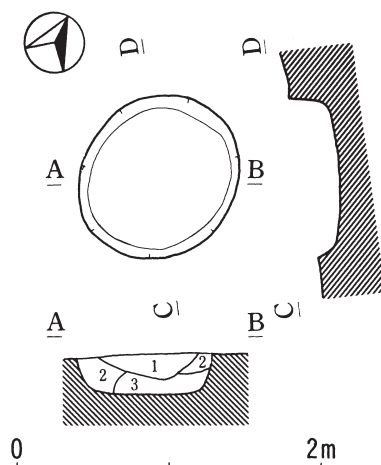
平面形・規模 平面形は、南北にやや長い楕円形を呈している。規模は、長径 1 m16cm・短径 1 m10cm・深さ28cmである。

壁 基本層序第 層を壁面としており、すべて底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁高は、東壁27cm・西壁23cm・南壁26cm・北壁25cmを測る。

底面 全般的に起伏が少なくほぼ平坦で、軟弱である。

第73号土壌土層注記

第1層	暗 褐色	10YR 3/4	ローム粒多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐 色	10YR 5/4	ローム粒多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄 褐色	10YR 5/6	ローム・褐色土の混入。しまり・粘性あり。



第11図 第73号土壌

堆積土 3層に分層できた。地山のローム粒を多く含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(新谷幸三郎、成田滋彦)

第74号土壌 (第12図)

位置と確認 調査区 J - 27グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

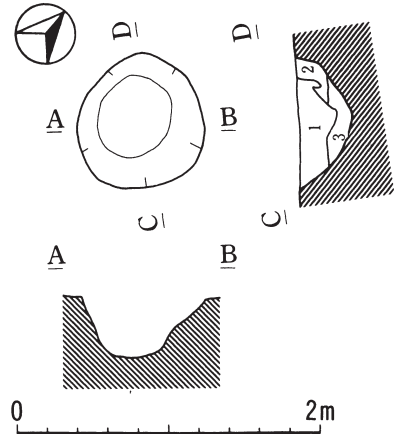
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みを有する円形を呈する。規模は、長径88cm・短径83cm・深さ37cmを測る。

壁 西・南壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、東・北壁は中場に段を有している。壁は軟らかくもろい。壁高は東壁36cm・西壁35cm・南壁37cm・北壁36cmである。

底面 起伏が多くでこぼこがあり軟らかい。

堆積土 3層に分層できた。断面観察から自然堆



第12図 第74号土壌

積を呈すると思われる。

第74号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土ブロックを含み、しまり・粘性あり。
第2層	明黄褐色	10YR 9/6	暗褐色土混入。しまり・粘性あり。
第3層	明黄褐色	10YR 7/6	砂質土。しまり・粘性あり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

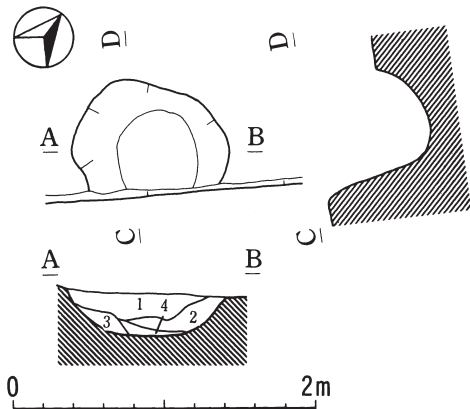
第75号土壌 (第13図)

位置と確認 調査区 J - 27グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。南側部分は、調査区域外のために全掘はできなかった。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、残存部から推定すると北側が張り出す不整形円形の形態を呈すると思われる。規模は、長径1m2cm・短径(75)cm・深さ37cmである。

壁 南壁が不明であるが、他の壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がっており、軟ら



第13図 第75号土壌

かいつくりである。壁高は、東壁24cm・西壁28cm・北壁32cmである。

第75号土壌土層注記

第1層	褐	色	10YR 7/4	混入物含まず、しまりなし、粘性ややあり。
第2層	褐	色	10YR 7/4	黄褐色土混入。しまりなし、粘性あり。
第3層	黄	褐	色 10YR 5/4	褐色土混入。しまりなし、粘性あり。
第4層	黄	褐	色 10YR 5/6	混入物含まず、しまりなし、粘性あり。

底面 断面形は鍋底状を呈し、軟らかい。

堆積土 3層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第76号土壌（第14図）

位置と確認 調査区J - 20・21グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

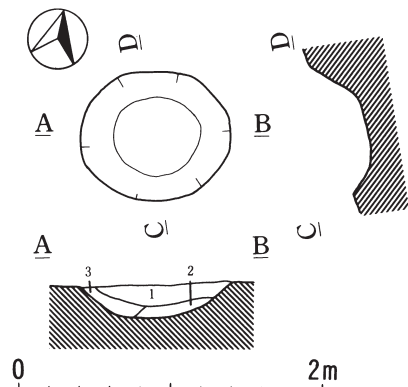
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもつ円形の形態を呈する。規模は、長径98cm・短径84cm・深さ33cmである。

壁 底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、軟らかく軟弱なつくりである。壁高は、東壁21cm・西壁22cm・南壁15cm・北壁32cmである。

底面 全体的にほぼ平坦で軟らかい。

堆積土 3層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。



第14図 第76号土壌

第76号土壌土層注記

第1層	褐	色	10YR 7/6	黄褐色土混入。しまり・粘性ややあり。
第2層	黄	褐	色 10YR 5/6	砂質土。しまりあり、粘性あり。
第3層	黄	褐	色 10YR 5/6	混入物含まず、しまり・粘性ややあり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第77号土壌（第15図）

位置と確認 調査区K 18・19グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもち東西に長い楕円形を呈する。規模は、長径 2 m40cm・短径 1 m34cm・深さ46cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、軟らかくもろいつくりである。壁

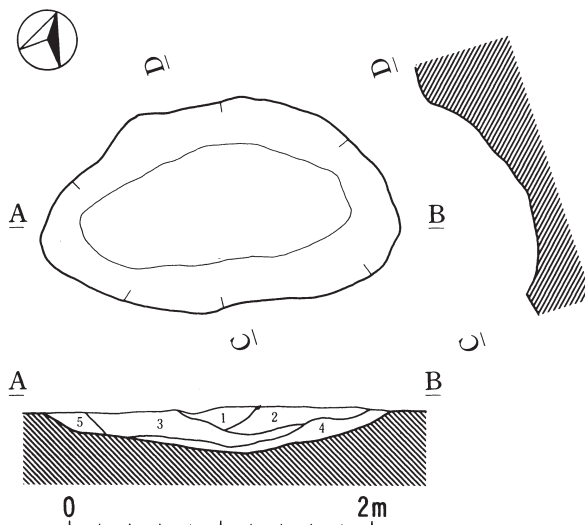
高は、東壁28cm・西壁15cm・南壁21cm・北壁45cmである。

底面 断面形が鍋底状を呈し、軟らかく軟弱なつくりである。

堆積土 5層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(成田滋彦)



第15図 第77号土坑

第77号土坑土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	黄褐色土粒を全体に含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	黒褐色	10YR 3/2	黄褐色土粒を含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	黒褐色	10YR 3/2	暗褐色土ブロック混入。しまりあり、粘性ややあり。
第4層	暗褐色	10YR 3/2	褐色土粒を全体に含む。しまり・粘性ややあり。
第5層	褐色	10YR 4/6	混入物含まず、しまり・粘性あり。

第78号土坑(第16図)

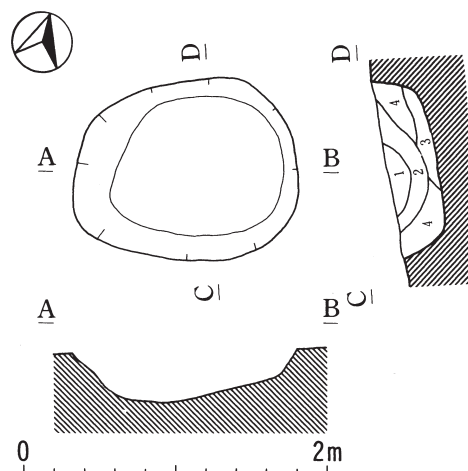
位置と確認 調査区I 24グリッドに位置している。基本層序第 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、東西に長い不整な楕円形を呈している。規模は、長径1m52cm・短径1m18cm・深さ34cmを測る。

壁 すべて基本層序第 層を壁面としており、南・北壁は底面から上場にかけて立ち上がり、東・西壁は緩やかに立ち上がる。壁

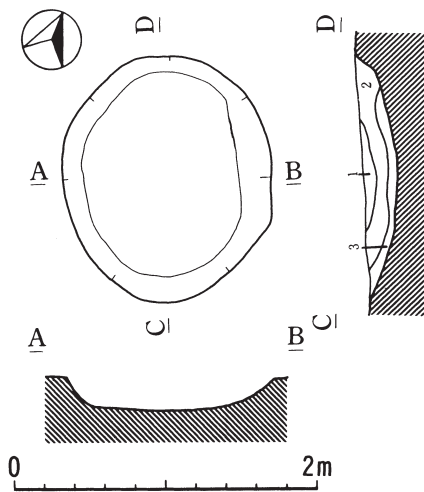
高は、東壁18cm・西壁29cm・南壁25cm・北壁



第16図 第78号土坑

第78号土坑土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	炭化物を少量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	褐色の砂質土をやや多量に混入し、ローム粒・炭化粒をやや多量、焼土粒を微量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量に含む。黄褐色の砂質土を少量に混入する。しまり・粘性あり。
第4層	明黄褐色	10YR 6/8	暗褐色土を多量に混入する。しまりあり、粘性なし(砂質土)。



第17図 第79号土壌

26cmである。

底面 全体的に起伏がなくほぼ平坦で、やや軟弱である。

堆積土 3層に分層できた。地山の砂質土を多く含んでおり、断面観察等から自然堆積と思われる。

第79号土壌（第17図）

位置と確認 調査区H 22グリッドに位置する。基本層序第 層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

第79号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 7/4	炭化粒、ローム粒を微量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	褐色	10YR 5/4	黄褐色土を少量に混入し、炭化粒を微量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土をやや多量に混入し、砂質土粒を少量に含む。しまりあり、粘性なし。

平面形・規模 平面形は、南北に長い楕円形を呈している。規模は、長径 1 m62cm・短径 1 m38cm・深さ22cmである。

壁 第 層を壁面としており、すべて底面から上場にかけて緩やかな立ち上がりをなす。壁高は、東壁13cm・西壁18cm・南壁12cm・北壁14cmである。

底面 全体に起伏が少なく、ほぼ平坦であり、軟弱である。

堆積土 3層に分層できた。堆積土上位に炭化物をわずかに含み、下位に砂質土粒を含む。断面観察等から自然堆積と思われる。

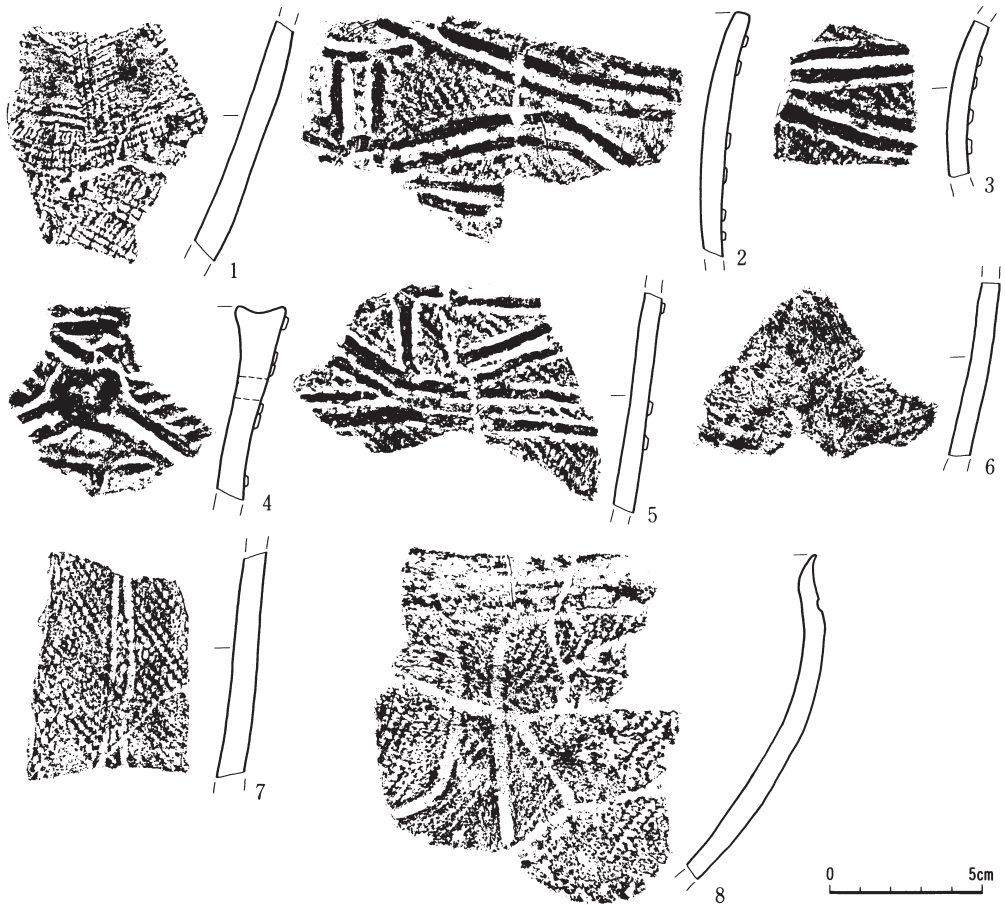
出土遺物 遺物は出土しなかった。

第80号土壌（第18・19図）

位置と確認 調査区 - 17グリッドに位置する。基本層序第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 平面形は、南北に長い楕円形を呈している。規模は、長径 1 m74cm・短径 1 m41cm・深さ63cmである。

壁 すべて第 a層を壁面としており、北壁は底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は緩やかに立ち上がっている。壁高は、東壁63cm・西壁44cm・南壁32cm・北壁59cmであ



第80号 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	3 層	胴部	連続貝殻圧痕文		スス状炭付	I群1類
2	"	口縁部	波状口縁、縦位・弧状粘土紐、縄文 (RL)		"	II群3類
3	"	口頸部	横・斜位粘土紐縄文 (RL)		"	"
4	"	口縁部	波状口縁、貫通孔、横・斜位粘土紐、縄文 (RL)		"	"
5	"	胴部	横・斜位・縦位粘土紐、縄文 (RL)		"	"
6	"	"	斜位・横位、沈線、縄文			II群9類
7	"	"	縦位沈線、縄文 (RL)		スス状炭付	II群8類
8	"	口縁部	縄文 (RL)、方形状沈線			II群9類

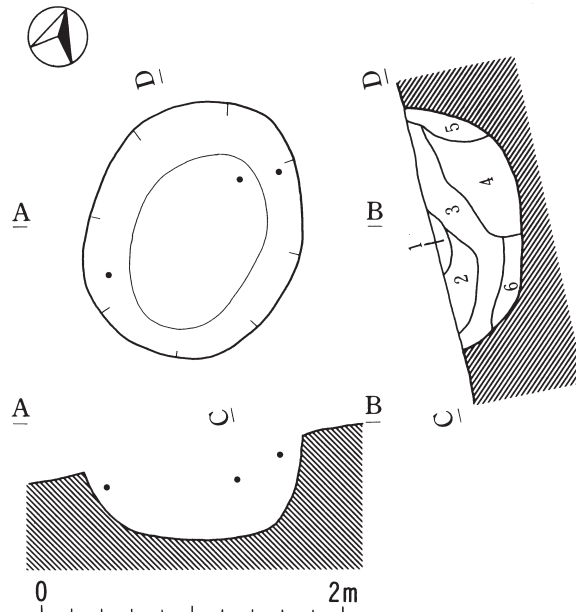
第18図 第80号土器出土遺物

る。

底面 全体に起伏が少なく平坦である。かたく締まりがある。

堆積土 6層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、土器破片が堆積土の上位から出土しており、土器の出土状態から土壌が埋没する際に混入したと思われる。時期は、第・群土器が混入して出土し、土壌の時期を決定することはできなかった。



第19図 第80号土壌

第80号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/1	褐色土を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/4	黒褐色土の固まりを含む。しまりややあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 5/6	砂質土のブロックを少量に含む。しまり・粘性なし。
第4層	褐色	10YR 5/4	砂質土を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまりあり、粘性なし。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	砂質土のブロックを少量に含む。しまりあり、粘性なし。

第81号土壌（第20図）

位置と確認 H・19・20グリッドに位置する。基本層序第 a 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

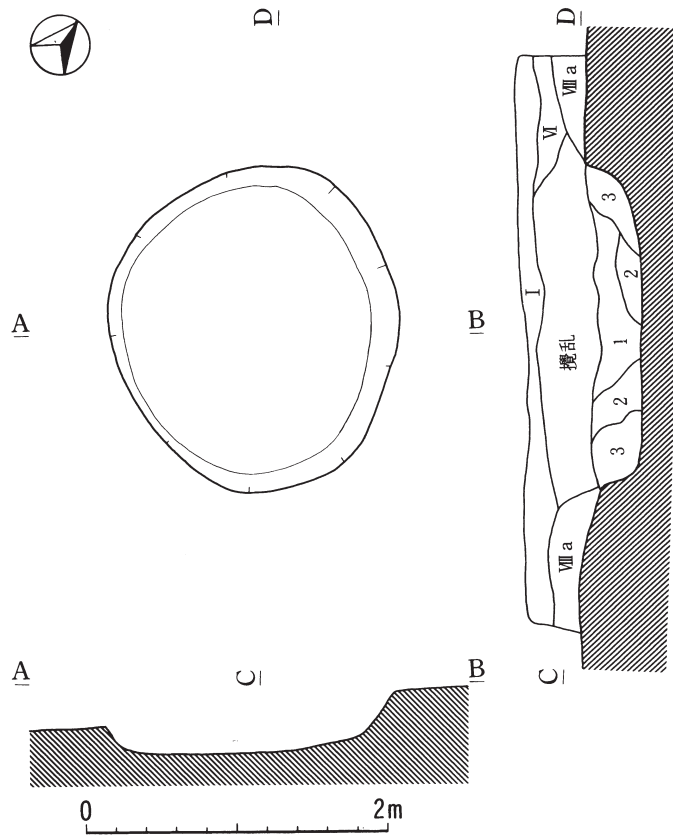
平面形・規模 平面形は、南北に長い楕円形を呈している。規模は、長径 2 m16cm・短径 1 m92cm・深さ28cmである。

壁 すべて第 a 層を壁面としており、底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁27cm・西壁18cm・南壁21cm・北壁22cmである。

底面 第 a 層を底面としており、全体に起伏が少なくほぼ平坦で、かたく締まりがある。

堆積土 3 層に分層できた。全体に砂質土を多く含み、また炭化物をわずかに含んでいる。堆積土の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第20図 第81号土坑

第81号土坑土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	3mm大の炭化材、砂質土のブロックを微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	3mm大の炭化材を微量、砂質土粒を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	にぶい黄褐色	10YR 5/3	砂質土粒を多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。

第83号土坑（第21図）

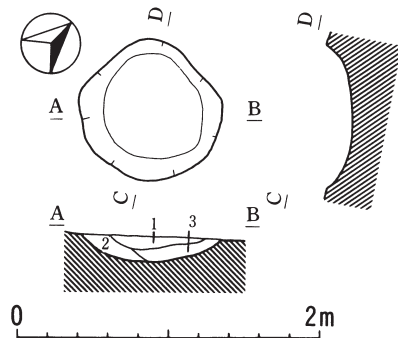
位置と確認 調査区 38グリッドに位置する。

基本層序第 層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、不整な円形を呈している。規模は、長径96cm・短径94cm・深さ17cmである。

壁 第 層を壁面としており、すべての壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がっている。壁高は、東壁9cm・西壁15cm・南壁10cm・北壁15cmである。



第21図 第83号土坑

底面 第層を底面としており、全体に起伏が少なくほぼ平坦で、軟弱である。

堆積土 3層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第83号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 7/4	黒褐色土を多量に混入し、ロームブロック、炭化材を少量に含む。しまり・粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土をやや多量に混入する。しまり・粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	褐色土を多量に混入する。しまり・粘性あり。

第84号土壌（第22図）

位置と確認 調査区 38・39グリッドに位置する。基本層序第層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、東西にやや長い楕円形を呈している。規模は、長径60cm・短径52cm・深さ30cmである。

壁 第層を壁面としており、すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がっている。壁高は、東壁19cm・西壁25cm・南壁21cm・北壁20cmである。

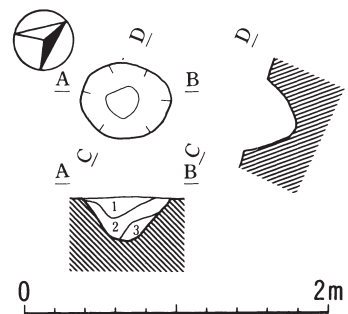
底面 第層を底面としており平坦で、ややかたいつくりである。

堆積土 3層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

第84号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 7/4	ローム粒を多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を多量に混入する。しまり・粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	褐色土を少量に混入する。しまり・粘性あり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第22図 第84号土壌

（新谷幸三郎、成田滋彦）

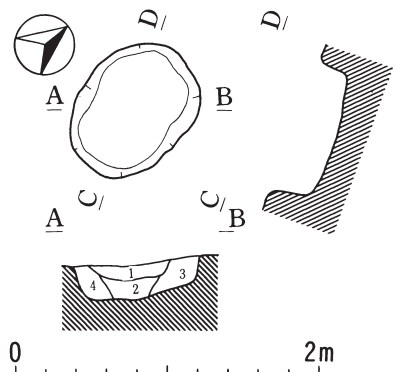
第85号土壌（第23図）

位置と確認 調査区 33グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南北に長軸をもち全体的に丸みをもつ楕円形を呈する。規模は、長径92cm・短径71cm・深さ30cmである。

壁 底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、か



第23図 第85号土壌

たいつくりである。壁高は、東壁18cm・西壁20cm・南壁21cm・北壁30cmである。

底面 東側から西側にかけて傾斜しており、かたいつくりである。

堆積土 4層に分層できた。断面観察等から自然堆積を呈すると思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第85号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 7/4	炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	褐色	10YR 7/4	炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	しまり・粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に混入する。しまりあり、粘性ややあり。

(成田滋彦)

第86号土壌(第24図)

位置と確認 調査区H・ 16グリッドに位置する。基本層序第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

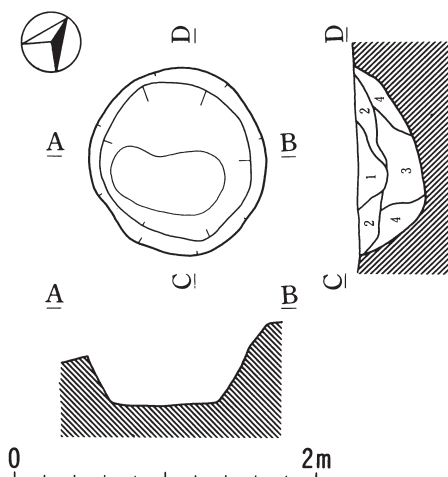
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径 1 m24cm・短径 1 m18cm・深さ44cmである。

壁 第 a層を壁面としており、すべての壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がっている。壁高は、東壁56cm・西壁30cm・南壁39cm・北壁28cmである。

底面 第 a層を底面としており、全体にやや起伏が多く軟弱なつくりである。

堆積土 4層に分層できた。すべての層に炭化物を含み堆積土下位の層は砂質土である。



第24図 第86号土壌

第86号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 2/3	炭化物を少量、褐色土を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 7/4	炭化物を少量、黒褐色土を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第87号土壌(第25図)

位置と確認 調査区G 54グリッドに位置する。基本層序第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南北にやや長い不整楕円形を呈している。規模は、長径1 m60cm・短径1 m42cm・深さ1 m13cmである。

壁 第 a 層を壁面としている。断面形状はフラスコ状を呈し、壁面はかたいつくりである。壁高は、東壁85cm・西壁96cm・南壁89cm・北壁97cmである。

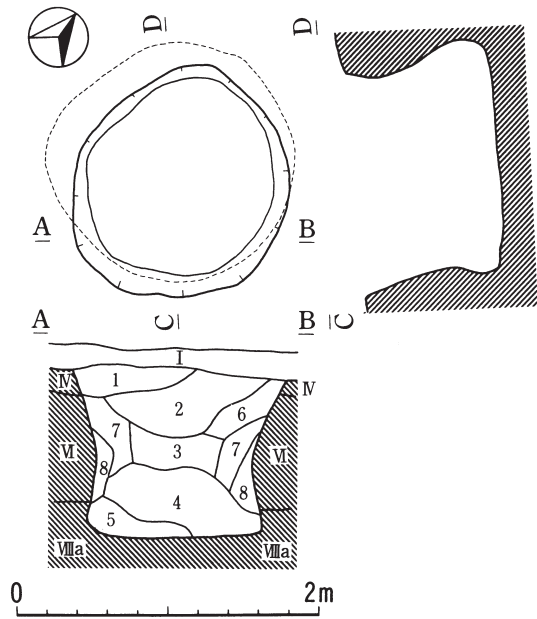
底面 第 a 層を底面としており、全体に起伏が少なく平坦で、かたいつくりである。

堆積土 8層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第87号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 7/3	褐色土をやや多量に混入し、ロームブロックを微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第2層	暗褐色	10YR 5/3	ローム粒、ロームブロックをやや多量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	褐色	10YR 4/4	暗褐色土を少量に混入し、ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	褐色	10YR 5/6	5mm大のロームブロックの炭化物を少量に含む。しまり・粘性なし。
第5層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土を多量に混入する。しまりあり、粘性ややあり。
第6層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量に含む。しまり・粘性なし。
第7層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土を多量に混入し、炭化粒も微量に含む。しまり・粘性あり。
第8層	明黄褐色	10YR 9/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり・粘性あり。



第25図 第87号土壌

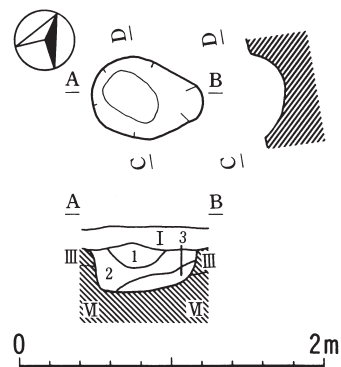
第88号土壌 (第26図)

位置と確認 調査区G 54グリッドに位置する。基本層序第 層を精査中に黒褐色の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、東西にやや長い不整な楕円形を呈している。規模は、長径74cm・短径54cm・深さ33cmである。

壁 第 層を壁面としており、南・北壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、東・西壁は垂直に立ち上がる。



第26図 第88号土壌

底面 第 層を底面としており、やや起伏があるがほぼ平坦である。つくりは軟弱である。

堆積土 3 層に分層できた。堆積土中にはローム粒・ロームブロックを多く含んでおり、断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第88号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	ローム粒を1層より多く含む。しまりなし、粘性あり。
第3層	褐色	10YR 3/4	ロームブロックを多量に含む。しまりあり、粘性なし。

(新谷幸三郎、成田滋彦)

第89号土壌 (第27図)

位置と確認 調査区G 61グリッドに位置する。第 a 層を精査中に落ち込みを確認した。北側部分は、調査区域外のため全掘はできなかった。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、残存するプランから推定すると、ややいびつな円形を呈すると思われる。規模は、長径87cm・短径(41cm)・深さ53cmである。

壁 北壁が不明であるが、他の壁はすべて底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、かたいつくりである。壁高は、東壁38cm・西壁45cm・南壁11cmである。

底面 でこぼこが著しく、軟弱である。

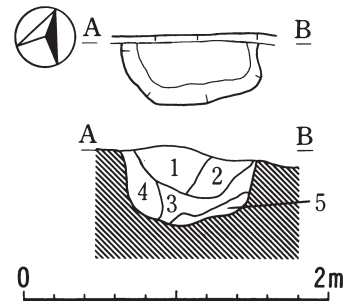
第89号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。
第3層	褐色	10YR 3/4	ローム粒混入。しまり・粘性あり。
第4層	褐色	10YR 3/6	暗褐色土混入。しまりあり、粘性ややあり。
第5層	褐色	10YR 3/6	炭化物少量含む。しまり・粘性ややあり。

堆積土 堆積土は4層に分層できた。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(成田滋彦)



第27図 第89号土壌

(2) 焼土状遺構

第 6 号焼土状遺構 (第28図)

位置と確認 調査区 I 23グリッドに位置する。基本層序第 層を精査中に焼土を確認した。

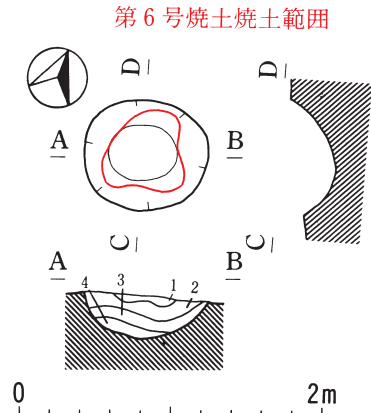
重複 認められなかった。

焼土範囲 焼土範囲は、掘り方のほぼ中央部に分布している。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径80cm・短径72cm・深さ28cmである。

壁 第 層を壁面としており、底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁17cm・西壁31cm・南壁17cm・北壁29cmである。

底面 第 層を底面としており、全体に起伏が少なく平坦であり、かたいつくりである。



第28図 第 6 号焼土状遺構

第 6 号焼土状遺構土層注記

第1層	褐色	7.5YR 5/6	焼土をブロック状に多量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	褐色	7.5YR 4/6	焼土粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 5/6	焼土粒を微量、砂質土粒を少量に含む。しまり・粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまりあり、粘性なし(砂質土)。

堆積土 4層に分層できる。堆積土の下位になるほど砂質を多く含む。壁及び底面は、火熱を受けておらず短期間の使用と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(新谷幸三郎、成田滋彦)

第 7 号焼土状遺構 (第29図)

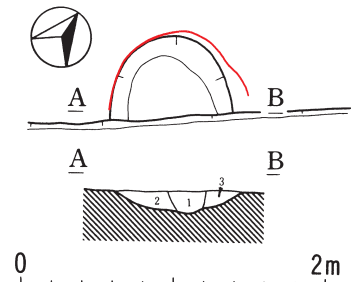
位置と確認 調査区 F 47グリッドに位置する。第 a層を精査中に焼土を確認した。

重複 認められなかった。

焼土範囲 掘り方の上面を覆うように長径(92cm)・短径(48cm)の範軌に分布している。

平面形・規模 掘り方は、南側部分が精査の段階で掘りすぎたが、残存部から推定するとほぼ円形を呈すると思われる。残存部の規模は、長径(77cm)・短径(50cm)・深さ13cmである。

壁 南壁が不明であり、他の壁はすべて底面から



第29図 第 7 号焼土状遺構

上場にかけて緩やかに立ち上がり、火熱を受けていない。

底面 壁と同様に軟らかく、火熱を受けていない。

堆積土 3層に分層できた。掘り方の中央部に堆積している第1層中には、焼土が多く第2・3層中に焼土は少ない。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第7号焼土状遺構土層注記

第1層	明赤褐色	5YR 5/8	焼土ブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	黒褐色	7.5YR 3/6	褐色ブロックを含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	黒褐色	10YR 3/6	黄褐色土ブロックを含む。しまり・粘性あり。

第8号焼土状遺構（第30図）

位置と確認 調査区F・G 49グリッドに位置し、第a層を精査中に焼土を確認した。

重複 認められなかった。

焼土範囲 焼土は、掘り方を覆うように長径98cm・短径97cmで円形状に分布している。

平面形・規模 掘り方の平面形は、全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径83cm・短径78cm・深さ17cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、壁自体は軟らかく火熱を受けていない。

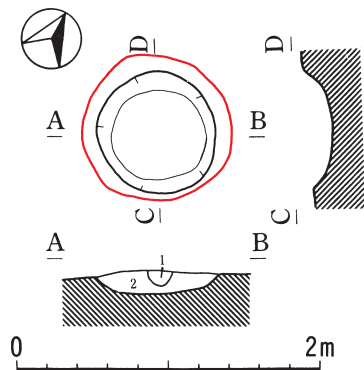
底面 断面形が鍋底状を呈し壁同様に火熱を受けていないため、軟らかくもろい。

第8号焼土状遺構土層注記

第1層	赤褐色	5YR 5/6	黒褐色土混入。焼土ブロックを含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	暗褐色	7.5YR 3/6	黄褐色土混入。焼土ブロックを含む。しまり・粘性なし。

堆積土 焼土は2層に分層できた。第1・2層は火熱を受けておらず焼土ブロックが混入した層である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第30図 第8号焼土状遺構

(新谷幸三郎、成田滋彦)

2. 遺構外出土遺物

(1) 土器

第 群土器 1 類〔吹切沢式に相当するもの〕(第31図 1・2、第33図 15~28、第34図 29~44、第35図 45~54)

本類の貝殻文を施文する土器は富ノ沢 1 遺跡のみで出土し、他の地区からは出土していない。また、出土した土器は、調査区の西側の地域に多く分布しているが、出土層位が第 層(耕作土)中からの出土が多く、この地域が旧谷地形の部分にあたるため、上流の北側台地から流れ込んできたものと思われる。

本類でほぼ復原できた土器は(1)・(2)のみで、胴部から底辺部にかけての土器である。形状は胴部から底辺部にかけて直線的な形状を呈する。

口縁部は平口縁が主体を占める。(15)・(16)は波状口縁を有する土器であるが、短隆起帯をもつ土器に波状口縁を有する土器が多い。口唇部の断面は、先端に向かって細くなり丸みをもつものが多い。

文様施文については、(口縁部文様)と(胴部・底辺部文様)とに二つに分けて記載する。

(口縁部文様)

口唇部の上面には、ヘラ状工具と貝殻(18)を用いて口唇部の上面と口端に連続した刻みを加えている。

文様は、波状口縁の波頂部下から短隆起線(隆起線の上面も口唇部と同様なヘラ状工具を用いた連続刺突文を施文)・貝殻腹縁波状文を用いて横位方向に展開し、間隔をあげ、連続に施文したもの・貝殻押し引き文及び貝殻条痕文のみを施文したもの・貝殻腹縁文と連続刺突文(竹管)の組み合わせのもの(27)がみられる。

(胴部・底辺部文様)

文様は、貝殻腹縁の連続波状文・貝殻押し引き文・貝殻条痕文・無文の土器がみられ、口縁部文様と類似した文様を施文している。

胴部から底辺部にかけては器厚が厚くなり、底辺部は火熱を受けて器表面の剥落が著しい。

第 群土器 3 類〔円筒上層d式に相当〕(第36図 55~58)

本類の土器は、本調査区でわずか4片出土しただけである。

(55)は、平口縁を呈し、地文縄文上に、粘土紐を用いて口端にく字状、口頸部には横位方向に展開するモチーフで構成している。粘土紐は、細く素文であり断面は丸みを有する。

(56)~(58)は、粘土紐を用いて縦位及び横位に貼り付けており、胸骨文のモチーフに類似する。粘土紐の上面には縄文を施文している。

第 群土器 8 類〔中の平・最花式に相当〕(第31図 3・5、第36図 59~69、第37図

70～81、第38図 82～94)

本類の器形は、深鉢形が主体を占める。広口壺形土器(67)も出土しているが、この器種に占める割合は少ない。従来、指摘されていた事であるが、広口壺形土器の焼成・成形は良好なものが多く、本遺跡においても同様である。口縁は、(60)が波状口縁を呈するが、他の多くは平口縁が占めている。

形状は、口頸部の上部が内反し口唇部に向って外反するものと、口頸部上部が外反するものの二種の形状がみられる。口唇部の断面形は、先端部が丸みをもつものと平坦なものに分かれる。また、折り返し口縁をもつものが多く、折り返し口縁部は無文帯である。

口縁部文様帯には特に文様を構成しておらず無文である。胴部文様帯との区画として二条の横位沈線を巡らすものと、間隔をあけた連続の刺突文を巡らすものがあり、これによって狭義の口縁部文様帯を形成している。

胴部文様帯は、地文縄文上に文様を施文し、磨消縄文はみられない。文様は二本を一単位とした沈線で、縦位方向を基調とした文様が構成される。これには、幅広なモチーフと狭いモチーフがあり、後者には逆U字状の内部に縦位の沈線が施文される。

文様構成には、Y字状(3)・逆U字状(63)・U字状と逆U字状の組み合わせ(65・68)・U字状の連続(70)・円形とU字状の組み合わせ(79)・直線状の文様構成(87～94)等がみられる。

この時期には、刺突文を多く使用する。刺突は器表面に対して直角に当たった竹管状の工具と、丸棒状工具を用いて斜位に当てるD形状があり、D形状の多くは文様区画に使用される。刺突文の位置は、文様帯内部に施文するものと、沈線に沿って刺突を施文するものがあり、いずれも間隔をあけ連続的に施文している。また、刺突が十字に施文され独立した文様単位を構成するものもある。

第 群土器 9 類【大木10式に併行】(第39図 96～107・第40図 108～117)

本類の器形は、底辺部から直線的に立ち上がる深鉢形と小形な鉢形、及び橋状把手(108)を有する壺形土器があり、深鉢形が主体を占める。

口縁部文様帯には、波頂部から鱗状突起を貼り付け、その粘土紐の脇に刺突を施文している胴部文様帯との区画として器表面に直角に当たったD形状の刺突、またはやや一段盛り上がった隆起帯があり、これによって狭義の口縁部文様帯を構成している。胴部文様帯は、横位に展開する波頭状文によって上下二帯に区画されている。

文様は、地文縄文施文後に波線文様を施文する(96～101)土器が多いが、(108～112)は文様帯内部に縄文を充填した充填文様である。(96)は胴部文様にJ字状の連続した文様を施文している。

第 群土器 1 類【後期初頭期に相当】(第40図 118～125)

本類の土器は、全般に器厚が薄く、小さな山形突起を有し、頂端部に刻みを有する波状口縁の深鉢形である。

口縁部文様帯には、波頂部下にボタン状突起（中央部に刺突）や、縦位状の粘土紐を貼り付けている。（119）は、口縁部文様帯が明瞭でない土器で波頂部下にボタン状突起を有し、下部に二条を一単位とした短刻線を縦位に施文している。

胴部文様帯の区画として一条の粘土紐（上面に円形ないし斜位方向のD形の刺突文）を巡らしており、これによって狭義の口縁部文様帯を構成している。

胴部文様帯は、文様内部に円形の粘土紐を貼り付けている。中央部が指頭状にくぼんでいる土器もみられるが、胴部破片が少ないため全体の文様構成を把握することはできなかった。

第 群土器 2 類〔中期末葉～後期前葉に相当〕（第31図 4、第32図、第41図 126～143、第42図 144～155）

本類では、縄文・燃糸文・無文等の土器を一括して取り扱った。

形状は、口頸部の内反度が弱い深鉢形が主体を占めるが、無文の土器は口頸部の内反が大きい。無文の土器は、器表面にスス状炭化物の付着が多く、焼成が不良な土器が多い。

口唇部の形状は、無文・折り返し口縁の土器が先端部に丸みをもち、縄文施文の土器は、丸みをもつものと「形」で上面が平坦なものの二種類の形状がみられる。

縄文原体の種類には、単節LR・RL・0段多条があり、その施文方向は横位方向に回転施文するのを基本としているが、底辺部寄りでは条が縦方向になるものが多い。（145）は、口唇部寄りに一条の燃糸圧痕を施文し、（146）は縄文施文後に縦位の綾絡文を施文している。（126～133）の折り返し口縁部を有する土器は、折り返し口縁部が無文帯である。無文の土器は、器表裏面にミガキが認められ、焼成は良好である。

（成田滋彦）

第 群土器（弥生時代）

弥生時代の土器を一括した。本群の土器は富ノ沢1遺跡からのみ出土した。出土地区はG48グリッド（45%）からの出土が比較的多く、その周辺に散在する傾向がみられる。また、出土層はすべて基本層第 層からの出土である。完形土器は1点もなく、すべて土器片である。施文文様から、次のように第a種からd種まで分類を行った。

第a種 磨消縄文で文様帯を構成するもの（第43図 156～164）

本類の土器は波状形・方形等の沈線で区画され、その間に縄文を施している。

156と163が同一個体で、深鉢形土器と思われる。胎土中に少量の粗砂粒が混入されている。焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する。施文文様は浅い沈線で、波状形・方形気味に区画され、

その間に縄文が施されている。胴部には、振幅の小さい連続山形文と縦位方向の縄文（RL）が施文されている。

157は鉢形土器と思われる。胎土中に粗砂粒が混入され、焼成はやや悪い。区画文様は波状形・方形気味の沈線で区画され、比較的深く、整然としたタッチで描かれている。

158～162は同一個体と思われ、波状形・横位方向の沈線で区画されている。焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する。

第b種 刺突文を施文しているもの（第43図 165～169、第44図 171）

165、166、168、169、171は同一個体と思われる。焼成は良好で、胎土中に粗砂粒を少量混入している。色調はにぶい黄橙色である。口唇部に指頭あるいは工具による押圧がみられ、さらにその上面に縄文（RL）が施されている。また、口唇部から口縁部上面にかけて、縦位方向の刻目が付加されている。口縁部には縦位方向に縄文（RL）が施文されている。頸部には、器表面に対して右横方向からの連続した刺突文と弧状の沈線が施されている。

167は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する深鉢形土器と思われる。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。口唇部には山形の浅い沈線が観察される。口縁部から頸部にかけて縄文（RL）が施され、また、頸部には連続の刺突と横位方向の沈線が施されている。

第c種 沈線文を施文しているもの（第44図 172～175）

4点の出土である。文様構成は沈線単独ではなく、他の文様との組み合わせが考えられよう。

172は小突起のある口縁で、その突起部には口唇部から口縁部内面にかけて縦位方向の刻目が付加されている。口縁部から頸部にかけては縄文（RL）が施文されている。

175は無文で、横位方向の沈線と振幅の小さな連続山形文が施文されている。焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する。器表面には、煤状炭化物が付着している。

第d種 縄文のみを施文しているもの（第43図 170、第44図 176～186）

176は平縁で、RL縄文が施されている。また、口唇部には縄文（RL）が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。胎土中には粗砂粒が混入されている。

177は口唇部が指頭あるいは棒状の工具により押圧され、口唇部から口縁部上面にかけ縦位方向の刻目が付加されている。地文は縦位方向の縄文（RL）である。

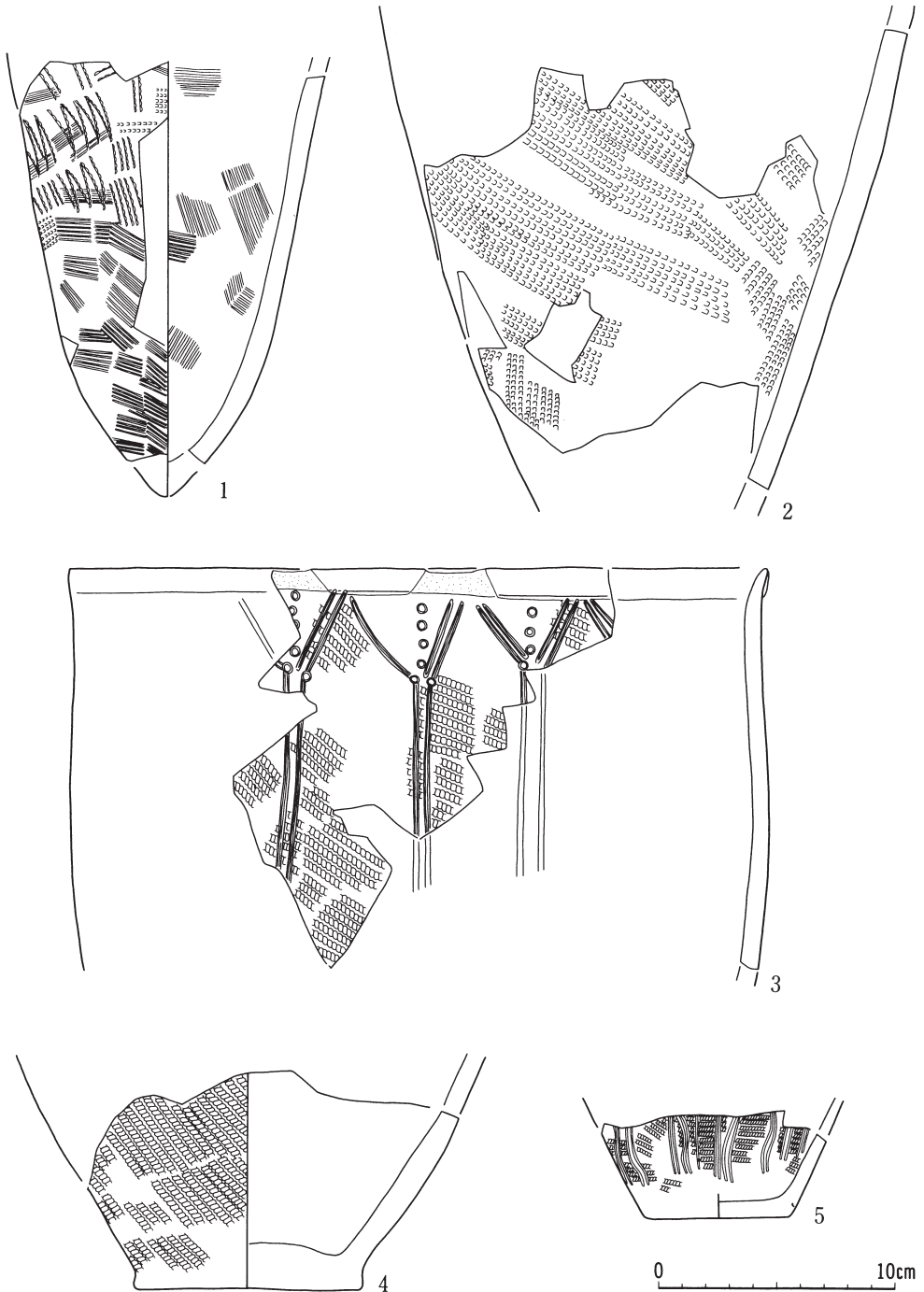
178は鉢形土器と思われる。刻目の付加、施文の縄文は7と同様であるが、器内面の口縁部には段が観察される。

181、182は頸部の土器片で、縦位方向の縄文（RL）が施文されている。

180、183、185は帯状縄文（RL）が施文されている。

179は胎土、焼成、色調等から167と同一個体と思われる。また、184は165と同一個体と思われる。

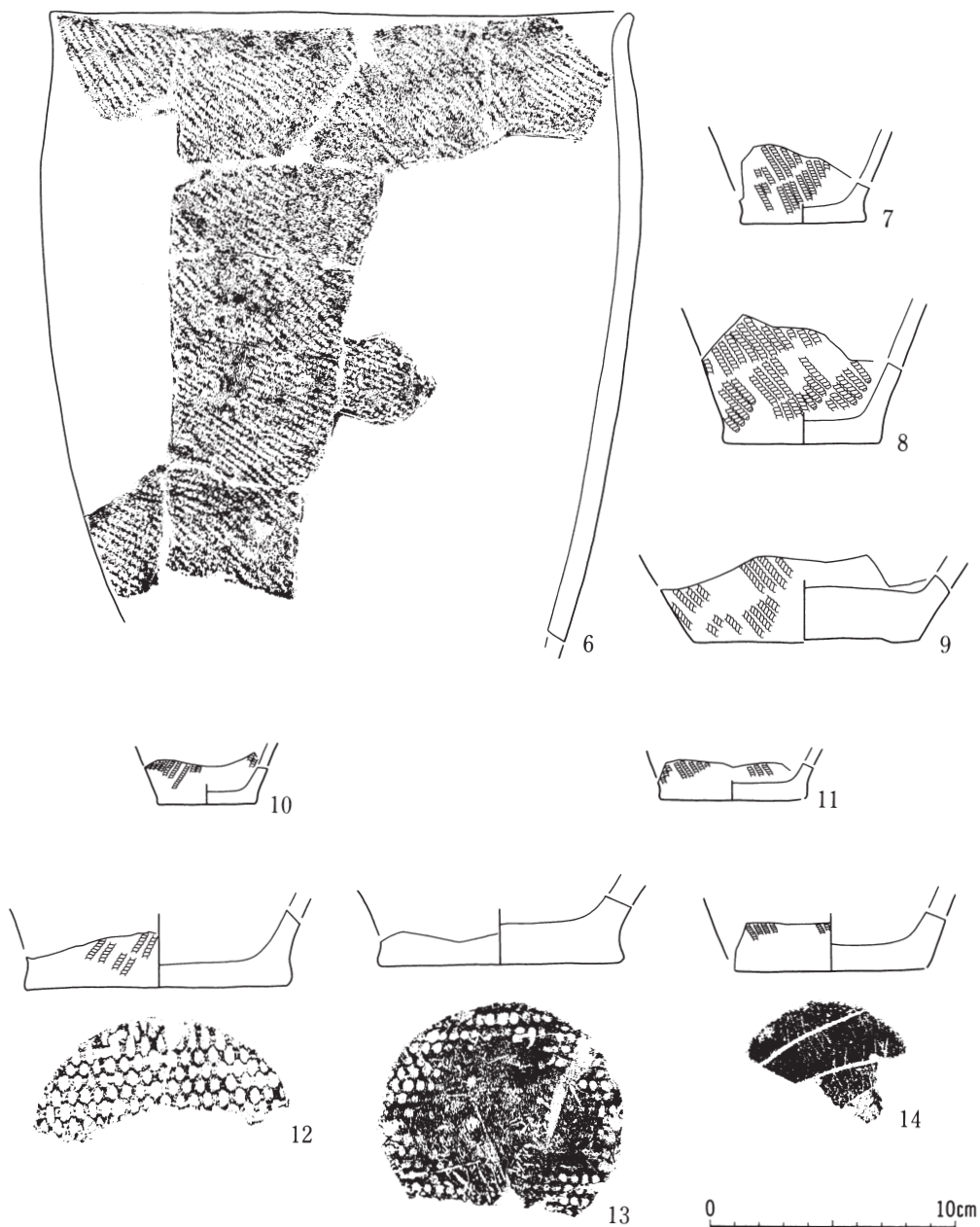
（奈良昌毅）



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	L-12 I層	深鉢	貝殻条痕、貝殻腹縁(波状)			I群1類
2	J-13 "	"	貝殻押し引き文			"
3	G-20 "	"	地文縄文(RL)、Y字状沈線、連続刺突、平口縁			II群8類
4	E-53 "	"	縄文LRの縦位回転			III群2類
5	I-20 "	鉢	縦位(擦痕状沈線)、地文LR			II群8類

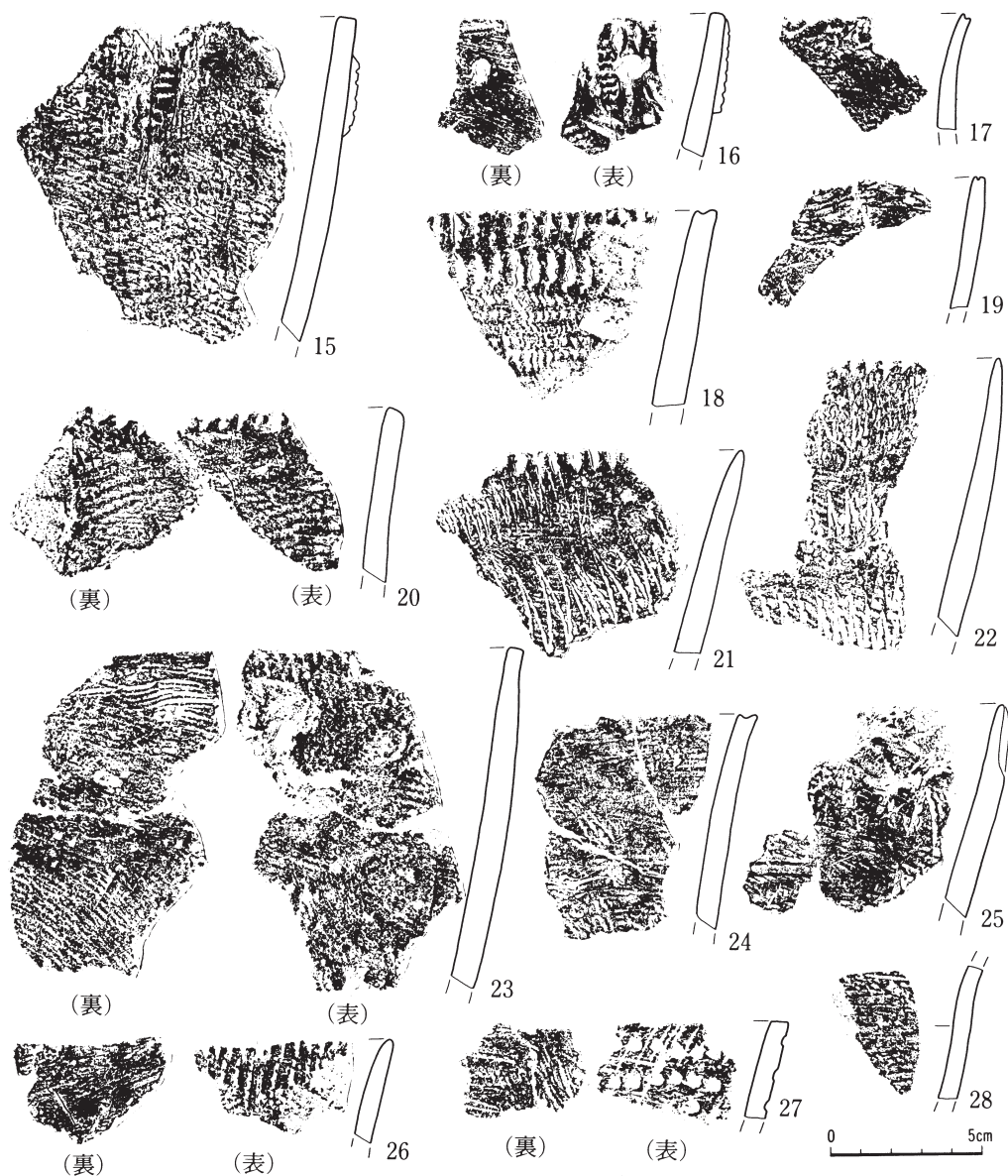
第31図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(1)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
6	H-17 I層	深鉢	地文縄文(RL)、平口縁、スス状炭附着			Ⅲ群2類
7	I-23 "	底部	縄文(LR)の縦回転			"
8	H-23 "	"	"			"
9	H-21 "	"	縄文(RL)、あげ底			"
10	" "	"	縄文(RL)の縦回転			"
11	I-22 "	"	縄文(LR)の縦回転			"
12	J-27 "	"	縄文(RL)、底面に網状痕			"
13	H-58 "	"	底面に網状痕			"
14	H-22 "	"	縄文(LR)の縦回転、底面に木葉痕			"

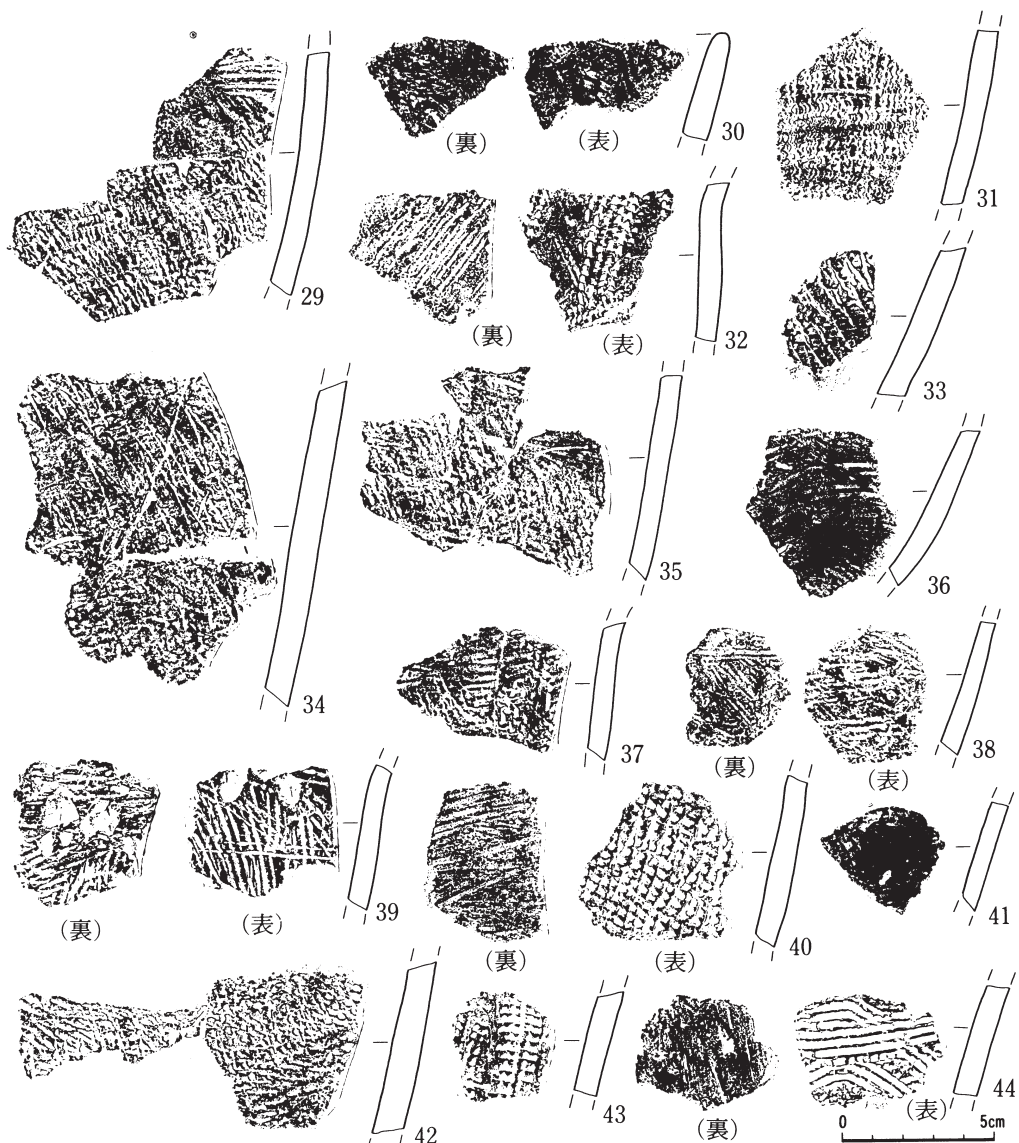
第32図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(2)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
15	L-12 I層	口縁部	波状口縁、短隆起線(上面に刻み)、口唇部に刻み、貝殻押し引き文			I群1類
16	N-10 "	"	短隆起線(上面に刻み)、貫通孔、裏面に貝殻条痕			"
17	L-12 "	"	口唇部に刻み、貝殻条痕、平口縁			"
18	" "	"	口端に刻み、貝殻腹縁(波状)、平口縁			"
19	" "	"	口唇部に刻み、貝殻条痕			"
20	" "	"	口端に刻み、貝殻押し引き文、波状口縁			"
21	N-10 "	"	口唇部に刻み、貝殻腹縁文、平口縁			"
22	L-12 "	"	口端に刻み、貝殻腹縁(波状文)、平口縁			"
23	J-13 "	"	口端に刻み、貝殻押し引き文、器裏面貝殻条痕			"
24	L-12 "	"	口唇部に刻み、貝殻条痕			"
25	" "	"	貝殻押し引き文			"
26	J-13 "	"	口端に刻み、貝殻腹縁文、器裏面貝殻条痕			"
27	V-12 "	"	貝殻条痕、刺突、口唇部に刻み、器裏面貝殻条痕			"
28	L-12 "	口頸部	貝殻条痕			"

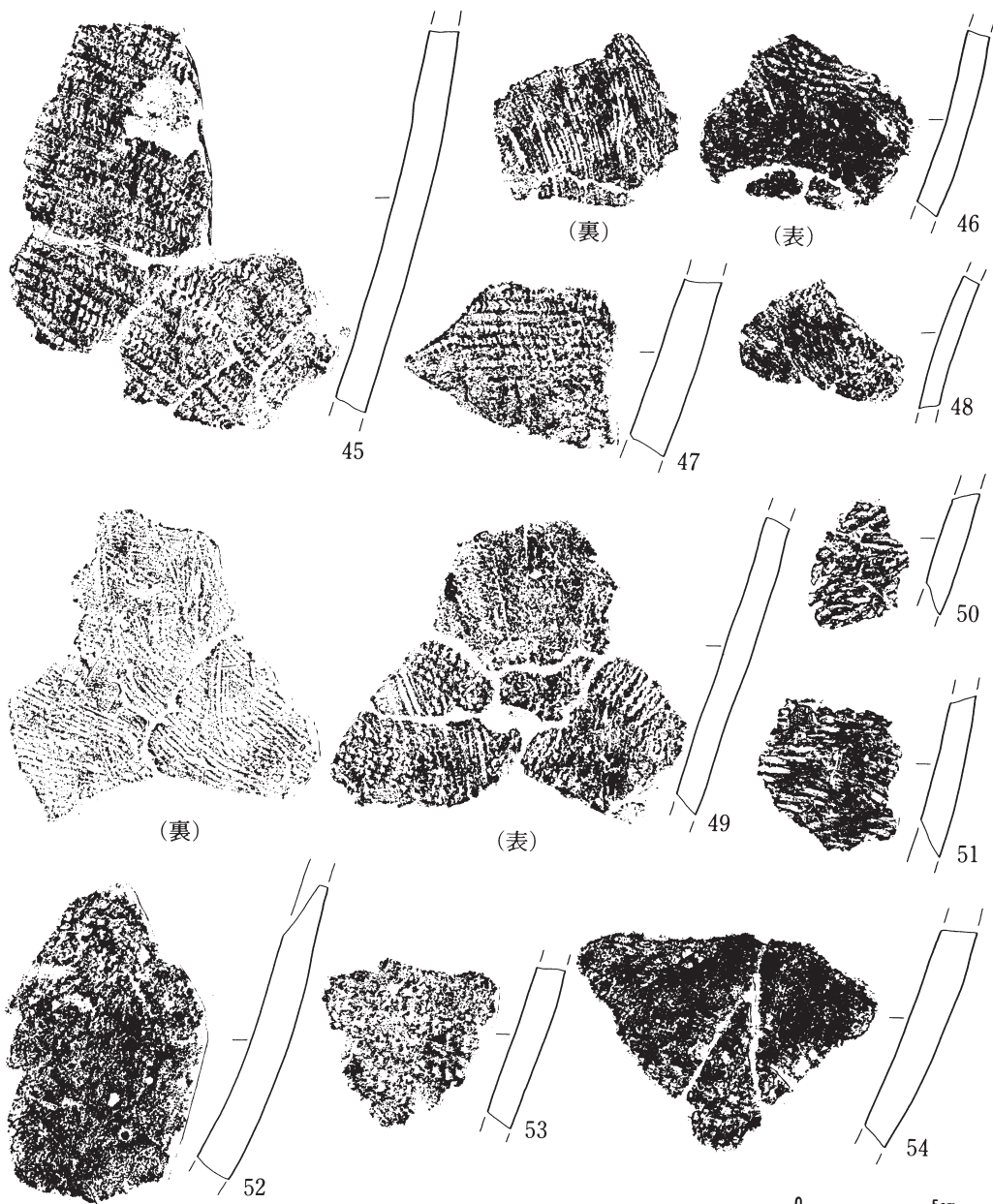
第33図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(3)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
29	L-12 I層	胴 部	貝殻押し引き文、貝殻腹縁文			I群1類
30	" "	口縁部	貝殻押し引き文、裏面貝殻条痕、スス状炭附着			"
31	O-9 "	胴 部	貝殻腹縁文(連続)			"
32	" "	口頸部	貝殻押し引き文			"
33	L-12 "	胴 部	貝殻腹縁(波状)			"
34	" "	"	" "			"
35	" "	"	" "			"
36	" "	底辺部	貝殻条痕			"
37	" "	胴 部	貝殻押し引き文、貝殻腹縁			"
38	" "	"	器表面に貝殻条痕、	スス状炭附着		"
39	N-10 "	"	器表裏面貝殻押し引き			"
40	O-9 "	"	貝殻押し引き、器裏面貝殻条痕			"
41	L-12 "	"	貝殻条痕、貝殻腹縁			"
42	" "	"	貝殻押し引き文			"
43	" "	"	"			"
44	O-9 "	"	"	器裏面貝殻条痕		"

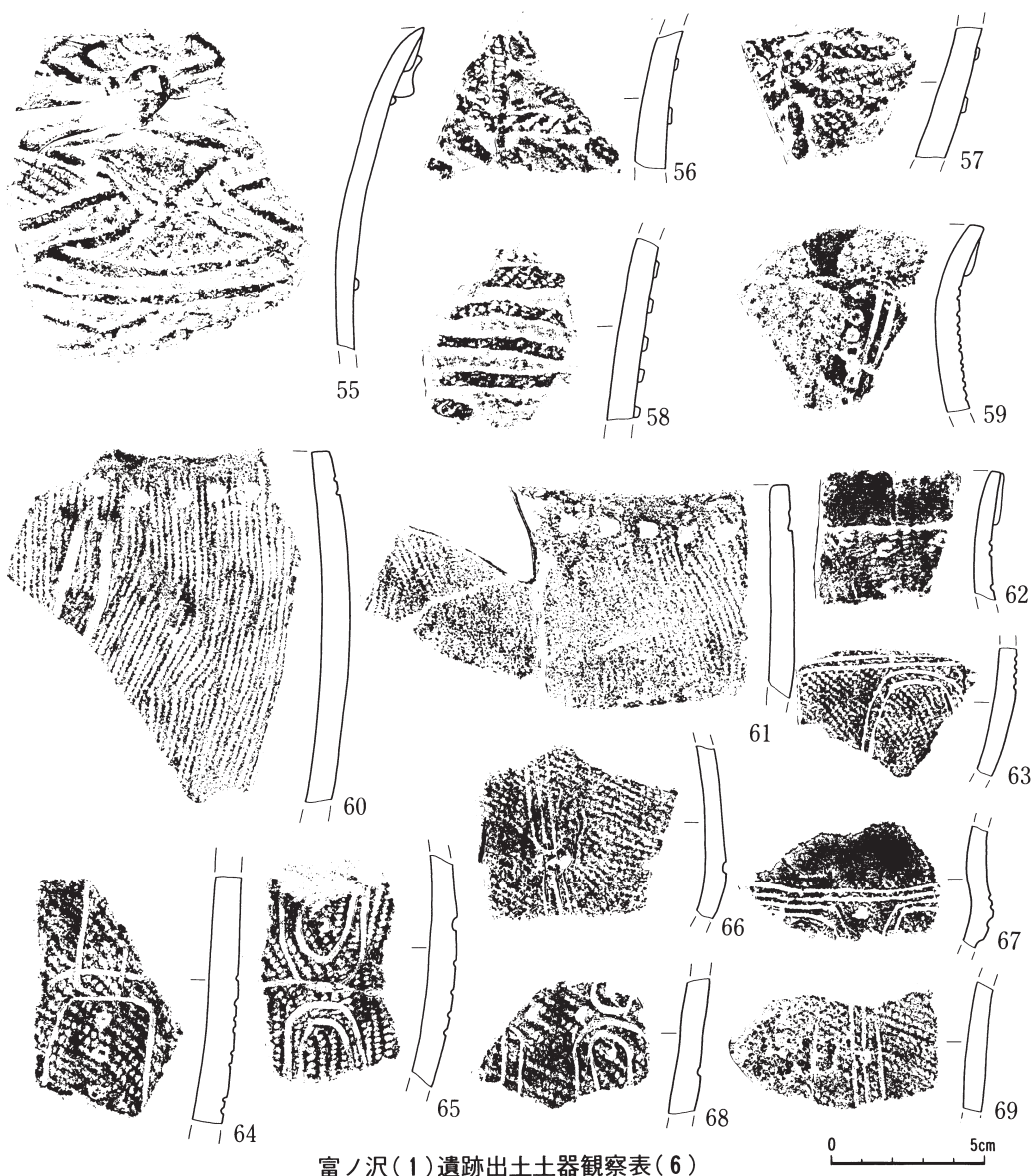
第34図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(4)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(5)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
45	N-10	I層	胴部	貝殻押し引き文		I群1類
46	G-20	"	底辺部	"	器裏面貝殻条痕	"
47	N-10	"	"	"		"
48	J-13	"	"	貝殻条痕		"
49	"	"	"	貝殻条痕・押し引き文、器裏面貝殻条痕		"
50	L-12	"	胴部	貝殻押し引き文		"
51	"	"	"	貝殻条痕		"
52	"	"	底辺部	無文		"
53	N-10	"	"	貝殻押し引き文		"
54	V-12	"	"	無文		"

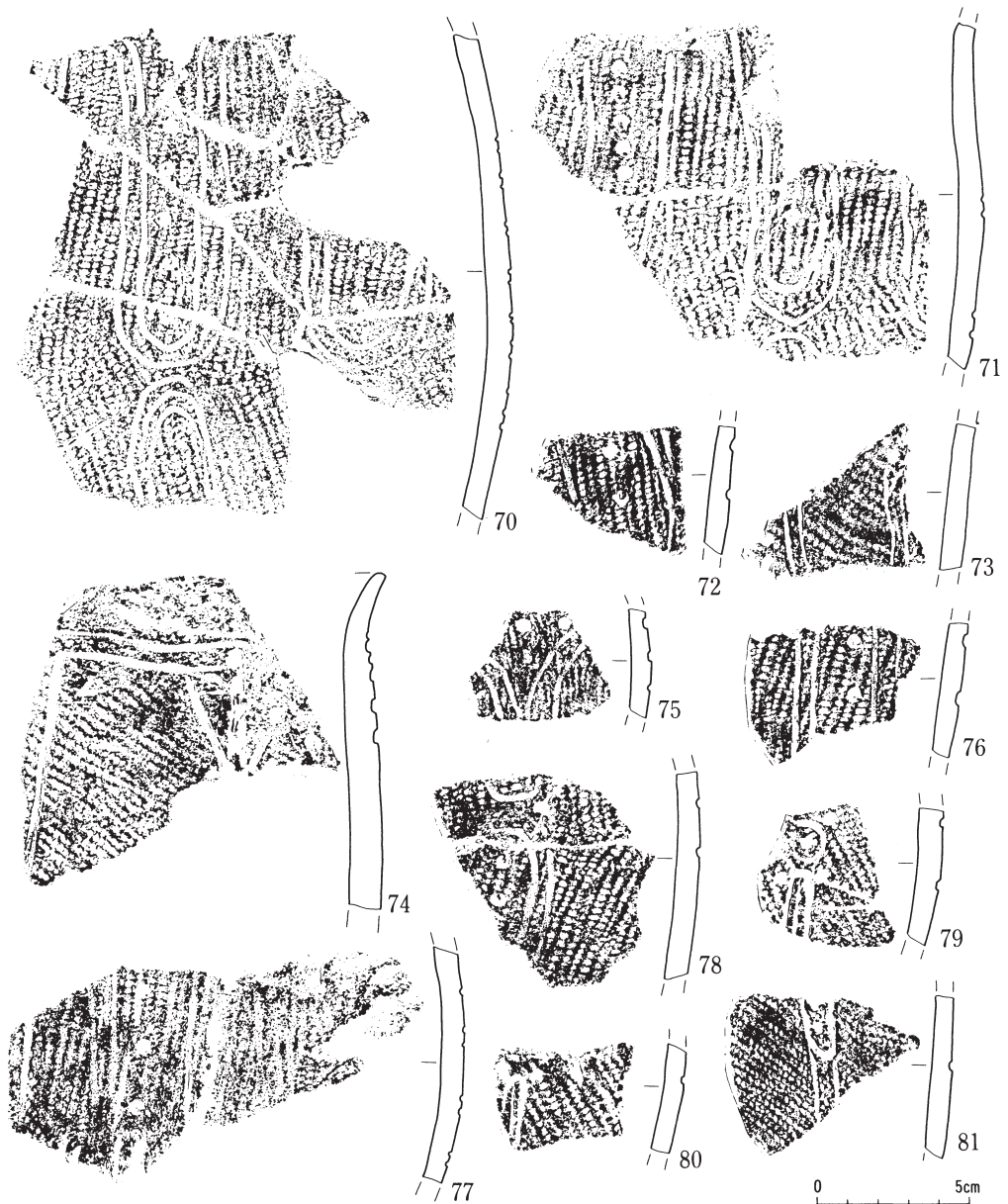
第35図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(5)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(6)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
55	I-20	I層	口縁部	地文縄文(RL)、ボタン状突起、横位弧状(粘土紐)		II群3類
56	(-9	"	口頸部	縄文(LR)、胸骨状(粘土紐)		"
57	-10	"	胴部	"	"	"
58	O-9	"	口頸部	地文縄文(LR)、横位(粘土紐)		"
59	T-20	"	口縁部	平口縁、円形刺突、縦位(沈線)		II群8類
60	I-20	"	"	横位連続(刺突)、縄文(RL)		"
61	G-18	"	"	"	"	"
62	F-52	"	"	折り返し口縁、刺突、縄文(RL)		"
63	G-19	"	口頸部	地文縄文(RL)、逆U字文(沈線)		"
64	H-21	"	胴部	地文縄文(RL)、逆U字・U字連結文、円形刺突		"
65	F-52	"	"	"	"	"
66	I-17	"	"	"	"	"
67	G-19	"	口頸部	円形刺突、逆U字文(沈線)		"
68	E-53	"	胴部	地文縄文(RL)、刺突、U字・逆U字連結文		"
69	I-17	"	"	地文縄文(RL)、縦位(沈線)、円形刺突		"

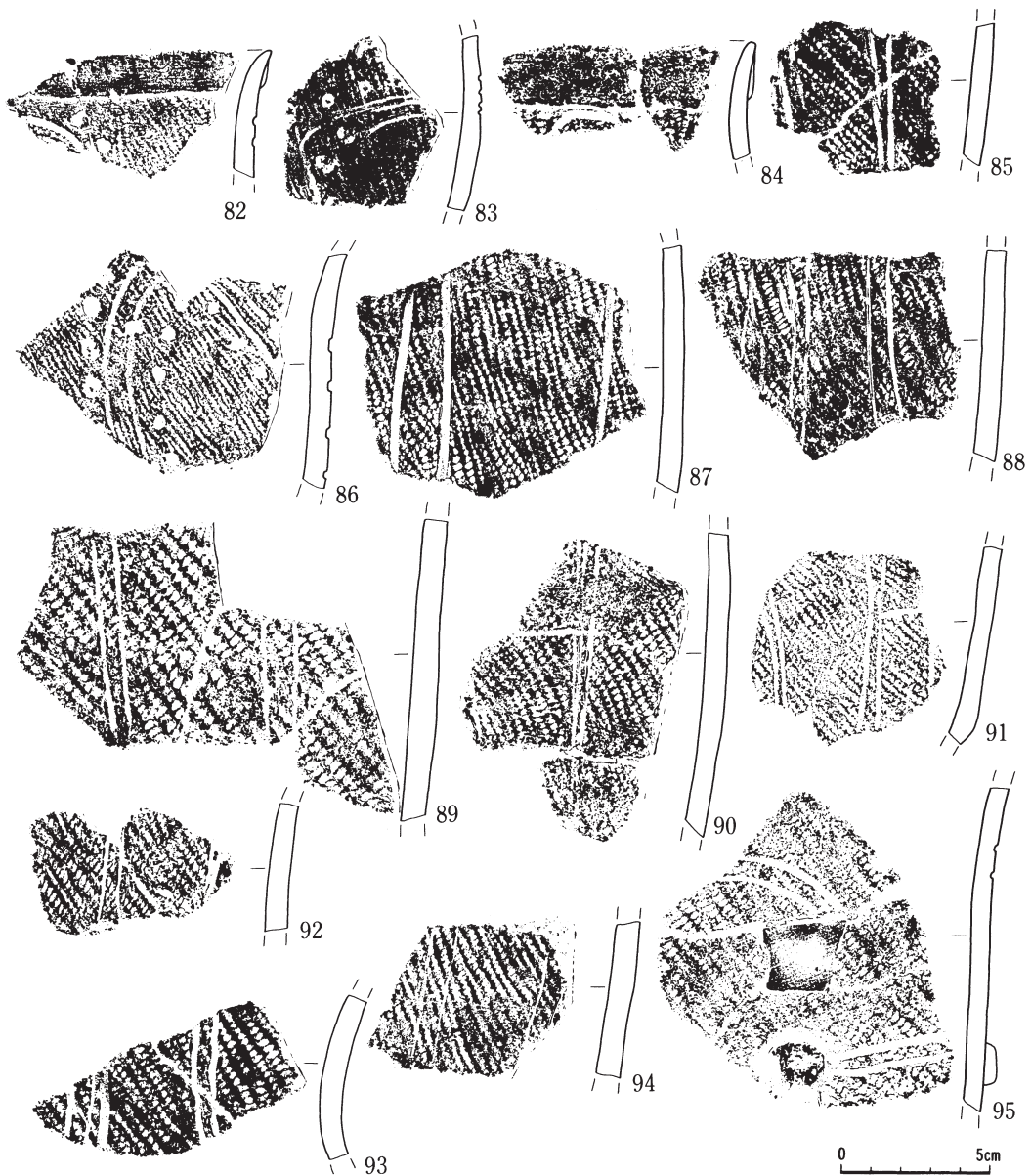
第36図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(6)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(7)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
70	F-52 I層	胴部	地文縄文 (RL)、U字・逆U字連結文、刺突			Ⅱ群8類
71	T-54 "	"	"	"	"	"
72	F-52 "	"	"	縦位弧状文、刺突		"
73	E-53 "	"	地文縄文 (RL)、縦位 (沈線)、刺突			"
74	I-27 "	口縁部	"	V字状文様	"	"
75	H-20 "	胴部	"	縦位弧状文様、刺突		"
76	F-52 "	"	"	縦位 (沈線)、刺突		"
77	"	"	"	"	"	"
78	"	"	"	逆U字状文様	"	"
79	E-53 "	"	"	逆U字・円形文様、刺突		"
80	"	"	地文縄文 (LR)、逆U字文、刺突			"
81	G-18 "	"	地文縄文 (RL)、	"	"	"

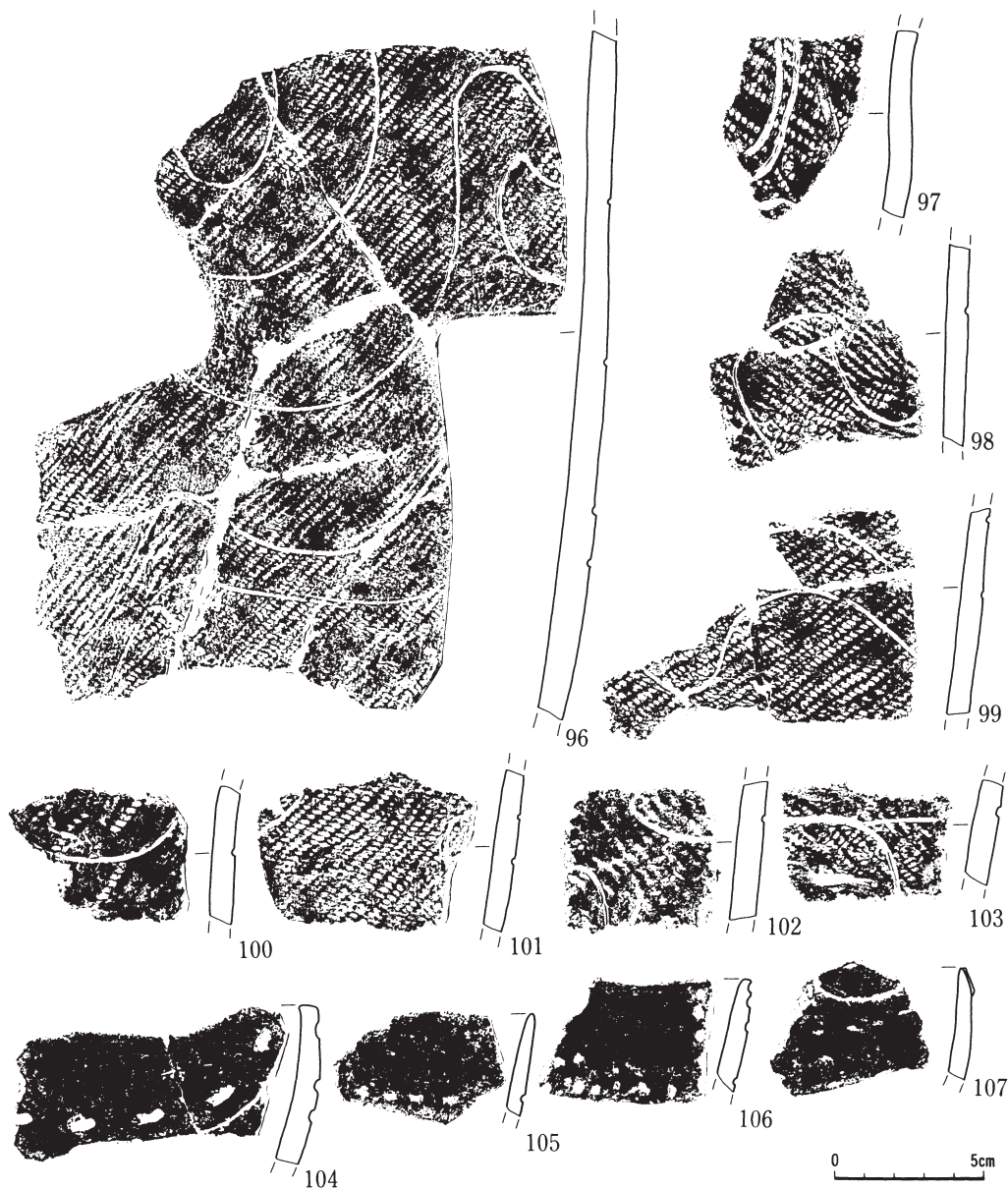
第37図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(7)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(8)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
82	H-18 I層	口縁部	折り返し口縁、地文縄文(RL)、逆U字文、刺突			II群8類
83	G-18 "	胴部	地文縄文(RL)、弧状(沈線)、刺突			"
84	F-52 "	口縁部	折り返し口縁、逆U字文、刺突			"
85	H-27 "	胴部	地文縄文(RL)、縦位(沈線)			"
86	H-18 "	"	"	逆U字文、刺突		"
87	G-19 "	"	"	縦位(沈線)		"
88	F-52 "	"	"	"		"
89	F-53 "	"	"	"		"
90	E-53 "	"	"	"		"
91	G-20 "	"	"	"		"
92	F-52 "	"	"	"		"
93	"	"	"	地文縄文(LR)		"
94	"	"	"	地文縄文(RL)		"
95	"	"	"	ボタン状突起、横位・弧状(沈線)		II群8・9類

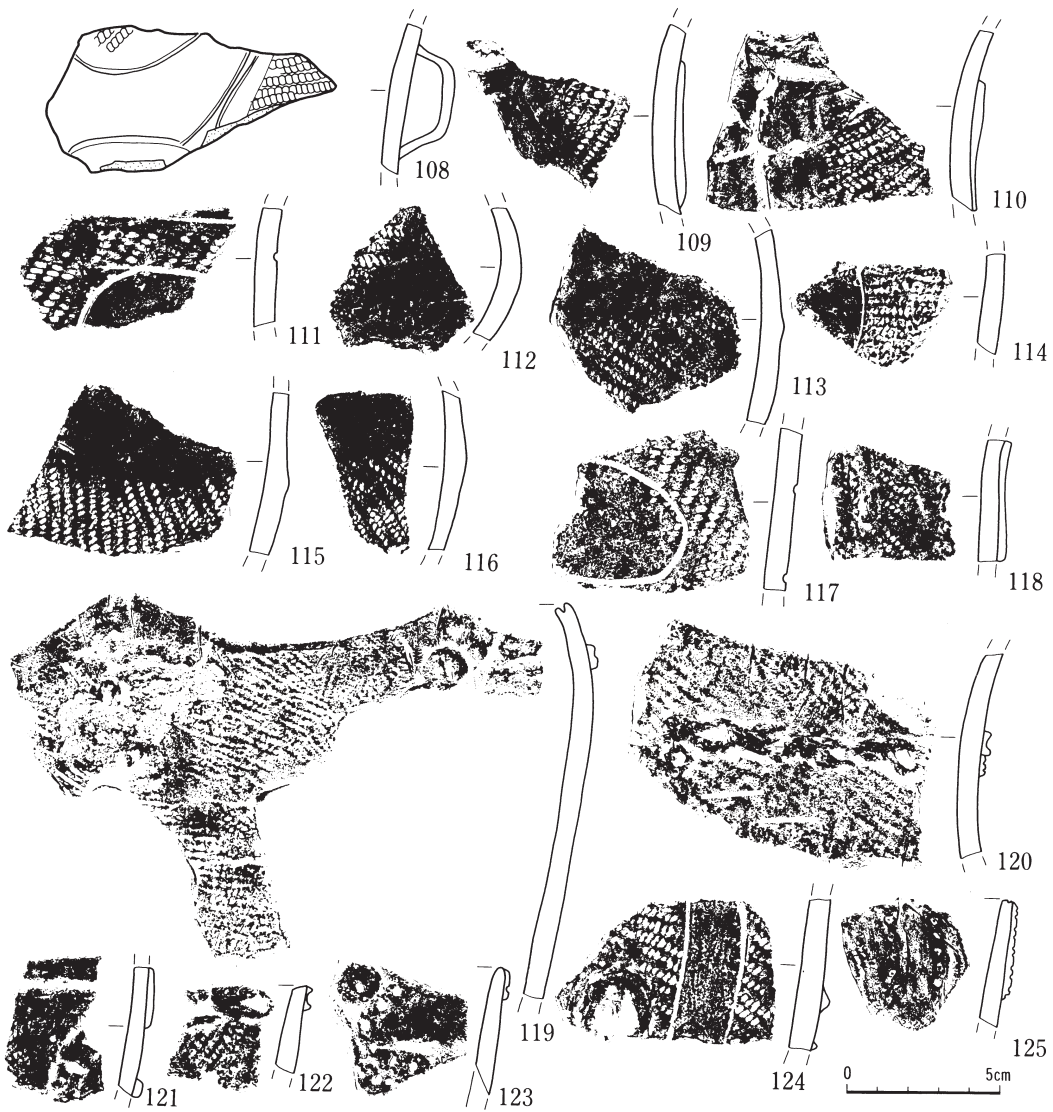
第38図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(8)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(9)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
96	H-27 I層	胴 部	地文縄文 (RL)、J字状文・波頭状文 (沈線)			II群9類
97	F-53 "	口頸部	" "	縦位弧状文 (沈線)		"
98	H-20 "	胴 部	地文縄文 (LR)、J字状文 (沈線)			"
99	" "	"	地文縄文 (RL)、曲線文様 (沈線)			"
100	" "	"	" "	横位弧状		"
101	" "	"	" "	" "		"
102	J-27 "	"	" (RL)	" "		"
103	I-22 "	"	" (LR)	" "		"
104	H-18 "	口縁部	波状口縁、連続刺突			"
105	I-23 "	"	横位連続 (刺突)			"
106	H-23 "	"	波状口縁、縦位・横位 (刺突)			"
107	G-18 "	"	折り返し口縁			"

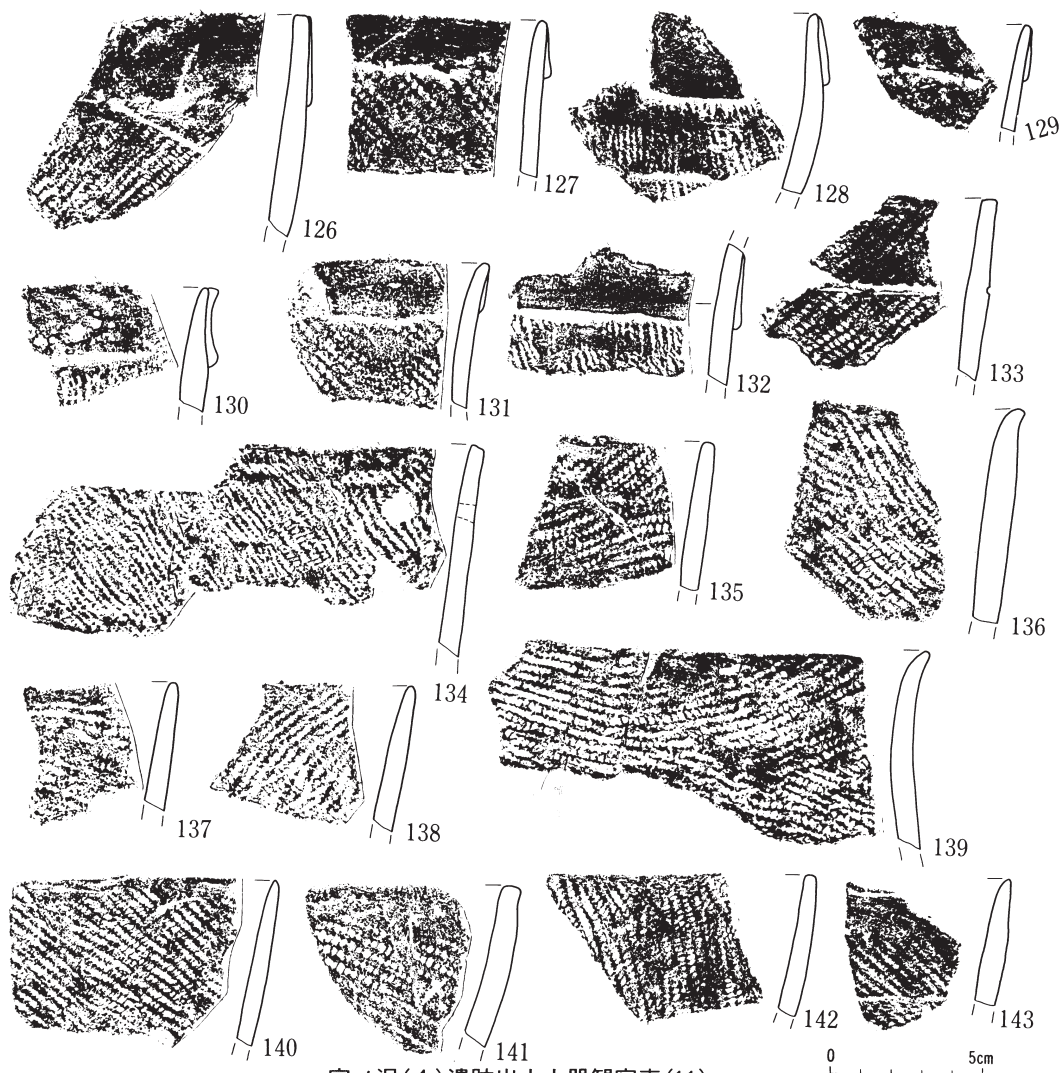
第39図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(9)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(10)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
108	H-27 I層	口頸部	橋状把手、縄文 (RL)、磨消縄文			Ⅱ群 9類
109	" "	"	縄文 (RL)、縦位 (隆起帯)			"
110	" "	"	縄文 (LR)、横・縦位 (隆起帯)			"
111	J-22 "	胴部	縄文 (RL)、曲線文様、充填技法			"
112	H-27 "	"	" " 弧状 (隆起帯)			"
113	" "	口頸部	" " 横位 (隆起帯)			"
114	H-20 "	胴部	" (LR)、磨消縄文			"
115	I-27 "	口頸部	" (RL)、横位 (隆起帯)			"
116	H-27 "	"	" " " "			"
117	H-20 "	胴部	" " 曲線文、充填技法			"
118	H-18 "	口頸部	縄文 (RL)、縦位 (粘土紐)			"
119	G-19 "	口縁部	波状口縁、ボタン状突起、短沈線、縄文 (RL)			"
120	I-22 "	"	地文縄文 (RL)、横位粘土紐、上面に刺突			"
121	I-20 "	口頸部	" (LR)、横・弧状粘土紐、上面に刺突			Ⅲ群 1類
122	H-21 "	口縁部	" " 横位粘土紐 (上面に刺突)			"
123	H-23 "	"	波状口縁、鱗状隆起帯 (上面に刺突)			"
124	I-24 "	胴部	ボタン状突起 (凹み)、縄文 (RL)			"
125	O-9 "	口縁部	縦位 (隆起帯)、上面に円形刺突			"

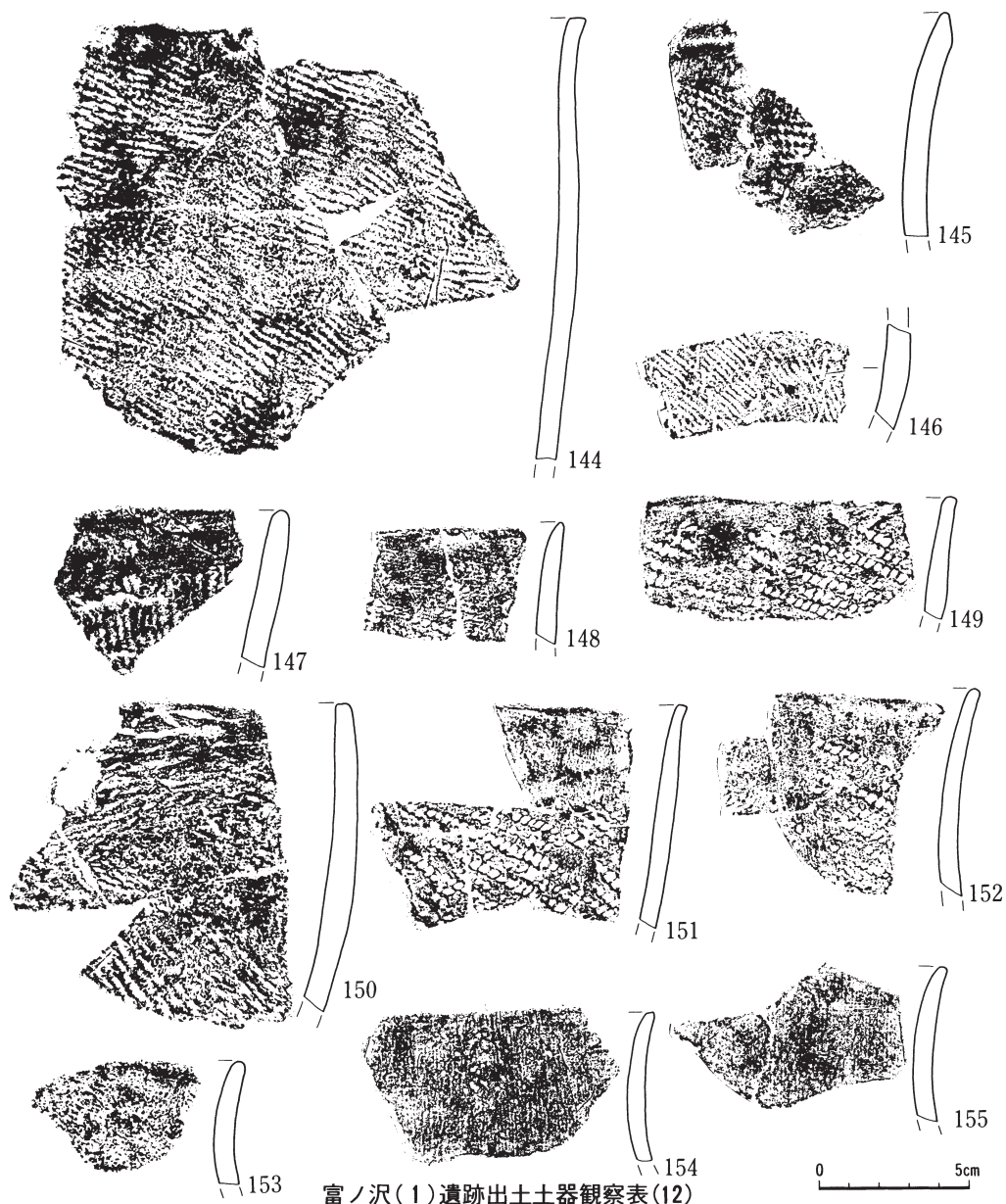
第40図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(10)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(11)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
126	G-21 I層	口縁部	折り返し口縁、	縄文 (RL)	スス状炭付	Ⅲ群2類
127	F-52 "	"	"	"	"	"
128	E-53 "	"	"	縄文 (LR)	"	"
129	" "	"	"	"	"	"
130	H-18 "	"	"	縄文 (LR)	"	"
131	E-53 "	"	"	縄文 (RL)	スス状炭付	"
132	" "	"	"	縄文 (LR)	"	"
133	G-19 "	"	平 口 縁	"	スス状炭付	"
134	G-20 "	"	"	補修孔	"	"
135	I-24 "	"	"	"	"	"
136	H-17 "	"	"	"	"	"
137	G-19 "	"	"	"	"	"
138	G-22 "	"	"	"	"	"
139	H-17 "	"	"	"	"	"
140	H-23 "	"	"	縄文 (RL)	"	"
141	F-52 "	"	"	"	"	"
142	G-54 "	"	"	"	"	"
143	F-52 "	"	"	縄文 (LR)	"	"

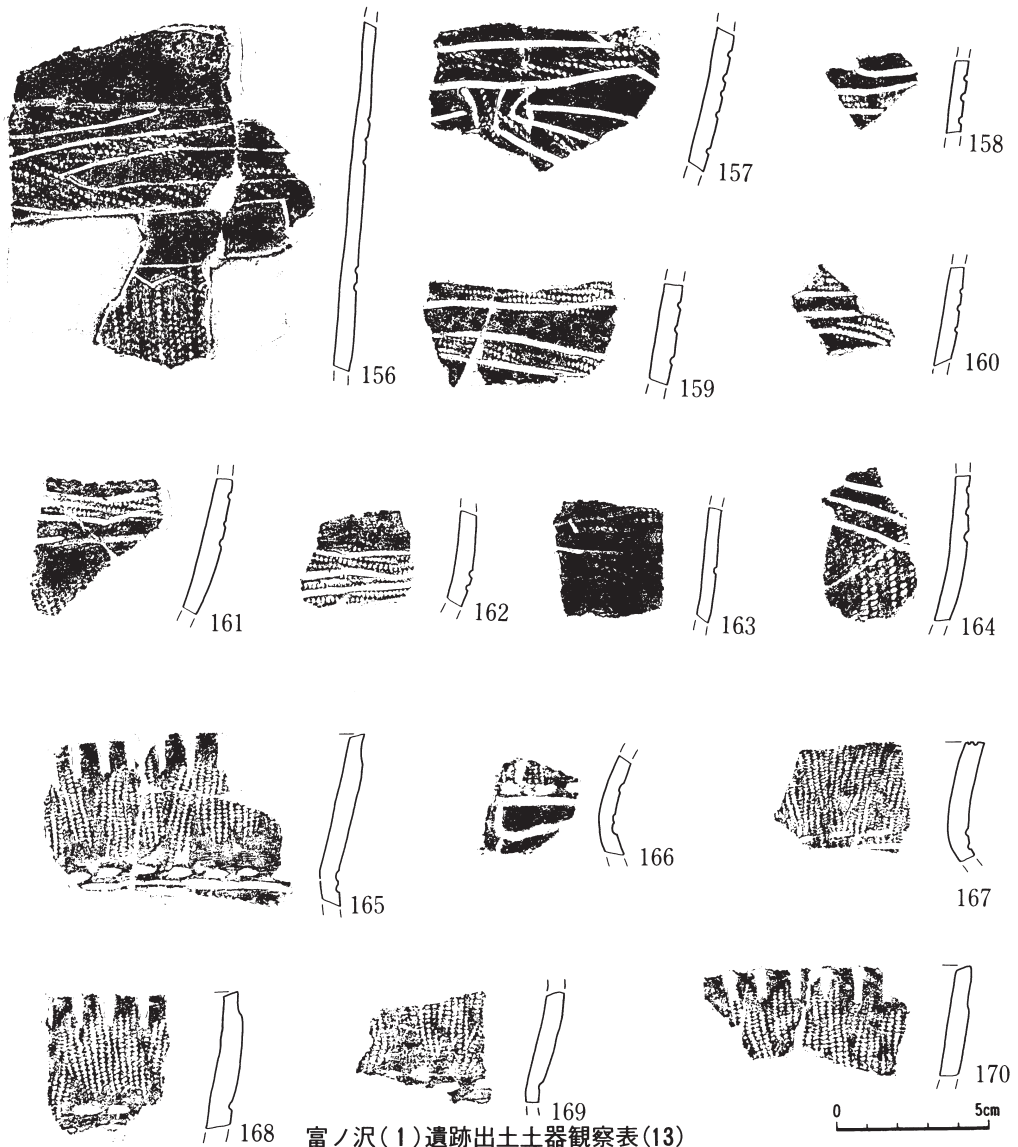
第41図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(11)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(12)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
144	H-18 I層	口縁部	地文縄文 (RL)、波状口縁		スス状炭付	Ⅲ群2類
145	O-9 "	"	"	口端に捺糸圧痕	"	"
146	G-22 "	胴部	地文縄文 (LR)、縦位撚絡文			"
147	H-17 "	口縁部	平口縁、縄文 (RL)、		スス状炭付	"
148	I-23 "	"	"	"	"	"
149	I-27 "	"	"	"	"	"
150	H-20 "	"	"	捺糸文、	スス状炭付	"
151	I-23 "	"	平口縁、縄文 (RL)			"
152	"	"	"	"	スス状炭付	"
153	G-19 I層	"	無文			"
154	"	"	"	平口縁、	スス状炭付着	"
155	"	"	"	波状口縁、	"	"

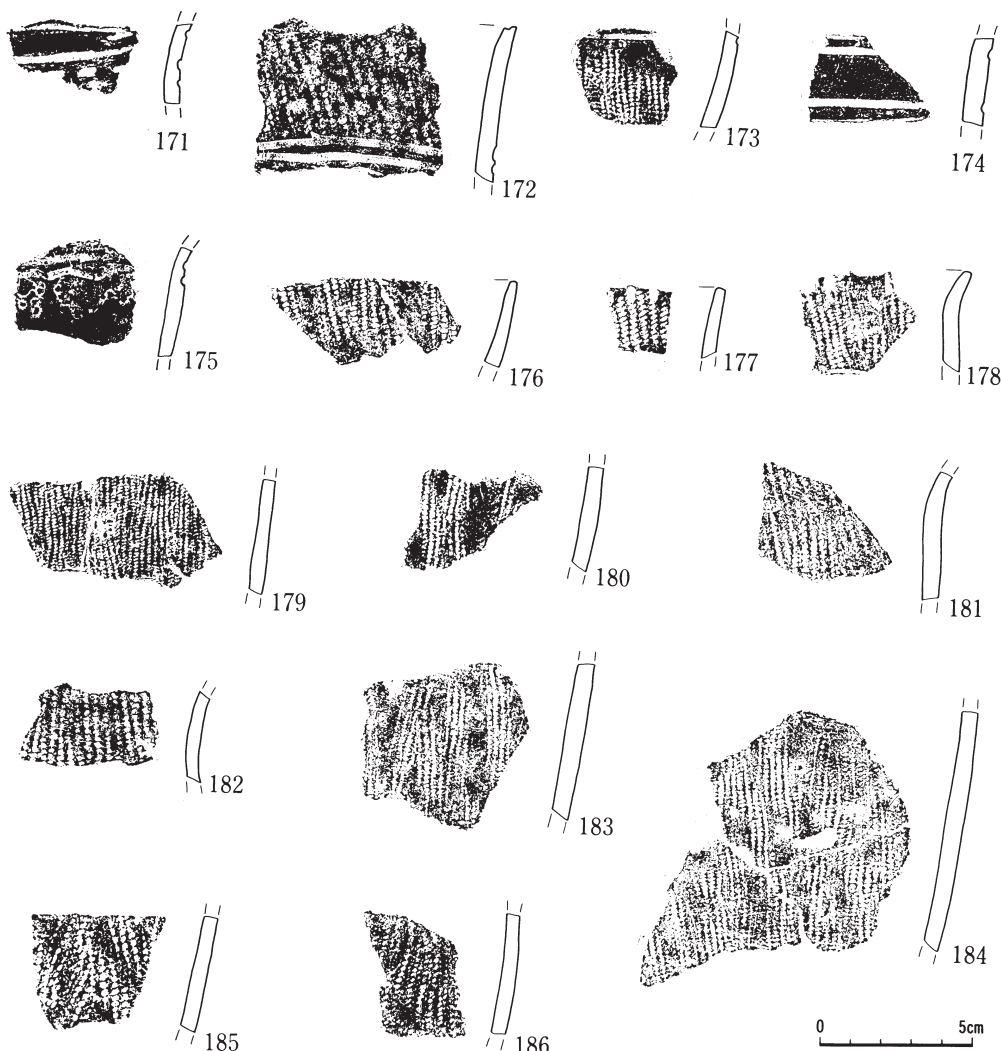
第42図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(12)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(13)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文	文 様	分 類
156	H-42 I層	胴 部	沈線+磨消縄文+連続山形文+RL縄文	スス状炭附着	Ⅳ群 a 種
157	I-36 "	"	沈線+磨消縄文		"
158	G-48 "	頸 部	"		"
159	" "	"	"	スス状炭附着	"
160	" "	"	"		"
161	" "	胴 部	沈線+磨消縄文+RL縄文		"
162	" "	頸 部	沈線+磨消縄文		"
163	H-42 "	胴 部	沈線+磨消縄文	スス状炭附着	"
164	G-46 "	"	沈線+磨消縄文+RL縄文		"
165	G-48 "	口縁部	刻目+RL縄文+刺突文+沈線、口唇部に縄文		Ⅳ群 b 種
166	" "	頸 部	RL縄文+刺突文+沈線	スス状炭附着	"
167	G-44 "	口縁部	RL縄文+刺突文、口唇部に沈線		"
168	G-48 "	"	刻目+RL縄文+刺突文、口唇部に縄文		"
169	" "	頸 部	RL縄文+刺突文	スス状炭附着	"
170	" "	口縁部	刻目+RL縄文		Ⅳ群 d 種

第43図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(13)



富ノ沢(1)遺跡出土土器観察表(14)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
171	G-48 I層	頸部	沈線+刺突文		スス状炭附着	N群b種
172	H-42 "	口縁部	RL縄文+平行沈線		口縁にB字状突起	N群c種
173	G-48 "	胴部	沈線+RL縄文			"
174	G-46 "	頸部	沈線			"
175	I-42 "	"	沈線+連続山形文		スス状炭附着	"
176	F-49 "	口縁部	RL縄文、口唇部に縄文		スス状炭附着	N群d種
177	F-54 "	"	刻目+RL縄文		口唇部に縄文	"
178	G-48 "	"	RL縄文		口唇部に刻目	"
179	H-45 "	胴部	"			"
180	G-46 "	"	带状縄文 (RL)			"
181	G-48 "	頸部	RL縄文			"
182	I-42 "	"	"			"
183	G-46 "	胴部	带状縄文 (RL)			"
184	G-48 "	"	RL縄文			"
185	I-42 "	"	带状縄文 (RL)			"
186	"	"	RL縄文			"

第44図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土土器(14)

(2) 石器

富ノ沢1遺跡より出土した石器は合計27点である。その内訳は、不定形石器17点、磨製石斧1点、敲磨器類8点、石皿・台石類1点である。石器の分布状況は、土壌の比較的多く検出された東側に集中する傾向がみられた。また、その出土層位は大部分が第層である。

F類 不定形石器(第45図、第46図、第47図13~17)

不整な剥片石器を「不定形石器」として取り扱い、次のように類に細分した。

類 連続した調整が加えられたもの(1~3)

類 刃部をもたないもの及び連続の極浅形調整がみられるもの(4~10・12・14・15・17)

類 調整が加えられずに使用痕のみられるもの(11・13・16)

F類 3点の出土である。1は、表面側縁部に若干の調整、裏面側縁部に丁寧な連続の細面細部調整が施されている。3は比較的大ざっぱな調整である。

F類 9点の出土である。このうち、定形的な刃部をもたないもの6点、連続の細面細部調整がみられるもの5点である。

F類 3点の出土である。11は、表面の一部分に剥離面が観察され、一側縁がノッチ状を呈する。F類の石質は、珪質頁岩12点、チャート4点、玉髄質の珪質頁岩1点である。

G類 石斧(第47図 18)

1点の出土である。基部を残存している。主面と側面の区別が明瞭で、いわゆる定角式磨製石斧に属すると思われる。頭頂部には敲打による剥離痕が観察される。石質は緑色凝灰岩である。

I類 敲磨器類(第48図、第49図 25・26)

8点の出土である。使用痕跡によって次のように分類した。

I類 主要痕跡が磨(擦)痕のもの(19~22)

I類 主要痕跡が敲打痕のもの(23・24・26)

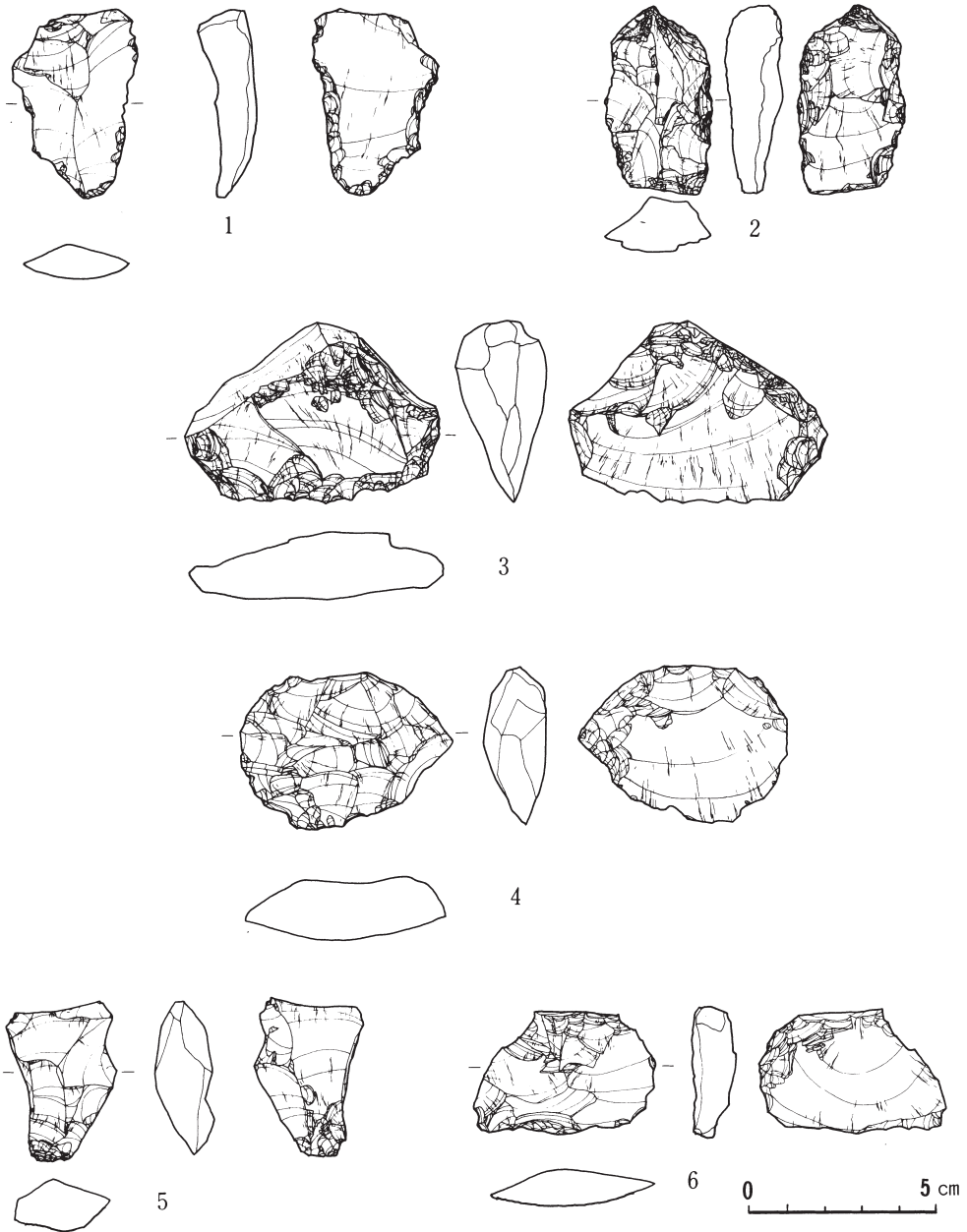
I類 主要痕跡がくぼみのもの(富ノ沢2遺跡A・B地区で出土)

I類 磨(擦)痕と敲打痕を共有するもの(25)

類4点、類3点、類1点である。形態は卵形あるいは楕円形を呈するものが全般的に多い。21は器体両側面を使用しているが、磨耗が著しく、使用頻度の高いものと思われる。25は、表裏両面に敲打痕が観察されるが、敲打の度合いが高いためにくぼみに近い状態である。石質は、安山岩5点、閃緑岩2点、緑色凝灰岩1点、砂岩1点である。

L類 石皿・台石類(第49図 27)

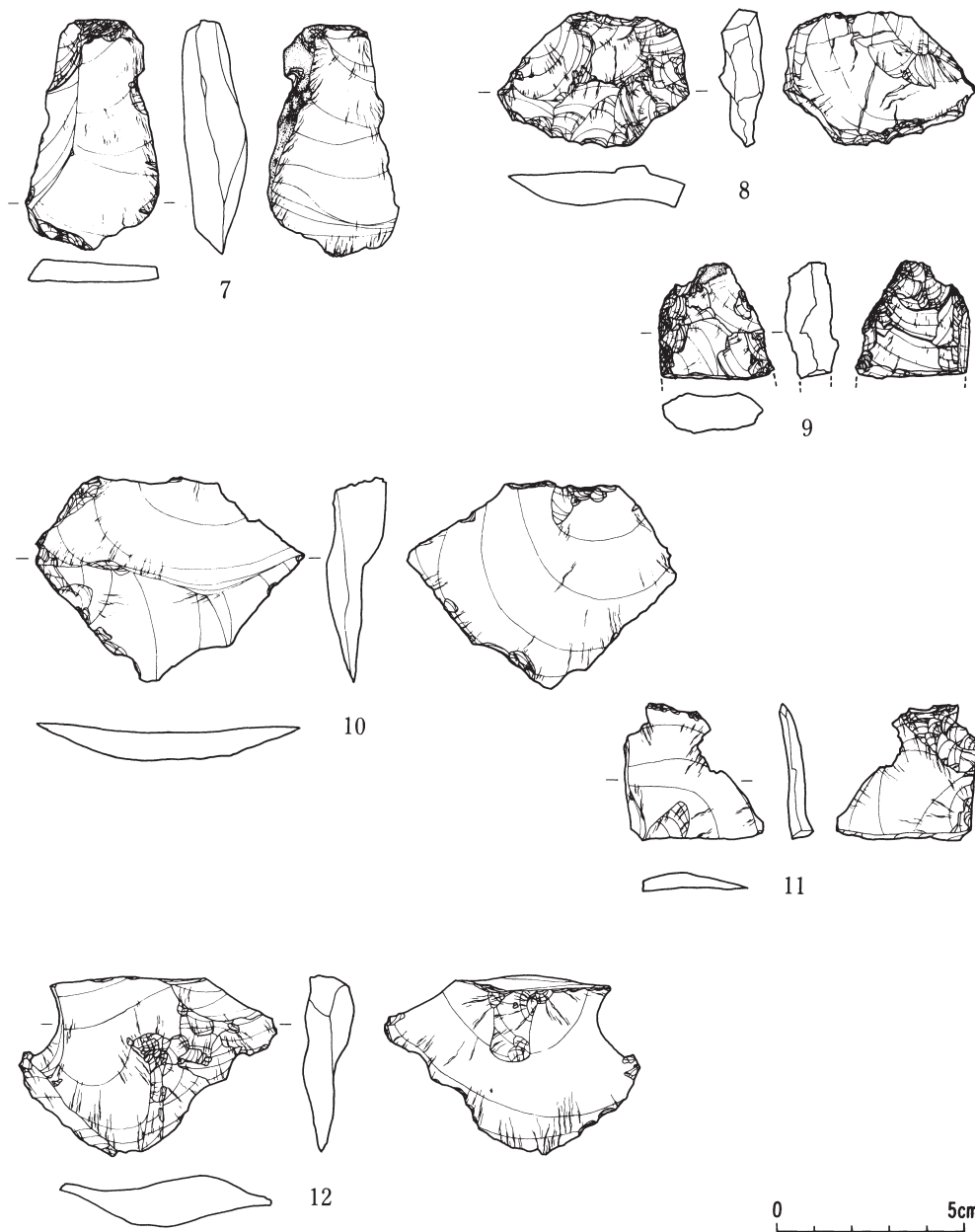
1点出土した。欠損品である。自然礫の平坦面を利用している。器面はつやつやと滑らかであるが、敲打痕のみられる面はザラザラしている。石質は安山岩である。(奈良昌毅)



富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第45図-1	O-9	I	50	32	13	17.6	珪	F	16	
"-2	G-19	"	52	29	15	22.5	チャ	"	2	
"-3	I-22	"	57	38	13	63.3	"	"	147	
"-4	"	"	57	42	18	36.2	珪	"	7	
"-5	I-23	"	45	32	15	13.4	"	"	10	
"-6	I-22	"	50	34	11	17.7	"	"	9	

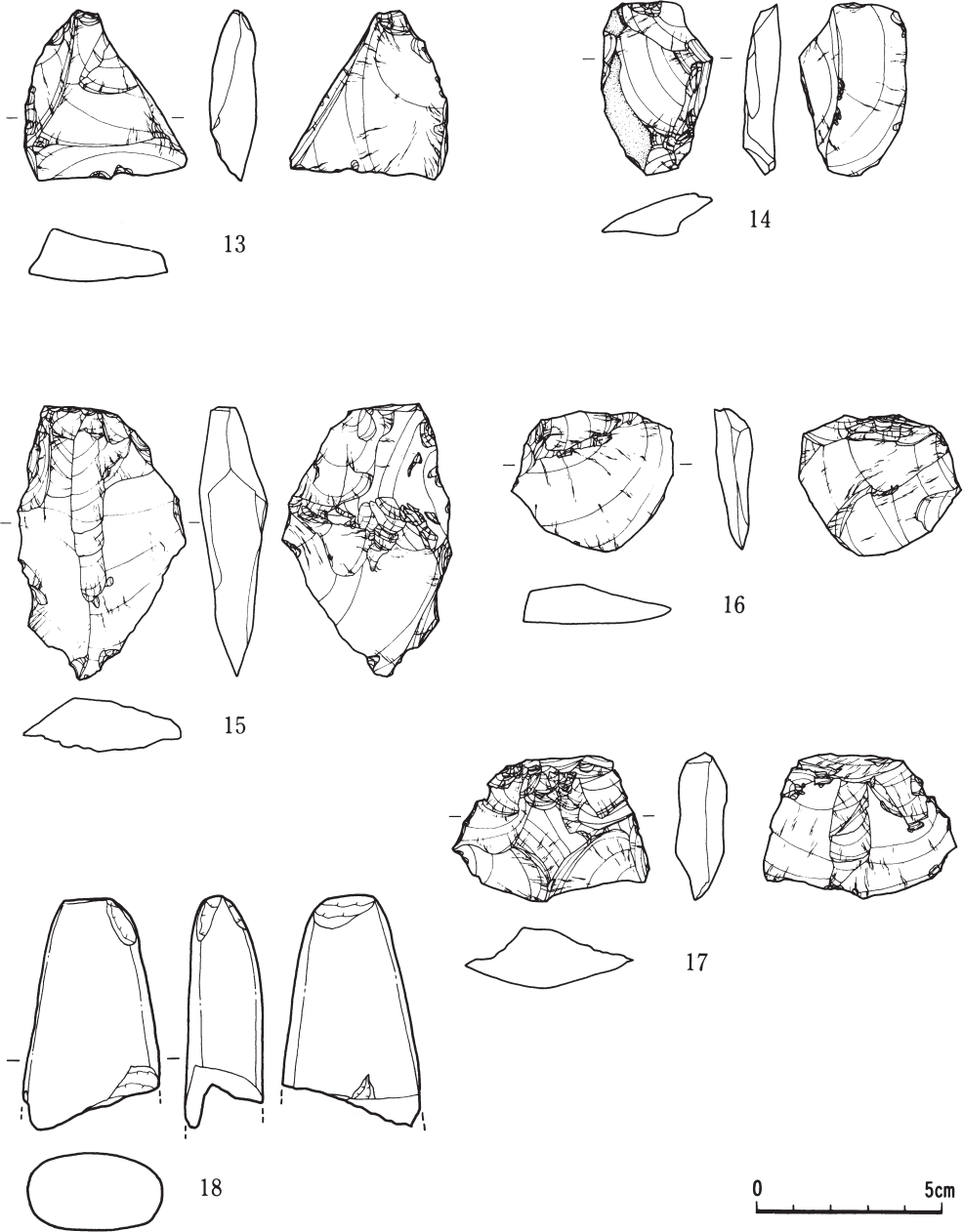
第45図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(1)



富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第46図-7	I-23	I	61	36	11	23.5	珪	F	11	
〃-8	I-24	VIII a	51	38	10	17.9	チャ	〃	14	
〃-9	O-9	I	(31)	30	12	(11.6)	玉珪	〃	15	欠損
〃-10	I-22	〃	71	55	10	29.6	珪	〃	6	
〃-11	E-53	〃	37	35	6	6.2	チャ	〃	1	
〃-12	G-22	〃	62	48	13	21.3	珪	〃	3	

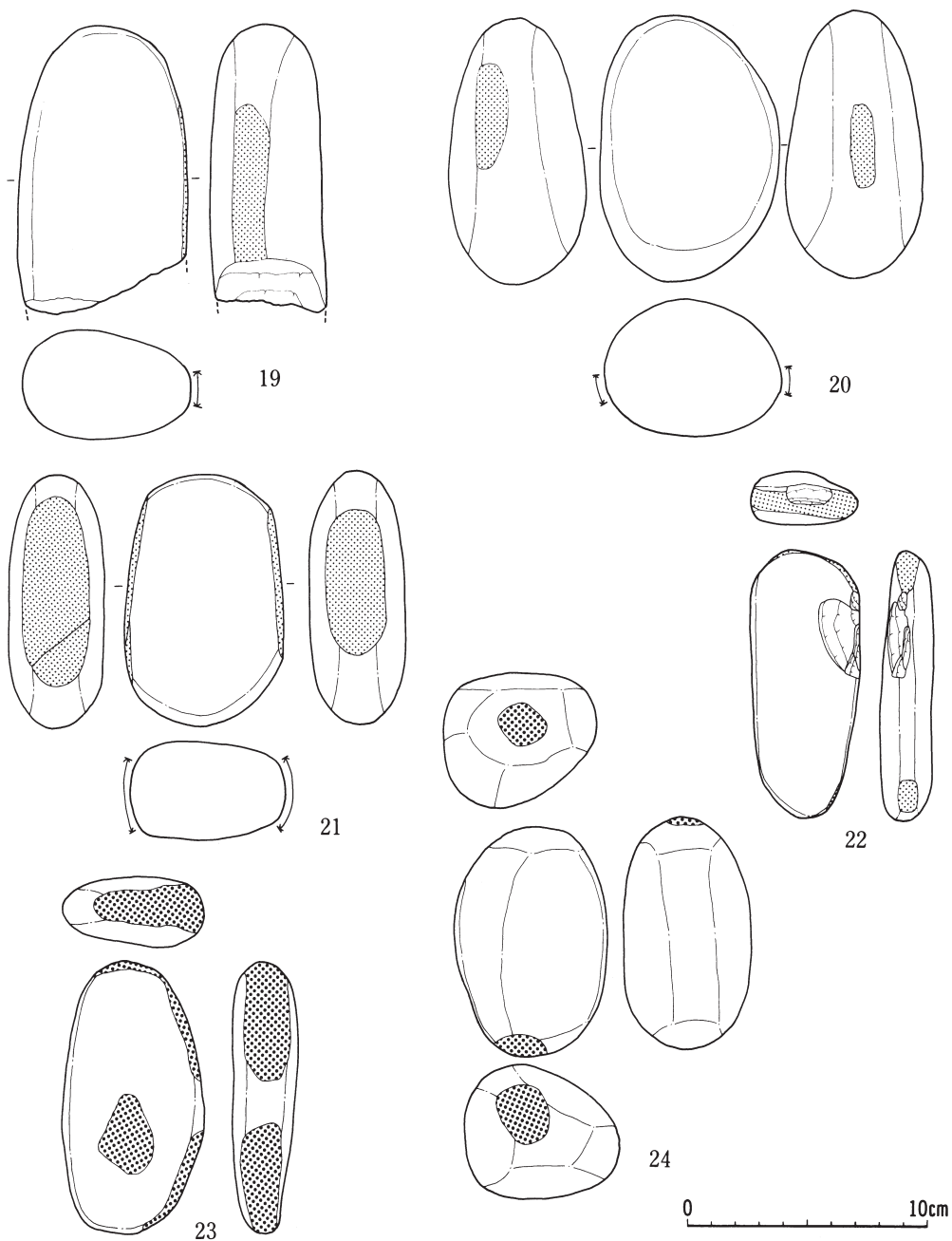
第46図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(2)



富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第47図-13	I-22	I	51	38	13	19.2	珪	F	5	
"-14	"	"	46	30	9	10.7	"	"	4	
"-15	I-24	VIII a	74	45	17	42.4	"	"	12	
"-16	"	"	45	39	10	14.5	"	"	13	
"-17	I-22	I	53	39	16	23.7	"	"	8	
"-18	K-13	"	(59)	36	20	(60)	綠礫	G	201	基部欠損

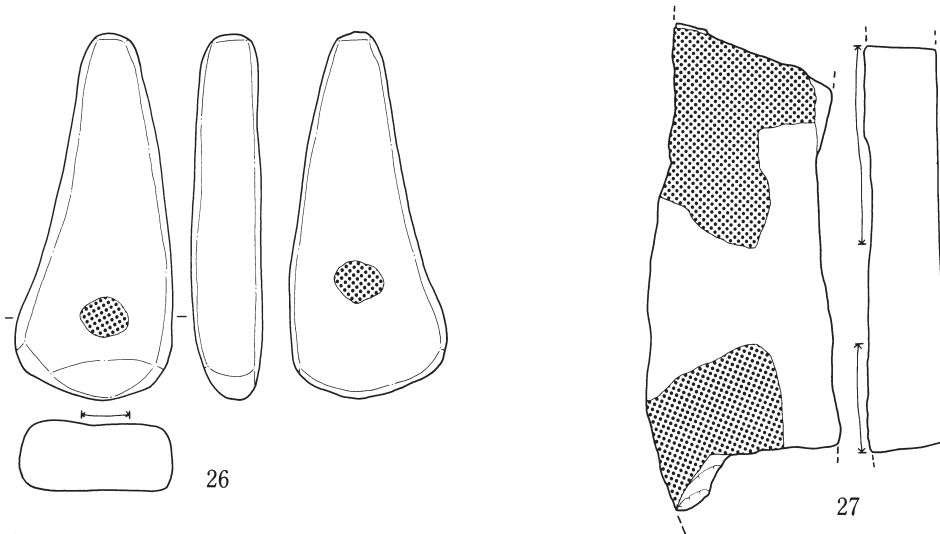
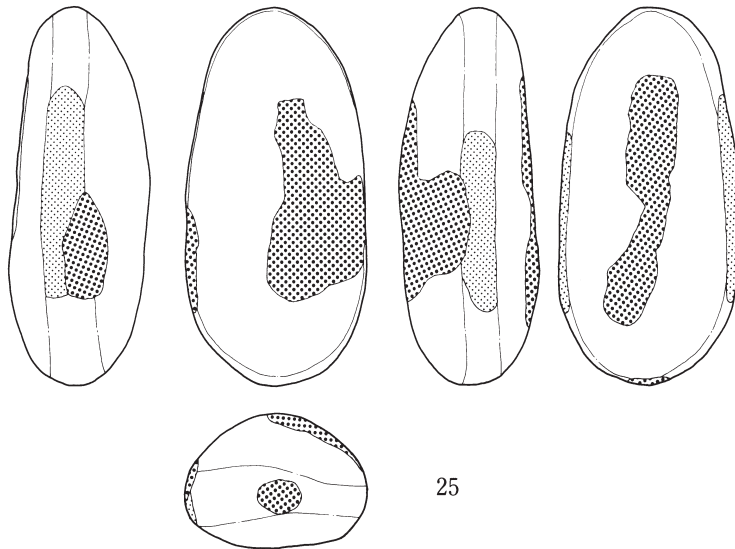
第47図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(3)



富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第48図-19	I-22	I	(120)	70	46	(575)	安	I	209	スリ1面、欠損
"-20	G-19	"	110	74	58	690	閃	"	203	スリ2面
"-21	H-27	"	104	66	40	475	安	"	207	"
"-22	G-17	"	112	46	21	180	砂	"	202	"
"-23	H-17	"	115	59	27	256	安	"	205	タタキ3面
"-24	I-27	"	96	64	54	493	閃	"	210	タタキ2面

第48図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(4)

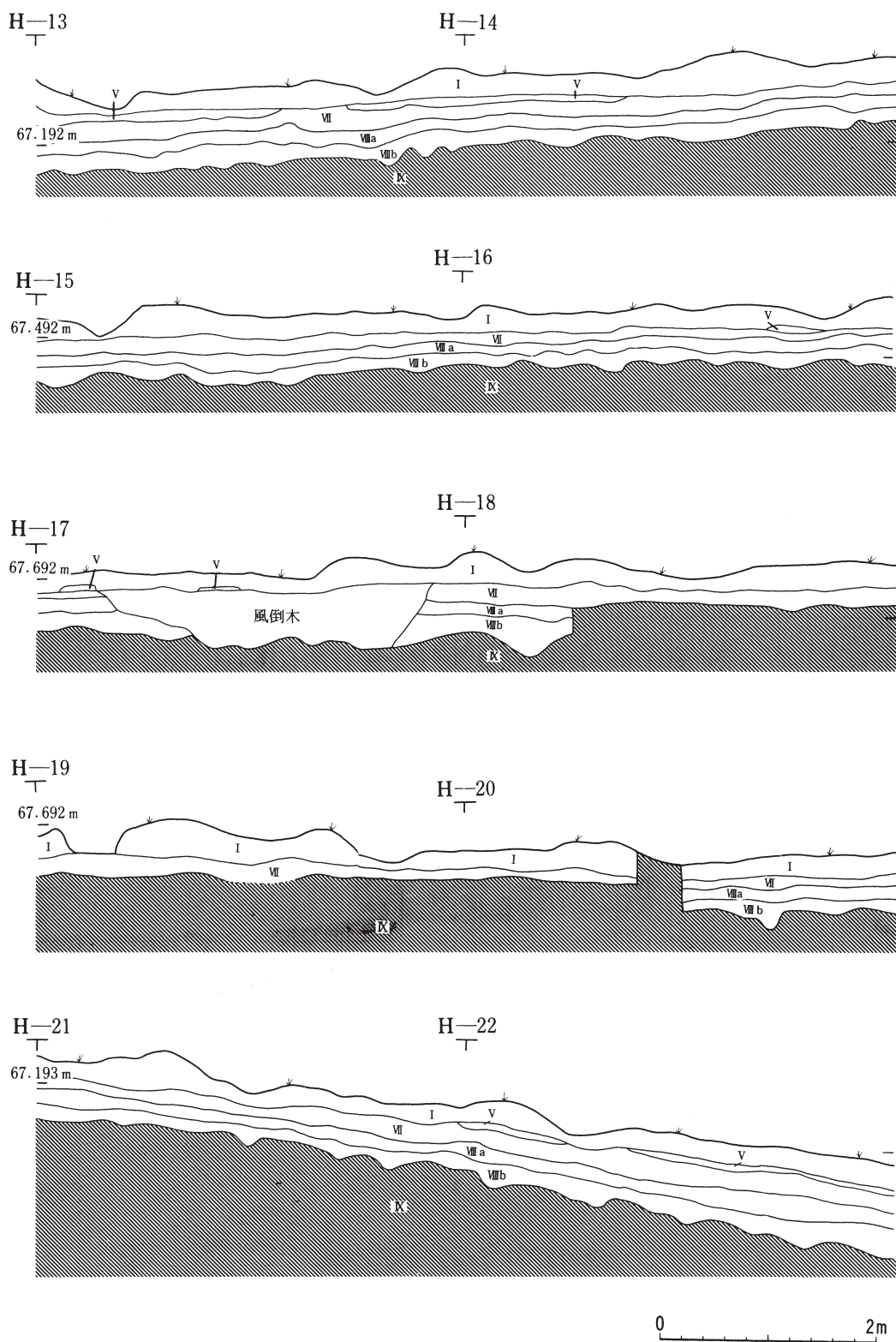


富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(5)

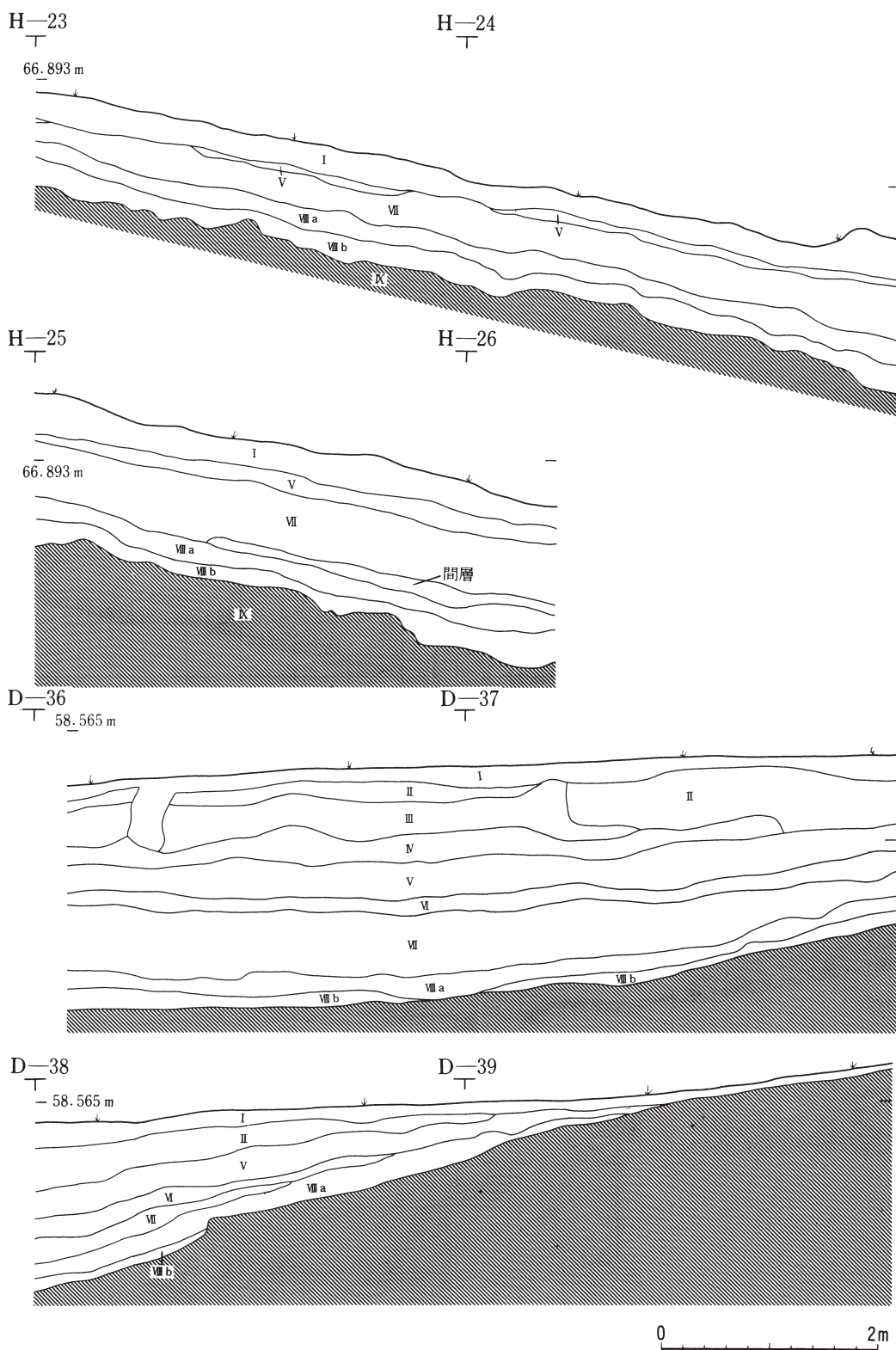
図版	出土点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第49図-25	H-27	I	149	72	52	732	安	I	208	スリ1面、タタキ3面
〃 -26	H-17	〃	146	64	24	353	〃	〃	204	タタキ1面
〃 -27	H-23	〃	(192)	(75)	30	(754)	〃	L	206	欠損

第49図 富ノ沢(1)遺跡遺構外出土石器(5)

富ノ沢(2)遺跡A地区



第50図 富ノ沢(2)遺跡A地区基本層序(1)



第51図 富ノ沢(2)遺跡A地区基本層序(2)

第2節 富ノ沢(2)遺跡A地区の検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構と遺構内出土遺物

本地区で検出された遺構は、竪穴住居跡 5 軒・土壇27基・焼土状遺構 1 基・屋外炉 1 基・埋設土器 1 基を検出した。

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡(第52～61図)

位置と確認 本調査区西側の台地平坦面で、G・H 11・12グリッドに位置している。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 壁・床ともに遺存状態が良好で、重複がないため、プランの全容を把握できた。平面形は、南側に丸みのある隅丸方形に近い形状を呈する。規模は、長径 4 m92cm・短径 4 m14cm、床面積は15.04m²である。

壁 第 a・b層を壁面とし、各壁ともにほぼ垂直に立ち上がっている。北・東壁は堅緻な構築ではあるが、西・南壁は比較的もろい構築である。壁高は、東壁58cm・西壁46cm・南壁34cm・北壁36cmである。

床面 第 b層を掘り込んで床面としている。起伏が少なく全般的に平坦である。炉及び付属施設の周辺はかたくしまっているが、壁寄りには軟らかく軟弱な構築である。ちなみに付属施設周辺には小さい凹凸が多数できており、長期間にわたり、しかも使用頻度が高いものと思われる。

壁溝 北壁の一部と付属施設の存在する南壁を除き、幅10～24cm・深さ 4～18cmの壁溝が壁直下をほぼ一巡する。本住居跡の長軸方向の北壁際の一部に壁溝が検出されなかったことから、出入口に使用された可能性もある。

柱穴 本住居跡内から 7 個のピットが検出された。このうち、主軸線に対称な 4 個二対(P₁とP₄、P₂とP₃)が主柱穴である。P₅については付属施設の項目で述べる。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	54×44	34	2	楕円形	40×32	62	3	円形	42×42	80
4	楕円形	38×32	74	5	円形	46×44	144	6	楕円形	28×18	12
7	楕円形	16×12	14								

炉 炉は 2 基検出され、いずれも地床炉である。第 1 号炉は住居跡の中央部に位置しており、第 2 号炉は中央から北側寄りに位置している。第 1 号炉は、平面形が円形に近い形状を呈し、規模は長径62cm・短径60cmである。断面形は鍋底状を呈し、深さは 7 cmを測る。堆積層は 4 層に分層でき、第 2 層上面が火熱面と思われる。

第2号炉は、平面形が楕円形を呈し、規模は長径50cm・短径30cmである。断面形は鍋底状を呈し、深さは4cm、堆積層は3層に区分でき、第2層上面が火熱面と思われる。

炉内からはいずれも遺物は出土しなかった。

付属施設 住居跡南壁寄りにピット1基を検出した。ピット周辺は盛土となっており、その周辺の床面は非常にかたい。ピットの形態は円形で、その規模は開口部で長径47cm・短径44cm、底面で長径17cm・短径16cm・深さ1m50cmである。遺物は出土しておらず、用途等については不明である。土層観察から自然堆積と思われる。

さらに、住居跡南側床下より埋設土器遺構を1基検出した。土器は倒立の状態では埋設され、掘り方を有する。掘り方の平面形は楕円形を呈し、規模は開口部で長径27cm・短径23cm、底面で長径18cm・短径17cmである。埋設された土器は深鉢形土器で、第群4類土器に属する。土器内部からは何ら遺物は出土しなかった。

堆積土 6層に分層できた。第1～第3層には炭化物が包含される。土層断面の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 住居内の床面及び床面直上からは、第群3～6類に分類される土器片が77点石器類が43点出土した。このうち、復原できた土器が6個体で、床面3個体、床面直上が3個体である。床面及び床面直上からは第群3～6類の土器が、また、石器は石鏃、石槍、不定形石器、磨製石斧、敲磨器類が出土している。なお、炭火材が床面直上から出土している。

(高木・奈良)

第1号竪穴住居跡土層注記

第1層	黒色	10YR 2/1	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第2層	黒褐色	10YR 2.5/2	ローム粒を少量、炭化物・焼土粒を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第3層	黒褐色	10YR 2.5/3	炭化物を多量、ローム粒を微量に含む。しまり2層より弱く、粘性なし。
第4層	暗褐色	10YR 3/3	下部にローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第5層	褐色	10YR 4/3	ロームと暗褐色土混入。しまりあり、粘性ややあり。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	床面。ロームブロックを多量、褐色土を少量混入。しまりあり、粘性なし。

第1号竪穴住居跡炉土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/3	炭化物・焼土粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第2層	赤褐色	5YR 4/8	暗褐色土を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 4/8	2mmの焼土粒を少量含む。しまり・粘性あり。
第4層	褐色	10YR 4/4	ロームを少量、炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。

2号炉土層注記

第1層	黒褐色	10YR 2.5/2	1mm程度のローム粒を微量に含む。しまり・粘性なし。
第2層	赤褐色	5YR 4/8	黒褐色土を多量に、炭化物を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 4/6	黒褐色土及び焼土粒を微量に含む。しまり、粘性ともにあり。

埋設土器土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	5～10mm大のロームブロックを微量に含む。しまりややあり、粘性あり。
-----	----	----------	-------------------------------------

P₁土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を多量に、炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	ローム粒を少量含む。しまり1層より弱い。粘性なし。
第3層	褐色	10YR 3/4	ローム・炭化物を微量に含む。しまり2層と同じ、粘性なし。

P₂土層注記

第1層	褐色	10YR 4/6	混入物なし。しまり強く、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 4/4	ロームを多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/8	混入物なし。しまりあり、粘性なし。

P₃土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	1mmの炭化物を微量に、ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 4/6	ローム土を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 4/6	混入物なし。しまり2層より弱い。粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/8	混入物なし。しまりあり、粘性なし。

P₄土層注記

第1層	褐色	7.5YR 5/6	10mmの炭化粒を微量に、ロームブロック・ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/4	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	5mmの炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。

P₅(付属施設)土層注記

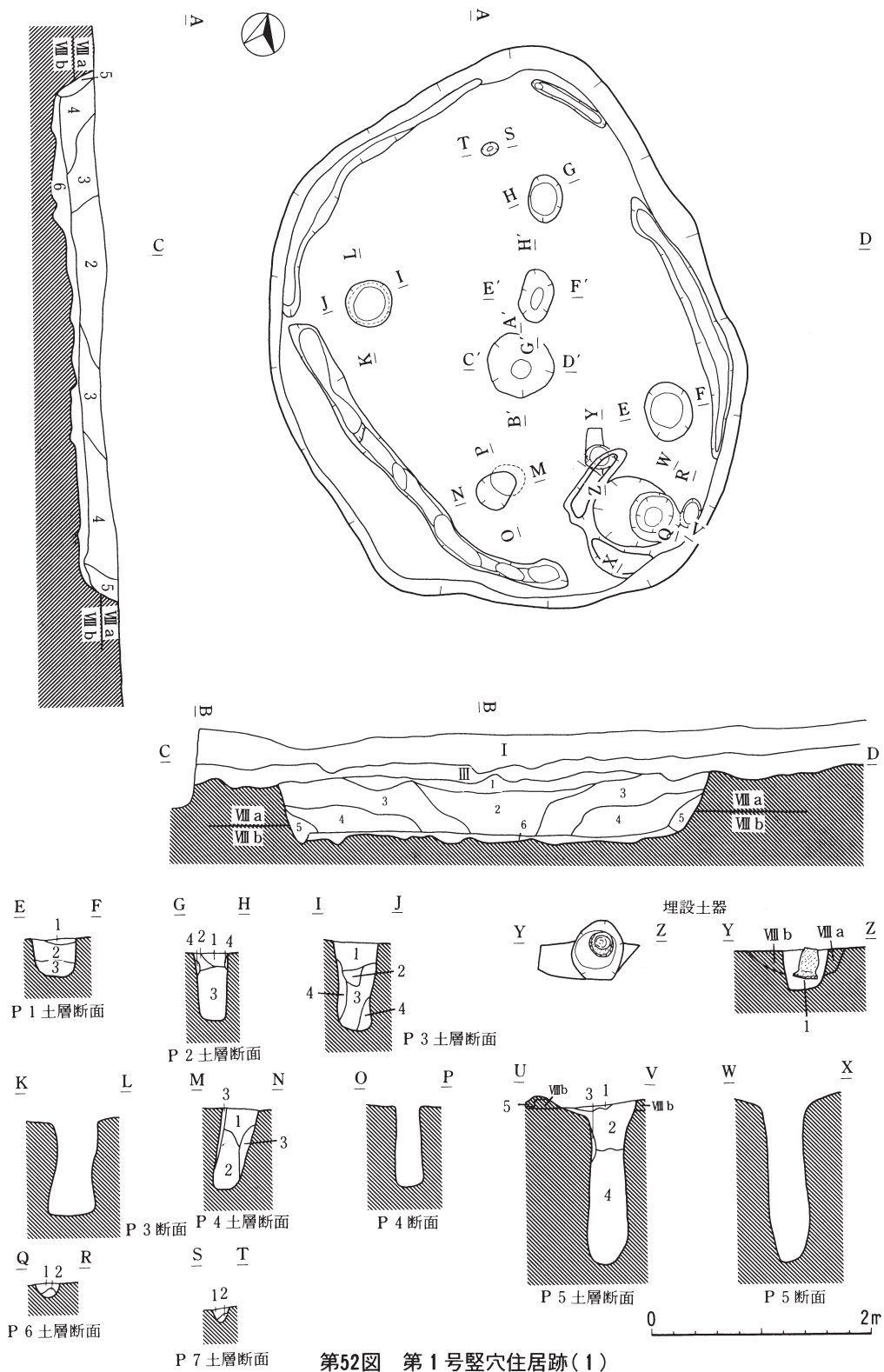
第1層	褐色	7.5YR 4/3	炭化物を微量に、ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	7.5YR 5/4	ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	しまりあり、粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/8	しまり3層より弱い。粘性なし。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	ロームブロックを多量に、褐色土を少量含む。しまりあり、粘性なし。

P₆土層注記

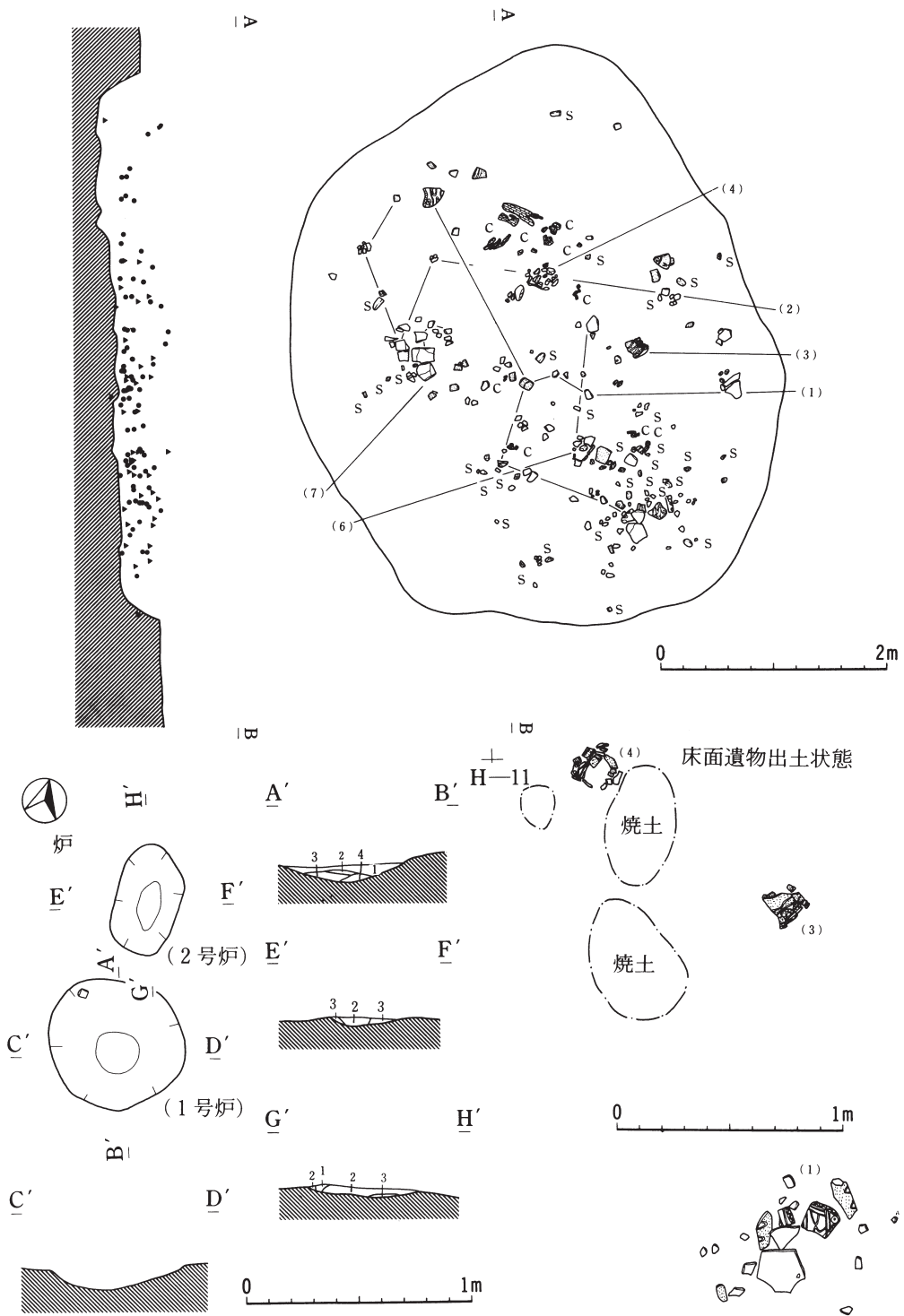
第1層	褐色	7.5YR 4/1	ローム多量。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 4/6	ローム多量。しまりあり、粘性なし。

P₇土層注記

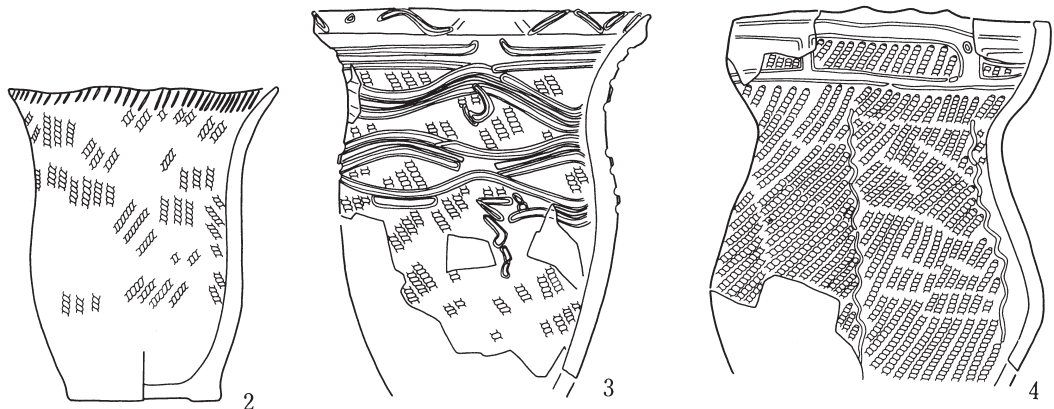
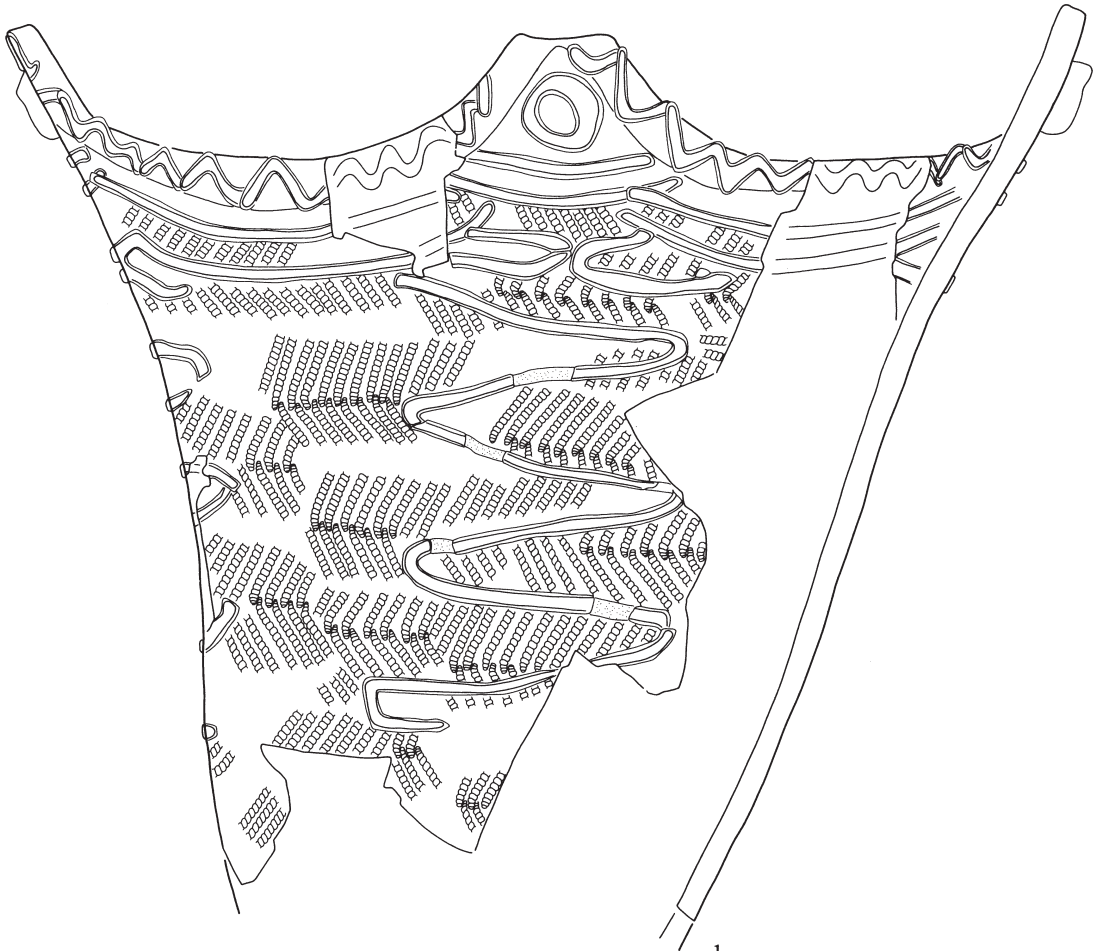
第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒少量。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/6	ローム粒少量。しまりあり、粘性なし。



第52図 第1号竪穴住居跡(1)



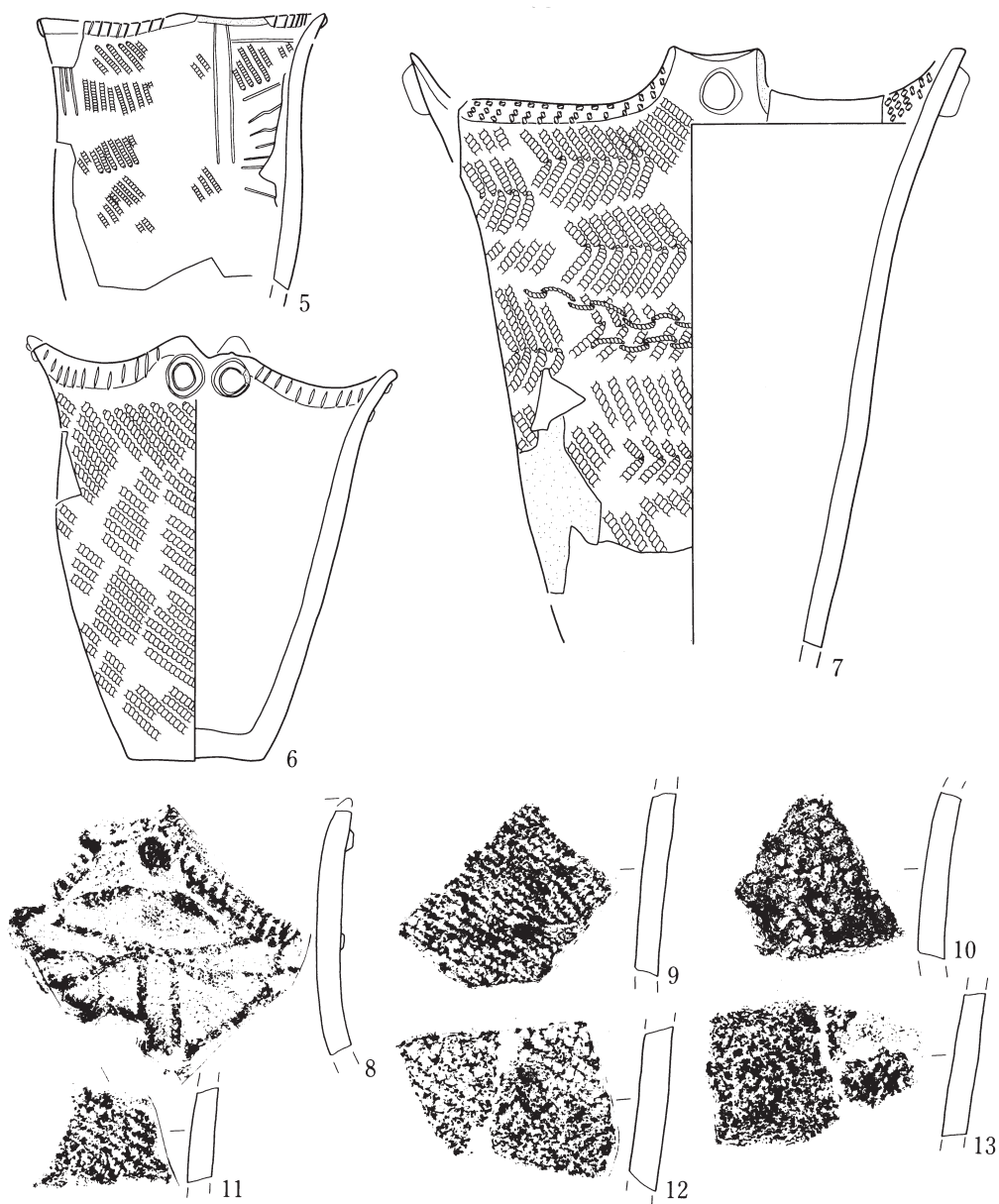
第53图 第1号竖穴住居跡(2)



第1号竖穴住居跡 土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
1	床	面	深 鉢	波状口縁、三本燃りのRとLの結束羽状縄文、縦位弧状粘土紐		II群3類
2	埋	設	鉢	口端に短沈線、縄文(LR)		II群4類
3	床	面	〃	口端に山形状(粘土紐)、縄文(LR)、口頸部に弧状渦巻(粘土紐)		II群3類
4	〃	〃	〃	縄文(RL)、円形刺突、縦位蛇行(沈線)、キャリパー形		II群6類

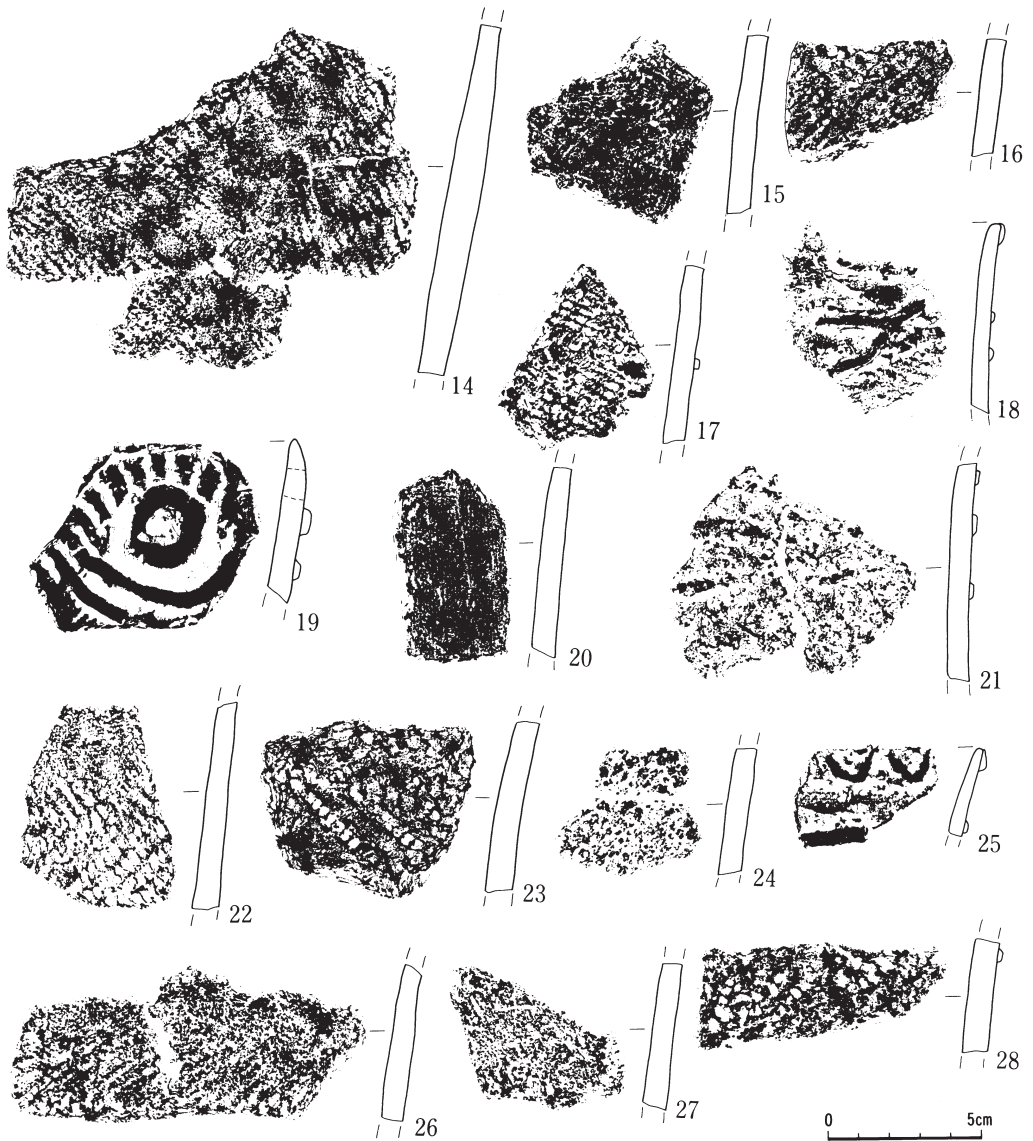
第54図 第1号竖穴住居跡出土遺物(1)



第1号竖穴住居跡 土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
5	床直	鉢	縄文(RL)、口端に短沈線、口頸部縦・横位(沈線)			II群4類
6	"	鉢	波状口縁、2個のボタン状突起、縄文(RL)			II群5類
7	"	深鉢	波状口縁、ボタン状突起、LRとRLの擦痕(口端部)、LRとRLの結束羽状縄文、Lの縦絡文			II群5類
8	1層	口縁部	波状口縁、ボタン状突起、弧状・縦位(粘土紐)			II群3類
9	2層	胴部	縄文(RL)		スス状炭付	II群5類
10	"	口頸部	"		"	"
11	"	胴部	"		"	"
12	3層	"	"		"	"
13	"	"	縄文		"	"

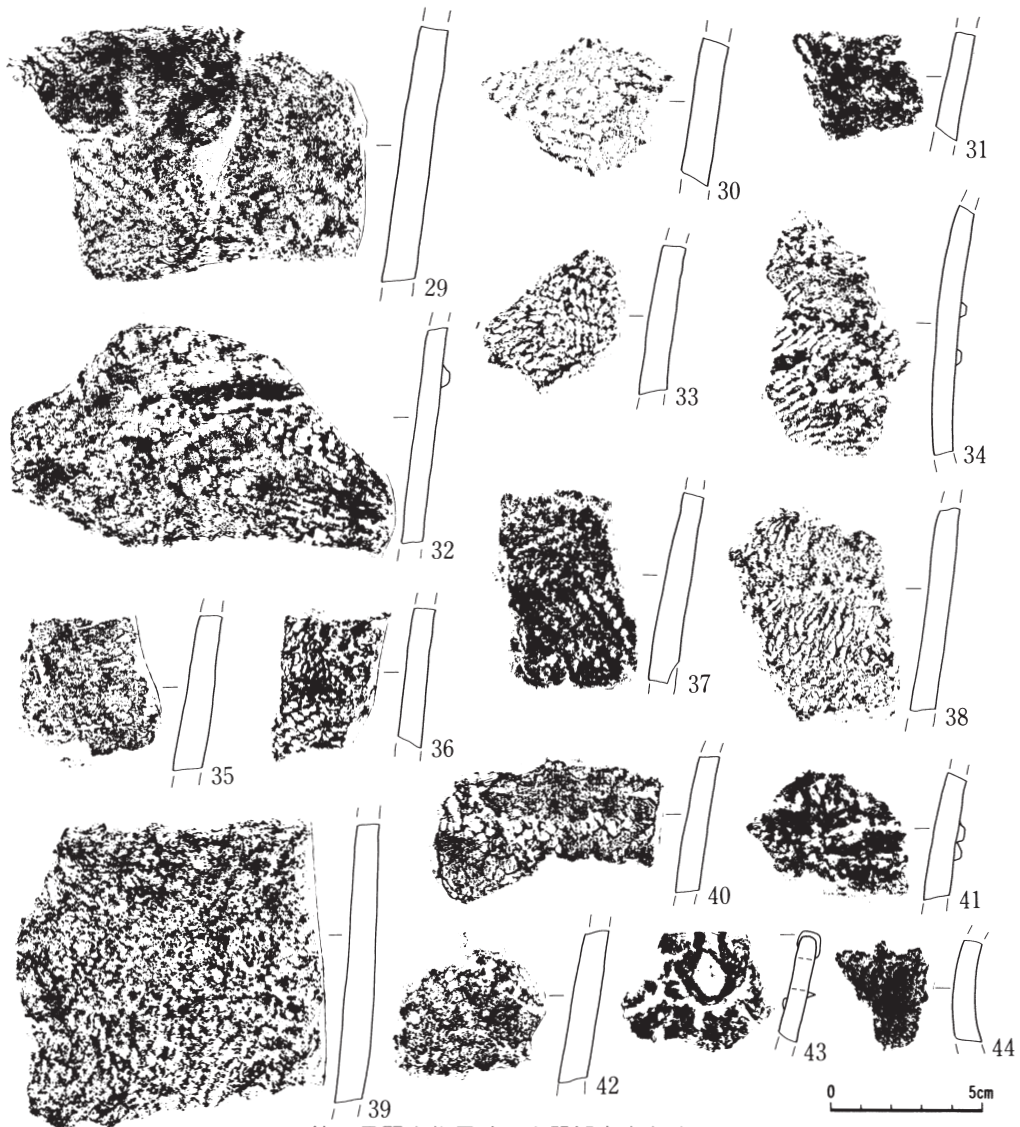
第55図 第1号竖穴住居跡出土遺物(2)



第1号竪穴住居跡 土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
14	2	胴部	縄文(RL)		スス状炭付	II群5類
15	"	"	無文		"	"
16	4	層	"	LRとRLの羽状縄文	"	"
17	"	"	"	横位(粘土紐)、縄文(LR)	"	II群3類
18	3	層	口縁部	波状口縁、横位弧状(粘土紐)、縄文(LR)	スス状炭付	"
19	"	"	"	波状口縁、突起部に貫通孔、弧状(粘土紐)、口端に燃糸圧痕	"	"
20	4	層	胴部	無文	"	II群5類
21	3	層	"	横・斜位(粘土紐)、縄文	スス状炭付	II群3類
22	床	直	"	LRとRLの結束羽状縄文	"	II群5類
23	"	"	"	"	"	"
24	4	層	"	縄文	"	"
25	"	口縁部	口端に山形状(粘土紐)、口頸部に横位(粘土紐)		"	II群3類
26	床	直	胴部	縄文(LR)		II群5類
27	"	"	"	縄文		"
28	"	"	"	縄文(LR)、横位(粘土紐)		II群3類

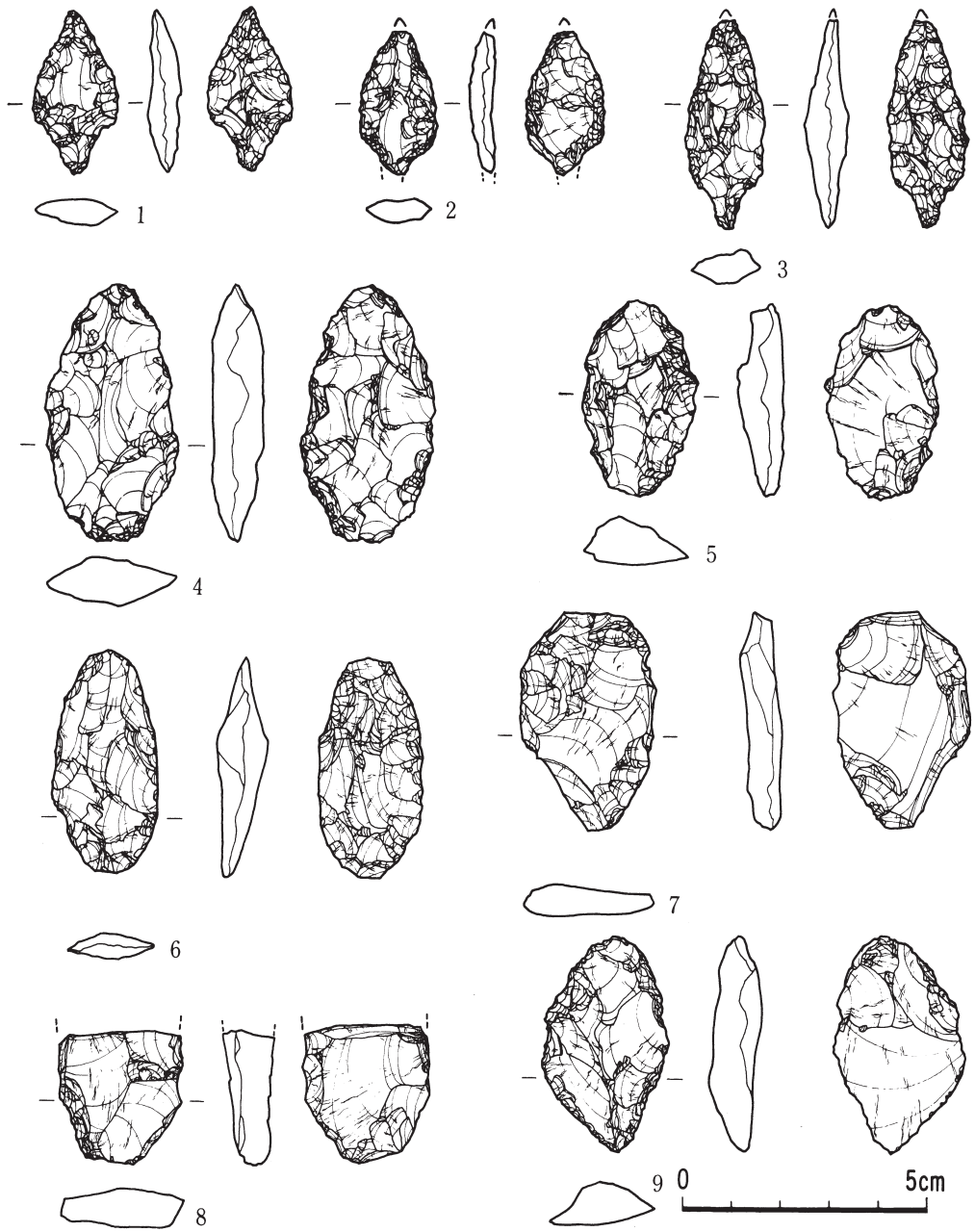
第56図 第1号竪穴住居跡出土遺物(3)



第1号竖穴住居跡 土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
29	4 層	胴部	LRとRLの結束羽状縄文		スス状炭付	II群5類
30	床	直	"			"
31	"	"	縄文			"
32	"	"	LRとRLの結束羽状縄文、横位(粘土紐)			II群3類
33	"	"	縄文		スス状炭付	II群5類
34	"	"	横・斜位(粘土紐)、縄文(LR)			II群3類
35	床	面	縄文(LR)			II群5類
36	"	"	"		スス状炭付	"
37	"	"	LRとRLの羽状縄文		"	"
38	"	"	縄文		"	"
39	"	"	無文		"	"
40	"	"	羽状縄文		"	"
41	"	"	横・弧状(粘土紐)、縄文(LR)			II群3類
42	"	"	縄文			II群5類
43	"	口縁部	波状口縁、口端に山形状(粘土紐)突起部に貫通孔			"
44	"	胴部	無文		スス状炭付	"

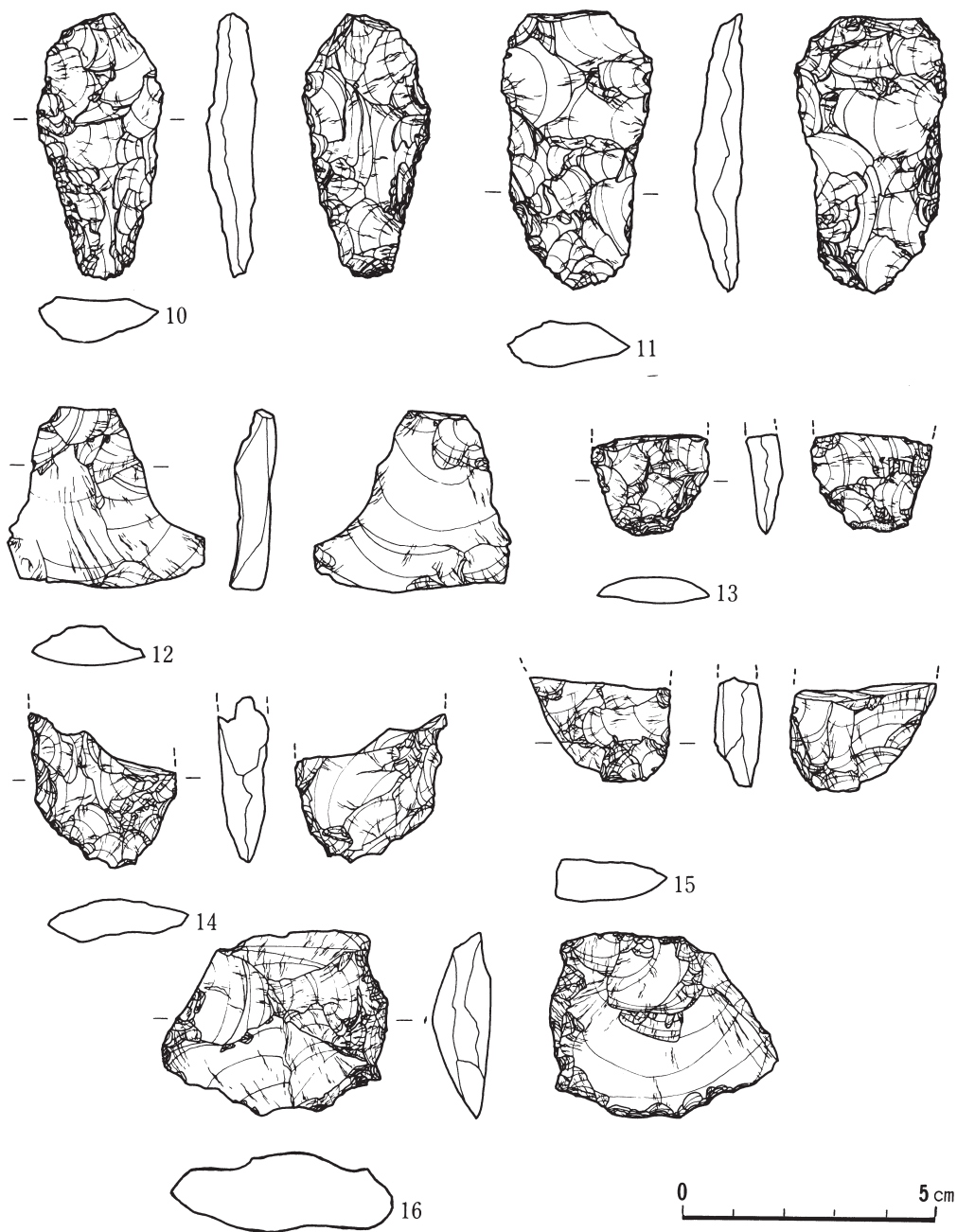
第57図 第1号竖穴住居跡出土遺物(4)



第1号竖穴住居跡出土遺物(5)

図版	出地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第58図-1	1H	床直	34	18	6	2.8	玉	A	17	
" -2	"	床面	(29)	16	5	(2.2)	玉珪	"	18	尖頭部欠損
" -3	"	床直	(42)	16	9	(3.8)	珪	"	23	"
" -4	"	5	53	27	10	14.7	"	E	24	
" -5	"	4	40	24	10	7.8	玉珪	F	26	
" -6	"	3	45	21	10	8.0	珪	E	28	
" -7	"	4	45	27	7	9.5	"	F	27	
" -8	"	床直	(28)	27	10	(7.4)	"	B	37	欠損
" -9	"	5	44	26	10	9.3	"	F	33	

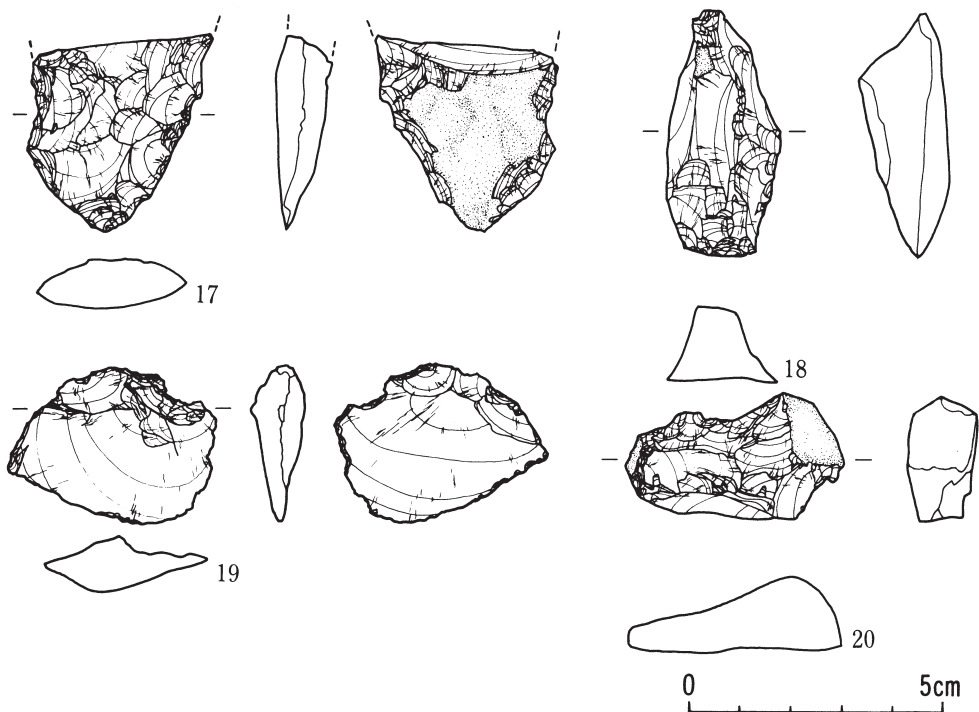
第58図 第1号竖穴住居跡出土遺物(5)



第 1 号竖穴住居跡出土遺物 (6)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第59図-10	1H	3	55	26	10	13.0	珪	F	29	
" -11	"	床直	57	31	10	16.2	"	"	40	
" -12	"	"	41	37	8	3.8	"	"	38	
" -13	"	3	(21)	25	7	(3.5)	"	B	36	欠損
" -14	"	"	(38)	(26)	10	(6.8)	"	"	30	"
" -15	"	床直	(33)	(24)	8	(6.1)	"	"	35	"
" -16	"	4	49	38	14	23.5	"	F	34	

第59図 第 1 号竖穴住居跡出土遺物 (6)



第1号竪穴住居跡出土遺物(7)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第60図-17	1H	3	(37)	35	10	(12.5)	珪	B	32	欠損、ヤケ有り
〃 -18	〃	4	48	21	16	14.1	〃	F	25	
〃 -19	〃	床面	42	30	10	8.9	〃	〃	39	
〃 -20	〃	3	43	26	13	12.3	〃	〃	31	

第60図 第1号竪穴住居跡出土遺物(7)

第2号竪穴住居跡(第62~69図)

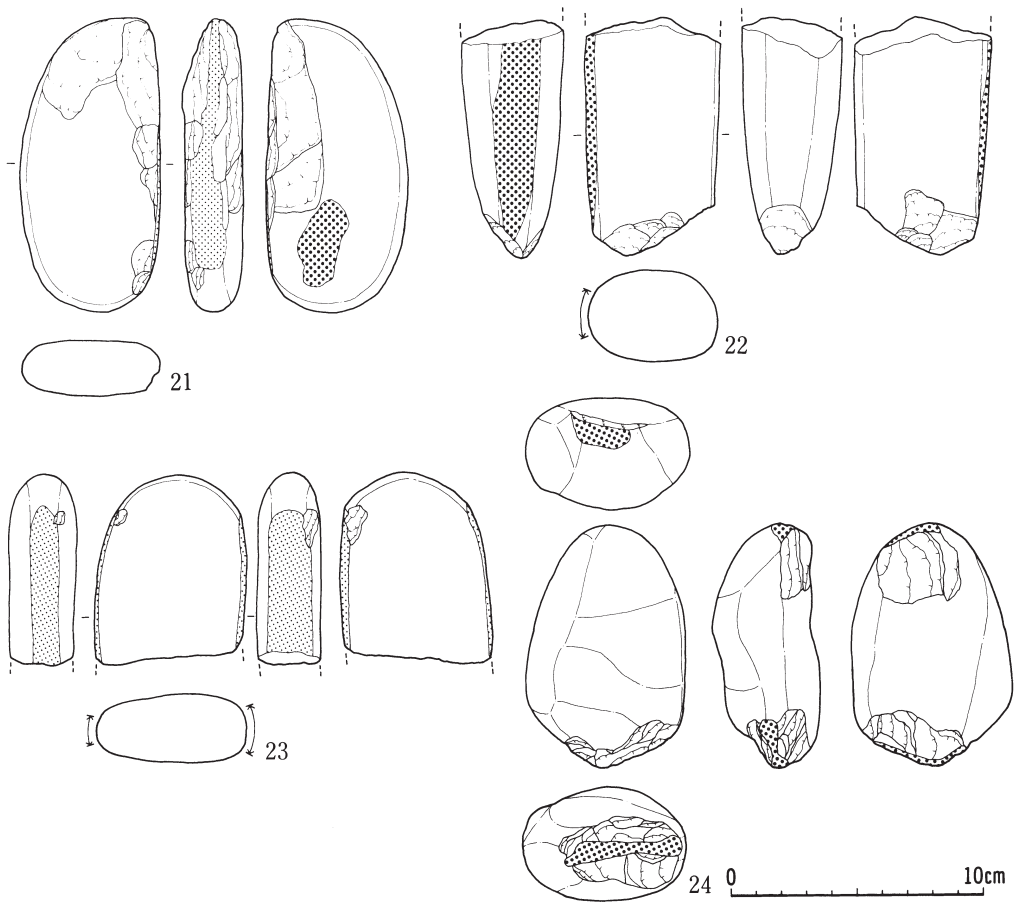
位置と確認 本調査区西側の台地緩斜面のK・L 3グリッドに位置する。第 a層上面で黒色土の落ち込みを確認した。住居跡北側半分は調査区域外のため未調査である。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、北側半分が調査区域外のために全容を把握できないが、調査部分から推定して、楕円形を呈すると思われる。規模は、長径 4 m70cm・短径不明で、床の面積は(8.71m²)である。

壁 第 a・b層を壁面とし、各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、東壁10cm・南壁24cm・北壁26cmである。

床 第 b層を掘り込んで床面としている。ピット周辺は若干くぼんでいるが、全体的に平坦である。炉周辺はかたく締まりがあり、壁寄りには軟弱である。



第1号竪穴住居跡出土遺物(8)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第61図-21	1H	2	117	56	23	240	安	I	212	スリ1面
"-22	"	床直	(92)	54	40	(315)	閃	G	211	基部欠損
"-23	"	2	(72)	60	26	(214)	安	I	213	スリ2面、欠損
"-24	"	床面	96	64	40	305	チャ	"	214	タタキ2面

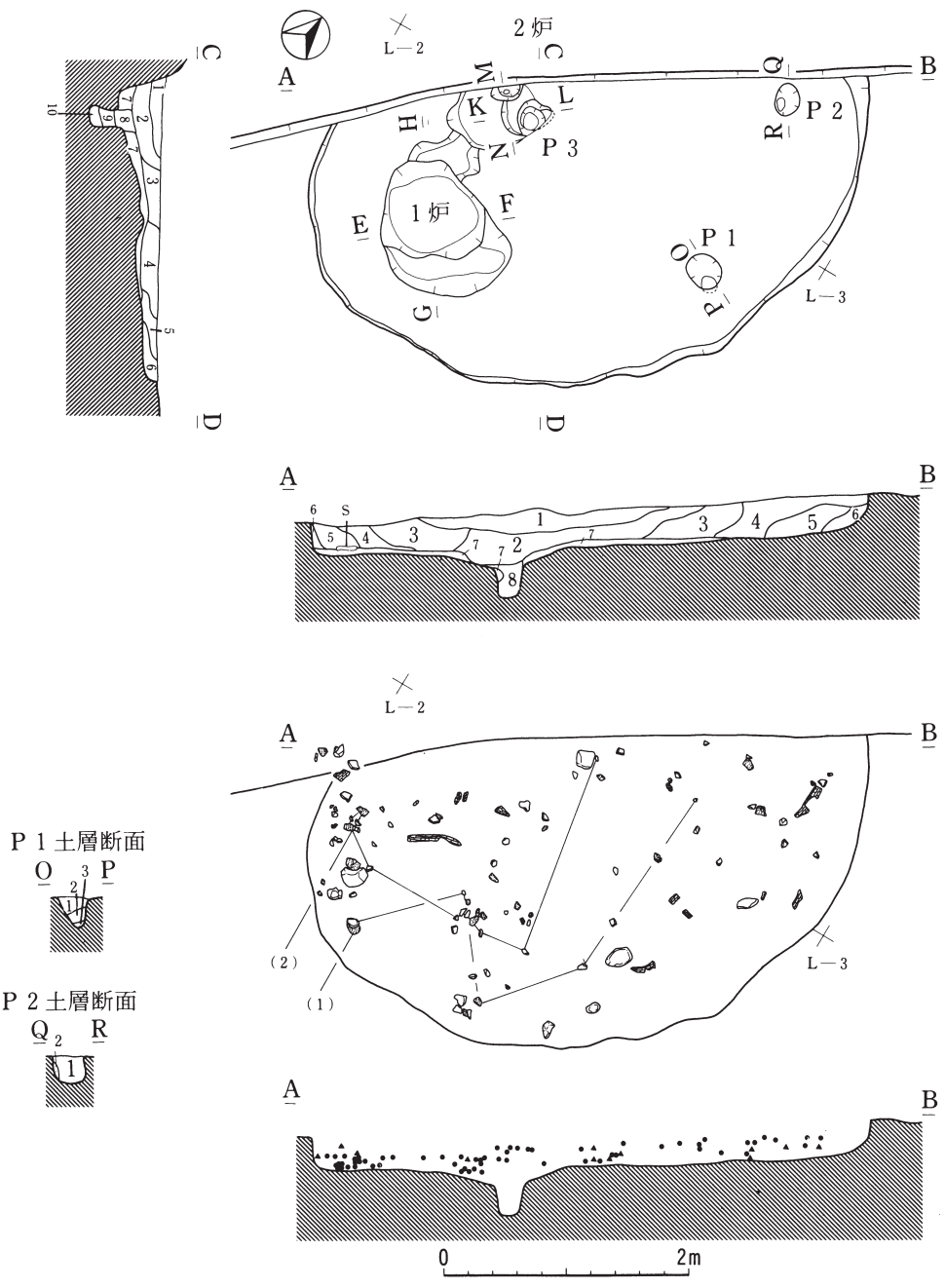
第61図 第1号竪穴住居跡出土遺物(8)

壁溝 検出されなかった。

柱穴 住居跡内で検出されたピットは3個である。形状・深さ等からP₁・P₂が柱穴と思われる。柱穴の配置は不明である。

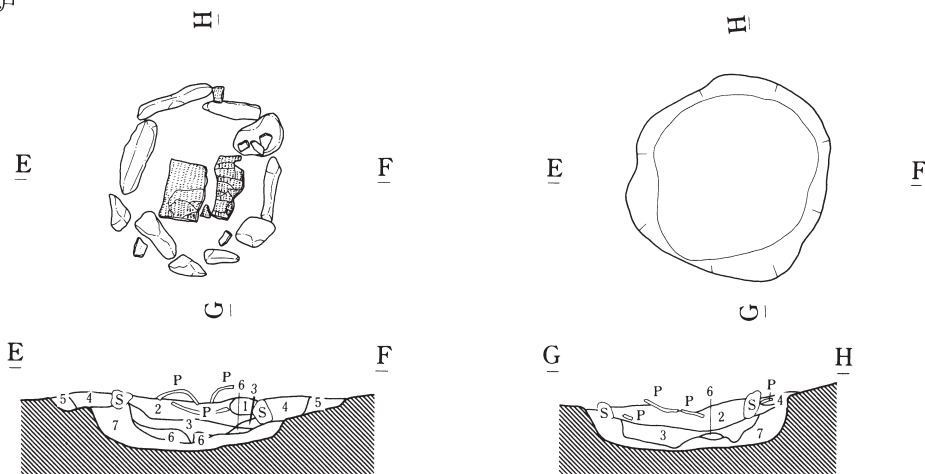
ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	30×24	24	2	楕円形	26×20	22	3	不整形	26×24	36

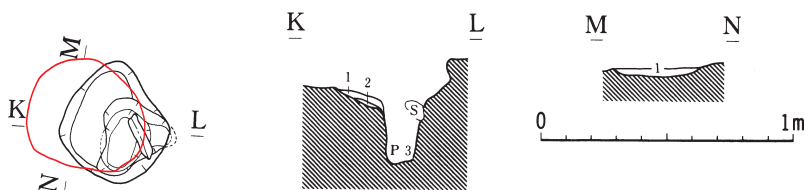


第62图 第2号竖穴住居跡(1)

1号炉



2号炉



第63図 第2号竪穴住居跡(2)

第2号竪穴住居跡土層注記

第1層	黒色	10YR 3/4	1~3mmのローム粒を微量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/2	5mm大のローム粒・炭化物を含む。しまり強く、粘性なし。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	1~3mmのローム粒・炭化物を含む。しまり強く、粘性なし。
第4層	暗褐色	10YR 3/4	3~5mmのローム粒・焼土粒を少量含む。また炭化物をブロック状に含む。しまりややあり、粘性なし。
第5層	暗褐色	10YR 3/4	ロームを多量に含む。また炭化物を含む。しまり強く、粘性ややあり。
第6層	褐色	10YR 3/4	ロームをブロック状に多量に含む。しまり強く、粘性ややあり。
第7層	褐色	10YR 3/4	張り床。ロームブロック・焼土ブロックを多量に、炭化物を少量含む。しまり強く、粘性あり。
第8層	褐色	10YR 3/4	1~3mm大のローム粒・炭化物を少量含む。しまり・粘性ややあり。
第9層	褐色	10YR 3/4	ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む。また炭化物を含む。しまりややあり、粘性あり。
第10層	褐色	10YR 3/4	ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。

第2号竪穴住居跡1号炉土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/4	ロームブロックを多量に含む。しまり強く、粘性ややあり。
第2層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。しまり1層より弱く、粘性なし。
第3層	黒褐色	7.5YR 3/4	焼土粒を含む。しまり弱く、粘性ややあり。
第4層	暗褐色	10YR 3/4	ロームをブロック状に含む。しまり強く、粘性なし。
第5層	褐色	10YR 3/4	ロームをブロック状に、また炭化物を含む。しまり強く、粘性ややあり。
第6層	赤褐色	5YR 3/4	しまり強く、粘性なし。
第7層	褐色	10YR 3/4	しまり強く、粘性なし。

2号炉土層注記

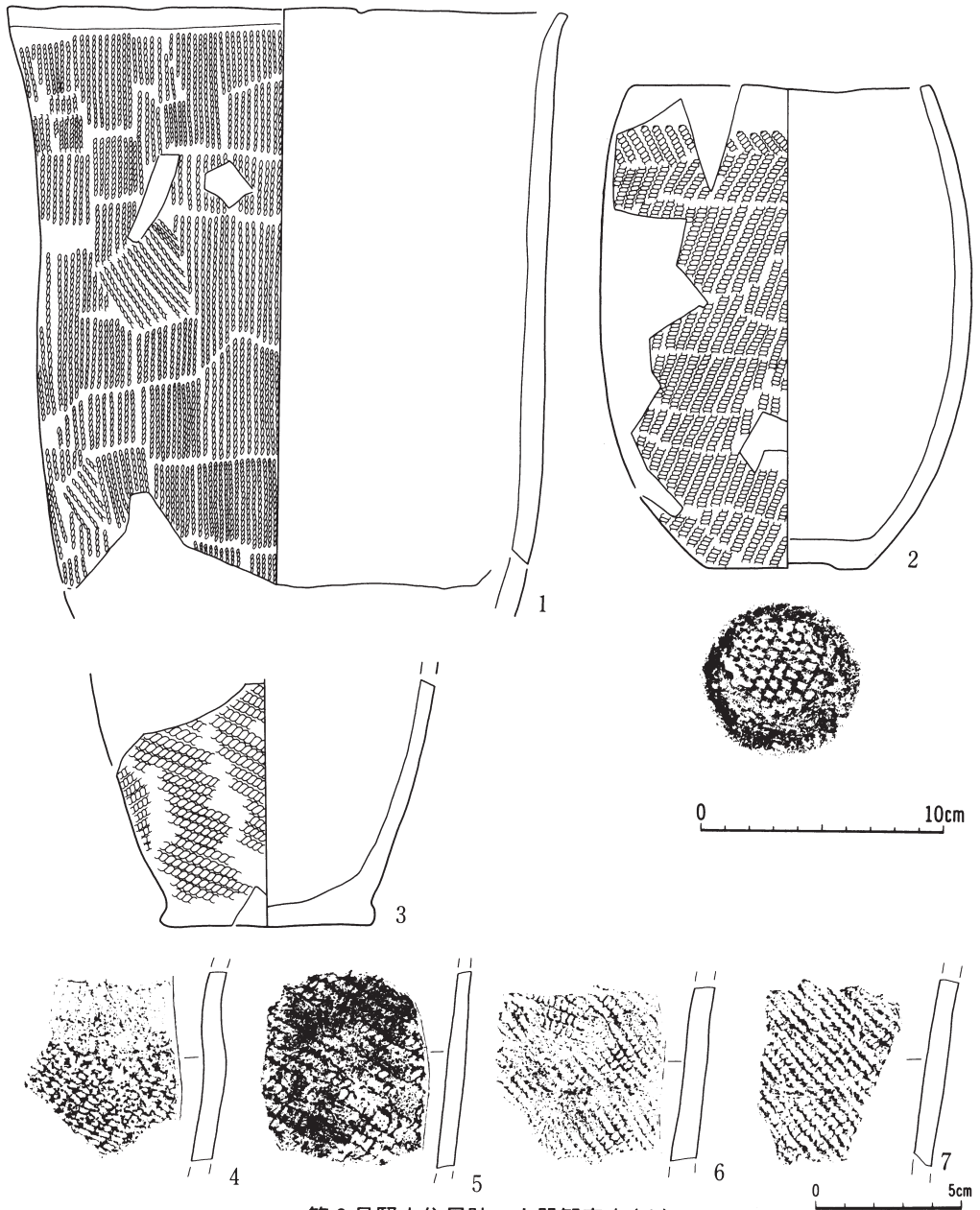
第1層	赤褐色	5YR 3/4	しまり強く、粘性なし。
第2層	褐色	7.5YR 3/4	焼土を多量に含む。しまり強く、粘性ややあり。

P₁土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒・炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	褐色	10YR 3/4	炭化物を少量含む。しまり1層よりあり、粘性ややあり。
第3層	褐色	10YR 3/4	しまり2層より強く、粘性あり。

P₂土層注記

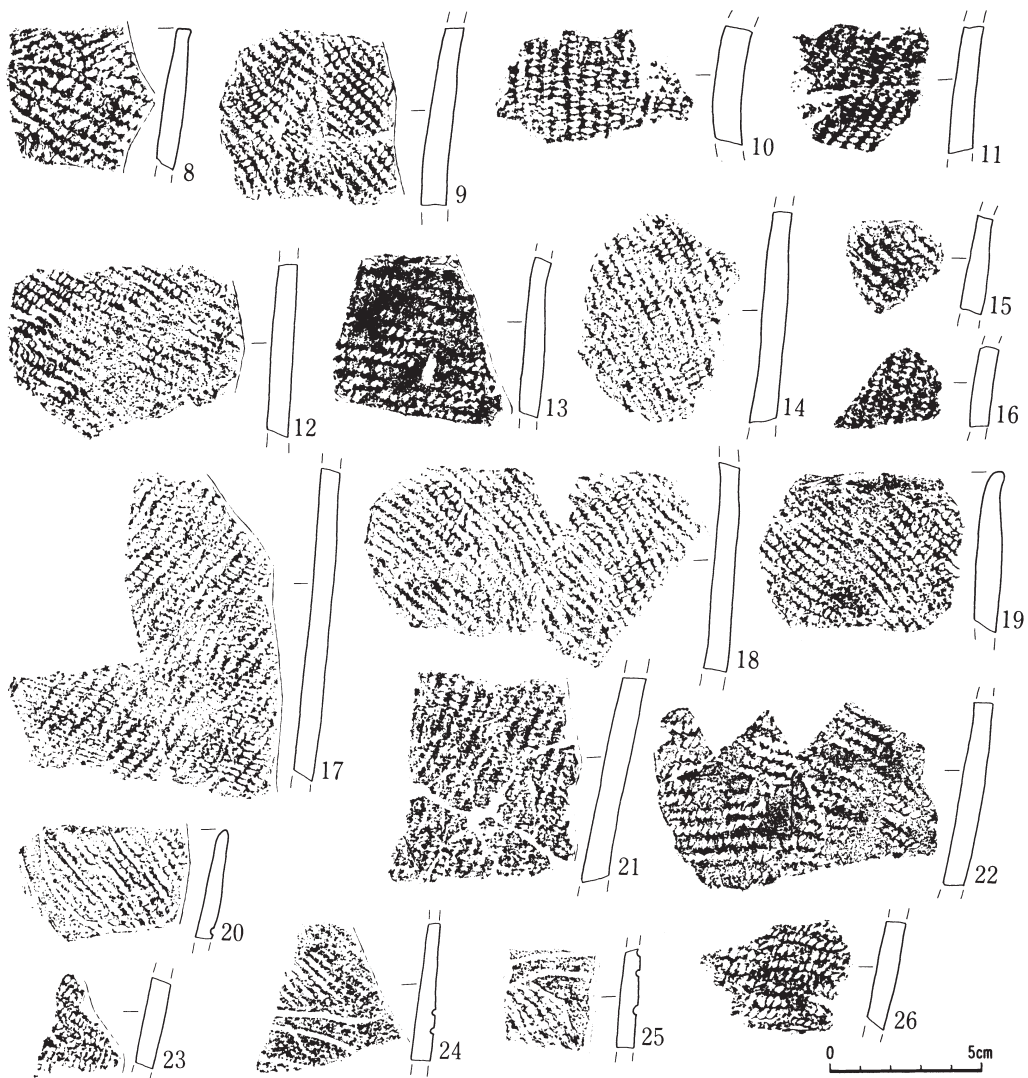
第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒・炭化物を含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	褐色	10YR 3/4	しまり強く、粘性あり。



第2号竖穴住居跡 土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	炉	深 鉢	撚糸文(L)の縦位	Ⅲ群2類
2	床	面	縄文(R L)、器表裏面に赤色顔料塗布、底面に綱代痕	〃
3	床	直	縄文(R L)	〃
4	覆	土 口頸部	縄文(R L R)、器表裏面に赤色顔料塗布	〃
5	〃	胴 部	縄文(R L)	〃
6	〃	〃	縄文(L R)	〃
7	〃	〃	縄文(R L)	〃

第64図 第2号竖穴住居跡出土遺物(1)



第2号竖穴住居跡 土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
8	覆土	口縁部	縄文 (R L)			Ⅲ群2類
9	"	胴部	"		スス状炭付	"
10	"	"	"		"	"
11	"	"	"		"	"
12	5層	"	"		"	"
13	覆土	口頸部	縄文 (L R)			"
14	5層	胴部	縄文 (R L)		スス状炭付	"
15	覆土	口頸部	"		"	"
16	"	"	"		スス状炭付	"
17	床直	胴部	"	器裏面に赤色顔料塗布		"
18	"	"	"		スス状炭付	"
19	"	口縁部	"	平口縁	"	"
20	"	"	縄文 (L R)、充填縄文		"	Ⅱ群9類
21	"	底辺部	縄文 (R L)		"	Ⅲ群2類
22	"	胴部	縄文 (L R)、器表面に赤色顔料塗布		"	"
23	"	"	縄文 (R L)		"	"
24	"	"	"	充填縄文	スス状炭付	Ⅱ群9類
25	"	口頸部	縄文 (L R)	器表面に赤色顔料塗布		Ⅲ群2類
26	"	胴部	"		"	"

第65図 第2号竖穴住居跡出土遺物(2)



第 2 号竖穴住居跡 土器観察表 (3)

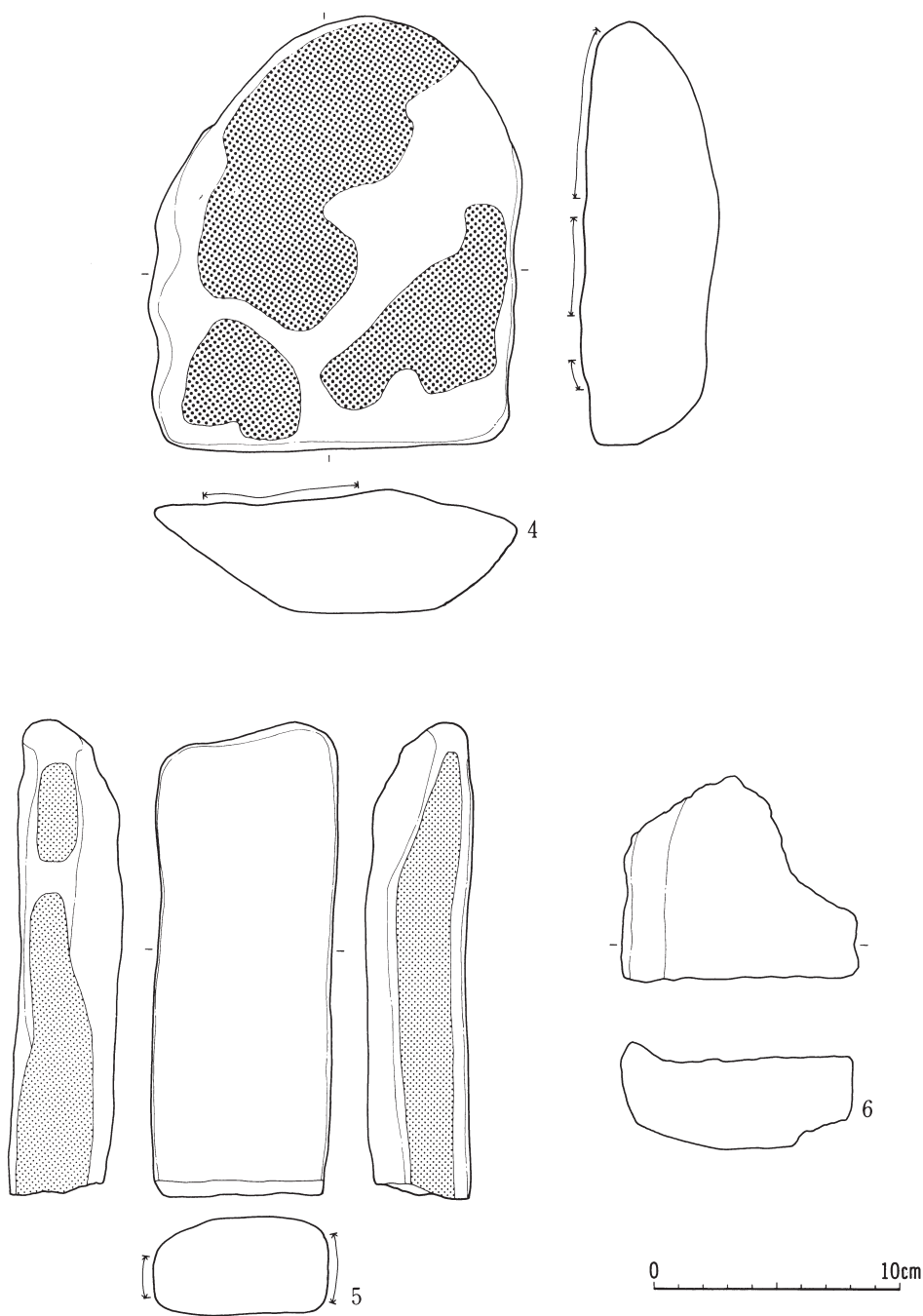
番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
27	炉 (4層)	口頸部	縄文 (RL)、充填技法、横位曲線文	Ⅱ群 9類
28	床 面	"	" "	"
29	"	胴 部	縄文 (RL)	Ⅲ群 2類
30	"	"	"	"
31	炉 (4層)	"	"	スス状炭付 "
32	床 面	"	縄文 (LR)	"
33	"	"	縄文 (RL)、器裏面に赤色顔料塗布	"
34	"	"	" "	"
35	"	"	"	スス状炭付 "
36	"	"	縄文 (LR)	"
37	"	"	縄文 (RL)	"
38	"	口縁部	無文	"
39	"	胴 部	縄文 (RL)、器裏面に赤色顔料塗布	"

第66図 第 2 号竖穴住居跡出土遺物 (3)

炉 炉は 2 基検出され、いずれも住居跡の西壁寄りに位置する。第 1 号炉は、14～30cmの礫を10個用いて作られた石囲炉で、楕円形に配置されている。規模は、長径72cm・短径63cmである。堆積土は 7 層に区分され、6 層上面が火熱面と思われる。第 2 号炉は地床炉で、不整形を呈する。規模は、長径41cm・短径38cmである。堆積土は 2 層に区分でき、火熱面は 1 層上面と思われる。第 2 号炉東側に P₃があるが、その新旧関係は不明である。

堆積土 10層に分層できた。土層観察から自然堆積と思われる。

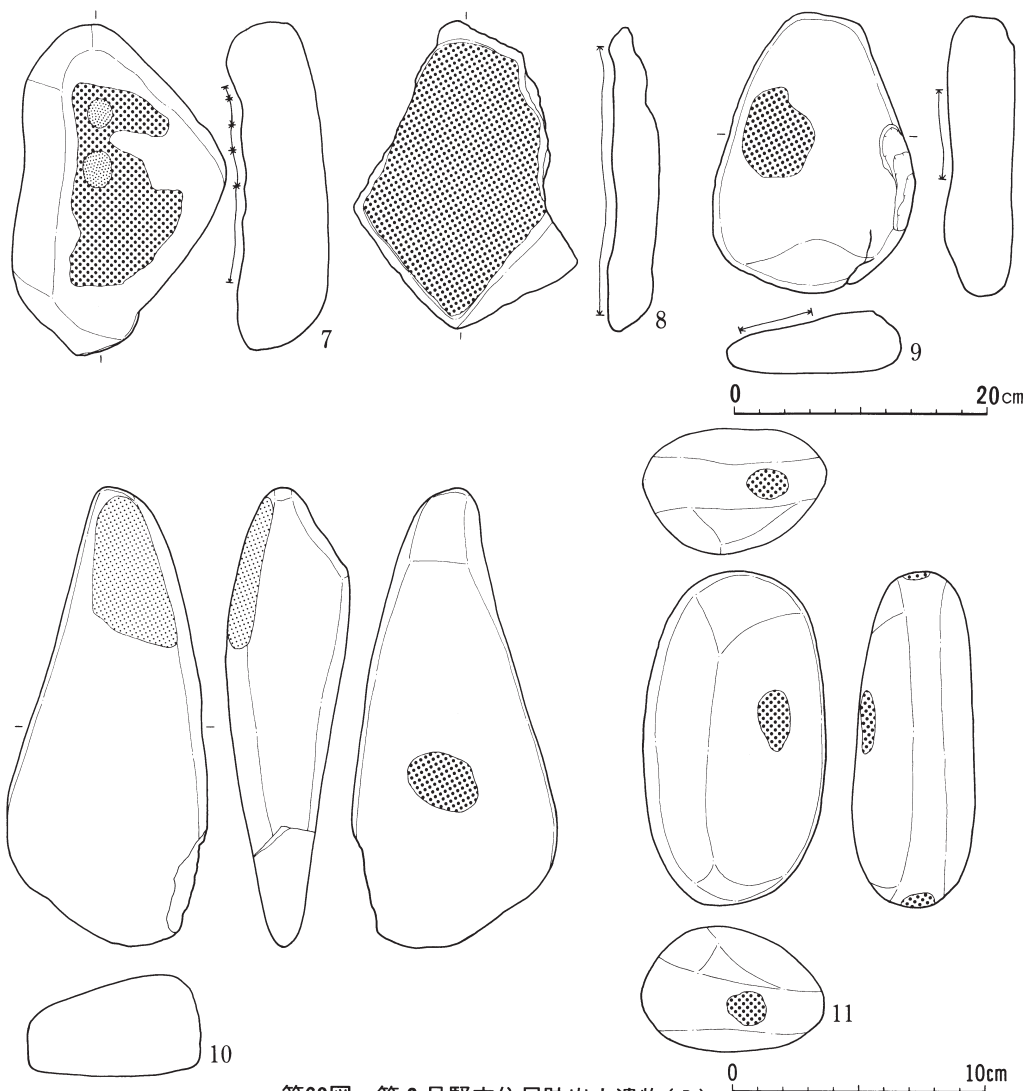
出土遺物 炉及び床面からは、第 Ⅲ群 2類の粗製土器が出土している。また、石器は、不定形石器、敲磨器類、石皿・台石類が出土している。(長谷部・奈良)



第2号竖穴住居跡出土遺物(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第67図-4	2H 戸	フク土	174	148	53	2,100	安	L	220	スス状炭付着
〃 -5	2H	5	(192)	73	40	(1,085)	緑凝	I	219	スリ2面、欠損
〃 -6	〃	床直	(94)	(81)	35	(291)	安	L	218	欠損

第67図 第2号竖穴住居跡出土遺物(4)



第68図 第2号竖穴住居跡出土遺物(5)

第2号竖穴住居跡出土遺物(5)

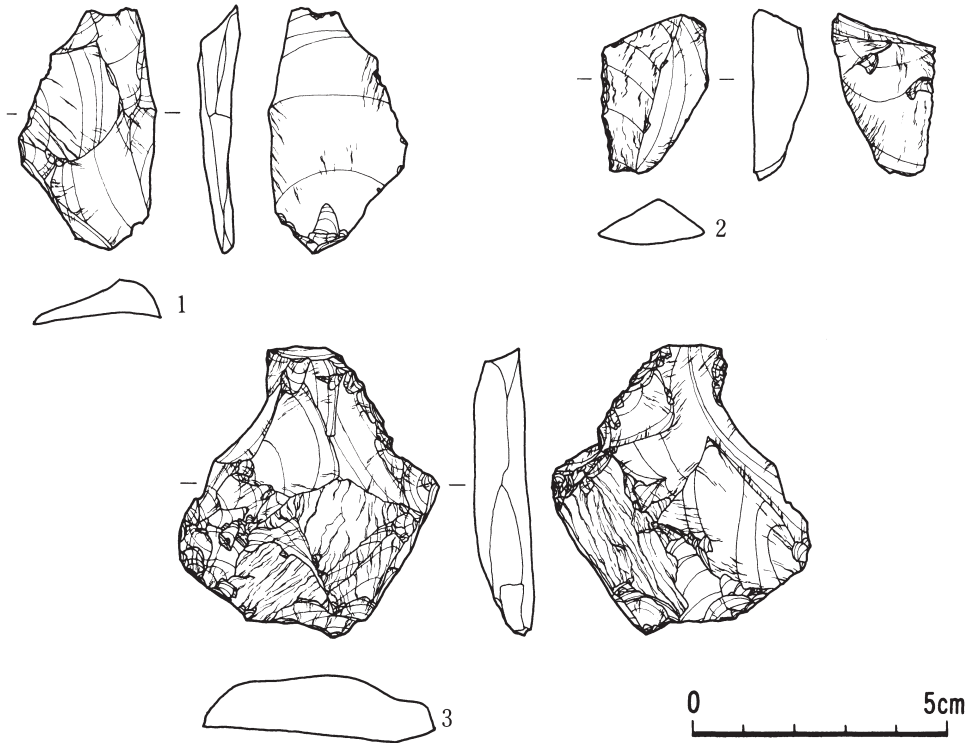
図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第68図-7	2H炉	フク土	255	163	87	3,700	安	L	216	
"-8	"	"	243	182	37	2,000	"	"	283	
"-9	2H	床直	217	149	50	2,700	"	"	282	
"-10	"	"	182	80	49	689	"	I	215	スリ1面、タタキ1面
"-11	"	"	134	71	49	683	"	"	217	タタキ3面以上、スス状炭附着

第3号竖穴住居跡(第71~73図)

位置と確認 調査区I 9・10グリッドに位置する。第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南側部分が調査区域外のために全容は把握できなかったが、調



第 2 号竪穴住居跡出土遺物(6)

図 版	出 土 地 点	層	最 大 計 測 値				石 質	分 類	整 理 番 号	備 考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
第69図-1	2 H	フク土	47	27	7	6.8	珪	F	43	
" -2	"	"	35	21	8	3.3	"	"	41	
" -3	"	"	55	42	12	28.9	"	"	42	

第69図 第 2 号竪穴住居跡出土遺物(6)

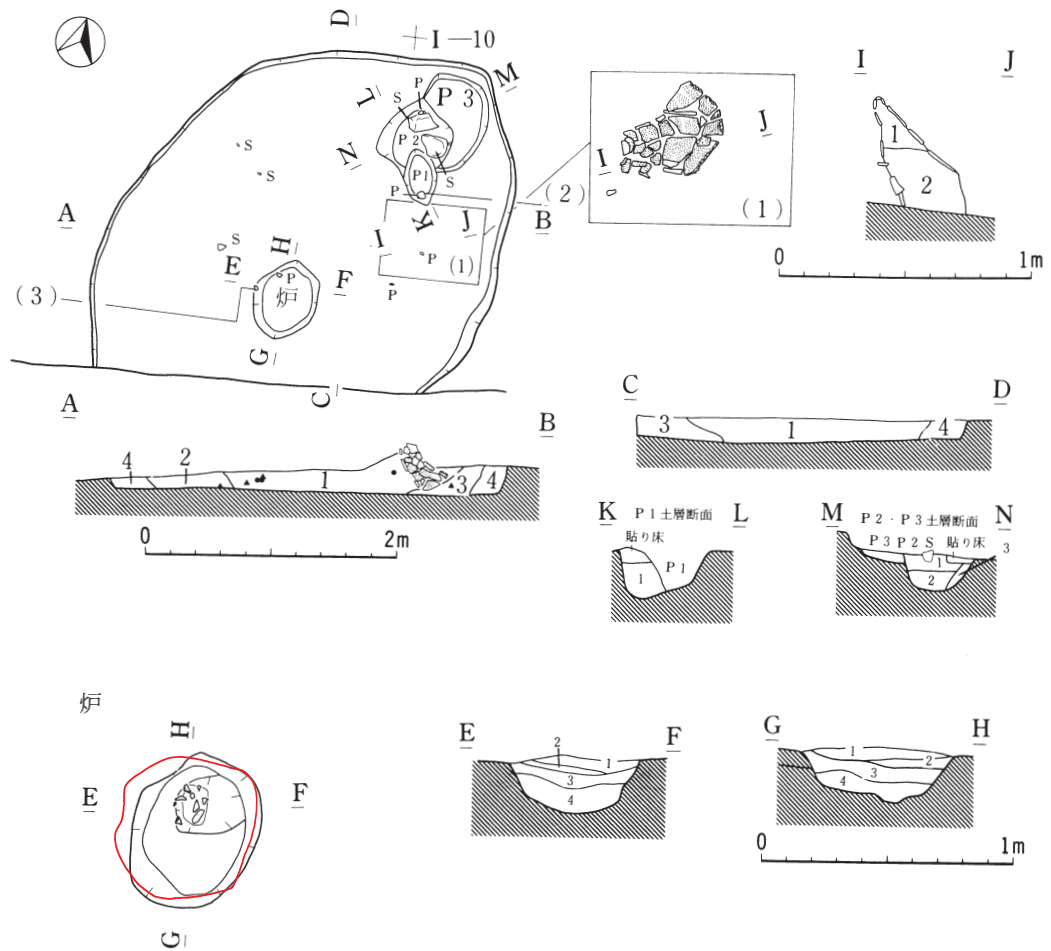
査部から推定すると全体的に丸みをもつ楕円形の形状を呈すると思われる。規模は長径不明・短径 3 m14cm・床面積は (7.07m²) である。

壁 南壁が不明であるが他は第 a 層を壁面とし、上端から床面にかけて緩やかに傾斜している。北・東壁は堅緻なつくりであるが、西壁はもろく確認に手間どった。

床面 第 a 層を床面とし、起伏が少なく全般的に平坦である。炉の周辺はかたく締まっているが、壁寄りには軟らかく軟弱なつくりである。

柱穴 検出できなかった。

付属施設 ピットは住居跡の北側に重複して 3 個検出した。新旧関係は、P₁ は新旧関係が不明、P₂ は P₃ より新しく P₁ とは不明、P₃ は P₂ より古く P₁ とは不明である。各々のピットの特徴は、P₁ が楕円形を呈し柱穴の可能性も考えられる。P₂ が円形を呈し確認面に自然礫 2 個を有する。P₃ が浅い土壌で遺物は出土しなかった。各々のピットの性格・用途につ



第70図 第3号竖穴住居跡

第3号住居跡土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	炭化物をやや多量、ローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	炭化物、ローム粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物を少量、ローム粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
第4層	褐色	10YR 4/4	暗褐色土を混入し、小ロームブロックを多量に含む。しまりなし、粘性あり。

炉土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒、焼土粒を少量に含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	褐色	10YR 3/6	ローム粒、焼土粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	ぶい・黄褐色	10YR 3/3	暗褐色土を混入し、焼土粒をブロック状に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	褐色	10YR 3/6	炭化物、焼土粒を少量に含む。しまり・粘性あり。

土器内堆積土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/2	炭化物、ローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒をやや多量に含む。しまり・粘性あり。

P₁土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/3	黄褐色土を混入し、ロームブロックを含む。しまり・粘性あり。
-----	-----	----------	-------------------------------

P₂土層注記

第1層	褐色	10YR 3/6	黄褐色土を混入し、炭化物を少量に含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	炭化物、ローム粒をやや多量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	褐色	10YR 3/4	黄褐色土を混入し、炭化物を少量に含む。しまり・粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 3/6	黄褐色土をブロック状に多量に混入する。しまりなし、粘性あり。

P₃土層注記

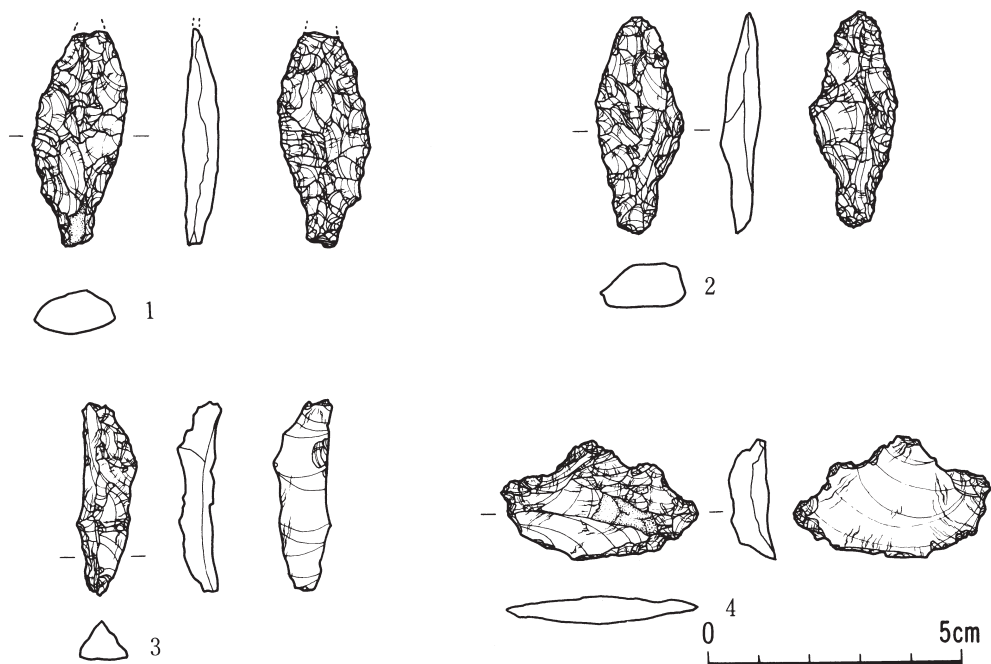
第1層	黄褐色	10YR 3/6	黄褐色土ブロックを多量に混入。しまりなし、粘性あり。
-----	-----	----------	----------------------------

いては不明である。

炉 炉は確認した住居跡の北側に位置し、形状が円形を呈する地床炉である。規模は長径63cm・短径50cmである。炉の堆積土は4層に分層でき、第3層上面が火熱面と思われる。遺物は炉内の北側部分に多く位置し、炉の第4層からの出土である。

堆積土 住居跡の堆積土は4層に分層できた。第1～3層中に炭化物を含むのを特徴とする。断面観察等から自然堆積と思われる。

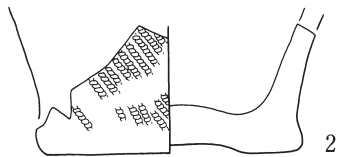
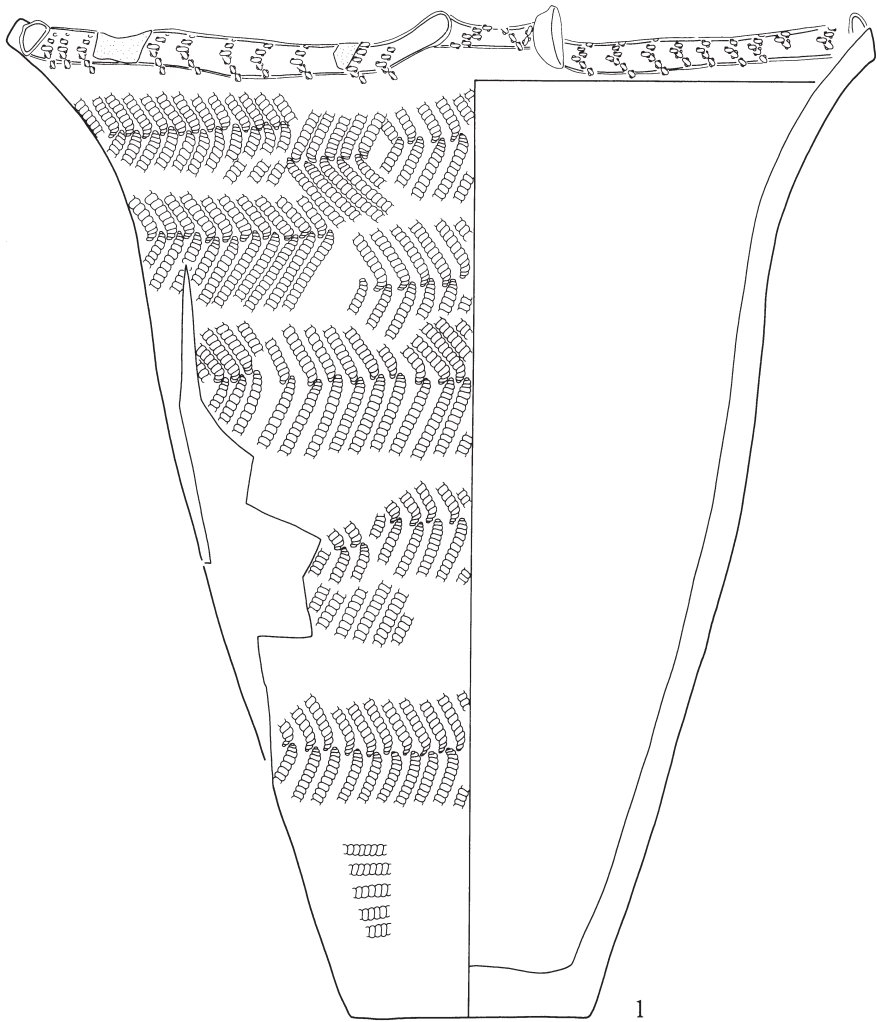
出土遺物 遺物は、住居跡の北側に多く分布している。特に1は、小突起を有する波状口縁で羽状縄文を地文とするほぼ完形の深鉢形土器である出土状態は口縁部を床面に向けた倒立状態で出土した。不定形石器2点が出土している。



第3号竪穴住居跡出土遺物(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第71図-1	3H	床面	(41)	17	7	(4.6)	珪	A	19	尖頭部欠損
"-2	"	2	41	16	8	3.8	"	"	20	
"-3	"	フク土	(37)	10	8	(1.9)	"	F	44	欠損
"-4	"	床直	38	22	7	4.2	"	"	45	

第71図 第3号竪穴住居跡出土遺物(1)

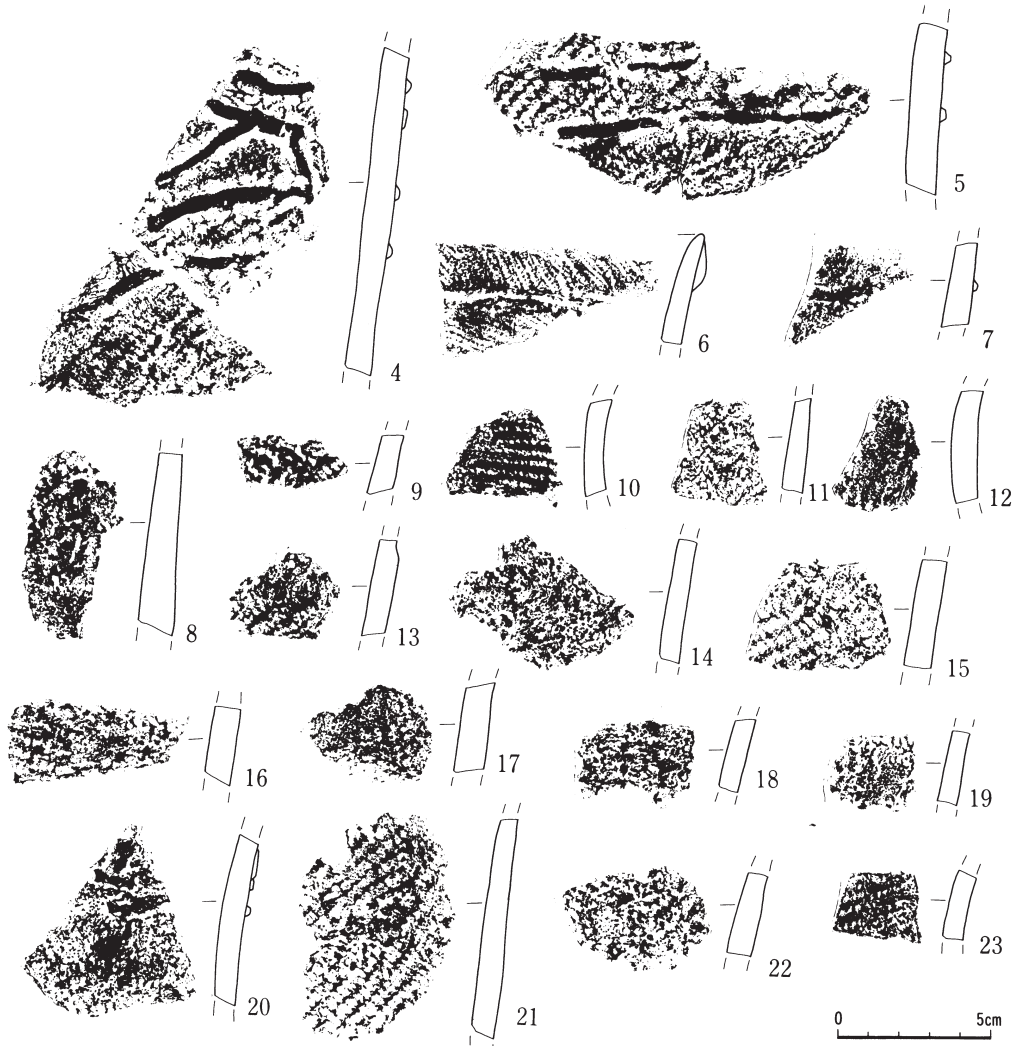


0 10cm

第3号竖穴住居跡 土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	床面	深鉢形	RL・LRの羽状縄文、RL・LRの燃糸圧痕、波状口縁			Ⅱ群5類
2	1層	〃	縄文(LR)、あげ底			〃
3	〃	底部	無文			Ⅲ群2類

第72図 第3号竖穴住居跡出土遺物(2)



第 3 号竖穴住居跡 土器観察表 (2)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 文	様	分 類
4	4 層	胴 部	横位・縦位弧状 (粘土紐)、縄文 (LR)			スス状炭付	II群3類
5	"	"	横位 (粘土紐)	"		"	"
6	覆 土	口縁部	折り返し口縁、縄文 (RL)				III群2類
7	炉 (2層)	胴 部	縄文、横位 (粘土紐)				II群3類
8	覆 土	"	縄文			スス状炭付	II群5類
9	"	"	縄文 (RL)			"	"
10	"	口頸部	"			"	"
11	床 面	胴 部	縄文 (LR)			スス状炭付	"
12	1 層	"	無文			"	"
13	床 面	口頸部	縄文 (LR)			"	"
14	"	胴 部	縄文			"	"
15	"	"	縄文 (LR)			"	"
16	"	"	"			"	"
17	炉 (4層)	"	縄文			"	"
18	床 面	"	"			"	"
19	"	"	縄文 (LR)			"	"
20	炉 (4層)	"	"	横・縦位粘土紐		"	II群3類
21	床 面	"	"			"	II群5類
22	"	"	縄文 (RL)			スス状炭付	"
23	"	"	縄文 (LR)			"	"

第73図 第 3 号竖穴住居跡出土遺物 (3)

第4号竪穴住居跡(第74~80図)

位置と確認 本調査区西側の台地平坦面のE 17・18グリットに位置する。第 a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡の北側半分以上は調査区域外のため未調査である。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、北側約半分以上が調査区域外のために全容を把握できないが、調査部分から推定して、楕円形を呈すると思われる。規模は、長径不明・短径 5 m16cmである。調査部分の床面積は(6.81) m²である。

壁 第 a・b層を壁面とし、各壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。壁面は、東・西側がやや軟弱ではあるが、南側は堅緻である。壁高は、東壁60cm・西壁40cm・南壁36cmを測り、北壁は不明である。

床面 第 b層を掘り込んで床面としている。床面は張り床である。住居跡の南・西壁寄りにはテラス状遺構で盛り上がっており、かたく締まり堅緻である。住居跡西側は平坦で、やや軟弱である。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 住居跡内から4個のピットを検出した。形状、規模、深さ等から、すべて柱穴と思われるが断定できない。柱穴の配置は不明である。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	不整形	40×38	40	2	円形	28×28	32	3	不整円形	46×44	50
4	円形	30×30	84								

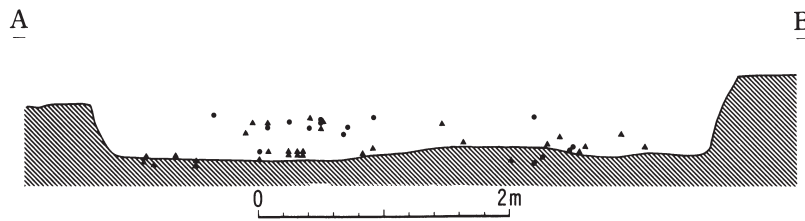
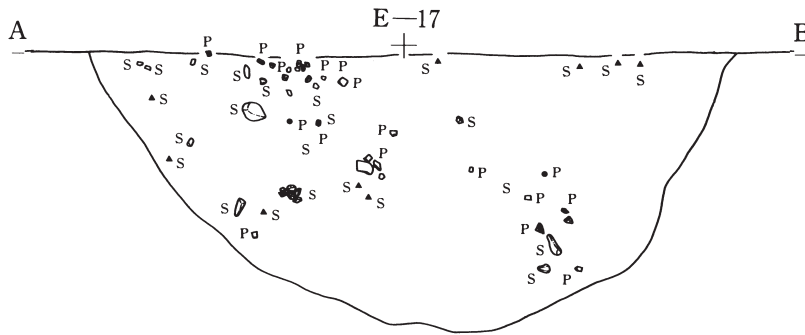
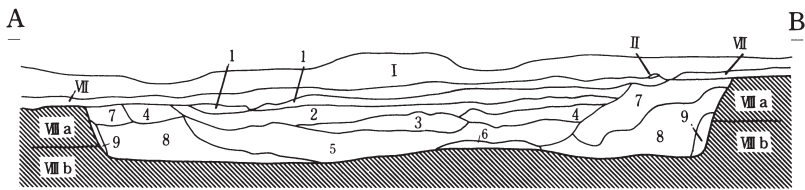
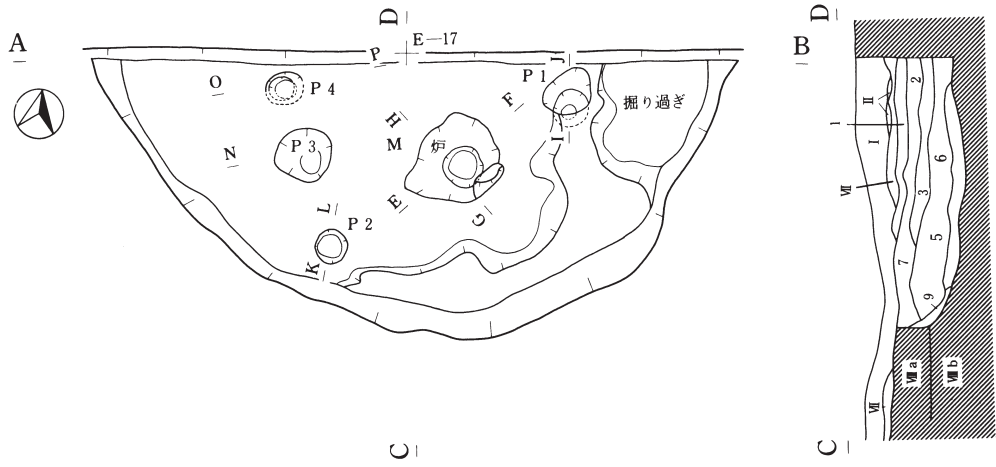
炉 住居跡の南壁寄りに位置し、竪穴炉と思われる。平面形は不整形で、規模は開口部で長径77cm・短径70cm、底面で長径32cm・短径31cmである。炉の南側に一部盛土がみられる。堆積土は9層に区分され、第1~3層に焼土粒がみられる。第1層上面が火熱面と思われる。

付属施設 住居跡の南・西壁寄りにテラス状遺構を検出した。8~13cmの段差があり、西壁寄りが比較的盛り上がっている。

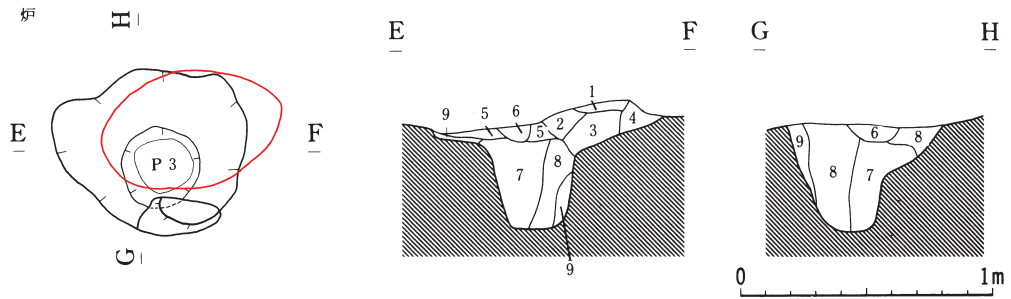
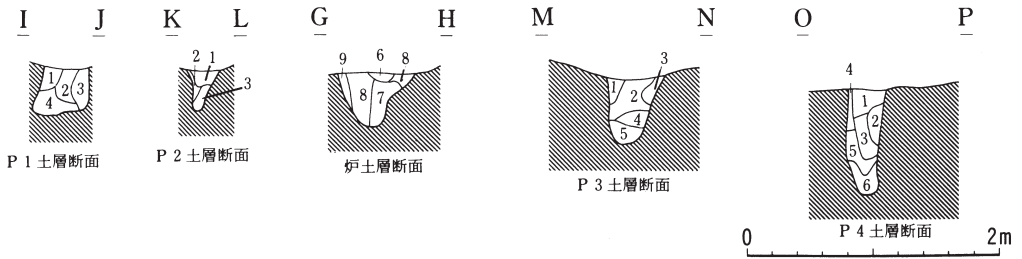
堆積土 9層に分層できた。ローム粒を包含する層が基調となっている。土層断面の観察から、自然堆積と思われる。

出土遺物 土器片が20片、石器が26点出土した。床面から出土した土器は第 群3類、第 群4類に属する。また、床面及び床面直上から、石鏃、不定形石器、敲磨器類、石核等の石器が出土している。

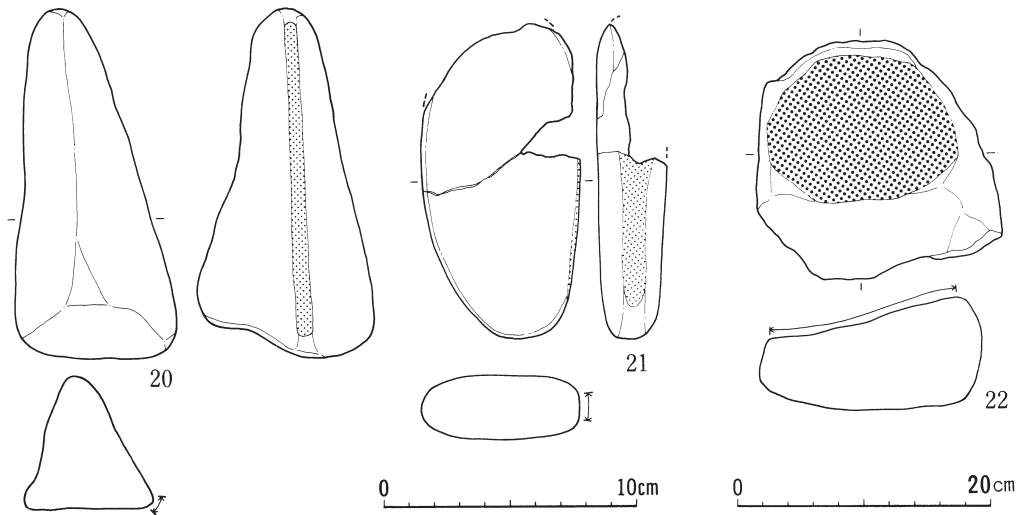
(奈良昌毅)



第74図 第4号竪穴住居跡(1)



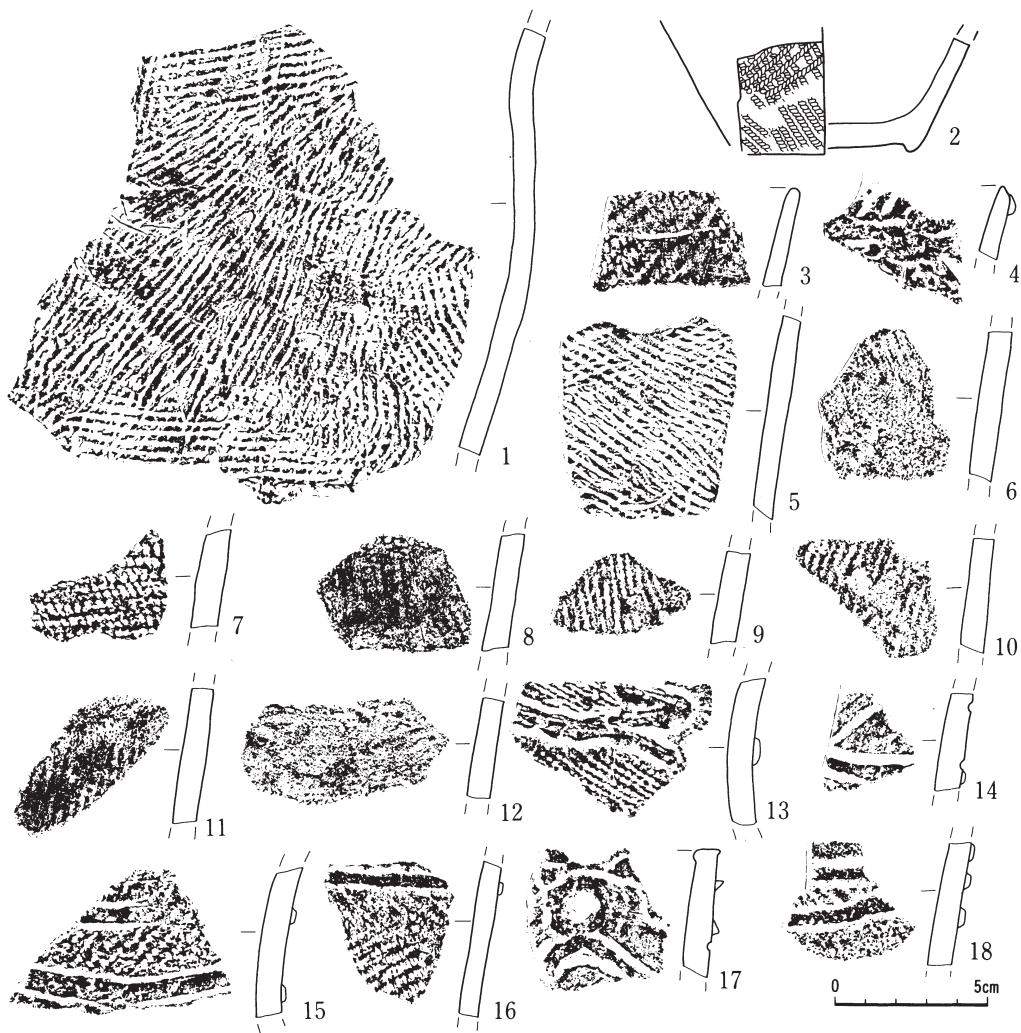
第75図 第4号竖穴住居跡(2)



第4号竖穴住居跡出土遺物(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第76図—20	4 H	床直	144	71	58	482	安	I	221	スリ上面
“ —21	“	3	(126)	61	25	(221)	“	“	222	スリ上面、欠損、 一部接合
“ —22	“	床面	187	192	113	4,500	“	L	284	

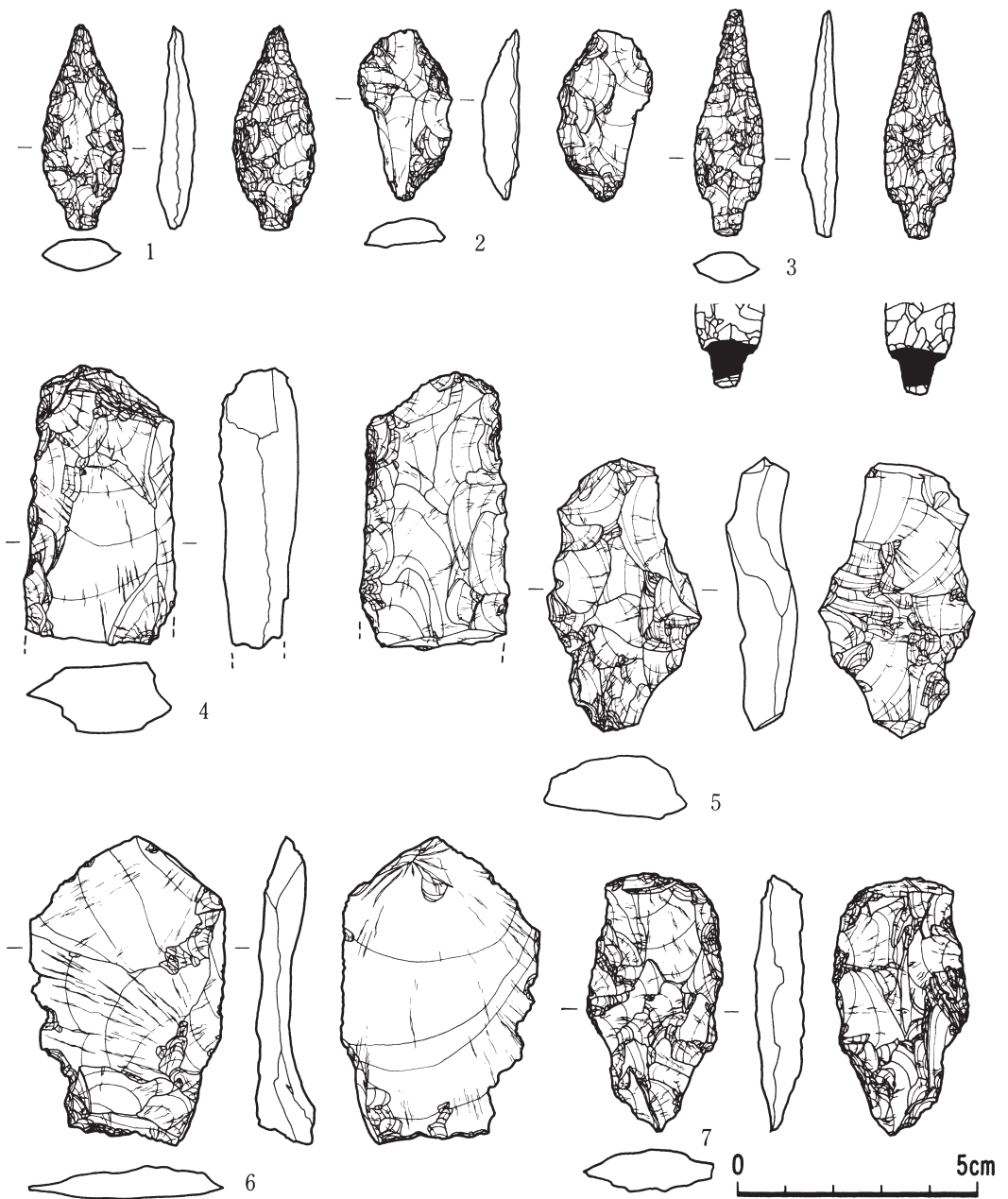
第76図 第4号竖穴住居跡出土遺物(1)



第4号竪穴住居跡 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文	文 文 様	分 類
1	3 層	胴部	縄文 (LR)	スズ状炭付	Ⅲ群2類
2	"	底部	" あげ底・底面に縄文		"
3	2 層	口縁部	"	スズ状炭付	"
4	覆土	"	平口縁、口端に刻み、斜位 (粘土紐)		Ⅱ群3類
5	3 層	胴部	縄文 (LR)		Ⅲ群2類
6	"	"	縄文	スズ状炭付	Ⅱ群5類
7	"	"	縄文 (RLR)	"	"
8	"	"	縄文 (RL)	"	"
9	"	"	"	"	"
10	"	"	"	"	"
11	"	"	縄文	"	"
12	"	"	"	"	"
13	5 層	口頸部	縄文 (RL)、粘土紐上面に縄文、斜位・弧状 (粘土紐)	"	Ⅱ群3類
14	床 面	胴部	弧状 (粘土紐)、斜位・横位 (沈線)	"	Ⅱ群4類
15	"	"	縄文 (LR)、横位 (粘土紐)		Ⅱ群3類
16	"	"	横位 (粘土紐)、LRとRL羽状縄文		"
17	"	口縁部	波状口縁、ボタン状突起、弧状 (粘土紐・沈線)		Ⅱ群4類
18	"	胴部	横位弧状 (粘土紐)		Ⅱ群3類

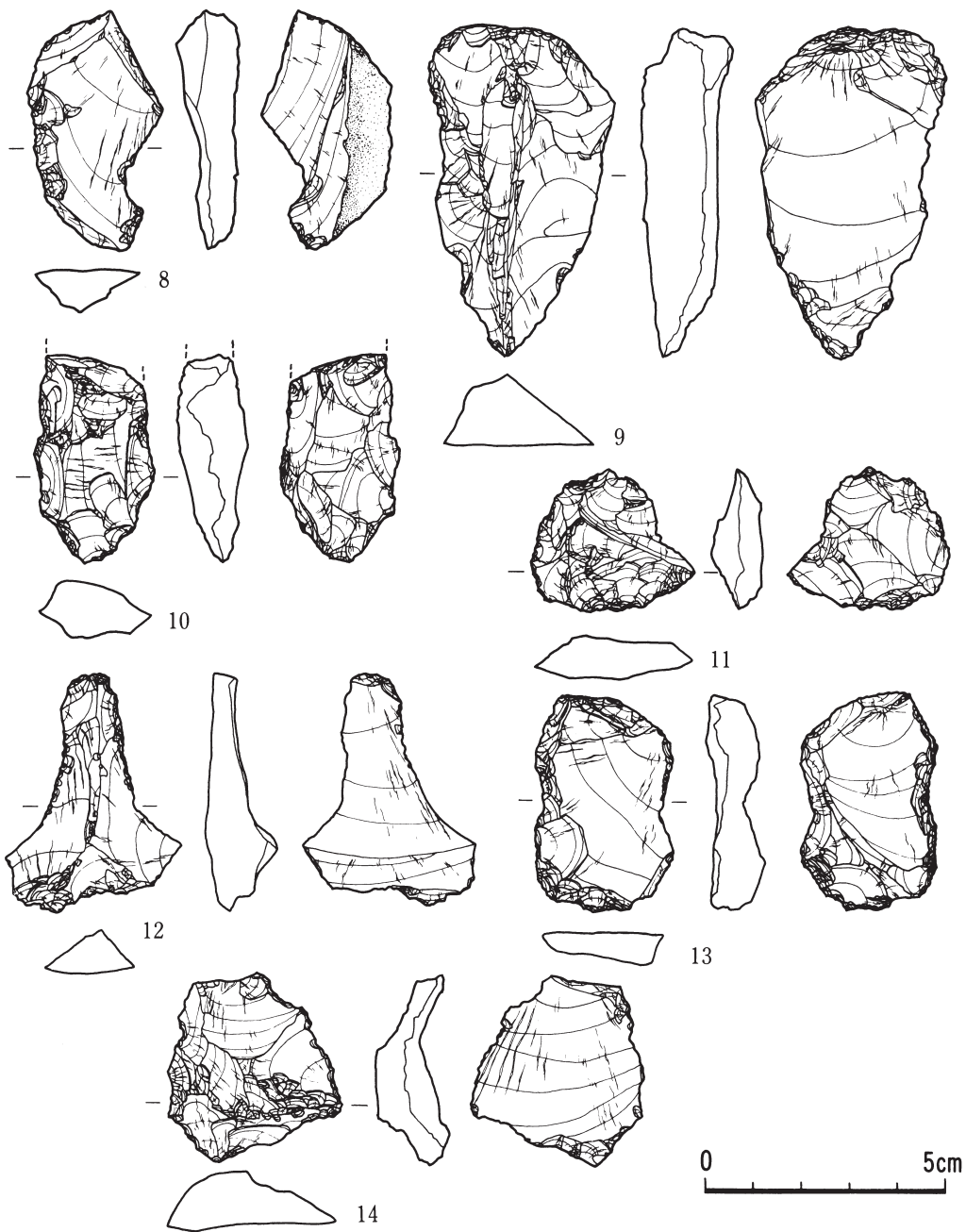
第77図 第4号竪穴住居跡出土遺物(2)



第4号竖穴住居跡出土遺物(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第78図-1	4H	床直	42	17	7	4.1	珪	A	21	
"-2	"	3	35	19	7	4.3	玉珪	F	51	
"-3	4Hビット4	フク土	47	14	6	3.0	珪	A	22	アスファルト付着
"-4	4H	床面	(58)	32	17	(36.2)	"	F	52	欠損
"-5	"	"	57	32	12	19.1	玉珪	"	145	石核
"-6	"	"	65	42	11	23.2	珪	F	53	
"-7	"	"	54	26	10	14.0	玉珪	"	55	

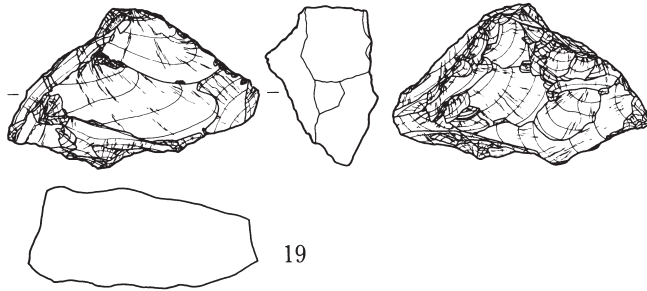
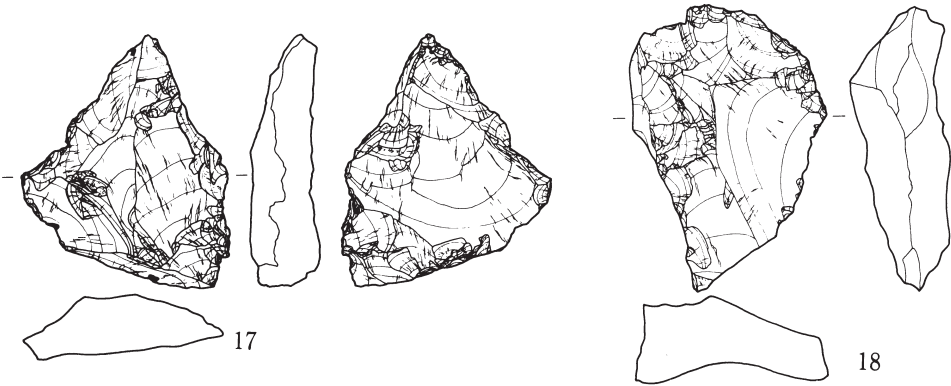
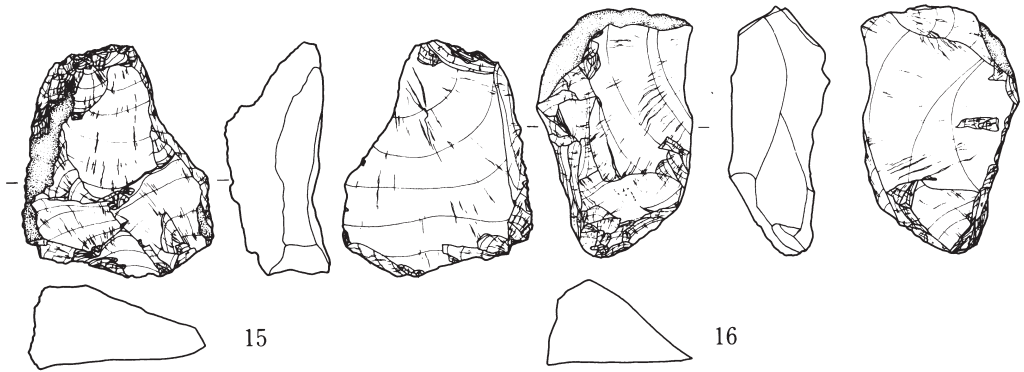
第78図 第4号竖穴住居跡出土遺物(3)



第 4 号竖穴住居跡出土遺物(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第79図-8	4 H	3	50	26	11	11.9	珪	F	47	
" -9	"	床面	69	37	16	34.4	"	"	56	
" -10	"	"	43	25	14	16.4	"	"	54	
" -11	"	8	(34)	30	10	(7.5)	"	B	57	欠損
" -12	"	3	52	37	15	11.3	"	F	50	
" -13	"	床面	47	29	11	14.5	"	"	49	
" -14	"	"	38	37	13	12.5	"	"	48	

第79図 第 4 号竖穴住居跡出土遺物(4)



第4号竖穴住居跡出土遺物(5)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第80図-15	4 H	床面	61	50	24	71.8	珪		144	石核
"-16	"	"	66	60	25	63.2	"		146	"
"-17	"	"	69	53	16	52.4	玉珪		142	"
"-18	"	5	74	50	22	63.0	珪	F	46	
"-19	"	床面	67	43	27	63.0	"		143	石核

第80図 第4号竖穴住居跡出土遺物(5)

第4号竪穴住居跡土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/3	0.5mm程度の炭化物・ローム粒を若干含む。しまり・粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/2	1mmの炭化物・ローム粒を若干含む。しまり1層よりあり、粘性なし。
第3層	黒褐色	10YR 3/2	1mmのローム粒及び2mmの炭化物を少量含む。しまり2層と同じ、粘性ややあり。
第4層	暗褐色	10YR 3/4	1mmの焼土粒を微量に、1mm程度の炭化物・ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
第5層	暗褐色	10YR 3/3	3mmの焼土粒・炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第6層	褐色	10YR 3/4	3mmの焼土粒・炭化物を微量に、ローム粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
第7層	褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量含む。しまり3層と同じ、粘性なし。
第8層	にぶい黄褐色	10YR 5/3	ローム粒を多量に、1mmの炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性あり。
第9層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を少量含む。しまりなし、粘性あり。

4号竪穴住居跡炉土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	焼土粒を多量に、炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量、炭化物・焼土粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第3層	にぶい黄褐色	10YR 5/3	ローム粒・焼土粒・炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	にぶい黄褐色	10YR 5/4	焼土粒を微量に、ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第5層	褐色	10YR 3/4	ロームを多量に、焼土粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第6層	黒褐色	10YR 3/2	炭化物・焼土粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第7層	にぶい黄褐色	10YR 5/3	ロームを多量に、炭化物を微量に含む。しまり・粘性あり。
第8層	にぶい黄褐色	10YR 5/4	炭化物を微量に、ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。
第9層	黄褐色	10YR 5/6	ロームを多量に混入。しまりなし、粘性あり。

P₁土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第2層	褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。しまり・粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を少量含む。しまりなし、粘性あり。

P₂土層注記

第1層	褐色	10YR 3/4	ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	ロームを多量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	にぶい黄褐色	10YR 5/4	ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性あり。

P₃土層注記

第1層	褐色	10YR 3/4	ローム粒をやや多めに、炭化物を少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	にぶい黄褐色	10YR 5/3	炭化物をやや多めに、焼土粒を微量に、ローム粒を少量含む。しまりややあり、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりややあり、粘性あり。
第4層	褐色	10YR 3/6	10mmのロームブロックを多量に混入。しまりなし、粘性あり。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	5mmのロームブロックを少量、炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性あり。

P₄土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	にぶい黄褐色	10YR 5/4	2mmの炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	褐色	10YR 3/4	炭化物を少量、ローム粒をやや多めに含む。しまりなし、粘性ややあり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第5層	褐色	10YR 3/6	炭化物を少量、5mmのロームブロックを少量含む。しまりなし、粘性あり。

第8号竪穴住居跡(第81~86図)

位置と確認 本調査区西側の台地平坦面のJ 19・20グリッドに位置する。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 住居跡の北側が第21号土層と重複しているが、その新旧関係は不明である。

平面形・規模 壁、床ともに遺存状態は良好で、プランの全容が把握できた。平面形は、南側が張り出した隅丸方形を呈する。規模は、長径 3 m60cm・短径 2 m62cm、床面積は6.15m²である。

壁 第 a・b 層を壁面とし、各壁ともにほぼ垂直に立ち上がっている。また、各壁ともに堅緻である。壁高は、東壁30cm・西壁66cm・南壁42cm・北壁52cmである。

床面 第 b 層を掘り込んで床面としている。起伏が少なく全般的に平坦であり、比較的にたく締まっている。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 住居跡内から3個のピットを検出した。P₂・P₃は、形状、深さ、配置等から柱穴とは考えられない。P₁・P₂・P₃は付属施設の項目で述べる。

炉 住居跡中央部に位置し、地床炉である。平面形は、西側が張り出す楕円形を呈する。規模は、開口部で長径40cm・短径38cm、底面で長径22cm・短径20cmを測る。堆積土は4層に区分でき、第1層上面が火熱面である。

付属施設 住居跡南壁直下にピット1基を検出した。ピット周辺は盛土となっており、その周辺の床面は非常にかたくしまりがある。ピットの平面形は円形を呈し、開口部で長径68cm・短径66cm、底面で長径26cm・短径25cm、深さは10cmである。遺物は土器底部が倒立の状態で出土した。また、堆積土は5層に分層され、土層観察から自然堆積と思われる。さらに、住居跡西壁寄りに平面形が、円形(P₂)と不整楕円形(P₃)のピットを検出した。いずれも深さは9~11cmと浅い。用途は不明である。

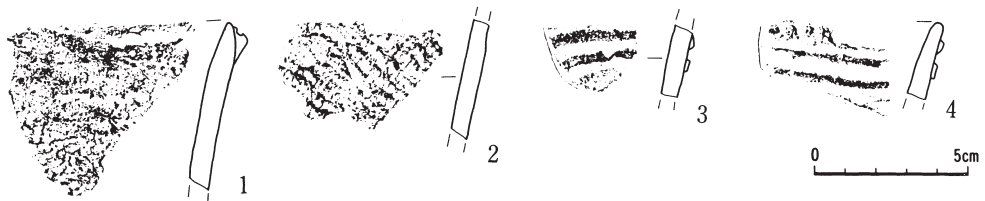
ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	68×66	10	2	円形	60×58	9.5	3	不整楕円形	124×44	10.4

堆積土 14層に分層できた。土層断面の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 土器は、床面及び床面直上から第 群 3 類土器(円筒上層 d 式)(1)・(2)、覆土中から第 群 5 類土器(円筒上層 d・e 式)が出土している。石器は、石筥、敲磨器類が床面及び床面直上から出土している。また、床面中央部と中央から北壁の間に炭化材が検出され、出土状態から本住居跡は焼失家屋と思われる。

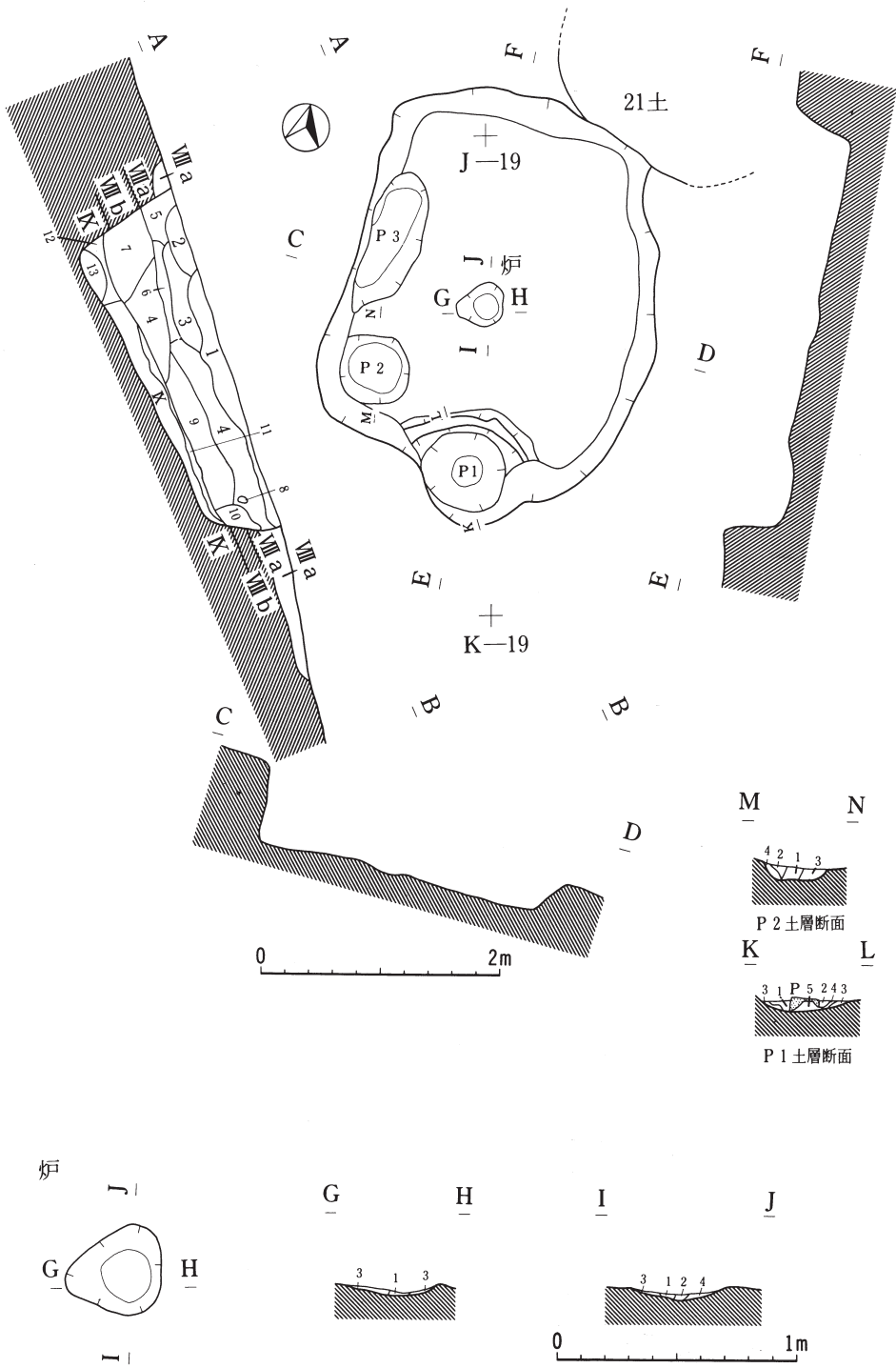
(奈良昌毅)



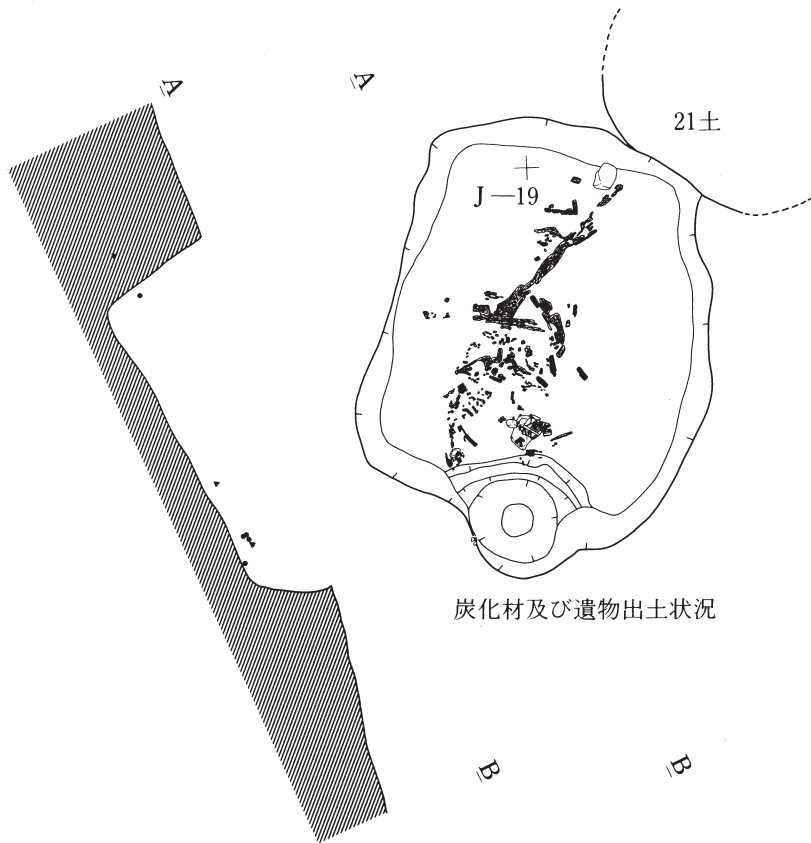
第81図 第8号竪穴住居跡出土遺物(1)

第8号竪穴住居跡 土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	口縁部	口端に燃糸圧痕、縄文(RL)		スス状炭付	II群5類
2	〃	胴部	縄文(RL)		〃	〃
3	床直	〃	横位(粘土紐)		〃	II群3類
4	〃	口縁部	口端に燃糸圧痕、横位(粘土紐)		〃	〃



第82图 第8号竖穴住居迹(1)



第83図 第8号竖穴住居跡(2)

第8号竖穴住居跡土層注記

第1層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/6	1~2mmのローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第3層	黒褐色	10YR 2/6	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第4層	黒褐色	10YR 2/6	ローム粒・炭化物を少量含む。しまりなし、粘性あり。
第5層	暗褐色	10YR 3/6	ローム粒を多量に含む。しまり・粘性なし。
第6層	黒褐色	10YR 3/6	ロームを多量に混入。しまり・粘性ややあり。
第7層	褐色	10YR 4/6	ロームを多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第8層	暗褐色	10YR 3/6	炭化物を少量、ローム粒をやや多めに含む。しまり・粘性あり。
第9層	暗褐色	10YR 3/6	炭化物・焼土粒・ローム粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
第10層	褐色	10YR 4/6	ロームを多量に、焼土を微量に含む。しまり・粘性あり。
第11層	黄褐色	10YR 5/6	床面。褐色土を少量含む。ロームブロック多量、しまりあり、粘性なし。
第12層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土多量、炭化物を少量、焼土を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第13層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を少量、ロームブロックを多量に、焼土を微量に含む。しまり・粘性あり。
第B層	浅黄色	2.5Y 7/6	砂質土

第8号竖穴住居跡炉土層注記

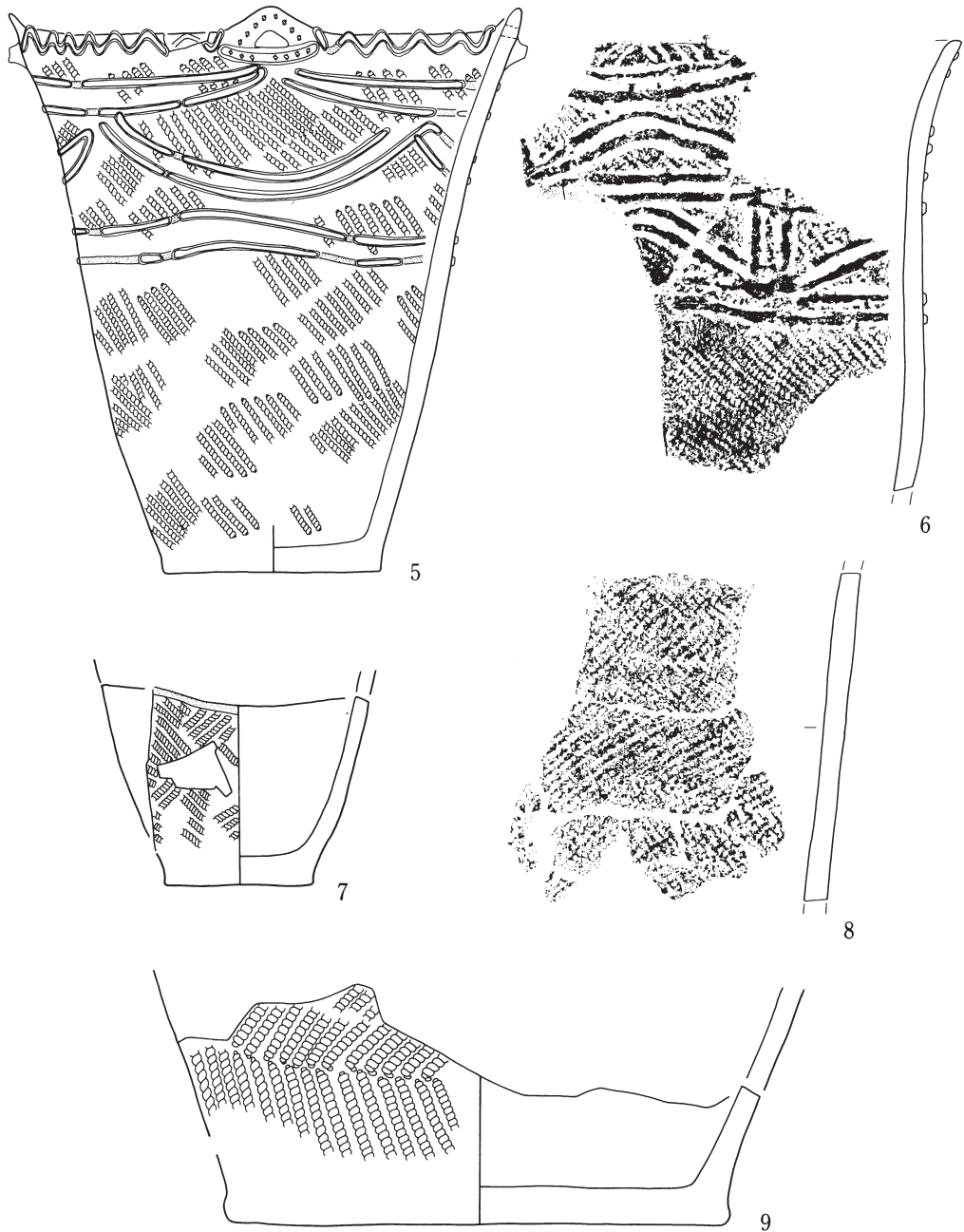
第1層	赤褐色	5YR 5/6	炭化物を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 4/6	ロームを少量含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 4/6	炭化物・焼土を少量、ロームを多量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	ロームを多量に含む。しまりなし、粘性あり。

P₁土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	1mmの炭化物・ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	暗褐色	10YR 3/6	2~3mmの炭化物及び1mmのローム粒を少量含む。しまりややあり、粘性あり。
第3層	褐色	10YR 4/6	ロームを多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第4層	褐色	10YR 4/6	ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
第5層	褐色	10YR 4/6	炭化物を少量、焼土を微量に混入。しまりなし、粘性あり。

P₂土層注記

第1層	黒褐色	10YR 2/6	炭化物を多量に、ローム粒を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/6	炭化物を少量、ローム粒を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/6	炭化物・ローム粒を少量、焼土を微量に含む。しまりなし、粘性あり。
第4層	褐色	10YR 4/6	ロームを多量に含む。しまり・粘性あり。

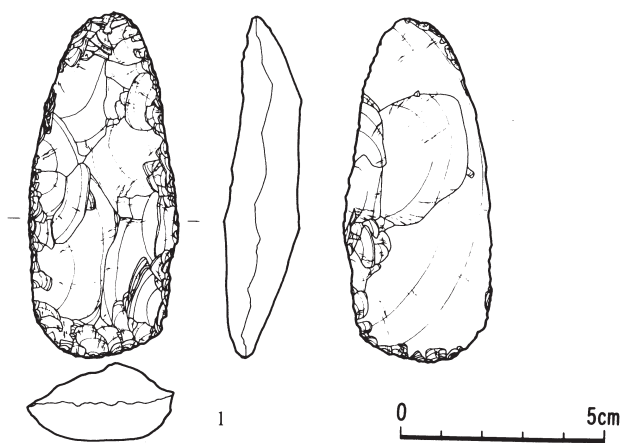


0 10cm

第8号竖穴住居跡 土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
5	床直	深鉢	波状口縁、口端に山形	下位に孤状(粘土紐)	スス状炭付	II群3類
6	"	口縁部	波状口縁、口端に燃糸圧痕、縦位・弧状	(粘土紐)、縄文(R・L)、突起部に貫通孔	"	"
7	覆土	底部	三本燃りLとR	"	"	II群5類
8	"	胴部	L・R・R・L結束羽状縄文	"	"	"
9	2層	底部	"	"	"	"

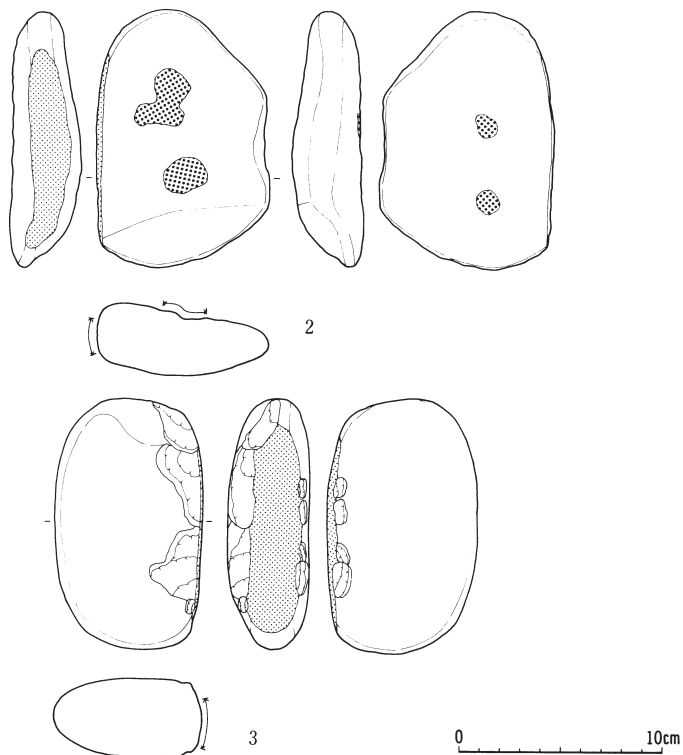
第84図 第8号竖穴住居跡出土遺物(2)



第85図 第8号竖穴住居跡出土遺物(3)

第8号竖穴住居跡出土遺物(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第85図-1	8 H	床面	85	37	19	59.5	珪	E	58	



第86図 第8号竖穴住居跡出土遺物(4)

第8号竖穴住居跡出土遺物(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第86図-2	8 H	床面	127	86	32	461	安	I	224	スリ1面
" - 3	"	"	125	73	38	590	"	"	223	スリ1面

(2) 土 墳

第 1 号土墳 (第87図)

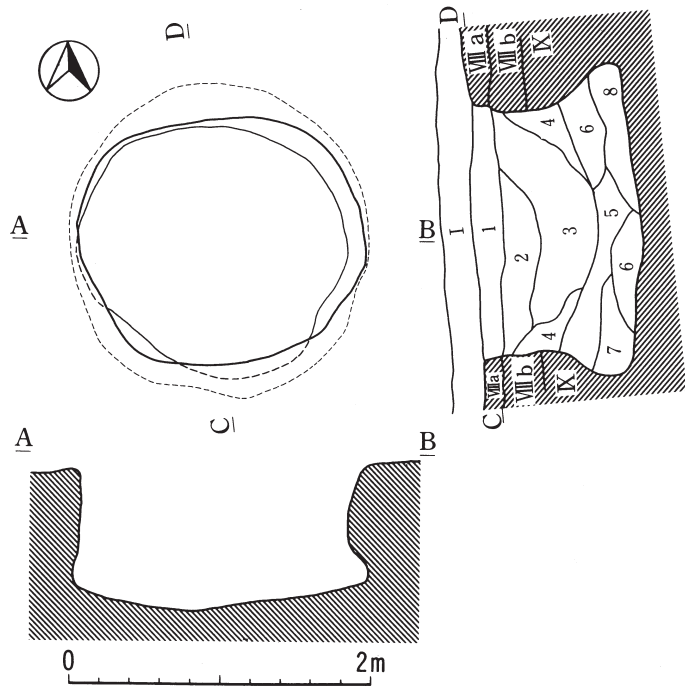
位置と確認 調査区 J 15・16グリッドに位置する。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもつ不整形円形を呈する。規模は、長径 1 m90cm・短径 1 m60cm・深さ 1 m09cmである。

壁 断面形状は、中端で張り出し底面にかけてえぐれたフラスコ状を呈し、壁の構築は堅緻である。壁高は、東壁 80cm・西壁 80cm・南壁 1 m・北壁 1 mである。

床面 第 層に構築し、ほぼ平坦で堅緻な構築である。



第87図 第 1 号土墳

第 1 号土墳土層注記

第 1 層	黒褐色	10YR 2/3	3～5mm大の炭化物を少量含む。しまり強く、粘性なし。
第 2 層	暗褐色	10YR 3/4	5mm大のローム粒・炭化物を含む。しまり強く、粘性なし。
第 3 層	暗褐色	10YR 3/4	1～10mm大のローム粒を多量に、また 5mm大の炭化物を少量含む。しまり強く、粘性ややあり。
第 4 層	褐色	10YR 4/4	ロームを多量に含む。しまり強く、粘性ややあり。
第 5 層	褐色	10YR 4/4	ロームを多量に含む。しまり 4 層より弱く、粘性ややあり。
第 6 層	黄褐色	10YR 5/6	しまり・粘性ともにあり。
第 7 層	褐色	10YR 4/6	黄褐色土を混入。しまり 5 層より弱く、粘性あり。
第 8 層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土を多量に混入。しまり 7 層より弱く、粘性あり。

堆積土 8 層に分層できた。第 1～3 層は炭化物を包含している。堆積土層の観察から、自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第2号土壌 (第88~89図)

位置と確認 調査区I 14グリッドに位置する。第 a層で褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認め

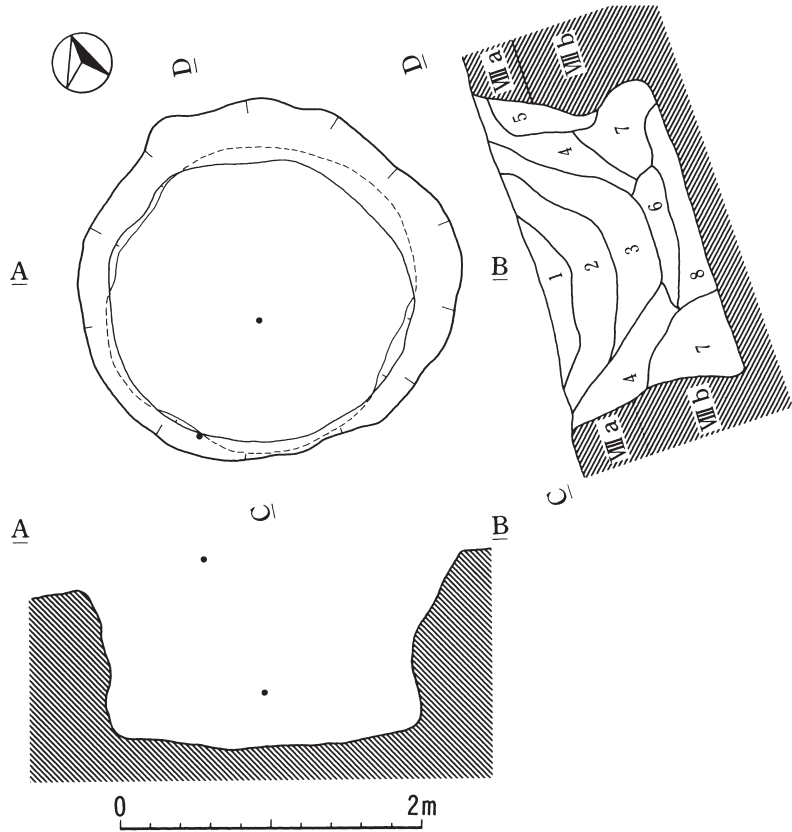
られなかった。

平面形・規模

平面形は、東・北側がやや張り出す円形を呈する。規模は、長径 2 m52cm・短径 2 m36cm・深さ 1 m12cmである。

壁 断面形

状は中端で張り出し底面にかけて若干えぐれたフラスコ状を呈し、壁のつくりはかたい。壁高



第88図 第2号土壌

第2号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	2mm大のローム粒・炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	3mm大のローム粒・炭化物を少量含む。しまり弱く、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒少量混入。しまり弱く、粘性ややあり。
第4層	褐色	10YR 5/6	暗褐色土を混入。しまりややあり、粘性あり。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	しまり強く、粘性あり。
第6層	褐色	10YR 3/4	ロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性ややあり。
第7層	褐色	10YR 3/4	暗褐色土を少量混入。しまり・粘性あり。
第8層	黒褐色	10YR 3/2	ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。

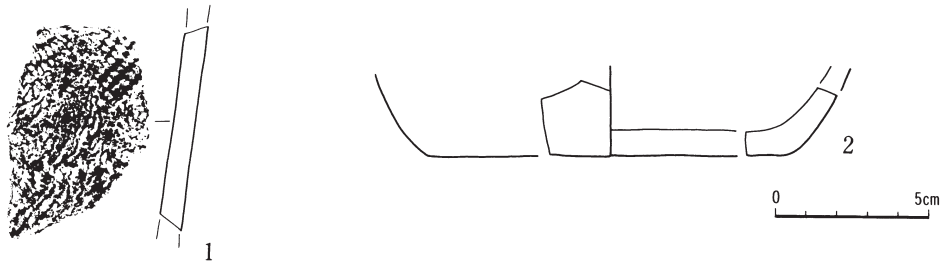
は、東壁 1 m14cm・西壁 98cm・南壁 1 m20cm・北壁 1 m10cmである。

底面 ほぼ平坦でかたいつくりである。

堆積土 8層に分層できた。第1・2層は炭化物を包含している。土層の観察から、自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、堆積土の上位と下位から土器が各々1片出土した。

(奈良昌毅)



第89図 第2号土層出土遺物

第2号土層 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	6 層	胴部	LRとRLの結束羽状縄文		スズ状炭付	Ⅱ群5類
2	1 層	底部	無文		〃	Ⅲ群2類

第5号土層(第90図)

位置と確認 調査区J 14グリッドに位置する。第 a 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

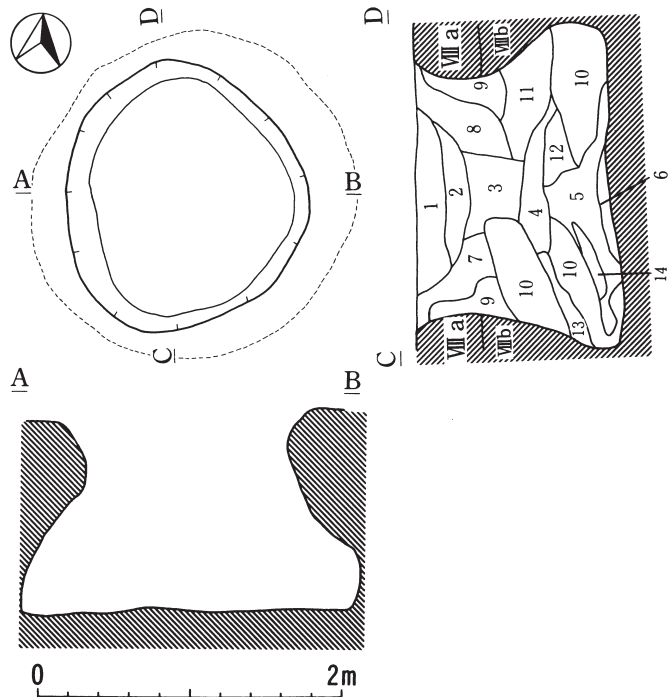
平面形・規模 平面形は、南北にやや長い不整楕円形を呈している。規模は、長径 1 m80cm・短径 1 m60cm・深さ 1 m27cmである。

壁 第 a・第 b 層を壁面としており、壁高は、東壁 1 m37cm・西壁 1 m24cm・南壁 1 m34cm・北壁 1 m24cmである。断面形はフラスコ状を呈している。

底面 全般的に起伏が少なく平坦である。底面の構築は、非常に締まりがあり堅緻である。

堆積土 14層に分層できた。堆積土の中位にある第2・3層は非常にかたく締まりがある。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第90図 第5号土層

第5号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/4	ローム粒多量、3~5mm大のロームブロック、2mm大の炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/4	1mm大のローム粒を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を多量に含む、黒褐色土をやや多量に混入する。2層よりしまりなく、粘性なし。
第4層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土を多量に混入する。しまり3層と同じ、粘性ややあり。
第5層	黒褐色	10YR 3/4	15mm大のロームブロックを少量に含む。しまり2層と同じ、粘性4層と同じ。
第6層	黒褐色	10YR 3/4	10mm大のロームブロックを少量に含む。しまり5層よりあり、粘性5層よりなし。
第7層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土を少量に混入し、10mm大のロームブロックを微量に含む。しまり1層と同じ、粘性6層よりあり。
第8層	黒褐色	10YR 3/4	黄褐色と暗褐色土が混合して含まれる。ローム粒を微量に含む。しまり2層と同じ、粘性は4層と同じ。
第9層	褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第10層	黄褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまり・粘性あり。
第11層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を微量に含む。しまり・粘性10層よりなし。
第12層	黒褐色	10YR 3/4	黄褐色土を多量に混入する。しまり・粘性5層と同じ。
第13層	褐色	10YR 5/6	ロームをブロック状に混入する。しまり9層よりなし、粘性2層と同じ。
第14層	明黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり・粘性10層と同じ。

第6号土壌（第91図）

位置と確認 調査区I

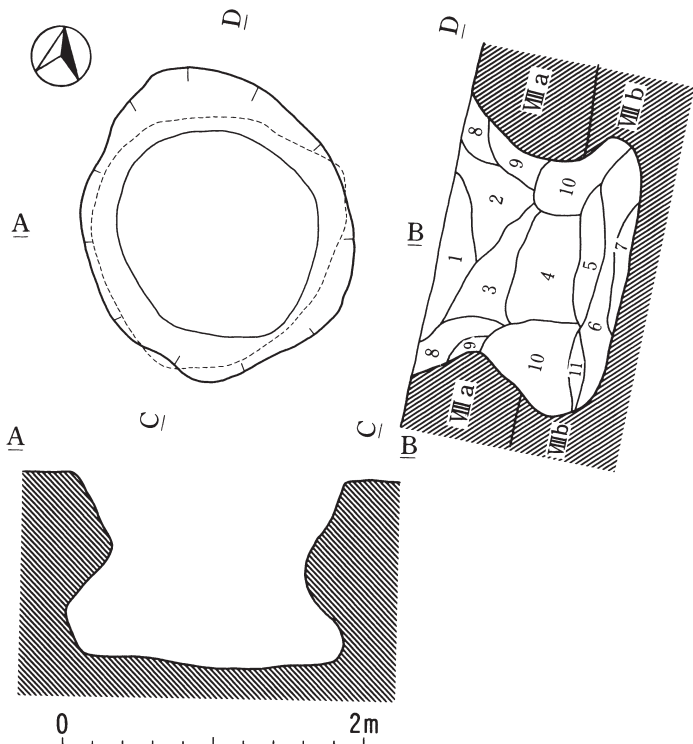
17グリッドに位置する。第a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南北にやや長い不整形円形を呈している。規模は、長径2m8cm・短径1m78cm・深さ1m25cmである。

壁 第a・b層を壁面としており、壁高は、東壁1m21cm・西壁1m22cm・南壁1m25cm・北壁1m21cmである。断面形はフ

ラスコ状を呈している。



第91図 第6号土壌

第6号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/4	3~5mm大のロームブロックを少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/4	5~10mm大のロームブロック、ローム粒をやや多量に含む。炭化物も微量に含む。しまり1層よりなし、粘性1層と同じ。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	5mm大のロームブロック、2mm大のローム粒をやや多量に含む。しまり・粘性1層よりあり。
第4層	暗褐色	10YR 3/4	2~5mm大のローム粒を少量、焼土粒も微量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりあり。
第5層	暗褐色	10YR 3/4	2mm大のローム粒を少量、炭化物も微量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりなし。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり・粘性1層よりあり。
第7層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土を多量に混入する。しまり1層よりなし、粘性1層よりあり。
第8層	暗褐色	10YR 3/4	褐色土を少量に混入し、3mm大のローム粒及び焼土粒を微量に含む。しまり・粘性1層よりあり。
第9層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土を多量に混入する。しまり・粘性1層よりあり。
第10層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土を多量に混入する。しまり・粘性1層よりなし。
第11層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土をやや多量に含む。しまり・粘性1層よりあり。

底面 一般的に起伏が少なく平坦である。底面のつくりは、かたく締めりがある。

堆積土 11層に分層できた。堆積土の下位の第6・7層は非常にかたく締めりがある。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

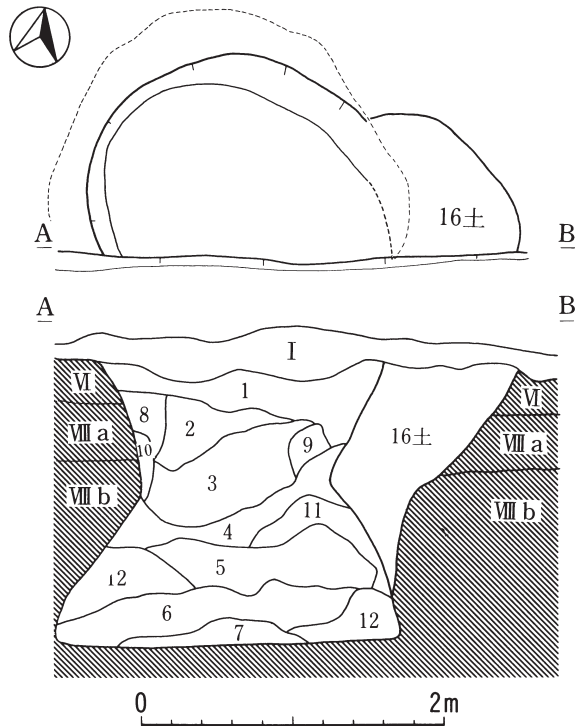
第7号土壇（第92～93図）

位置と確認 調査区J 16・17グリッドに位置する。第a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。土壇の南側部分は調査区域外のため、全掘はできなかった。

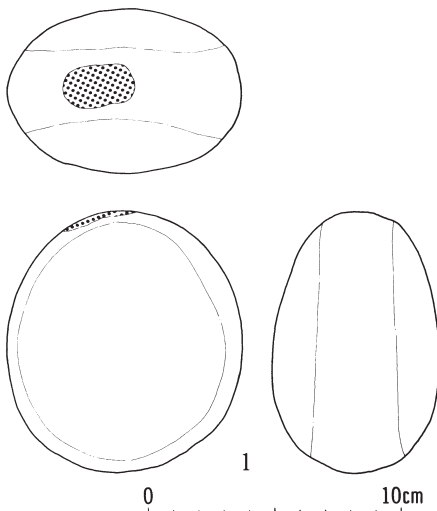
重複 本土頻の東側で第16号土壇と重複している。土壇の断面観察等から、新旧関係は本土壇の方が新しい。

平面形・規模 平面形は、調査部分から推定すると楕円形を呈すると思われる。規模は、長径2m05cm・短径(1m32cm)・深さ1m78cmを測る。

壁 第a・b層を壁面としている。壁高は、東壁1m72cm



第92図 第7号土壇



第93図 第7号土壇出土遺物

・西壁1m74cm・北壁1m78cm、南壁は調査範囲外のため確認できなかった。

底面 一般的に起伏が少なく平坦である。底面の構築は堅緻である。

堆積土 12層に分層できた。

出土遺物 遺物は、覆土中から敲磨器類が1点出土した。

第7号土壌出土遺物

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第93図-1	7土	フク土	103	92	64	873	安	I	225	タタキ1面

第7号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/3	2mm大のローム粒を微量に含み、黒褐色土を少量に混入する。しまりなし、粘性あり。
第2層	黒褐色	10YR 3/3	3mm大のローム粒を少量に含む。しまり1層よりなし、粘性1層と同じ。
第3層	黒褐色	10YR 3/3	3mm大のロームブロック。ローム粒を少量に含む。しまり1層よりなし、粘性1層よりあり。
第4層	褐色	10YR 3/3	黄褐色土を多量に混入し、炭化物も微量に含む。しまり3層よりなし、粘性1層と同じ。
第5層	黒褐色	10YR 3/3	5～10mm大のロームブロックを多量、炭化物を少量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第6層	黄褐色	10YR 3/3	暗褐色土を多量に混入する。しまり・粘性5層よりあり。
第7層	暗褐色	10YR 3/3	3mm大のローム粒、炭化物を微量に含む。しまり6層よりあり、粘性6層よりなし。
第8層	黒褐色	10YR 3/3	ローム粒を多量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第9層	黒褐色	10YR 3/3	1～3mm大のローム粒を少量に含む。しまりあり、粘性1層よりなし。
第10層	黄褐色	10YR 3/3	暗褐色土を多量に含む。しまり9層よりなし、粘性3層よりあり。
第11層	黄褐色	10YR 3/3	混入物なし。しまり・粘性10層と同じ。
第12層	褐色	10YR 3/3	黄褐色土を多量に混入し、炭化物も含む。しまり・粘性5層と同じ。

第9号土壌（第94図）

位置と確認 調査区L 3・4グリッドに位置する。第 a 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。南側部分は調査区域外のため、全掘する事はできなかった。

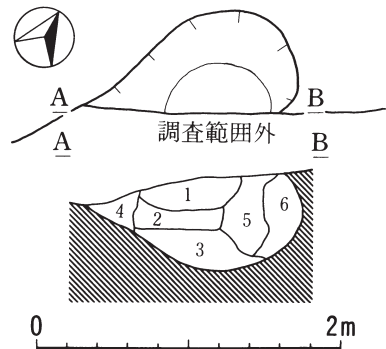
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、残存部位から推定すると楕円形を呈すると思われる。規模は、長径 1 m23cm・短径 (66cm)・深さ62cmである。

壁 第 a 層を壁面としている。壁高は、東壁58cm・西壁38cm・北壁38cmで南壁は調査区範囲外のため確認できなかった。東壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は緩やかに立ち上がる。

底面 起伏は少なくほぼ平坦である。

堆積土 6層に分層できた。全般的に地山のローム



第94図 第9号土壌

第9号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/3	1～2mm大のローム粒を少量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第2層	黒褐色	10YR 3/3	1～3mm大のローム粒を少量、3mm大の炭化物を微量に含む。しまり・粘性1層よりなし。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	黄褐色土を少量に混入し、5mm大の炭化物を微量に含む。しまり2層よりなし、粘性なし。
第4層	黒褐色	10YR 3/3	暗褐色土をやや多量に混入し、3mm大のロームブロックを少量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第5層	褐色	10YR 3/3	3mm大のロームブロックを少量に含み、暗褐色土を多量に混入する。しまり1層と同じ、粘性1層よりあり。
第6層	褐色	10YR 3/3	黄褐色土を多量に混入する。しまり・粘性5層と同じ。

の粒子、ブロックを多く含む。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

（新谷幸三郎・成田滋彦）

第10号土壌 (第95～96図)

位置と確認 調査区 B E 32グ

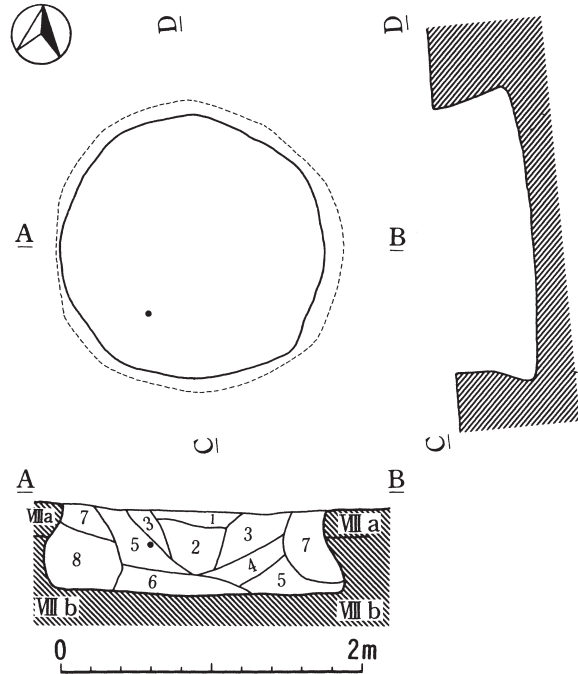
リッドに位置する。第 a 層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径 1 m76cm・短径 1 m70cm・深さ 57cm である。

壁 断面形状は中端から底面にかけてえぐれたフラスコ状を呈し、壁は堅緻な構築である。壁高は、東壁 54cm・西壁 56cm・南壁 50cm・北壁 50cm である。

底面 ほぼ平坦でかたいつくりである。



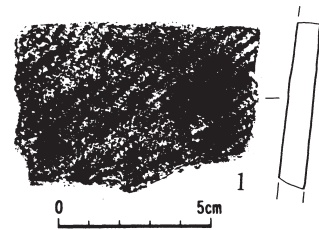
第95図 第10号土壌

第10号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	ロームを多量に、また炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を多量に含む。しまり強く、粘性なし。
第3層	黒褐色	10YR 3/3	ローム細粒を多量に混入。しまり2層より弱く、粘性ややあり。
第4層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒を多量に混入。しまり3層と同じ、粘性ややあり。
第5層	黒褐色	10YR 3/4	ローム粒を多量に、炭化物を微量に含む。しまり・粘性4層と同じ。
第6層	黒褐色	10YR 3/3	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第7層	褐色	10YR 4/6	黒色土を微量に含む。しまり・粘性あり。
第8層	黄褐色	10YR 5/6	黒色土を少量混入。しまり・粘性あり。

堆積土 8層に分層できた。第1～6層はローム粒を包含している。土層の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、第5層中から土器が1片出土しただけである。

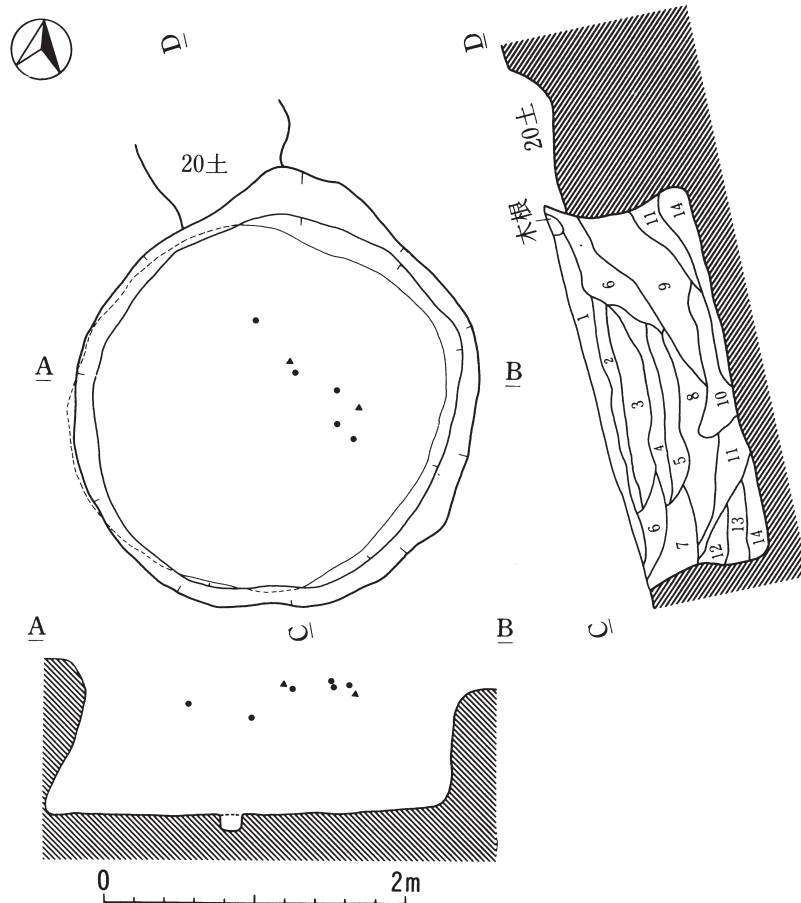


第96図 第10号土壌出土遺物

第10号土壌 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	5層	胴部	縄文 (LR)			スス状炭付 III群2類

第12号土壌（第97～99図）

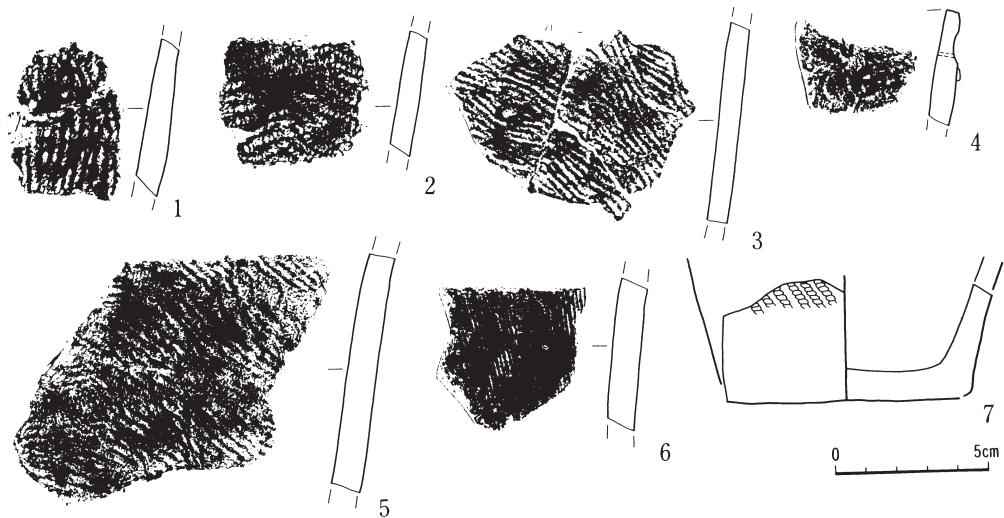


第97図 第12号土壌

第12号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	2～3mmのローム粒を含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	1mmのローム粒を含む。しまりあり、粘性ややあり。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	褐色土混入。しまりややあり、粘性あり。
第4層	にぶい黄褐色	10YR 3/4	ロームブロック・ローム粒を混入。しまりややあり、粘性あり。
第5層	黄褐色	10YR 5/8	褐色土を若干含む。しまりなく、粘性あり。
第6層	褐色	10YR 3/4	5mmのローム粒を混入。しまり・粘性ややあり。
第7層	褐色	10YR 5/8	ロームブロックを少量混入。しまり・粘性なし。
第8層	暗褐色	10YR 3/4	ロームブロックを混入。
第9層	褐色	10YR 5/8	ロームブロック・ローム粒を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第10層	明黄褐色	10YR 5/8	しまり・粘性あり。
第11層	にぶい黄褐色	10YR 3/4	ロームブロックを多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第12層	黒褐色	10YR 3/2	ロームを混入。しまり・粘性あり。
第13層	黄褐色	10YR 5/8	黒褐色土混入。しまり・粘性あり。
第14層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒混入。しまりややあり。

位置と確認 調査区H・I 20・21グリッドに位置する。第 a 層上面で褐色土の落ち込みを確認した。



第98図 第12号土壌出土遺物(1)

第12号土壌 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
1	1 層	胴 部	縄文 (RL)		スス状炭付	Ⅲ群 2 類
2	覆 土	〃	縄文 (LR)		〃	〃
3	1 層	〃	縄文 (RL)		〃	〃
4	5 層	口縁部	波状口縁、ボタン状突起、円形刺突、口唇部に縄文		〃	Ⅲ群 1 類
5	覆 土	胴 部	縄文 (LR)		〃	Ⅱ群 5 類
6	〃	〃	斜位の櫛歯状沈線		〃	Ⅲ群 2 類
7	〃	底 部	縄文 (LR)、底面に縄文		〃	〃

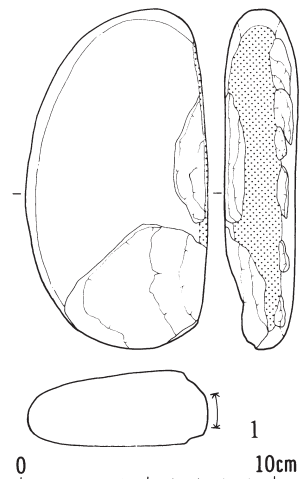
重複 本遺構は、北側で第20号土壌と切り合っており、新旧関係は本遺構が新しい。

平面形・規模 平面形は、北側がやや張り出す不整円形を呈する。規模は、長径 2 m94cm・短径 2 m64cm・深さ88cmである。

壁 断面形状は中端から底面にかけてえぐれたフラスコ状を呈し、壁は堅緻な構築である。壁高は、東壁76cm・西壁 1 m02cm・南壁84cm・北壁 1 m02cmである。

底面 ほぼ平坦でかたいつくりである。

堆積土 14層に分層できた。土層の観察から自然堆積と思われる。



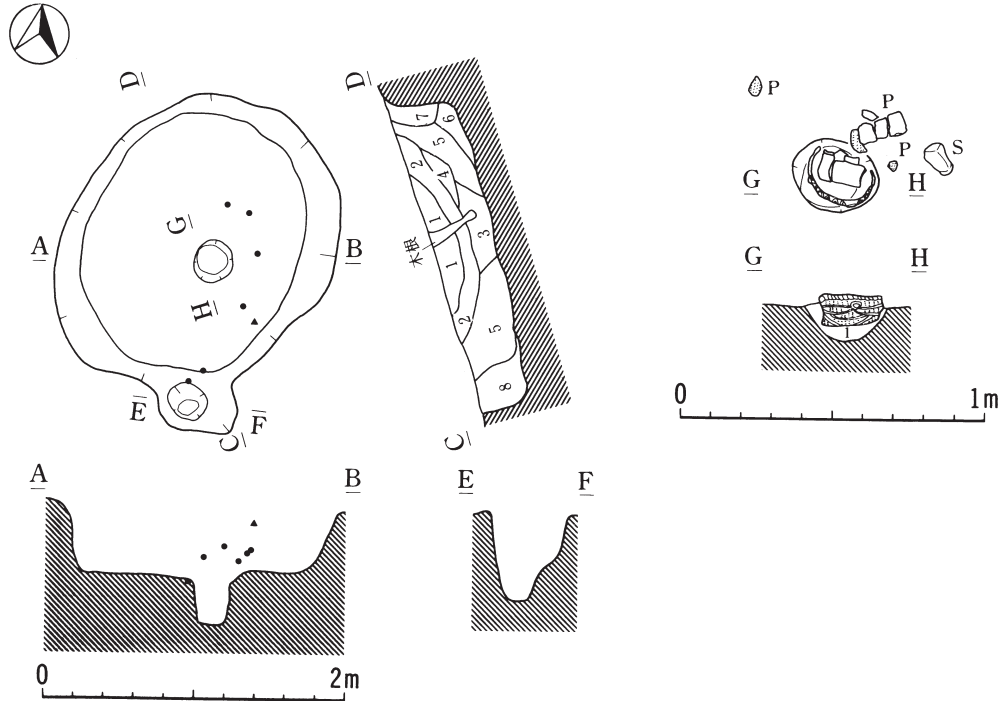
第99図 第12号土壌出土遺物(2)

第12号土壌出土遺物(2)

図 版	出 土 地 点	層	最 大 計 測 値				石質	分類	整理 番号	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第99図-1	12土	1	135	72	29	437	安	I	226	スリ1面

出土遺物 遺物は北側に多く分布し、堆積土の上位から多く出土した。土壌が埋没する際に混入したものとされる。

第13号土壌（第101～103図）



第100図 第13号土壌

第13号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10Y R 7/2	1mmのローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10Y R 3/4	10mmのロームブロックを少量、炭化物・焼土を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	にぶい黄褐色	10Y R 5/6	ローム粒・焼土・炭化物を微量に含む。しまり・粘性あり。
第4層	暗褐色	10Y R 3/4	ローム粒混入。しまり・粘性あり。
第5層	暗褐色	10Y R 3/4	5mmの炭化物を少量含む。しまり・粘性あり。
第6層	暗褐色	10Y R 3/4	黒褐色土混入。しまり・粘性あり。
第7層	黄褐色	10Y R 5/6	暗褐色土混入。しまりあり、粘性なし。
第8層	にぶい黄褐色	10Y R 3/4	しまり・粘性あり。

第13号土壌内埋設土器土層注記

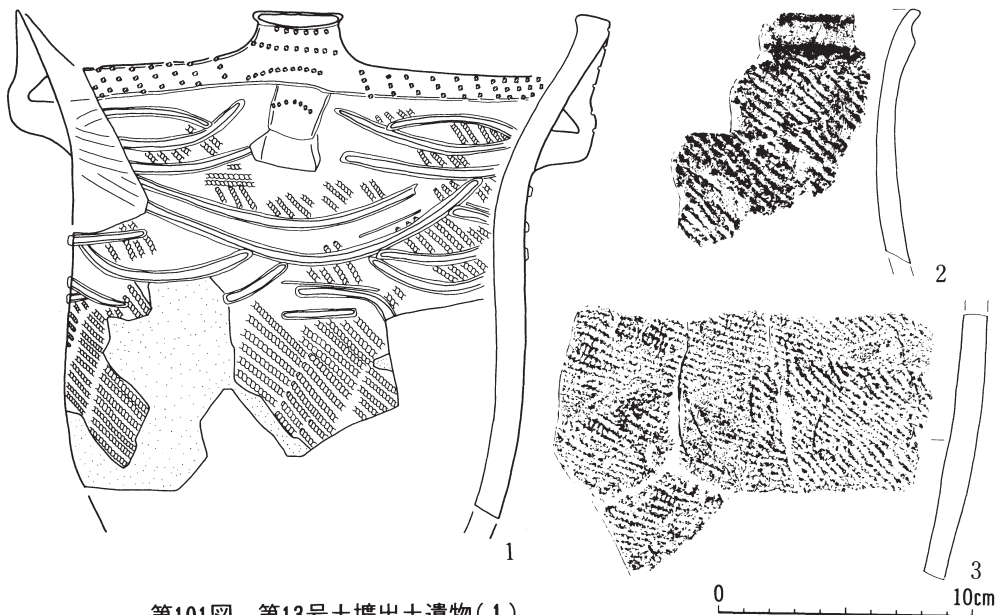
第1層	黄褐色	10Y R 5/6	暗褐色土若干混入。しまりあり、粘性なし。
-----	-----	-----------	----------------------

位置と確認 調査区H 20グリッドに位置する。第 a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 本遺構の南側に小ピットが検出されたが、本遺構に共伴するか否かは不明である。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもつ不整形円形を呈する。規模は、長径 2 m10cm・短径 1 m64cm・深さ44cmである。

壁 東壁が底面から上端にかけて緩やかに立ち上がる。他の壁は底面から垂直に立ち上が



第101図 第13号土壌出土遺物(1)

第13号土壌 土器観察表

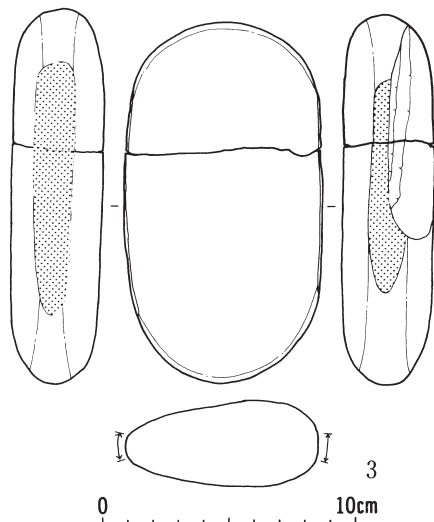
番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	床	直	深鉢	波状口縁(四個の波状)、口端LR圧痕、桶状把手、縄文(RL)弧状粘土紐	スス状炭付	II群3類
2	覆土	口縁部	縄文(RL)、口端部無文		〃	II群5類
3	床	直	胴部	縄文(RL)		〃

っている。壁のつくりは、堅緻な構築である。壁高は、東壁40cm・西壁48cm・南壁32cm・北壁44cmである。

底面 平坦でかたいつくりである。

付属施設 底面中央部に土器が直立の状態で見つけられ、掘り方を有する。掘り方の平面形は円形を呈し、断面形は鍋底形をなす。規模は、長径29cm・短径24cm・深さ11cmである。

堆積土 8層に分層できた。第1～4層には、ローム粒・ロームブロックが包含されている。土



第102図 第13号土壌出土遺物(2)

層の観察から自然堆積と思われる。 第13号土壌出土遺物(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第102図-3	13土	底面	143	79	33	598	安	I	227	スリ2面、接合

出土遺物 遺物は、土壌中央部から出土した土器1で、胴部下半が欠損しているが、波状口縁を呈し横位方向に粘土紐を貼りつけた第 群3 類土器(円筒上層d式)である。他に石鏃2点、敲磨器類が1点出土した。

(奈良昌毅)



第103図 第13号土壌出土遺物(3)

第13号土壌出土遺物(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第103図-1	13土	5	45	13	7	3.3	珪	A	59	
" -2	"	床直	(34)	(19)	8	(4.5)	"	"	61	基部欠損

第15号土壌(第104図)

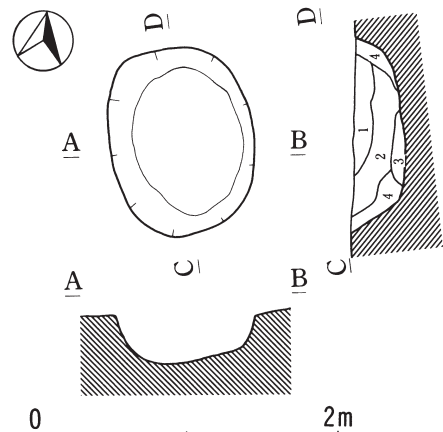
位置と確認 調査区H 16グリッドに位置する。第 a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、東西に長い不整楕円形を呈している。規模は、長径1m24cm・短径94cm・深さ34cmである。

壁 すべて第 a層を壁面としている。壁高は、東壁23cm・西壁29cm・南壁36cm・北壁22cmである。すべての壁は底面から上端にかけて垂直に立ち上がる。

底面 全般的に起伏が少なくほぼ平坦である。底面の構築は軟弱である。



第104図 第15号土壌

第15号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	3mm大のローム粒を少量に含み、黒褐色土を少量に混入する。しまり・粘性あり。
第2層	褐色	10YR 1/6	3～5mm大のローム粒を少量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりなし。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に含む。しまり・粘性1層よりあり。
第4層	黄褐色	10YR 3/6	褐色土をやや多量に含む。しまり2層よりなし、粘性2層よりあり。

堆積土 4層に分層できた。土層の断面から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第16号土壌（第105図）

位置と確認 調査区J 17グリッドに位置する。第7号土壌を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。南側は調査区域外のために全掘はできなかった。

重複 本土頻の西側が第7土壌と重複している。土層の断面から新旧関係は本土土の方が古い。

平面形・規模 平面形は、残存部位から推定するとほぼ円形を呈すると思われる。規模は、長径（85cm）・短径（72cm）である。

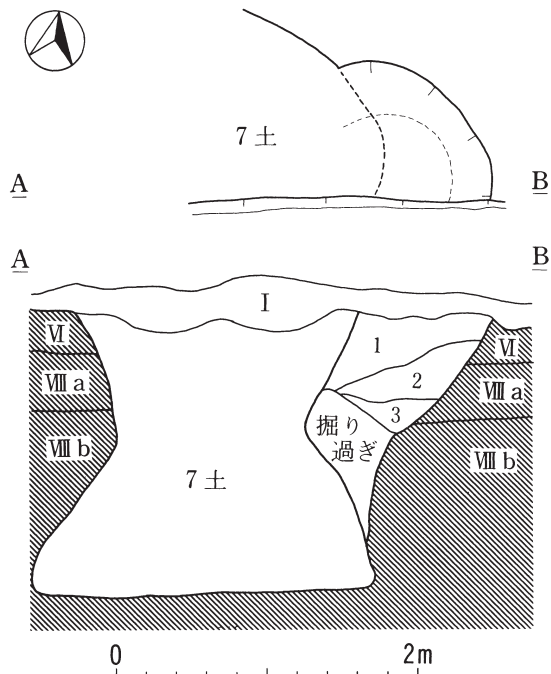
壁 第・a層を壁面としている。壁は、底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁75cmで他の壁は不明である。

底面 掘り過ぎのため確認できなかった。

堆積土 3層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

（新谷幸三郎・成田滋彦）



第105図 第16号土壌

第16号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	2mm大のローム粒、焼土粒を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	15mm大のロームブロックを微量に含み、黄褐色土を少量に混入する。しまり1層よりなし、粘性1層よりあり。
第3層	褐色	10YR 1/6	黄褐色土を多量に混入する。しまり1層と同じ、粘性1層よりあり。

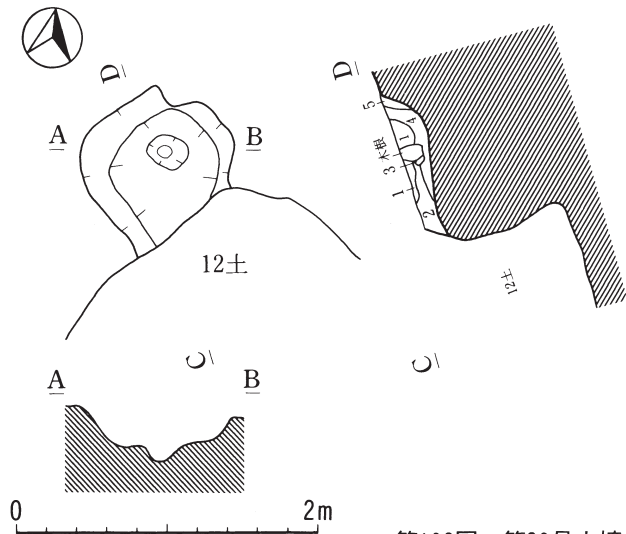
第20号土壌（第106図）

位置と確認 調査区H 20グリッドに位置する。第 a層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

重複 本遺構は、南側で第12号土壌と重複しており、その新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 平面形は南側が不明であるが、残存部位から推定して、北側が内側にえぐれた不整形円形を呈すると思われる。規模は、長径 1 m04cm・短径（86cm）・深さ23cmである。

壁 底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。構築は、軟らかく軟弱である。壁高は、東壁14cm・西壁26cm・北壁22cm



第106図 第20号土壌

第20号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 7/3	しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 7/4	しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 8/6	しまりなし、粘性ややあり。
第4層	褐色	10YR 7/4	しまりあり、粘性なし。
第5層	黄褐色	10YR 8/6	しまりあり、粘性なし。

である。

底面 中央部に深さ10cmの小ピットがあり、構築は軟らかく軟弱である。

堆積土 5層に分層できた。土層の観察から、自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

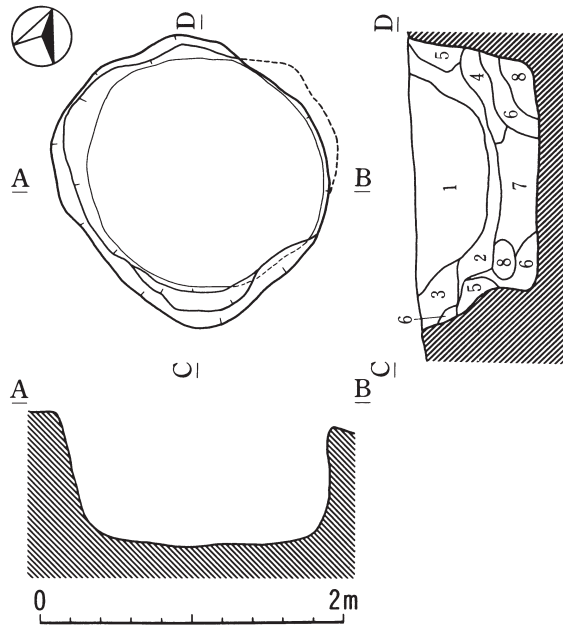
第21号土壌（第107図）

位置と確認 調査区I 20グリッドに位置する。第 a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、でこぼこのある不整形円形を呈する。規模は、長径 1 m92cm・短径 1 m63cm・深さ82cmである。

壁 南壁が中場に段を有しながら立ち上がり、他の壁は底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁の構築はかたく締まりがある。壁高は、東壁72cm・西壁80cm・南壁80cm・北壁80cm



第107図 第21号土坑

第21号土坑土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	3～5mmのローム粒・炭化物を含む。しまり弱く、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/2	3～5mmのローム粒を多量、炭化物を少量含む。しまり1層より強く、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	ロームブロックを少量含む。しまり2層と同じ、粘性なし。
第4層	黒褐色	10YR 3/2	3～5mmのローム粒を含む。しまり・粘性ややあり。
第5層	褐色	10YR 6/4	暗褐色土を混入。しまり強く、粘性あり。
第6層	暗褐色	10YR 4/3	ロームを多量に含む。しまり5層より弱く、粘性あり。
第7層	黒褐色	10YR 3/2	ロームを多量に含む。しまり強く、粘性ややあり。
第8層	黄褐色	10YR 6/5	しまり強く、粘性ややあり。

である。

底面 ほぼ平坦でかたい。

堆積土 8層に分層できた。土層断面の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

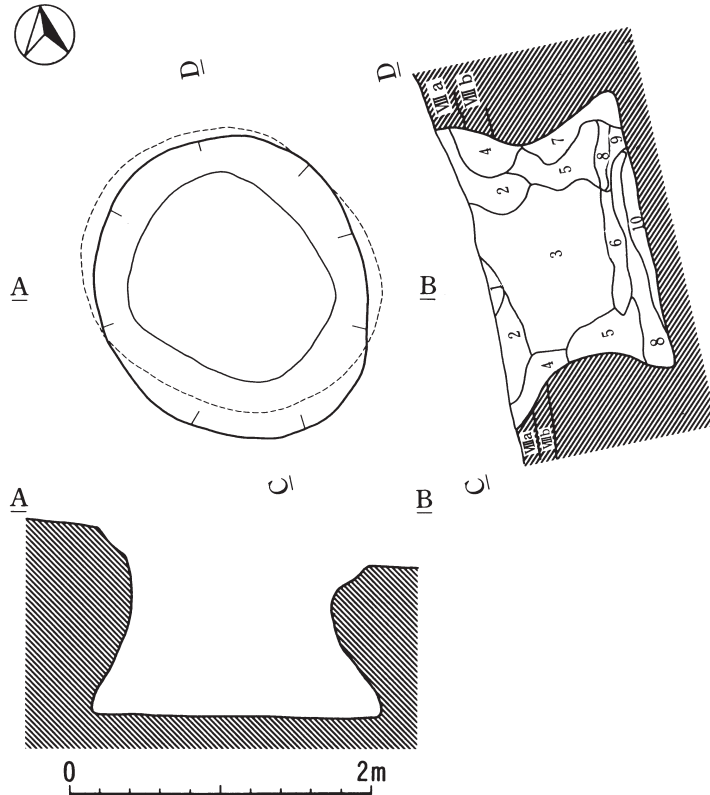
第22号土坑（第108図）

位置と確認 調査区K 20・21グリッドに位置する。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、楕円形を呈する。規模は、開口部で長径 2 m06cm・短径 1 m80cm・深さ 1 m11cmである。

壁 中端で内側に張り出し、底部部がえぐられたフラスコ状を呈し、壁のつくりはかたい。



第108図 第22号土坑

第22号土坑土層注記

第1層	褐	色	10YR 7/4	ローム土・黒褐色土を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黒	褐色	10YR 5/2	5mmのローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黒	褐色	10YR 5/2	2~10mmのローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	褐	色	10YR 7/4	ローム土・黒褐色土を混入。しまり2層より弱い、粘性なし。
第5層	暗	褐色	10YR 5/4	ローム土・黒褐色土を多量に混入。しまりややあり、粘性なし。
第6層	暗	褐色	10YR 5/3	3~5mmのローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第7層	黄	褐色	10YR 7/6	暗褐色土を少量含む。しまり・粘性あり。
第8層	黄	褐色	10YR 7/6	ローム土を張った層であり、かたくしまっている。粘性あり。
第9層	褐	色	10YR 7/4	ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第10層	黒	褐色	10YR 5/2	ローム粒を多量に含む。しまり弱く、粘性ややあり。

壁高は、東壁 1 m・西壁 1 m28cm・南壁 1 m20cm・北壁 1 m22cmである。

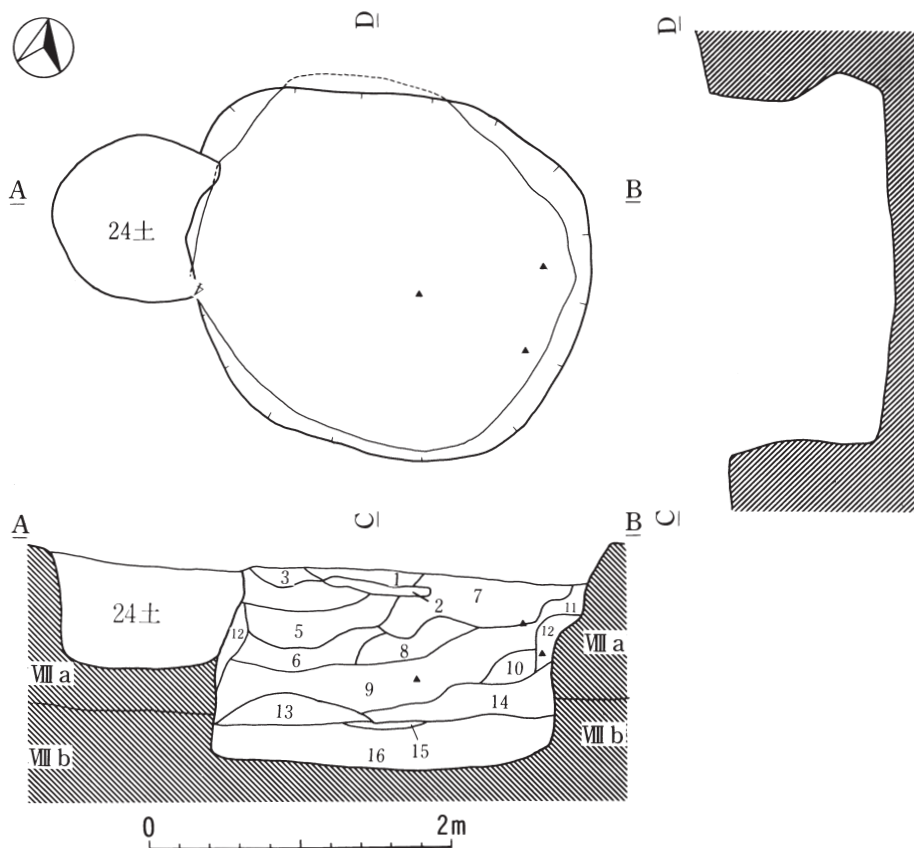
底面 平坦で堅緻な構築である。

堆積土 10層に分層できた。全体的にローム粒を包含する層が多い。土層断面の観察から人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(奈良昌毅)

第23号土坑 (第109~112図)



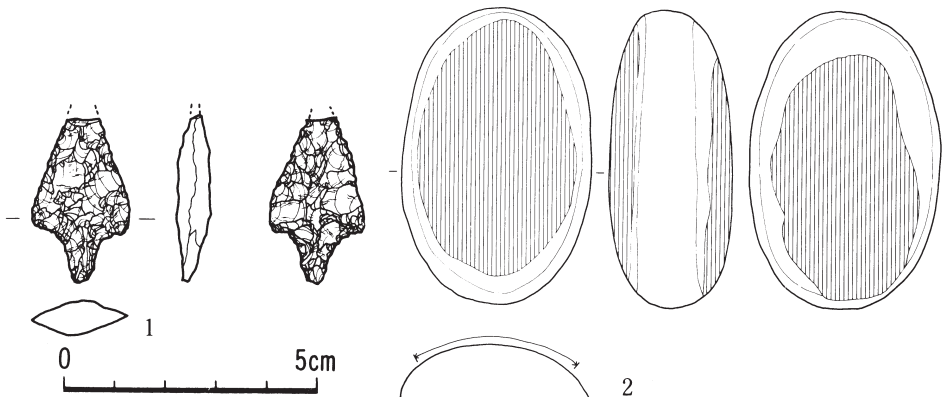
第109図 第23号土坑

第23号土坑土層注記

第1層	暗褐色	色	10YR 3/3	2mm大のローム粒、炭化物を少量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第2層	暗褐色	色	10YR 3/4	3~5mm大のロームブロックを少量に含む、黄褐色土をやや多量に混入する。しまり・粘性1層よりなし。
第3層	黒褐色	色	10YR 3/5	1~2mm大のローム粒を少量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりなし。
第4層	黒褐色	色	10YR 3/5	3~10mm大のロームブロックを少量に含む。しまり3層よりなし、粘性3層と同じ。
第5層	黒褐色	色	10YR 3/2	2~3mm大のローム粒を少量に含む。しまり1層と同じ、粘性3層と同じ。
第6層	黒褐色	色	10YR 3/2	10~15mm大のロームブロックを少量に含む、5mm大のローム粒をやや多量に含む。しまり・粘性5層と同じ。
第7層	暗褐色	色	10YR 3/4	2~3mm大のローム粒を多量に含む、焼土粒も微量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第8層	褐色	色	10YR 4/4	5~10mm大のロームブロック、ローム粒をやや多量に含む。黒褐色土を多量に混入する。しまり5層と同じ、粘性1層と同じ。
第9層	黒褐色	色	7.5YR 3/1	10mm大のロームブロックを少量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりなし。
第10層	褐色	色	10YR 4/6	黄褐色土を多量に混入する。しまり9層よりなし、粘性9層と同じ。
第11層	黒褐色	色	10YR 3/3	3~5mm大のローム粒をやや多量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第12層	黄明褐色	色	10YR 5/6	暗褐色土を多量に混入する。しまり・粘性1層よりあり。
第13層	黄明褐色	色	7.5YR 5/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり・粘性12層と同じ。
第14層	明褐色	色	7.5YR 5/6	暗褐色土を少量に含む。しまり13層よりなし、粘性13層と同じ。
第15層	暗褐色	色	10YR 3/4	3~5mm大のロームブロックを多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第16層	黄褐色	色	10YR 5/6	混入物なし。しまり・粘性あり。

位置と確認 調査区 I・J 21グリッドに位置する。第 a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 本土坑の西側が第24号土坑と重複している。土層の断面から新旧関係は本土坑の方



第110図 第23号土壌出土遺物(1)

第111図 第23号土壌出土遺物(2)

第23号土壌出土遺物(1)

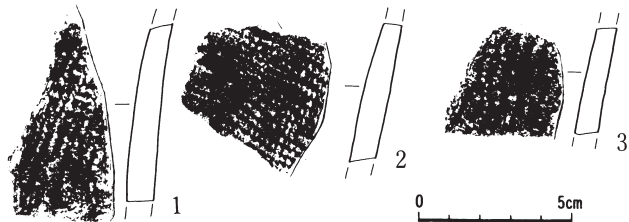
図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第110図-1	23土	11	(32)	19	6	(2.6)	珪	A	60	尖頭部欠損

第23号土壌出土遺物(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第111図-2	23土	11	117	75	49	670	安	I	228	ケンマ2面

が古い。

平面形・規模 平面形は、東西にやや長い不整楕円形を呈している。規模は、長径 2 m86 cm・短径 2 m40cm・深さ 1 m30 cmである。



第112図 第23号土壌出土遺物(3)

壁 第 a・b 層を壁面

第23号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	口頸部	縄文(RL)		スス状炭付	II群5類
2	"	胴部	"		"	"
3	"	"	"		"	"

としている。断面形状は底辺部がややえぐれたフラスコ状を呈する。壁高は、東壁 1 m21cm・西壁 1 m28cm・南壁 1 m06cm・北壁 1 m24cmである。

底面 全般的に起伏が少なくほぼ平坦である。底面の構築は、堅緻である。

堆積土 16層に分層できた。土層上位の2層はロームのブロック状のもので、貼り床状に堆積していた。

出土遺物 遺物は、堆積土から土器3片、石器2点(石鏃1点・敲磨器類1点)が出土した。

第24号土壌（第113図）

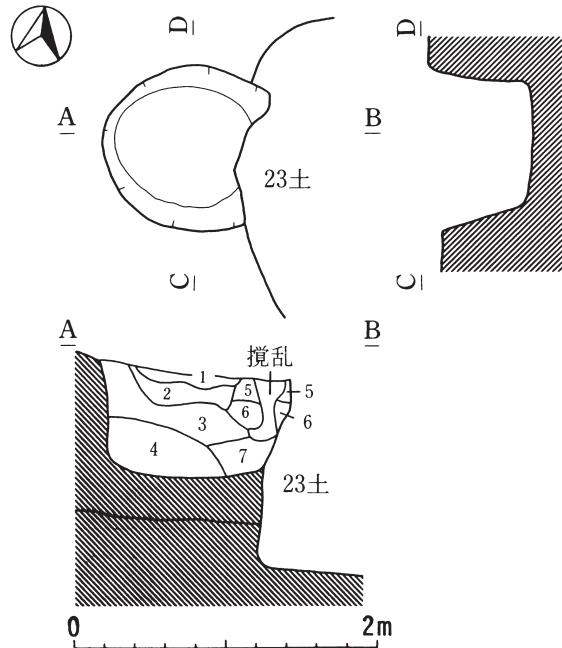
位置と確認 調査区 J 21グリッドに位置する。第23号土壌を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 本土壌の東側が第23号土壌と重複している。土層の断面からその新旧関係は本土壌の方が新しい。

平面形・規模 平面形は、東側が不明であるが残存部から推定すると、東西にやや長い不整形円形を呈していると思われる。規模は、長径 1 m08cm・短径 (92cm)・深さ64cmである。

壁 第 a 層を壁面としている。壁高は、西壁74cm・南壁60cm・北壁68cmで、東壁は重複のため確認できなかった。壁は、すべて底面から上場にかけてほぼ垂直に立ち上がる。

底面 一般的に起伏は少なくほぼ平坦である。底面の構築はやや堅緻である。



第113図 第24号土壌

第24号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	1mm大のローム粒を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	黒褐色	10YR 3/3	1～3mm大のローム粒を少量に含む。しまり1層よりあり、粘性1層よりなし。
第3層	黒褐色	10YR 3/3	2～5mm大のロームブロックを多量に含む。しまり2層と同じ、粘性1層と同じ。
第4層	黒褐色	10YR 3/2	3～10mm大のロームブロックを少量に含む、黄褐色土を少量に混入する。しまり・粘性1層よりなし。
第5層	暗褐色	10YR 3/4	2mm大のローム粒を微量に含む。しまり・粘性1層よりあり。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を多量に混入する。しまり・粘性5層よりあり。
第7層	黒褐色	10YR 3/2	5～10mm大のロームブロックを少量に含む。しまり・粘性4層と同じ。

堆積土 7層に分層できた。一般的に地山のロームの粒子、ブロックを多く含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(新谷幸三郎・成田滋彦)

第25号土壌（第114～115図）

位置と確認 調査区 J 19グリッドに位置する。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

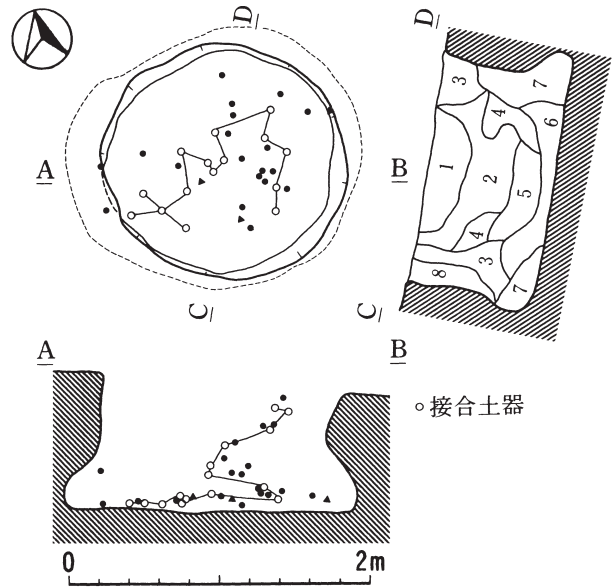
平面形・規模 平面形は、若干凹凸のある円形を呈する。規模は、開口部で長径 1 m64cm・短径 1 m52cm・深さ83cmである。

壁 断面形状は、中端が若干内側に張り出し、底辺部がえぐれたフランスコ状を呈する。壁の構築は堅緻である。壁高は、東壁78cm・西壁90cm・南壁83cm・北壁87cmである。

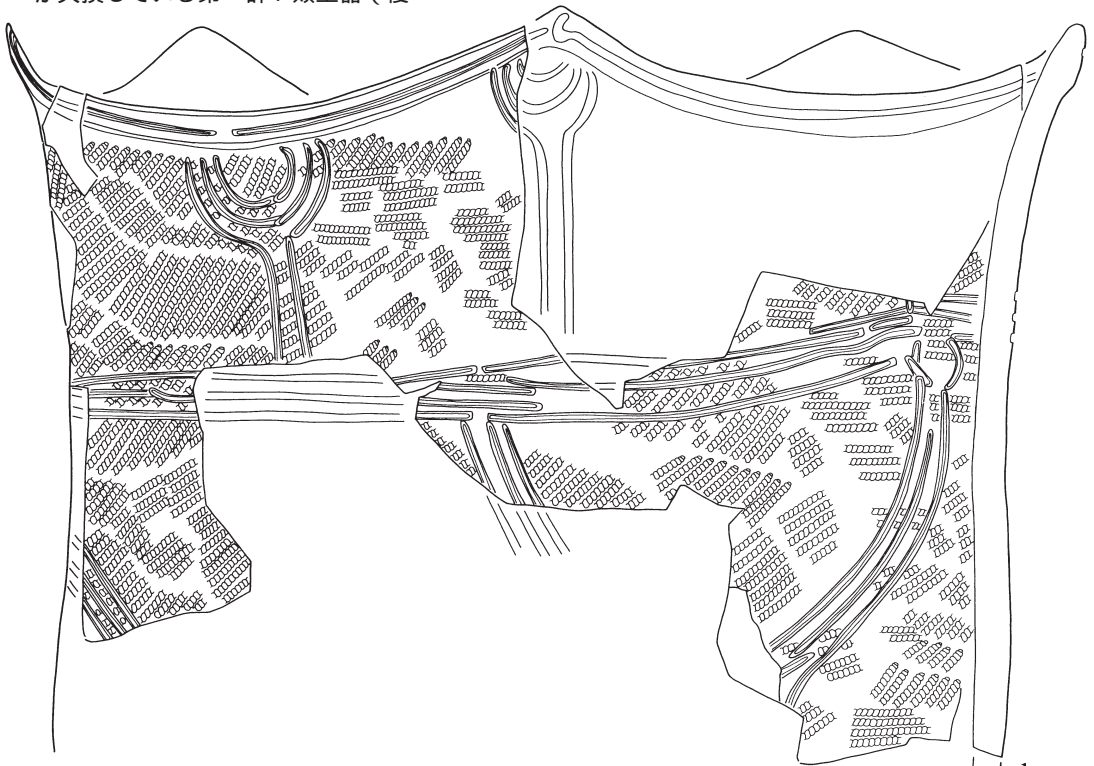
底面 平坦でかたい。

堆積土 8層に分層できた。第6層を除いて、各層ともローム粒・ローム土を包含している。土層断面の観察から人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、堆積土の上位から下位に出土し、特に下位に多く分布している。(1)は、胴部下半部が欠損している第 群7類土器(榎



第114図 第25号土坑



第115図 第25号土坑出土遺物

第25号土坑土器観察表

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
1	覆 土	深 鉢	波状口縁 (5個の波状)、縄文 (L R)、縦位曲線状沈線			II群7類

第25号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	3mm大のローム粒を少量含む。しまり強く、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 2/3	3～5mm大のローム粒を多量に含む。しまり1層より弱く、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	1mm大のローム粒を多量に含む。しまり強く、粘性なし。
第4層	褐色	10YR 4/4	ローム粒を少量含む。粘性ややあり。
第5層	黒褐色	10YR 2/3	1～5mm大のローム粒を多量に含む。しまり2層より強く、粘性あり。
第6層	褐色	10YR 4/4	黄褐色土を少量含む。しまり強く、粘性あり。
第7層	褐色	10YR 6/4	ロームをブロック状に含む。しまり強く、粘性ややあり。
第8層	暗褐色	10YR 3/3	ロームを多量に含む。しまり強く、粘性なし。

林式)の深鉢形土器である。

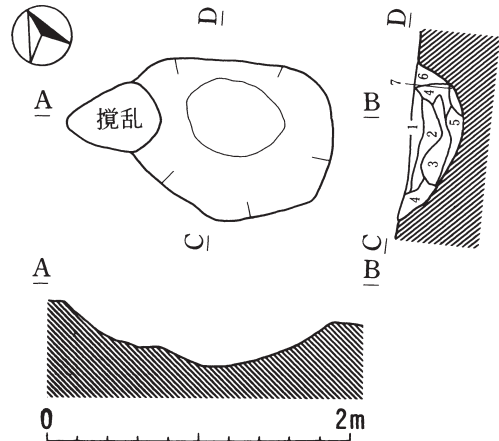
第26号土壌 (第116～117図)

位置と確認 調査区G 21グリッドに位置する。第 a 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、北西側が攪乱を受けてはいるが、不整な楕円形を呈する。規模は、開口部で長径(1m40cm)・短径1m06cm・深さ34cmである。

壁 底面から上にかけて緩やかに立ち上がる。壁の構築はやや軟弱である。壁高は、東壁26cm・南壁26cm・北壁30cmである。



第116図 第26号土壌

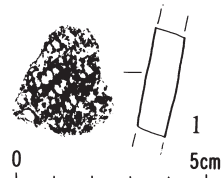
第26号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/3	しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土を若干含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	ロームブロックを若干含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	明黄褐色土をブロック状に多量に含む。しまり・粘性ややあり。
第5層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を多量に含む。しまりあり。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	しまり強く、粘性なし。
第7層	黄褐色	10YR 5/6	しまりあり、粘性ややあり。

底面 断面形が丸底で、壁同様やや軟弱な構築である。

堆積土 7層に分層できた。土層断面の観察から、自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、第3層中から土器が1片出土した。



第117図 第26号土壌出土遺物

第26号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	3 層	胴部	縄文(LR)		スス状炭付	皿群2類

第27号土壌 (第118図)

位置と確認 調査区K 28グリッドに位置する。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

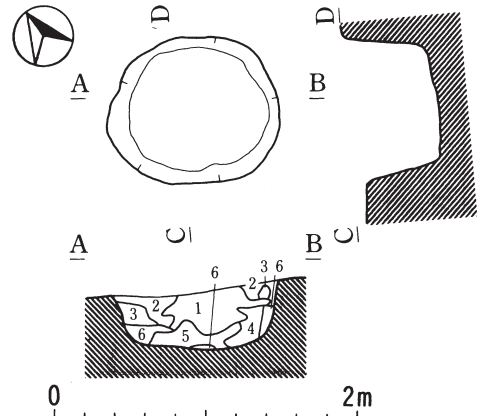
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、若干凹凸のある円形を呈する。規模は、開口部で長径 1 m14 cm・短径96cm・深さ39cmである。

壁 底面から上場にかけて、ほぼ垂直に立ち上がる。壁の構築は堅緻である。壁高は、東壁38cm・西壁32cm・南壁48cm・北壁54cmである。

底面 ほぼ平坦で、堅緻な構築である。

堆積土 6層に分層できた。第1・2・5



第118図 第27号土壌

第27号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 5/4	1~2mmのローム粒を全体的に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 5/4	ブロック状にロームを多量に含む。しまり1層より弱く、粘性ややあり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	黒褐色土を若干含む。しまり弱く、粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を多量に含む。しまり弱く、粘性あり。
第5層	黒褐色	10YR 5/4	5mmのローム粒を全体的に含む。しまりあり、粘性なし。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	黒色土を含む。しまり弱く、粘性あり。

層は、ローム粒・ロームブロックを包含している。土層断面の観察から人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第28号土壌 (第119図)

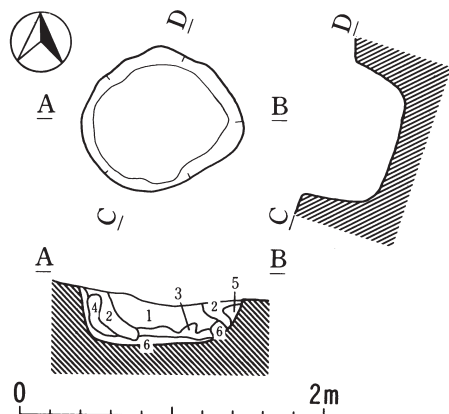
位置と確認 調査区K 28グリッドに位置する。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、東側が若干張り出す楕円形を呈する。規模は、長径 1 m07cm・短径88cm・深さ35cmである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がりながら上場にいる。壁の構築はやや堅緻である。壁高は、東壁24cm・西壁36cm・南壁46cm・北壁42cmである。

底面 ほぼ平坦で、やや堅緻な構築である。



第119図 第28号土壌

第28号土壌土層注記

第1層	黒褐色	10YR 2½	2mmのローム粒を多く含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3¼	ローム粒・ロームブロックを含む。しまり1層よりあり、粘性ややあり。
第3層	黒褐色	10YR 3½	1mm以下のローム粒を多量に含む。しまりなし、粘性なし。
第4層	黄褐色	10YR 5½	黒褐色土を含む。しまり弱く、粘性ややあり。
第5層	黄褐色	10YR 5¾	しまりややあり、粘性あり。
第6層	黄褐色	10YR 5¾	しまり弱く、粘性あり。

堆積土 6層に分層できた。土層断面から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第29号土壌（第120図）

位置と確認 調査区J 34グリッドに位置する。第 a 層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

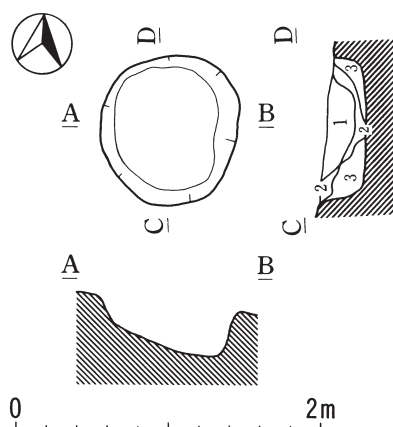
平面形・規模 平面形は、ほぼ均整のとれた円形を呈する。規模は、長径98cm・短径94cm・深さ26cmである。

壁 底面からやや急角度で立ち上がって上場にいたる。壁の構築はやや軟弱である。壁高は、東壁30cm・西壁20cm・南壁30cm・北壁17cmである。

底面 傾斜をなし、やや軟弱である。

堆積土 3層に分層できた。土層断面の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第120図 第29号土壌

第29号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3¼	5～10mm大のローム粒を多量に含む。しまり強く、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3¼	5～10mm大のローム粒・ロームブロックを多量に含む。しまり強く、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5¾	暗褐色土を少量混入。しまり強く、粘性なし。

第30号土壌（第121図）

位置と確認 調査区F・G 22グリッドに位置する。第 a 層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は円形を呈している。規模は、長径78cm・短径74cm・深さ36cmである。

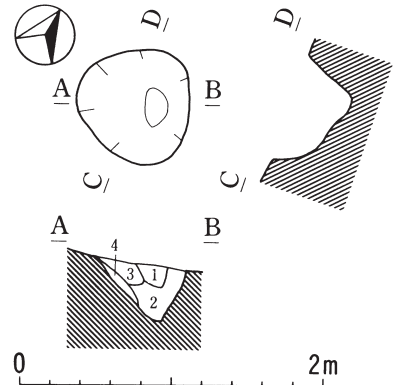
壁 第 a 層を壁面としている。壁高は、東壁26cm・西壁22cm・南壁24cm・北壁37cmである。壁の立ち上がりは、北・東壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、南・西壁が緩や

かに立ち上がる。

底面 やや起伏が多い。底面の構築は、やや軟弱である。

堆積土 4層に分層できた。全般的に地山のロームを多く含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第121図 第30号土塙

第30号土塙土層注記

第1層	褐色	10YR 7/4	ローム粒を多量に含む。しまり・粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 5/2	3～5mm大のロームブロックを少量に含む。しまり1層よりなし、粘性1層と同じ。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	黒褐色土を少量に混入し、10mm大のロームブロックを微量に含む。しまり・粘性2層と同じ。
第4層	褐色	10YR 7/4	黄褐色土を多量に混入する。しまり・粘性3層よりあり。

第31号土塙（第122図）

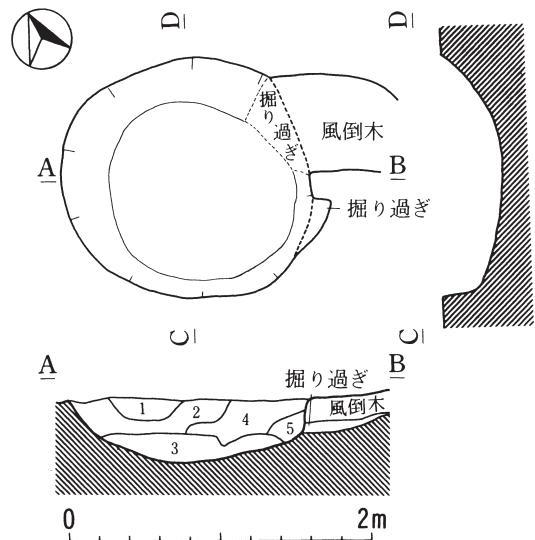
位置と確認 調査区G 17グリッドに位置する。第 a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、不整な円形を呈している。規模は、長径1m72cm・短径1m58cm、深さ42cmである。

壁 第 a層を壁面としている。壁高は、西壁26cm・南壁28cm・北壁32cmで、東壁は風倒木と掘り過ぎのため確認できなかった。壁の立ち上がりは、南・東壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は緩やかに立ち上がる。

底面 全般的に起伏が少なく平坦である。底面は軟弱である。



第122図 第31号土塙

第31号土塙土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	3mm大のローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	褐色	10YR 7/4	暗褐色土をやや多量に混入し、3mm大のローム粒を少量に含む。しまり1層よりなし、粘性1層と同じ。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり・粘性1層よりあり。
第4層	黒褐色	10YR 3/2	黄褐色土を少量に混入し、3mm大のローム粒を少量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第5層	褐色	10YR 7/4	2～5mm大のロームブロックを少量に含む。しまり1層よりなし、粘性3層よりあり。

堆積土 堆積土は5層に分層できた。地山のロームを多く含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第32号土壇（第123図）

位置と確認 調査区F 18グリッドに位置する。第 a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

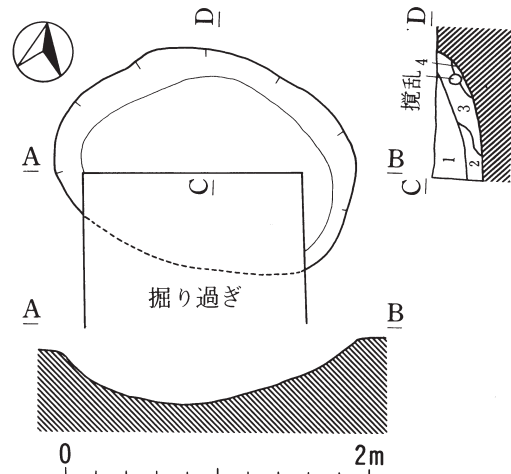
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南側のほぼ半分近くを掘り過ぎたため確認できなかったが、東西に長い不整楕円形を呈すると思われる。規模は、長径 2 m02cm・短径（1 m44 cm）・深さ（29cm）である。

壁 第 a層を壁面としている。壁は、すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁16cm・西壁17cm・北壁16cmで南壁は不明である。

底面 一般的に起伏が少なく平坦である。

底面の構築は、やや堅緻なつくりである。



第123図 第32号土壇

第32号土壇土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	砂質土を混入し、ローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	褐色	10YR 5/4	黄褐色土を少量に混入し、ローム粒も少量に含む。しまり・粘性1層よりなし。
第3層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土を多量に混入し、ローム粒を少量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり1層と同じ、粘性1層よりあり。

堆積土 4層に分層できた。土層の上位には砂質土が混入している。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第33号土壇（第124図）

位置と確認 調査区J 22グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

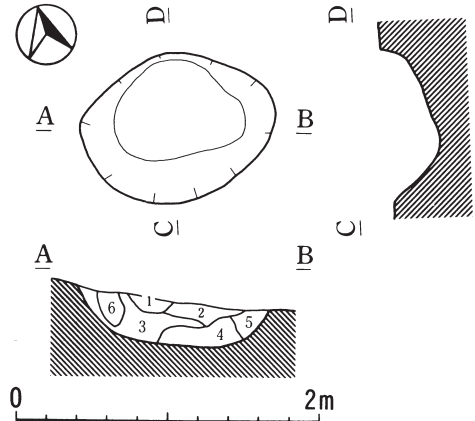
平面形・規模 平面形は、東西に長い不整楕円形を呈している。規模は、長径 1 m30cm・短径 1 m・深さ28cmである。

壁 第 a層を壁面としている。壁は、すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁19cm・西壁36cm・南壁32cm・北壁20cmである。

底面 やや起伏の多いつくりとなっている。
底面はやや軟弱である。

堆積土 6層に分層できた。土層の上位の第1層に炭化物を含んでいる。また、土層の下位の第6層には、焼土の粒子及びブロックを含む。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第124図 第33号土壌

第33号土壌土層注記

第1層	褐色	色	10YR 7/4	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	暗褐色	色	10YR 3/4	5mm大のロームブロック、ローム粒を少量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりなし。
第3層	褐色	色	10YR 5/6	5~20mm大のロームブロックを多量に含む。しまり・粘性1層よりあり。
第4層	黄褐色	色	10YR 3/6	暗褐色土を少量に混入する。しまり・粘性3層よりあり。
第5層	褐色	色	10YR 5/6	黒褐色土、黄褐色土を多量に混入する。しまり1層と同じ、粘性なし。
第6層	暗褐色	色	10YR 3/4	2~10mm大の焼土粒及び焼土ブロックを少量に含む。しまり・粘性2層と同じ。

第49号土壌 (第125図)

位置と確認 調査区G 8グリッドに位置する。第 a層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

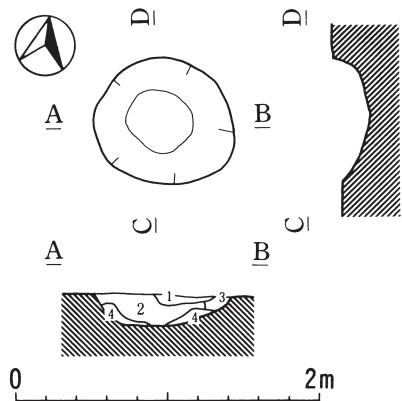
平面形・規模 平面形は、東南に張り出す楕円形を呈する。規模は、長径92cm・短径84cm・深さ23cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁の構築は軟弱である。壁高は、東壁16cm・西壁17cm・南壁14cm・北壁18cmである。

底面 丸底で、軟弱である。

堆積土 4層に分層できた。土層断面の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第125図 第49号土壌

第49号土壌土層注記

第1層	暗褐色	色	10YR 3/4	1mmのローム粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	色	10YR 5/4	ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	色	10YR 5/6	2mmのローム粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	にぶい黄褐色	色	10YR 5/4	ロームを多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。

第50号土壇（第126図）

位置と確認 調査区H 9グリッドに位置する。第 a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

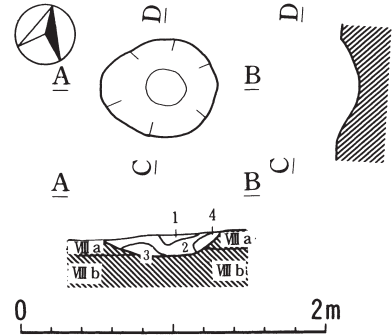
平面形・規模 平面形は、楕円形を呈する。規模は、長径76cm・短径64cm・深さ14cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁の構築は軟弱である。壁高は、東壁12cm・西壁12cm・南壁8cm・北壁10cmである。

底面 丸底で、軟弱である。

堆積土 4層に分層できた。土層断面の観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第126図 第50号土壇

（奈良昌毅）

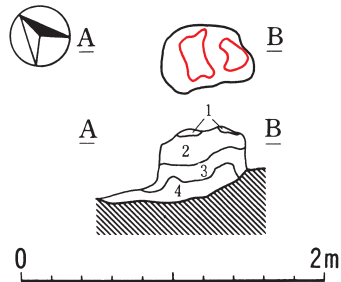
第50号土壇土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/3	炭化物を微量、ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	ロームを多量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第4層	褐色	10YR 4/6	ロームを多量に含む。しまりややあり、粘性あり。

(3) 焼土状遺構

第1号焼土状遺構(第127図)

位置と確認 調査区K 29グリッドに位置する。第 a層を精査中に焼土を確認した。



第127図 第1号焼土状遺構

第1号焼土状遺構

第1層	淡 橙 色	5 YR 9/4	
第2層	黒 褐 色	10 YR 2/2	1～3mm大の焼土粒を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
第3層	暗 褐 色	10 YR 2/4	褐色土を微量に混入。しまり2層より強く、粘性なし。
第4層	褐 色	10 YR 6/4	暗褐色土を微量に混入。しまり3層より弱く、粘性なし。

重複 認められなかった。

平面形・規模 焼土範囲は二箇所、平面形は不整形を呈しており、東側焼土の規模は、長径64cm・短径26cm、西側腕土の規模は、長径44cm・短径16cmである。

堆積土 4層に分層できた。加熱面は認められず、また、使用された痕跡もないことから廃棄された可能性もある。

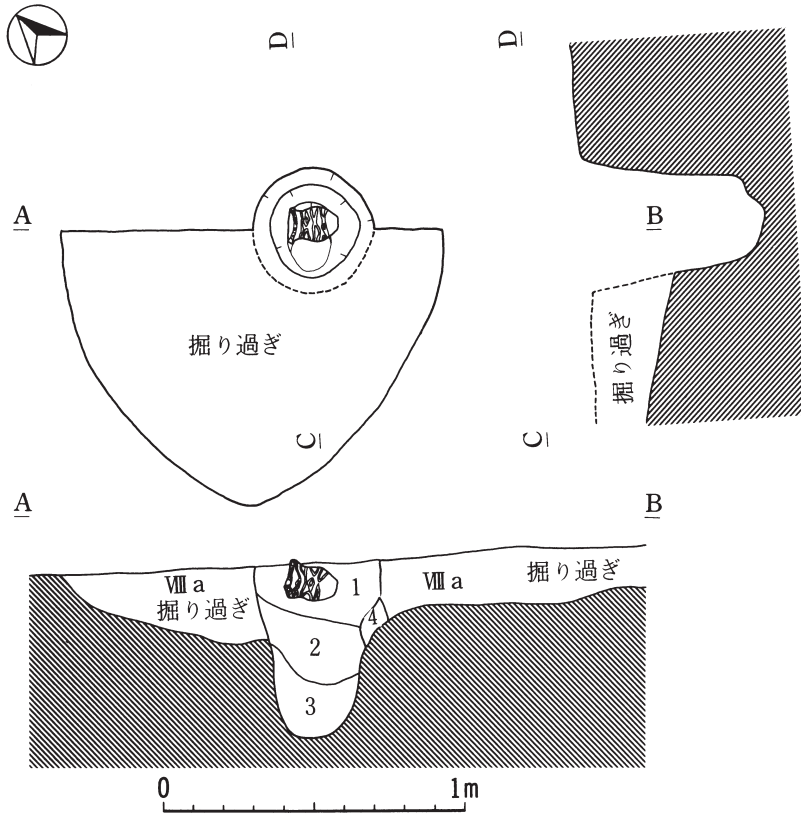
出土遺物 遺物は出土しなかった。

(奈良昌毅)

(4) 埋設土器

第1号埋設土器〔旧番号第19号土壌〕(第128～129図)

位置と確認 本遺構は調査区西側のF 16グリッドに位置する。第 a層を掘り下げた段階で本遺構を確認した。本遺跡からは1基のみの検出である。



第128図 第1号埋設土器

第1号埋設土器土層注記

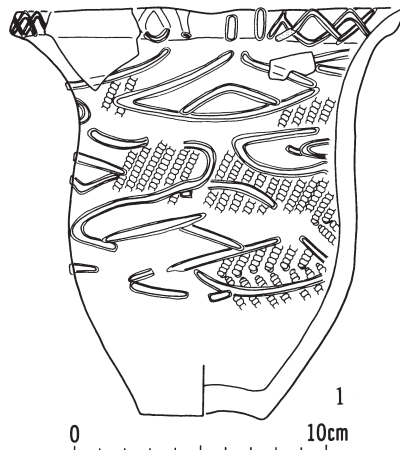
第1層	黒色	10YR 2/3	ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 4/4	ロームを多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土・ロームを混入。しまりややあり、粘性なし。
第4層	明黄褐色	10YR 6/8	ロームブロック。しまり・粘性あり。

出土状況・形態・規模 埋設土器は第1層上面に横倒しの状態で出土した。掘り方の平面形は、南側約半分を掘り過ぎたため全容をうかがえないが、残存部分から推定して、円形を呈すると思われる。また、断面形は円筒形に近似する。規模は直径40cm・深さ55cmを測る。土器内部からは他の遺物は出土しなかった。

堆積土 3層に分層できた。各層ともローム粒を包含している。土層の観察から人為堆積と思われる。

出土土器 土器は口頸部が内反し平口縁の深鉢形土器である。口端にたすき状・下位に横位方向に展開する粘土紐を貼り付けている。文様等から第 Ⅱ 群 3 類土器（円筒上層 d 式）の土器である。

（奈良昌毅）



第129図 第1号埋設土器出土遺物

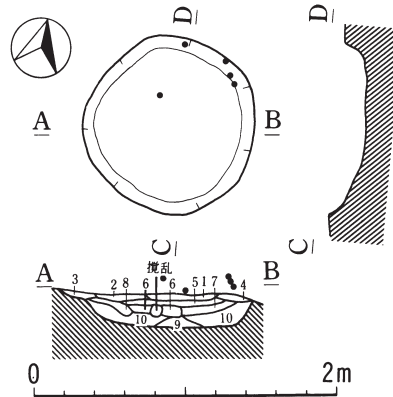
第1号埋設 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	鉢形	縄文（LR・RL）の羽状縄文、口端にたすき状に下位に横位弧状（粘土紐）			Ⅱ群3類

(5) 屋外炉

第1号屋外炉(第130~131図)

位置と確認 本屋外炉は、調査区西側のJ 22グリッドに位置する。第 a層上面で火熱面の一部を確認した。



第130図 第1号屋外炉

第1号屋外炉土層注記

第1層	黒褐色	10YR 5/4	2~3mm大の焼土粒を多量に含む。しまり・粘性なし。
第2層	黒褐色	7.5YR 5/2	2mm大の焼土粒を多量、炭化粒を微量に含む。しまり・粘性なし。
第3層	黒褐色	10YR 5/2	2~5mm大のロームブロックを少量に含む。しまり・粘性1層よりあり。
第4層	黒褐色	10YR 5/4	焼土ブロック、ロームブロックを多量に混入する。しまり1層よりなし、粘性3層よりあり。
第5層	明赤褐色	5YR 5/8	暗褐色を多量に混入する。しまりあり、粘性なし(焼土)。
第6層	明赤褐色	5YR 5/6	褐色土を少量に混入する。しまり5層よりなし、粘性5層よりなし(焼土)。
第7層	黒褐色	10YR 5/4	焼土粒を多量に混入する。しまりなし、粘性あり。
第8層	黒褐色	10YR 5/4	焼土粒、焼土ブロックを少量に含む。しまり・粘性7層と同じ。
第9層	暗褐色	7.5YR 5/4	焼土を多量に混入し、ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性7層と同じ。
第10層	黒褐色	10YR 5/4	焼土粒、炭化物を少量に含み、ロームブロックを多量に含む。しまり7層よりあり、粘性7層と同じ。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形はほぼ円形を呈している。掘り込みの規模は、開口部で長径61cm・短径58cm、底面で長径52cm・短径49cm・深さ24cmである。

堆積土 10層に分層できた。第5層上面が火熱面と思われ、焼土が厚く堆積していることから、長期間にわたって使用されたものと思われる。

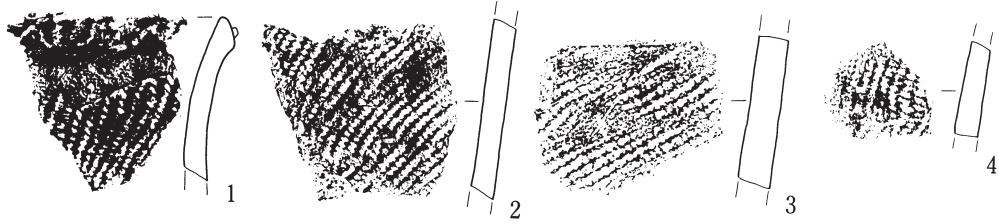
出土遺物 遺物は土器片5点が出土した。

小結

本遺跡から検出された屋外炉は、第8号竪穴住居跡の西側に位置する1基だけである。本遺構は掘り込みを持ち、火熱面は非常に堅緻で、長期間使用したものと思われる。炉の周辺には、柱穴及び床面等は検出されなかったため、単独で使用された屋外炉の性格をもつものと思われる。また、周辺には、第8号竪穴住居跡と第25号土壌が存在するが、本遺構との位置関係から

言えば、第 8 号竪穴住居跡に付属する炉とも思われるが断定はできない。

(奈良昌毅)



第131図 第1号屋外炉出土遺物

第1号屋外炉 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	覆 土	口縁部	平口縁、口端に山形状粘土紐、縄文 (LR)	スス状炭付 II群5類
2	"	胴 部	縄文 (LR)	"
3	"	"	"	"
4	"	"	"	"

2. 遺構外出土遺物

(1) 土器

第 群土器 2 類 [円筒上層 C 式] (第136図 1・2)

本類の土器は、わずか 2 片であるが、他の地区からは出土していない。2 片共に口頸部破片であり、深鉢形と思われるが全体の形状は不明である。

文様構成は、粘土紐を用いて斜位・横位に貼り付け（剥落が著しい）、この粘土紐に沿って、爪形状・半月形状（いずれも竹管状工具使用）の連続刺突文を施文している。粘土紐の上面上は、縄文を施文している。

第 群土器 3 類 [円筒上層 d 式] (第132・133図 3・5～7、第134図 8・9、第136図 23～25、第137～第142図)

本類は、文様構成の差異から a～c 種と細分類を行った。

3 類 a 種 (粘土紐を横位方向に構成するもの) (第132図、133図 3・5、第134図 8、第136～第140図 23～76)

本種の形状は、口頸部が内反し胴部が張り出す形状と、口頸部が内反せず胴部が張らないものの二種類の形状が確認できる。口縁形状には平口縁と波状口縁とあり、また、波状口縁には小さな山形状・突起状のもの・扇形（大型と小型の二種）のもの・M字形突起のものがみられる。

口端には、折り返し口縁及び盛り上がり肥厚した口端のものが多い。この部分には、粘土紐・撚糸圧痕等による何らかの文様を加えられている。斜位・縦位・山形状・たすきがけ状・く状の文様があり、この中では山形状が多い。また、撚糸圧痕は縦位・斜位方向に施文しており斜位方向が多い。その他、ヘラ状工具・指頭状圧痕によるものもあるが極くわずかである。口端の粘土紐の上面上に施文される縄文は、器表面に施文される縄文と同一な原体を使用している。

本類の主体文様である粘土紐の整形技法には、二種認められる。

1. 粘土紐を貼り付けるだけで、その調整は行わないもの

（粘土紐は素文のもの他、貼り付け後に指頭状圧痕を加えるもの・縄文を回転施文するもの・撚糸圧痕を施文するものなどがみられる）

2. 粘土紐を貼り付け後に調整を行ったもので両側をプレスして、断面形が丸みを有し素文のもの

胴部文様との区画は、二条の粘土紐を巡らして明瞭な区画帯を構成するものと、弧状文様が横位方向に展開する不明瞭なものなどがみられる。

文様構成は、弧状文と弧状文が組み合わさった凸レンズ状文様が主で本種のメルクマールで

ある。この他、菱形のものも存在するが凸レンズ文様の変形と考えられる。文様単位は一段のものが主体であるが、文様を二～三段と多段化したものもみられる(1)。

地文には、斜行縄文と羽状縄文とがあり、器表面の全面に施文される。羽状縄文は結束を有するが、施文方法が雑でその回転方向は不規則である。

3類 b種(粘土紐の文様が胸骨文を有する土器)(第134・141・142図 9・74～84)

形状は、口頸部が内反し胴部が張り出す深鉢形である。口縁は波状口縁が主体で、波状突起部は扇形のもの(大型・小型)・頂端部が分かれる二又状のもの・小さな山形状のものが認められる。

区画帯として胴部の張り出し部に二条の粘土紐を巡らして区画帯を構成している。

本種の粘土紐は、素文のものと粘土紐上面に縄文を施文しているものがみられるが、粘土紐の幅は細い。

文様構成は、波頂部下にボタン状突起・ブリッジ及びU字形の粘土紐を貼り付けるものが多い。なおボタン状突起は口頸部文様帯にも貼り付けられる。主体文様は、波頂部下を中心とした縦位の一・二条の粘土紐を主にし、その左右に横位方向に粘土紐を貼り付けるモチーフである。横位の粘土紐には直線的なものと弧状を呈するものがある。(77)は横位の粘土紐の間に縦位の短い粘土紐を貼り付けている。(81)は胸骨文を有する土器であるが、他の土器と比較すると器厚が薄い。

地文は、斜行縄文と羽状縄文であり、施文方法は前記のa種と変わらない。

3類 c種(粘土紐が縦位方向のもの)(第133図 6・7、第142図 85～89)

形状は、口頸部が内反し胴部が張らない深鉢形を呈する。口縁は波状口縁で、これには山形状と扇形状の突起があり前者が多い。

口端には、短い粘土紐による貼り付けと、撚糸圧痕の連続の刻みがみられる。(7)はヘラ状工具による連続の刻みである。

文様構成には、蛇行する文様のもの、斜位状に組み合わせたもの・Y字状のもの等がみられるが、縦位を基本として波頂部下に多く展開する。

粘土紐は、すべて素文で、粘土紐の両脇をなぞっており、断面形は丸みを有する。地文は斜行縄文のみで、羽状縄文はみられない。

第 群土器 4類〔円筒上層e式に相当〕(第143図 90～105)

形状は、口頸部が内反する深鉢形を呈する。四個の小さな山形状突起を有する波状口縁で、大型の突起はみられない。

口端裝飾には、一条の横位沈線のもの(98)・山形沈線のもの(90・91)・一条の横位沈線の上下に各一条の蛇行する貼り付け文がみられるものがある。また、山形突起頂端部に三条の刻みを施すもの(103)もある。

波頂部下には、ボタン状突起や渦巻に似たモチーフの粘土紐が貼り付けられる。

文様は、沈線文様のみで構成されるものと、粘土紐と沈線を組み合わせたものの二種類がみられる。文様構成は、前者では波頂部下から縦位に沈線を施文し、左右に展開する胸骨文のモチーフのもの(90)・(91)・斜位と横位の組み合わせのもの(94)・縦位と弧状のもの(92)がみられる。後者では、粘土紐の両脇に沈線を施文しており、(98)は弧状文様を構成する。

地文の縄文は、羽状縄文はみられず斜行縄文が主体である。

第 群土器 5 類【円筒上層 d・e 式に相当】(第133図 4・第134図 10、第144～147図 106～150)

本類は縄文を主体とした土器で、波状口縁と平口縁に分けて記載する。

〔波状口縁〕

(106)～(116)の土器は、突起部分のみが残存したものを集成したものである。突起部の下部の文様構成が不明なため、すべてが本類に属するか否か疑問な面もあるが、取りあえず本類に含まれるものとして記載したい。

波状口縁の突起部はやや大柄な扇形・山形状突起を有し、波状口縁垂下部にボタン状(大型)の突起(中央部に指頭によるくぼみ)及び弧状の粘土紐など、全体的に第 群 3 類(円筒上層 d 式)のモチーフに近い様相を呈している。

(117)～(134)の口端部装飾は、粘土紐・ヘラ状刺突・捺糸圧痕・縄文等によって行なわれている。縄文施文の場合は、地文の縄文と同一の原体を使用している。また(130)は口唇部上面に連続の刻みを有する。

粘土紐の貼り付けは突起部分に限定され、ボタン状突起(つまみ出しによる作出)や弧状の粘土紐を貼り付けるものが主体である。また、扇状突起の上端に粘土紐を縦位に(115)、突起部に橋状把手を貼り付けたもの(119)もみられる。粘土紐の上面は素文であり、縄文等は施文されていない。器表面にボタン状突起や粘土紐が貼り付けられるものは、器裏面に刺突痕を有するものが多いのが特徴である。

地文は羽状縄文が少なく、斜行縄文が主体を占める。

〔平口縁〕

平口縁(135～150)は、波状口縁の土器と比較すると少ない。

形状は、口頸部が内反する深鉢形である。口端には、山形状・たすきがけ状の粘土紐が加えられ、その粘土紐の幅は細く素文のものが多い。(141)は縄文を全面に施文している土器である。

地文は、斜行縄文が主で羽状縄文はみられない。(150)は乱雑に回転方向を変えて施文している。

第 群土器 6 類【大木 7 b・8 a 式に相当】(第135図 12、第148図 151～158)

形状は、口頸部が張り出すキャリパー形を呈する深鉢形である。波状口縁は、(12)が山形状突起で頂端部が二又に分かれているが、全体に波状口縁は一段高い突起状の高まりをもつものが多い。器内面の調整は、ミガキがかけられ良好な整形を呈している。色調は、器表面が暗褐色の暗い色調を呈するものが多い。口唇部の形状は、鋭利で断面が三角形状のもの・肥厚し丸みをもつもの・口唇部上面をナデて平坦に整形を行っているものに分かれる。

文様要素には、粘土紐・沈線・撚糸圧痕・竹管・ボタン状突起等がある。粘土紐の上面には(154)のように縄文を回転するものもみられるが、主体は素文であり、幅が狭く両側をなぞる粘土紐が多い。(12)は器裏面の口縁部に山形状に粘土紐を貼り付けている。沈線は単独で使用されるものと粘土紐を伴うものに分かれる。撚糸圧痕は粘土紐の脇に沿って圧痕し、ボタン状突起はつまみ出しの突起である。

胴部文様の区画としては、粘土紐を一～二条を巡らしたものと文様を構成しながらも文様帯区画が不明瞭なものに分かれる。

文様構成には、横位方向に展開する弧状文様のモチーフのもの、斜位状のもの、渦巻状のもの(渦巻が垂下するものもある)等がある。

地文には、単節の縄文(RL)が多く、複節も使用される。

第 群土器 7 類【榎林式に相当】(第149図 164～169)

形状には、口頸部が内反ないしは外反する深鉢形(平口縁・波状口縁)と、口頸部が内反し肩部が張る浅鉢形の二種類がみられる。

波状口縁を有する土器は、波頂部下に一段盛り上がった粘土粒を貼り付けている。口端には、波頂部下の文様を中心として横位に沈線を巡らすものや、竹管状工具による連続の刻みが認められる。

文様構成は、二条の沈線を一単位として縦位方向の曲線文様を施文しているものが多いが、縄文のみの土器もみられる。

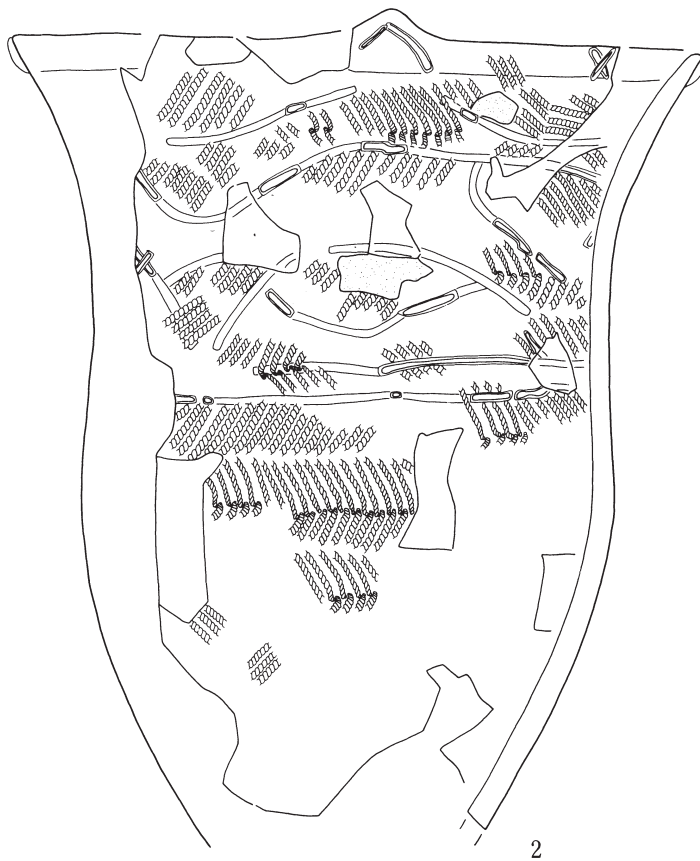
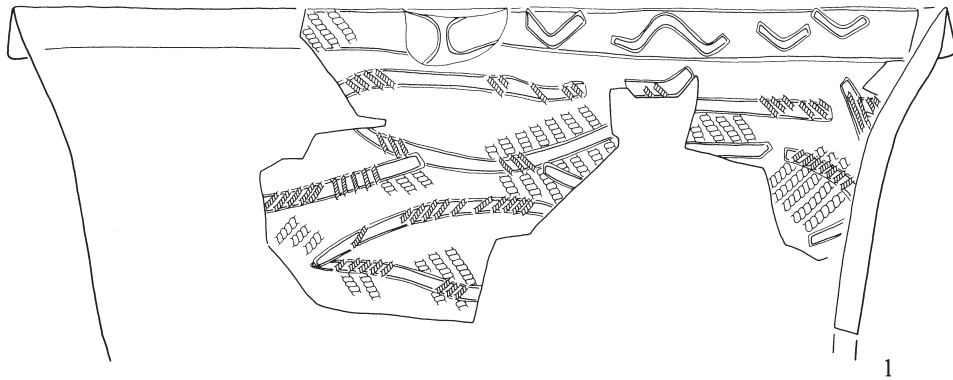
第 群土器 2 類【中期末葉～後期前葉に相当】(第149図 170～179)

本類の土器は、第 群土器 5 類(円筒上層式)で分類した粗製土器とは製作上相異なるものである。

形状は、口頸部が内反ないしは外反するタイプの深鉢形である器表面にスス状炭化物の付着が多い。波状口縁(179)もみられるが、平口縁が主体を占める。口唇部は、丸みをもつもの・上面が平坦で断面形が「形」の二種に分かれる。

折り返し口縁をもつ土器には、その部分に縄文を施文するものと、無文帯とするものの二つの方法がみられる。

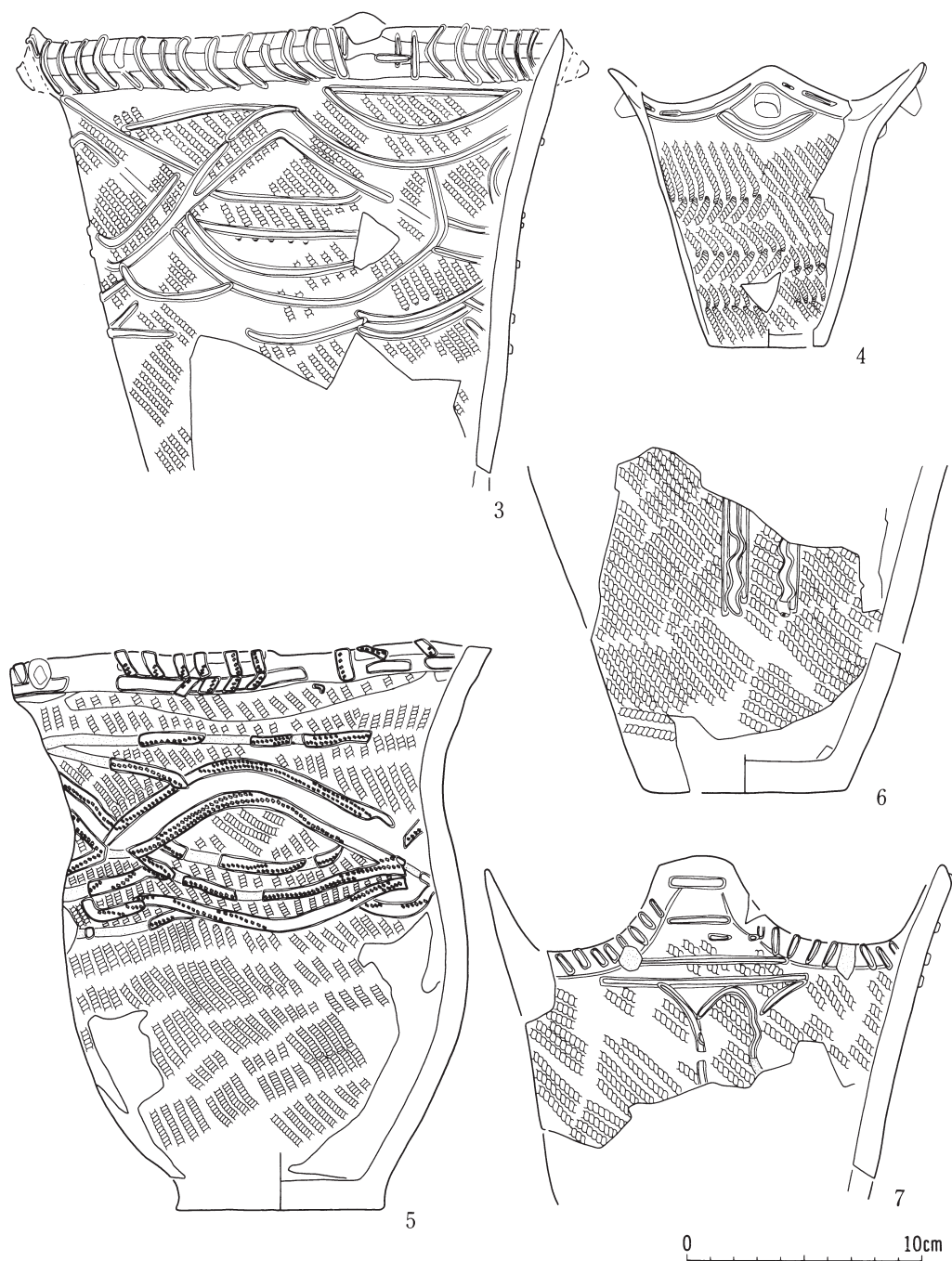
(成田滋彦)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	G-25 1層	深 鉢	口端に山形状粘土紐、地文LR、口縁部に弧状粘土紐、粘土紐LRとRL	II群3類
2	K-30 1層	〃	波状口縁、横位弧状粘土紐、LRとRLの結束羽状縄文	〃

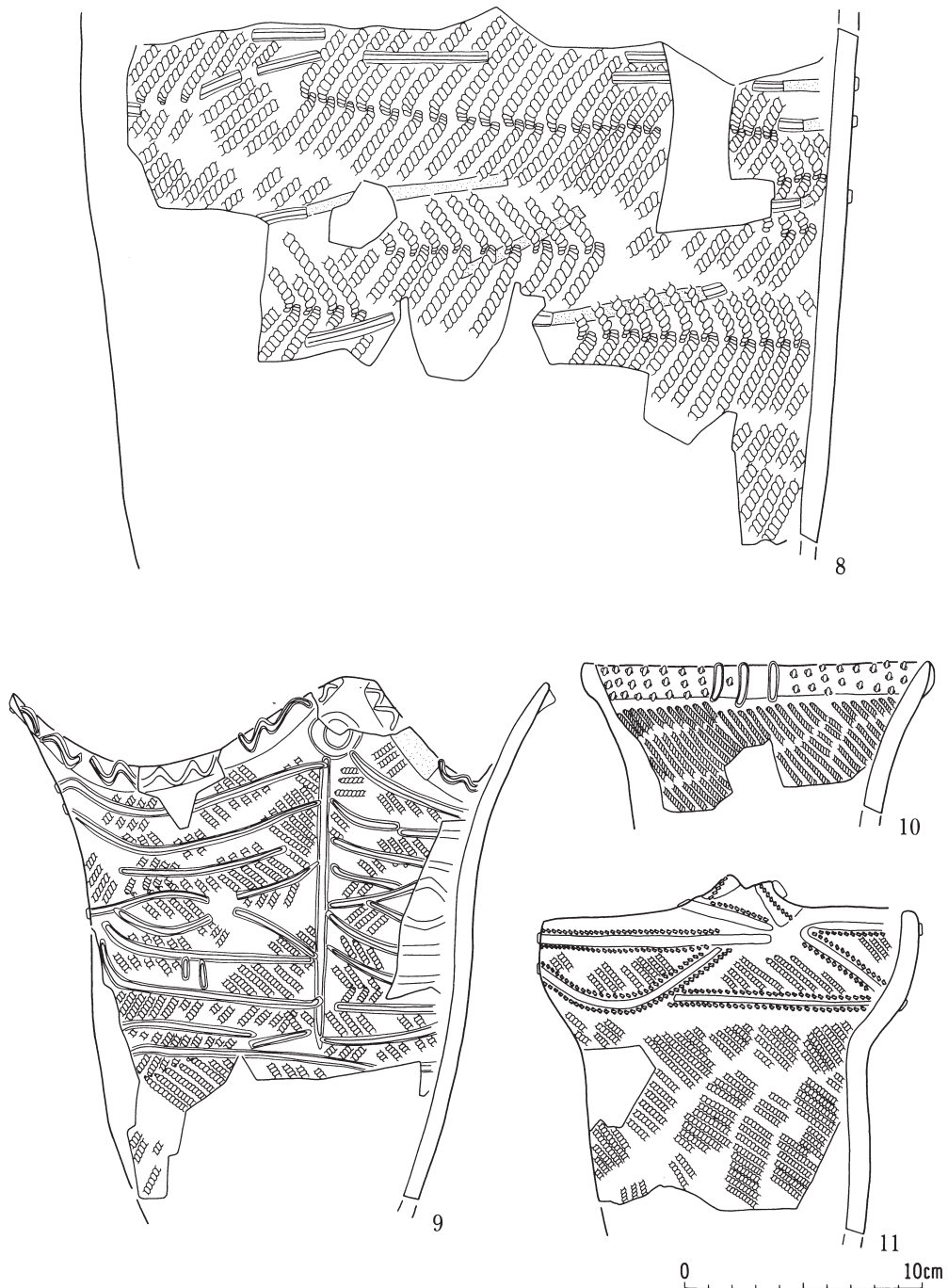
第132図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(1)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
3	F-24 I層	深 鉢	波状口縁、口端に山形状横位に弧状の地文RL、粘土紐、粘土紐は素文	II群3類
4	E・F-22 I層	鉢	波状口縁、波状口縁の垂下部にボタン状突起、口端に横位沈線、LRとRLの結束羽状	II群4類
5	F-24 I層	深 鉢	平口縁、口端にく状字・胴部に横位弧状粘土紐、粘土紐上面に燃承圧痕	II群3類
6	G-25 I層	〃	縄文RL、縦位蛇行(粘土紐)	〃
7	〃	〃	波状口縁、縄文RL、縦位蛇行(粘土紐)	〃

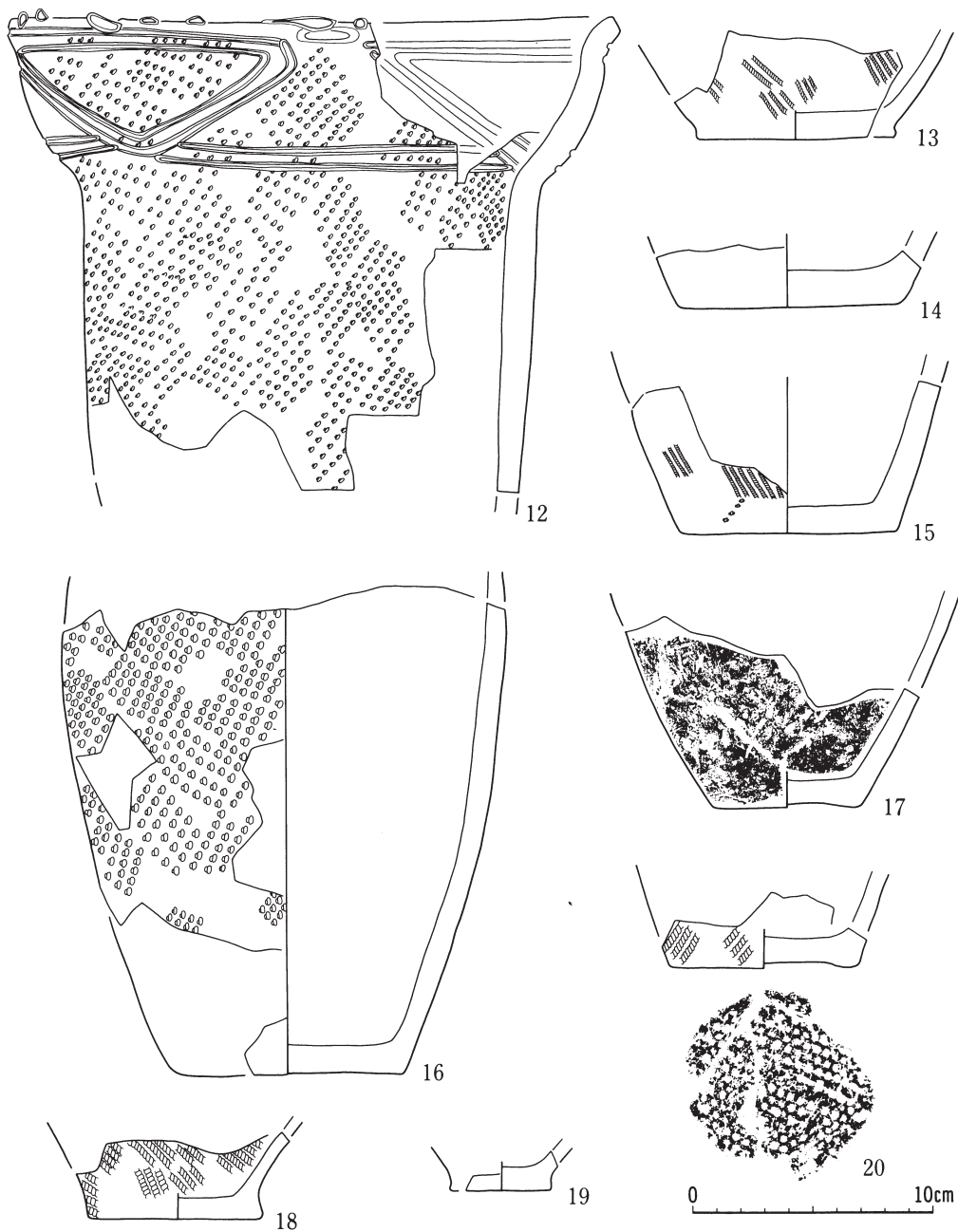
第133図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(2)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面施文	文様	分類
8	H-12 I層	深鉢	LRとLR・LRとRLの結束羽状縄文		II群3類
9	F-28 I層	〃	波状口縁、ボタン状突起、胸骨文(粘土紐)、羽状縄文		〃
10	E-23 〃	〃	RL圧痕、縄文RL、縦位(粘土紐)		II群5類
11	H-25 〃	〃	縄文(RL)、LRの(然糸圧痕)、波状口縁		II群6類

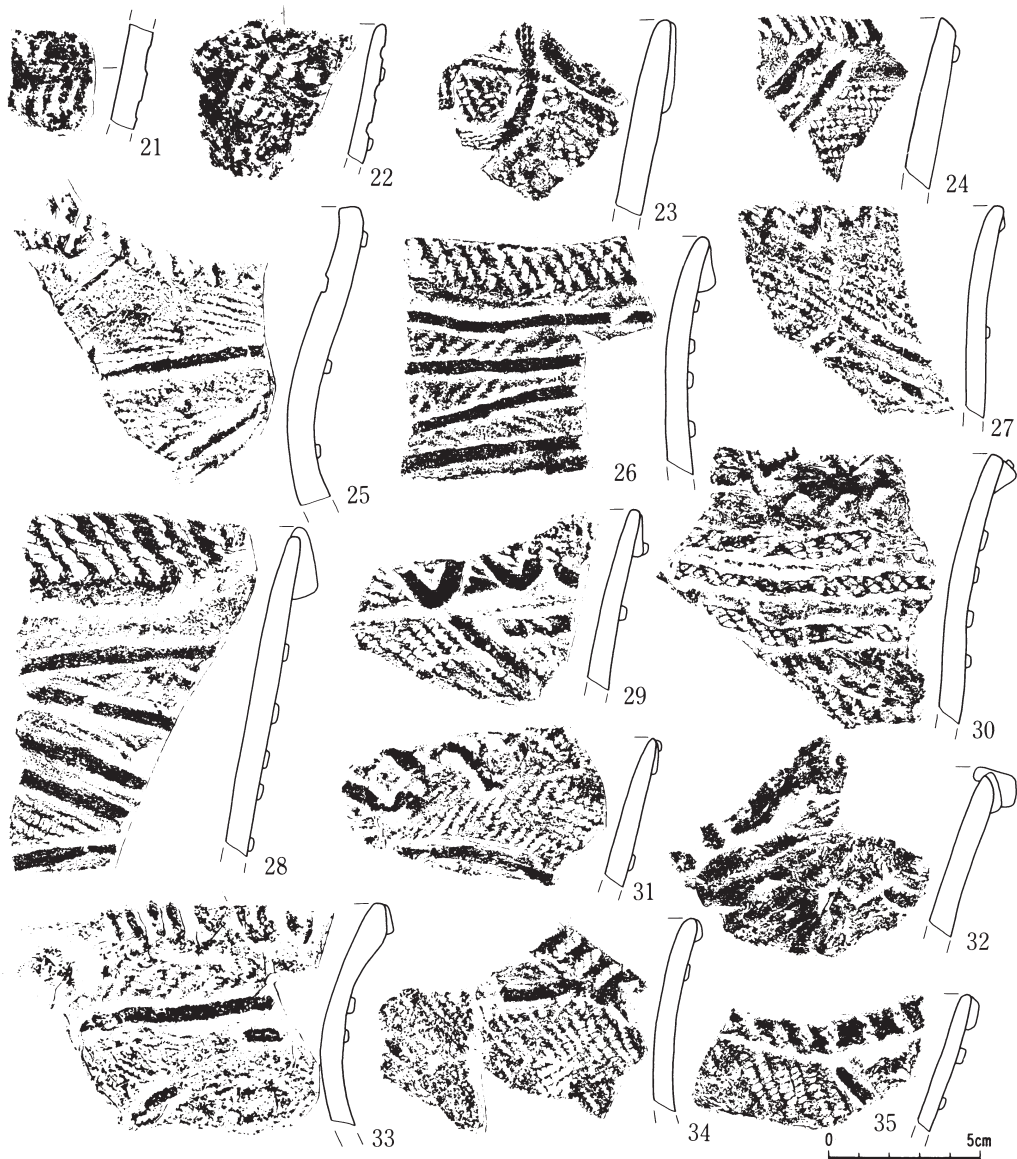
第134図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(3)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
12	A1-24 I層	深鉢	縄文(RLR)横・斜位(沈線)	口端に粘土紐		II群6類
13	AK-26 "	底部	"(RL)		スス状炭付	III群2類
14	H-26 "	"	無文			"
15	F-34 II層	"	LR燃糸圧痕、縄文(LR)			"
16	I-24 I層	深鉢	縄文(RLR)			II群5類
17	F-23 "	底部	無文		スス状炭付	"
18	F-25 "	"	縄文(RL)			"
19	E-16 "	"	無文			"
20	G-35 "	"	縄文(LR)、底面に網代痕			"

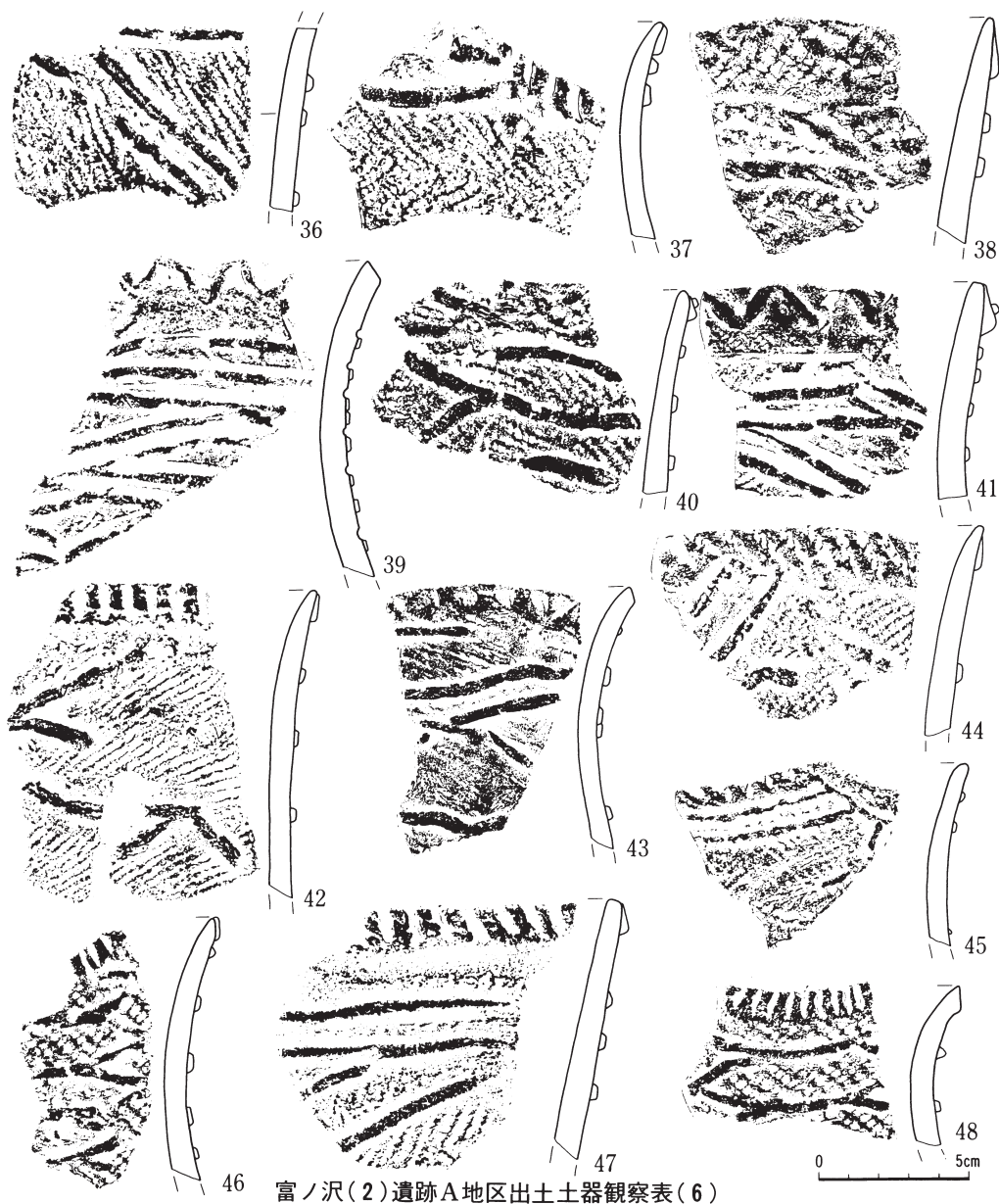
第135図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(4)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(5)

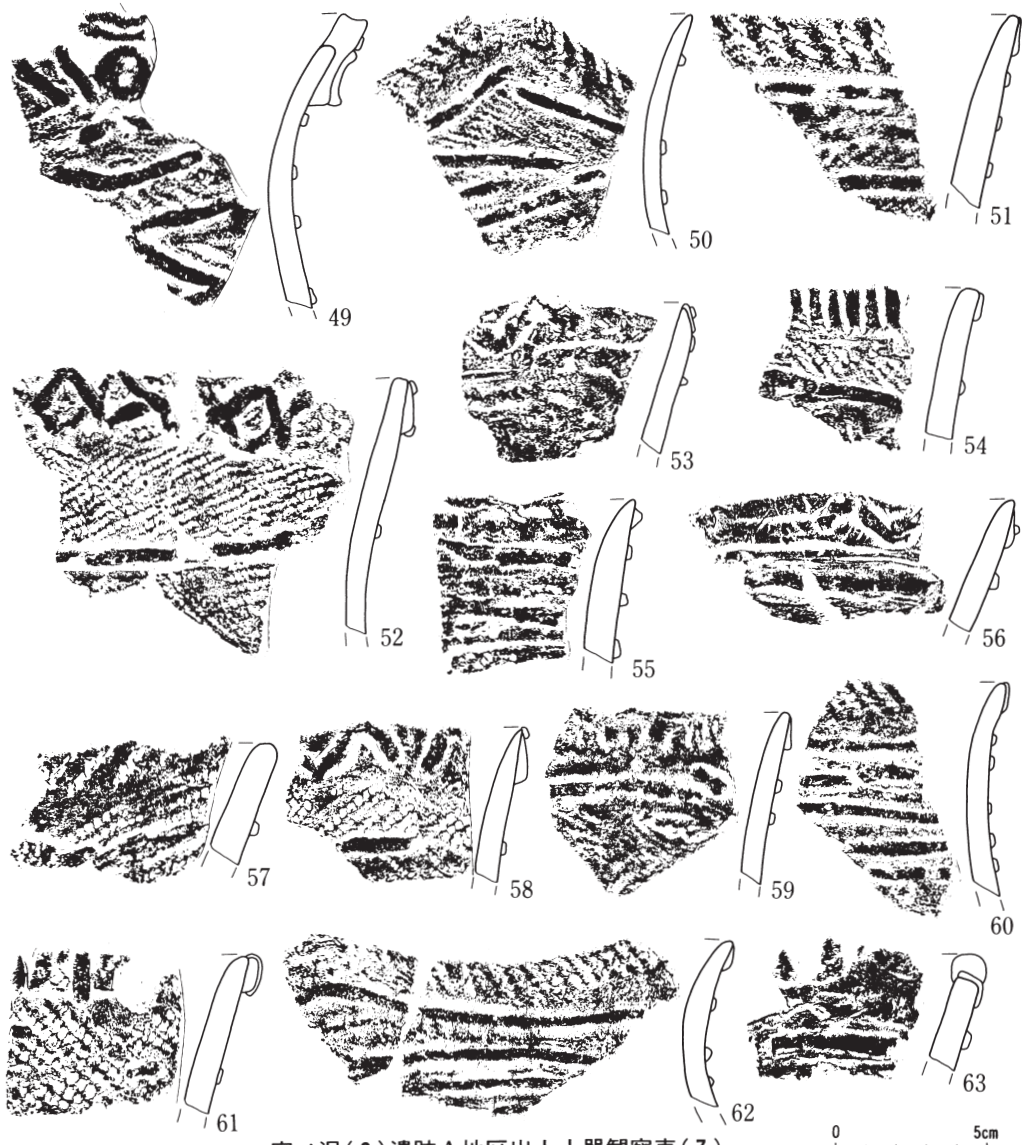
番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
21	K-29 I層	口頸部	横・斜位(粘土紐)	爪形(刺突)		II群2類
22	H-25 "	"	"	"	刺突	"
23	F-24 "	口縁部	波状口縁、弧状(粘土紐)	縄文(LR)		II群3類
24	E-15 "	"	斜位(粘土紐)	口端(燃糸圧痕)	縄文(RL)	"
25	F-17 "	"	波状口縁、横・斜位(粘土紐)	縄文(RL)		"
26	G-23 "	"	"	口端に燃糸圧痕、横位(粘土紐)	縄文(LR)	"
27	G-25 "	"	口端に山形(粘土紐)	縄文(RL)		"
28	E-15 "	"	折り返し口縁、口端に燃糸圧痕、横・斜位(粘土紐)			"
29	K-29 "	"	"	口端に山形、口頸部に斜位(粘土紐)		"
30	K-31 "	"	"	口頸部に横・斜位(粘土紐)		"
31	K-30 "	"	"	口端にたすき状・斜位(粘土紐)		"
32	G-31 "	"	口唇部に粘土紐、波状口縁			"
33	表 採	"	ボタン状突起、口端に縦位・口頸部横・斜位(粘土紐)			"
34	H-9 I層	"	波状口縁、口端に燃糸圧痕、斜位(粘土紐)			"
35	H-23 "	"	"	"	縄文(LR)、斜位(粘土紐)	"

第136図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(5)



番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
36	I-25 I層	口頸部	横・斜位(粘土紐)、縄文(LR)	II群3類
37	E-24 "	口縁部	波状口縁、口端に燃糸圧痕、羽状縄文、弧状(粘土紐)	"
38	G-26 "	"	折り返し口縁、縄文(LR)、横・斜位(粘土紐)	"
39	F-15 "	"	口端に山形、口頸部に横・斜位(粘土紐)	"
40	F-24 "	"	縄文(RL)、凸レンズ状(粘土紐)、折り返し口縁	"
41	F-15 "	"	口端に山形 " "	"
42	G-15 "	"	口端に燃糸圧痕、縄文(LR)、斜位(粘土紐)	"
43	G-25 "	"	口端に刻み、凸レンズ状文(粘土紐)	"
44	I-15 "	"	口端に燃糸圧痕、弧状(粘土紐)、縄文(LR)	"
45	H-27 "	"	" 波状口縁、弧状(粘土紐)	"
46	F-22 "	"	口端に刻み、波状口縁、凸レンズ状(粘土紐)	"
47	G-24 "	"	口端に燃糸圧痕、縄文(RL) "	"
48	F-22 "	"	口端に刻み、縄文(LR) "	"

第137図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(6)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(7)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
49	H-27 I層	口縁部	小突起、ボタン状突起(凹み)、凸レンズ状文(粘土紐)			II群3類
50	J-26 "	"	波状口縁、斜位(粘土紐)、口端に燃糸圧痕			"
51	E-24 "	"	口端に燃糸圧痕、横位(粘土紐)			"
52	K-30 "	"	縄文(LR)、口端にたすき状(粘土紐)、縄文(LR)			"
53	G-31 "	"	口端に山形状、口頸部に横位(粘土紐)			"
54	F-22 "	"	口端に燃糸圧痕、横位(粘土紐)、縄文(RL)			"
55	H-24 Na層	"	口端に刺突、横位(粘土紐)			"
56	G-31 I層	"	折り返し口縁、口端に山形状(粘土紐)			"
57	K-30 "	"	口端に燃糸圧痕、横位(粘土紐)、縄文(LR)			"
58	E-23 "	"	口端に山形状(粘土紐)、羽状縄文			"
59	G-24 "	"	口端に燃糸圧痕、横・斜位(粘土紐)、縄文(RL)			"
60	J-27 "	"	"	横位(粘土紐)		"
61	G-22 "	"	口端に縦位粘土紐、縄文(RL)、横位(粘土紐)			"
62	J-21 "	"	波状口縁、口端に燃糸圧痕、横位(粘土紐)			"
63	G-31 "	"	横位(粘土紐)			"

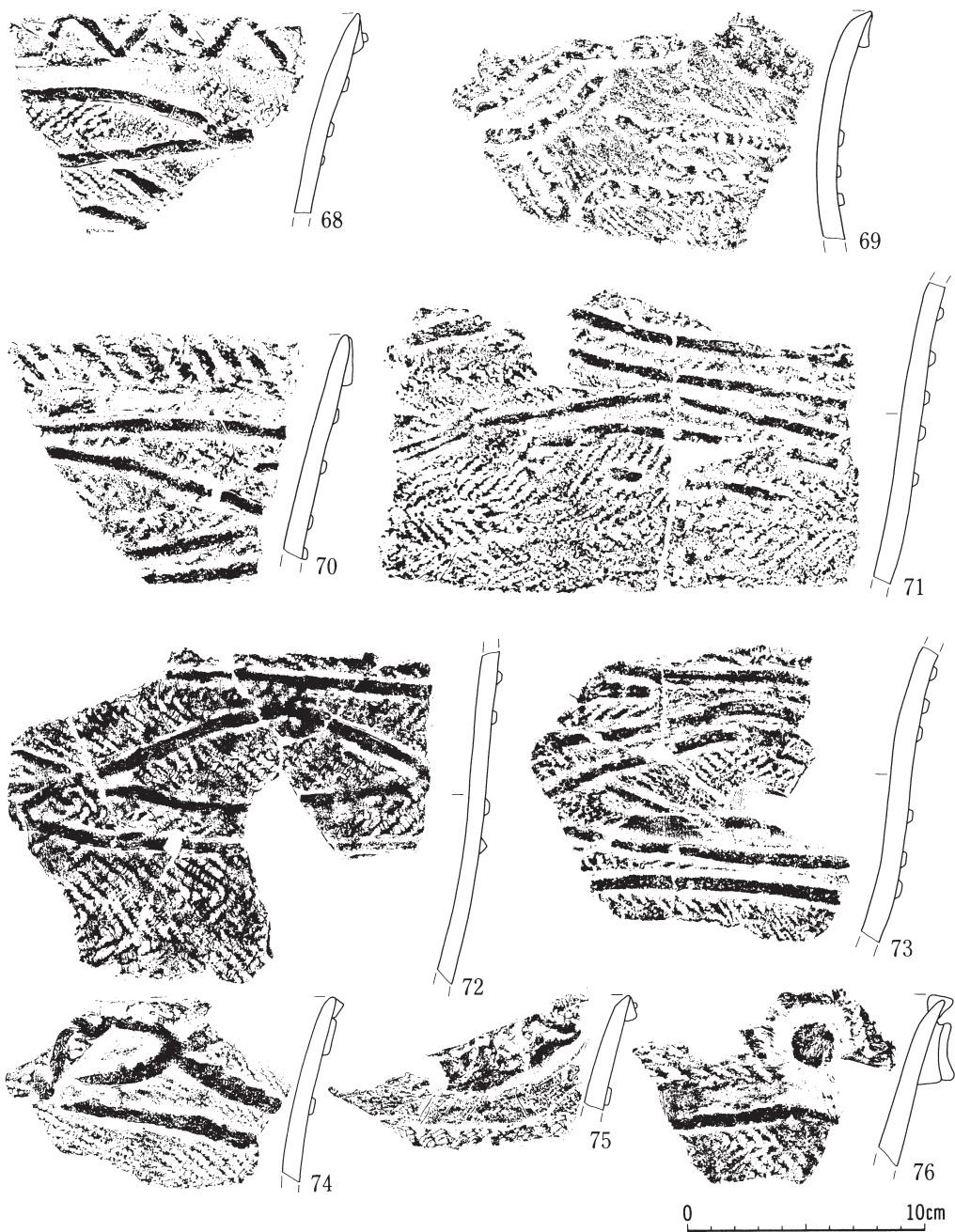
第138図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(7)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(8)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
64	H-4	I層	口縁部	波状口縁、凹レンズ状文様、裏面に粘土紐		II群3類
65	H-19	"	"	"	ボタン状突起(凹み)、弧状(粘土紐)、裏面に刺突	"
66	H-28	"	"	"	口端に刻み、凸レンズ状文様、裏面に刺突	"
67	F-25	"	"	"	口端に粘土紐、縄文(RL)、裏面に刺突	"

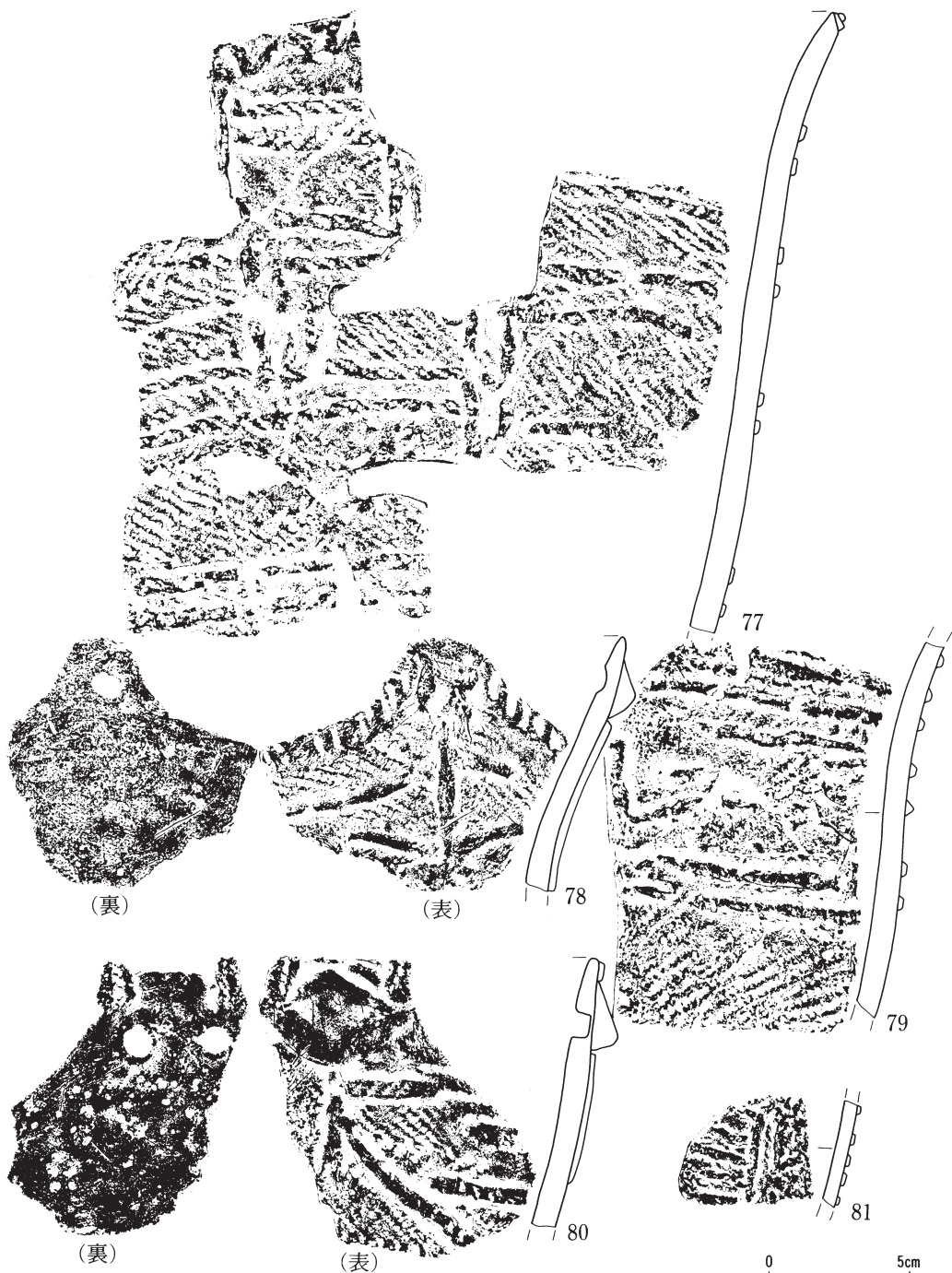
第139図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(8)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(9)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
68	J-26 I層	口縁部	LR・RLの結東羽状縄文、凸レンズ状文様、口端に山形(粘土紐)			II群3類
69	H-26 "	"	波状口縁、弧状(粘土紐)、粘土紐上面に縄文			"
70	E-15 "	"	口端に燃糸圧痕、縄文(RL)、凸レンズ状文様			"
71	H-27 "	胴部	LRとRLの結東羽状縄文、凸レンズ状文様			"
72	F-15 "	"	"	"		"
73	H-14 "	"	"	"		"
74	H-27 "	口縁部	波状口縁、縄文(RL)、横位弧状(粘土紐)			"
75	K-29 "	"	"	口端に山形(粘土紐)、粘土紐上面に縄文		"
76	F-15 "	"	口端に燃糸圧痕、ボタン状突起、横位(粘土紐)、縄文(RL)			"

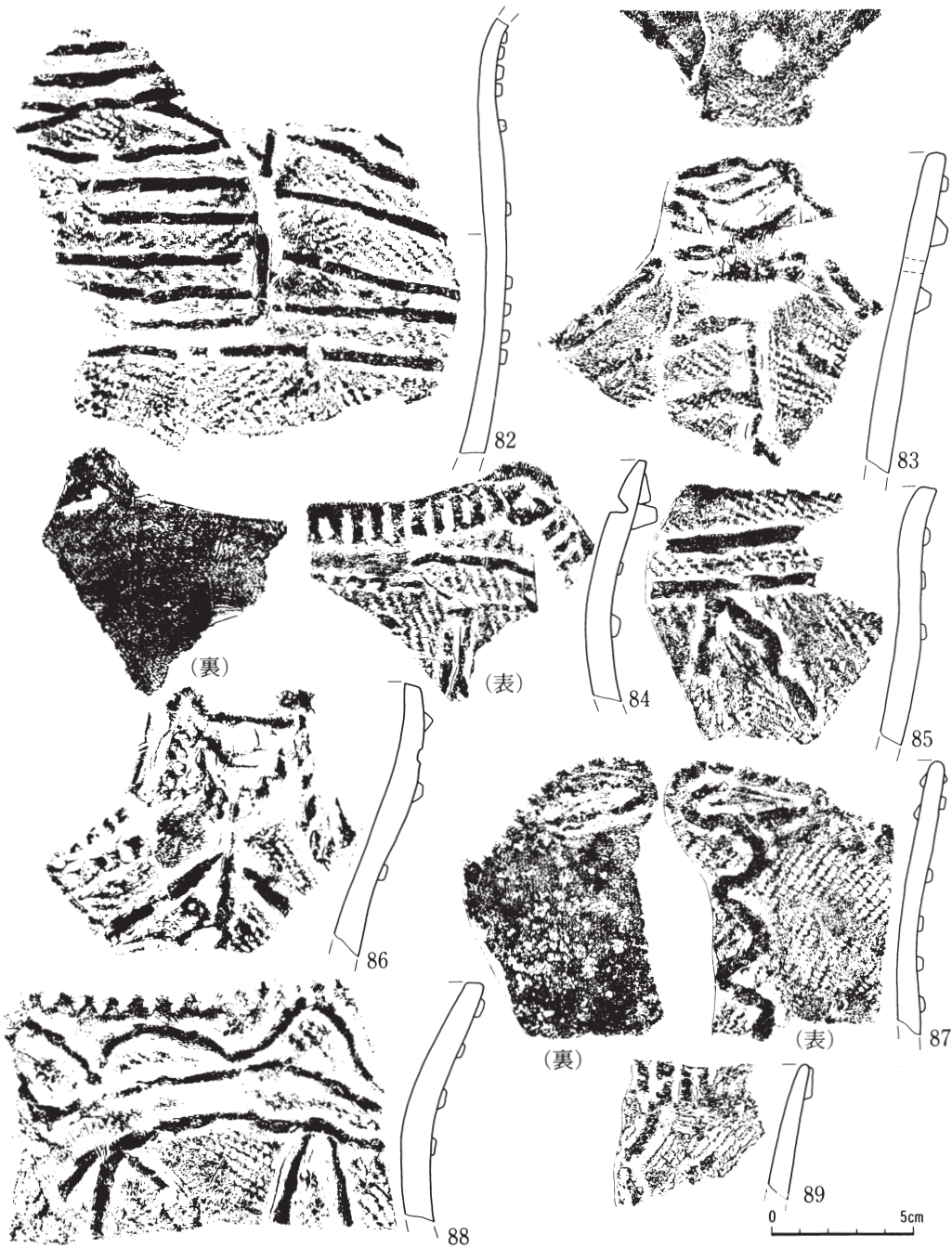
第140図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(9)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(10)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
77	G-14 I層	口縁部	波状口縁、横・縦位(粘土紐)、粘土紐上面に縄文、羽状縄文			II群3類
78	K-25 "	"	"	口端に刻み、胸骨状(粘土紐)、縄文(RL)		"
79	I-25 "	胴部	胸骨状(粘土紐)、縄文(LR)			"
80	K-25 "	口縁部	"	口端に捺糸圧痕、裏面に刺突		"
81	H-22 IV層	胴部	縄文(RL)、胸骨状(粘土紐)			"

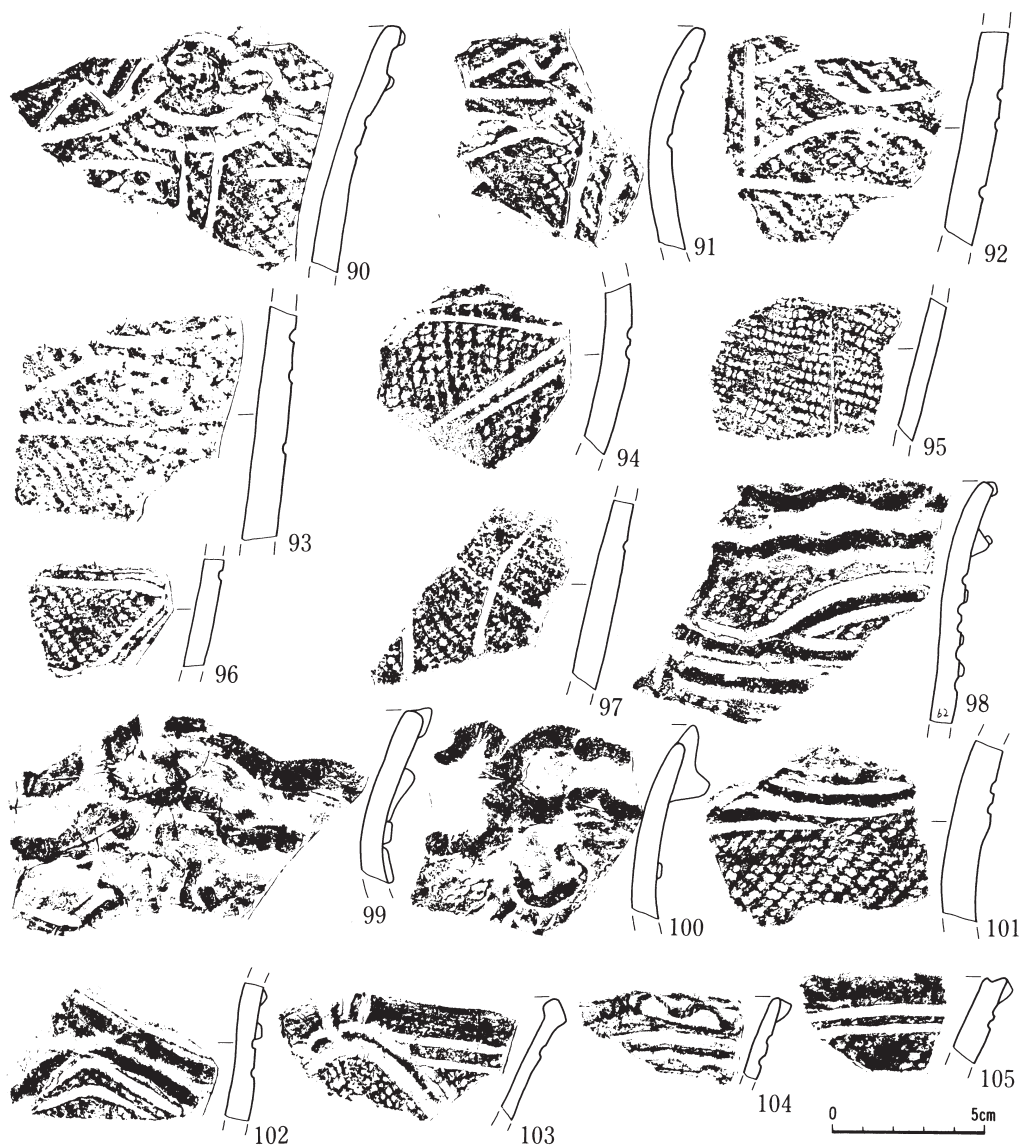
第141図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(10)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(11)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
82	F-28 I層	胴部	胸骨状(粘土紐)、LRとRLの羽状縄文			II群3類
83	K-30 "	口縁部	波状口縁、縄文(RL)、胸骨状(粘土紐)、裏面に刺突			"
84	G-22 "	"	"	口端に燃糸圧痕、ボタン状突起、裏面に刺突		"
85	E-24 "	"	"	横・縦位(粘土紐)、口唇部に燃糸圧痕、縄文(RL)		"
86	K-29 "	"	波状口縁、胸骨状(粘土紐)、口端に燃糸圧痕			"
87	"	"	"	口唇部に刻み、縦位蛇行(粘土紐)、裏面に粘土紐		"
88	G-23 "	"	"	横・縦位(粘土紐)		"
89	F-12 V層	"	"	口端に燃糸圧痕、縦位蛇行(粘土紐)		"

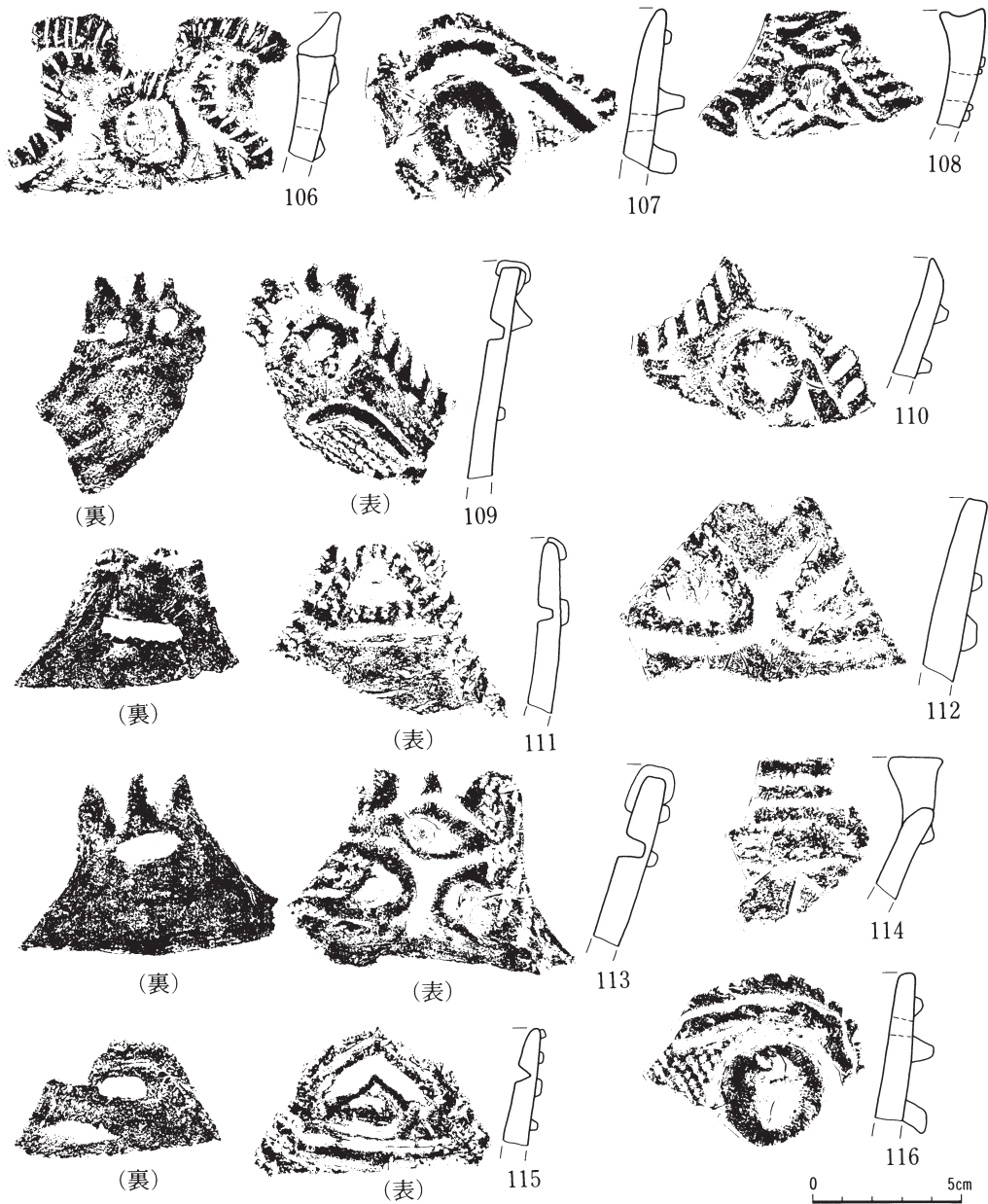
第142図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(11)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(12)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
90	H-22 I層	口縁部	波状口縁、ボタン状突起、胸骨状文	(沈線)		II群4類
91	I-22 "	"	"	縄文(LR)	" "	"
92	H-24 "	胴部	胸骨状文(沈線)、縄文(LR)			"
93	G-23 IV層	"	縄文(LR)、横・弧状	(沈線)		"
94	I-24 I層	"	複節、横・斜位	(沈線)		"
95	J-29 "	"	縄文(LR)、縦位	(沈線)		"
96	H-25 "	口頸部	"	横・斜位	(沈線)	"
97	F-17 "	胴部	縦位弧状(沈線)、縄文(LR)			"
98	F-15 "	口縁部	複節、口端に横位蛇行(粘土紐)、横位弧状(粘土紐)	(沈線)		"
99	I-13 "	"	波状口縁、口端に横位蛇行(粘土紐)、縦位(粘土紐)	(沈線)		"
100	F-15 "	"	"	"	"	"
101	H-24 "	口頸部	複節、横位	(沈線)		"
102	G-26 "	"	山形状(粘土紐・沈線)、地文縄文			"
103	H-27 "	口縁部	口端に刻み、弧状(粘土紐)	(沈線)		"
104	I-24 "	"	複節、横位	(沈線)		"
105	K-30 "	"	口端に山形状(粘土紐)、横位	(沈線)		"

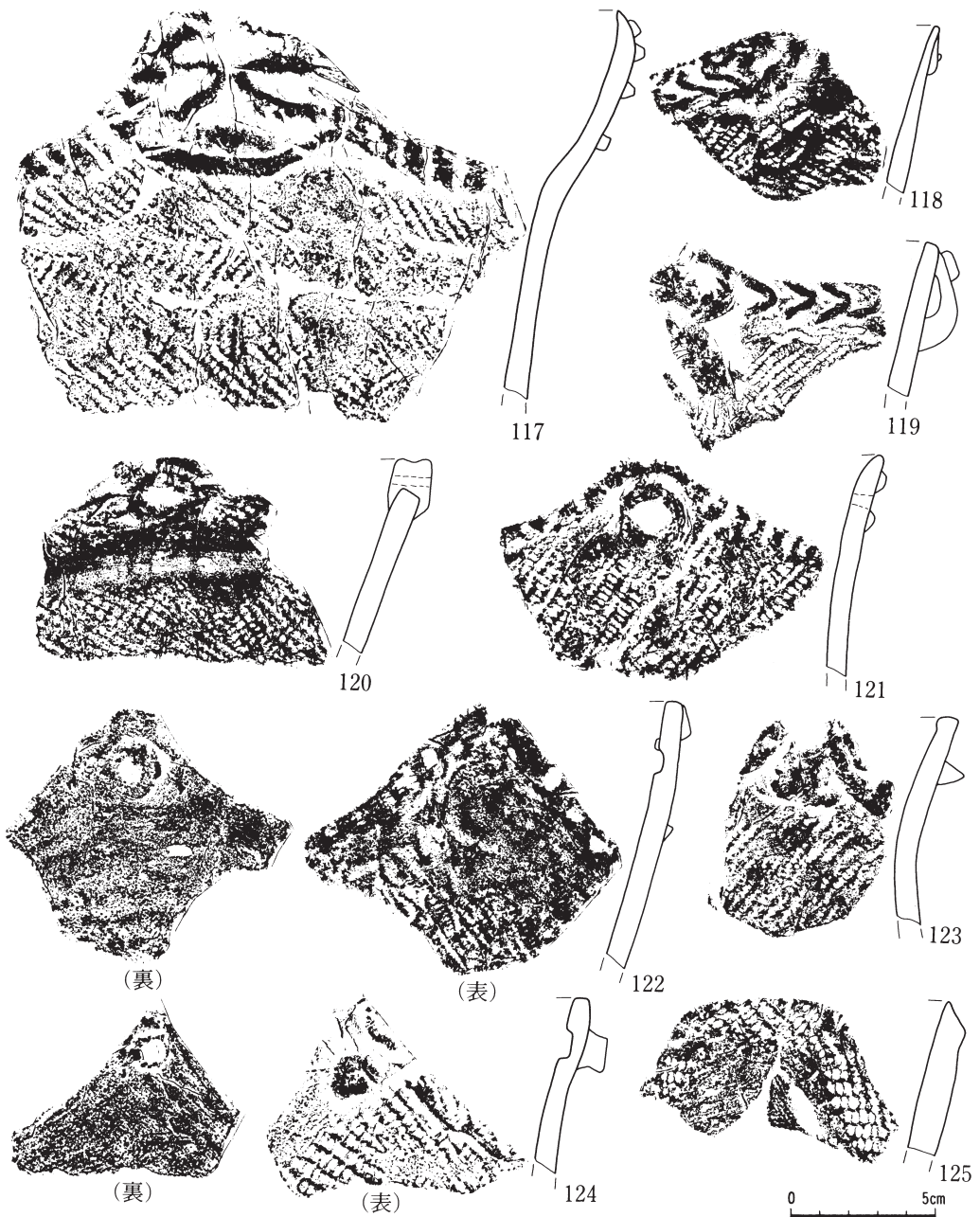
第143図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(12)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(13)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文	文 様	分 類
106	A I-16 I層	口縁部	波状口縁、粘土紐上面に刻み、貫通孔		II群5類
107	H-29 "	"	"	口唇部に燃糸圧痕、貫通孔	"
108	G-19 "	"	"	口端に燃糸圧痕、貫通孔	"
109	G-17 N層	"	"	ボタン状突起(凹み)、貫通孔	"
110	F-23 I層	"	"	口端に刻み、ボタン状突起(凹み)	"
111	F-15 "	"	"	粘土紐上面に燃糸圧痕、裏面に刺突	"
112	H-26 "	"	"	横位弧状(粘土紐)	"
113	G-19 "	"	"	裏面に刺突、口端に燃糸圧痕	"
114	H-18 "	"	"	突起部に燃糸圧痕	"
115	F-25 "	"	"	口唇部に燃糸圧痕・横位(粘土紐)、裏面に刺突	"
116	H-26 "	"	"	口唇部に燃糸圧痕、貫通孔、ボタン状突起	"

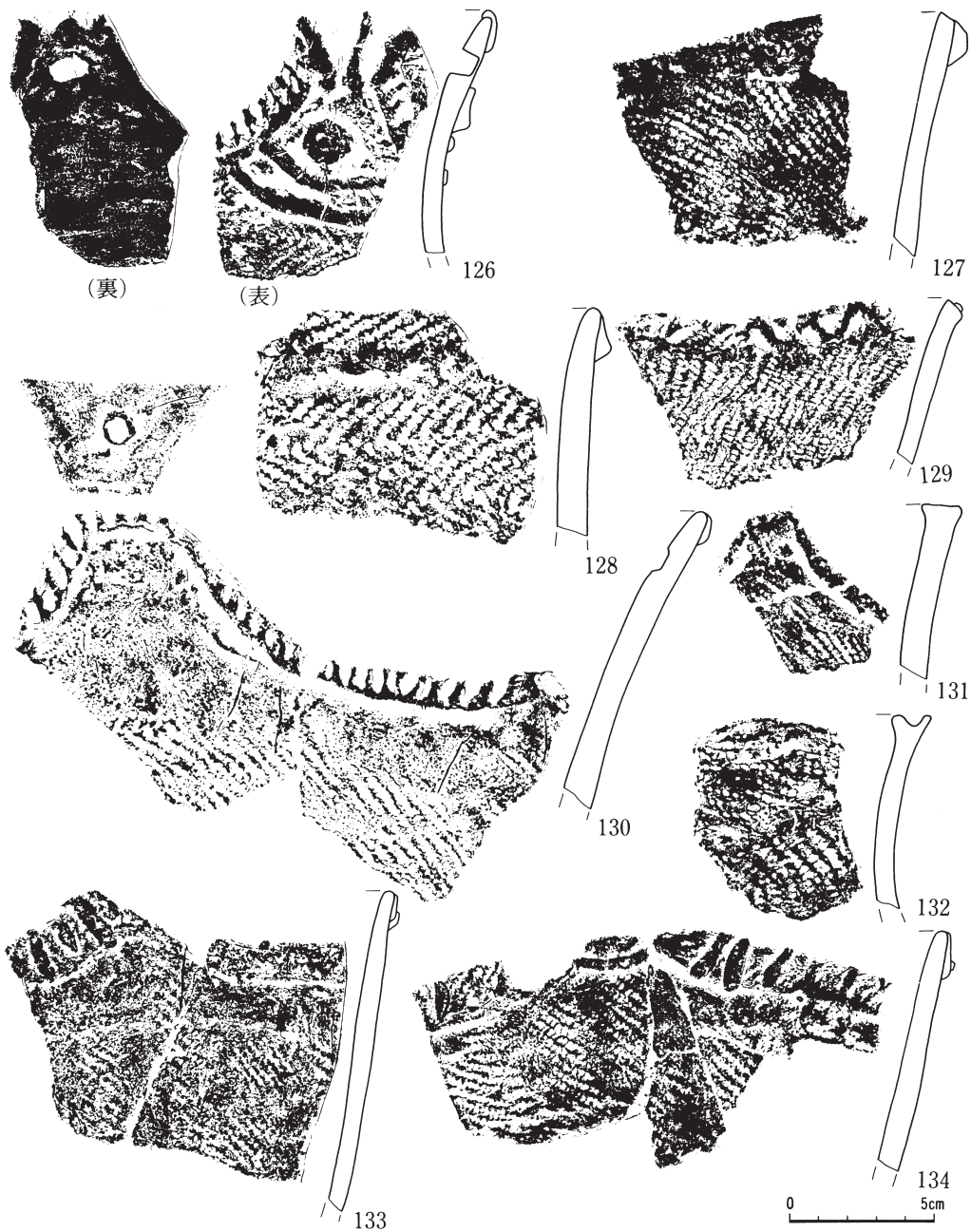
第144図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(13)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(14)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
117	H-23 I層	口縁部	波状口縁、口端に燃糸圧痕、LRとRLの結束羽状縄文			II群5類
118	J-26	〃	〃	口端にく状(粘土紐)、羽状縄文		〃
119	J-29	〃	〃	橋状把手、縄文(LR)、燃絡文		〃
120	H-27	〃	〃	縄文(RL)、突起部に貫通孔		〃
121	K-29	〃	〃	口端に燃糸圧痕、ボタン状突起(貫通孔)		〃
122	F-19	〃	〃	波状口縁、縄文(LR)、口端に刻み、裏面に刺突		〃
123	H-28	〃	〃	ボタン状突起、縄文(RL)		〃
124	G-22	〃	〃	波状口縁、ボタン状突起、裏面に刺突、口端に縄文		〃
125	I-25	〃	〃	〃	口端に縄文	〃

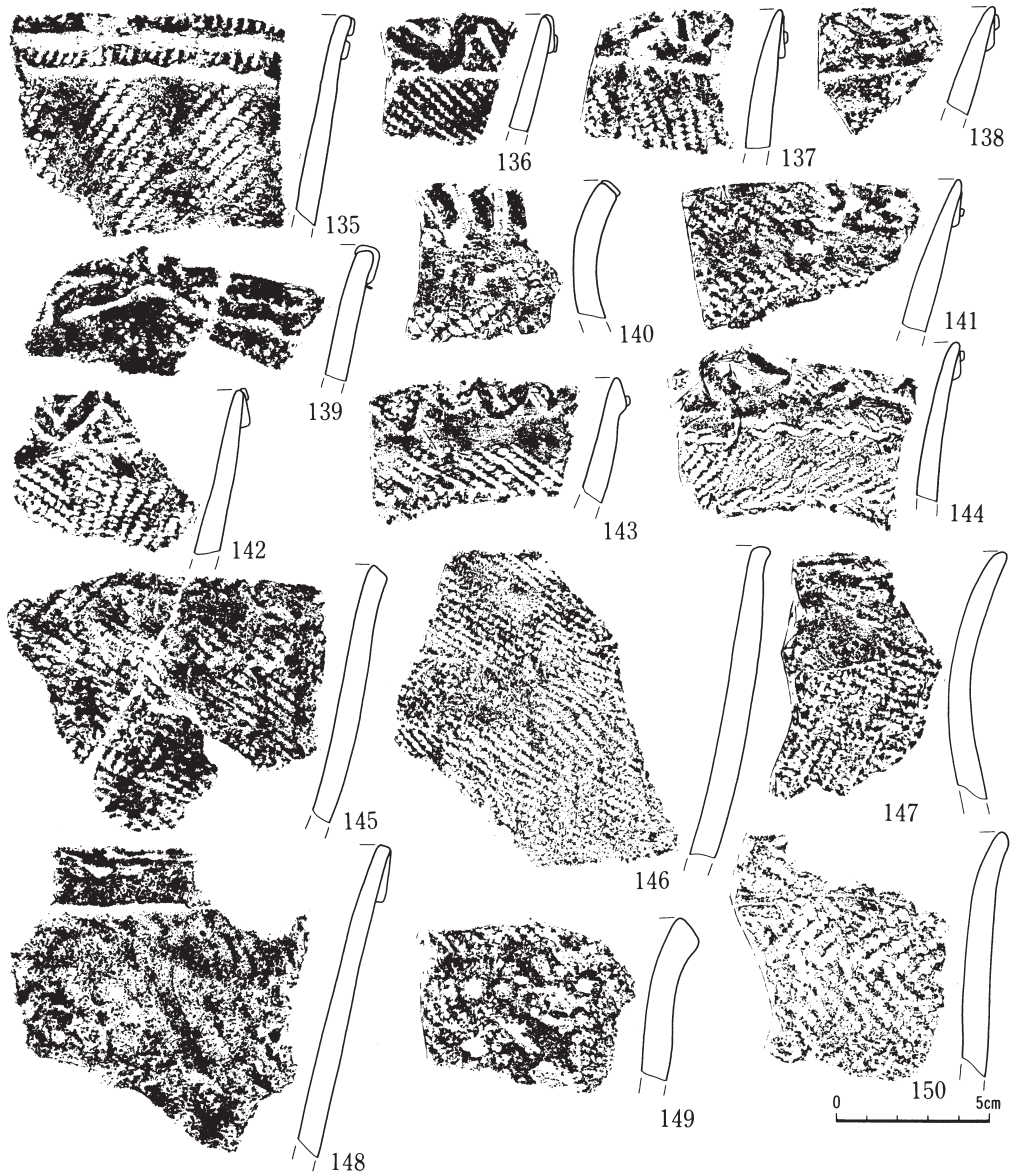
第145図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(14)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(15)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
126	G-9 V層	口縁部	波状口縁、ボタン状突起、地文羽状縄文、裏面に刺突			II群5類
127	G-26 I層	"	"	縄文(RL)		"
128	I-25 "	"	折り返し口縁、LRとRLの結束羽状縄文			"
129	J-22 "	"	縄文(RL)、口端に山形状(粘土紐)			"
130	G-25 "	"	波状口縁、口端に刻み、縄文(LR)			"
131	E-15 "	"	"	縄文(LR)		"
132	E-24 "	"	"	"		"
133	K-30 "	"	"	"	口端部に粘土紐	"
134	V-30 "	"	"	"	"	"

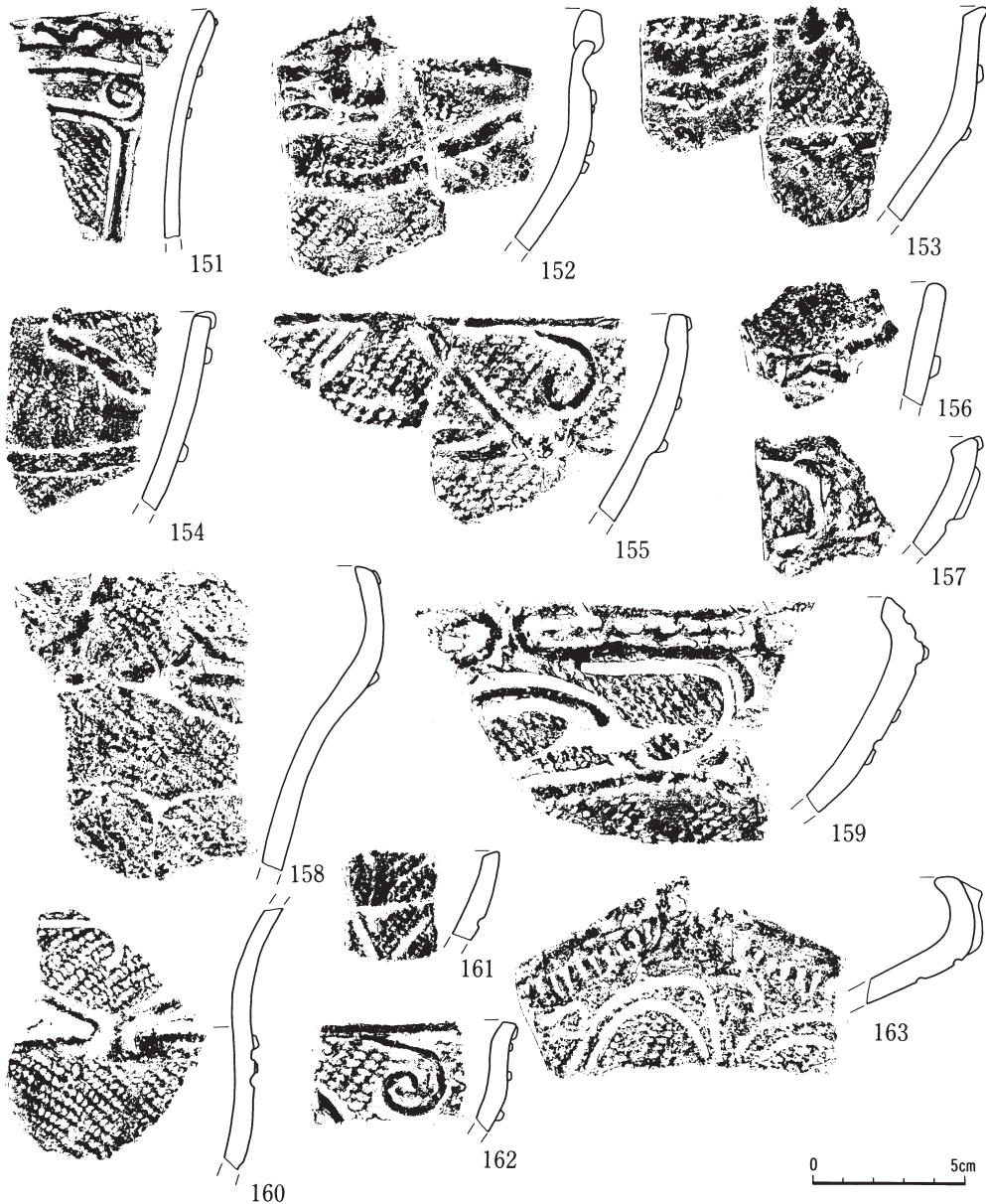
第146図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(15)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(16)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
135	K-30 I層	口縁部	横位粘土紐 (上面に刻み)、	縄文 (RL)		II群5類
136	F-15 "	"	口端に山形状 (粘土紐)、	縄文 (RL)		"
137	J-22 "	"	"	縄文 (LR)		"
138	I-23 "	"	"	"		"
139	I-17 "	"	口端に粘土紐			"
140	F-9 V層	"	"	縄文 (LR)		"
141	H-23 I層	"	口端にたすき状 (粘土紐)、	縄文 (RL)		"
142	I-24 "	"	口端に山形状 (粘土紐)、	"		"
143	G-27 "	"	"	縄文 (LR)		"
144	J-26 "	"	地に羽状縄文、横位の捺絡文			"
145	E-24 "	"	羽状縄文			"
146	H-15 "	"	平口縁、	縄文 (RL)		"
147	G-23 M層	"	"	羽状縄文		"
148	K-30 I層	"	折り返し口縁、	無文		"
149	G-27 "	"	平口縁、	縄文		"
150	F-25 "	"	"	LRとRLの結束羽状縄文		"

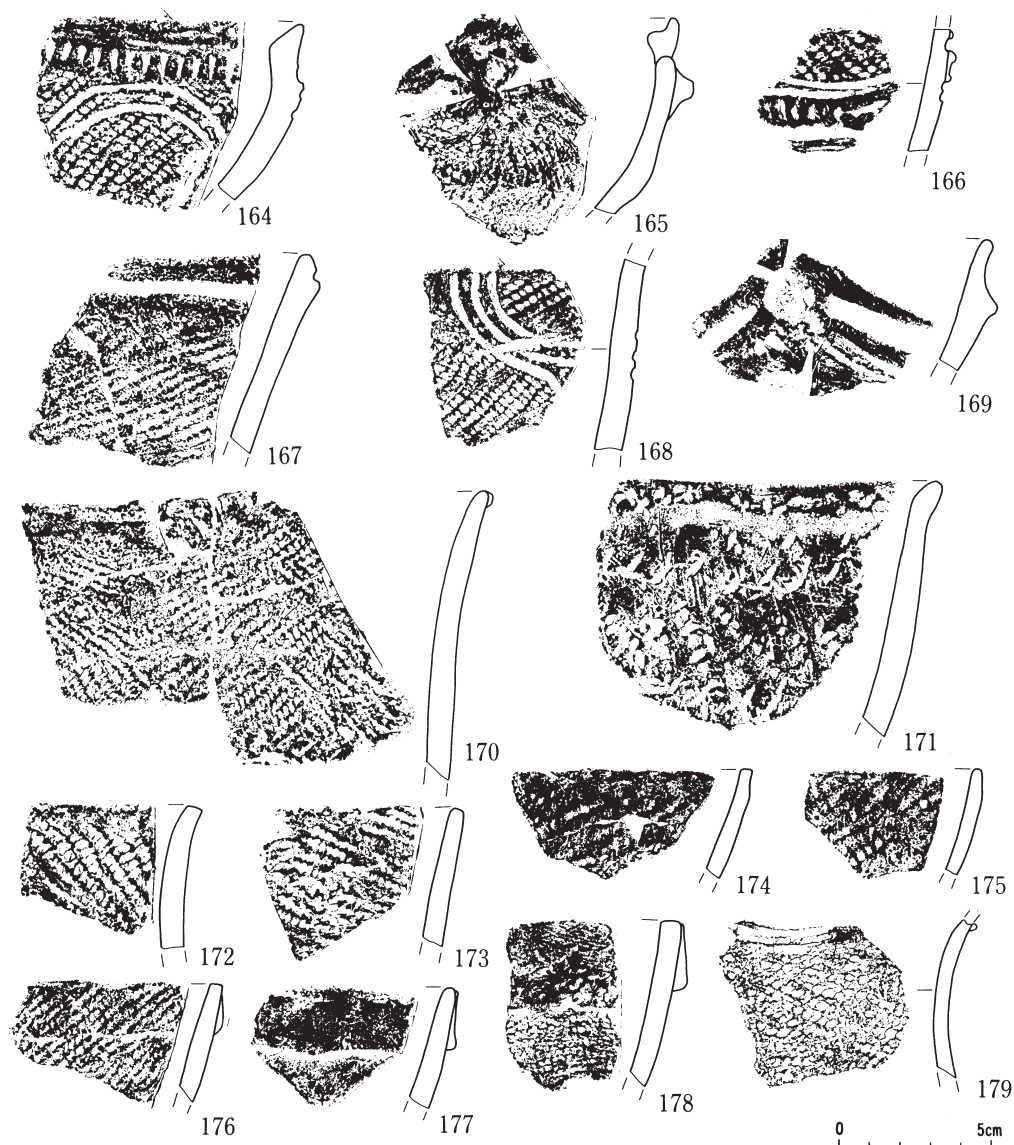
第147図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(16)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(17)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
151	K-30 I層	口縁部	複節、口端に山形(粘土紐)、縦位渦巻文様	II群6類
152	I-17 "	"	波状口縁、横位弧状(粘土紐)、縄文(LR)	"
153	" "	"	口唇部に粘土紐、横位弧状文様	"
154	" "	"	" "	"
155	I-25 "	"	複節、斜位・渦巻(粘土紐)	"
156	F-23 "	"	" 横・斜位(粘土紐)	"
157	G-26 "	"	縄文(LR)、弧状(粘土紐・沈線)	"
158	H-25 "	"	複節、横位・弧状(粘土紐)	"
159	F-22 "	"	" 口端に刺突・弧状文(粘土紐・沈線)	"
160	G-21 "	口頸部	縄文(LR)、横・斜位(粘土紐・沈線)、刺突	"
161	H-25 "	口縁部	斜位(粘土紐・沈線)	"
162	J-22 "	"	複節、渦巻文(粘土紐)	"
163	K-28 "	"	口端に刺突、曲線文様	II群7類

第148図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(17)



富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器観察表(18)

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
164	K-28 I層	口縁部	縄文(RL)、口端に刻み、曲線文様	Ⅱ群7類
165	F-12 "	"	" 波状口縁	"
166	H-25 "	口頸部	縄文(LR)、横位(粘土紐)、上面に刺突	"
167	I-18 "	口縁部	口端に横位沈線、縄文(LR)	"
168	J-19 "	口頸部	縦位曲線文 "	"
169	I-16 "	口縁部	波状口縁、波頂下部に刺突	"
170	E-15 "	"	" 縄文(LR)、 スス状炭付	Ⅲ群2類
171	F-22 "	"	平口縁、燃糸文 "	"
172	F-21 "	"	" 縄文(LR) "	"
173	G-25 "	"	" 縄文(RL) "	"
174	E-15 "	"	" 縄文(LR) "	"
175	" "	"	" " "	"
176	J-23 "	"	折り返し口縁 " "	"
177	K-29 "	"	" " "	"
178	I-9 "	"	" 縄文(LR)	"
179	E-18 "	口頸部	横位(沈線) "	"

第149図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土土器(18)

(2) 石器

富ノ沢2遺跡A地区から出土した石器は合計158点である。その内訳は、石鏃、石槍、石匙、石筥、不定形石器、磨製石斧、敲磨器類、石冠、礫器、石皿・台石である。

石器の分布状況は、竪穴住居跡・土壌の検出された本調査区西側に集中する傾向を示している。

A類 石鏃(第58図 1・2、第71図 1・2、第78図 1・3、第58図 3、第103図 1・2、第110図 - 1、第150図、第151図 - 13~18)

石鏃は28点で、遺構内10点、遺構外18点である。また、完形品19点、欠損品9点で、完形品の占める割合が高い。(67.9%)

形態 石鏃は、次の3類に大別できる。

A 類 いわゆる有茎石鏃に属するもの

A 類 柳葉形を呈するもの(第71図 1・2)

A 類 基部欠損のため形態を把握できないもの(第103図 2、第151図 18)

さらにA 類は、基部形態が「Y」字形を呈するもの(A - a類)、「T」字形を呈するもの(A b類)、基部に抉入のあるもの(A c類)に細分できる。

A a類 17点の出土である。関部から尖頭部までの側縁は、緩やかなカーブを描き、器体中央部に最大幅をもつものが大部分である。第151図 15は基部にアスファルトが付着している。第150図 7は器体側縁の一部を欠いている。

A b類 3点の出土である。いずれも二等辺三角形を基調としている。第151図 16は、大きさ(長さ、幅)が比較的突出している。

A c類 4点の出土である。関部から尖頭部にかけて緩やかなカーブを描くものが大半である。

A 類 2点の出土である。第71図 1は尖頭部を欠損している。第71図 2は尖頭部が比較的丸みを帯び、鈍角的である。

A 類 2点の出土である。第103図 2は残存部分から推定すれば、円基鏃に近い形態を呈すると思われる。

調整 すべて両面調整で、一般的に微細で丁寧な調整剥離が施されている。第150図 8は、片面に加熱による焼けはじけの痕跡が観察される。

大きさ 完形品を対象とする。長さは、最大で6.2cm、最小で2.8cm、平均値は3.80cmである。幅は最大で2.5cm、最小で1.1cm、平均値は1.51cmである。厚さは、最大で1.1cm、最小で4.0cm、平均値は6.29cmである。重さは、最大で9.1g、最小で1.0g、平均値は2.85gである。

石質 珪質頁岩26点、玉髄質の珪質頁岩2点である。

B類 石槍（第58図 8、第59図 4～6、第60図 1、第79図 4、第151図 19、第152図 20・21・24）

10点出土した。完形品2点、欠損品8点である。

形態 完形品2点は木葉形を呈する。欠損品は、残存部分から推定して、すべて木葉形を呈すると思われる。第152図 21は厚手であるが、その他は比較的薄手である。

調整 第151図 19、第152図 20は両面調整で、両側縁に微細な調整剥離が施されている。第58図 8は両面に主要剥離面を残存している。第60図 1の片面には、加熱による焼けはじけの痕跡が観察される。

石質 すべて珪質頁岩である。

D類 石匙（第152図 22）

遺構外より1点の出土である。縦長の剥片を素材としている。先端部は斜行しながら先細となる。つまみ部裏面には、バルブとその一部に調整剥離を施している。両面側縁には微細な極浅形細部調整が施され、刃部を作出している。

大きさは、長さ7.2cm、幅3.4cm、厚さ1.0cm、重さ19.3gである。

石質は珪質頁岩である。

E類 石筈（第58図 4・6、第85図 1、第152図 23・25、第153図 26・28）

7点出土した。遺構内3点、遺構外4点である。すべて完形品で、内1点が接合によるものである。

形態 基部が幅狭で三角形ないし台形状を呈するもの（類）、木葉形に近似するもの（類）に分類できる。

E 類 4点の出土である。第153図 26は刃部の形状が直刃で、他はすべて円刃である。

E 類 3点の出土である。すべて比較的小型の石筈である。

調整 全般的に両面調整が多い。第85図 1は片面に大まかな剥離痕が観察され、その側縁には極浅形細部調整が施されている。また、他面は剥離面が少なく、側縁部の調整は雑である。26の両面には大ざっぱな剥離面が残存し、細部の調整は施されていない。

大きさ 長さは、最大で9.8cm、最小で4.5cm、平均値は6.79cmである。幅は最大で4.2cm、最小で2.1cm、平均値は3.19cmである。厚さは、最大で1.9cm、最小で0.8cm、平均値は1.29cmである。重さは最大で61.0g、最小で8.0g、平均値は32.3gである。

石質 すべて珪質頁岩である。

F類 不定形石器（第58図 5・7・9、第59図 10~12・16、第60図 18~20、第69図、第71図 3・4、第78図 2・4・6・7、第79図 8~10・12~14、第80図 18、第153図 27、第154・155・156・157図、第158図 60~64）

64点の出土で、遺構内27点、遺構外37点である。調整の状況によって

- F 類 連続した調整が加えられているもの
- F 類 刃部をもたないもの及び連続の極浅形調整がみられるもの
- F 類 使用痕のみられるもの

に分類できる。F 類はさらに調整の割合によって、1 / 2 以上の調整が施されているもの（ a類）、1 / 2 未満の調整が施されているもの（ b類）に分類できる。

F a類 13点。遺構内4点、遺構外9点である。第58図 5、第153図 29、第154図 37は楕円形を呈する。両面に大ざっぱな調整を、全側縁部に微細な調整を施している。第59図 10、第153図 30は片面の側縁に丁寧な調整を施している。第153図 31は両面の側縁に丁寧な調整を施し、刃部を作出している。第154図 35は、器体側縁部の2 / 3程度に調整が施され、ノッチ状を呈している。

F b類 14点。遺構内8点、遺構外6点である。一般的に器体片面の側縁に微細な調整を施しているものが多い。第79図 9、第155図 39は器体の末端部に調整が施され、ノッチ状を呈している。第79図 9は形状等から石錐の可能性もある。

F 類 24点で、遺構内11点、遺構外13点である。また、定形的な刃部をもたないものが13点、連続の極浅形調整がみられるものが11点である。

第71図 3は棒状を呈し、端部に剥離面が観察される。欠損しており、石錐の可能性もある。第78図 4、第155図 44は両面に主要剥離面が観察され、側縁に大ざっぱな剥離調整が施されている。折損しており、形状等から石槍の可能性もある。

F 類 12点で、遺構内3点、遺構外9点の出土である。このうち、縦長の剥片を素材としているものが8点である。大きさから

長さが4.9cm以下のもの 6点

長さが5.0cm~5.9cmのもの 1点

長さが6.0cm以上のもの 5点

に分類できる。

F類の石質は、珪質頁岩56点、玉髄質の珪質頁岩5点、チャート2点である。

G類 石斧(第61図 22、第158図 65・66、第159図 67～70・72)

8点出土した。このうち、遺構内1点、遺構外7点である。

分類 形状、研磨の状況等から次のように細分した。

G 類 定角式磨製石斧に属するもの(富ノ沢1遺跡、富ノ沢2遺跡B地区で出土)

G 類 擦切磨製石斧に属するもの(第158図 66、第159図 69)

G 類 乳棒状磨製石斧に属するもの(第61図 22、第159図 68・70)

G 類 打製石斧に属するもの(第159図 67)

G 類 欠損等により不明なもの(第158図 65、第159図 72)

G 類 2点の出土である。いずれも側面に溝を有している。65は石刀に似た形状を呈し刃部は一部欠損している。

G 類 3点の出土である。いずれも欠損している。

G 類 1点の出土である。片面を打ち欠き、他面は原石面を残存している。

G 類 2点の出土である。72は研磨された面に剥離がみられるが、再利用によって形成されたと思われる。

折損、再利用 折損部分は、刃部寄りが1点、基部寄りが2点、刃部及び基部寄りが1点、中心部が1点である。斜位の折損が比較的多い。また、66、70、72は再利用していると思われる。

石質 閃緑岩4点、安山岩1点、緑色ホルンフェルス1点、緑色凝灰岩1点、粘板岩1点である。

I類 敲磨器類(第61図 21・23・24、第67図 5、第68図 10・11、第76図 20・21、第86図、第93・99・102・111図)

33点出土し、遺構内14点、遺構外19点である。分類は、

I 類 主要痕跡が磨(擦)痕のもの

I 類 主要痕跡が敲打痕のもの

I 類 主要痕跡が凹みのもの

I 類 磨(擦)痕と敲打痕を共有するもの

I 類 18点出土した。形状から3つに細分した。

a類 楕円形及びその形状に近似するもの。14点。一般的に器体側面の磨耗激しいものが多い。第61図 21、第86図 3、第99図 1、第160図 78、はすり面の両端に剥離痕が観察される。

b類 棒状及びその形状に近似するもの。3点。第163図 91は断面形が三角形状を呈し、いわゆる三角柱磨石である。2陵を使用している。

c類 欠損により形状が不明瞭なもの。1点である。

I類 6点出土し、遺構内3点、遺構外3点である。素材の形状は、円形2点、楕円形2点、不整形1点、欠損により形状の不明瞭なもの1点である。第160図 80は片面を使用しており、敲打痕の部分は凹凸が激しい。

I類 3点出土し、遺構内1点、遺構外2点である。形状は、楕円形1点、棒状に近似するもの、不整形1点である。第162図 85の凹み部分は均整のとれた円形を呈し、擦痕が観察される。

I類 遺構内1点、遺構外5点、合計6点の出土である。磨(擦)痕はすべて1面である。敲打痕が1面のもの4点、2面のもの1点、3面以上のもの1点である。第162図 86は擦痕と敲打痕が同位置にみられる。第162図 88は器体両面の両端部を打ち欠いている。

I類の石質は、安山岩29点、チャート2点、緑色凝灰岩1点、閃緑岩である。

J類 石冠(第163図 90)

遺構外より1点の出土である。いわゆる北海道式石冠である。楕円形状の礫を素材とし、体部を横環する溝が作出されている。片面中央部に剥落がみられる。大きさは、長さ10.1cm、幅7.3cm、厚さ(5.2)cm、重さ(598)gである。

石質は安山岩である。

K類 礫器(第163図 92)

遺構外より1点の出土である。隅丸台形に近い形状を呈し、一側面の約1/2を両面から打ち欠いて刃部を作出している。大きさは、長さ10.4cm、幅6.6cm、厚さ2.4cm、垂さ247gである。

石質は安山岩である。

L類 石皿・台石類(第67図 4・6、第68図 7～9、第76図 22)

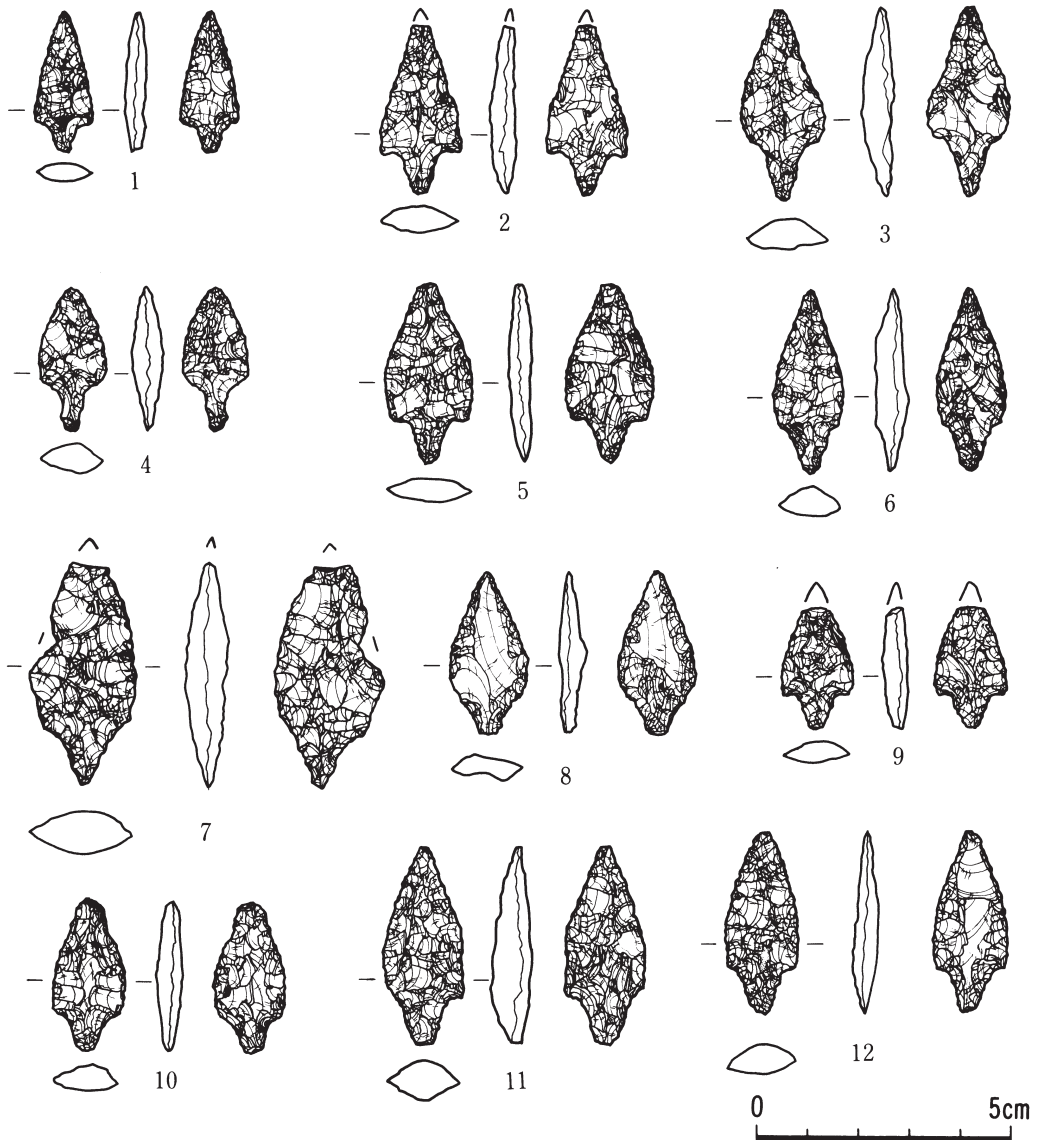
6点の出土で、すべて遺構内である。縁取りの有無、利用面の素材等により、次のように区分した。

L類 自然礫の平坦面を利用しているもの 5点。すべて敲打痕がみられる。第68図7は敲打痕による凹みがみられる。

L類 縁取りのあるもの 1点。欠損品で、端部の盛り上がった縁取りである。

なお、第4号竪穴住居跡から、石核に相当するものが5点出土している。

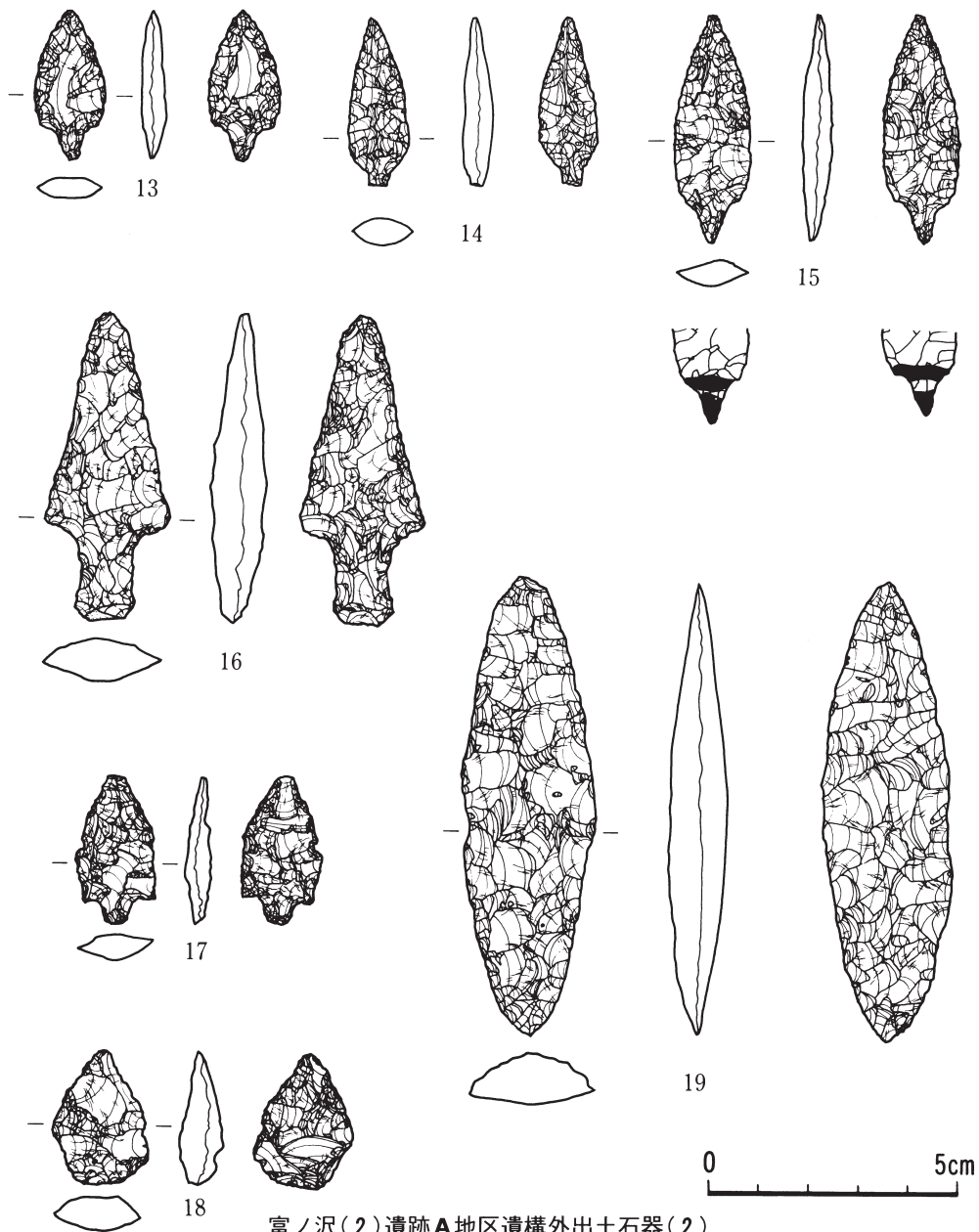
(奈良昌毅)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第150図-1	G-9	V	28	11	4	1.0	珪	A	65	
"-2	E-18	VIII a	(33)	16	5	(1.9)	"	"	63	尖頭部欠損
"-3	"	IV	38	16	6	2.3	"	"	62	
"-4	G-9	VIII a	28	13	6	1.6	"	"	67	
"-5	G-12	V	(35)	17	4	(2.2)	"	"	70	尖頭部欠損
"-6	F-34	I	36	13	7	2.2	"	"	64	
"-7	H-24	V a	(42)	20	7	(5.5)	"	"	78	尖頭部欠損
"-8	G-9	V	32	15	4	1.5	"	"	66	
"-9	H-12	I	(24)	14	5	(1.3)	"	"	77	尖頭部欠損
"-10	F-34	"	30	14	5	1.7	"	"	148	
"-11	G-13	"	39	15	9	3.6	"	"	72	
"-12	"	V	35	14	5	2.0	"	"	75	

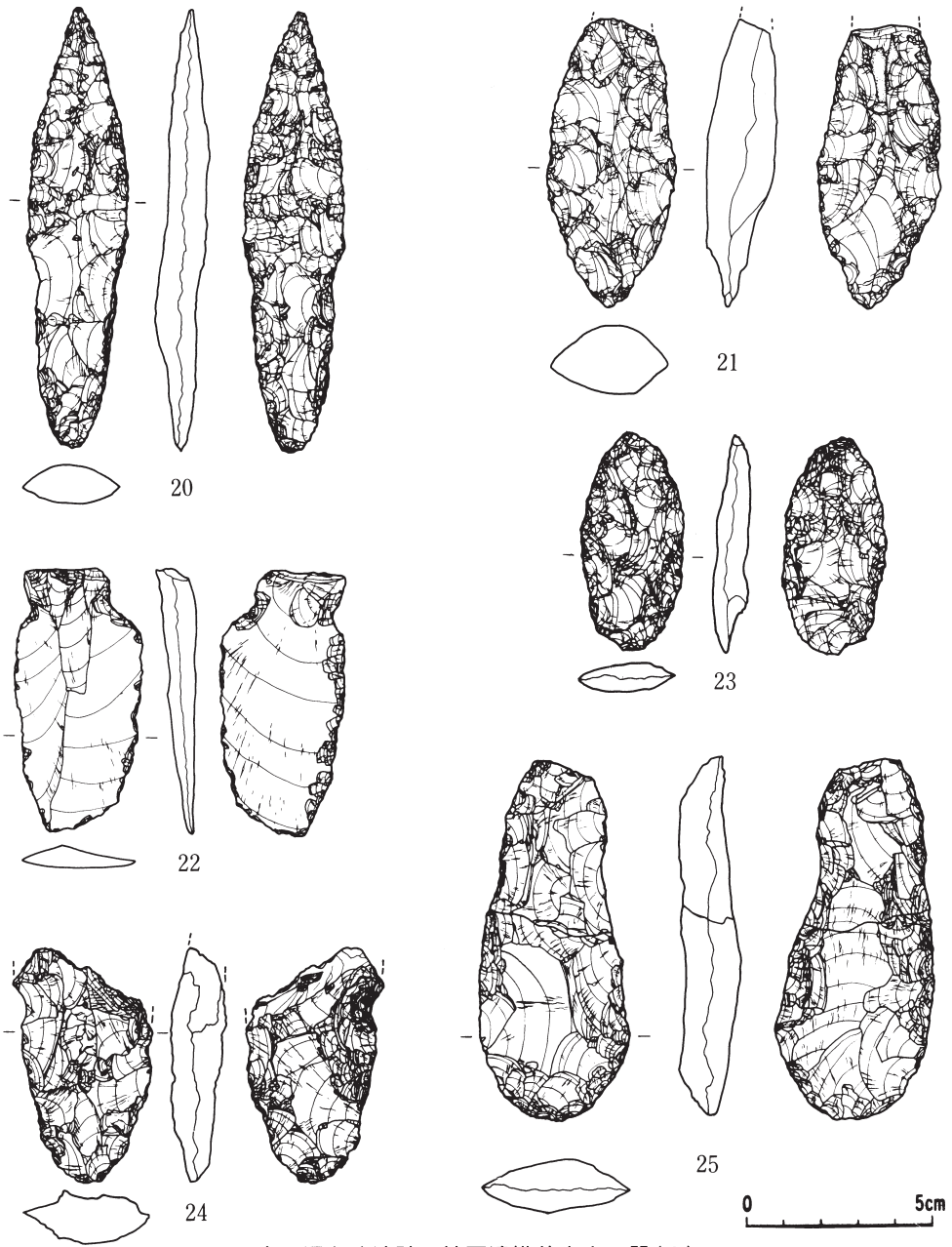
第150図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(1)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第151図-13	G-13	V	30	14	5	1.7	珪	A	74	
" -14	G-15	I	34	13	5	1.8	"	"	76	
" -15	J-22	"	46	15	6	3.0	"	"	79	アスファルト付着
" -16	G-13	V	62	25	11	9.1	"	"	71	
" -17	G-12	V	(30)	16	5	(1.9)	玉珪	"	69	尖頭部欠損
" -18	G-13	"	27	(19)	8	(3.4)	珪	"	73	基部欠損
" -19	H-24	I	93	26	10	21.3	"	B	149	

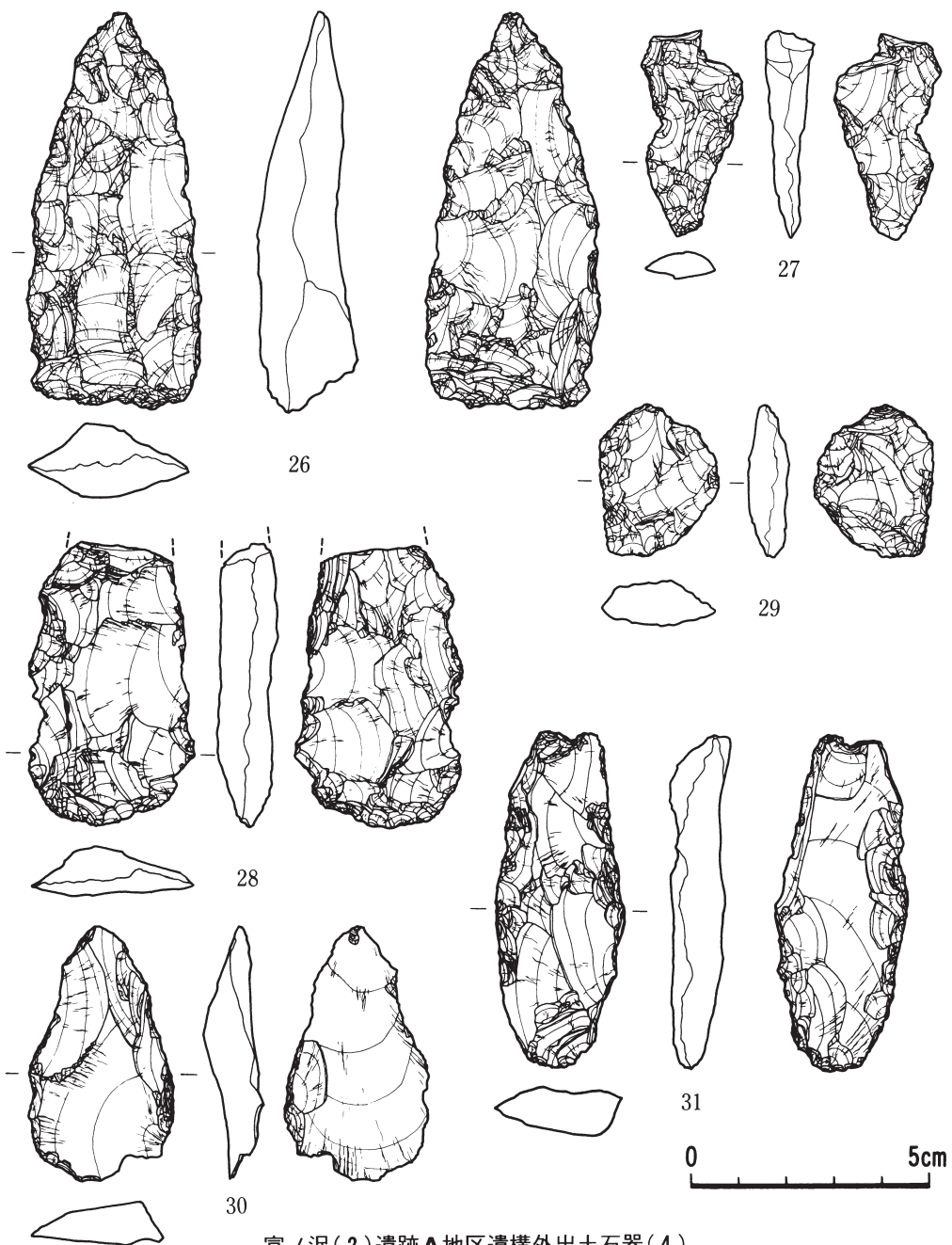
第151図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(2)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第152図-20	G-25	I	119	28	12	34.2	珪	B	80	
" -21	E-24	"	(74)	32	19	(39.0)	"	"	81	欠損
" -22	H-27	"	72	34	10	19.3	"	D	141	
" -23	F-21	"	57	26	8	11.8	"	E	85	
" -24	K-29	"	(65)	35	13	(21.6)	"	B	123	欠損
" -25	I-15	VII a	98	42	15	61.0	珪	E	111	接合

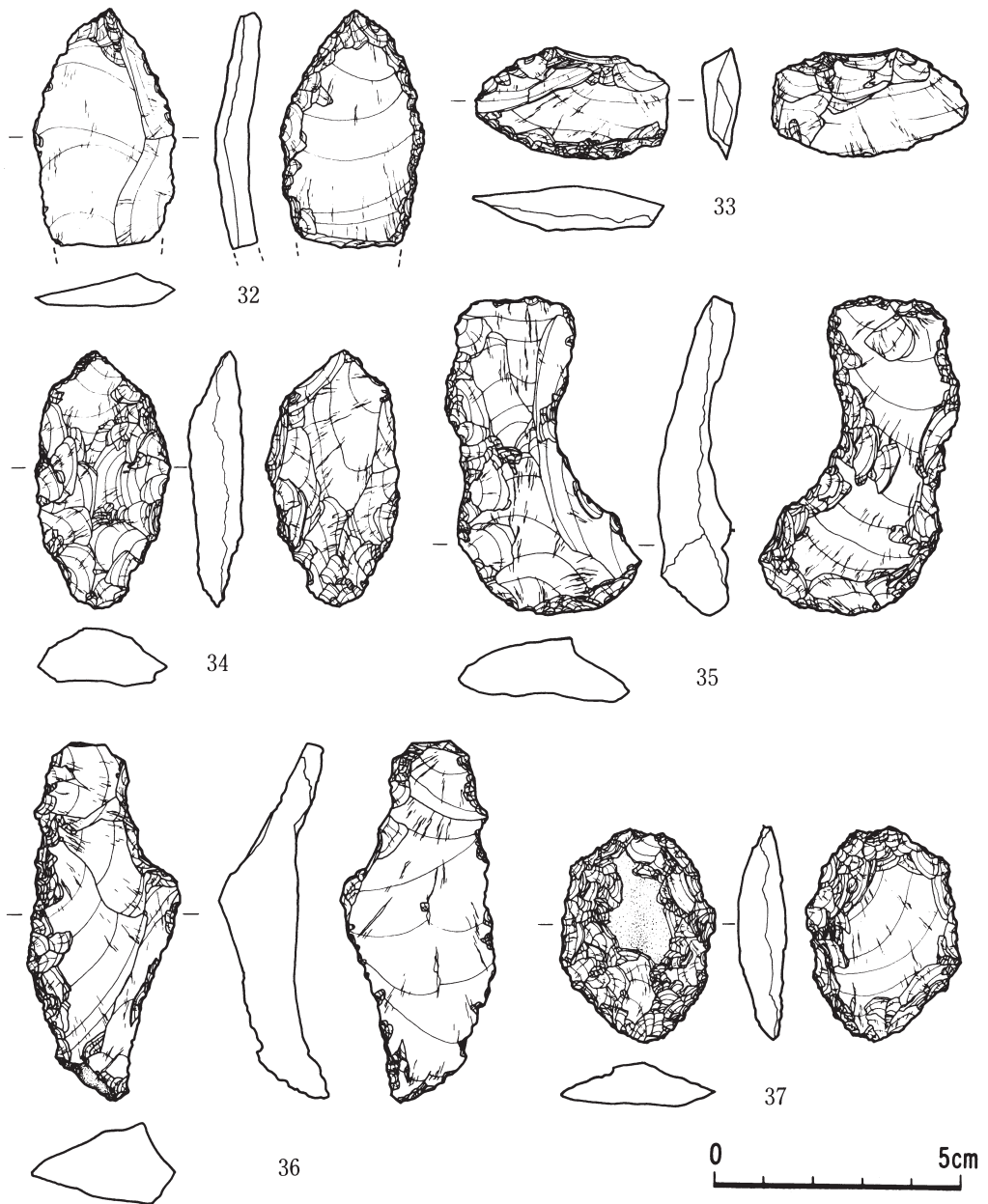
第152図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(3)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第153図-26	F-26	I	79	35	17	46.4	珪	E	88	
"-27	G-12	"	43	19	10	5.9	"	F	68	
"-28	J-29	"	58	35	12	24.5	"	E	114	
"-29	F-18	"	32	24	8	6.5	玉珪	F	83	
"-30	G-18	"	53	31	11	8.7	珪	"	92	
"-31	F-24	"	71	28	11	28.6	"	"	87	

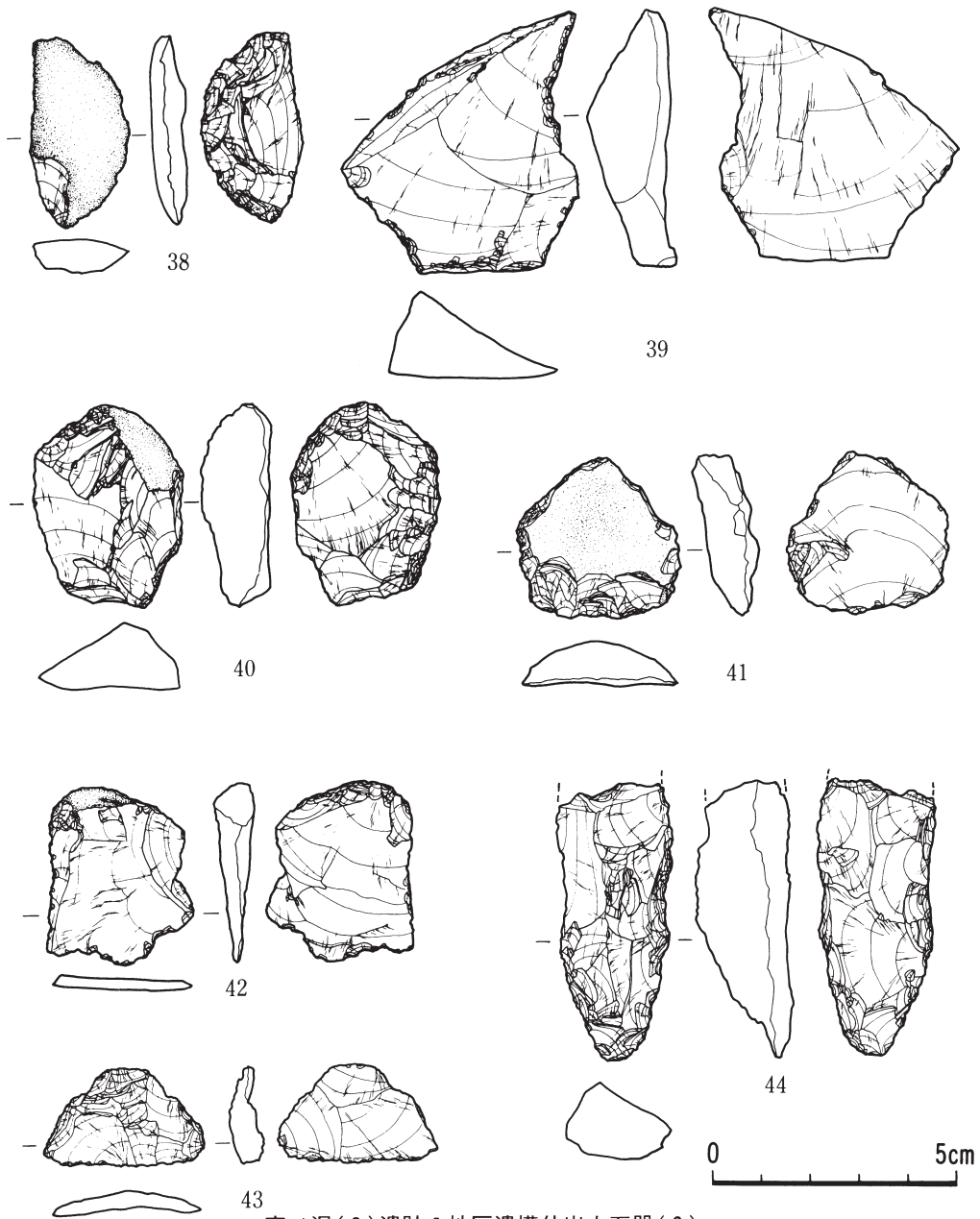
第153図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(4)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(5)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第154図-32	H-37	V	48	29	7	9.1	珪	F	109	
" -33	G-18	I	40	21	9	6.9	"	"	93	
" -34	G-19	"	52	27	10	13.8	"	"	94	
" -35	I-21	V	66	32	12	27.5	"	"	113	
" -36	G-21	I	74	30	16	24.2	"	"	96	
" -37	I-14	"	44	31	9	12.0	チャ	"	110	

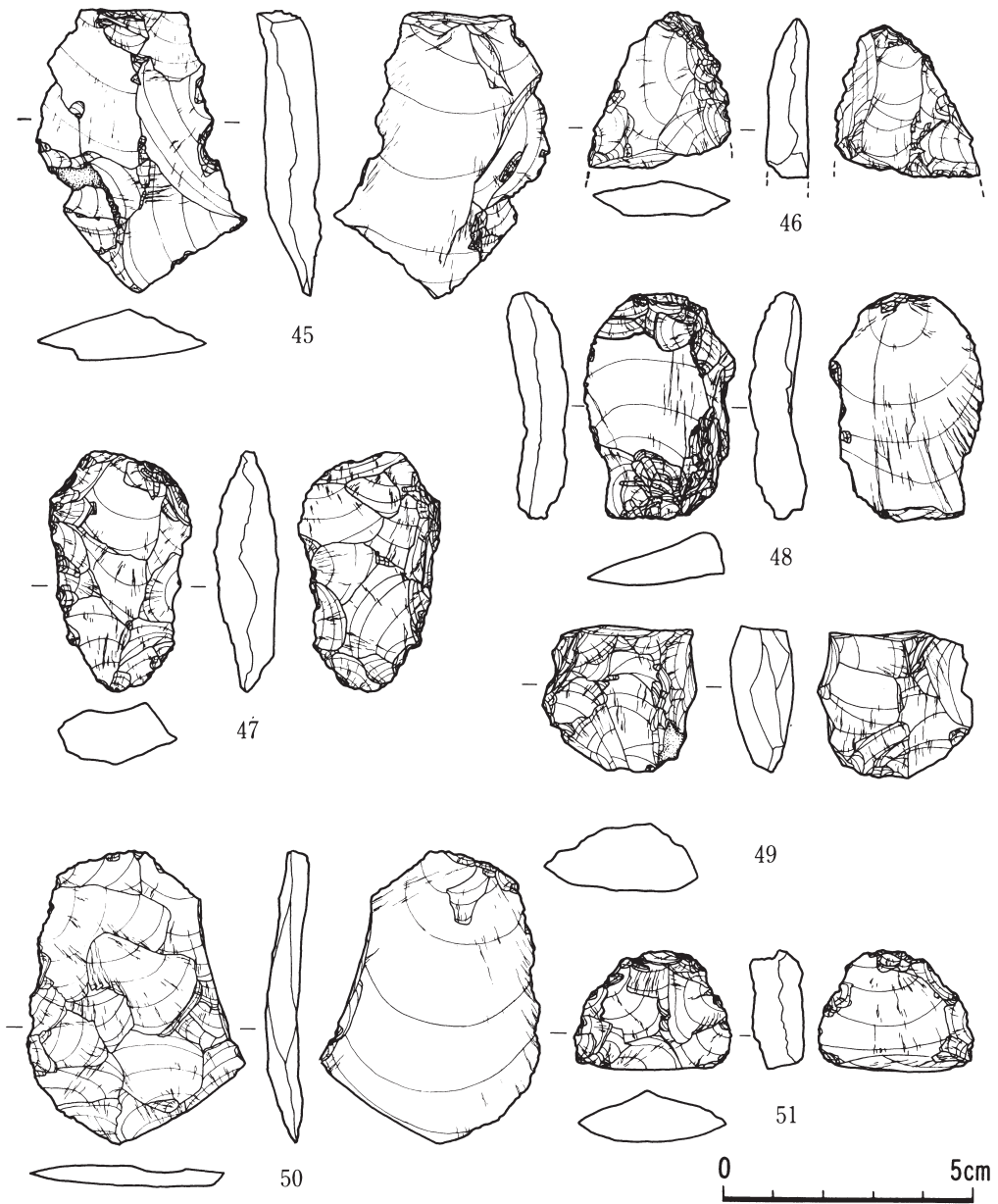
第154図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(5)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(6)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第155図-38	K-29	I	39	21	7	5.9	珪	F	120	
"-39	H-28	"	59	45	18	31.5	"	"	107	
"-40	K-29	"	41	30	13	17.2	"	"	119	
"-41	I-17	"	34	34	10	11.3	チャ	"	112	
"-42	G-27	"	37	31	8	6.5	珪	"	101	
"-43	F-23	"	33	20	4	1.9	"	"	86	
"-44	G-12	"	(56)	23	19	(21.8)	"	"	90	欠損

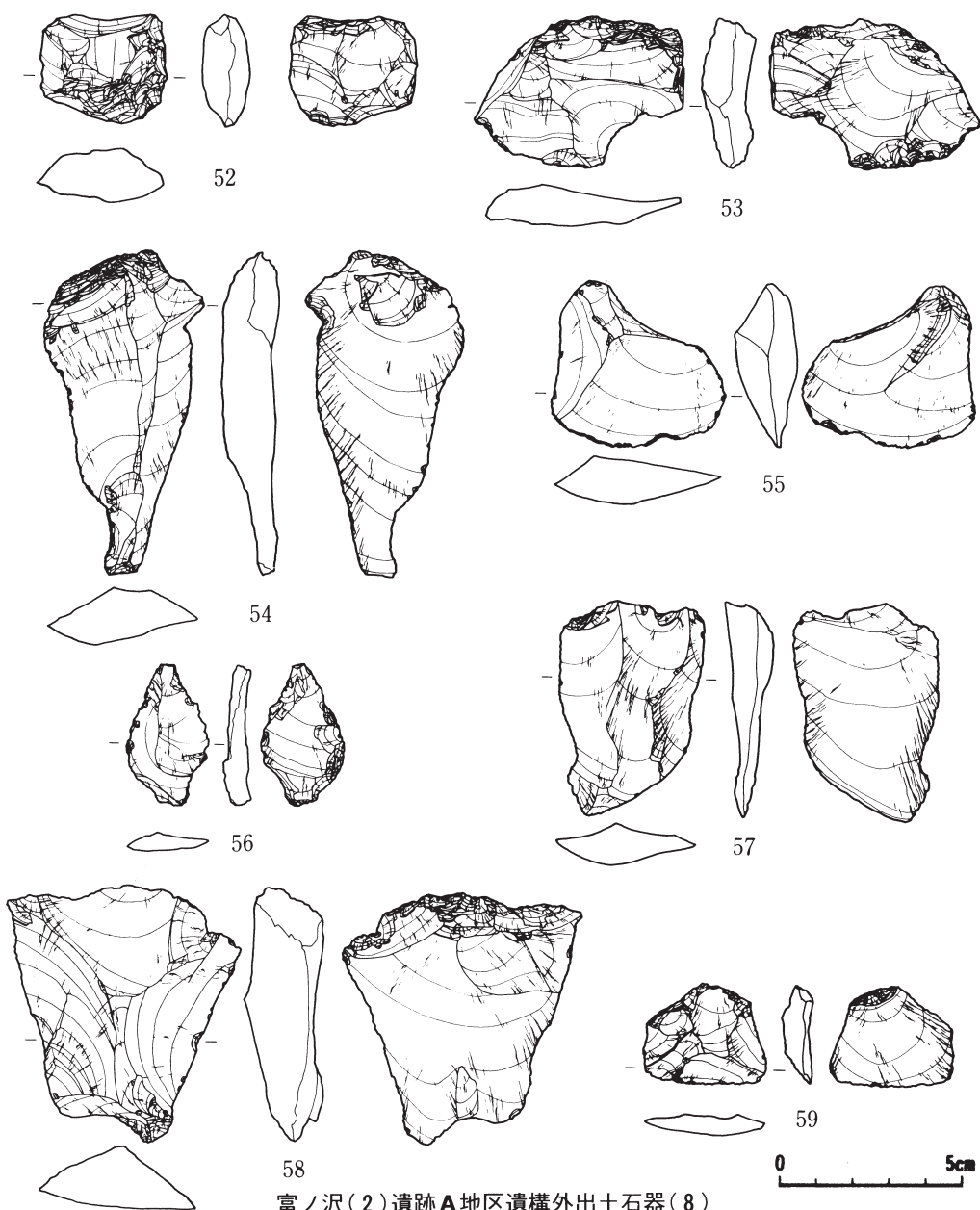
第155図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(6)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(7)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第156図-45	K-29	I	59	42	10	21.1	珪	F	122	
〃 -46	H-24	〃	(36)	(25)	8	(5.7)	〃	〃	106	欠損
〃 -47	K-29	〃	48	29	14	16.4	玉珪	〃	121	
〃 -48	F-21	〃	45	30	9	12.3	珪	〃	84	
〃 -49	G-26	〃	(28)	30	13	(13.5)	〃	〃	98	欠損
〃 -50	H-11	〃	59	44	5	139	〃	〃	103	
〃 -51	J-29	〃	(24)	31	10	(8.0)	〃	〃	115	欠損

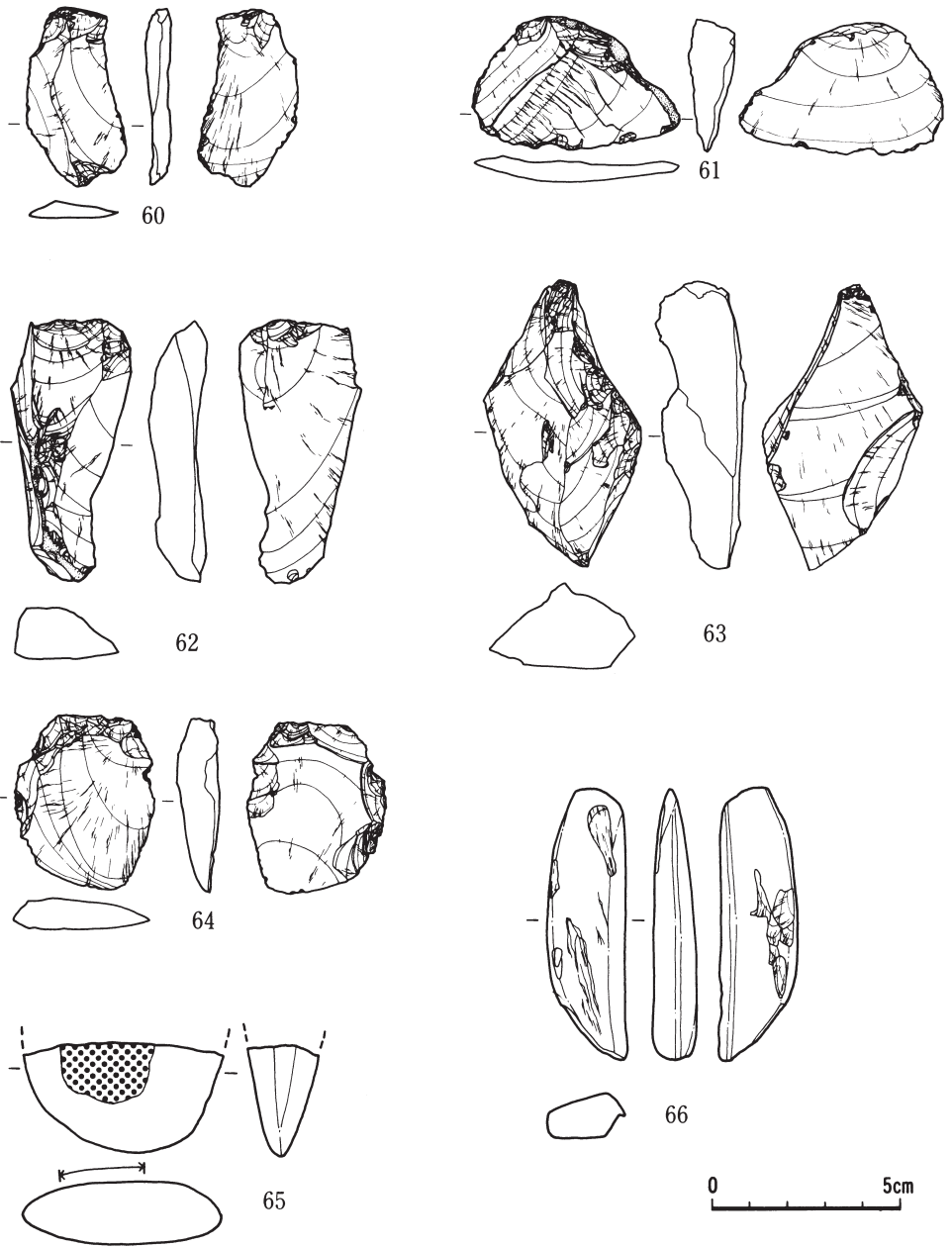
第156図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(7)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(8)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第157図-52	G-26	I	35	28	15	15.4	珪	F	100	
〃-53	H-12	V	60	40	12	30.3	〃	〃	104	
〃-54	F-34	I	89	45	15	38.0	〃	〃	89	
〃-55	K-29	〃	52	36	17	23.9	〃	〃	118	
〃-56	G-17	〃	39	23	4	3.4	〃	〃	91	
〃-57	G-19	〃	60	40	11	18.5	〃	〃	95	
〃-58	G-27	〃	77	61	21	64.9	〃	〃	102	
〃-59	F-14	〃	35	33	7	4.4	〃	〃	82	

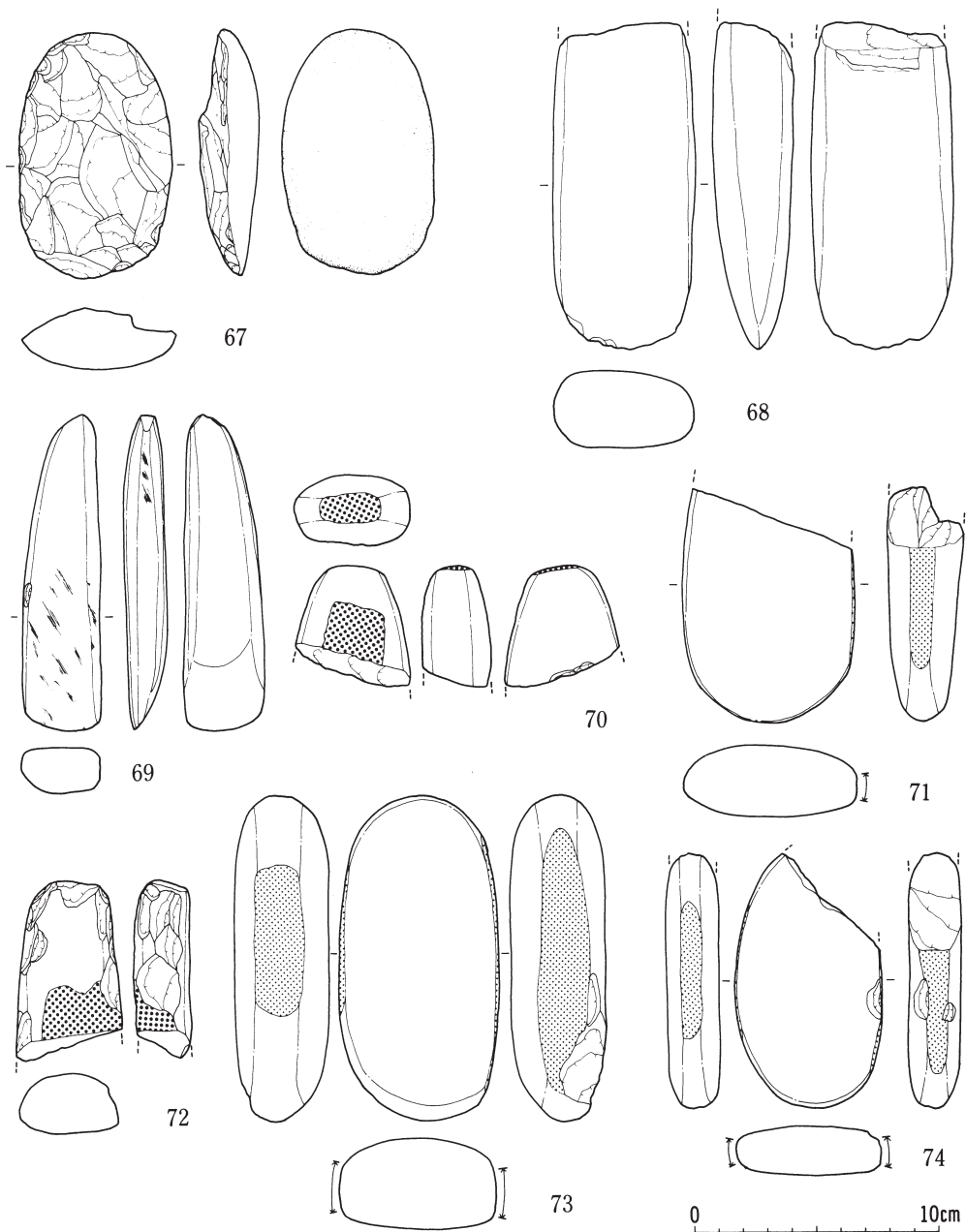
第157図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(8)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(9)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第158図-60	H-28	I	47	24	6	5.9	珪	F	108	
" -61	K-29	"	54	35	12	16.4	"	"	117	
" -62	G-26	"	70	31	14	29.0	"	"	99	
" -63	K-29	"	77	38	21	50.4	"	"	116	
" -64	G-23	Ⅶ	48	38	10	17.2	"	"	97	
" -65	G-27	I	72	21	12	25.0	粘	G	246	刃部残存
" -66	G-13	"	(30)	52	19	(35.0)	閃	"	231	擦切磨製石斧

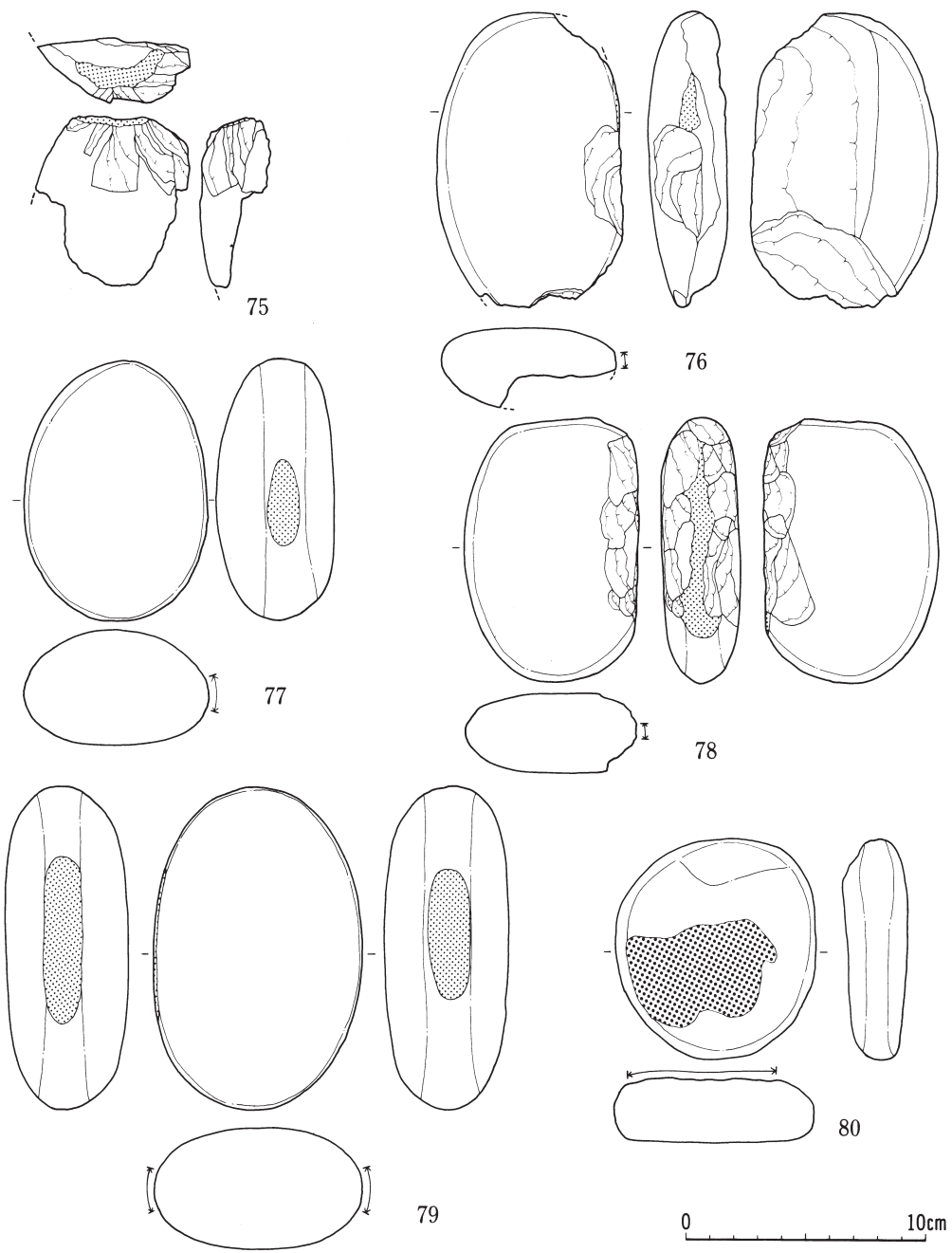
第158図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(9)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(10)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第159図-67	表採		102	62	26	179	安	G	229	
"-68	H-27	I	(132)	57	32	(418)	緑凝	"	232	基部欠損
"-69	F-14	VII	129	32	17	131	緑木	"	230	
"-70	H-25	I	(47)	45	26	(87)	閃	"	250	基部残存
"-71	E-23	"	(84)	70	32	(291)	安	I	233	スリ1面、欠損
"-72	K-29	"	(71)	40	22	(118)	閃	G	254	刃部欠損
"-73	F-15	"	133	65	38	545	安	I	236	スリ2面
"-74	F-12	"	(105)	60	21	(209)	"	"	234	"、欠損

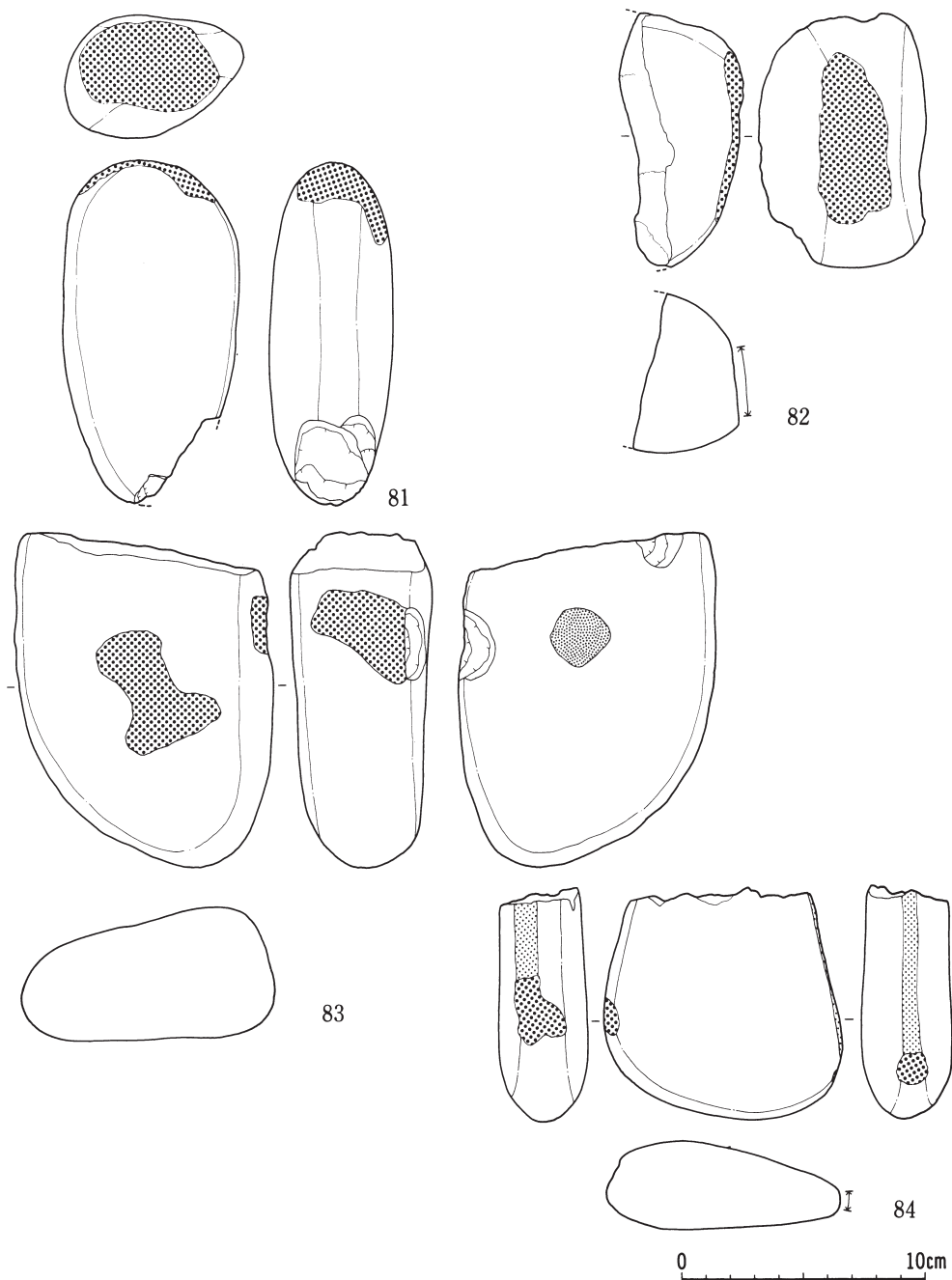
第159図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(10)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(11)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第160図-75	G-21	I	(72)	(61)	(24)	(100)	チャ	I	242	スリ1面、欠損
"-76	H-16	"	(124)	75	(32)	(356)	安	"	249	"
"-77	G-25	"	109	77	49	613	"	"	244	スリ1面
"-78	G-26	"	110	72	34	453	"	"	245	"
"-79	K-24	VII a	134	87	52	953	"	"	252	スリ2面
"-80	F-21	I	94	84	25	281	"	"	237	タタキ1面

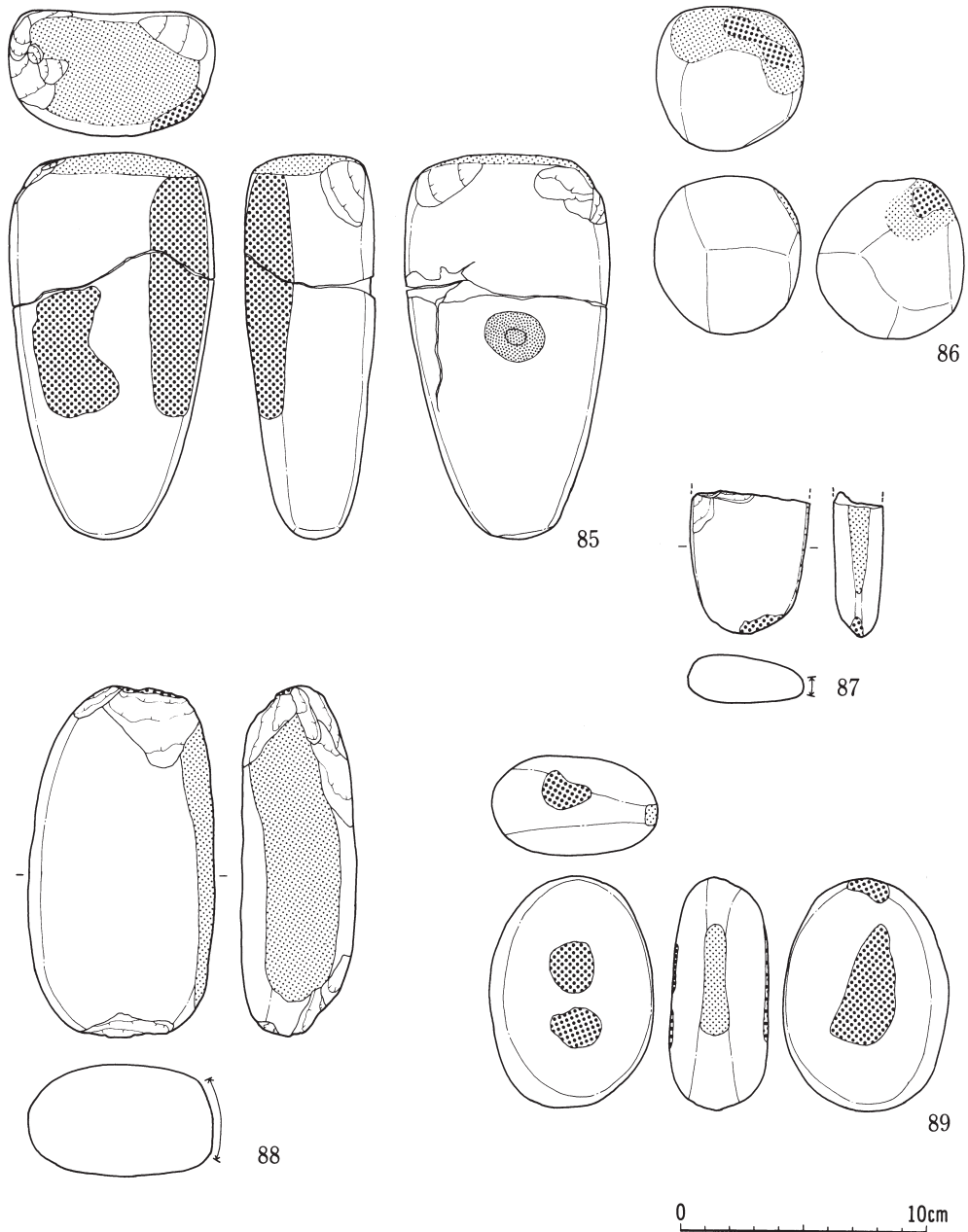
第160図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(11)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(12)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第161図-81	K-29	I	(141)	74	50	(645)	安	I	256	タタキ1面、欠損
" -82	G-16	"	102	66	(49)	(419)	"	"	241	タタキ2面、欠損
" -83	G-14	"	(131)	103	57	(1,061)	"	"	240	タタキ2面、欠損
" -84	F-12	"	(96)	97	36	(504)	"	"	235	タタキ1面、タタキ2面、欠損

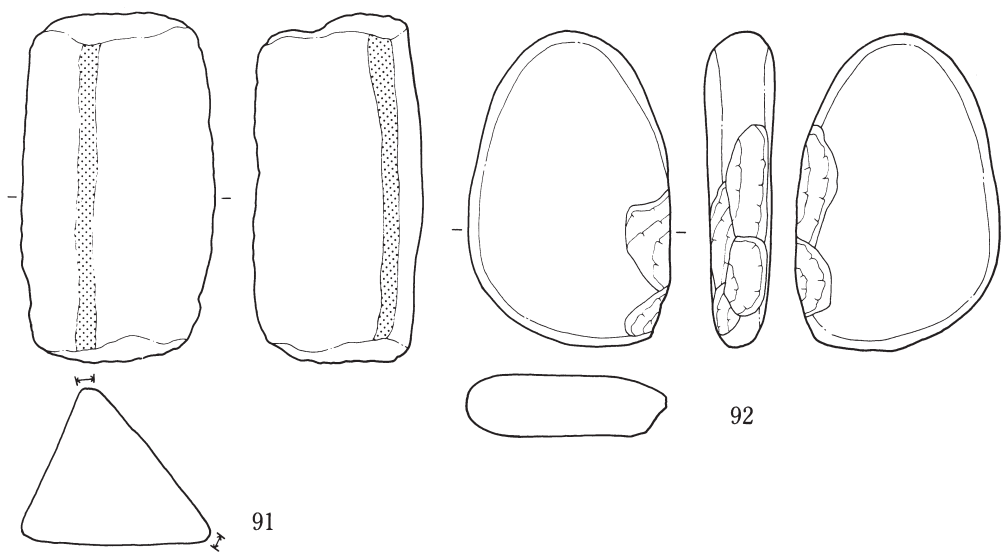
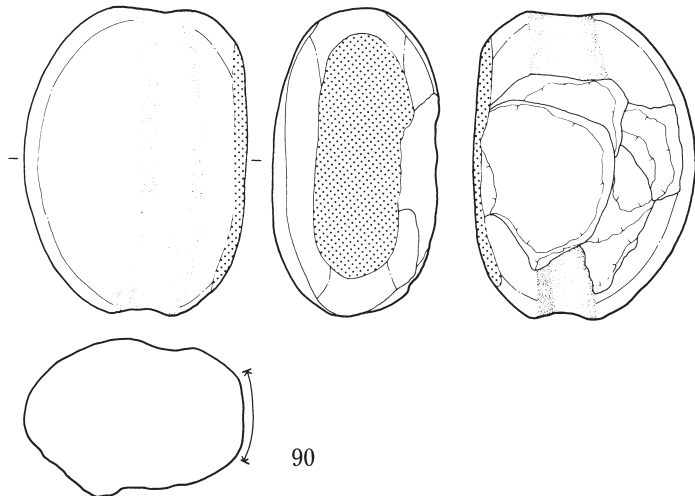
第161図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(12)



富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(13)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第162図-85	H-10	VII a	157	83	52	1,044	安	I	247	スリ1面、タタキ2面
" -86	F-24	I	65	58	58	329	"	"	238	スリ1面、タタキ1面
" -87	G-22	"	(58)	47	18	(82)	閃	"	243	スリ1面、タタキ1面、欠損
" -88	K-29	"	142	75	47	835	安	"	255	スリ1面、タタキ1面
" -89	"	"	94	66	40	339	"	"	253	スリ1面、タタキ3面以上

第162図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(13)

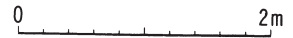
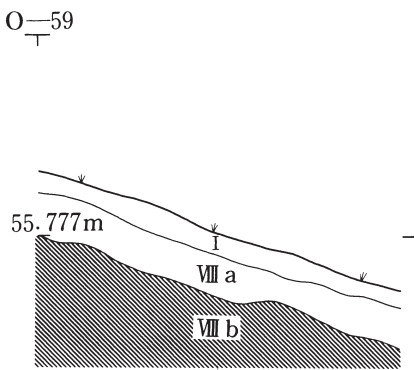
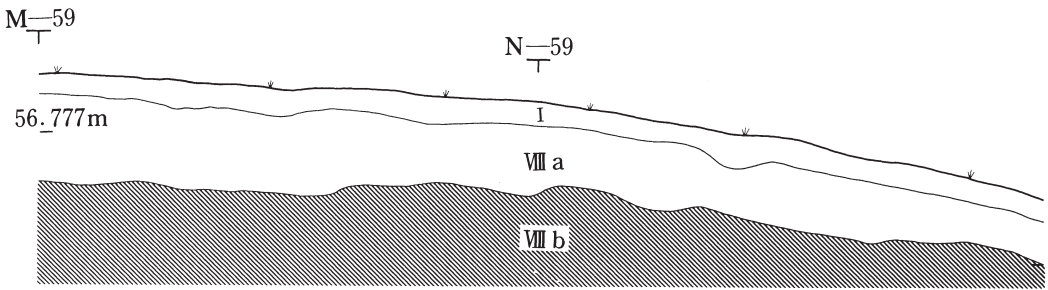
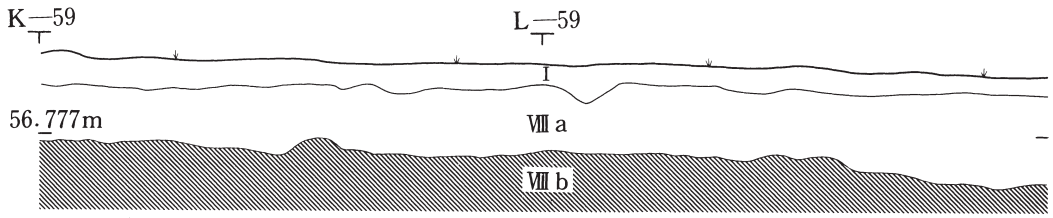


富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(14)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第163図-90	K-22	VII a	101	73	(52)	(598)	安	J	251	一部剥落
"-91	K-30	I	114	62	51	537	"	I	257	
"-92	H-13	"	104	66	24	247	"	K	248	

第163図 富ノ沢(2)遺跡A地区遺構外出土石器(14)

富ノ沢(2)遺跡B地区



第164図 富ノ沢(2)遺跡B地区基本層序

第3節 富ノ沢2遺跡B地区の検出遺構と出土遺物

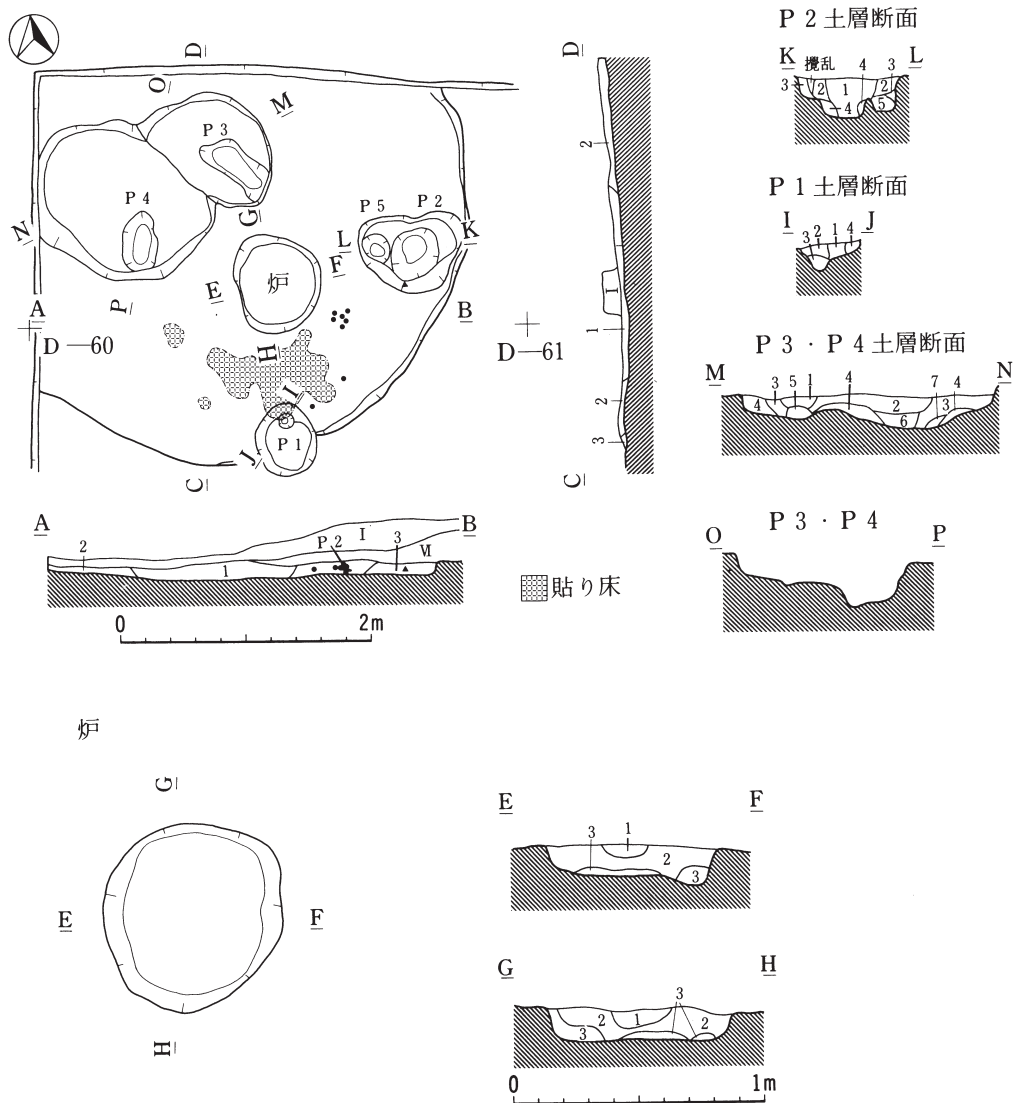
1. 検出遺構と遺構内出土遺物

本地区で検出された遺構は、竪穴住居跡 2 基・土塋40基・焼土状遺構 4 基・ピット群 1 基を検出した。

(1) 竪穴住居跡

第6号竪穴住居跡(第165~166図)

位置と確認 調査区C・D 61グリッドに位置する。基本層序 a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。



第165図 第6号竪穴住居跡

第6号住居跡土層注記

第1層	暗 褐 色	10 Y R 3/4	炭化物、ローム粒を含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物、ローム粒を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物、焼土粒を少量に含む。しまりあり、粘性ややあり。

第6号住居跡炉土層注記

第1層	赤 褐 色	5 Y R 3/4	しまりあり、粘性ややあり。
第2層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物、焼土粒を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐 色	10 Y R 3/4	しまり・粘性あり。

第6号住居跡P1土層注記

第1層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を微量に含む。しまりややあり、粘性あり。
第3層	黄 褐 色	10 Y R 3/4	しまりややあり、粘性あり。
第4層	褐 色	10 Y R 3/4	しまり・粘性あり。

第6号住居跡P2土層注記

第1層	暗 褐 色	10 Y R 3/4	ローム粒を少量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第2層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を少量に含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	黄 褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を微量に含む。しまり・粘性あり。
第4層	褐 色	10 Y R 3/4	ロームをブロック状に含む。しまり・粘性あり。
第5層	褐 色	10 Y R 3/4	しまりなし、粘性ややあり。

第6号住居跡P3、P4土層注記

第1層	褐 色	10 Y R 3/4	しまりややあり、粘性なし。
第2層	暗 褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第4層	黄 褐 色	10 Y R 3/4	炭化物を少量に含む。しまり・粘性あり。
第5層	褐 色	10 Y R 3/4	しまり・粘性ややあり。
第6層	褐 色	10 Y R 3/4	しまり・粘性あり。
第7層	褐 色	10 Y R 3/4	しまりあり、粘性ややあり。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形の全体は北・西側部分が調査区域外のため把握できなかったが、調査した残存ラインから推定するとほぼ円形を呈すると思われる。規模は長径(380cm)・短径(343cm)・床面積(8.75㎡)である。計測値はすべて残存部位の値である。

壁 南側から東側にかけて残存しており、床面から上場にかけて垂直に立ち上がっている。壁の状況は軟かい。

床面 炉の南側部分に貼り床がみられ平坦であるが、他は起伏があって軟かい。

柱穴 ピットは5個検出された。柱穴と思われるものはピット1・2・5の3個であり、ピット3・4については 付属施設 の項目で記載する。

柱穴は、炉の南側と東側に位置し、ピット2・5は重複しており、ピット2の方が新しい。

ピット計測表

No.	形 態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形 態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形 態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	58×49	22	2	不整形	64×51	32	5	不整形	45×(2)8	26

付属施設 炉の北側に2個の土壌を検出した。両土壌ともに不整形で底面に起伏があって軟かく、壁もはっきりとしていない。また、土壌は切り合い関係を有するが、新旧関係はつかめなかった。なお、土壌の性格及び用途については不明である。

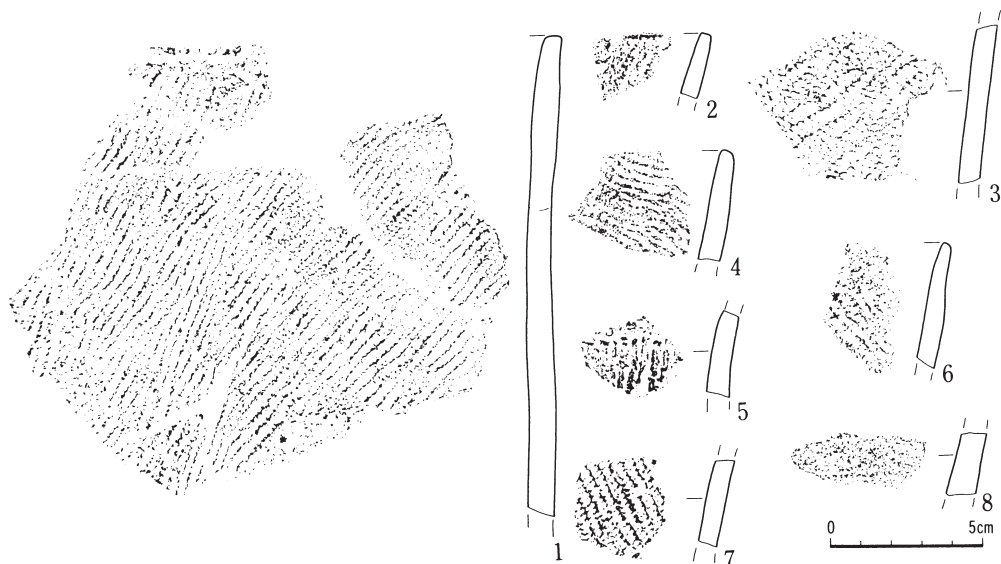
炉 炉は住居跡の南側に位置しており、地床炉である。形態は円形を呈し、規模は長径72cm、短径70cmを測る。

堆積土 住居跡の堆積土は3層に分層でき、第2・3層中に焼土粒を含む、このことから焼失

家屋の可能性も考えられる。

出土遺物

遺物は、炉の南側に多く分布し第3層中からの出土が多い。遺物は土器片のみで、すべて第群2類に類別される粗製土器である。



第166図 第6号竪穴住居跡出土遺物

第6号竪穴住居跡 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	2 層	口縁部	燃糸圧痕 (RL)	縄文 (RL)	スス状炭付	Ⅲ群2類
2	覆土	〃	縄文 (RL)			〃
3	3 層	口頸部	〃		スス状炭付	〃
4	覆土	口縁部	縄文 (L)		〃	〃
5	3 層	口頸部	縄文 (LR)		〃	〃
6	覆土	口縁部	縄文 (RL)		〃	〃
7	3 層	胴部	縄文 (RL)		〃	〃
8	2 層	〃	無文		〃	〃

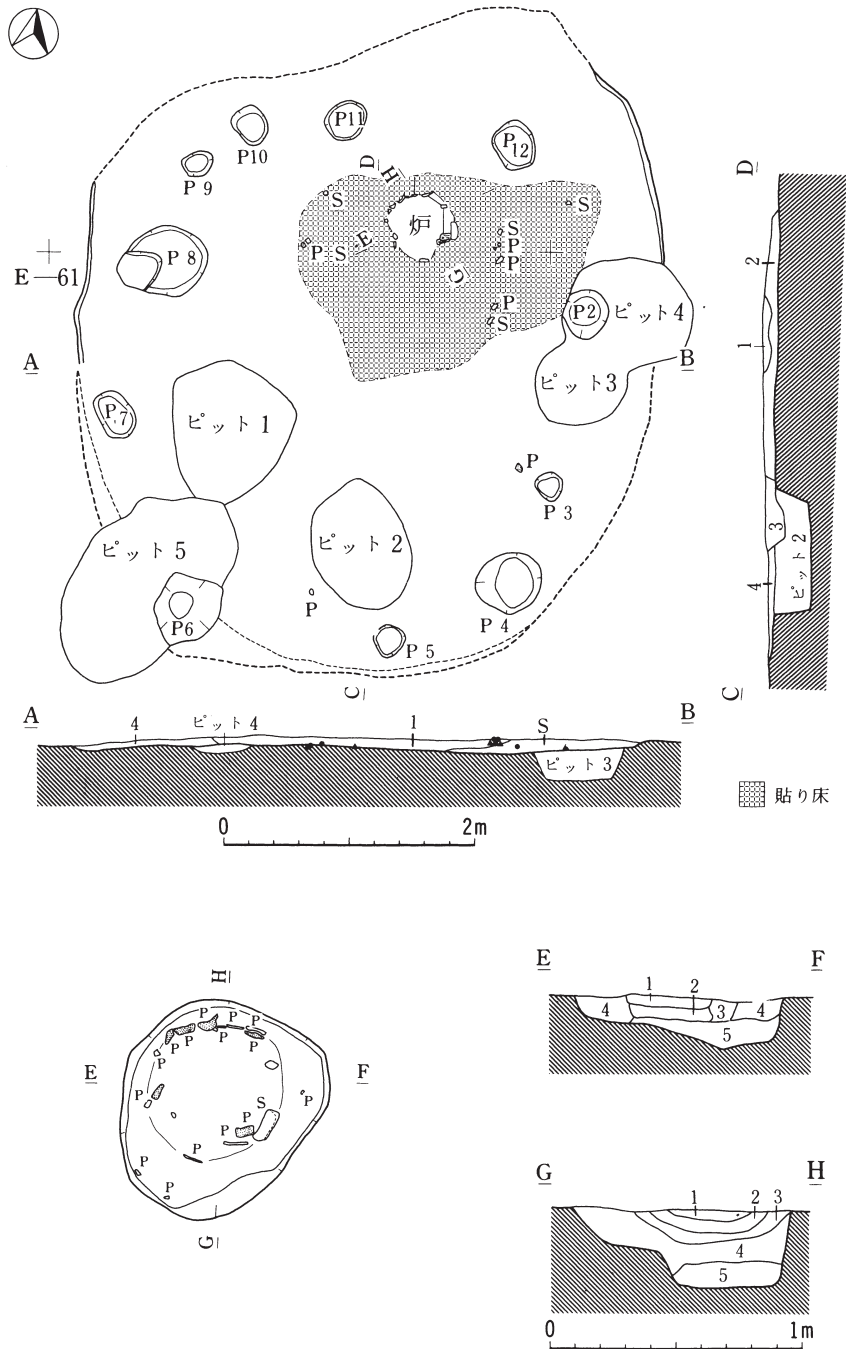
第7号竪穴住居跡 (第167～171図)

位置と確認 調査区D・E 62・63グリッドに位置する。基本層序第 a層を精査中に炉と貼り床を確認した。

重複 4基の土壌と重複している。土壌は炉の南側に多く位置し、その新旧関係は、竪穴住居跡より古いもの(7号竪穴住居跡ピット1・2)・竪穴住居跡より新しいもの(7号竪穴住居跡ピット4)・新旧関係が不明なもの(7号竪穴住居跡ピット3・5)に分かれる。

平面形・規模 平面形は、東・西側の壁が残存する部分で、北側部分は、貼り床面及び地山の a層が人為的に踏みかためられ床面と思われる範囲から推定し、更にまた南側は上記の残存部から推定したラインである。本住居跡の残存部が少なく推定ラインから判断すると、やや

いびつな円形を呈すると思われる。規模は、長径(5 m50cm)・短径(4 m70cm)・床面積(19.41m²)である。



第167図 第7号竪穴住居跡

第7号竪穴住居跡土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	炭化物・焼土粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	暗褐色	10YR 3/3	炭化物を多量に、焼土粒・ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物・ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第4層	褐色	10YR 3/4	炭化物若干・ローム粒を多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第5層	褐色	10YR 3/4	炭化物少量含み、黄褐色土混入。しまりなし、粘性あり。

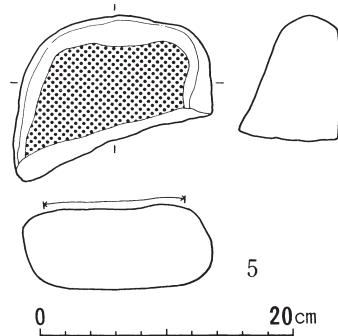
第7号竪穴住居跡炉土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物・焼土粒若干含む。しまり・粘性なし。
第2層	褐色	10YR 3/6	焼土を多量に含む。しまり・粘性あり。(焼土層)
第3層	黄褐色	10YR 3/6	ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	暗褐色	10YR 3/3	ローム粒を多量に含む。しまり・粘性なし。
第5層	黄褐色	10YR 3/6	暗褐色土混入。しまり・粘性なし。

壁 残存部が東・西壁のみであり、南・北壁は検出できなかった。東・西壁ともに壁高は5cmと低く、また、上端から床面にかけて傾斜し、軟弱なつくりでもろい。

床面 全体的にほぼ平坦である。炉の周辺約1mは地山を用いた貼り床面であり、かたく締りがある。貼り床面から南側にかけては軟弱であるため、床面としての判断は困難であった。

柱穴 柱穴と思われるピットは11個検出した。壁から内側に約50cmのところを位置し、ほぼ一周する。その間隔は約1mであるが、北側に位置するP₈₋₁₁の間隔は狭い。位置等から判断すると壁柱穴と思われる。



第168図 第7号竪穴住居跡出土遺物(1)

第7号竪穴住居跡出土遺物(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第168図-5	7H炉	フック土	152	(99)	72	(1,800)	安	L	285	欠損

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	42×40	24.8	2	円形	37×36	40.9	3	不整形	34×32	7.8
4	円形	53×50	33.0	5	不整形	37×35	16.3	6	不整形	56×52	46.4
7	楕円形	48×37	27.1	8	楕円形	75×54	37.5	9	楕円形	32×18	11.0
10	円形	34×33	13.8	11	円形	31×30	16.8				

付属施設 検出できなかった。

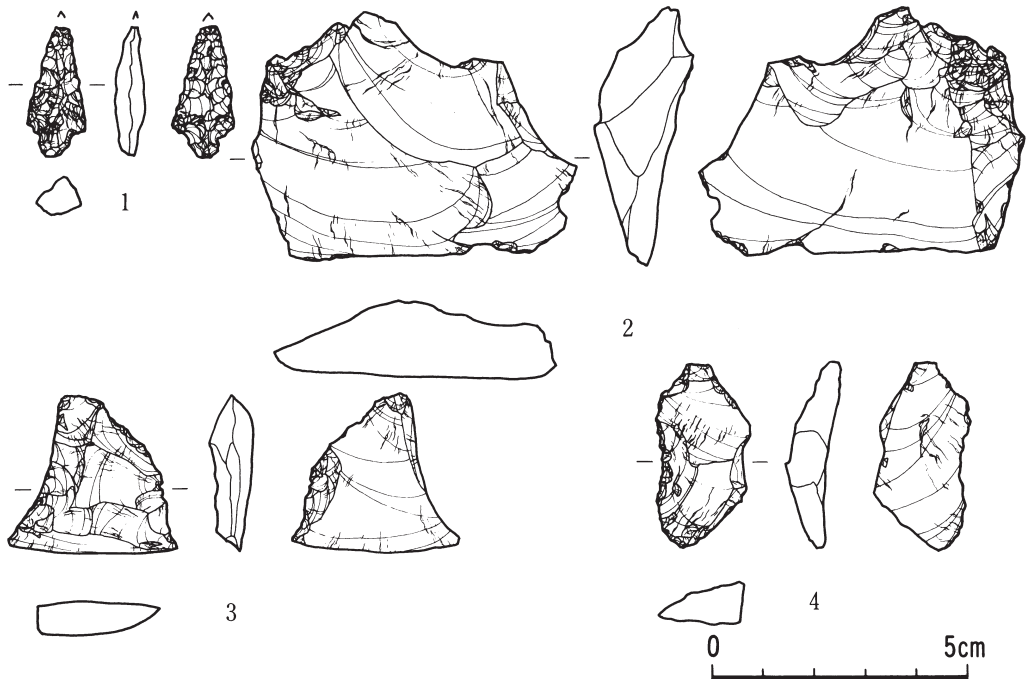
炉 住居跡の中央部から北側に位置し、粗製の深鉢形土器片を炉の外局に円形状に配置した土器片囲炉である。土器片は北側では近接されているが、南側部分では間隔が開いており、土器片のみられない箇所もある。炉内の堆積土は3層に分層できる。火熱をあまり受けておらず、短期間使用した炉と思われる。

堆積土 5層に分層できた。本住居跡を覆う第1・2層中に焼土粒を含んでおり、本住居跡が焼失住居跡の可能性も考えられる。

出土遺物

遺物の出土は、住居跡の炉の南側部分に多く集中していた。土器は第 6 号竪穴住居跡と同様第 群 2 類の粗製土器である。接合できた土器は 1 だけで、これは炉を囲む土器片のみが相互に接合したものである。石器は、石鏃 1 点・不定形石器 3 点・石皿・台石類 1 点の計 5 点が出土した。

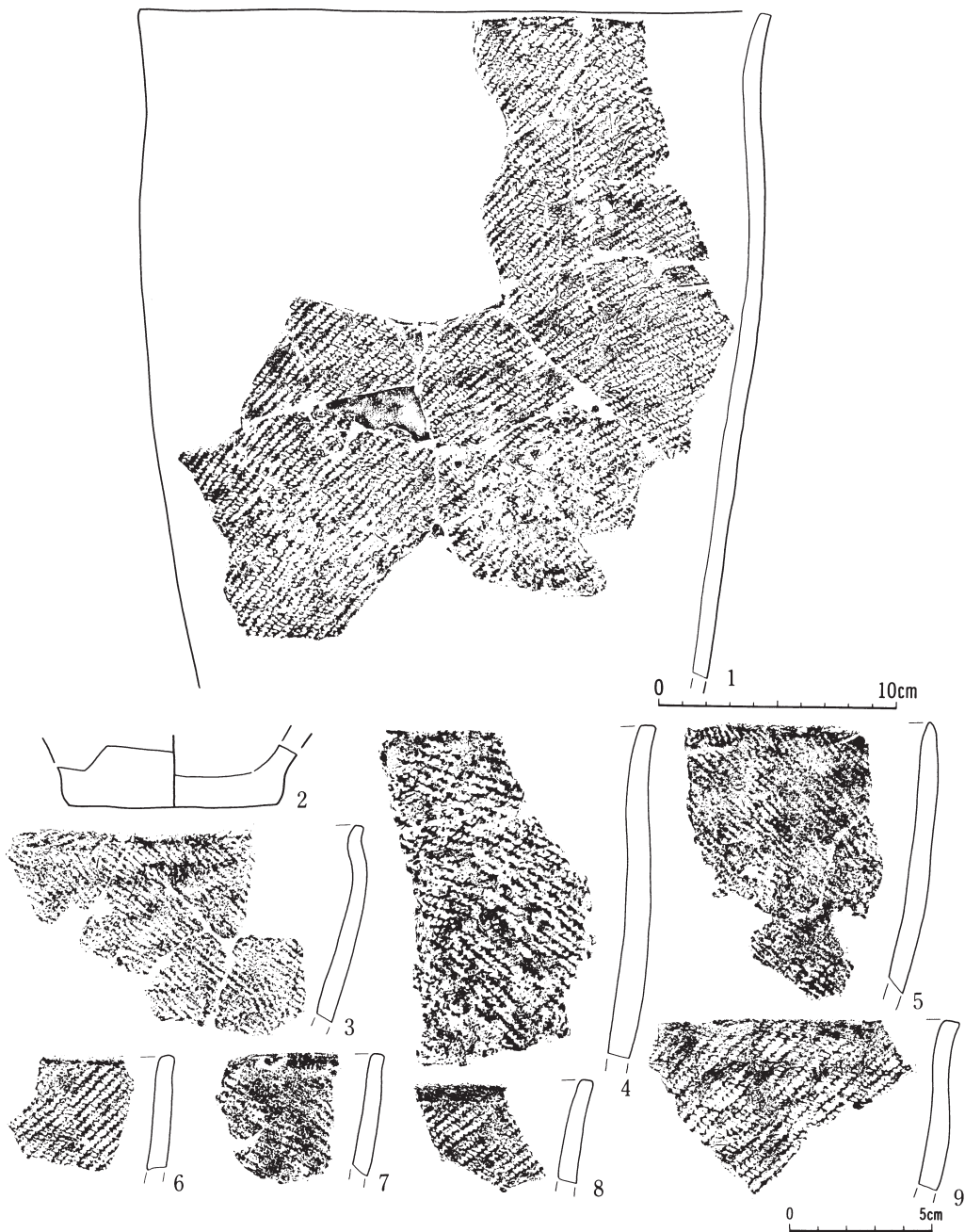
(成田 滋彦)



第169図 第 7 号竪穴住居跡出土遺物(2)

第 7 号竪穴住居跡出土遺物(2)

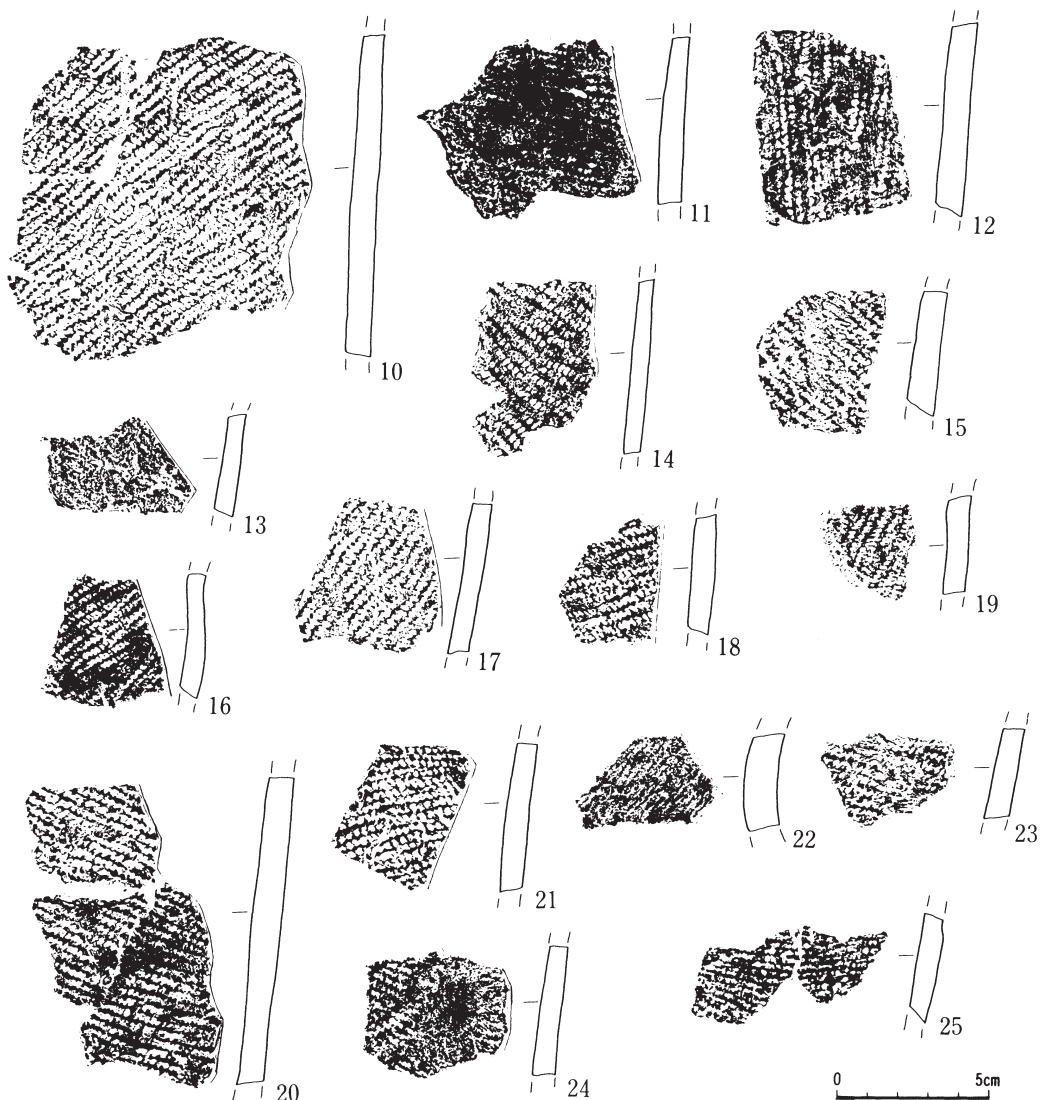
図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第169図-1	7H	床直	(26)	12	5	(1.3)	玉珪	A	124	尖頭部欠損
" -2	"	床面	63	49	16	35.3	珪	F	126	
" -3	7Hピット1	フク土	36	32	8	6.0	"	"	127	
" -4	7H	床面	36	18	8	4.4	"	"	125	



第7号住居跡土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	炉	深鉢	平口縁、縄文(RL)、		スス状炭付	Ⅲ群2類
2	3層	底部	無文			〃
3	〃	口縁部	縄文(LR)、平口縁		スス状炭付	〃
4	炉	〃	縄文(RL)、	〃	〃	〃
5	3層	〃	〃	〃	〃	〃
6	床面	〃	〃	〃	〃	〃
7	覆土	〃	〃	〃	〃	〃
8	3層	〃	〃	〃	〃	〃
9	炉	〃	〃	〃	〃	〃

第170図 第7号竪穴住居跡出土遺物(3)



第7号竪穴住居跡土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
10	炉	胴部	縄文 (R L)		スス状炭付	Ⅲ群2類
11	床	面	縄文 (L R)		〃	〃
12	覆	土	縄文 (R L)		〃	〃
13	3	層	縄文		〃	〃
14	覆	土	縄文 (R L)		〃	〃
15	炉	〃	縄文 (R L)		〃	〃
16	床	面	口頸部	縄文 (L R)	〃	〃
17	炉	胴部	縄文 (R L)		〃	〃
18	覆	土	〃		〃	〃
19	3	層	〃		〃	〃
20	炉	〃	縄文 (R L)		〃	〃
21	覆	土	〃		〃	〃
22	〃	口頸部	縄文		〃	〃
23	炉	胴部	縄文 (L R)		〃	〃
24	覆	土	縄文 (R L)		〃	〃
25	3	層	縄文 (L R)		〃	〃

第171図 第7号竪穴住居跡出土遺物(4)

(2) 土 壤

第34号土壌 (第172図)

位置と確認 調査区O 57・58グリッドの台地緩斜面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みを持つ円形である。規模は、長径 1 m72cm・短径 1 m71cm・深さ54 cmである。

壁 東・西壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、南壁は底面から中場にかけて垂直に立ち上がり、中場から上場にかけては緩やかに立ち上がる。北壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁の構築はかたく、堅緻な構築を呈する。壁高は、東壁が39cm・西壁が37cm・南壁が38cm・北壁が51cmである。

底面 ほぼ平坦であり、かたく締りがある。

第34号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 7/4	黒褐色土混入、礫及び炭化物を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を少量含む。しまりややあり、粘性なし。
第3層	褐色	10YR 5/6	礫を多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。

堆積土 3層に分層でき、断面観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

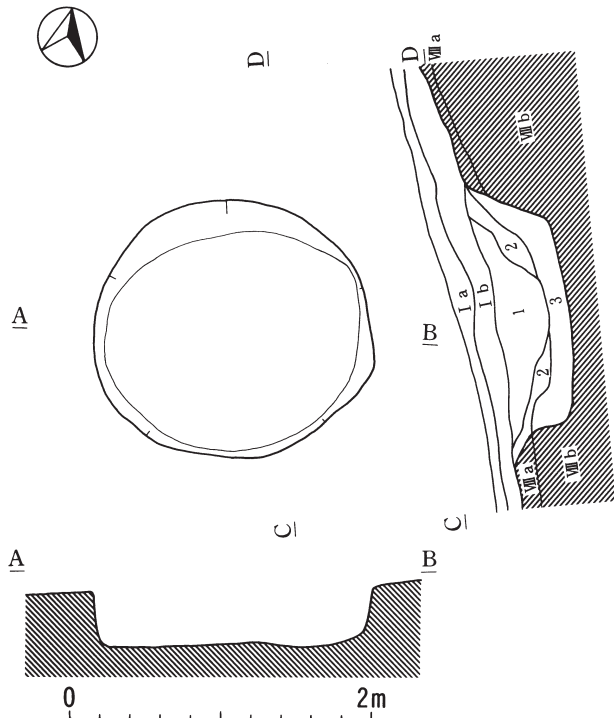
第35号土壌 (第173～175図)

位置と確認 調査区I 52・53グリッドで台地の緩斜面に位置し、第 層を精査中に礫及び土器片とともに円形の落ち込みを確認した。

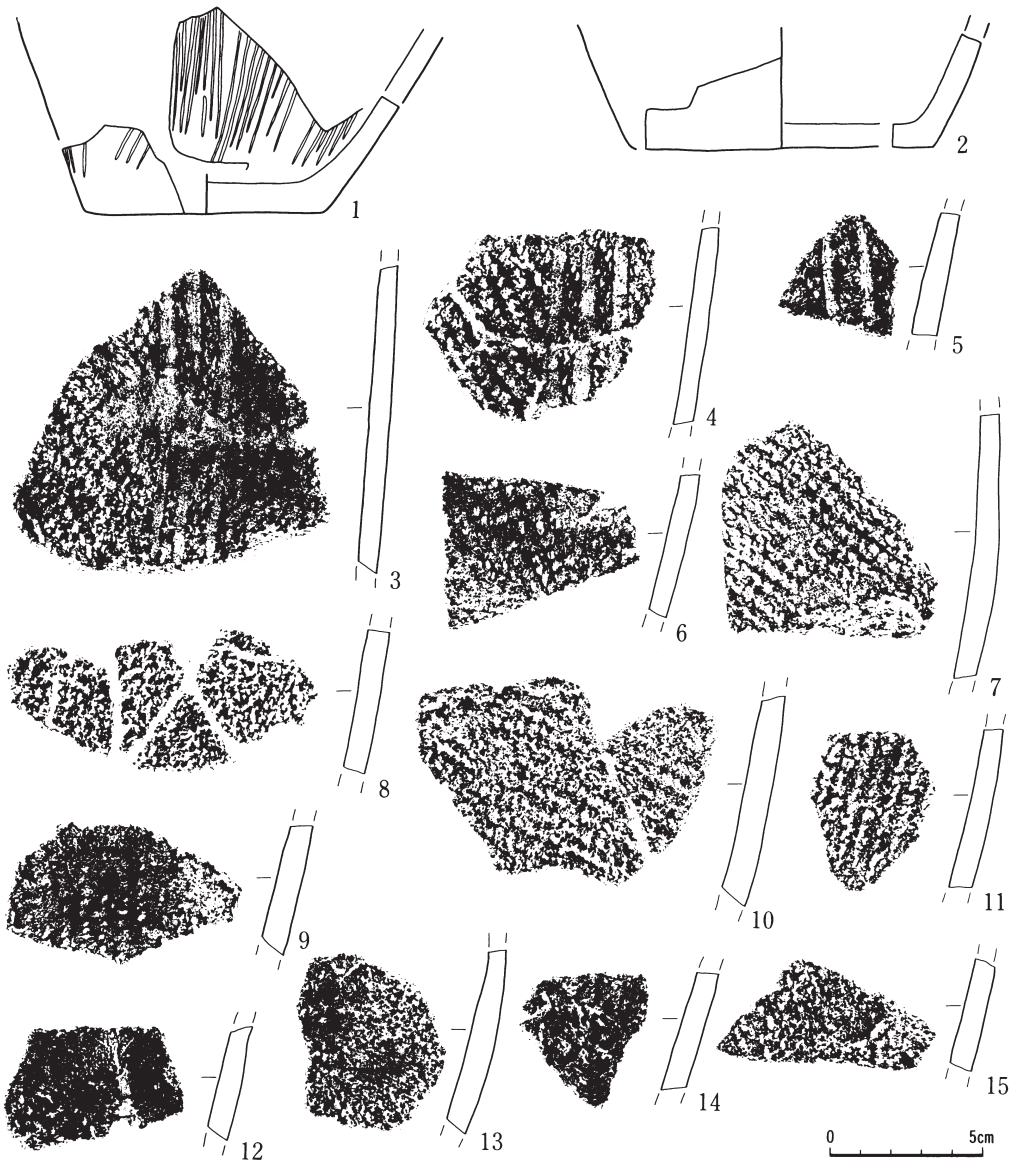
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は北側にやや張り出したいびつな円形を呈する。規模は、長径 1 m27 cm・短径 1 m24cm・深さ 1 m05cmである。

壁 南壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、他の壁は中場に段を有している。壁



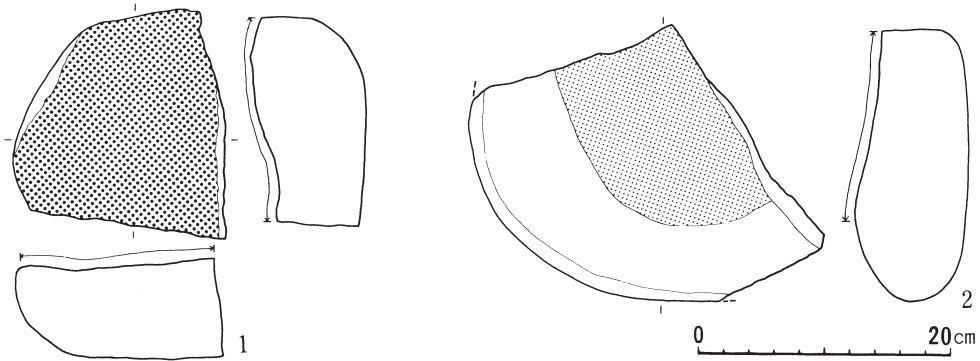
第172図 第34号土壌



第35号土壤土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	深鉢	縦位、櫛歯状沈線、		スス状炭付	Ⅲ群2類
2	〃	底部	無文			〃
3	〃	胴部	縄文 (RLR)、縦位沈線、スス状炭付			Ⅱ群8類
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃	〃	Ⅲ群2類
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	スス状炭付	〃
10	〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃
12	〃	口頸部	無文		〃	〃
13	〃	胴部	縄文 (RLR)		〃	〃
14	〃	〃	縄文		〃	〃
15	〃	〃	縄文 (RLR)		〃	〃

第173図 第35号土壌出土遺物(1)



第174図 第35号土壙出土遺物(2)

第35号土壙出土遺物(2)

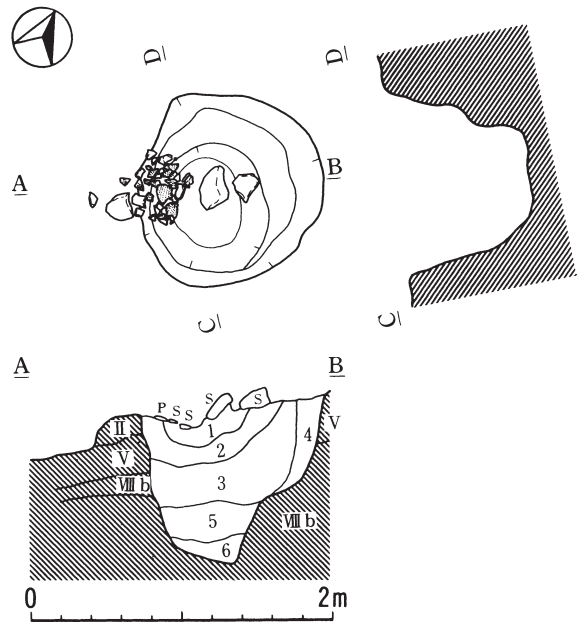
図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第174図-1	35土	フク土	(179)	(169)	92	(4,300)	安	L	286	欠損
" -2	"	"	(301)	(217)	96	(7,900)	"	"	287	"

はもろく、軟弱なつくりである。壁高は東壁100cm・西壁82cm・南壁86cm・北壁87cmである。

底面 東側から西側に傾斜しており、かたく締りがある。

堆積土 6層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、すべて第1層の確認面からの出土であり、土器及び礫が混在状態で出土した。土器は地文縄文に縦位沈線を施文した(3)-(5)の第群8類土器(中の平・最花式)が出土しており、この時期に構築された土壙と考えられる。他に石皿・台石類が



第175図 第35号土壙

第35号土壙土層注記

第1層	黒褐色	10YR 3/2	炭化物を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR 3/3	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黒褐色	10YR 3/3	ローム粒を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	暗褐色	10YR 3/3	黄褐色土を少量に混入する。しまりあり、粘性なし。
第5層	黒褐色	10YR 3/3	礫を多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第6層	褐色	10YR 5/6	礫を多量に含む。しまりややあり、粘性なし。

2点出土している。

第36号土壌 (第176図)

位置と確認 調査区M 57グリッドの台地平坦面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 本遺構の北側が攪乱を受けている。

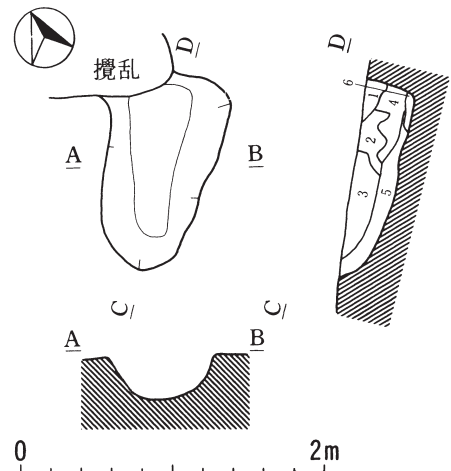
平面形・規模 平面形は、南・北側が丸みをもち、東・西側がやや直線的な楕円形を呈する。規模は、長径1m30cm・短径71cm・深さ34cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はかたく堅緻な構築である。壁高は、東壁30cm・西壁27cm・南壁23cm・北壁34cmである。

底面 北側から南側に傾斜しており、かたく堅緻な締りがある。

堆積土 6層に分層できた。各層には地山の第a層を全面に含んでおり、人為堆積と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第176図 第36号土壌

第36号土壌土層注記

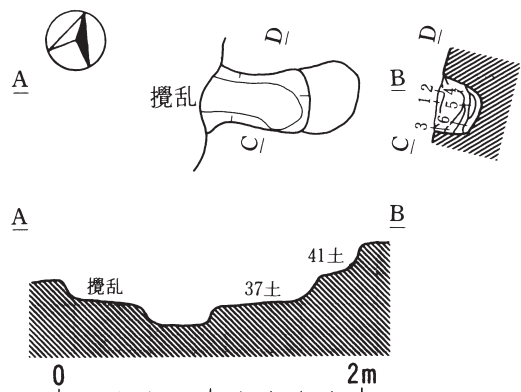
第1層	黄褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりなし、粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりなし、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	ローム粒を少量含む。しまりなし、粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土混入、ロームブロックを含む。しまりなし、粘性あり。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりなし、粘性あり。
第6層	褐色	10YR 3/4	暗褐色土混入。しまりなし、粘性あり。

第37号土壌 (第177図)

位置と確認 調査区M 57・58グリッドの台地平坦面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 重複は、西側が攪乱によって切られ、東側がピットと重複している。しかし、その新旧関係は不明である。

平面形・規模 平面形は、残存部から推定すると北・南側がえぐれた不整楕円形を呈すると思われる。規模は、長径不明・短



第177図 第37号土壌

第37号土壌土層注記

第1層	黄褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまり・粘性なし。
第2層	褐色	10YR 3/6	混入物含まず。しまり・粘性なし。
第3層	褐色	10YR 3/6	黒褐色土混入。しまりなし、粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	黒褐色土混入。しまりなし、粘性あり。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	黒褐色土を多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	黒褐色土混入。しまり・粘性なし。

径37cm・深さ32cmである。

壁 西壁が不明であるが、他の壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はもろく軟弱なつくりである。

底面 ほぼ平坦で軟かく軟弱なつくりである。

堆積土 6層に分層できた。堆積土中の全面にロームブロックを含んでおり、人為堆積と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第38号土壌（第178図）

位置と確認 調査区M 57グリッド台地平坦面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 本遺構の東側が第46号土壌と重複しており、その新旧関係は本遺構が新しい。

平面形・規模 平面形のプランは、東側が直線的な楕円形を呈する。規模は、長径 1 m55cm・短径82cm・深さ23cmである。

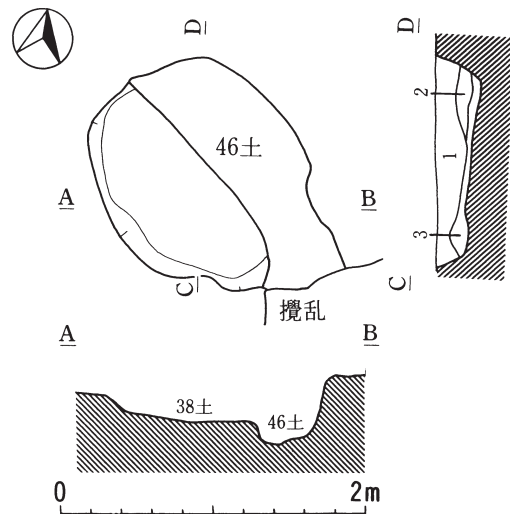
壁 底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はもろく軟弱なつくりである。壁高は、東壁23cm・西壁15cm・南壁17cm・北壁18cmである。

底面 ほぼ平坦で軟かい。

堆積土 6層に分層できた。各層中にロームブロックを含んでおり、人為堆積と考えられる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

（成田 滋彦）



第178図 第38号土壌

第38号土壌土層注記

第1層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を少量含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	褐色	10YR 3/6	黄褐色土ブロックを含む。しまりややあり、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりなし、粘性あり。

第39号土壌（第179図）

位置と確認 調査区L 56・57グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

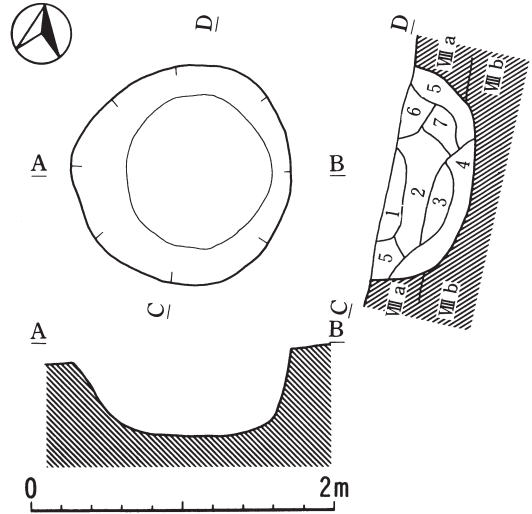
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径 1 m48cm・短径 1 m46cm・深さ39cmである。

壁 第 a層を壁面としており、壁は、底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁50cm・西壁41cm・南壁43cm・北壁45cmである。

底面 全体的に起伏が少なく平坦なつくりである。底面の構築は、すべて軟弱なつくりである。

堆積土 7層に分層できた。堆積土中に



第179図 第39号土壌

第39号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	ローム粒を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第2層	褐色	7.5YR 5/4	黄褐色土を少量に混入し、砂質土粒、ローム粒も微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	3mm大の砂質土粒、ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に混入し、砂質土粒を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第5層	明褐色	7.5YR 5/6	混入物なし。しまり・粘性あり。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	砂質土粒を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第7層	褐色	10YR 5/6	砂質土粒を微量に含む。しまり・粘性ややあり。

は、地山のローム粒子、砂質土の粒子、ブロックが含まれている。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

（新谷 幸三郎・成田 滋彦）

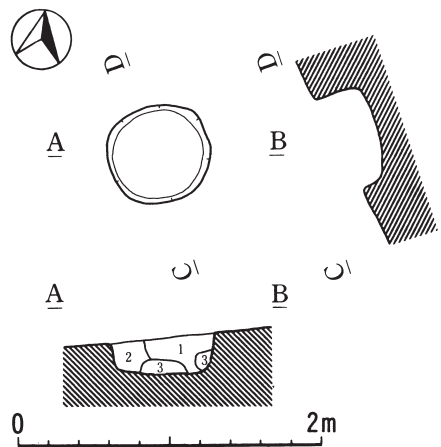
第40号土壌（第180図）

位置と確認 調査区O・P 57・58グリッドの台地緩斜面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みをもつ円形である。規模は、長径68cm・短径65cm・深さ29cmである。

壁 東壁が床面から上場にかけて垂直に立ち上



第180図 第40号土壌

第40号土壌土層注記

第1層	暗 褐 色	10YR 3/4	黄褐色土混入。しまりややあり、粘性なし。
第2層	黄 褐 色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄 褐 色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。

がり、他の壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、各壁は軟かく軟弱なつくりである。壁高は、東壁19cm・西壁26cm・南壁18cm・北壁29cmである。

底面 ほぼ平坦であり、軟かい。

堆積土 3層に分層できた。各層中には地山の第 a層を含んでおり、断面観察から人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第42号土壌（第181図）

位置と確認 調査区I・J 61グリッドに位置している。第 a層を精査中に円形の落ち込みを確認した。

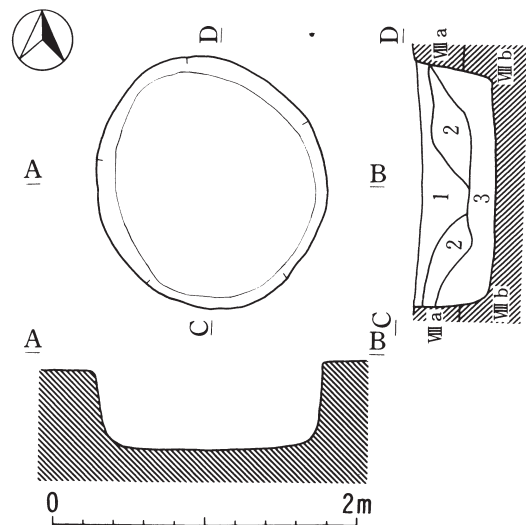
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、北側にややふくらみをもつ円形を呈する。規模は、長径1 m70cm・短径1 m51cm・深さ50cmである。

壁 底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁はかたく堅緻なつくりである。壁高は、東壁52cm・西壁45cm・南壁50cm・北壁48cmである。

底面 ほぼ平坦でかたい。

堆積土 第1～2層中に炭化物を含み、またロームブロックを第1～3層中に含んでいることから人為堆積と思われる。



第181図 第42号土壌

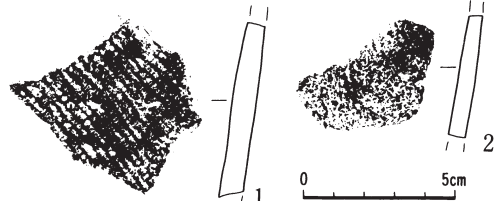
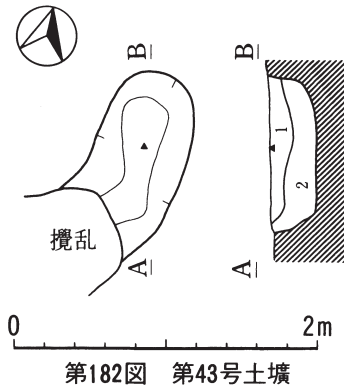
第42号土壌土層注記

第1層	黄 褐 色	10YR 5/6	黒褐色土を混入し、炭化物を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄 褐 色	10YR 5/6	炭化物を少量含む。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄 褐 色	10YR 5/6	混入物なし。しまり・粘性ややあり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第43号土壌 (第183・184図)

位置と確認 調査区 M 57・58グリッドで台地の平坦面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。



第183図 第43号土壌出土遺物(1)

第43号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまりややあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	混入物含まず。しまり・粘性ややあり。

第43号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	胴部	縄文(RL)		スス状炭付	Ⅲ群2類
2	〃	〃	縄文		〃	〃

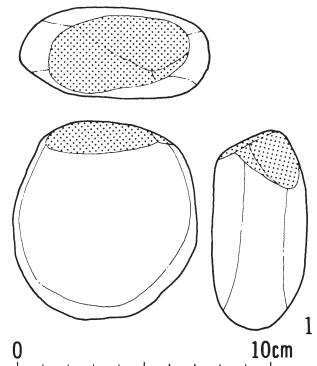
重複 本遺構の南側が攪乱によって切られている。

平面形・規模 平面形のプランは、南側の残存部分から推定すると全体的に丸みをもつ不整楕円形を呈すると思われる。規模は、長径(94cm)・短径61cm・深さ31cmである。

壁 不明な南壁を除き、底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はもろく軟弱な作りである。壁高は、東壁33cm・西壁22cm・南壁不明・北壁28cmである。

底面 ほぼ平坦でかたい。

堆積土 2層に分層できた。堆積土には多量のロームブロックを含んでおり、人為堆積と考えられる。



第184図 第43号土壌出土遺物(2)

第43号土壌出土遺物(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第184図-1	43土	1	78	72	36	316	礫	I	258	スリ3面

出土遺物 遺物は堆積土の上位から土器2片・敲磨器類が1点出土した。

(成田 滋彦)

第44号土壌（第185・186図）

位置と確認 調査区K・L 60グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

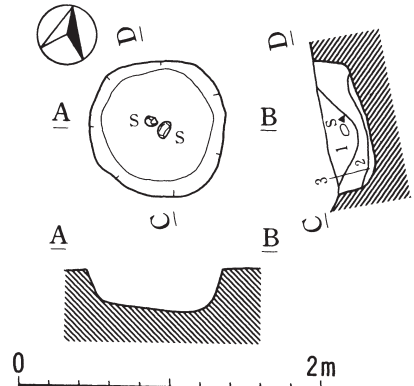
平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径98cm・短径90cm・深さ28cmである。

壁 すべて第 a層を壁面としており、床面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁高は、東壁26cm・西壁20cm・南壁28cm・北壁22cmである。

底面 全体的に起伏がなく平坦である。底面はかたくやや締めりがある。

堆積土 3層に分層できる。黄褐色を基調としており、地山のローム粒子を少量含む。

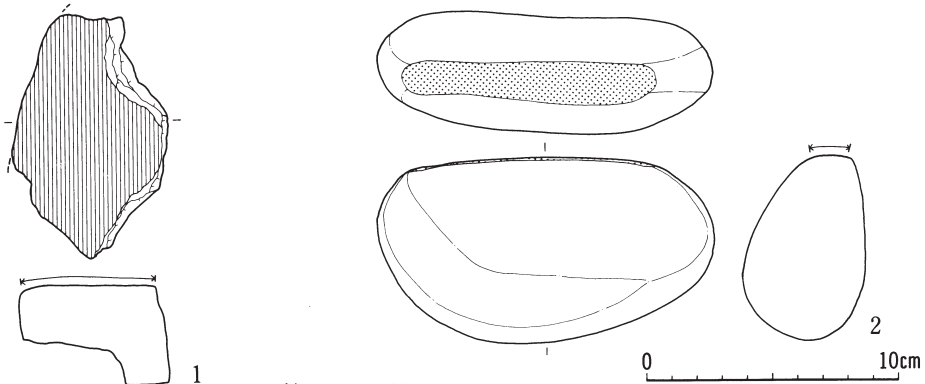
出土遺物 遺物は、土壌中央部の第 1層中から石皿・台石類 1点・敲磨器類 1点の計 2点が出土した。



第185図 第44号土壌

第44号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	黄褐色土を多量に混入する。しまり・粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	ローム粒を多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまり・粘性あり。



第186図 第44号土壌出土遺物

第44号土壌出土遺物

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第186図-1	44土	1	(96)	(60)	41	(259)	安	L	260	欠損、ケンマ
"-2	"	"	132	72	46	685	"	I	259	スリ1面

第45号土壌 (第187～189図)

位置と確認 調査区M 59グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

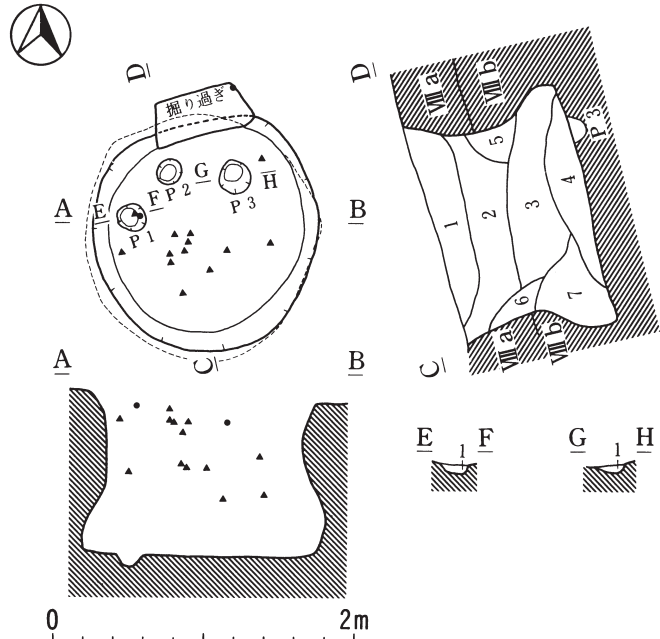
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径 1 m52cm・短径 1 m40cm・深さ 1 mである。

壁 第 a・b層を壁面としており、その断面形状はフラスコ状を呈している。壁高は、東壁 1 m05cm・西壁99cm・南壁 98cm・北壁 1 m06cmである。

底面 全般的に起伏が少なく平坦である。また、すべてがたく締りがある。

堆積土 7層に分層できた。



第187図 第45号土壌

第45号土壌土層注記

第1層	褐色	色	10YR 5/6	ロームブロック、炭化物を多量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	色	10YR 5/4	ロームブロックやや多量、炭化物を少量に含む。しまりなし、粘性あり。
第3層	褐色	色	10YR 5/6	ロームブロック、炭化物を少量に含む。しまりなし、粘性あり。
第4層	暗褐色	褐色	10YR 5/4	ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性なし。
第5層	黄褐色	褐色	10YR 5/6	褐色土を少量に混入する。しまり・粘性あり。
第6層	黄褐色	褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性あり。
第7層	褐色	褐色	10YR 5/4	ロームブロックを多量に含む。しまりなし、粘性あり。

第45号土壌 P 1 土層注記

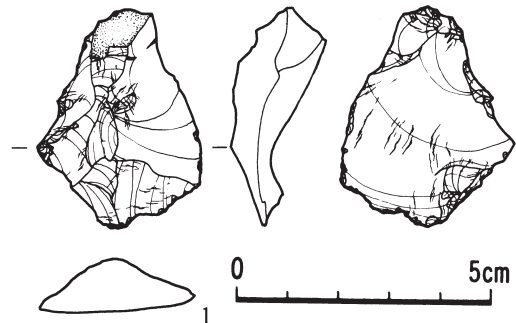
第1層	黒褐色	褐色	10YR 2/4	ローム粒を多量に含む。しまり・粘性なし。
-----	-----	----	----------	----------------------

第45号土壌 P 2 土層注記

第1層	褐色	褐色	10YR 5/6	黄褐色土をやや多量に混入し、炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
-----	----	----	----------	-------------------------------------

褐色を基調としており、地山のロームを粒子やブロック状に含んでいる。また、土層断面等の観察からは、自然堆積と思われる。

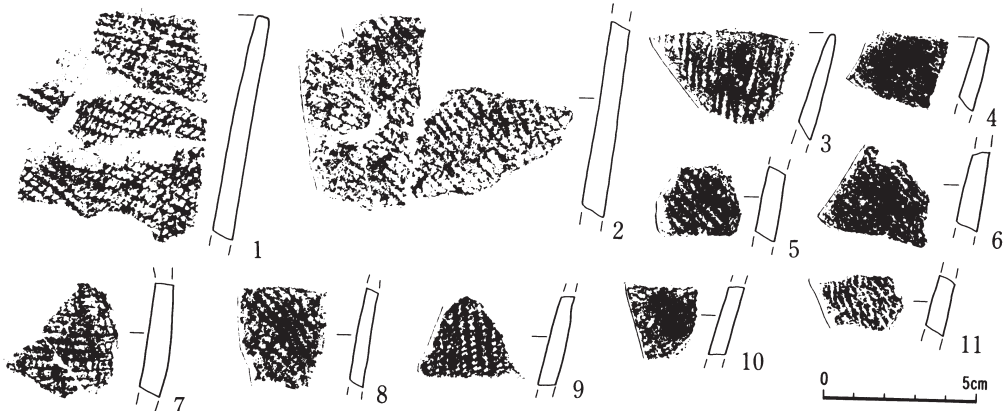
付属施設 本土壌内に、ピットを3個検出した。本土壌に伴うものかどうか、また、使用目的などは不明である。



第188図 第45号土壌出土遺物(1)

第45号土壌出土遺物(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第188図-1	45土	1	42	33	15	13.2	珪	F	129	



第189図 第45号土壌出土遺物(2)

第45号土壌 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	口縁部	縄文(RLR)		スス状炭付	Ⅲ群2類
2	"	胴部	"		"	"
3	"	口縁部	縄文(LR)		"	"
4	1層	"	無文		"	"
5	覆土	胴部	縄文(RL)		スス状炭付	"
6	"	"	"		"	"
7	"	"	"		"	"
8	"	底辺部	縄文(LR)		"	"
9	"	口頸部	縄文(RL)	スス状炭付	"	"
10	"	胴部	縄文(LR)		"	"
11	"	"	"		"	"

出土遺物 遺物は、主に土壌内の南側に分布し、堆積土の中位から上位にかけて出土した。土器は、すべて破片であり、第 群 2 類土器に類別される粗製土器である。また、石器は不定形石器が 1 点出土した。

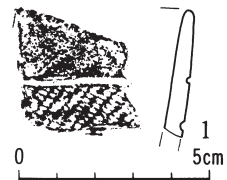
(新谷 幸三郎・成田 滋彦)

第46号土壌(第190・191図)

位置と確認 調査区 L・M 57グリッドの台地平坦面に位置している。第38号土壌を精査中に落ち込みを確認した。

重複 南側が攪乱によって切られ、西側は第38号土壌と重複している。その新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 平面形は、南側部分が攪乱によって切られているために残存部から推定すると、不整な長橋円形を呈すると思われる。規模は、長径(1m71cm)・短径58cm・深さ37cmである。



第190図 第46号土壌

第46号土壌土器観察表

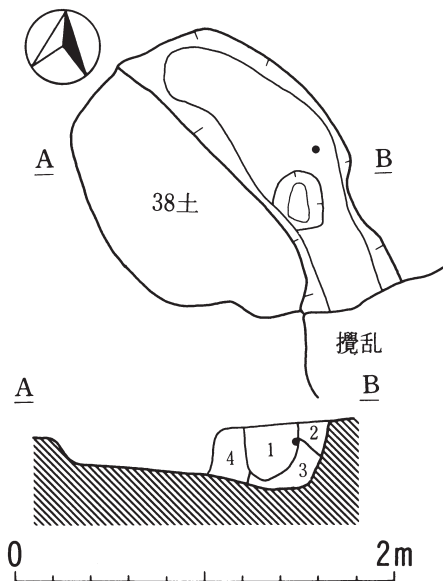
番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	覆 土	口縁部	縄文 (LR)、磨消縄文、波状口縁、スス状炭付	II群9類

壁 東・北壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、西・南壁は不明である。壁はもろく軟弱な作りである。壁高は、東壁37cm・北壁28cmである。

底面 やや起伏がみられ、中央部に浅いくぼみを有する。底面は軟かい。

堆積土 5層に分層でき、断面観察から人為堆積と考えられる。

出土遺物 遺物は、堆積土から土器破片が出土したのみである。



第191図 第46号土壌

第46号土壌土層注記

第1層	暗 褐 色	10YR 3/4	ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第2層	黄 褐 色	10YR 5/6	褐色土混入。しまりなし、粘性ややあり。
第3層	褐 色	10YR 5/6	暗褐色土混入。しまり・粘性ややあり。
第4層	黄 褐 色	10YR 5/6	混入物含まず。しまり・粘性なし。

第47号土壌 (第192図)

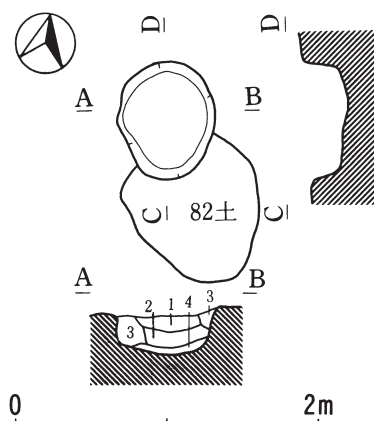
位置と確認 調査区 G 62グリッドの台地平坦面に位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 本遺構の南側で第82号土壌と重複しており、その新旧関係は本遺構が新しい。

平面形・規模 平面形のプランは、南側にやや張り出した楕円形である。規模は、長径90cm・短径67cm・深さ30cmである。

壁 西壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、他は緩やかに立ち上がっている。壁はかたく堅緻な構築である。

底面 やや起伏がみられるが、かたく締りがある。



第192図 第47号土壌

第47号土壌土層注記

第1層	褐 色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐 色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	黄 褐 色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第4層	黄 褐 色	10YR 5/6	しまり・粘性ややあり。

堆積土 4層に分層できた。各層中にロームブロックを多く含んでおり、混入物及び断面観察等から人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

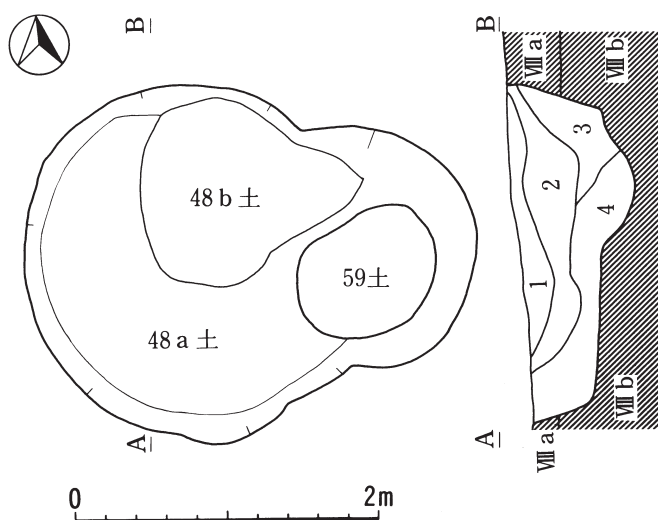
第48 a号土壤（第193・194図）

位置と確認 調査区Ⅰ・Ⅱ 62グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 本遺構は、第48 b号土壤・第59号土壤と重複しており、その新旧関係はすべて本遺構が新しい。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みを呈する円形である。規模は、長径 2 m36cm・短径 2 m25cm・深さ66cmである。

壁 底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、かたく締りがある。壁高は、東壁70cm・西壁75cm・南壁42cm・北壁63cmで



第193図 第48 a土壤出土遺物

第48 a号土壤土層注記

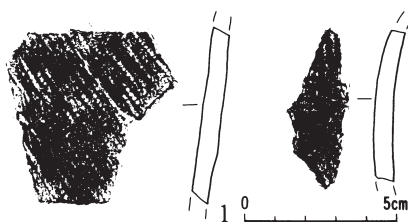
第1層	褐色	10YR 5/4	しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/6	炭化材を微量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	炭化材を少量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第4層	明黄褐色	10YR 5/9	炭化材を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。

ある。

底面 西側から東側にかけて傾斜している。底面はもろいつくりである。

堆積土 4層に分層できた。第2～4層中に炭化物・ロームブロックを含む。

出土遺物 遺物は、第1層中から土器2片が出土した。



第194図 第48 a土壤出土遺物

第48 a号土壤 土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	Ⅰ 層	胴部	縄文 (RL)		スス状炭付	Ⅲ群 2類
2	Ⅰ 層	口部	縄文 (RL)		スス状炭付	Ⅲ群 2類

第48 b号土壙（第195図）

位置と確認 調査区 I 62グリッドに位置している。第48 a号土壙を精査中に落ち込みを確認した。

重複 本遺構は、第48 a号土壙・第59号土壙と重複している。その新旧関係は、第48 a号土壙より古く、第59号土壙とは不明である。

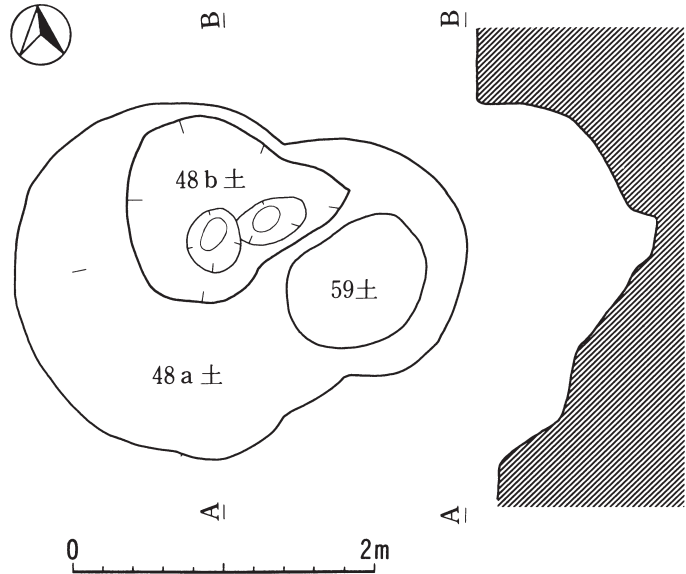
平面形・規模 平面形は、東側が張り出し、他は丸みを有する不整形プランを呈する。規模は、長径1 m42cm・短径1 m21cm・深さ41cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり軟弱なつくりである。

底面 軟弱で凹凸が著しく軟らかい。

堆積土 第48 a号土壙を精査の際に掘り過ぎたため、不明である。

出土遺物 遺物は、出土しなかった。



第195図 第48 b 土壙

（成田 滋彦）

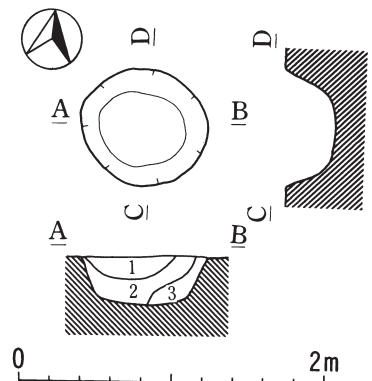
第51号土壙（第196図）

位置と確認 調査区 L 60グリッドに位置する。基本層序第 a層上面で褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈しており、長径84cm・短径78cm・深さ35cmである。

壁 東壁が最も高く31cm・西壁が最も低く26cmである。すべて基本層序第 a層を壁面とし、底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。



第196図 第51号土壙

底面 ほぼ平坦で、軟弱なつくりである。

第51号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 7/4	2mm大の焼土粒を少量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまり1層と同じ、粘性1層よりあり。
第3層	褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまり1層よりなし、粘性2層と同じ。

堆積土 3層に分層できる。褐色を基調としており、少量だが焼土を含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第52号土壌（第197図）

位置と確認 調査区M 59グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

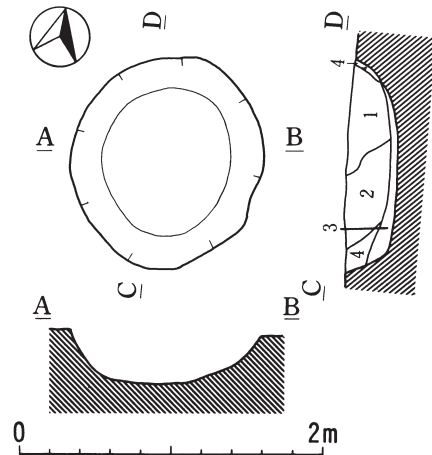
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南北にやや長い楕円形を呈しており、長径 1 m44cm・短径 1 m28cm・深さ33cmである。

壁 すべて第 a層を壁面としており、南壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は緩やかに立ち上がる。壁高は北壁24cm・南壁27cm・東壁21cm・西壁31cmである。

底面 起伏がなく全般的に平坦である。底面の締まりはなく軟弱である。

堆積土 4層に分層できる。褐色を基調としており、地山のロームがブロック状に含まれており、焼土も微量だが含まれている。



第197図 第52号土壌

第52号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 7/4	ロームブロックを少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 7/4	焼土粒を微量に含む。しまりなし、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を少量に混入する。しまり2層よりなし、粘性あり。
第4層	褐色	10YR 7/4	3mm大のローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第53号土壌（第198図）

位置と確認 調査区M 58・59グリッドに位置する。第 a層を精査中に、暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

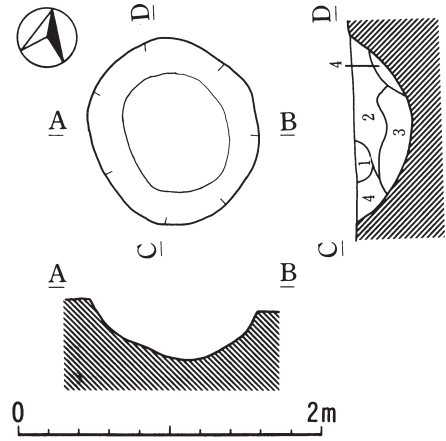
平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径 1 m24cm・短径 1 m16cm・深さ39cmを測る。

壁 すべて第 a 層を壁面としており、東壁23cm・西壁27cm・南壁25cm・北壁27cmである。壁はすべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。

底面 断面形が鍋底状を呈し、底面の構築は軟弱なつくりである。

堆積土 4層に分層できる。少量だが、焼土粒や炭化物を含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第198図 第53号土坑

第53号土坑土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	焼土粒を微量に含む。しまり・粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/6	炭化粒を微量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を少量に混入する。しまり・粘性あり。
第4層	褐色	10YR 5/4	ローム粒を少量に含む。しまりなし、粘性あり。

第54号土坑（第200・201図）

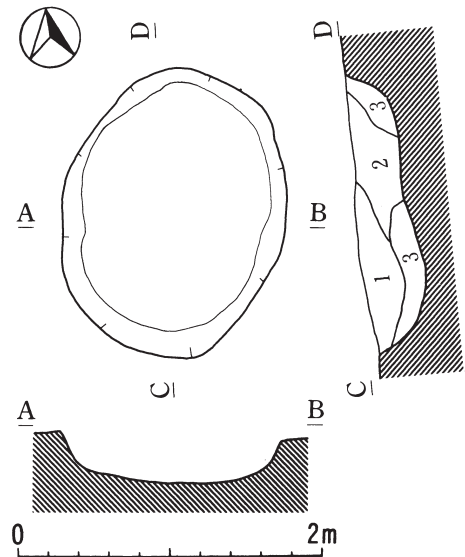
位置と確認 調査区 L 59グリッドに位置する。第 a 層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南北に長い不整楕円形を呈している。規模は、長径 1 m90cm・短径 1 m48cm・深さ38cmである。

壁 すべて第 a 層を壁面としており、東壁20cm・西壁23cm・南壁25cm・北壁22cmである。壁は、すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。

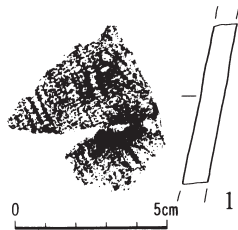
底面 南側が深く、北側が浅く掘り込まれており、起伏がある。底面の構築は、全般的に軟弱なつくりである。



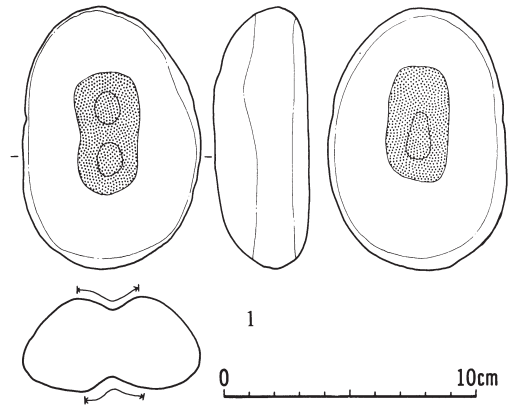
第199図 第54号土坑

第54号土坑土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	炭化物を少量に含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	ローム粒を少量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	ローム粒、炭化粒を微量に含む。しまり・粘性なし。



第200図 第54号土壌出土遺物(1)



第201図 第54号土壌出土遺物(2)

第54号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	胴部	縄文(LR)、スス状炭付			Ⅲ群2類

第54号土壌出土遺物(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第201図-1	54土	フク土	103	70	37	352	安	I	261	クボ:2面

堆積土 3層に分層できる。地山のローム粒子を含んでいる。また、炭化物も微量に含んでいる。

出土遺物 遺物は覆土から土器1片・敲磨器類が1点出土した。

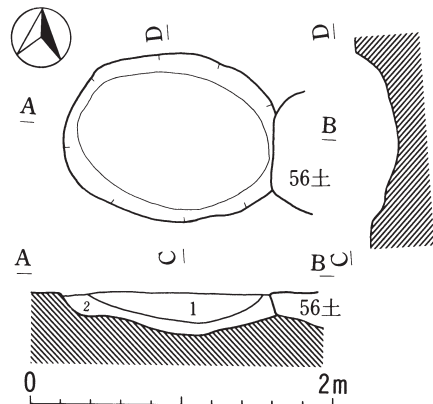
第55号土壌(第202図)

位置と確認 調査区K 58グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 本土壌の東側で、第56号土壌と重複している。その新旧関係は、本土頻の方が第56号土壌より古い。

平面形・規模 平面形は、東西に長い楕円形を呈している。規模は、長径(1m40cm)・短径1m10cm・深さ28cmである。

壁 すべて第 a層を壁面としており、西壁15cm・南壁9cm・北壁15cmであるが、東壁は、第56号土壌と重複しているため確認できなかった。壁は、北・西壁が底面から上場にかけて垂直に立ち



第202図 第55号土壌

上がり、他は緩やかな立ち上がりである。

第55号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/4	1mm大のローム粒を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	黄褐色	10YR 5/4	褐色土を少量に混入する。しまり・粘性あり。

底面 全般的に起伏が多く、軟弱なつくりである。

堆積土 2層に分層できる。少量だが炭化物の粒子が含まれている。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

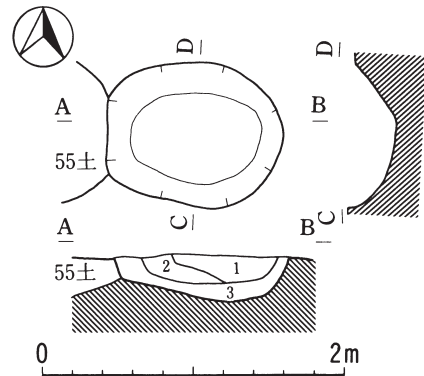
第56号土壌（第203図）

位置と確認 調査区K 58・59グリッドに位置する。第55号土壌を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 本土壌の西側が第55号土壌と重複している。その新旧関係は、堆積土の土層から本土壌の方が新しい。

平面形・規模 平面形は、東西に長い不整楕円形を呈している。規模は、長径1m20cm・短径94cm・深さ32cmである。

壁 すべて基本層序第 a層を壁面としており、東壁23cm・南壁21cm・北壁18cmで、西壁は、第55号土壌と重複しているため確認できなかった。壁の立ち上がりは、すべて底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。



第203図 第56号土壌

第56号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/4	炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	褐色	10YR 5/4	ロームブロックを微量に含む。しまり・粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/4	褐色土をやや多量に混入する。しまり・粘性あり。

底面 全般的に起伏が少なく軟弱なつくりとなっている。

堆積土 3層に分層できる。褐色土を基調としており、地山のローム粒子や炭化物を少量含む。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第57号土壌（第204図）

位置と確認 調査区M 57グリッドに位置する。基本層序第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

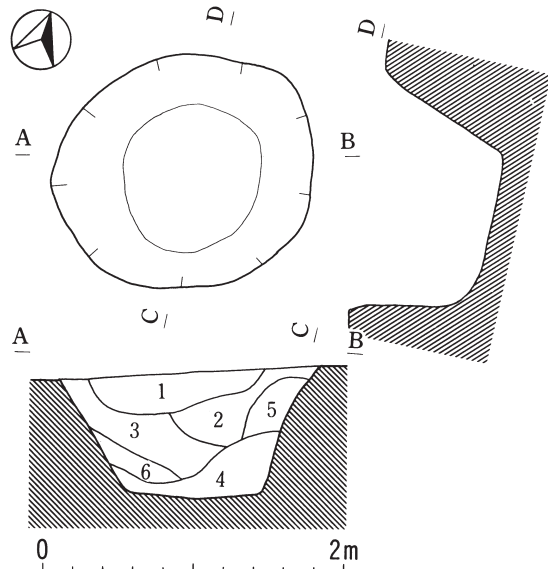
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径 1 m76cm・短径 1 m54cm・深さ83cmである。

壁 基本層序第 a・b層を壁面としており、すべて底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁高は、東壁84cm・西壁75cm・南壁74cm・北壁89cmである。

底面 起伏が少なく全般的に平坦である。底面の構築は、ややかたく締りがある。

堆積土 6層に分層できた。黄褐色土を基調にしており、炭化物の粒子を微量に含んでいる。



第204図 第57号土坑

第57号土坑土層注記

第1層	褐色	10YR 4/6	1mm大の炭化粒を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 4/4	5mm大のロームブロックを微量に含む。しまりなし、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	1mm大の炭化粒を微量に含む。しまり・粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 5/8	褐色土を少量に混入する。しまり・粘性なし。
第5層	黄褐色	10YR 5/6	混入物なし。しまり・粘性あり。
第6層	黄褐色	10YR 5/6	3mm大の炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(新谷 幸三郎・成田 滋彦)

第59号土坑(第205～207図)

位置と確認 調査区I 62グリッドに位置している。第48a号土坑を精査中に落ち込みを確認した。

重複 本土坑は、第48a・b号土坑と重複している。その新旧関係は、第48a号土坑より古く、第48b号土坑との関係は不明である。

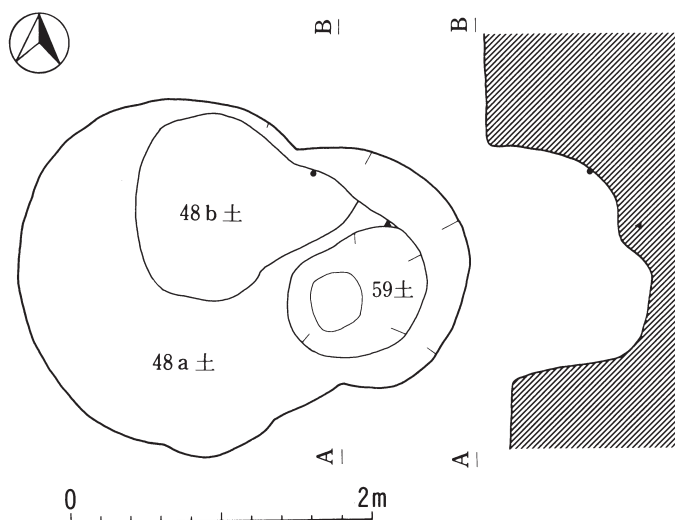
平面形・規模 平面形は、西側が切られて残存しないため、他の残存部から推定するとほぼ円形を呈すると思われる。規模は、長径 1 m64cm・短径不明・深さ93cmである。

壁 南・北壁は、底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、東壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁95cm・西壁不明・南壁83cm・北壁78cmである。

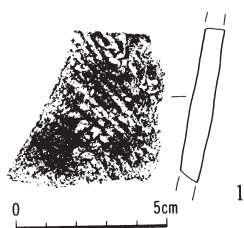
底面 軟弱で起伏があり、堅緻な構築では無い。

堆積土 本土坑は、調査中に掘り過ぎたため、堆積土層図を作成できなかった。

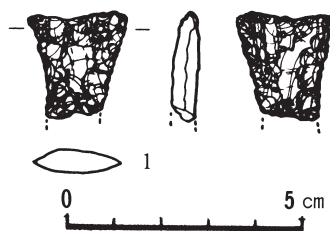
出土遺物 遺物は、堆積中から土器 1 片と石筈 1 点が出土した。



第205図 第59号土層



第206図 第59号土層出土遺物(1)



第207図 第59号土層出土遺物(2)

第59号土層土器観察表

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	覆 土	胴 部	縄文(LR)	Ⅲ群2類

第59号土層出土遺物(2)

図 版	出 土 地 点	層	最 大 計 測 値				石 質	分 類	整 理 番 号	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第207図-1	59土	5	(21)	20	5	(2.1)	珪	E	128	欠損

第60号土壇（第208図）

位置と確認 調査区N 59グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みを有する円形である。規模は、長径 1 m17cm・短径 1 m05cm・深さ24cmである。

壁 東・西・北壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はかたく堅緻であるが、堆積土との区別が難しく、壁を確認するのに手間どった。壁高は、東壁18cm・西壁26cm・南壁13cm・北壁36cmである。

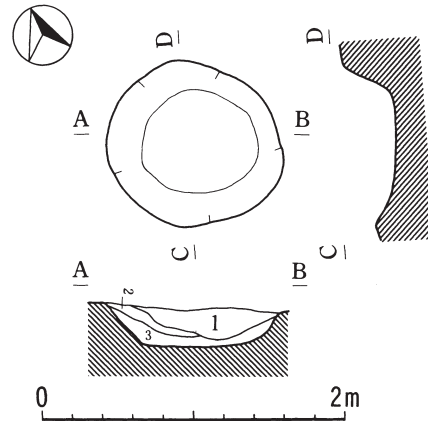
底面 北側から南側にかけて傾斜しており、かたく締りがある。

第60号土壇土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	しまり・粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/4	しまりなし、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	しまりなし、粘性あり。

堆積土 3層に分層できた。堆積土の各層は地山の第 a層を全面に含んでおり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第208図 第60号土壇

第61号土壇（第209図）

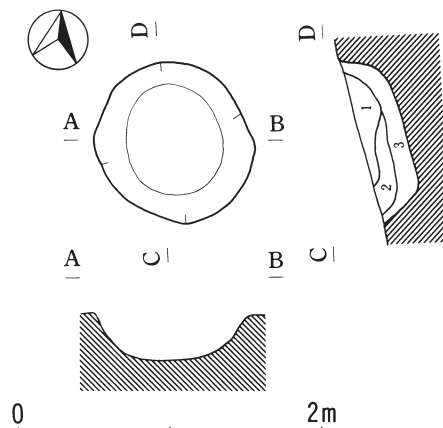
位置と確認 調査区O 58グリッドに位置している。台地の緩斜面で第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径 1 m07cm・短径92cm・深さ28cmである。

壁 底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はもろく軟弱な作りである。壁高は、東壁25cm・西壁31cm・南壁18cm・北壁25cmである。

底面 北側から南側にかけて傾斜しており、軟弱



第209図 第61号土壇

なつくりでもろい。

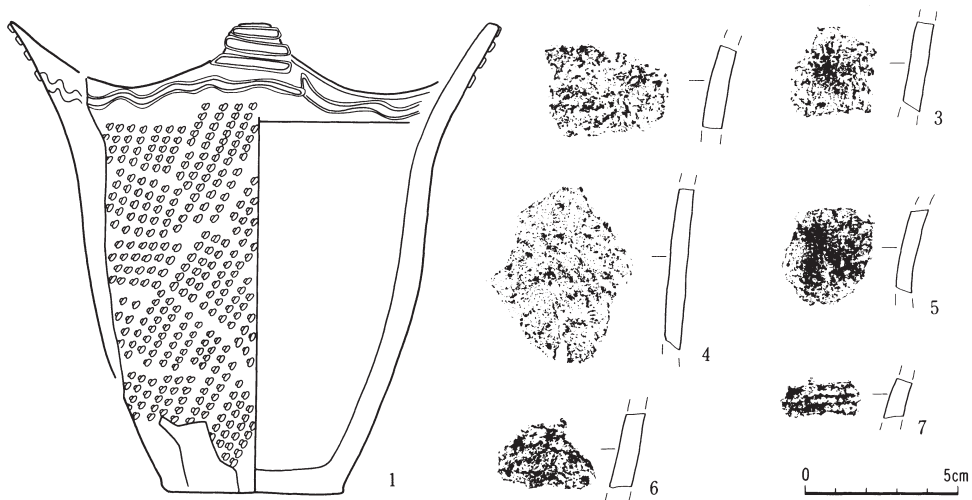
第61号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	焼土をブロック状に少量に混入する。しまり・粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 7/6	炭化物を少量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 7/6	炭化物を少量に含む。しまりなし、粘性あり。

堆積土 4層に分層できた。第1層は廃棄された焼土を含み、また第2～4層中に炭化物が混入していることから、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第62号土壌（第210・211図）



第210図 第62号土壌出土遺物

第62号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	鉢形	波状口縁（突起4個）、突起部・口端に粘土紐、縄文（LRL）			Ⅱ群5類
2	〃	胴部	縄文（LR）			Ⅲ群2類
3	〃	〃	縄文、		スス状炭付	〃
4	〃	〃	〃		〃	〃
5	〃	〃	無文		〃	〃
6	〃	〃	縄文（LR）		〃	〃
7	〃	〃	〃		〃	〃

位置と確認 調査区 P 58グリッドに位置し、台地緩斜面の第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みを有する楕円形を呈する。規模は、長径 2 m09cm・短径 1 m66cm・深さ47cmである。

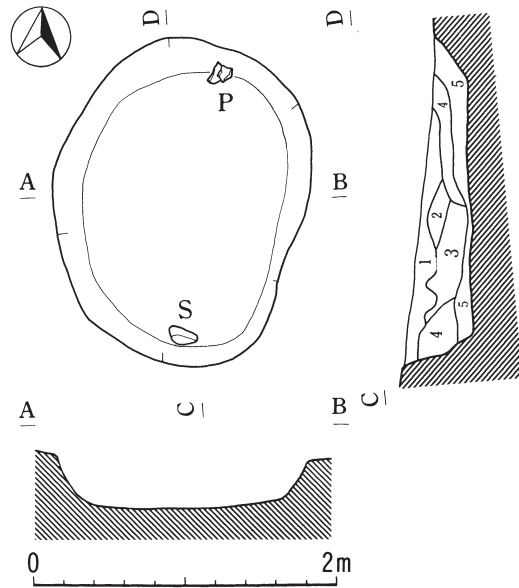
壁 壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はかたいつくりである。壁高は、東壁27cm・西壁31cm・南壁22cm・北壁45cmである。

底面 底面は、ほぼ平坦でありかたく締りがある。

堆積土 堆積土は5層に分層できた。断面観察から自然堆積と思われる。

出土遺物 遺物は、北壁寄りの覆土からほぼ完形の第 群 5 類土器深鉢土器 1 が出土した。4 個の波状突起を有し、口端及び突起部に粘土紐を貼り付けた焼成良好な土器である。

(成田 滋彦)



第211図 第62号土壇

第62号土壇土層注記

第1層	褐色	10YR 5/4	しまり・粘性ややあり。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	黒褐色土粒を混入し、炭化物を少量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	黒褐色土を混入する。しまりなし、粘性あり。
第4層	褐色	10YR 5/4	炭化物を少量に含む。しまり・粘性なし。
第5層	褐色	7.5YR 5/4	しまりあり、粘性ややあり。

第63号土壇 (第212図)

位置と確認 調査区 L 60・61グリッドに位置する。

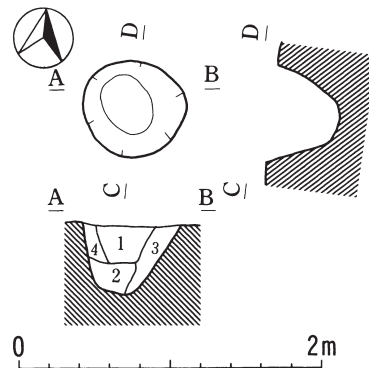
第 a 層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径70cm・短径64cm・深さ46cmである。

壁 すべて第 a 層を壁面としており、すべて底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁高は、東壁45cm・西壁42cm・南壁38cm・北壁38cmである。

底面 起伏は少ない。底面の構築は、全般的にもろいつくりである。



第212図 第63号土壇

第63号土壇土層注記

第1層	褐色	10YR 5/4	1mm大の炭化粒を少量に含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土を少量に混入する。しまりなし、粘性あり。
第3層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土をやや多量に混入する。しまりあり、粘性なし。
第4層	褐色	10YR 5/4	混入物なし。しまり・粘性なし。

堆積土 4層に分層できた。各層とも締まりのない土層で、炭化物を少量含む。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第64号土壌（第213図）

位置と確認 調査区L・M 61・62グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

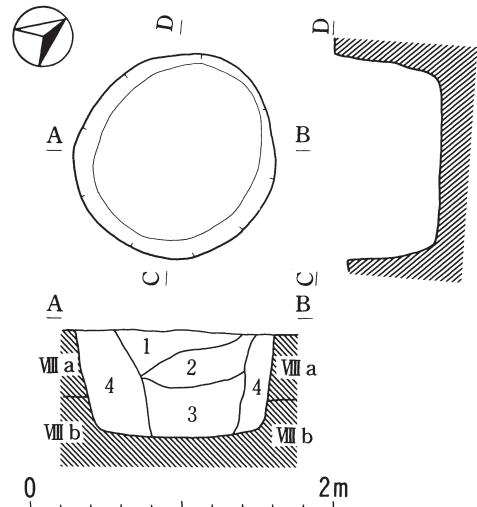
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、長径1 m34cm・短径1 m32cm・深さ70 cmである。

壁 第 a・b層を壁面としており、すべて底面から上場にかけて垂直に立ち上がる。壁高は、東壁60cm・西壁68cm・南壁55cm・北壁68 cmである。

底面 起伏が少なくほぼ平坦である。底面の構築は、比較的かたい締りである。

堆積土 4層に分層できた。地山のロームをブロック状に含み、また、炭化物を微量だが含んでいる。土層の断面観察等から自然堆積であると思われる。



第213図 第64号土壌

第64号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 7/6	1 mm大の炭化粒を微量、1～3 mm大のロームブロックを少量に含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	10 mm大のロームブロックを少量に含む。しまり1層よりあり、粘性1層と同じ。
第3層	褐色	10YR 7/4	2 mm大の炭化物を微量、3～5 mm大のロームブロックを少量、砂質土粒を微量に含む。しまり・粘性1層と同じ。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	褐色土を少量混入し、砂質土ブロックを微量に含む。しまり・粘性1層よりなし。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第65号土壌（第214・215図）

位置と確認 調査区L 62グリッドに位置する。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

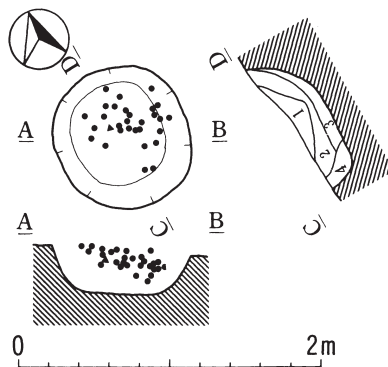
平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径98cm・短径88cm・深さ25 cmである。

壁 第 a層を壁面としており、北壁が底面から上場にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は緩やかに立ち上がる。壁高は、東壁23cm・西壁28cm・南壁33cm・北壁31cmである。

底面 全般的に起伏が少なくほぼ平坦である。底面の構築は、もろいつくりである。

堆積土 4層に分層できた。地山のロームブロックを第1・2・4層に含み、また、第1・2層に炭化物を微量に含んでいる。

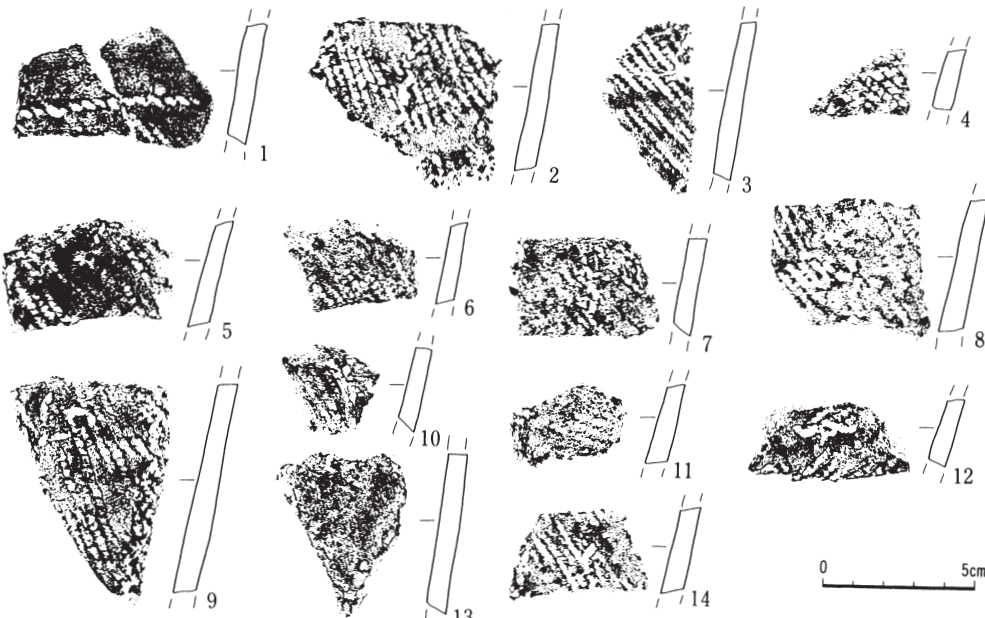
出土遺物 遺物は、堆積土の中位から上位にかけて出土しており、すべて第 Ⅲ群 2類土器に類別される粗製の土器片である。



第214図 第65号土壌

第65号土壌土層注記

第1層	暗褐色	10YR 5/4	1~2mm大の炭化物を少量に含み、3~5mm大のロームブロックもやや多量に含む。しまり・粘性あり。
第2層	褐色	10YR 5/6	2mm大の炭化物、5mm大のロームブロックを少量に含む。しまり1層よりなし、粘性1層と同じ。
第3層	黄褐色	10YR 5/8	褐色土をやや多量に混入する。しまり・粘性1層よりあり。
第4層	褐色	10YR 5/4	5mm大のロームブロックを少量に含む。しまり1層と同じ、粘性1層よりなし。



第215図 第65号土壌出土遺物

第65号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	覆土	口頸部	縄文 (L)、燃糸疋痕 (RL)			Ⅲ群 2類
2	"	胴部	縄文 (LR)、縦位綾絡文		スス状炭付	"
3	"	"	縄文 (LR)		"	"
4	"	"	縄文 (RL)		"	"
5	"	"	縄文 (LR)		スス状炭付	"
6	"	"	縄文 (RL)		"	"
7	"	口頸部	縄文 (LR)、縦位綾絡文		"	"
8	"	胴部	縄文 (LR)		"	"
9	"	"	"		"	"
10	"	"	縄文 (L)		"	"
11	"	"	縄文 (RL)		"	"
12	"	"	縄文 (LR)、綾絡文、スス状炭付		"	"
13	"	"	無文		"	"
14	"	"	縄文 (LR)、綾絡文		"	"

第66号土壌（第216図）

位置と確認 調査区J 57グリッドに位置し、第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

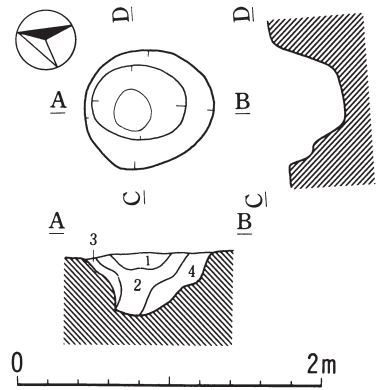
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は西側が若干張り出した円形である。規模は、長径85cm・短径80cm・深さ47cmである。

壁 東壁が底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、他の壁は中場に段を有する。壁は軟らかく軟弱である。壁高は、東壁42cm・西壁44cm・南壁44cm・北壁47cmである。

底面 北側から南側にかけて傾斜しており、もろいつくりである。

堆積土 4層に分層できた。各層には廃棄されたと考えられる地山のロームブロックが多く含まれており、人為堆積と思われる。



第216図 第66号土壌

第66号土壌土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	焼土粒を微量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 7/6	しまりややあり、粘性なし。
第3層	明黄褐色	10YR 8/6	しまり・粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 7/6	しまりなし、粘性あり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第67号土壌（第217図）

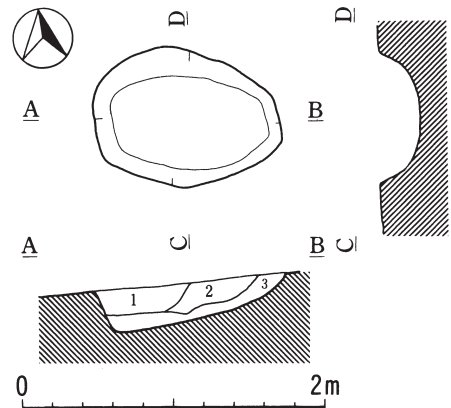
位置と確認 調査区K 56・57グリッドに位置し、

第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南・北側に膨らみをもつ楕円形を呈する。規模は、長径 1 m23cm・短径91cm・深さ31cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がっている。壁はかたく堅緻なつくりである。壁高は、東壁17cm・西壁30cm・南壁25cm・北壁24cmである。



第217図 第67号土壌

第67号土壌土層注記

第1層	黄褐色	10YR 7/6	しまり・粘性ややあり。
第2層	黄褐色	10YR 7/6	しまりあり、粘性ややあり。
第3層	明黄褐色	10YR 8/6	しまり・粘性あり。

底面 東側から西側にかけて傾斜しており、かたく締りがある。

堆積土 3層に分層できた。各層中の全面に地山の第 a 層を含んでおり、堆積土及び断面観察から人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第68号土壌 (第218図)

位置と確認 調査区 K 57グリッドに位置し、第 a 層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

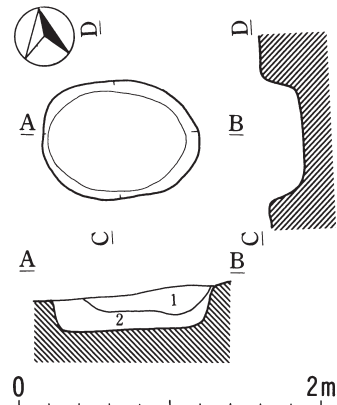
平面形・規模 平面形は全体的に丸みをもつ楕円形である。

規模は、長径1 m04cm・短径77cm・深さ29cmである。

壁 底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、かたく堅緻なつくりである。壁高は、東壁28cm・西壁21cm・南壁24cm・北壁27cmである。

底面 全体的にほぼ平坦であり、かたく締りがある。

堆積土 2層に分層でき、いずれにも炭化物を含んでいる。堆積土は廃棄されたと思われる地山の第 a 層を主体としており、人為堆積と思われる。



第218図 第68号土壌

第68号土壌土層注記

第1層	黄褐色	10YR 5/8	炭化物を微量に含む。しまりややあり、粘性あり。
第2層	明黄褐色	10YR 6/8	炭化物を微量に含む。しまり・粘性あり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第69号土壌 (第219図)

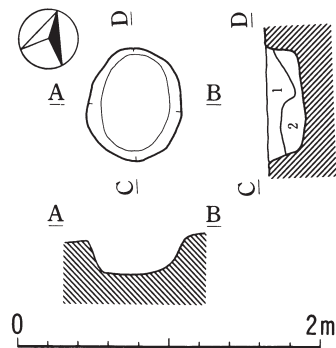
位置と確認 調査区 L 57グリッドに位置している。第 a 層を精査中に落ち込みを確認した。

重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形は、南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、長径75cm・短径64cm・深さ26cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はかたく堅緻である。壁高は、東壁23cm・西壁21cm・南壁23cm・北壁21cmである。

底面 東側から西側にかけて傾斜しており、かたく締りがある。



第219図 第69号土壌

第69号土壌土層注記

第1層	黄褐色	10YR 5/6	炭化材を微量に含む。しまり・粘性なし。
第2層	明黄褐色	10YR 6/6	しまり・粘性あり。

堆積土 2層に分層できた。地山の第 a層を多く含んでおり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第70号土壌（第220図）

位置と確認 調査区 K・L 57・58グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認した。

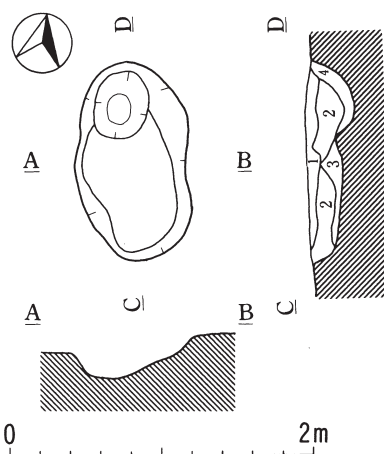
重複 認められなかった。

平面形・規模 平面形のプランは、東側がえぐれた不整楕円形を呈する。規模は、長径 1 m30cm・短径72cm・深さ33cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、もろく軟弱なつくりである。壁高は、東壁29cm・西壁15cm・南壁16cm・北壁30cmである。

底面 底面はもろく起伏がみられ、北壁寄り有一段低くなっている。

堆積土 4層に分層できた。各層中に廃棄されたと思われる地山の第 a層を多く含んでおり、断面観察からも人為堆積と思われる。



第220図 第70号土壌

第70号土壌土層注記

第1層	黄褐色	10YR 5/6	炭化材を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	しまりあり、粘性なし。
第3層	明黄褐色	10YR 6/6	炭化材を微量に含む。しまりあり、粘性ややあり。
第4層	明黄褐色	10YR 6/6	褐色土を少量に混入する。しまりあり、粘性ややあり。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第82号土壌（第221図）

位置と確認 調査区 G 62グリッドの台地平坦面に位置している。第47号土壌を精査中に本遺構を確認した。

重複 本遺構の北側が第47号土壌と重複している。その新旧関係は本遺構の方が古い。

平面形・規模 平面形は、東・西側が張り出した不整形円形を呈する。規模は、長径（ 1 m01 cm）・短径87cm・深さ20cmである。

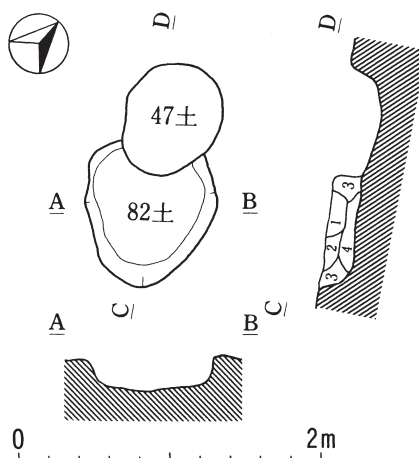
壁 北壁が切られているために不明であるが、他の壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち

上がる。壁はかたいが、堆積土との識別に苦労した。壁高は、東壁18cm・西壁17cm・南壁20cmである。

底面 ほぼ平坦でかたく締りがある。

堆積土 4層に分層できた。各層中には地山のロームブロックを多く含んでおり、断面観察からも人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第221図 第82号土坑

第82号土坑土層注記

第1層	褐色	10YR 4/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	炭化物を微量に含む。しまり・粘性ややあり。
第3層	褐色	10YR 4/6	しまりあり、粘性ややあり。
第4層	褐色	10YR 4/6	炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。

第7号竪穴住居跡(ピット1)(第222図)

位置と確認 調査区E 62グリッドに位置する。住居跡の床面精査中に落ち込みを確認した。

重複 本遺構は、第7号竪穴住居跡と重複している。その新旧関係は本遺構の方が新しい。

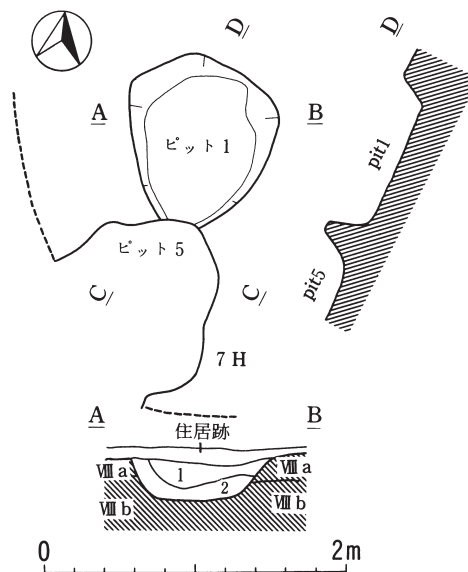
平面形・規模 平面形は、北側部分が張り出すいびつな不整形円形を呈する。規模は、長径(1m14cm)・短径98cm・深さ25cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、軟らかく軟弱なつくりである。壁高は、東壁22cm・西壁25cm・南壁25cm・北壁25cmである。

底面 ほぼ平坦であり、軟らかくもろいつくりである。

堆積土 2層に分層できた。両層ともに地山の黄褐色土ブロックを多く含んでおり、人為堆積と思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第222図 第7号竪穴住居跡ピット1

第7号竪穴住居跡ピット1土層注記

第1層	褐色	7.5YR 1/4	炭化物少量含み、黄褐色土ブロック混入。しまりなし、粘性あり。
第2層	褐色	7.5YR 1/4	炭化物若干含み、暗褐色土混入。しまりなし、粘性あり。

第7号竪穴住居跡(ピット2)(第223図)

位置と確認 調査区E 62グリッドに位置する。第 a層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

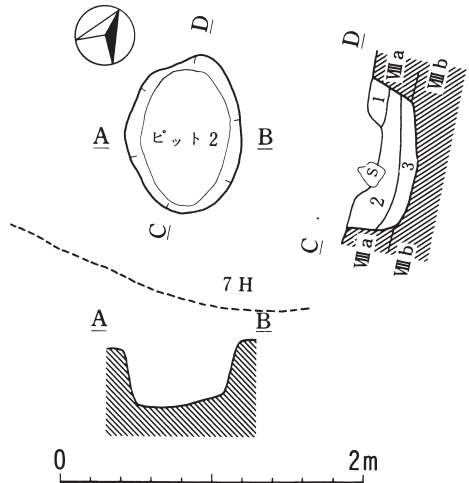
重複 第7号竪穴住居跡・第7号竪穴住居跡ピット3と重複しているが、その新旧関係は不明である。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもつ楕円形を呈する。規模は、長径1m07cm・短径76cm・深さ38cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、第 a層を壁面として堅緻な構築である。壁高は、東壁34cm・西壁37cm・南壁33cm・北壁32cmである。

底面 外縁部がやや高く、中央部にかけて若干のくぼみが見られる。底面はかたいつくりである。

堆積土 3層に分層できた。各層中にローム粒を多く含んでおり、人為堆積と思われる。



第223図 第7号竪穴住居跡ピット2

第7号竪穴住居跡ピット2土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物・ローム粒子を含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	褐色	10YR 1/4	炭化物若干、ローム粒多量に含み、暗褐色土混入。しまり・粘性あり。
第3層	褐色	10YR 1/4	ローム粒多量に含む。しまり・粘性なし。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第7号竪穴住居跡(ピット3)(第224図)

位置と確認 調査区E 62・63グリッドに位置する。第7号竪穴住居跡(ピット4)を精査中に確認した。

重複 土壌の北側部分が、第7号竪穴住居跡と第7号竪穴住居跡ピット2と切り合っている。しかし、その新旧関係は不明である。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径73cm・短径(70cm)・深さ33cmである。

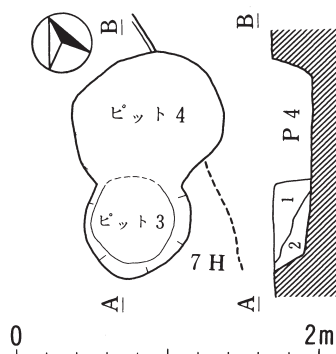
壁 北壁が不明であるが、東・西・南壁とも底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁

はもろく軟らかい。壁高は、東壁32cm・西壁32cm・南壁29cmである。

底面 ほぼ平坦であり、軟らかくもろいつくりである。

堆積土 2層に分層できた。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第224図 第7号竪穴住居跡ピット3

第7号竪穴住居跡ピット3土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物少量、ローム粒若干含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	褐色	10YR 1/4	炭化物若干含む、ローム粒混入。しまりなし、粘性あり。

第7号竪穴住居跡(ピット4)(第225図)

位置と確認 調査区E 63グリッドに位置する。第7号竪穴住居跡を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複 第7号竪穴住居跡及び第7号竪穴住居跡ピット3と重複している。その新旧関係は第7号竪穴住居跡より新しいが、ピット3との関係は不明である。

平面形・規模 平面形は、長軸がやや膨らむ円形を呈すると思われる。規模は、長径1m03cm・短径95cm・深さ33cmである。

壁 南壁が不明のほかは、すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はもろく軟らかいつくりである。

壁高は、東壁23cm・西壁22cm・北壁33cmである。

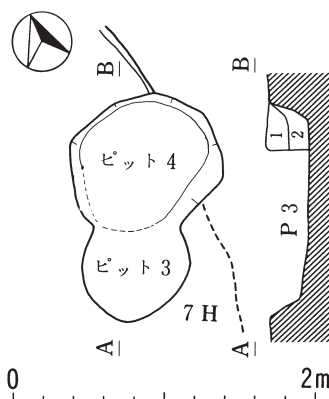
底面 ほぼ平坦で軟らかくもろい。底面のレベルはピット3と近似している。

第7号竪穴住居跡ピット4土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物少量、ロームブロックまばらに含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	ロームブロックを多量に含む、暗褐色土混入。しまりなし、粘性あり。

堆積土 2層に分層できた。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



第225図 第7号竪穴住居跡ピット4

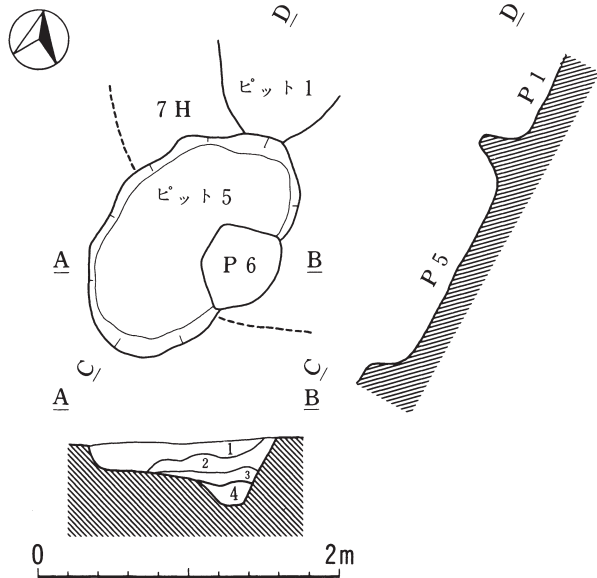
第7号竪穴住居跡(ピット5)(第226図)

位置と確認 調査区E 62グリッドに位置する。第7号竪穴住居跡を精査中に落ち込みを確認した。

重複 第7号竪穴住居跡の柱穴P6と第7号竪穴住居跡ピット1は、北側で重複している。その新旧関係は、ピット1との関係は不明であるが、第7号竪穴住居跡よりは新しい。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みをもつ楕円形を呈する。規模は、長径1m74cm・短径94cm・深さ25cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がり、軟らかく堅緻な構築では無い。壁高は、東壁25cm・西壁18cm・南壁20cm・北壁26cmである。



第226図 第7号竪穴住居跡ピット5

第7号竪穴住居跡ピット5土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/3	炭化物・ローム粒子少量含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	褐色	10YR 3/4	炭化物若干、小ロームブロックを含む。しまりなし、粘性あり。
第3層	褐色	10YR 3/6	ロームブロック多量に含む。しまりなし、粘性あり。
第4層	黄褐色	10YR 5/6	暗褐色土混入。しまりなし、粘性あり。

底面 北側がやや高く南側にかけて傾斜している。底面はもろく軟らかい。

堆積土 3層に分層でき、第1・2層中に炭化物を含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(成田 滋彦)

(3) 焼土状遺構

第2号焼土状遺構(第227図)

位置と確認 調査区K 60グリッドに位置する。第 a層を精査中に焼土粒を確認した。

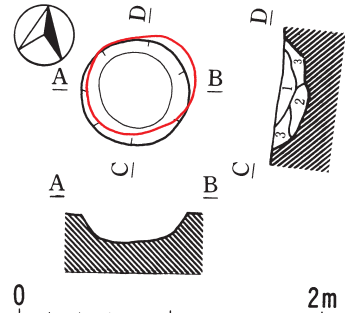
重複 認められなかった。

焼土範囲 掘り方の上部に長径70cm・短径62cmの範囲で分布している。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、長径72cm・短径68cm・深さ18cmである。

壁 すべて第 a層を壁面としており、壁高は、東壁14cm・西壁15cm・南壁17cm・北壁15cmである。各壁は、底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。

底面 やや起伏がある。底面はもろいつくりである。



第227図 第2号焼土状遺構

第2号焼土状遺構土層注記

第1層	明褐色	7.5YR 5/6	焼土粒を多量に含み、炭化物を少量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	黄褐色	10YR 5/6	2mm大の炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性あり。
第3層	褐色	10YR 5/6	焼土粒をやや多量に含む。しまりあり、粘性ややあり。

堆積土 3層に分層された。ほぼ全般に焼土粒を含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(新谷 幸三郎・成田 滋彦)

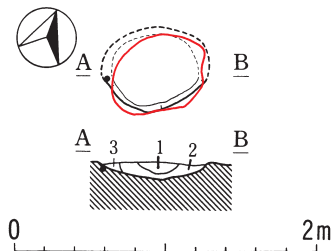
第3号焼土状遺構(第228・229図)

位置と確認 調査区E 62グリッドに位置している。第 a層を精査中に焼土を確認した。

重複 認められなかった。

焼土範囲 掘り方の上面を覆うように、長径60cm・短径47cmの範囲に分布している。

平面形・規模 本遺構の精査の段階で北側部分を掘り過ぎたため、残存する南側部分から推定すると楕円形を呈すると



第228図 第3号焼土状遺構

第3号焼土状遺構土層注記

第1層	赤褐色	5YR 5/6	焼土ブロックを多量に含む。しまりややあり、粘性なし。
第2層	褐色	10YR 5/6	焼土粒少量含む。しまりなし、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/4	しまり・粘性なし。

思われる。規模は、長径(71cm)・短径(50cm)である。

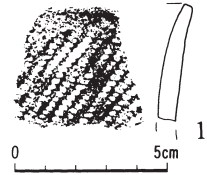
壁 北壁は残存しないが、他の壁は底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁は火熱を

受けておらず、もろいつくりである。

底面 断面形が鍋底状を呈し、壁同様に火熱を受けておらず、もろいつくりである。

堆積土 3層に分層できた。第1層が混入物を含まない焼土層であり、他の第2・3層には焼土がまばらに混入している。

出土遺物 遺物は、第3層中から土器が1片出土したのみである。



第229図 第3号焼土状遺構出土遺物

第3号焼土状遺構土器観察表

番号	地区・層位	部位	外 面 施 文 文 様	分 類
1	3 層	口縁部	縄文 (RL)、スス状炭付	Ⅲ群2類

第4号焼土状遺構 (第230図)

位置と確認 調査区E 61グリッドに位置している。第 a層を精査中に焼土を確認した。

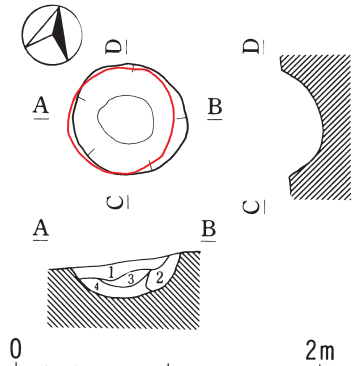
重複 認められなかった。

焼土範囲 掘り方を覆うように長径72cm・短径68cmの範囲に焼土が分布していた。

平面形・規模 平面形は全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径75cm・短径70cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。壁はさほど火熱を受けておらず、もろく軟らかい。壁高は、東壁23cm・西壁20cm・南壁24cm・北壁25cmである。

底面 断面形が鍋底状を呈し、壁同様に火熱を受けておらず、もろい。



第230図 第4号焼土状遺構

第4号焼土状遺構土層注記

第1層	褐色	7.5YR 5/6	焼土粒を少量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	褐色	7.5YR 5/4	炭化物を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第3層	褐色	7.5YR 5/6	焼土をブロック状にやや多量に含む。しまり・粘性あり。
第4層	褐色	7.5YR 5/6	しまり・粘性あり。

堆積土 4層に分層できた。焼土が混入している層は第1・3層であり、長期的に火熱を受けたとは考えられない堆積土状況である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

第5号焼土状遺構（第231図）

位置と確認 調査区D 63グリッドに位置している。第 a層を精査中に焼土を確認した。

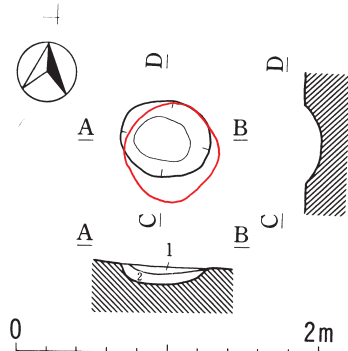
重複 認められなかった。

焼土範囲 焼土は、掘り方の上面を覆うように長径62cm・短径61cmの範囲に焼土が分布している。

平面形・規模 平面形のプランは、全体的に丸みをもつ円形を呈する。規模は、長径62cm・短径51cmである。

壁 すべて底面から上場にかけて緩やかに立ち上がる。火熱を受けておらずもろく軟弱なつくりである。壁高は、東壁11cm・西壁12cm・南壁9cm・北壁11cmである。

底面 断面が鍋底状を呈し、壁同様に火熱を受けておら



第231図 第5号焼土状遺構

第5号焼土状遺構土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	焼土をブロック状に微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
第2層	黄褐色	10YR 5/8	炭化物をやや多量、焼土粒を微量に含む。しまりなし、粘性ややあり。

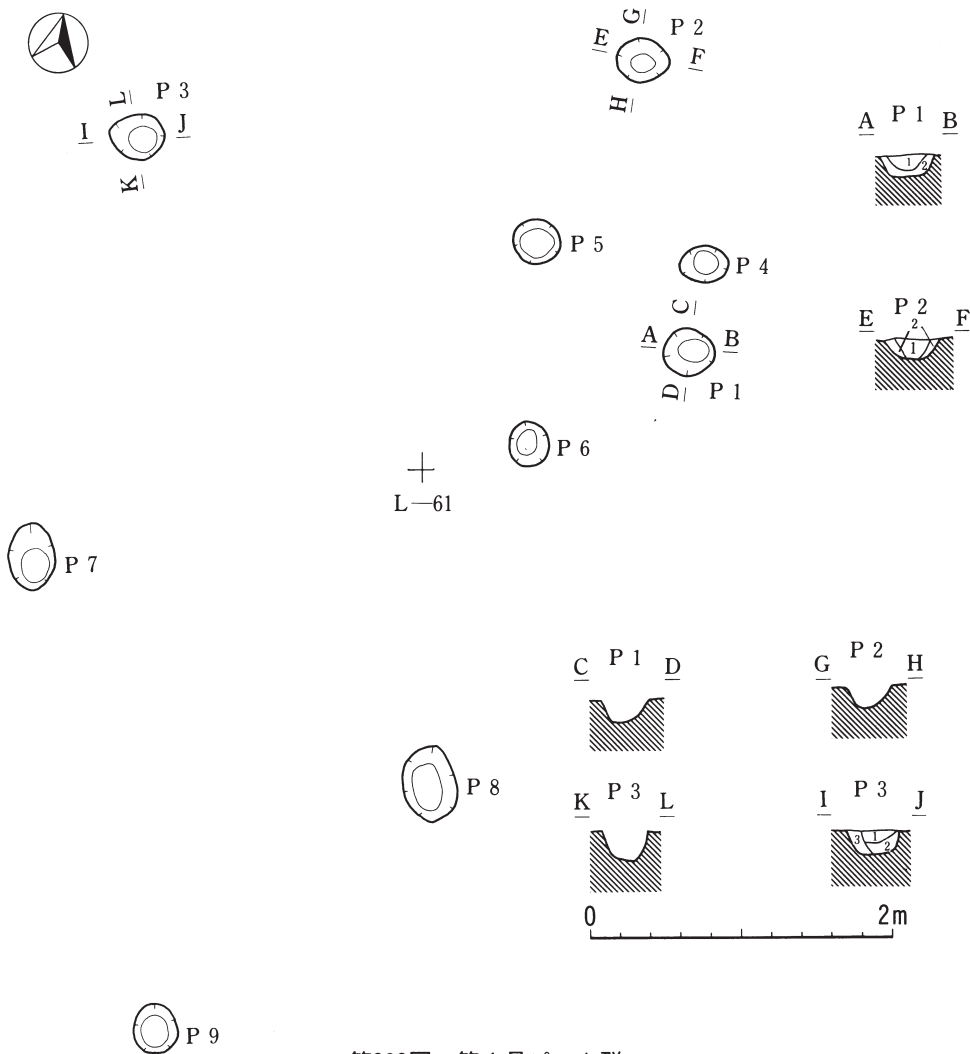
ず、もろいつくりである。

堆積土 2層に分層できた。いずれにも焼土を含むが長期間使用したとは考えられない。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(4) ピット群 (第232図)

第1号ピット群



第232図 第1号ピット群

第1号ピット群ピット1土層注記

第1層	褐色	10YR 5/6	炭化粒を微量に含む。しまりなし、粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 6/6	褐色土混入。しまり・粘性なし。

第1号ピット群ピット2土層注記

第1層	黄褐色	10YR 6/6	暗褐色土混入。しまり・粘性あり。
第2層	黄褐色	10YR 6/6	褐色土混入。しまり・粘性なし。

第1号ピット群ピット3土層注記

第1層	暗褐色	10YR 3/4	炭化物を少量、ローム粒を多量に含む。しまり・粘性ややあり。
第2層	褐色	10YR 5/6	ローム粒を少量含む。しまり・粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR 6/6	暗褐色土混入。しまりなし、粘性あり。

位置と確認 調査区 K・L 61・62グリッドに位置している。第 a層を精査中にピットを確認した。

重複 認められなかった。

形態・規模 形態は円形・楕円形を呈している。規模は40cm内外のものが多く、深さも20cm未満と浅いものが多い。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	36×34	16	2	円形	35×33	14	3	円形	37×34	17
4	楕円形	34×26	15	5	〃	32×31	16	6	〃	31×28	10
7	〃	45×28	13	8	楕円形	48×35	15	9	〃	34×32	14

配置 ピットは9個検出された。南北7m・東西5mの範囲に分布し、範囲の中でも北側に多く分布しているが、ピット間には規則性がみられない。

小結 今回検出したピット群は、ピット内部に柱痕が確認できず、また、その配置等からは住居跡の柱穴かどうかは判断できなかった。しかし、堆積土の観察からは近世の遺構とは考えられず、本調査区で検出した土壌とほぼ同一時期に形成されたものと思われる。

このようなピット群は、六ヶ所村大石平遺跡（遠藤・成田他1987）の 区（547個のピット群）及び 2区（14個のピット群）から、縄文時代後期（？）の規則性のないピット群が検出されている。大石平遺跡の調査結果では性格については論及し得なかったが、今後、類例を集成し本遺跡を含めて比較・検討すべき資料と思われる。

（成田 滋彦）

2. 遺構外出土遺物

(1) 土器

第 群土器 2 類【早稲田 5 類に相当】(第235図 18~30)

本類の土器は本調査区のみ出土であり、他の調査区からは出土していない。

全体形状は胴部破片の資料が多いため把握し得ないが、その特徴としては器壁が厚く、裏面の整形が荒く凹凸が著しい。色調は褐色をなすものが多く、焼成は不良な土器が多い。器表面は、節の太い 0 段多条による斜行縄文である。(29)は裏面に縄文を施文している。(30)は、口頸部が外反し口唇部の断面が丸みを有する深鉢形土器であり、器厚及び整形等の比較では、本類の土器と様相を異にするが取り敢えず分類した。

第 群土器 1 類【円筒上層 b 式に相当】(第233図 1)

本類の土器は、本調査区の H 51グリッドのみ出土であり、他の調査区からは出土していない。

器形は、平口縁で口頸部が内反する深鉢形土器であるが胴部下半は不明である。

口縁部分様帯には、口端に円形の粘土紐を貼り付け、その粘土紐から垂下して人形状の粘土紐を等間隔に貼り付けて一周させている。粘土紐の上には L R の捺糸圧痕を等間隔に施文しており、人形状貼り付け文の間には口端に縦位・下位に弧状の捺糸圧痕を用いて文様を構成している。胴部文様帯との区画として口頸部に一条の粘土紐を巡らし、これによって口縁部文様帯を構成している。

胴部文様帯には L R の縄文を施文し、その後に横位方向に展開する R の結節縄文を等間隔に施文している。

第 群土器 3 類【円筒上層 d 式に相当】(第235図 31~34)

本類は、口頸部の上部が内反し、小さな山形状突起をもつ波状口縁の深鉢形土器である。(34)は波状口縁の中央部に貫通孔がみられる。

地文には羽状縄文及び斜行縄文を施文している。文様は細い隆帯による弧状文様が主体である。(32)は口端に斜位状に粘土紐を貼り付けている。粘土紐の上には縄文を施文する土器が多いが、素文の土器 31 も見られる。

第 群土器 4 類【円筒上層 e 式に相当】(第236図 35~48)

本類は、破片資料のために全体の形状を知り得ないが、口縁部は平口縁と小さな台形状突起をもつ波状口縁の土器である。

折り返し口縁部は、前期の第2類土器と比較すると幅が狭く、また、盛り上がりの度合いが低い。折り返し口縁部には、間隔をあけて燃糸圧痕を施文するが、(38)は口端に短沈線の刻みを有する。

文様は縄文地に沈線を施文している。幅の狭い沈線が主体であるが、(35)は幅が広い。

文様構成には、縦位の沈線及び粘土紐（上面に指頭状圧痕）を中心に横位・斜位状の文様を組み合わせて文様を構成するもの(35)と、縦位文様を伴わず横位・斜位で文様構成を行っている土器がみられる(37～45)。

第 群土器 5 類〔円筒上層 d・e 式に相当〕(第233図 4・第236図 49～51・第237図 52～56)

本類は、すべて深鉢形土器で口頸部が内反するものが主体であるが、(50)は口頸部が張り出す形状である。

口端には、折り返し口縁と肥厚した折り返し口縁に類似した土器が多く、その上面に短い燃糸圧痕を斜位に連続的に施文する。また、(50)は突起部の表裏面に燃糸圧痕を施文している。

器表面の全面には、単節の縄文を施文しており、斜行縄文が主体である。

第 群土器 6 類〔大木 7 b・8 a 式に相当〕(第237図 57～61)

本類の形状は、口頸部が張り出すキャリパー形を呈するもの(57～59)と、口頸部が内反する形状のもの(60・61)が認められ、両者とも深鉢形である。特にキャリパー形の土器は、焼成は良好であり、また、器裏面の調整はミガキの痕跡が認められる。

文様要素には、粘土紐・沈線・燃糸圧痕がある。粘土紐には、貼り付け後に両脇をなぞって断面三角形に整形するものと、貼り付け後に何ら調整を加えないものがみられる。

口縁部文様帯には、波頂部下に渦巻状のモチーフを構成し、区画帯内部に弧状文様を構成している。(60)は円形の粘土紐と燃糸圧痕の組み合わせによる文様モチーフである。胴部文様帯との区画として器表面に一条の粘土紐を巡らし、これによって狭義の口縁部文様帯を構成している。

第 群土器 7 類〔榎林式に相当〕(第237図 62～64)

本類の形状は、口頸部が内反し、緩やかな山形状突起を有する波状口縁の深鉢形である。口縁部文様帯には、波頂部下に円形状のくぼみを有し、円形状を中心として口唇部寄りに一条の横位沈線を巡らしている。胴部文様帯の区画として二～三条の横位沈線を巡らし、これによって狭義の口縁部文様帯を形成している。

胴部文様帯は、地文縄文上に文様を施文し、縦位に展開する弧状・斜位状（沈線）の文様を施文している。

第 群土器 8 類【中の平 ・最花式に相当】(第237図 65・第238図 66～69)

本類の器形は深鉢形土器であるが、その全体形状を知り得るものは少ない。口縁には、平口縁と波状口縁があり、また、口頸部は内反するものとししないものがある。

口縁部文様帯には特に文様を構成しておらず無文である。胴部文様帯との区画として棒状工具による斜位の圧痕を等間隔に施文して器面を一周させ、これによって狭義の口縁部文様帯を形成している。

胴部文様帯には、地文としての縄文を施文した後に二条の沈線を一単位として縦位方向の文様を施文している(66)は、文様の末端に渦巻状の文様を施文している。

第 群土器 9 類【大木10式に相当】(第238図 70～76・79)

本類は、平口縁を呈する深鉢形が主体を占める。口唇部の断面形は、丸みをもつものと平坦で円形のもの二種類があり、口頸部は内反の有無により二種類の形状に分けられる(79)は胴部の張り出しから壺形土器と思われるが、出土例は少ない。

口縁部文様帯は、胴部文様と同様な原体による縄文を施文しているだけである。胴部文様帯との区画として口唇部近くに一条の沈線を巡らし、これによって狭義の口縁部文様帯を構成している。

胴部文様帯は、地文縄文上に二条の刺突列を縦位に施文するものと、縦位方向に展開する文様モチーフのものがみられる(79)は胴部貼り出し部にJ字状文様を施文している。

第 群土器 1 類【後期初頭】(第233図 6・第238図 77・78・80～82)

(6)は、全体の形状を知り得る唯一の資料であるが口縁部が欠損している。口頸部が内反し、胴部の張らない薄手の深鉢形であり、他の土器も同様な形状を呈すると思われる。

口縁部文様帯は、縦位のS字状の粘土紐・斜位の撚糸圧痕・ボタン状突起等を用いて文様構成を行っている。粘土紐上面は素文のもの(6)・連続した円形竹筴(80)・指頭圧痕(82)・縄文(81)と多種にわたっている。胴部文様帯の区画として口頸部に一条の粘土紐を巡らし、これによって狭義の文様帯を形成している。

胴部文様帯が知り得るものは(81)であり、縦位の粘土紐の両側に方形状の磨消縄文を施文している。

第 群土器 2 類〔中期末葉～後期前葉〕(第233図 2・3・5、第235・239・240図)

本類の器形は、平口縁の深鉢形が主体を占める。形状には、口頸部が内反し胴部が張り出すものと張らないものがあり、底辺部近くがくびれる形状のものが多い。器表裏面には、スス状炭化物の付着例が多く、器表面の剥落が著しい土器が多い。また、底面に網代痕及び木葉痕を有する土器もみられる。(94)は、小さな山形状の突起をもつ波状口縁であるが、本地区での出土例は少ない。

(2・3・5・7・8・10)は縄文のみが施文された土器であり、縄文原体には無節L・単節LR・RLとLRとRLを組み合わせたものもある。単節使用は、原体の回転方向が斜位・縦位方向であるものが多い。

(106)は折り返し口縁を有する土器であり、胴部の縄文を全面に施文している。

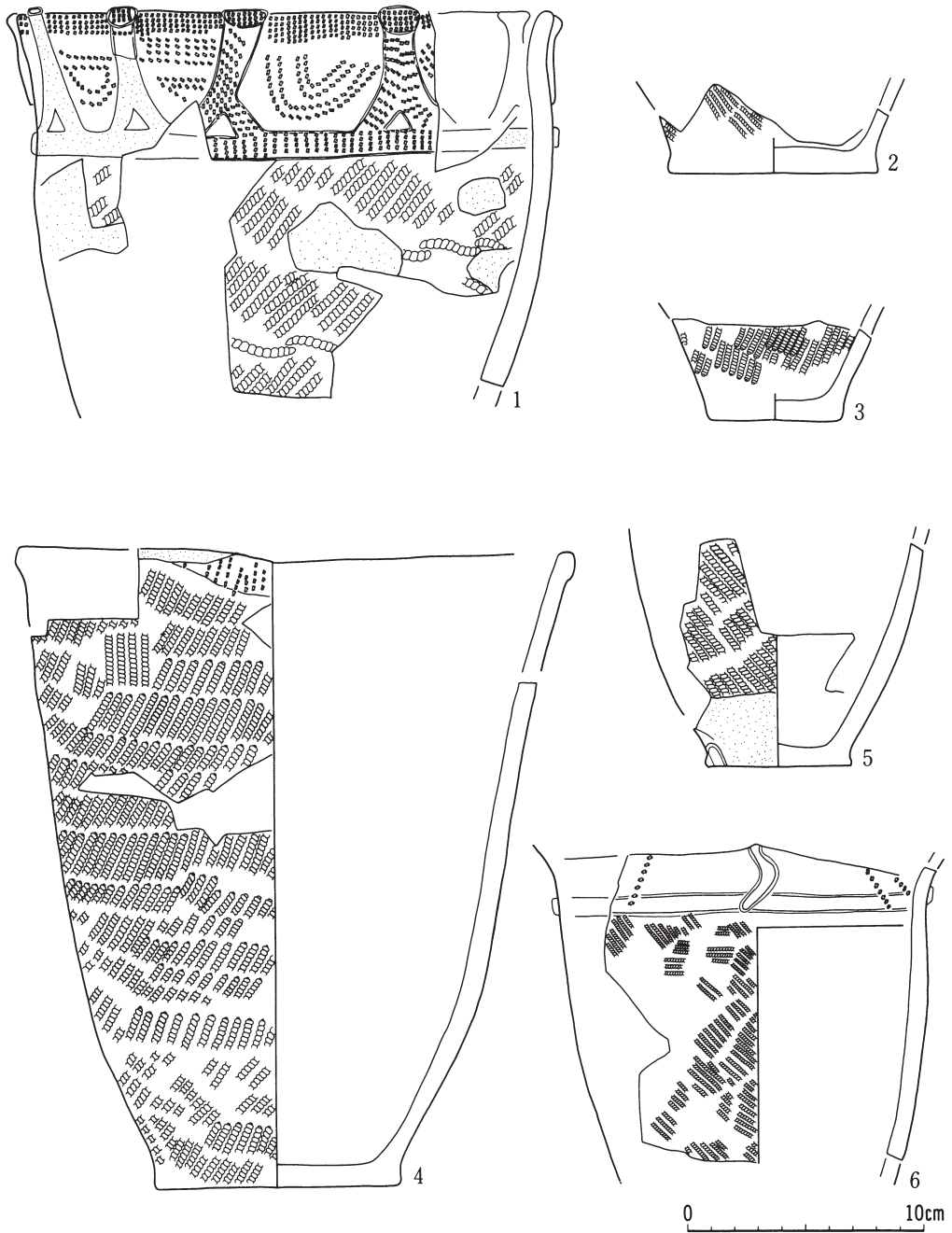
(105)は、地文縄文上に縦位にナデその地に縦位方向に綾絡文を施文している。

(106～113)は、燃糸圧痕文を使用している土器である。燃糸圧痕文は、口縁部に横位方向に一条ないし二条施文するものが多い。(113)は胴部及び胴部下半にまで施文しているもので、縄文時代後期初頭の土器と考えられる。

(114・115・117)は、櫛歯状施文具を用いたもので、口唇部近くから胴部にかけて、縦位方向の細い条線文としたものが多い。(115)は横位と斜位を組み合わせた例である。

(116)は、口唇部近くに一条の横位沈線を巡らした土器で、区画帯内部に縄文を施文している。

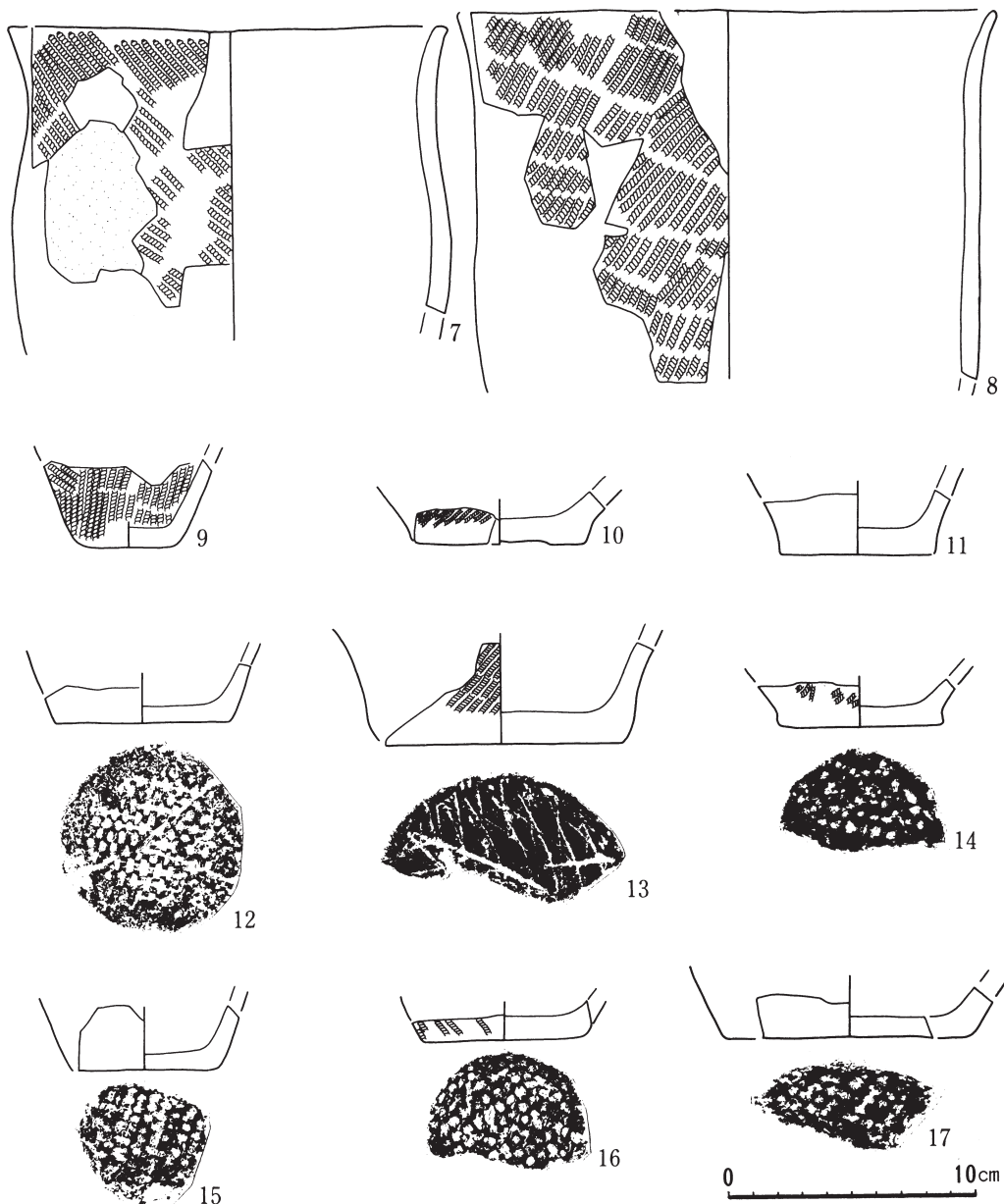
(成田 滋彦)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	H-51 II層	深鉢	人形状(粘土紐)、LRの縄文・燃糸圧痕、結節回転文	II群1類
2	" "	底部	縄文(RL)	III群2類
3	J-52 I層	"	縄文(LR)	"
4	I-50 "	深鉢	横位粘土紐(上面にLRの燃糸圧痕)、縄文(LR)	II群5類
5	K-57 "	"	縄文(LR)	III群2類
6	" "	"	横・縦位(粘土紐)、斜位のLR燃糸圧痕、縄文(LR)	III群1類

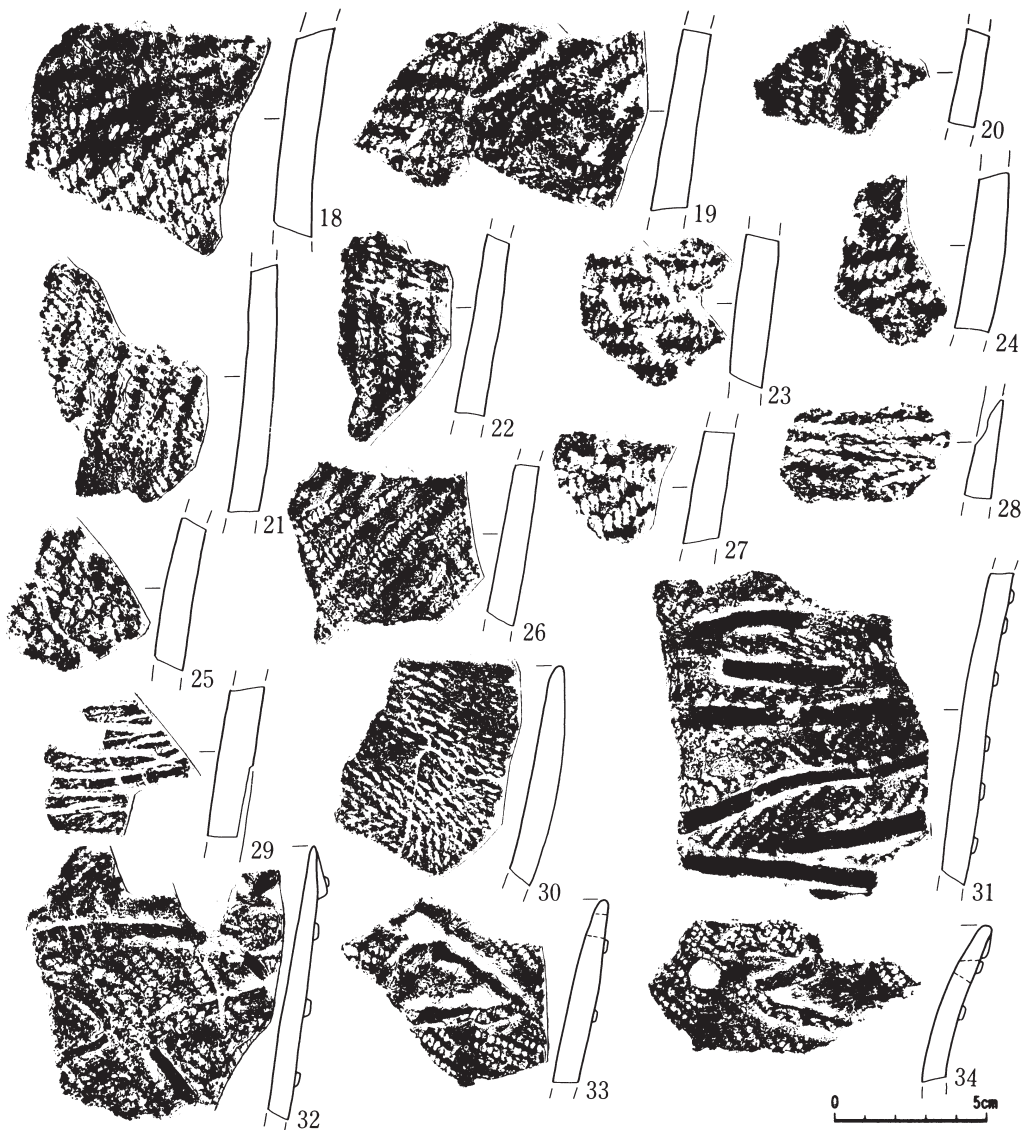
第233図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土器(1)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
7	H-52 I層	深鉢	平口縁、	縄文 (RL)		Ⅲ群2類
8	L-57 "	"	"	縄文 (LR)		"
9	I-50 V層	底部		縄文 (RL)		"
10	I-52 "	"	上げ底、	縄文 (LR)		"
11	J-56 I層	"		無文		"
12	M-58 "	"	無文、	底面に網代痕		"
13	E-63 "	"	縄文 (RL)、	底面に木葉痕		"
14	J-52 "	"	縄文 (LR)、	底面に網代痕		"
15	M-58 "	"		無文		"
16	M-60 VIIa層	"		縄文 (LR)		"
17	M-61 "	"		無文		"

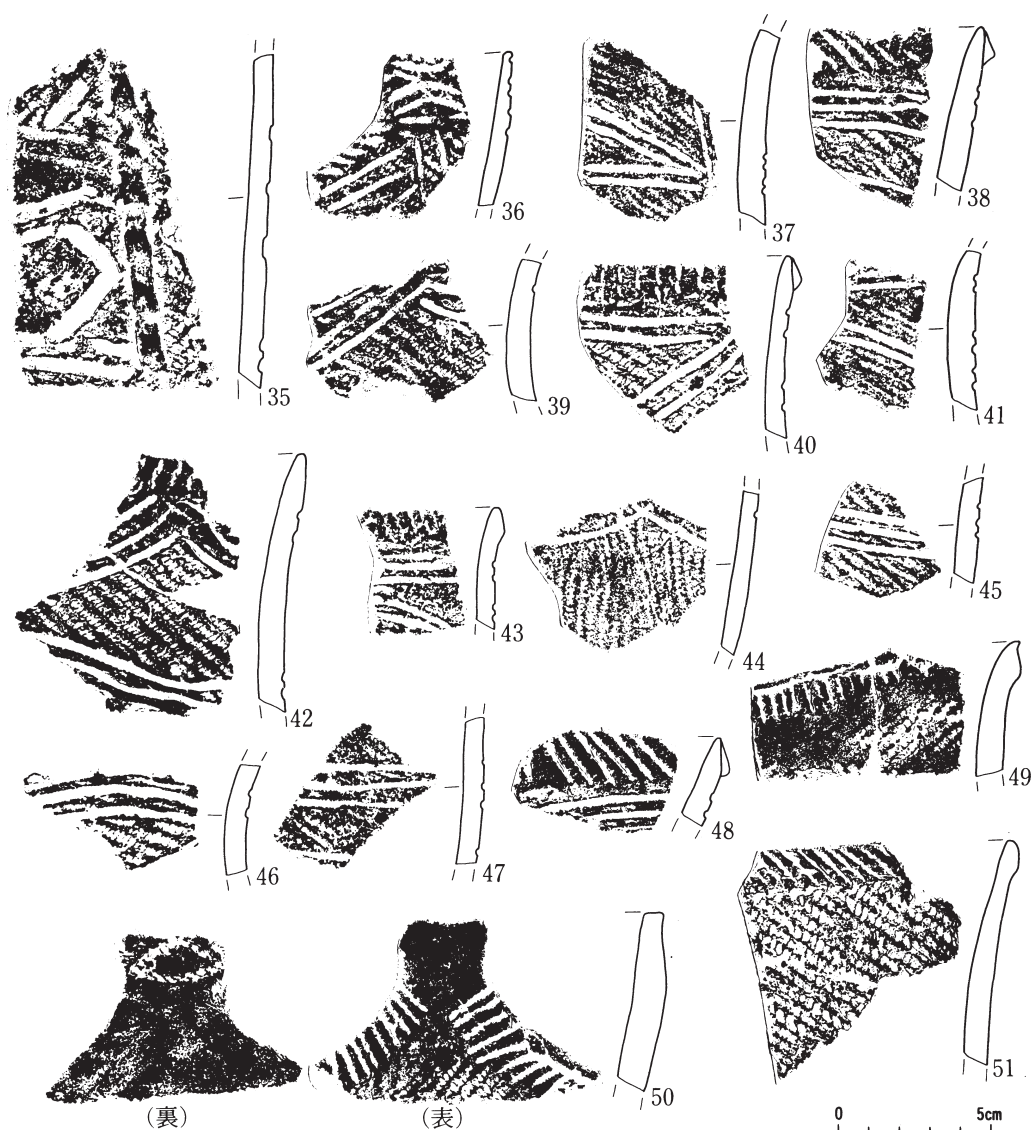
第234図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土土器(2)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
18	E-61 I層	胴部	0段多条、裏面に擦痕、スス状炭付			I群2類
19	M-60 VIIa層	〃	〃	〃	〃	〃
20	〃	〃	〃	裏面に擦痕	〃	〃
21	〃	〃	〃	〃	スス状炭付	〃
22	L-60	〃	〃	〃	〃	〃
23	M-60	〃	〃	〃	〃	〃
24	L-61 I層	〃	〃	〃	スス状炭付	〃
25	E-61	〃	〃	〃	〃	〃
26	L-62	〃	〃	〃	〃	〃
27	E-61	〃	〃	〃	〃	〃
28	I-62 VIIa層	〃	燃糸圧痕、スス状炭付			〃
29	M-61	〃	燃糸文、裏面に縄文			〃
30	M-58 I層	口縁部	平口縁、縄文、スス状炭付			〃
31	H-51 V層	胴部	横位弧状(粘土紐)、LRとRLの羽状縄文			II群3類
32	H-52	口縁部	縄文(LR)、横位弧状(粘土紐)			〃
33	H-51 III層	〃	波状口縁、波頂部に貫通孔、縄文(RL)			〃
34	〃 I層	〃	〃	横・斜位(粘土紐)、貫通孔		〃

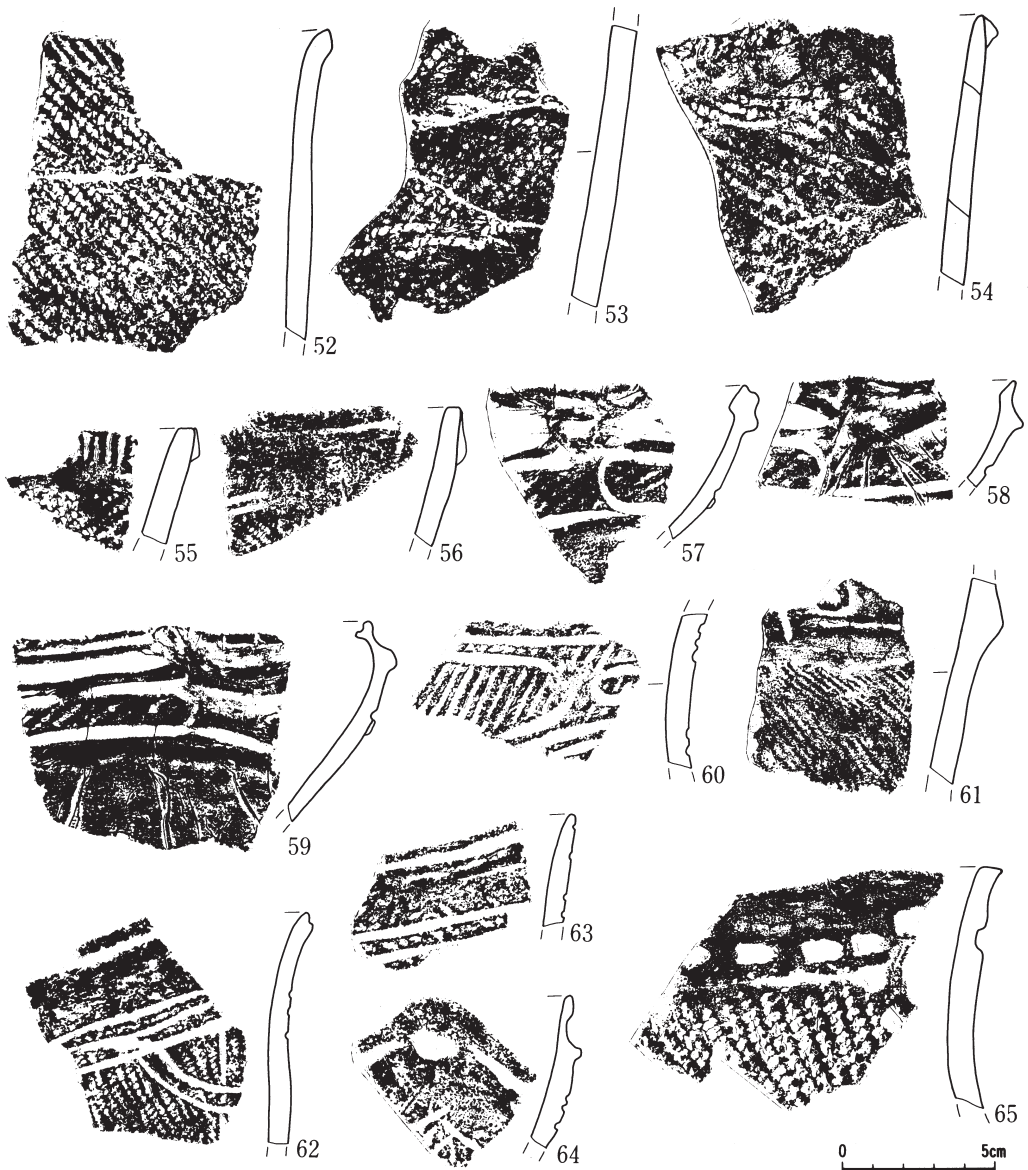
第235図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土器(3)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外 面	施 文	文 様	分 類
35	Q-57 I層	胴 部	縦位粘土紐 (上面に刺突)、斜位 (沈線)			II群4類
36	H-51 V層	口縁部	口端に刻み、胸骨状 (沈線)			"
37	" II層	口頸部	縄文 (RL)、胸骨状 (沈線)			"
38	" "	口縁部	口端に燃糸圧痕、横位 (沈線)、縄文 (LR)			"
39	" "	口頸部	縄文 (RL)、山形状 (沈線)			"
40	" V層	口縁部	縄文 (LR)、横・斜位状 (沈線)			"
41	" II層	口頸部	縄文 (RL)			"
42	I-52 V層	口縁部	"	口端に燃糸圧痕、山形状 (沈線)		"
43	H-51 "	"	"	横・斜位 (沈線)		"
44	J-52 "	胴 部	縄文 (RL)、横位孤状 (沈線)			"
45	H-51 I層	口頸部	"	横位 (沈線)		"
46	" II層	"	"	"		"
47	I-50 V層	胴 部	"	"		"
48	H-51 II層	口縁部	口端に燃糸圧痕、横位 (沈線)			"
49	" V層	"	縄文 (LR)、口端に燃糸圧痕、波状口縁			II群5類
50	J-52 I層	"	口端と裏面に燃糸圧痕	"		"
51	H-51 II層	"	口端に燃糸圧痕、縄文 (RL)			"

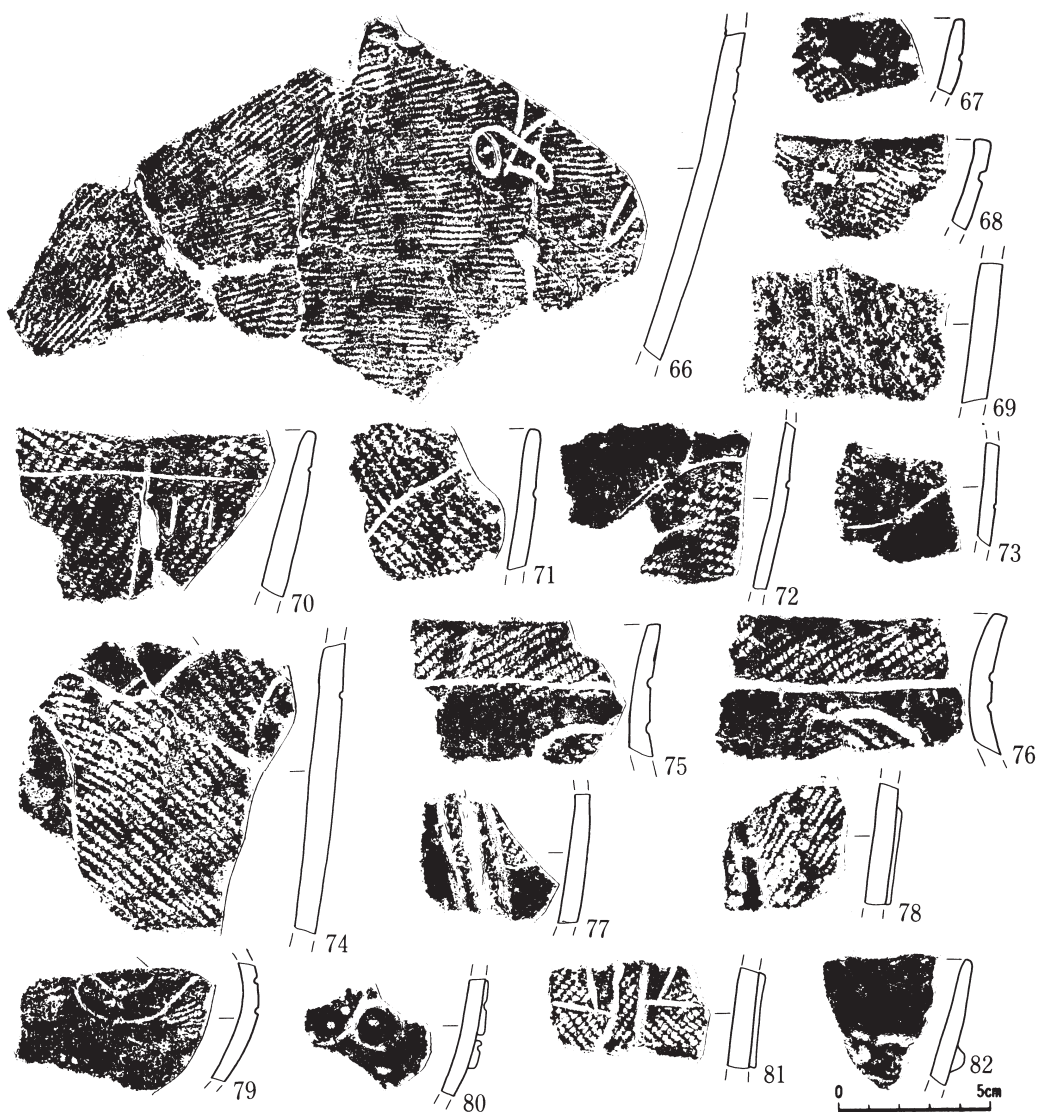
第236図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土土器(4)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(5)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
52	I-52 V層	口縁部	口端に燃糸圧痕、縄文(RL)			II群5類
53	H-51 II層	胴部	縄文(LR)、捺絡文			〃
54	P-58 VIIa層	口縁部	波状口縁、縄文(RL)			〃
55	H-51 V層	〃	口端に燃糸圧痕、縄文(LR)、折り返し口縁			〃
57	〃 II層	〃	縄文(LR)、横位(粘土紐・沈線)			II群6類
56	H-51 III層	〃	横位(沈線)			II群4類
58	H-52 V層	〃	〃	横位(沈線)		〃
59	〃	〃	縄文、横位(粘土紐・沈線)			〃
60	H-51 III層	口頸部	縄文(RL)、横位曲線文(沈線)			〃
61	J-52 I層	口縁部	燃糸圧痕、口端に粘土紐、縄文(RL)			〃
62	I-50 V層	〃	縄文(RL)、横位・弧状(沈線)、波状口縁			II群7類
63	〃	〃	横位(沈線)			〃
64	〃	〃	波状口縁、波頂下部に刺突、口端に横位沈線			〃
65	H-51 I層	〃	横位連続刺突、波状口縁、縄文(LR)			II群8類

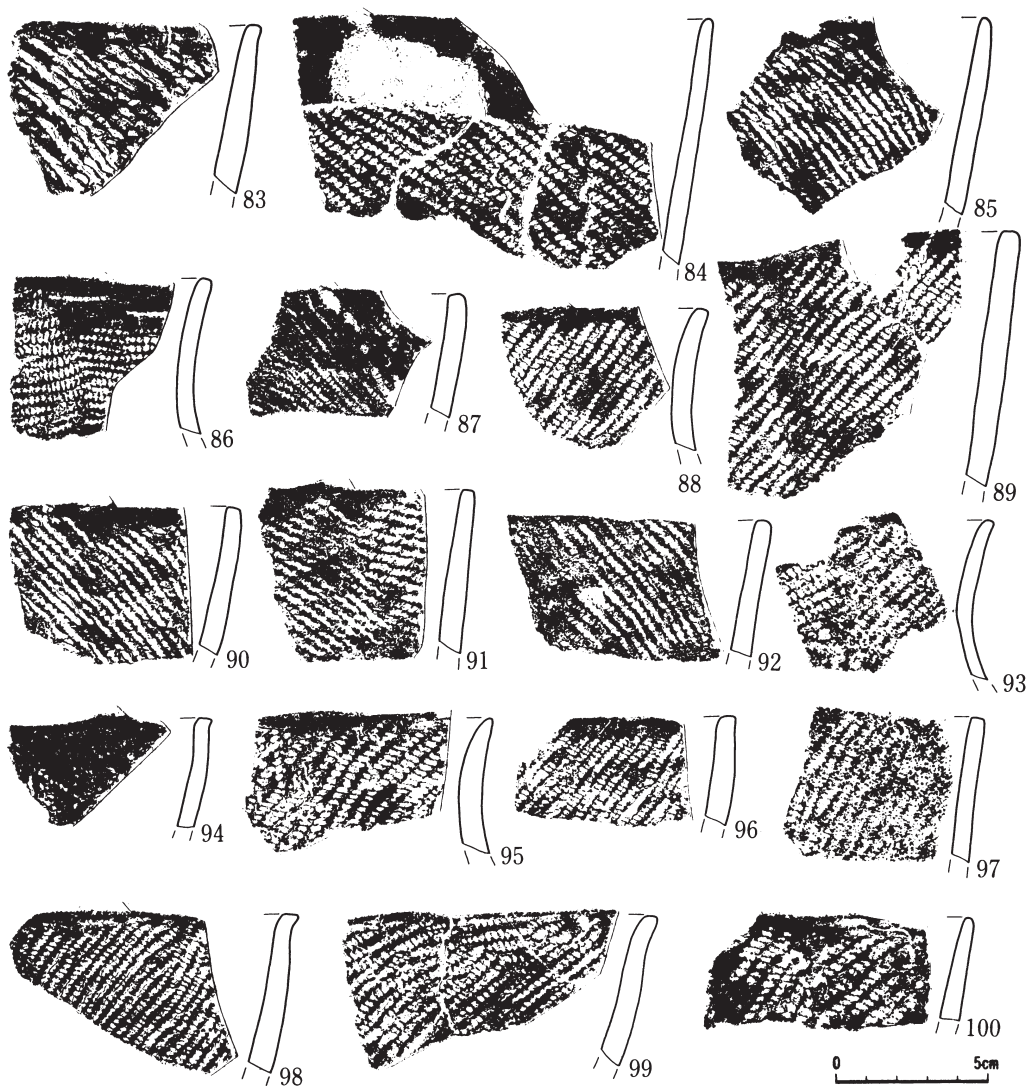
第237図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土土器(5)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(6)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
66	I-52 I層	胴部	縄文(LR)、文様末端に渦巻文			II群8類
67	N-59 VI a層	口縁部	"	横位連続(刺突)		"
68	" "	"	縄文(RL)	"		"
69	I-52 V層	胴部	"	縦位(沈線)		"
70	M-60 VI a層	口縁部	平口縁、縄文(RL)、縦位短沈線			II群9類
71	N-58 I層	"	弧状(沈線)、縄文			"
72	K-57 "	胴部	縄文(RL)、磨消縄文、曲線文			"
73	I-52 V層	"	"	"		"
74	H-51 IV層	"	縄文(LR)、充填技法、縦位曲線文			"
75	" "	口縁部	平口縁、縄文(LR)、充填技法			"
76	I-50 V層	"	"	"		"
77	" "	胴部	縦位(粘土紐)、上面に縄文、磨消縄文			III群1類
78	M-58 I層	"	"	上面に素文、縄文(RL)		"
79	M-60 VI a層	"	J字状文、縄文(LR)、磨消縄文			II群9類
80	O-59 I層	口頸部	ボタン状・弧状(粘土紐)、上面に刺突			III群1類
81	L-57 "	胴部	縦位(粘土紐)、縄文(RL)、方形文様			"
82	H-51 "	口縁部	横位粘土紐(上面に刺突痕)			"

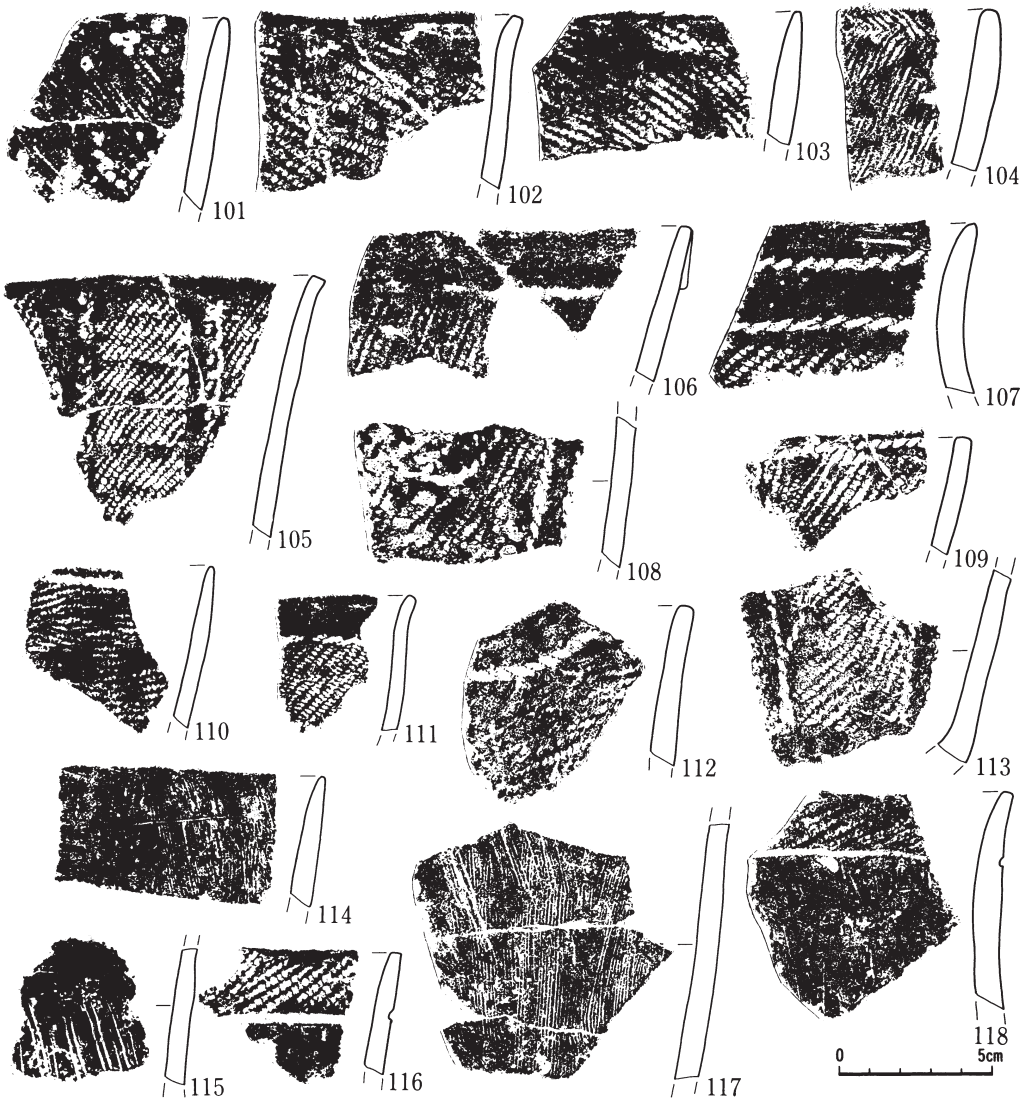
第238図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土土器(6)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(7)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
83	H-51 Ⅲ層	口縁部	平口縁、	縄文(L)		Ⅲ群2類
84	M-58 I層	"	"	縄文(LR)	スス状炭付	"
85	K-57 "	"	"	"	"	"
86	H-51 "	"	"	"	スス状炭付	"
87	K-62 "	"	"	"	"	"
88	M-60 Ⅷa層	"	"	"	"	"
89	L-62 I層	"	波状口縁	"	スス状炭付	"
90	K-57 "	"	平口縁	"	"	"
91	M-58 "	"	"	"	スス状炭付	"
92	M-60 Ⅷa層	"	"	"	"	"
93	J-56 "	"	"	"	"	"
94	I-50 V層	"	波状口縁	"	"	"
95	H-51 Ⅱ層	"	平口縁、	縄文(RL)	"	"
96	K-57 I層	"	"	"	"	"
97	H-51 Ⅲ層	"	"	"	"	"
98	K-57 I層	"	"	"	スス状炭付	"
99	L-62 "	"	"	"	"	"
100	M-61 Ⅷa層	"	"	"	"	"

第239図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土土器(7)



富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器観察表(8)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
101	L-62 I層	口縁部	平口縁	縄文(RL)		Ⅲ群2類
102	J-56 "	"	"	"	スス状炭付	"
103	K-57 "	"	"	"		"
104	E-61 I層	"	縄文(RL)	平口縁		"
105	K-57 I層	"	平口縁	縄文(RL)	縦位燃絡文	"
106	J-52 I層	"	折り返し口縁	縄文(RL)		"
107	K-57 "	"	平口縁	縄文(RL)	燃糸圧痕	"
108	J-52 "	胴部	縄文(RL)	縦位燃糸圧痕		"
109	E-61 "	口縁部	"	平口縁	燃糸圧痕	"
110	I-50 V層	"	"	"	"	"
111	M-61 V a層	"	"	"	"	"
112	J-56 "	"	波状口縁	弧状文様	燃糸圧痕	"
113	"	底辺部	縄文(RL)	縦位	燃糸圧痕	"
114	I-50 V層	口縁部	平口縁	縦位櫛歯状沈線	スス状炭付	"
115	H-51 II層	胴部	横	縦位櫛歯状沈線		"
116	H-51 I層	口縁部	縄文(LR)	横位	沈線	平口縁
117	I-50 V層	胴部	縦位櫛歯状	沈線		"
118	H-51 I層	口縁部	縄文(LR)	横位	沈線	平口縁

第240図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土土器(8)

(2) 石 器

富ノ沢2遺跡B地区から出土した石器は合計45点である。そのうち、遺構内出土13点、遺構外出土32点である。

石器の分布状況は、特定のグリッドに集中せず、散在する傾向がみられる。また、出土層は第 層からの出土が多い。

A類 石鏃（第169図 1、第241図 1）

2点の出土で、遺構内1点、遺構外1点である。いずれも有茎石鏃で、基部の形態はY字形を呈している。第169図 1は尖頭部を欠損している。調整は2点ともに両面調整で、第241図 1は全体的に丁寧で規則正しい調整剥離が施されている。

石質は、玉髄質の珩質頁岩1点、珩質頁岩1点である。

C類 石錐（第241図 3）

遺構外から1点の出土である。錐部に若干の磨耗痕が観察され、錐部以外は主要剥離面を残存している。

石質は珩質頁岩である。

E類 石筥（第207図 1）

第59号土壌から1点出土した。刃部を欠損し全体形を把握できないが、水木沢遺跡（畠山1977）出土例から考えると、基部から刃部への開きが大きい撥形を呈すると思われる。両面調整で、全体的に丁寧な調整である。

石質は珩質頁岩である。

F類 不定形石器（第169図 2～4、第188図 1、第241図 2・4、第242図）

遺構内4点、遺構外9点で合計13点の出土である。F 類4点（第169図 4、第241図 2、第242図 5・8）F 類5点（第169図 3、第188図 1、第242図 4・6・10）F 類4点（第169図 2、第242図 7・9・11）の出土である。F 類出土の石器は、すべて片面の一側縁が連続的に細部調整されている。第241図 4は裏面の一側縁に極浅形調整が施されている。

石質は、珩質頁岩が12点、鉄石英が1点である。

G類 磨製石斧（第243図 12～15）

4点で、すべて遺構外出土である。14は定角式磨製石斧、15は擦切磨製石斧、13は乳棒状磨製石斧、12は打製石斧に分類される。13・14・15は刃部を欠損している。14は両面に剥離面を、また、13は頭頂部に剥離面を残存している。

H類 石錐(第245図 29)

1点の出土である。楕円形の偏平な礫を素材としている。長軸の両側縁部を打ち欠いて抉りを作出している。抉りは両面からの打ち欠きで形成されている。大きさは、長さ12.5cm・幅7.0cm・厚さ3.2cm・重さ408gである。

石質は安山岩である。

I類 敲磨器類(第184図、第186図 2、第201図、第243図 16~19、第244図、第245図 27・28・30)

17点出土した。遺構内3点、遺構外14点である。形状は楕円形、円形、棒状、卵形等多様多様である。主要痕跡が磨(擦)痕のもの(I類)が7点、主要痕跡が敲打痕のもの(I類)が5点、主要痕跡が凹みのもの(I類)が2点、磨(擦)痕と敲打痕をともに有するもの(I類)が3点である。第244図 20は片面、側面に剥離面を残存している。

石質は、安山岩13点、チャート2点、頁岩1点、礫岩1点である。

J類 石冠(第245図 32)

1点の出土である。欠損品で、楕円形の偏平な礫を素材としている。長軸の側縁部に溝を作出している。

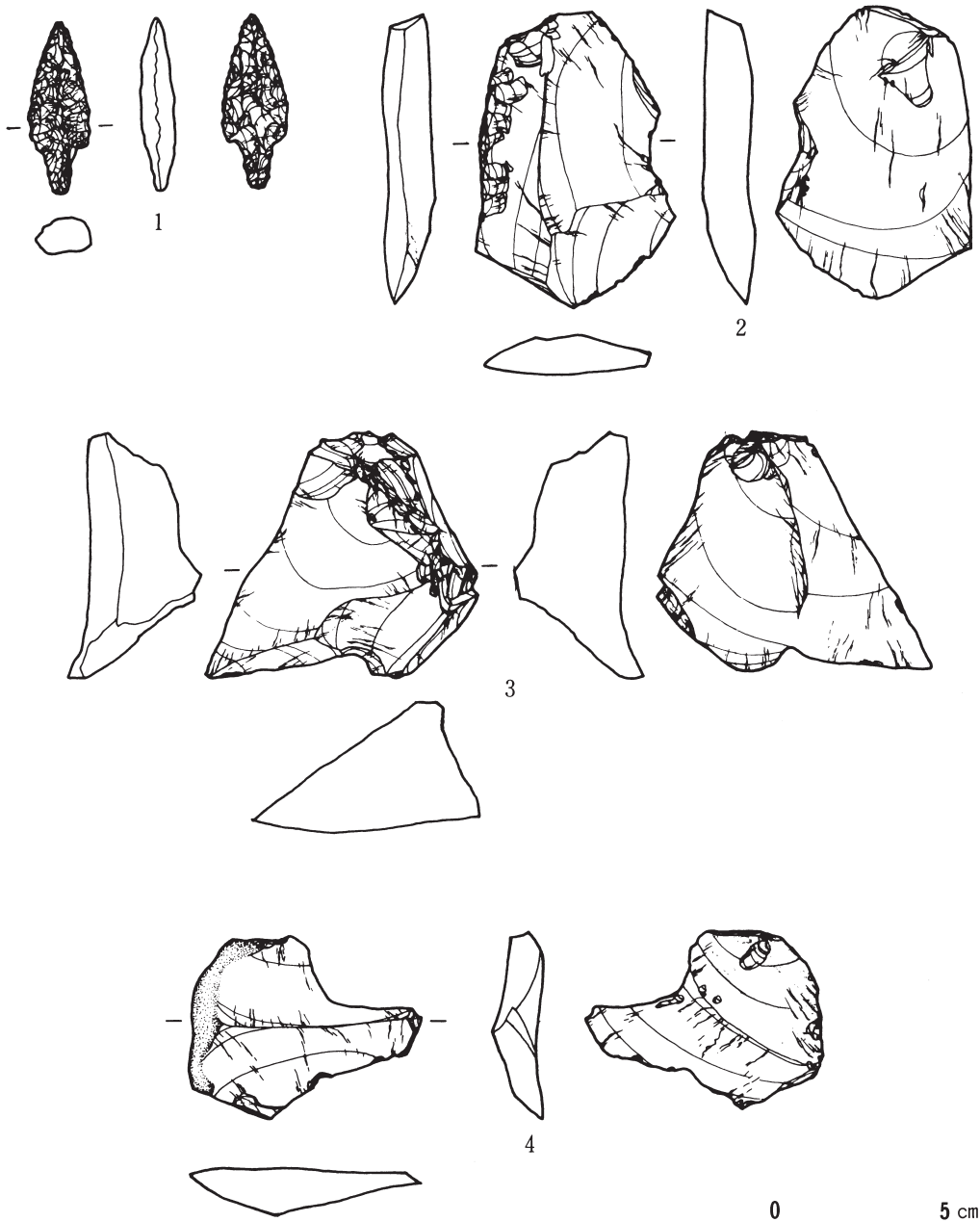
石質は安山岩である。

L類 石皿・台石類(第186図 1、第174図、第245図 31)

5点出土した。遺構内4点、遺構外1点である。すべて自然礫の平坦面を利用している。敲打痕のあるもの2点、磨(擦)痕のあるもの3点である。

石質はすべて安山岩である。

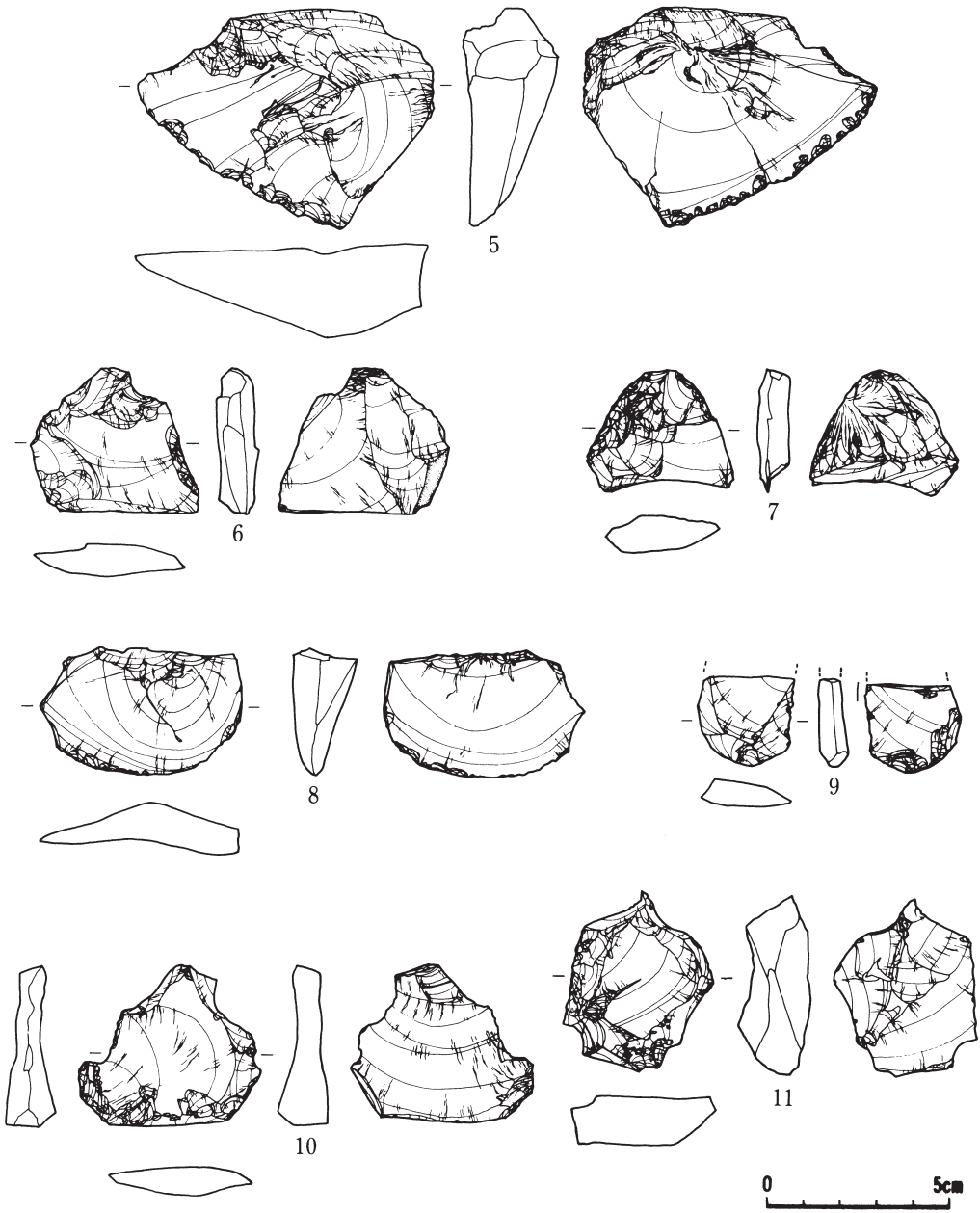
(奈良昌毅)



富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第241図-1	J-62	VIII a	35	13	7	2.4	珪	A	130	
"-2	H-51	V	59	41	9	21.1	"	F	132	
"-3	E-63	I	62	50	23	41.5	"	C	131	
"-4	M-60	VIII a	47	38	8	9.0	鉄石	F	136	

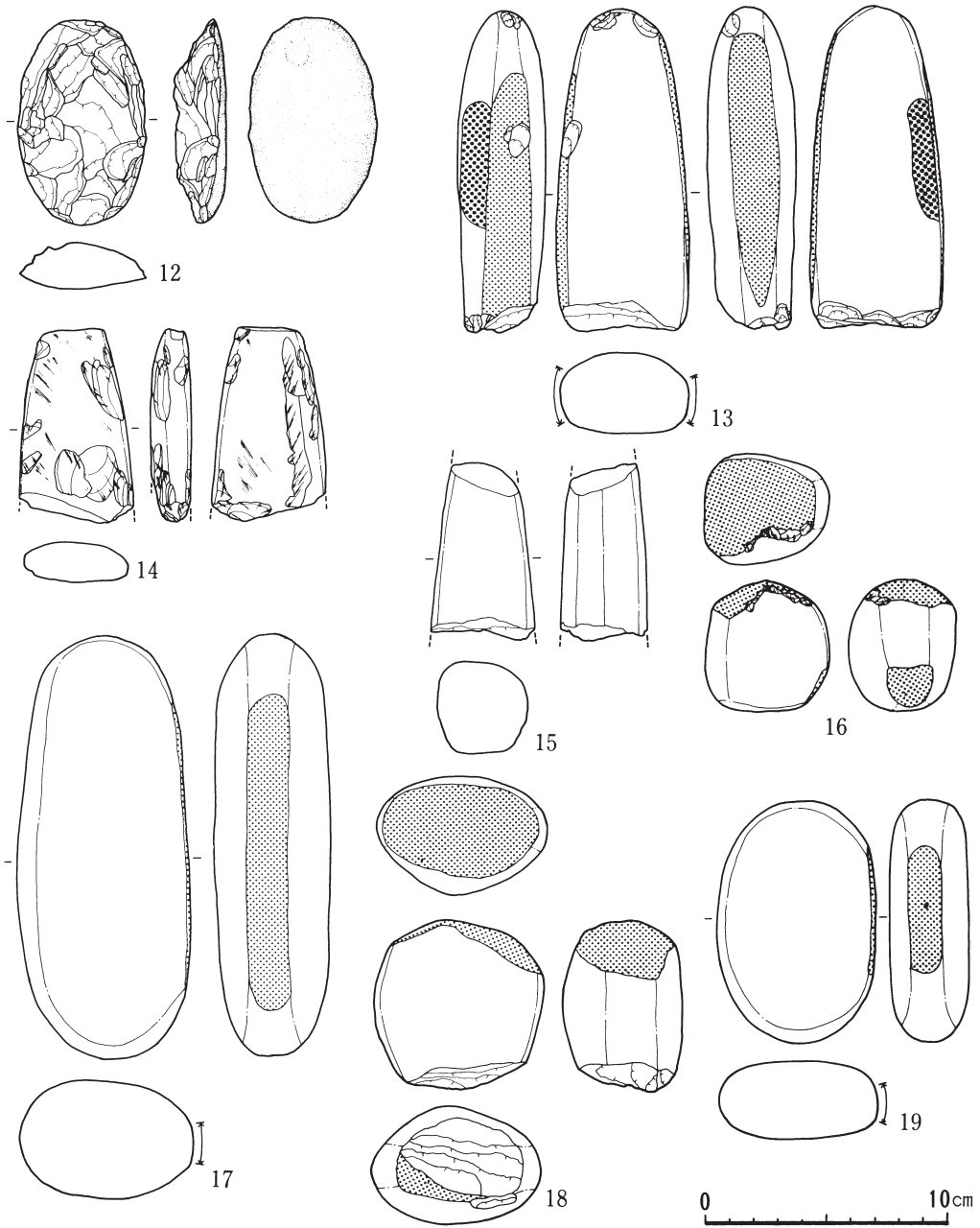
第241図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(1)



富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第242図-5	N-59	VII a	80	60	22	89.0	珪	F	139	
" -6	M-58	I	42	39	9	18.0	"	"	135	
" -7	K-57	"	40	37	10	10.3	"	"	133	
" -8	L-58	VII a	57	34	11	20.9	"	"	134	
" -9	M-61	"	26	24	8	5.6	"	"	137	
" -10	P-58	"	50	41	14	19.3	"	"	140	
" -11	N-59	"	47	39	17	29.8	"	"	138	

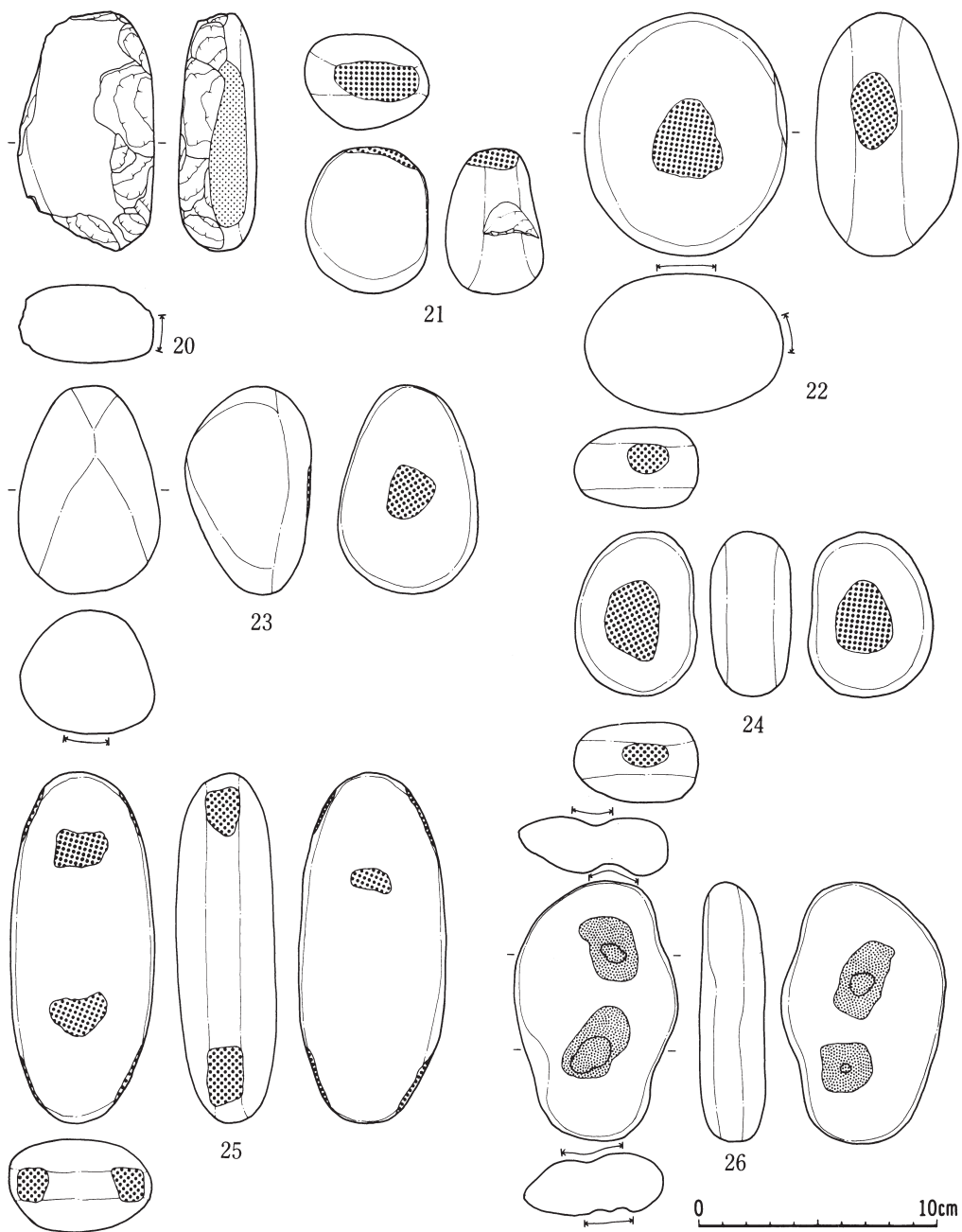
第242図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(2)



富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第243図-12	L-57	I	86	53	20	113	安	G	264	打製石斧
"-13	I-51	"	(132)	55	35	(460)	閃	"	262	刃部欠損
"-14	L-58	VII a	(79)	47	17	(103)	緑木	"	265	刃部欠損
"-15	I-52	V	(69)	44	35	(195)	"	"	263	刃部・基部欠損
"-16	J-52	"	62	52	40	187	頁	I	269	スリ2面
"-17	I-51	"	175	71	47	908	安	"	267	スリ1面
"-18	J-52	"	69	70	50	331	チャ	"	270	スリ2面
"-19	J-61	I	100	66	31	351	安	"	273	スリ1面

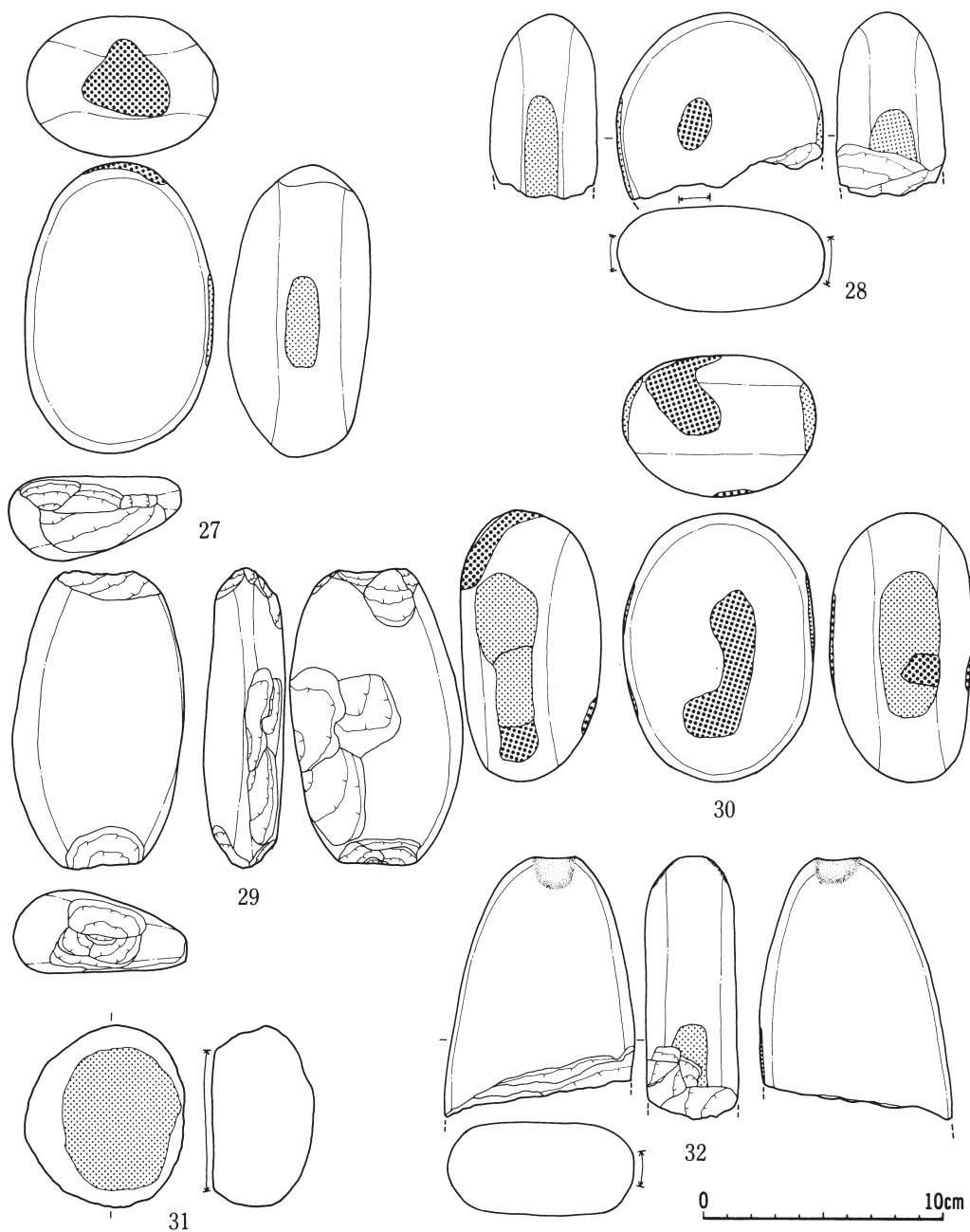
第243図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(3)



富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第244図-20	M-60	VII a	99	67	33	277	安	I	279	スリ1面
" -21	J-52	V	54	51	44	156	チャ	"	271	タタキ1面
" -22	J-62	VII a	101	85	58	713	安	"	275	"
" -23	K-62	I	86	59	52	372	"	"	268	"
" -24	L-58	VII a	70	52	34	179	"	"	276	タタキ3面以上
" -25	J-57	I	145	60	69	558	"	"	272	"
" -26	M-60	VII a	109	68	25	229	"	"	277	クボミ2面

第244図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(4)



富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(5)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
第245図-27	M-60	VII a	121	78	57	776	安	I	278	スリ1面、タタキ1面
〃 -28	G-63	I	(70)	86	43	(389)	〃	〃	266	スリ2面、タタキ1面、 欠損
〃 -29	J-61	〃	125	70	32	408	〃	H	274	
〃 -30	M-60	VII a	111	78	57	812	〃	I	280	スリ1面、 タタキ3面以上
〃 -31	J-61	I	150	133	89	2,600	〃	L	288	
〃 -32	N-57	VII a	(101)	77	37	(530)	〃	J	281	欠損

第245図 富ノ沢(2)遺跡B地区遺構外出土石器(5)

第 章 調査の成果

1. 検出遺構

本遺跡から検出されたピット群、屋外炉については、小結 に記載している。

(1) 竪穴住居跡

今回の調査で竪穴住居跡は7軒検出した。第1～4・8号住居跡は、富ノ沢2遺跡A地区西側の台地平坦面に位置し、また、第6・7号住居跡は、富ノ沢2遺跡B地区北側の台地平坦面に位置している。住居跡の構築時期は、縄文時代中期の円筒上層d式期、中の平・最花式期、中期末葉～後期初頭に該当する。

以下、住居跡の平面形・規模、柱穴の配置、炉の形態と位置、付属施設について若干述べ、まとめとしたい。

平面形・規模

平面形の明確な住居跡が2軒、他の5軒は調査区域外のため一部未調査か攪乱を受けたため平面形の不明確なものである。

完掘の2軒(第1・8号住居跡)は、いずれも隅丸方形の平面形であるが、規模は第1号住居跡の方が比較的大きい。構築時期はいずれも縄文時代中期(円筒上層d式期)であるが、県内の当該期の住居跡は、三内澤部、近野、山崎、大湊近川等の各遺跡で検出されており、その平面形は隅丸方形が多く、規模は長径3～5m、短径は3～4mに集中している。本遺跡検出の2例は、平面形・規模ともに各遺跡の検出例と大差ない。

柱穴の配置

検出された竪穴住居跡の柱穴の配置は次のとおりである。

4本主柱の配置……1軒(第1号竪穴住居跡)

柱穴のないもの……2軒(第3・8号竪穴住居跡)

配置不明なもの……4軒(第2・4・6・7号竪穴住居跡)ただし第7号竪穴住居跡は壁寄りの配置が予想される。

柱穴の配置が明確なものは第1号竪穴住居跡だけである。県内の当該期の例をみると、山崎遺跡2号竪穴住居跡が4本主柱の配置で本例と共通しているが、平面形が円形で付属施設をもたない点において本例と相違する。

なお、第8号竪穴住居跡では柱穴が検出されなかったが、住居跡外の柱穴配置が考えられよう。

炉の形態

炉の形態は次のように分類される。

第1表 竪穴式住居跡一覧表

住居跡 番号	検出 地区	平面形	規模()は推定			炉の形態と 位置	柱穴の配置	附 属 施 設	構築時期	備 考
			長径(m)	短径(m)	床面積(m ²)					
1号	(2)A	隅丸方形	4.92	4.14	15.04	地床炉(2基) 中央より北側	4本主柱 穴の配置	周堤のあるビット 壁溝あり	円筒上層d式	完 掘
2号	〃	楕円形 (推 定)	4.70	不明	8.71 残存部分	石囲炉・地床炉 西側に位置	配置不明	検出できなかった	中の平Ⅲ・最花式	北・西側が調査 区域外
3号	〃	〃	不明	3.14	7.07 残存部分	地床炉 北側に位置	柱穴なし	北側にビット3個	円筒上層d式	南側が調査区域外
4号	〃	楕円形	不明	5.16	6.81 残存部分	竪穴炉 南壁寄り	配置不明	南・西壁寄りにテラ ス状遺構	〃	北側が調査区域外
6号	(2)B	円形(推定)	(3.80)	(3.43)	8.95 残存部分	地床炉 南側に位置	配置不明	不整形のビット2個	縄文中期末葉～ 後期初頭	北・西側が調査 区域外、焼失家 屋(?)
7号	〃	不整形円形 (推 定)	(5.50)	(4.70)	(19.41)	土器片囲炉 中央より北側	壁寄りに 配置?	検出できなかった	〃	攪 乱
8号	(2)A	隅丸方形	3.60	2.62	6.15	地床炉 中央部	柱穴なし	周堤のある浅いビット1個 不整形のビット2個	円筒上層d式	完掘、焼失家屋

地床炉..... 5基(第1・2・3・6・8号竪穴住居跡)

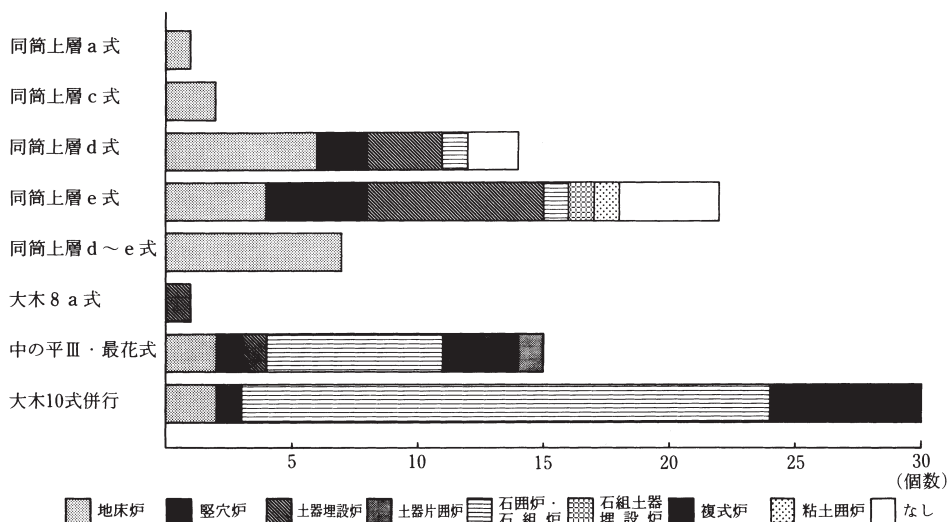
竪穴炉..... 1基(第4号竪穴住居跡)

土器片囲炉..... 1基(第7号竪穴住居跡)

石囲炉..... 1基(第2号竪穴住居跡)

以上のように、地床炉が圧倒的に多い。

県内における縄文時代中期の竪穴住居跡の炉の変遷(第246図)を概観すると、円筒上層a～d式期までは地床炉が主体的で、それ以後は若干の増減があるものの継続するようである。円筒上層a～e式期には、この他竪穴炉、土器埋設炉など多種多様である。中の平Ⅲ・最花式



(注) 石囲炉と石組炉を本報告書では便宜上一括して扱った。

第246図 縄文時代中期の竪穴住居跡炉変遷図

期には石囲炉が多くなり、この傾向は縄文時代中期末葉から後期初頭にも同様である。

本遺跡で検出された炉の形態とその時期は、ほぼ前述の炉の変遷と一致する。

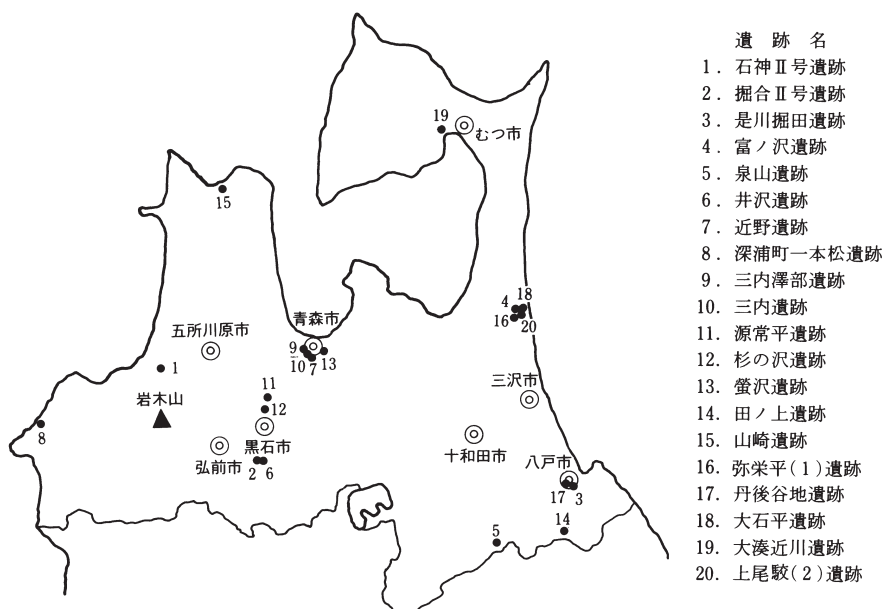
第4号竪穴住居跡の竪穴炉は、山崎遺跡第2号竪穴住居跡に類例があり、両者の平面形・断面形・規模は類似する。また、第7号竪穴住居跡の土器片囲炉は、三内澤部第5号竪穴住居跡に類例があり、両者は炉の作り方では類似するが、形態は相違する。

付属施設

第4号竪穴住居跡からテラス状遺構が検出された。県内の類例をみると、山崎遺跡の第2号竪穴住居跡に代表される円筒上層d式期や弥栄平遺跡第4号竪穴住居跡などに代表される大木10式併行期などに良好な資料が得られる。

さらに、第1・8号竪穴住居跡には、その長軸方向の壁寄りに盛土のあるピットが検出された。ピットの深さは、第1号が1m50cmと深く、第8号が10cmと浅い。このようなピットは、上尾駮2遺跡A地区の第4号竪穴住居跡（円筒上層d式期）から検出されているが、ピットの深さは50cmと深い。しかし、ピットの周辺に馬蹄状に盛土している点は極めて類似している。この施設の用途は不明であるが、今後の調査で類例が増加すると思われ、その用途が解明されることを期待したい。

(奈良晶毅)



第247図 県内の縄文時代中期竪穴住居跡の主な検出地域

第2表 青森県における縄文時代中期の竪穴住居跡

遺跡名	平面形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位置	付属施設等	周溝の 有無	時期	備考
石神Ⅱ号遺跡 2号住	隅丸方形 (2.8×1.92)	柱穴2個	なし	中央部に埋甕		円上d式	
掘合Ⅱ号遺跡	円形に近い楕円形 (2.5×2)		地床炉 中央部			円上c式?	
是川堀田遺跡 2号住	円形 (4.34×4.35)		石囲炉(U字形) 壁寄り	南壁に土壇		大木9式併行	
富ノ沢(2)遺跡 1号住	卵形 (5.4×4.4、約22㎡)	7本主柱穴 配置?	石囲炉 中央より北側			中ノ平Ⅲ式	県埋文9集
〃 3号住	円形(推定) (4.5×4.5、20㎡以上)	配置不明	石囲炉 中央より南西側			円上c～ 最花式	住居跡と重複 県埋文24集
〃 5号住	不明	配置不明	石囲炉 位置不明		有	大木系?	住居跡と重複、未 完掘、県埋文24集
泉山遺跡 1号住	円形(推定) (半径2m前後)		石囲炉(円形) 位置不明	西壁に埋甕 (円上e)		円上e式	未完掘
〃 3号住	長方形(推定) (5.0×3.4)		石組土器埋設 炉、中央部			〃	住居跡と重複 未完掘
〃 4号住	楕円形 (長軸4.4m)		土器埋設炉 中央部	中央部床面下 に土壇1基		大木8a式	未完掘
井沢遺跡 1号住	不明		石囲炉(方形) 位置不明			大木10式併行	住居跡と重複
〃 2号住	円形(推定) (10㎡)	配置不明	石囲炉(方形) 北壁寄り		一部分	〃	一部攪乱
〃 3号住	楕円形 (5.3×3.75、14㎡)	壁寄りの配置	石囲炉(方形) 北東壁寄り			〃	
近野遺跡(4次) 131号住	不整円形(推定) (3.0×2.9)	不明	土器埋設炉 中央より東南側			円上d式	住居跡と重複
深浦町一本松 遺跡	不整楕円形か 不整円形		石囲炉(円形) 壁寄り?			大木10式併 行?	未完掘
三内澤部遺跡 37号住	楕円形 (4.1×3.35、8.3㎡)	住居外に7 個の柱穴	地床炉(円形) 中央部			円上c式	
〃 1号住	楕円形 (4.12×2.82、8.0㎡)	配置不明	地床炉(円形) 中央部	張り出し部分 にビット3個		円上d式	竪穴遺構と重複
〃 27号住	不明	ビット4個、 柱穴か不明	地床炉(楕円形) 位置不明		北側に 一部	〃	一部攪乱
〃 2号住	不整円形 (3.3×3.1、7.0㎡)	壁寄りの配置	土器埋設炉 中央部	住居内Dビット周 辺に小ビット群	一巡	円上e式 (1段階)	小竪穴遺構と 重複

遺 跡 名	平 面 形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位 置	付属施設等	周溝の 有 無	時 期	備 考
三内澤部遺跡 3号住	不 整 円 形 (2.7×2.29、4.9㎡)	住居外4本 主柱穴配置	複体土器埋設炉 中 央 部	西壁直下に楕 円形のくぼみ		円上e式 (1段階)	
〃 6号住	不 整 円 形 (4.7×4.0、2.7㎡)	柱穴なし	土器埋設炉 中 央 部	南西部にピット テラス状遺構		〃	小竪穴遺構と 重複
〃 17号住	円 形(推定) (10.2㎡)	4本主柱穴 の配置	竪穴炉(楕円形) 中 央 部	南壁寄りに埋設土器 北東壁にピット2個		〃	一 部 攪 乱
〃 19号住	円 形 (2.84×2.76、5.2㎡)	配置不明 外部柱穴?	粘土囲炉(方形)	北壁直下にU 字状の高まり をもつ施設	北側を除 き一巡	〃	
〃 20号住	隅 丸 方 形 (4.48×4.27、16.4㎡)	五角形の配置	地床炉(推定) 中 央 部	〃		〃	小竪穴遺構と 重複
〃 31号住	不整楕円形(推定) (2.5×2.1)	配置不明	な し		北東～東 に巡る	〃	住居跡と重複
〃 33号住	不整形方形(推定) (3.0×3.1)	配置不明	土器埋設炉 中 央 部	炉の東側に浅 いピット1個		〃	小竪穴遺構と 重複
〃 4号住	隅 丸 方 形 (3.42×2.66、4.1㎡)	4本主柱穴 の配置	地 床 炉 ? 中 央 部	張り出し部分に 皿状のピット、 テラス状遺構		円上e式 (2段階)	
〃 7号住	隅 丸 方 形 (3.91×3.6、11.0㎡)	配置不明 住居外に6個	竪穴炉→土器埋 設炉、中央部	南壁に卵形のピ ット、東西両側 に小ピット2個		〃	
〃 8号住	不 整 円 形 (3.6×3.0、8.3㎡)	配置不明	竪 穴 炉 中 央 部	南西壁に不整 円形のピット		〃	
〃 16号住	楕 円 形 (5.6×3.65、14.9㎡)	4本主柱穴 の配置	地床炉(楕円形) 中央より南側	南壁に張り出 し部、その中 にピット4個		〃	一 部 攪 乱
〃 24号住	円 形 (3.3×3.15、7.4㎡)	周溝に沿っ て配置	土器埋設炉 中 央 部		全 周	〃	小竪穴遺構と 重複
〃 32号住	隅丸方形(推定) (3.8×3.0、10.2㎡)	確認できず	地 床 炉 位 置 不 明	北壁に粘土の盛土、 張り出し部分		〃	住居跡と重複
〃 35号住	不 整 楕 円 形 (3.75×3.0、7.2㎡)	ピット4個、 柱穴か不明	な し	北側に張り出し部、 テラス状遺構	北東～南 東に巡る	〃	
〃 36号住	不整楕円形(推定) (3.4×2.24、5.6㎡)	ピット2個、 柱穴か不明	な し	中央部と北壁 にピット2個		〃	住居跡と重複
〃 38号住	楕 円 形 (3.1×3.7、7.5㎡)	配置不明	な し			〃	竪穴遺構と重 複
〃 5号住	不 整 楕 円 形 (3.9×3.2、9.1㎡)	壁寄りの配置	土器片囲い炉 (コの字状) 中央部	東・北西壁に ピット2個		大木9式併行	
〃 9号住	隅 丸 方 形 (5.6×5.3、23.0㎡)	6本主柱穴 の配置	沢部型複式炉 東 壁 寄 り	テラス状遺構		中ノ平Ⅲ式	溝 と 重 複

遺跡名	平面形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位置	付属施設等	周溝の 有無	時期	備考
三内澤部遺跡 10号住	不明	不明	沢部型複式炉 中央より東側			中ノ平Ⅲ式	一部攪乱
” 21号住	楕円形 (3.2×2.65、6.5㎡)	壁寄りの配置	土器片畑炉(方形) 中央より南側	外縁部に盛りあがり のあるピット	有	大木系	住居跡と重複
” 22号住	楕円形(推定) (1.2・5㎡)	”	地床炉 中央より西側	炉の東端にピ ット1個		中ノ平Ⅲ式	一部攪乱
” 23号住	円形 (4.1×3.95、12.0㎡)	I期、II期 ともに壁寄 りの配置	地床炉(長円形) 中央部	東壁に張り出 し部	二本では ほぼ全周	”	増改築あり
” 28号住	不明	7本支柱穴 の配置?	沢部型複式炉 南壁寄り			中ノ平Ⅲ式?	一部攪乱
” 29号住	”	対称的に7個	”	テラス状遺構		?	未完掘
” 34号住	不整楕円形 (4.5×3.4、13.2㎡)	ピット7個、 柱穴か不明	石畑炉(方形) 中央より西側	中央と西壁に ピット4個		中ノ平Ⅲ式	
三内遺跡 J—1号	不整楕円形 (4.64×4.44、16.2㎡)	配置不明	なし	床面が2段		中期末葉～ 後期初頭	未完掘
” J—2号	不整円形 (4.83×4.65、17.7㎡)	6本支柱穴 の配置	石組土器埋設炉 中央より北側	北西側にテラ ス状遺構	ほぼ全周	”	住居跡と重複
” J—5号	不整胴張方形 (6.4×5.27、24.0㎡)	4本支柱穴 の配置?	地床炉(楕円形) 南壁寄り			”	”
” J—8号	楕円形(推定) (5.53×4.18、7.8㎡)	配置不明	地床炉 北東寄り	床面が2段		”	”
” J—14号	隅丸長方形か楕円形 (6.62×5.52)	東西対称の 配置	不明	西側に埋甕	有	”	住居跡と重複 未完掘
源常平遺跡 52号住	円形(推定) (径約3.8m)	配置不明	土器埋設炉 中央部		一部残存	中期後半～ 末葉	堅穴遺構と重複
近野遺跡(5次) 8号住	小判形 (19.5×7.0、119㎡)(推定)	柱穴14個	地床炉・小堅 穴炉・土器埋 設炉(5基)	東壁寄りに埋 設土器		円上d式	住居跡と重複 大型住居
” 12号住	隅丸方形 (3.85×3.25、8.28㎡)	配置不明	土器埋設炉 中央部	北側に張り出 し部分とピッ ト1個	一部残存	”	小堅穴遺構と 重複
” 7号住	隅丸方形(推定) (3.7×3.7、10.19㎡)	”	地床炉 中央部	南側にピット 1個	一部を除 いて一巡	円上d～e式	”
” 13号住	隅丸長方形(推定) (3.5×3.0)	”	地床炉? 中央部	北側にピット	一部残存	”	住居跡と重複
” 16号住	不整円形(推定) (3.2×3.2、8.55㎡)	柱穴か不明	地床炉 中央部			”	”

遺跡名	平面形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位置	付属施設等	周溝の 有無	時期	備考
近野遺跡(5次) 10号住	不整形円形 (2.9×2.6、5.49㎡)	4本主柱穴 の配置?	土器埋設炉 中央部	馬蹄形の盛土 とピット		円上e式	住居跡と重複
” 3号住	隅丸方形 (I期)4.1×3.3 (II期)5.5×3.3	壁寄りの配置	小竪穴炉(楕円形) 中央より南側	盛土のある鉢 状のピット、 テラス状遺構	一部残存	”	小竪穴遺構 と重複
” 4号住	不整形楕円形 (4.4×3.2)	壁寄りの配置	石囲炉(方形) 北壁寄り	北壁直下に浅 いピット	”	中ノ平Ⅲ式	住居跡と重複
” 9A住	楕円形 (4.1×3.4、9.66㎡)(推定)	柱穴か不明	石囲炉 ほぼ中央部	北壁寄りにピ ット	ほぼ一周	”	”
” 9B住	不整形円形 (径2.6m、4.56㎡)	柱穴なし	なし			円上e～中 ノ平Ⅲ式	”
杉の沢遺跡 1号住	楕円形 (3.8×2.7、7.65㎡)	配置不明	石囲炉(方形) 中央より北西寄り	炉の隣りに浅 いピット		中ノ平Ⅲ式	土壌と重複 炉底面に土器片
蜚沢遺跡 1号住	円形 (4.2×3.9、13㎡)	4本主柱穴 の配置	地床炉 中央部	壁寄りに周堤 をもつピット	一部残存	円上d～e式	住居跡と重複、炉 の縁に粘土貼付
” 2号住	円形(推定) (2.2×2.0、6.3㎡)	不明	不明	壁直下にピット		”	住居跡と重複
” 3号住	楕円形 (4.5×3.6、13㎡)	不明	地床炉? 中央部	張り出し部分	有	”	住居跡と重複、炉 の縁に粘土貼付
” 4号住	不整形楕円形 (4.5×3.9、13㎡)	配置不明	不明			”	住居跡と重複
” 5号住	楕円形 (4.0×3.2、11㎡)	住居外に配置	地床炉 中央部		ほぼ一周	”	土壌と重複、炉 の縁に粘土貼付
” 6号住	円形に近い楕円形 (9.0×8.0、27㎡)	不明	不明		1m程 の周溝	”	住居跡と重複
” 7号住	楕円形 (4.7×3.5、16.45㎡)	4本主柱穴 の配置?	地床炉 中央部	周堤をもつ皿 形のピット		”	炉の縁に粘土 貼付
田ノ上遺跡 1号住	円形 (3.7×3.6、6.4㎡)	5本主柱穴 の配置	石囲炉 中央より東側			中期末葉～ 後期初頭	
” 2号住	楕円形 (5.6×4.82、19.3㎡)	主柱穴は5 本配置と6 本配置	石囲炉(方形) 東壁寄り		壁直下 を一周	”	土壌と重複
” 3号住	不明	不明	地床炉?			”	土壌と重複 壁一部残存
” 4号住	隅丸方形 (3.36×3.32、6.6㎡)	4本主柱穴 配置	なし			”	
山崎遺跡 1号住	不整形隅丸方形 (4.64×3.87、12.064㎡)	柱穴なし	石囲炉(正方形) 中央より南側	東・西壁にテ ラス状遺構		円上d式	

遺 跡 名	平 面 形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位 置	付属施設等	周溝の 有 無	時 期	備 考
山 崎 遺 跡 2号住	円 形 (7.16×7.1、28.612㎡)	4本主柱穴 の配置	地床炉、竪穴 炉、中央部	開口部をもつ テラス状遺構		円上d式	
” 8号住	円 形 (3.47×2.96、6.976㎡)	不 明	竪 穴 炉 中央より北側			中ノ平Ⅲ式	
” 3号住	円形(推定)	配置不明	地 床 炉 ?			中期後葉～ 後期初頭	攪乱のため一 部残存
” 5号住	楕 円 形 (4.25×3.35、10.272㎡)	柱 穴 な し	石囲炉(円形) 中央より南側			”	住居跡と重複
” 6号住	楕 円 形 (3.65×2.72、7.2㎡)	”	地床炉(不整形) 中央より東側			”	”
” 7号住	不 整 円 形 (3.73×3.1、7.42㎡)	配置不明	石囲炉(隅丸方形) 中 央 部	北・西壁にテ ラス状遺構		”	
” 9号住	円 形 (3.35×2.9、6.016㎡)	4本主柱穴 配置?	石 囲 炉 中央より東側			”	一 部 攪 乱
” 10号住	隅 丸 方 形 (5.15×4.0、15.012㎡)	配置不明	不 明			”	住居跡と重複
” 11号住	円 形 (3.64×3.43、8.096㎡)	”	石囲炉(円形) 中 央 部	南壁寄りに埋 設土器		”	土 壌 と 重 複
弥采平(2)遺跡 1号住	円 形 (3.2×2.8、7.3㎡)	壁寄りの配置	地 床 炉 中央より南側			中期末葉～ 後期初頭	
丹後谷地(1)(2)遺跡 1号住	不整形(推定) (4.6×4.75)	壁寄りの配置	石 組 炉 ? 中央より南東側			中期末葉～ 後期初頭	土 壌 と 重 複
” 2号住	円 形 (直 径 4.5 m)	柱 穴 な し	石組炉(不整形) 中央より東側	東側に張り出 し部分		”	
” 3号住	楕円形(推定) (5.5×5.0)	壁寄りの配置	石 組 炉 中央より東側			”	
” 4号住	不 明	配置不明	地 床 炉 ? 南 壁 寄 り			”	住居跡南側は 不明
” 5号住	円 形 (4.5×4.25)	”	地 床 炉 南 壁 寄 り			”	
” 6号住	円 形(推定) (5.45×5.5)	壁寄りの配置	石 組 炉 中央より西側			”	住居跡南側は 不明
” 7号住	円 形(推定) (直 径 4.35)	な し	石組炉(不整形) 中央より東側			”	”
大石平遺跡 9号住	不 整 円 形 (4.2×3.9、11.0㎡)	配置不明	石囲炉(円形) 中央より北側			大木10式併行	

遺跡名	平面形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位置	付属施設等	周溝の 有無	時期	備考
大石平遺跡 10号住	不整楕円形 (5.4×4.8、17.1㎡)	4本主柱穴 配置	石囲炉(円形) 中央部			大木10式併行	土壌と重複
弥栄平(1)遺跡 1号住	円形 (直径4.8m)	配置不明	石囲炉? 壁寄り			大木10式併行 (I群)	住居跡と重複
“ 4号住	円形に近い楕円形 (5.5×5.0、21.8㎡)	7本主柱穴 の配置	石囲炉(2基) 中央部	テラス状遺構 浅い掘り込み	全周	“	
“ 6号住	楕円形 (5.1×4.5、20.5㎡)	6本主柱穴 の配置	石囲炉(2基) 中央より南側	テラス状遺 構?		“	住居跡と重複
“ 7号住	楕円形? (5.5×5、12.3㎡)	配置不明	石囲炉(コ字状) 中央より南側			“	“
“ 8号住	楕円形 (3.0×2.7、6.8㎡)	4本主柱穴 の配置	複式炉 南壁寄り			“	
“ 12号住	円形 (直径4.4m、15.9㎡)	6本主柱穴 の配置	“		壁直下 を一周	“	
“ 13A住	楕円形 (4.3×3.8)	壁寄りの配 置?	複式炉 壁寄り			“	住居跡と重複
“ 14号住	円形 (直径4.2m、15.2㎡)	7本主柱穴 の配置	竪穴炉(円形) 壁寄り	テラス状遺構		“	“
“ 16号住	不整楕円形 (3.9×3.5、11.5㎡)	6本主柱穴 の配置?	石囲複式炉? 南壁寄り		ほぼ一周	“	“
“ 22号住	楕円形? (3.6×3.1、7.7㎡)	壁寄りの配置	石囲複式炉 壁寄り			“	“
大石平遺跡Ⅶ区 2号住	不明 (残存部7.9㎡)	配置不明	石囲炉(推定) 位置不明			大木10式併行	
“ 5号住	楕円形 (3.75×3.5、7.8㎡)	“	地床炉 中央より南西側			“	土壌と重複
“ 14号住	不整楕円形(推定) (4.3×3.6)	“	石囲炉 中央より南側	南壁に掘り込 み(2基)		“	“
丹後谷地遺跡 35号住	楕円形 (5.1×4.5、14.2㎡)	五角形の配置	土器埋設炉、 石組炉			最花式	“
“ 30号住	円形 (直径3.7m、9.0㎡)	4本主柱穴 の配置	複式炉			大木10式併行	“
“ 42号住	楕円形 (6.2×5.6、22.5㎡)	五角形の配置	石組炉(方形) 中央から東側			“	
“ 33号住	円形 (4.8×4.8、16.3㎡)	4本主柱穴 の配置	石組炉(コ字状) 中央より南側			大木10式併行 ~後期初頭	

遺 跡 名	平 面 形 (長・短径m、面積㎡)	柱穴の配置	炉の形態と 位 置	付属施設等	周溝の 有 無	時 期	備 考
丹後谷地遺跡 38号住	不整楕円形 (6.0×4.9、21.0㎡)	4本主柱穴 の配置	石組炉(円形) 中央より南東側			大木10式併行 ～後期初頭	
” 40号住	円 形 (直径4.1m、10.9㎡)	”	石組炉(方形) 中央より南側			”	
” 41号住	不整円形(推定) (直径4m)	”	石 組 炉 中央より南東側			”	南 半 削 平
” 47号住	楕 円 形 (5.1×4.4、16.1㎡)	”	石組炉(円形) 中 央 部			”	
大石平遺跡X-1区 1号住	楕 円 形 (5.72×4.74、51.43㎡)	壁より1m内 に環状の配置	石田炉(円形) 南 壁 寄 り	ピット2個(炉 の北側と壁寄り)		大木10式併行	
” 11号住	不整楕円形 (3.9×3.1、23.33㎡)	壁寄りの配 置?	石組炉(コ字状) 中央から南側	不整楕円形の ピット1個		大木10式併行 後期初頭?	一 部 攪 乱
” 14号住	不 整 円 形 (5.3×4.9、40.87㎡)	壁寄りの配置	石組炉(円形) 中央より南側			”	
大湊近川遺跡 106号住	不整楕円形 (4.1×2.9、7.59㎡)	な し	地 床 炉 中 央 部			円上d式	
” 201号住	円 形(推定) (直径2.7m以上)	壁寄りの配置	地 床 炉 ? 中央より南側			中期後半～ 後期前半	南 半 削 平
上尾敷(2)遺跡A地区 5号住	円 形 (4.74×4.46、15.28㎡)	壁寄りの配置	地 床 炉 中 央 部	南壁寄りに楕 円形の土壇		円上a式	
” 12号住	不整楕円形 (3.10×2.44、4.72㎡)	壁寄りの配置	な し			円上d式	
” 4号住	楕円形に近い長方形 (7.5×4.9、28.14㎡)	4本主柱穴 の配置	地 床 炉 中央より北側	北壁直下に周堤 をもつピット		円上層式	
” 15号住	円 形(推定) (4.6×4.4、11.9㎡)	壁寄りに配置	地床炉(楕円形) 位 置 不 明			大木10式併行	壁 な し
上尾敷(2)遺跡B地区 BJ-16住	楕 円 形 (2.9×2.6、3.38㎡)	配置不明	地 床 炉 ? 中 央 部			円上d式?	

(注意) (1) 本表は三内澤部遺跡調査報告書内の一覧表(P367・368)を基に作成したものである。

(2) 平面形・柱穴の配置・時期等不明な点の多い住居跡は削除した。

(2) 土 壤

今回の調査では、富ノ沢1遺跡で18基・富ノ沢2遺跡A地区で27基・富ノ沢2遺跡B地区で40基の計85基を検出した。

この85基のうち、その内部から遺物を出土したものを各地区毎に列記する。

富ノ沢1遺跡

(第72・80号土壌.....計2基)

富ノ沢2遺跡A地区

(第2・7・10・12・13・25・26号土壌.....計7基)

富ノ沢2遺跡B地区

(第35・43・44・45・46・48a・54・59・62・65号土壌.....計10基)

以上のように85基のうち19基から遺物が出土しているが、その多くは土器片が1ないし2片と少く、その出土位置も堆積土上位から出土したものが多く、このため土壌が埋設する際に混入したものと考えられる。明確に時期を決定できる土壌は、円筒上層d式期の第13・62号土壌、榎林式期の第25号土壌、中の平・最花式期の第35号土壌のわずか4基にすぎない。しかし、時期を特定し得ない81基の土壌も恐らくは、その周辺から検出されている縄文時代の竪穴住居跡と近接する時期のものであって、何らかの関係があるものと思われる。

各地区での土壌の配置状況は、富ノ沢1遺跡では台地の南側に土壌群・北側に竪穴住居跡がみられ、富ノ沢2遺跡A地区では台地の東側に土壌群・西側に竪穴住居跡が、また富ノ沢2遺跡B地区では南側の台地先端に土壌群、北側に竪穴住居跡が存在しており、台地上における土壌群と竪穴住居跡では、その占地の場がことなっているようである。大石平遺跡(遠藤・成田他1987)と上尾敷2遺跡C地区(市川他1988)では、このような各遺構の占地状況を明瞭に把握することができた。両遺跡とも縄文時代後期十腰内式期の集落であるが、ほぼ台地の内側に竪穴住居跡を配置し、その外側に土壌を配置している。集落構成において遺構の配置に何らかの制約があったものと推定することが可能である。今回調査した富ノ沢1)・(2)遺跡の立地する諸台地でも同様であろうと考えられるが、幅の狭い限られた線的な調査であるため、この問題については、調査区北側の遺構群を含めて検討していく必要がある。

註1) 昭和63年度の調査で中の平・最花式期の竪穴住居跡を検出している。

註2) 昭和63年度に富ノ沢2遺跡B地区の調査を行い、平成元年度には同遺跡A地区の調査が予定されている。

(3) 焼土状遺構

今回の調査では、富ノ沢1遺跡で3基・富ノ沢2遺跡A地区で1基・富ノ沢2遺跡B地区で4基の計8基を検出した。

これらの遺構からは、その時期を推察し得るような遺物は出土しなかったが、その確認層位及び堆積土から縄文時代の遺構と考えられる。

調査の結果、焼土状遺構には掘り方をもつものともたないものの二形態があり、いずれも火熱面及び壁はごく弱い火熱しか受けておらず、短期間に使用されたものと考えられる。本遺構の用途に関して述べるならば、土壙と同じ地域に分布していることから土壙と何らかの関連があるものと考えられる。断定はできないが、土壙が墓ならば播火に使用したと考えられ、貯蔵穴ならば屋外炉の施設として使用されたものとも考えられる。しかし、今回の調査では土壙の性格について言及し得る材料はなく、今後の調査資料の蓄積を待ちたい。

(成田滋彦)

(4) 埋設土器

富ノ沢2遺跡A地区より埋設土器遺構が2基検出された。そのうち、遺構外から1基(第1号埋設土器)、第1号竪穴住居跡内から1基である。

第1号埋設土器は横倒しの状態で検出され、土器内からは遺物は出土しなかった。使用された土器は深鉢形土器で、第3群3類円筒上層d式に属する。また、住居跡内の埋設土器は正立の状態で埋設され、床面直下に埋め込まれていた。土器内からは遺物は出土しなかった。

三内澤部遺跡(市川他1978)では、遺構外において、縄文時代中期(円筒上層e式期)の土器が正立の状態で埋設されており、土器内からはクルミ状の炭化物が出土している。これからすれば、食料の貯蔵等の用途が考えられようが、本遺跡の第1号埋設土器遺構は前者と埋設状況・土器内の遺物の有無等で相違しており、同一用途であると断定することはできない。

また、遺構内の埋設土器は、同じく三内澤部遺跡の第17号竪穴住居跡に例があり、床面から2~4cm露出し、倒立した状態で埋設されていた。さらに泉山遺跡(市川他1976)の第1号竪穴住居跡(円筒上層e式期)では、底部欠損の土器が倒立の状態で埋設されていた。いずれも本遺跡例と出土状態が相違している。

屋内埋設では、貯蔵説、埋葬説、胎盤収納説(木下1970)等あげられているが、本住居跡埋設土器には遺物等はなく、その性格に論及することは困難である。

(奈良昌毅)

2. 出土遺物

(1) 土器

ア 第 群土器（縄文時代早期）～第 群土器（縄文時代後期）について

今回の調査では、第 群土器 3 類（円筒上層 d 式）を文様構成の差異から a～c 種と三種に細別を行っただけで、その他についてはあえて細別を行わず型式分類にとどめたがそれは、今回の調査区のすぐ北側部分を調査したためである。昭和63年度に別途事業として、つまり富ノ沢 1 遺跡では第 群土器 8 類（中の平・最花式）の良好な資料が出土し、また、富ノ沢 2 遺跡 B 地区では第 群土器 9 類（大木10式併行）～第 群土器 1 類（後期初頭期）の集落の中心部を検出し、さらに平成元年度では、富ノ沢 2 遺跡 A 地区の調査が実施される予定で多量の土器第 群土器 2 類（円筒上層 c 式）～7 類（榎林式）と多くの遺構が検出されるであろう事が、昭和48・49年度の試掘調査の結果から予測されるためである。

したがってここで各類の細別を行って詳細に分析する事は、次回の報告書との間に混乱を生じることとも予測されるため今後の調査資料をも含めて吟味・検討することにしたい。

（成田滋彦）

イ 第 群土器（弥生時代）

本群土器は、弥生時代後期に位置づけられる念仏間式（橋1968、工藤1968）に相当する。出土した土器片は少量で器形を把握できるものは少ない。施文文様の違いから、a 種（主に磨消縄文）、b 種（主に刺突文）、c 種（主に平行沈線と連続山形文）、d 種（縄文のみ）に区別した。

念仏間式に相当する土器は、六ヶ所村大石平遺跡（北林1985）より良好な資料が得られている。本群土器のモチーフはすべて大石平 群土器群に類似する。

大石平 群土器の器形は、深鉢形・鉢形・台付鉢形・壺形に区分され、深鉢形あるいは鉢形土器の口縁部～胴部上半に、本群土器の a～c 種のモチーフが展開されている。

第13号 a 竪穴住居跡出土の深鉢形土器の頸部に連続の刺突文が見られるが、これは器面に対して右横方向からの刺突で、本群土器の c 種の施文技法と類似する。

d 種中における帯状縄文は大石平 群土器に類例が見られ、北海道の恵山 b 式期の土器（峰山1968）、あるいは瀬棚南川 群土器（高橋他1976、羽賀他1983）に見られる。

以上のように、本群土器は大石平 群土器に相当し、また、本遺跡の東側約 1 km に大石平遺跡が位置していることから、両者の密接な関係がうかがえる。

本県の念仏間式期に相当する遺跡は、八戸市新井田遺跡（鈴木1979）、三沢市天狗森遺跡、脇野沢村外崎沢 1 遺跡（葛西1979）など太平洋側に多くみられ、また、六ヶ所村内では、大石

平遺跡を中心に上尾駟 1)・(2 遺跡、弥栄平 4)・(5 遺跡などがあげられる。ちなみに、当該期の住居跡は、大石平遺跡で 6 軒、上尾駟 2 遺跡 C 地区で 2 軒検出されている。今回の調査では住居跡は検出されていないが、今後の調査が期待される。

ウ 有足土器について

富ノ沢 1 遺跡より鬲状の有足土器が出土した。この土器の足部は二足が残存しており、他の足部を欠損しているため、「三足」か「四足」かは不明である。ここでは単に「有足土器」としておく。

出土状況 富ノ沢 1 遺跡の台地平坦面の J 39 グリッドの第 層から 2 点出土し接合した。残存部は足部から胴部にいたる一部であるため、器形の全体を把握できない。足部から胴部にいたるまでは、比較的緩やかに内湾しており、胴部下位に最大径をもつと思われる。足部底面は、外縁より内縁が若干高くなっている。

胎土・整形・焼成 胎土には細礫等は包含されず、緻密である。器面は篋状の工具を用いて研磨され、胴部内面はナデ調整が施されている。足部内面に粘土の接合帯が若干みられることから、足部と胴・底部はそれぞれ個別に製作し、のちに接着したと思われる。足部底面には一部剥落がみられる。焼成は良好であるが、器底面に焼成の際にできた黒班が観察される。

施文文様 胴部の上半部に、二本の浅い平行沈線が施文されている。

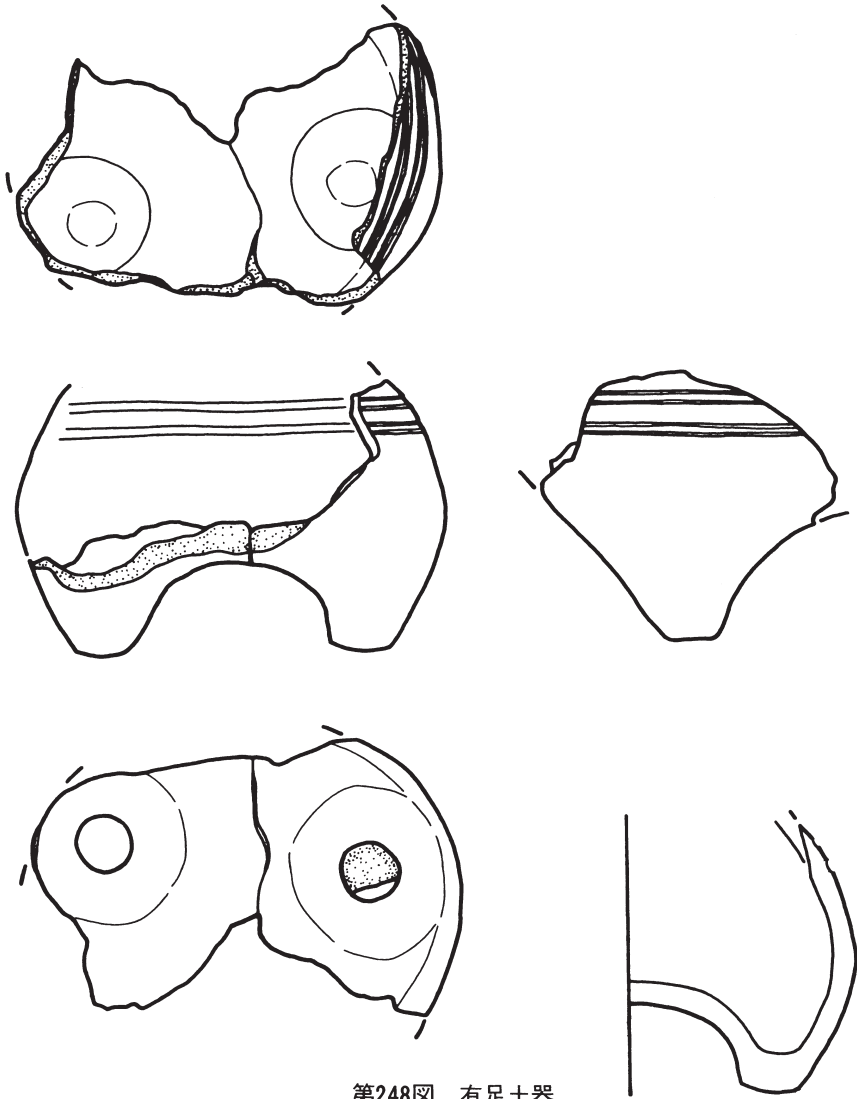
計測値 現存している部分の計測値は、器高 5.7cm、器厚 0.4cm である。足部底面から胴部の接点までの高さは 1.5cm、足部底面の厚さ 0.8cm、底面の厚さ 0.6cm である。

小結 出土した有足土器は、欠損部分が多いため、器形・文様等不明な点が多い。本土器の特徴は、足部が中空・袋状を呈する点である。このような特徴をもつ土器は、平館村今津遺跡(岡田 1986)出土の三足土器に見いだされる。両者を比較すれば、足部と胴・底部との接着方法、足部底面の作り方の点で類似する。しかし器形の面では、本資料の方が胴部の内湾の度合いが大きいようである。

ところで、亀ヶ岡遺跡からは四足土器が出土しているが(市川他 1984)、その足部の形状は棒状であり、本例や今津例のような中空・袋状ではない。

本資料の時期は、胎土・整形・焼成等から考えて縄文時代晩期に該当すると思われるが、判断材料が少ないので断定はできない。

(奈良昌毅)



第248図 有足土器

有足土器 観察表

出土地点	層	部位	法 量(mm)				調 整			胎 土	焼 成	色 調
			器 高	胴部器厚	底部器厚	足部器厚	胴 部	底 部	足 部			
富ノ沢(1) J-39	I層	胴部 足部	57	4	6	8	ミガキ ナ	ミガキ	ミガキ	緻密	良好	にぶい黄褐色 黒褐色

(2) 石 器

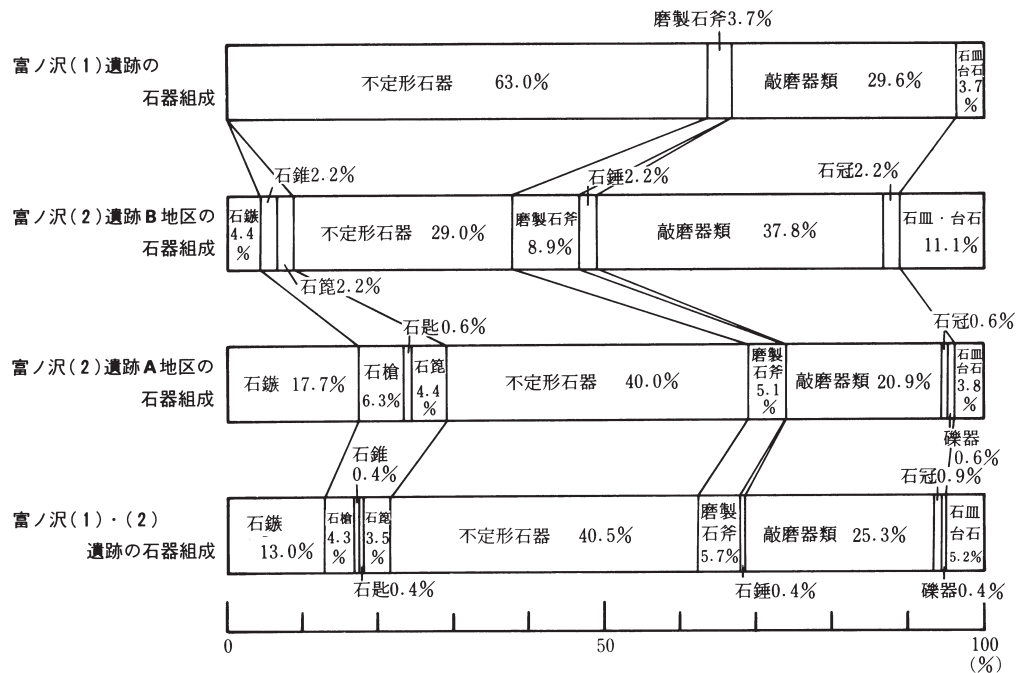
富ノ沢(1)・(2)遺跡で出土した石器は、石鏃、石槍、石錐、石匙、石篋、不定形石器、石斧、石錘、敲磨器類、石冠、礫器、石皿・台石類の13種類で、総計230点の出土である。石器組成の比率を概観すると、全体では不定形石器40.5%、敲磨器類25.3%と出土率が高く出土石器の主体を占めている。石鏃は13.0%ではあるが、他の器種と比較した場合、多い方である。

第3表 富ノ沢(1)・(2)遺跡出土石器一覧表

種類 遺跡	石 鏃	石 槍	石 錐	石 匙	石 篋	不定形 石 器	磨製石斧	石 錘	敲磨器類	石 冠	礫 器	石皿・ 台石類	合 計
富ノ沢(1)	0	0	0	0	0	17	1	0	8	0	0	1	27
富ノ沢(2)B	2	0	1	0	1	13	4	1	17	1	0	5	45
富ノ沢(2)A	28	10	0	1	7	63	8	0	33	1	1	6	158
合計	30	10	1	1	8	93	13	1	58	2	1	12	230

次に地区別であるが、富ノ沢1遺跡では不定形石器、敲磨器類が大部分を占め(92.6%)器種は少ない。富ノ沢2遺跡A・B地区ではやはり不定形石器、敲磨器類は多いものの、器種は多種多様である。

石器に用いられている石材は、剥片石器では珪質頁岩が多く、玉髄質の珪質頁岩、チャート鉄石英は少ない。礫石器では安山岩が多く、他にチャート、閃緑岩、砂岩等がある。石斧は閃緑岩、緑色ホルンフェルス、安山岩、緑色凝灰岩、粘板岩で構成されている。



第249図 石器組成

今回の調査で出土した石器の中では、石鏃が比較的多く出ているので、これについて若干述べまわりたい。

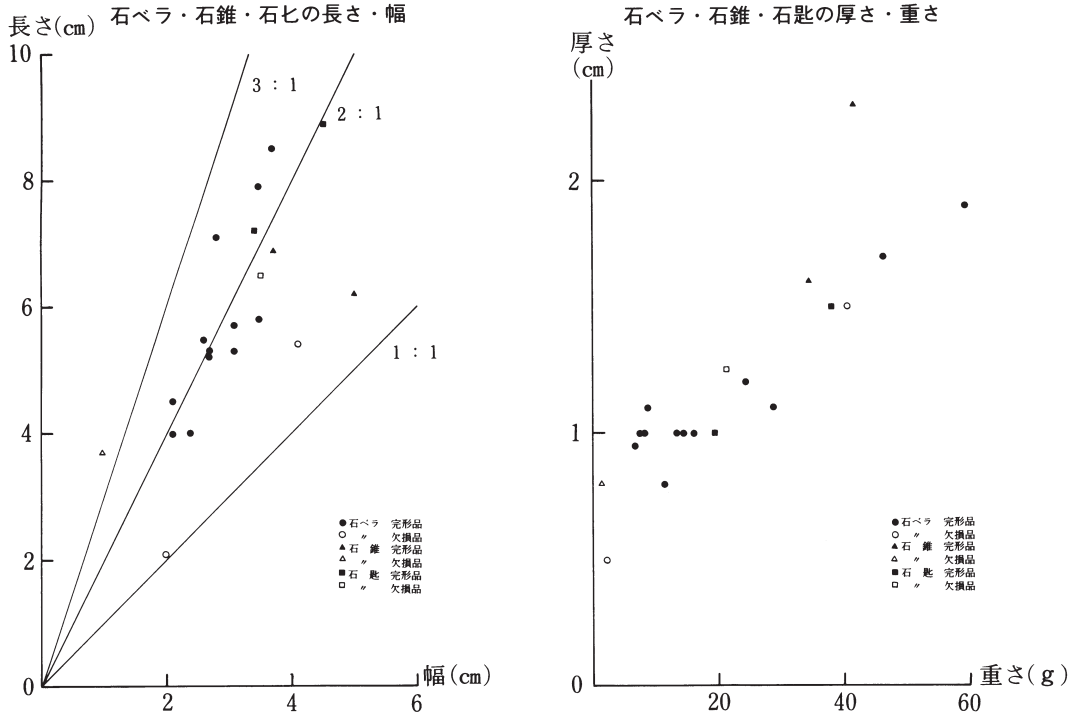
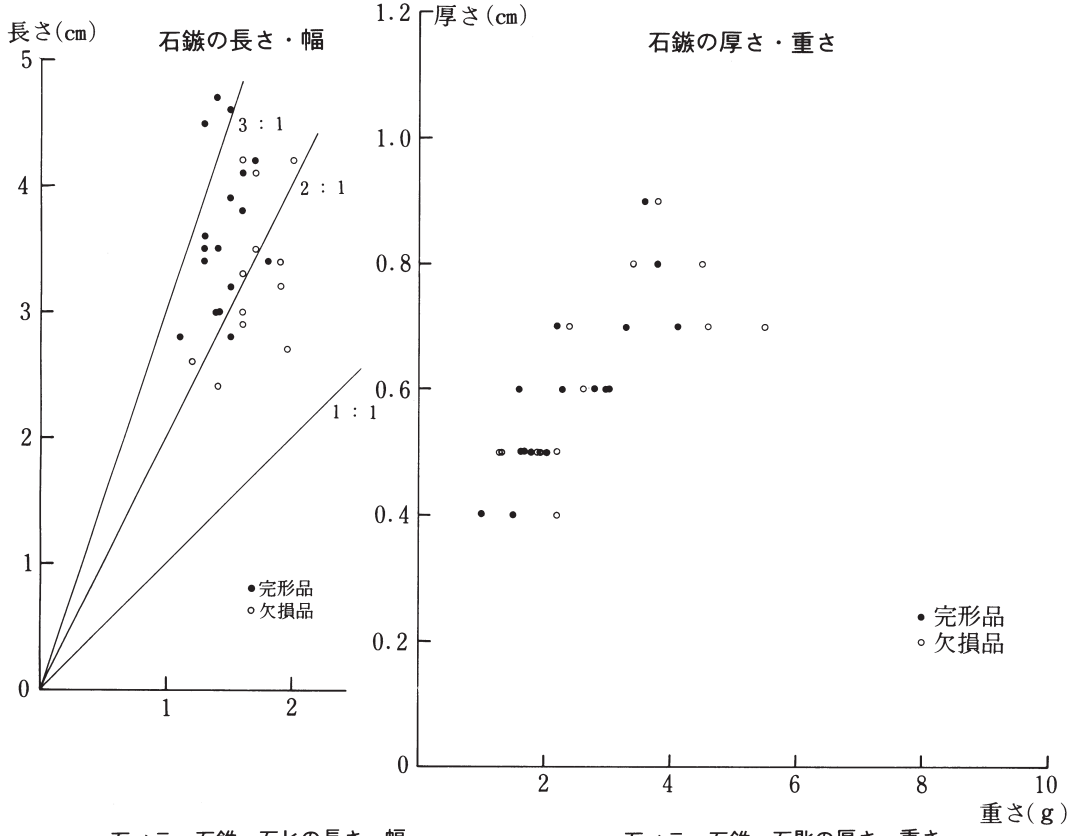
石鏃は、富ノ沢2遺跡A地区から28点、富ノ沢2遺跡B地区から2点出土している。出土地点は、住居跡の床面・床面直上より6点、住居跡内堆積土より2点、土壇内堆積土より3点、遺構外より29点である。このうち、伴出土器との関係から、第1・3・4号住居跡の床面・床面直上からの5点は縄文時代中期(円筒上層d式)に、また、第7号住居跡の床面直上からの1点は、縄文時代中期末葉～後期初頭に該当すると考えられる。

前者5点のうち、1点(第3号住居跡より出土)は、形態が柳葉形を呈しており、また他の4点は有茎鏃で基部の形態は「Y」字形を呈している。さらに、後者の1点は有茎鏃で、その形態が二等辺三角形を基調としており、いくぶん小型である。

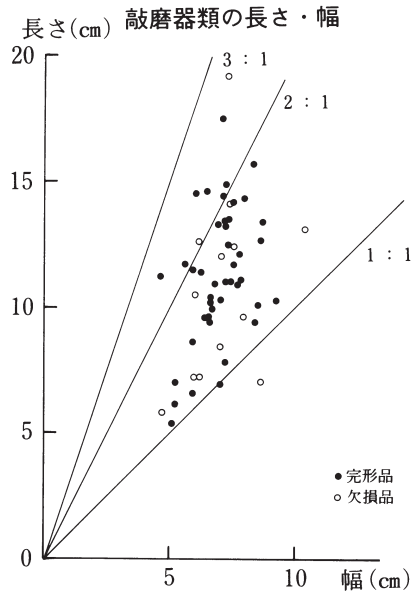
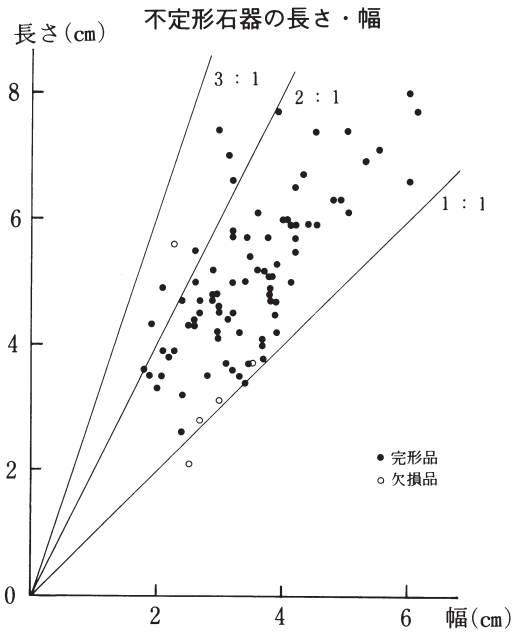
上記6点以外の石鏃は、欠損により基部形態不明のものを除き、すべて有茎鏃か柳葉形を呈するものに属する。

さて、今回の調査で、石鏃の組成がほぼ有茎鏃と柳葉形を呈するものに分類されたが、縄文時代中期の遺構が多く検出された近野遺跡(相馬1979)、山崎遺跡(畠山1982)の石鏃組成と類似している。これは、工藤竹久氏の「(北日本で)縄文中期には、有茎鏃と尖基鏃が石鏃組成の中心をなす」(工藤1977)の傾向と一致しているが、富ノ沢1)・(2)遺跡については再度調査が進められることもあり、ここでは明言をさけない。

(奈良昌毅)



第250図 石器の大きさ・重さ



石鏃の石材傾向	珪 質 頁 岩				玉髓質の珪質頁岩	
石槍の石材傾向	珪 質 頁 岩					
石錐の石材傾向	珪 質 頁 岩					
石匙の石材傾向	珪 質 頁 岩					
石筥の石材傾向	珪 質 頁 岩					
不定形石器の 石材傾向	珪 質 頁 岩				玉髓質の珪質頁岩	チャート
磨製石斧の 石材傾向	閃 緑 岩	緑色ホルン フェルス	安山岩	緑色 凝灰岩	粘板 岩	鉄石
石錘の石材傾向	安 山 岩					
敲磨器類の 石材傾向	安 山 岩			砂岩	閃 緑 岩	緑色凝 礫岩
石冠の石材傾向	安 山 岩					
礫器の石材傾向	安 山 岩					
石皿・台石類 の石材傾向	安 山 岩					

第251図 石器の大きさ・重さと石材傾向

第 章 自然科学的分析

(1) 富ノ沢2遺跡A出土炭化材の樹種

前奈良教育大学教授

嶋 倉 巳三郎

青森県上北郡六ヶ所村にある富ノ沢2遺跡A（縄文時代中期・円筒上層d式）から出土した炭化材の樹種を調査した。

試料は数cm大の木炭で、破断面を作るとき、軟らかく砕け易いものが多かったが、反射顕微鏡による観察で、必要な材組織の特徴は認めることができた。結果は次のようになった。

試料番号	出土地点・遺構	層 位	樹種	備 考	試料番号	出土地点・遺構	層 位	樹種	備 考
1	第8号住居跡	7 層	クリ	砕ける	9	第8号住居跡	床 面	クリ	
2	〃	床直(8層)	〃		10	〃	〃	〃	
3	〃	床直(9層)	〃	砕ける	11	第1号住居跡	〃	〃	
4	〃	〃	〃	〃	12	〃	〃	〃	
5	〃	〃	〃		13	〃	床直(3層)	〃	
6	〃	床 面	〃	砕ける	14	〃	〃	〃	
7	〃	床直(12層)	〃	〃	15	〃	〃	〃	
8	〃	床 面	〃						

炭化材の構造

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ぶな科

早材部道管の甚だ大きな環孔材で、晩材部の道管は急に小さくなり、多数集まって火炎状に並び、コナラに似る。しかし放射組織は単列のものばかりで、大きな複合のものを欠くので区別できる。周囲状仮道管もよく見られる。

小さな試料で複合放射組織の認められなかった場合は、一応クリとしたがコナラも含まれているかも知れない。

(2) 放射性炭素年代測定結果報告

八戸工業大学助教授

村 中 健

1987年12月 8 日に受領致しました試料について、 ^{14}C 年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

測定に使用した装置はAloka社製の低バックグラウンド液体シンチレーションカウンタLSC - LB で、試料を化学処理し、ベンゼンを合成してこれにシンチレータを加え20mlバイアルをつくり、合計1,630分の測定をおこないました。 ^{14}C の標準試料はNBSで作られた蔭配標準体4990Cを処理して得たベンゼンです。

年代の算出には ^{14}C 半減期としてLibbyの半減期5570年を使用し、結果は1950年からの年数をBP年代として表記しています。また、付記した誤差は 線計数値の標準偏差 6 に相当する年代です。Modernと表示してあるのは、試料の計数値と現在の標準炭素についての計数値との差が26以下の場合です。

富ノ沢 2 遺跡 A 地区の第 1 号竪穴住居跡NOC - 1 から発掘された木炭

BP年代 4580 ± 300

富ノ沢 2 遺跡 A 地区の第 8 号竪穴住居跡NOC - 1 から発掘された木炭

試料重量不足のため、前処理後 SrCO_3 が標準必要量の約1/6 (10 g) しか得られず、カーバイト、アセチレンを合成したが、ベンゼンとして回収出来ず、測定に至らなかった。

(3) 六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡A地区第1号竪穴住居跡および埋設土器周囲の土壌中の無機 リン酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成

八戸工業高等専門学校 小山陽造

今回、六ヶ所村富ノ沢(2)A遺跡の縄文中期の頃のものと思われる第1号竪穴住居内ピットに逆の状態で埋設してあった土器の用途を考える手掛かりとして、埋設土器の下部と周辺及び住居跡床下と住居跡外の各個所の土壌中の無機リン酸の含有量と残存脂質の脂肪酸の組成分析を試みた。まず燐モリブデン酸法による分光光度定量法を用い土壌中の無機リン酸の含有量を、また各脂肪酸のメチルエステルによるガスクロマトグラフィー法を用いて土壌中の残存脂質の脂肪酸組成を分析した。

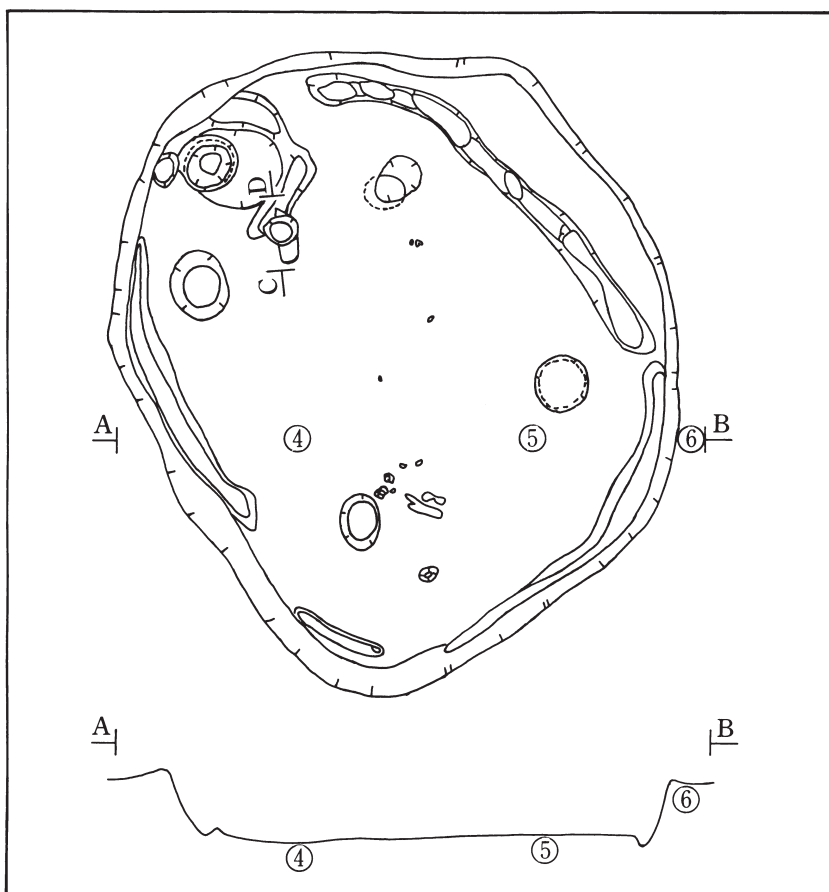
さて燐(P)およびリン酸(H_3PO_4)は、生物体のすべての組織や細胞に不可欠な構成要素で、その生理機構の中で大切な役割を果たしている物質である。とくにリン酸はカルシウム(Ca)やマグネシウム(Mg)と結合し、脊椎動物の骨や歯の主成分として大切な働きを担う物質である。そして土壌に含まれる無機リン酸は、燐灰石を含む各種岩石の風化分解や、動植物遺体の腐朽分解の過程における生物体の有機リン酸成分の無機リン酸への無機化や、動物遺体の骨格の腐朽分解等によって生成し、さらに土壌に含まれるカルシウムイオン、アルミニウムイオン、鉄イオンや粘土等の土壌鉱物と結合して土壌中に保留され、強塩酸酸性溶液で溶解抽出される土壌中の無機成分で、従来から遺跡内の墓域や墓壙の位置や規模の判定に有効な手掛かりとなる物質である。そしてこの土壌に含まれる無機リン酸の含有量は、まず植物の根等の挟雑物を除いた乾燥土壌約1gを精秤し、一定量の6規定塩酸溶液で加熱溶解した無機リン酸をアミドール還元試薬を用いて燐モリブデン酸の還元生成物である可視部波長790nmに極大吸収波長を持った青色溶液に変え、n-ブタノールで抽出し、なお同様の操作を行なった濃度の決まっているリン酸塩溶液の呈色度と比較する燐モリブデン酸法による分光光度定量法で求めた。そして分析値は土壌試料100gに含まれる P_2O_5 のmg数で表わし、分析値の精度は標準偏差と変動係数で表わした。

また土壌中の脂質や脂肪酸は、土壌中の動植物の生体有機物が、土壌中の小動物や微生物の働きや自然酸化等による分解変成作用のため、より炭素数が少なく不飽和度の低い脂肪酸を経て最終的には酢酸、蟻酸、炭酸ガスとして分解消失する過程で、パルミチン酸やステアリソ酸及びオレイン酸のような生物界や自然環境において普通に見られる炭素数の少ない、あるいは不飽和度の低い脂肪酸等に変化し、アロフェン等の土壌中の粘土成分と結合して分解変成の循環や進行から外れ長期間安定に保存され、また土壌腐植物質の脂質成分として土壌中に保留さ

れ、アルコール：ベンゼン混合溶媒やアルコール：クロロホルム混合溶媒で抽出される土壌有機成分である。そして無機燐酸の分析の場合と同じく乾燥土壌試料約30gからメタノール：クロロホルム（1：2）混合溶媒でソックスレイ抽出法によって土壌試料に含まれる脂質成分を抽出し、苛性カリ：メタノール溶液で加熱しケン化反応を行ない分離生成した遊離脂肪酸を5%無水塩酸メタノールで揮発性の脂肪酸メチルエステルに変え精製しクロロホルムに溶かしたものを試料として、島津製GC8A型水素炎検出器付ガスクロマトグラフィー装置に脂肪酸分析用キャピラリーカラムを装着したものに注入して、各脂肪酸の標準試料のガスクロマトグラムと比較して、主にパルミチン酸からネルボン酸までの12種類の脂肪酸を同定し、これら12種類の脂肪酸のピーク面積の和に対する各脂肪酸の面積の比率から各脂肪酸の割合を求めた。このような土壌試料中の残存脂肪酸の組成は表層土の各種動植物の生態系を反映して地域による差はあるものの長い年月の間に数十%のパルミチン酸および十数%のステアリン酸やオレイン酸等からなるような組成を示すようになる。また天然の脂肪酸は、主に生物体の脂質の構成成分として存在することが多く、そしてこれらの脂質はそれぞれ関連する動植物ごとに大体固有の脂肪酸組成をもっているため、例えばある遺跡の土壌の覆土や埋設土器の土壌等に局所的に特別高い濃度の無機燐酸を検出したり、またオレイン酸のような動物性脂肪や、リグノセリン酸やネルボン酸等のような高等ほ乳動物の脳や神経組織等の特殊な器官や組織に関連の深い脂肪酸、またエルカ酸やベヘン酸等のようななたね油等のあぶらな科の植物油等に含まれる脂肪酸を手掛かりに、最近土壌及び土器等の什器類と関わりのあった動植物の種類を推定し、土壌墓等の遺構の実態や当時の生活の実態を一層明確に把握する試みがなされるようになってきた。

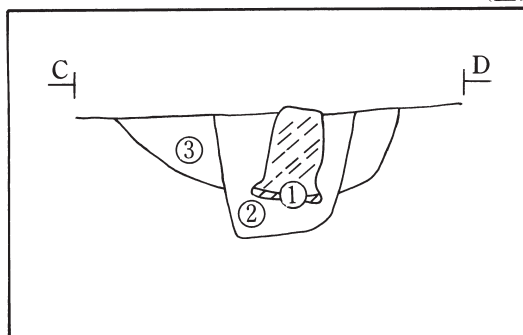
分析結果と考察

六ヶ所村富ノ沢（2）A遺跡第1号竪穴住居跡片隅のピット内に逆さに埋設してあった土器の用途を考える手掛かりとして、図1の土壌試料採取位置図（A）および（B）に示すように、この土器埋設ピット内（土層層序第1層）の土器直下から2試料（土壌試料1、土壌試料2）および土器周囲（土層層序第6層）から1土壌試料（土壌試料3）の3土壌試料と竪穴住居跡床下（土層層序第6層）から2土壌試料（土壌試料4、土壌試料5）及び住居跡外（基本層序第a層）から1土壌試料（土壌試料6）の6土壌試料を採取し残存無機燐酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成の分析を試みた。まず表1及び図2に示すように、埋設土器直下の土壌試料1と土壌試料2の無機燐酸の含有量が171.0mg（ P_2O_5 /100g土壌）と181.5mg（ P_2O_5 /100g土壌）と最も多く、次いで埋設土器周囲の土壌試料3が121.2mg（ P_2O_5 /100g土壌）で多い。しかし埋設土器から離れた住居内床下の土壌試料4と土壌試料5が89.8mg（ P_2O_5 /100g土壌）と87.3mg（ P_2O_5 /100g土壌）とやや少なく、住居外



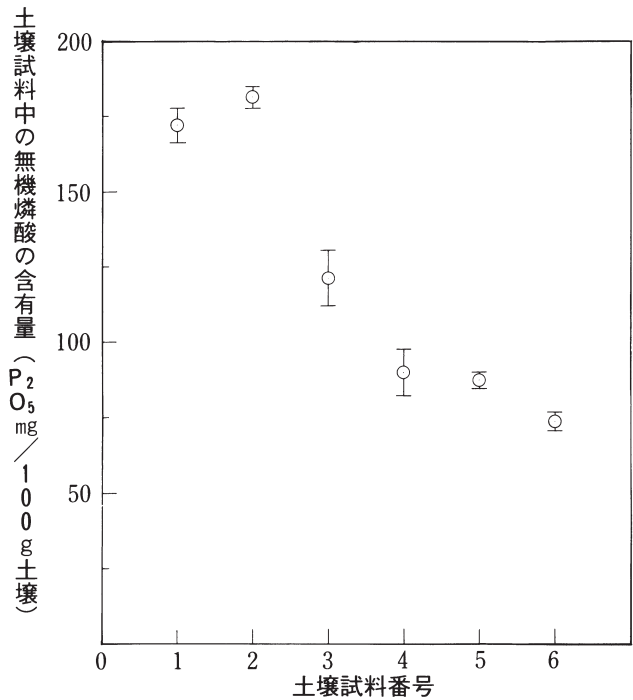
(A) 第1号竖穴住居跡平面図及び断面図
(土壤試料採取位置)

(B) 第1号竖穴住居跡ピット内埋設土器断面図
(土壤試料採取位置)

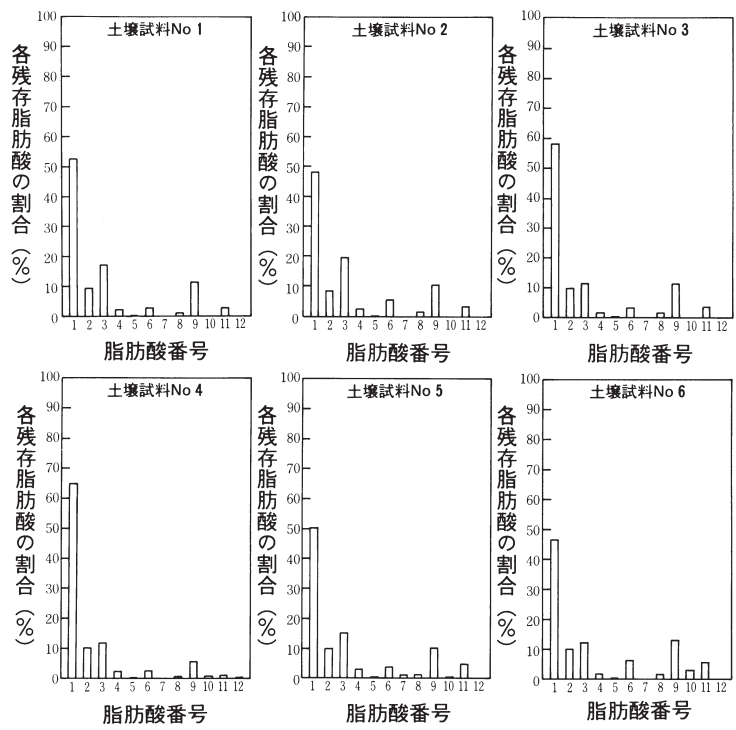


- 1 : 土壤試料No 1
- 2 : 土壤試料No 2
- 3 : 土壤試料No 3
- 4 : 土壤試料No 4
- 5 : 土壤試料No 5
- 6 : 土壤試料No 6

第252図 六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡A地区第1号竖穴住居跡土壤試料採取位置図



第253図 第1号堅穴住居跡土壌中の無機リン酸の濃度分布図



第254図 第1号堅穴住居跡土壌試料の残存脂肪酸組成図

の土壤試料 6 が最も少なく73.5mg (P_2O_5 / 100 g 土壤) である。やはりこの埋設土器は燐酸成分の多い遺体の収納に関わった可能性の大きい土器であると思う。一方各土壤試料の残存脂質の脂肪酸の組成は表 2 および図 3 に示すように、まずパルミチン酸の割合が46.53%から64.81%と最も多く、次にオレイン酸の割合が11.27%から19.57%で、さらにステアリン酸の割合が8.53%から10.38%とベヘン酸の割合が5.53%から13.00%、またエイコセン酸の割合が2.52%から6.24%とリグノセリン酸の割合が1.21%から5.59%、その他に僅かにリノール酸とエイコサジエン酸およびアラキジン酸等を含むが、特に埋設土器直下の土壤試料 1 及び土壤試料 2 ではステアリン酸の割合が9.45%と8.53%に対して、動物性脂肪の主要構成脂肪酸である飽和脂肪酸のパルミチン酸の割合が52.60%と48.14%および不飽和脂肪酸のオレイン酸の割合17.12%と19.57%と多い。さて陸上高等動物の脂肪は、一般に固形か半固形のものが多く、その主な脂肪酸は炭素数が16か18のものに限られ、炭素数16のものは大部分が飽和脂肪酸のパルミチン酸で、その割合は動物の種類に関係なくほぼ一定である。また炭素数18のものは、1個の二重結合を持つ不飽和脂肪酸のオレイン酸が最も多く、次ぎに飽和脂肪酸のステアリン酸や、また2個の二重結合を持つ不飽和脂肪酸のリノール酸等が多く含まれる。さらに植物油脂の場合は、オリーブ油等の果肉や果皮の油脂はパルミチン酸及びオレイン酸と、なお少量のリノール酸を含むが、一方植物種子油は、パルミチン酸、オレイン酸及びリノール酸の外にリノレイン酸を含むものが多い。そしてパルミチン酸やステアリン酸は、生物界及び自然環境において最も普通に見られる飽和脂肪酸で、特にパルミチン酸は、あらゆる生物の体内で合成することの出来る飽和脂肪酸で、またオレイン酸も大抵の生物体に含まれるが、とくに動物性脂肪や植物性油脂に多く含まれる不飽和脂肪酸である。リノール酸はあまに油等の植物乾性油や高等動物の脂肪に多く含まれる不飽和脂肪酸で、またリノレイン酸はあまに油や大豆油等の植物種子油に多く含まれる不飽和脂肪酸である。ベヘン酸はアブラナ科の種子油の他に、硬化なたね油や硬化魚油等に多く含まれる飽和脂肪酸である。さらにリグノセリン酸はなたね油等にも含まれるが、むしろ高等ほ乳動物の神経組織や脳白質のスフィンゴグリコリピドのような糖脂質を構成する主要な飽和脂肪酸で、とくに土壤墓等の判定に有効な手掛かりとなる高級脂肪酸である。また土壤試料中の高級脂肪酸は、長い年月の間に、各種の微生物や自然酸化等による分解や異性化等の変成作用のため、パルミチン酸やオレイン酸のような生物界や自然環境において普通に見られる炭素数の少ない、あるいは不飽和度の低い脂肪酸に変化し、さらに分解消失する。実際時代を遡るにつれ、その遺跡の土壤に含まれる脂肪酸は、一般に炭素数16の飽和脂肪酸のパルミチン酸、次に炭素数18の飽和脂肪酸のステアリン酸の割合が相対的に多く、しかも脂肪酸そのものの含有率が少なくなるようである。また初めはそれぞれに違った生物遺体に由来しても土壤中で腐朽分解する間に、土壤中の小動物や微生物による摂取、栄養、挿せつ、

遺体の腐朽分解等の生活作用の幾重にもわたる循環を経て複雑な変成作用のため、土壌や土壌腐植に含まれる脂肪酸はじめ各種の有機物の種類や割合は一樣に均質化される。さて土壌中の残存脂質や残存脂肪酸は、その地域の気候や風土、植生や腐植の古さ等で、それぞれ一樣な脂肪酸組成を持つようになる。また火山灰土壌に含まれる非結晶質粘土のアロフェンが腐植生成の促進や腐植有機物の保留や安定化に寄与する。そこで異なった地域の間で、その土壌腐植の脂肪酸はじめ有機物の組成を比較する場合は、まずその土地の過去の経緯、つまり森林、畑地、牧草地あるいは居住地等、過去の歴史的状況と共に、その土壌の土質や土性にも留意することが大切である。しかし各種の脂質や脂肪酸が、アロフェン等の土壌中の粘土鉱物と結合し、腐朽変成の循環や進行から外れ長期間安定に保存されることが分かってきたので、ある遺跡の特定の土壌の覆土や埋設土器の土壌等に局部的に、とくに高い濃度の無機燐酸を検出すると共に、パルミチン酸やオレイン酸等の割合が多く動物性脂肪との関りを示唆し、またリグノセリン酸やネルボン酸等のような高等ほ乳動物に関連の深い特殊な脂肪酸を高い割合で検出するなら、人体の埋葬等が考えられる土壌や埋設土器の可能性がある。また住居跡等に残された土器や、その土器の中の土壌等に浸透して保存されている脂質成分は、周囲の土壌腐植等の影響が少なく、当初の脂質の脂肪酸組成を示唆する可能性が大きいので、その脂肪酸組成を調べて、衣、食、住等当時の生活に関連した脂質や動植物の種類を推定できれば、当時の生活の状況をより明確に考えることが可能と思う。

さてこの竪穴住居跡内の埋設土器直下の土壌試料 1 と土壌試料 2 の無機燐酸の含有量が多く遺体埋葬の可能性がある。しかしその残存脂質の脂肪酸組成がステアリン酸の割合に対してパルミチン酸やオレイン酸の割合が幾分多い他には、埋設土器の周囲や住居跡床下および住居外等の土壌試料の脂肪酸組成との違いが少ない。つまりこの埋設土器は、当時の人びとが家族の死にあたり、あらかじめ死者の遺体を仮埋葬等である程度腐肉を除去して洗骨した上で、死者にたいする家族の愛情と再生の願いをこめて住居内に再葬するために用いた可能性が考えられ、縄文人の死者に対する意識を考える手掛かりとなると思う。さらにこの竪穴住居跡に関連した土壌試料は、無機燐酸の含有量が比較的多く、また住居跡床下等の残存脂肪酸組成が動物性脂肪の残留を示唆し、当時の住人の密度の濃い生活の状況を感じさせるものがある。

謝 辞

今回の調査で土壌の無機燐酸の含有量および残存脂質の脂肪酸組成の分析を担当した本校昭和63年度工業化学科卒業研究生木下拓道君、福田陽子君および佐々木進一君、またガスクロマトグラフィー分析およびその解析等調査研究の一部を担当した本校工業化学科技官菊地良栄氏の協力を感謝いたします。

第4表 第1号竖穴住居跡土壤中の残存無機リン酸の含有量

土壌試料番号	P ₂ O ₅ (mg/100g 土壌)	変動係数 (%)
1	171.0	3.5
2	181.5	2.0
3	121.2	7.7
4	89.8	8.5
5	87.3	3.0
6	73.5	4.2

第5表 第1号竖穴住居跡土壌試料の残存脂肪酸組成表 (%)

脂肪酸番号	脂肪酸名	土壌試料No.1	土壌試料No.2	土壌試料No.3	土壌試料No.4	土壌試料No.5	土壌試料No.6
1	バルミチン酸	52.60	48.14	57.97	64.81	50.33	46.53
2	ステアリン酸	9.45	8.53	9.80	10.38	9.99	9.73
3	オレイン酸	17.12	19.57	11.46	11.27	15.35	12.35
4	リノール酸	2.34	2.53	1.31	2.30	3.26	1.53
5	アラキジン酸	0.19	0.15	0.02	0.18	0.24	0.35
6	エイコセン酸	2.84	5.53	3.26	2.52	3.89	6.24
7	リノレイン酸	0	0	0	0	0	0
8	エイコサジエン酸	1.06	1.43	1.55	0.73	1.30	1.51
9	ベヘン酸	11.44	10.74	11.37	5.53	10.25	13.00
10	エルカ酸	0	0	0	0.82	0.48	3.17
11	リグノセリン酸	2.95	3.39	3.25	1.21	4.89	5.59
12	ネルボン酸	0	0	0	0.26	0	0

第 章 ま と め

1. 本遺跡は、尾駮沼と老部川にはさまれた台地上に立地し、東側台地に富ノ沢 1 遺跡・西側に富ノ沢 2 遺跡が位置する。標高は富ノ沢 1 遺跡で約60m・富ノ沢 2 遺跡 A 地区で約66m・富ノ沢 2 遺跡 B 地区で約50mである。
2. 富ノ沢 1 遺跡は2220m²を調査した。富ノ沢 2 遺跡は小谷によって二分されており、本来は別遺跡として扱える必要がある。このため富ノ沢 1 遺跡に隣接する台地を B 地区、西側を A 地区と呼称することとし、前者は3,495m²・後者は1,285m²調査した。
3. 富ノ沢 1 遺跡は、縄文時代早期（吹切沢式）・中期（円筒上層 d 式、中の平・最花式、大木10式併行）・後期（初頭期）・弥生時代（念仏間式）が出土しているが、その主体をなすものは縄文時代中期（中の平・最花式）である。
遺構は、土壌18基・焼土状遺構 3 基である。その時期は不明である。
4. 富ノ沢 2 遺跡 A 地区は、縄文時代中期（円筒上層 c、d、e 式、大木7b～8a 式、榎林式、中の平・最花式、大木10式併行）が出土しているが、その主体をなすものは中期（円筒上層 d 式）である。
遺構は、竪穴住居跡 5 軒・土壌27基・焼土状遺構 1 基・埋設土器 1 基・屋外炉 1 基である。その時期は、縄文時代中期（円筒上層 d 式、榎林式、中の平・最花式）である。
5. 富ノ沢 2 遺跡 B 地区は、縄文時代早期（早稲田 5 類）・中期（円筒上層 b、d 式、大木7b～8a、中の平・最花式、大木10式併行）・後期（初頭期）が出土しているが、その主体をなすものは中期末葉～後期初頭期である。
遺構は、竪穴住居跡 2 軒・土壌40基・焼土状遺構 4 基・ピット群 1 基である。その時期は、縄文時代中期（円筒上層 d 式）・中期末葉～後期初頭である。
6. 遺構は、各遺跡・地区の遺構分布状況からは、台地の内側に住居群が、外側に土壌群が配置されていると推定されるが、各調査地域は集落の外縁部に相当すると考えられるとともにごく限られた狭い範囲であったため断定することはできない。しかしながらこの各遺跡・地区とも、別途事業に係る発掘調査が進められており、これによって集落構造をより明確にすることが可能になるものと期待される。
7. 出土した土器は、縄文時代の各期および弥生時代であるが、なかでも縄文時代中期の後半期を主体としている。この時期の土器編年については種々論議されているところである。最も出土量の多い円筒上層 d 式に関していえば、これまで太平洋岸での発掘調査例が少なかつただけに、他地域との比較資料として良好なものである。また、第 1 号竪穴住居跡（富ノ沢（2 遺跡 A 地区））の床面からは円筒上層 d 式土器とともに大木 8 a 式土器も出土した。この種

の共伴例が増加しており、両土器文化の関係を理解する上で重要である。

- 8 . 有足土器は、富ノ沢1遺跡の第 層中から出土した。縄文時代晩期の可能性も考えられるが、明確にできなかった。本県での調査によって出土した事例は今津遺跡に次ぐ出土であり、貴重な資料と思われる。

引用・参考文献

- 『県埋文』は「青森県埋蔵文化財調査報告書」の略である。
- ア新谷雄蔵 1977 『深浦町一本松遺跡発掘調査報告書』 深浦町教育委員会
- イ市川金丸 1973 『是川掘田遺跡発掘調査報告書』 八戸市教育委員会
- 1976 『泉山遺跡発掘調査報告書』 県埋文第31集
- 1978 『三内澤部遺跡発掘調査報告書』 県埋文第41集
- 1984 『亀ヶ岡石器時代遺跡』 青森県立郷土館調査報告書第17集
- 才岡田康博 1984 『弥栄平 2 遺跡発掘調査報告書』 県埋文第81集
- 1986 『今津遺跡発掘調査報告書』 県埋文第95集
- 力葛西励 1972 「平賀町掘合 号遺跡発掘調査報告書」 『燃糸文』第3号
- 1976 『平賀町井沢遺跡発掘調査報告書』 平賀町埋蔵文化財報告書第5集
- 1979 『外崎沢 1 遺跡発掘調査報告書』 脇野沢村教育委員会
- キ北林八洲晴 1974 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』 県埋文第9集
- 1979 『杉の沢遺跡発掘調査報告書』 県埋文第45集
- 北林八洲晴・成田滋彦 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』 県埋文第90集
- ク工藤竹久 1984 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 - 丹後谷地遺跡 - 』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 1977 「北日本の石槍・石鏃」 『北奥古代文化』第9号
- 1968 「下北半島尻屋念仏間遺跡」 『考古学ジャーナル』23
- カ坂本洋一 1981 『田ノ上遺跡発掘調査報告書』 県埋文第65集
- 桜田隆 1978 『青森市三内遺跡発掘調査報告書』 県埋文第37集
- ク高橋潤 1979 『蛭沢遺跡発掘調査報告書』 青森市蛭沢遺跡発掘調査団
- 高橋和樹他 1976 『瀬棚南川遺跡』 瀬棚町教育委員会
- 橋善光 1968 「下北半島の縄文土器に後続する土器」 『北海道考古学』第4輯
- ナ成田滋彦 1986 『大石平遺跡発掘調査報告書』 県埋文第103集
- 奈良昌毅 1987 『上尾敷 2 遺跡発掘調査報告書』 県埋文第114集
- ハ畠山昇・菅田実 1982 『山崎遺跡発掘調査報告書』 県埋文第68集
- 畠山昇 1977 『水木沢遺跡発掘調査報告書』 県埋文第34集
- 羽賀憲二他 1983 『瀬棚南川』 瀬棚町教育委員会
- ミ三宅徹也 1986 『大湊近川遺跡発掘調査報告書』 県埋文第104集
- 三浦圭介 1977 『近野遺跡発掘調査報告書』 県埋文第33集
- 1978 『源常平遺跡発掘調査報告書』 県埋文第39集
- 三浦圭介・相馬信書 1979 『近野遺跡発掘調査報告書』 県埋文第47集
- 三浦圭介 1986 『弥栄平 1 遺跡発掘調査報告書』 県埋文第98集
- 1986 『大石平遺跡発掘調査報告書』 県埋文第97集
- 峰山巖 1968 「恵山式土器」 『北海道考古学』第4輯
- ム村越潔 1970 『石神 号遺跡発掘調査報告書』 森田村教育委員会
- 1974 『円筒土器文化』 雄山閣出版
- ヤ山口義伸 1987 『上尾敷 2 遺跡発掘調査報告書』 県埋文第115集

写真図版



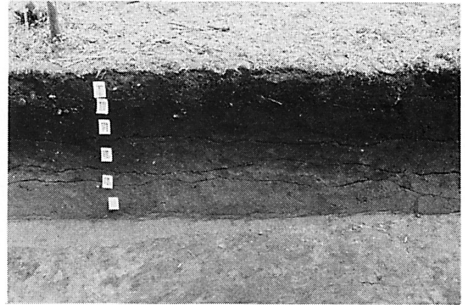
遠景写真 (E→)



遠景写真 (E→)



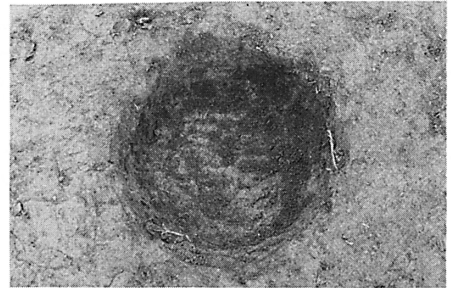
遠景写真 (W→)



基本層序



遠景写真 (W→)



第71号土坑 (W→)



第72・73号土坑 (W→)



第74号土坑 (N→)

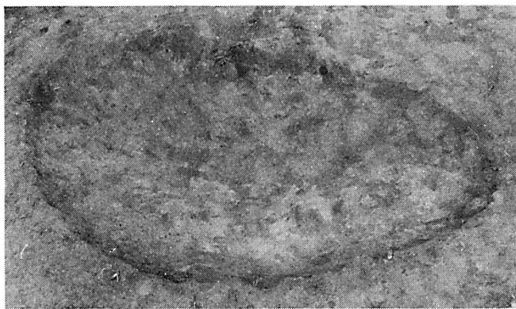
写真1 富ノ沢(1)遺跡・遠景写真・基本層序・土坑



第75号土坑 (S→)



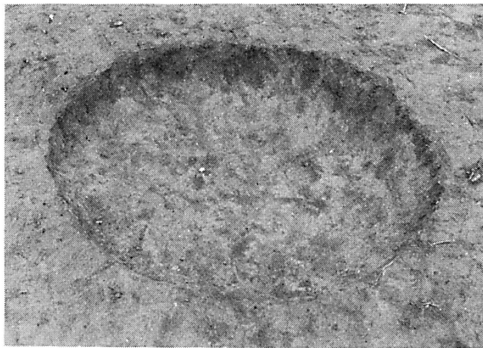
第76号土坑 (S→)



第77号土坑 (N→)



第78号土坑 (E→)



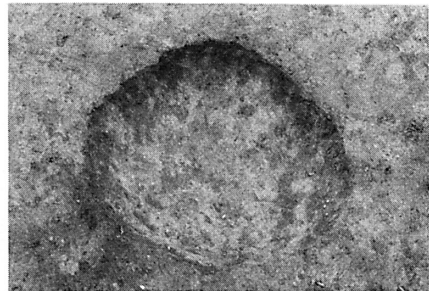
第79号土坑 (N→)



第80号土坑 (N→)



第81号土坑 (N→)

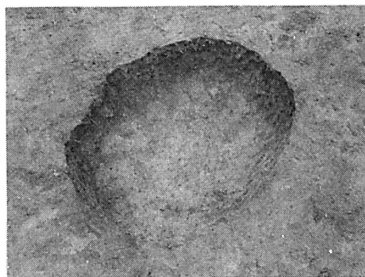


第83号土坑 (S→)

写真2 富ノ沢(1)遺跡土坑



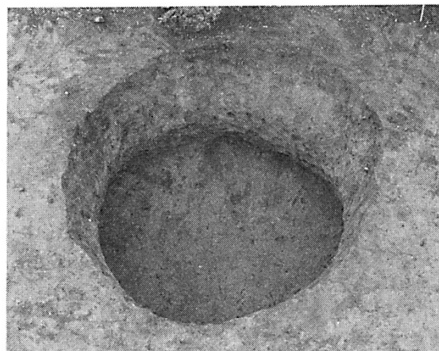
第84号土坑 (S→)



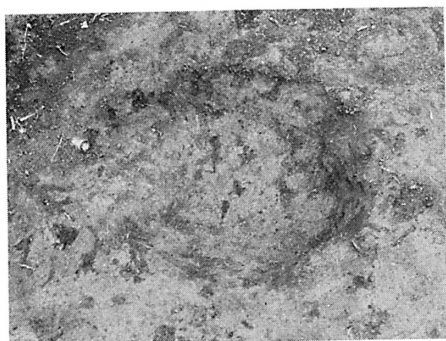
第85号土坑 (S→)



第86号土坑 (N→)



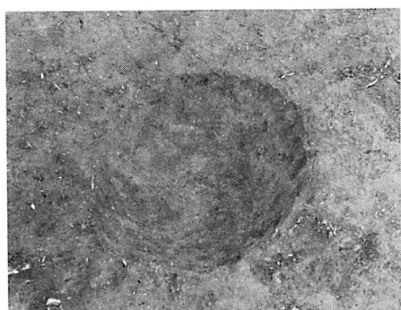
第87号土坑 (N→)



第88号土坑 (N→)



第87号土坑土层断面

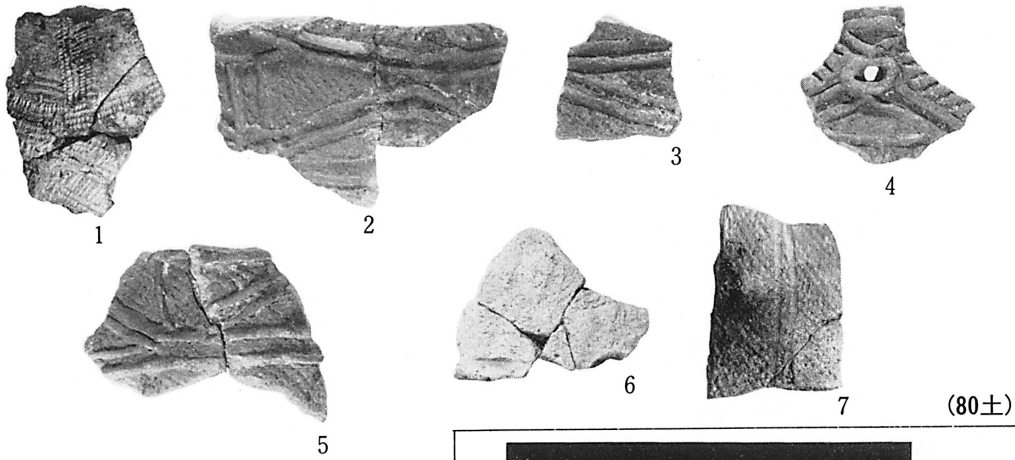


第6号烧土状遺構 (E→)



第8号烧土状遺構 (S→)

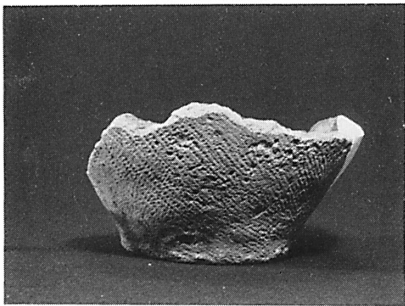
写真3 富ノ沢(1)遺跡土坑・烧土状遺構



1



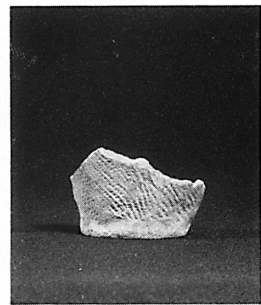
2



4



5



8



9



12



14

写真4 富ノ沢(1)遺跡出土土器 (1) [I群1類(1)~(2)・II群2類(4)
II群8類(5)・III群2類(8)~(14)]

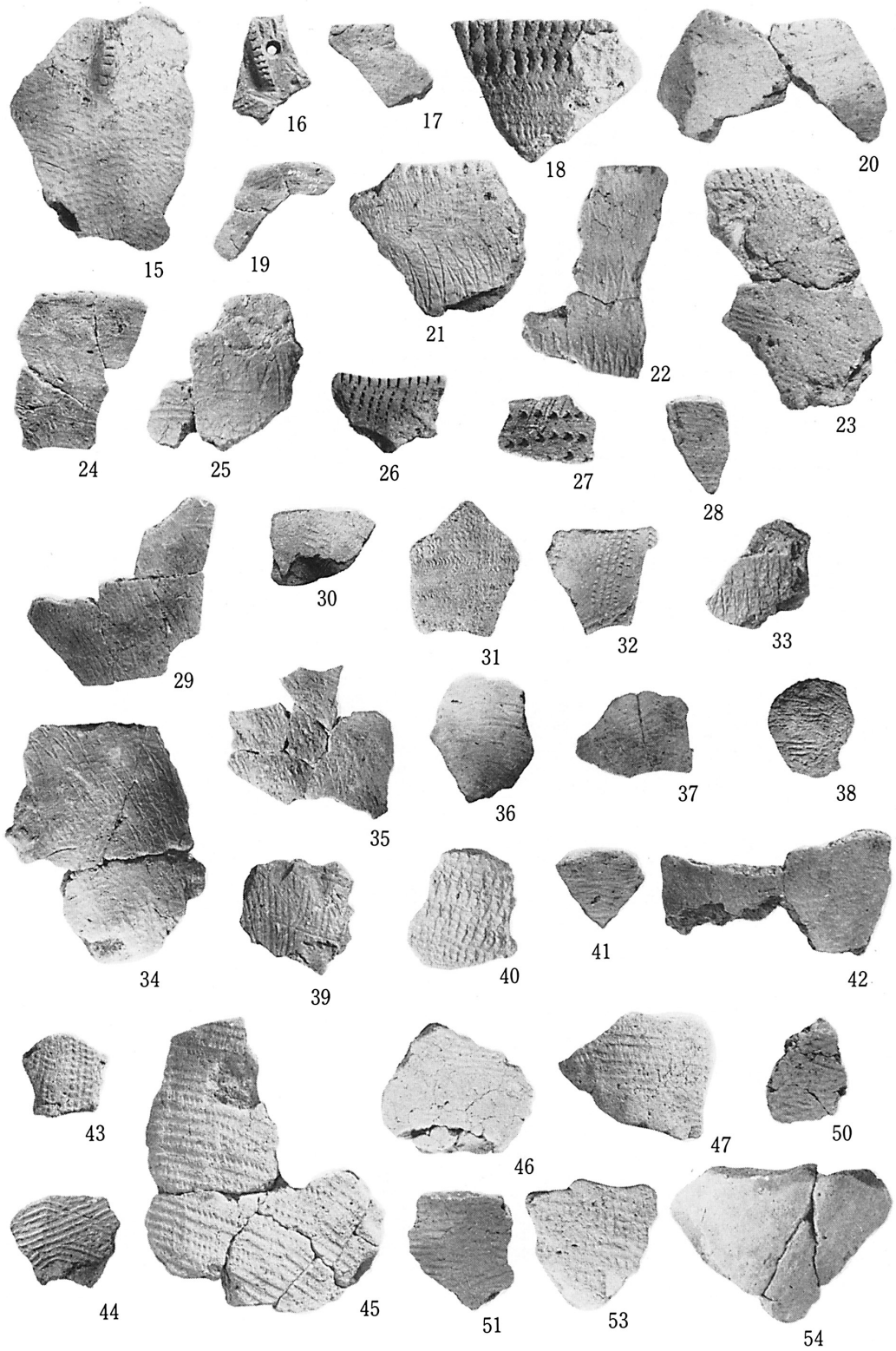


写真5 富ノ沢(1)遺跡出土土器(2)(I群1類)

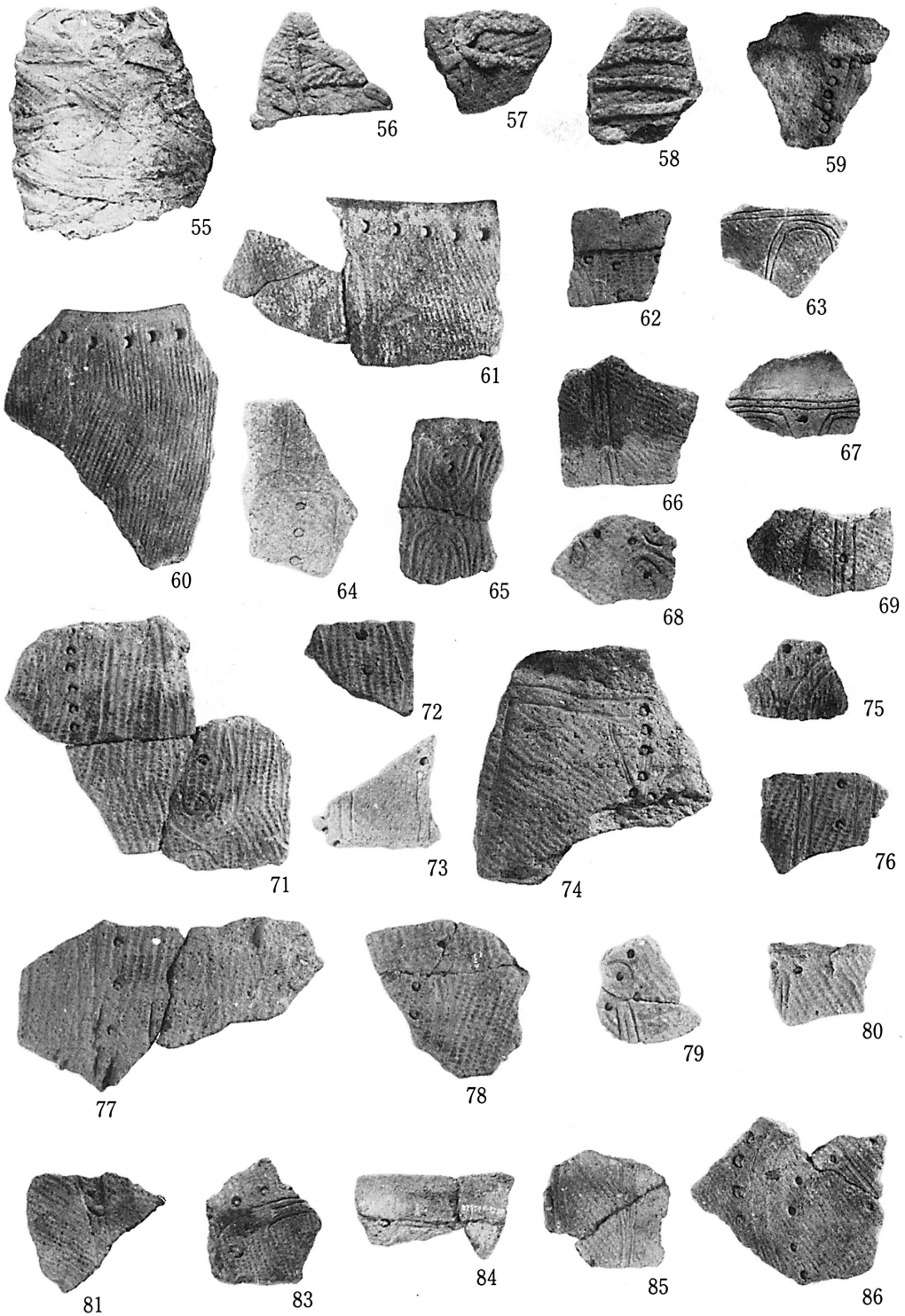


写真 6 富ノ沢(1)遺跡出土土器 (3) [Ⅱ群 3類 (55) ~ (59)
Ⅱ群 8類 (60) ~ (86)]

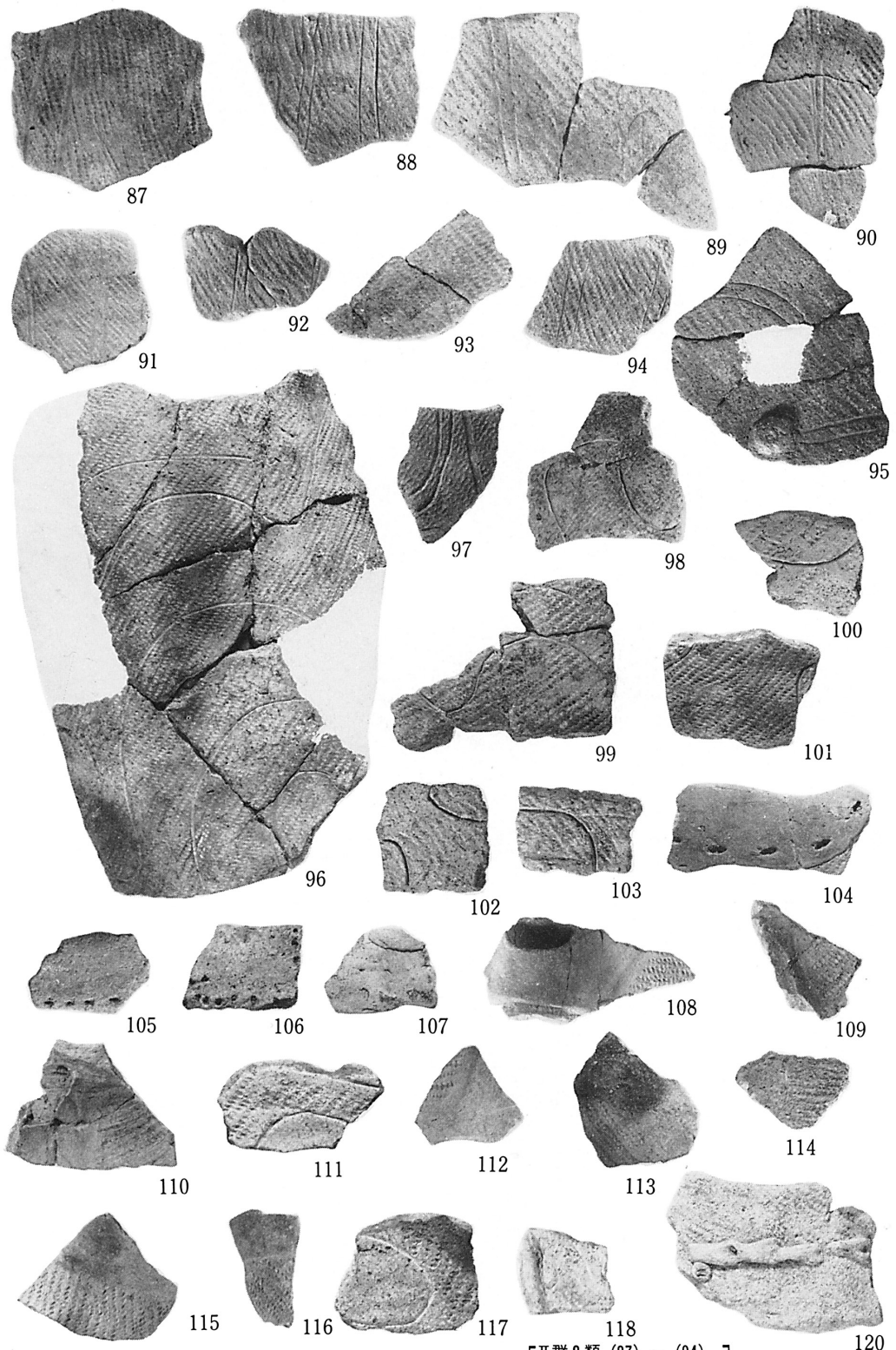


写真7 富ノ沢(1)遺跡出土土器(4) [Ⅱ群8類(87)~(94)]
[Ⅱ群9類(95)~(120)]

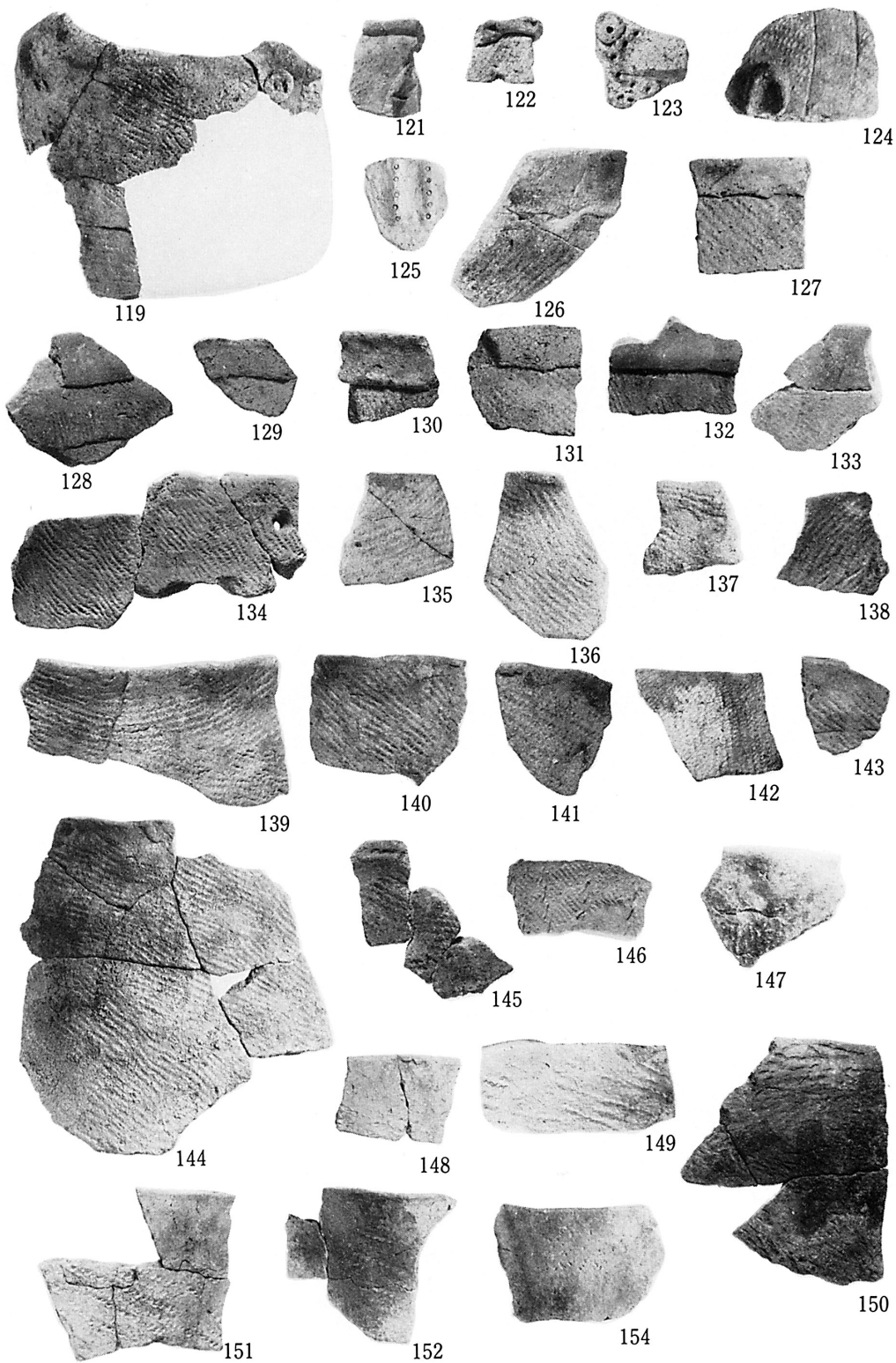


写真 8 富ノ沢(1)遺跡出土土器 (5) [Ⅱ群 9類 (119)・Ⅲ群 1類 (121) ~ (125)]
 [Ⅲ群 2類 (126) ~ (154)]

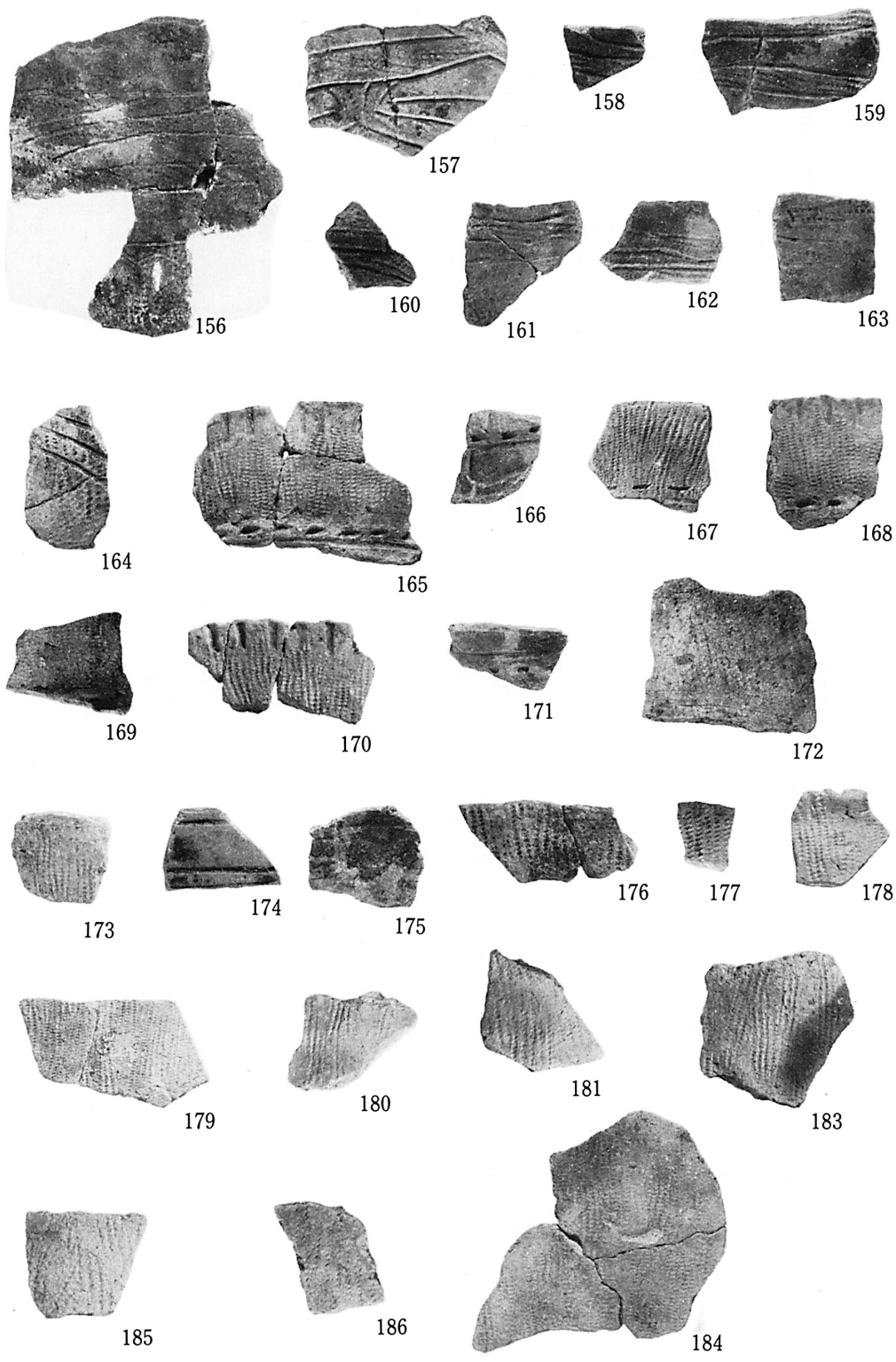


写真9 富ノ沢(1)遺跡出土土器(6)(第Ⅳ群土器)

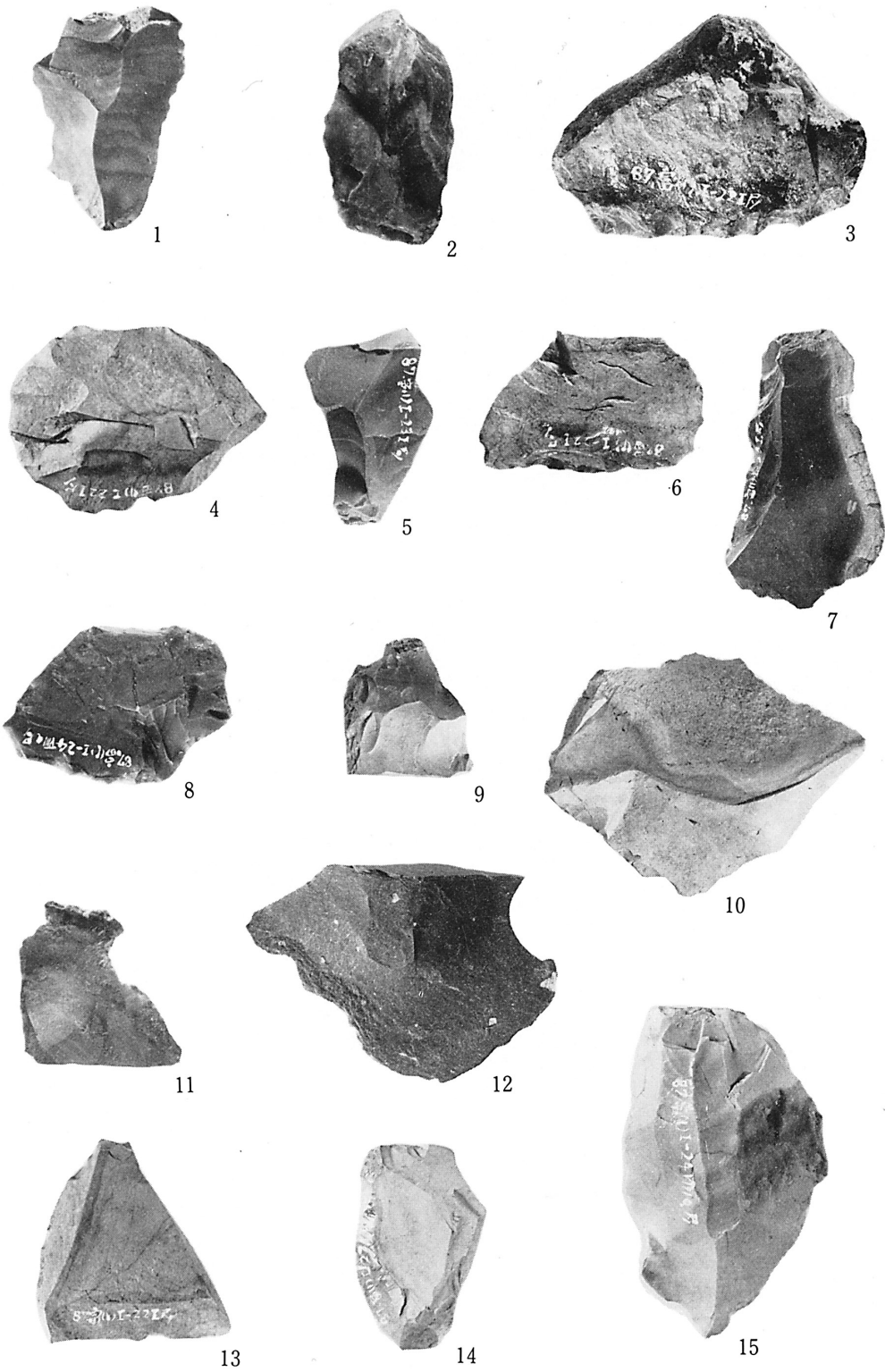
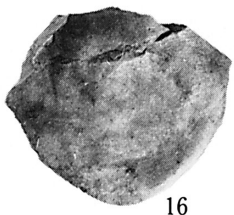
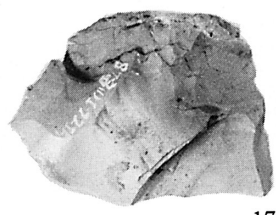


写真10 富ノ沢(1)遺跡出土石器(1)



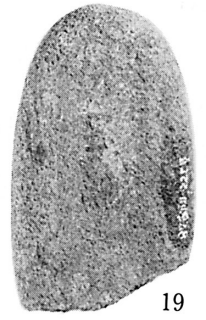
16



17



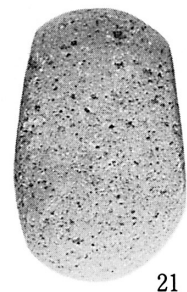
18



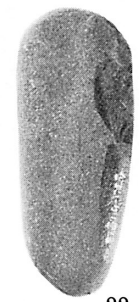
19



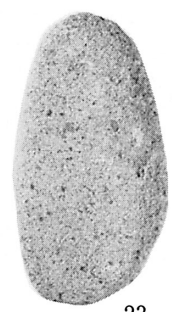
20



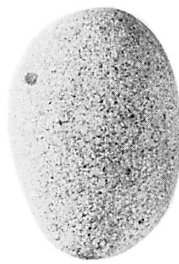
21



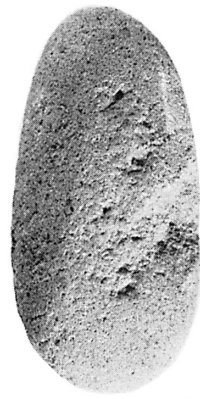
22



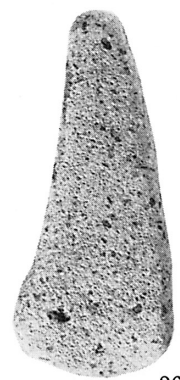
23



24



25



26



27

写真11 富ノ沢(1)遺跡出土石器(2)



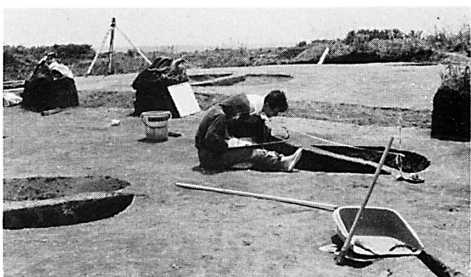
遠景写真 (E→)



遠景写真 (N→)



遠景写真 (E→)



作業風景



遠景写真 (W→)



作業風景



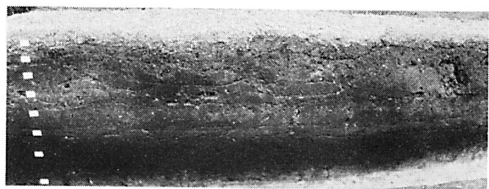
遠景写真 (N→)



遠景写真 (E→)



基本層序



基本層序

写真12 富ノ沢(2)遺跡A地区遠景・基本層序



第1号竖穴住居跡・土器出土状況



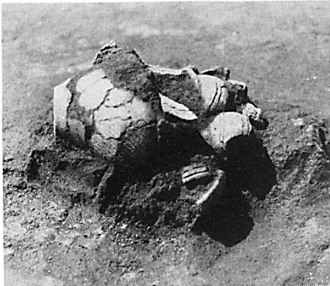
第1号竖穴住居跡・遺物出土状況 (S→)



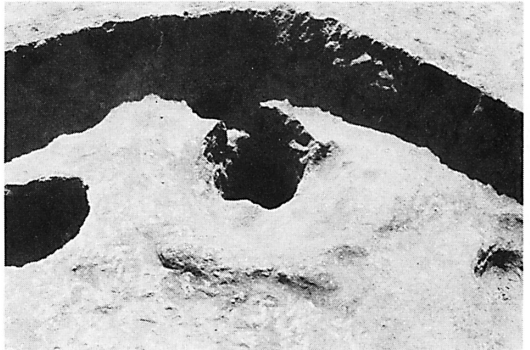
第1号竖穴住居跡・土器出土状況



第1号竖穴住居跡 (S→)



第1号竖穴住居跡・土器出土状況



第1号竖穴住居跡・付属施設 (N→)



第1号竖穴住居跡・埋設土器 (W→)



第1号竖穴住居跡・炉 (W→)

写真13 富ノ沢(2)遺跡A地区竖穴住居跡(1)



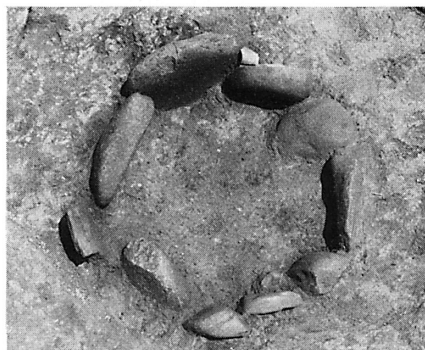
第2号竖穴住居跡 (E→)



第2号竖穴住居跡 (E→)



第2号竖穴住居跡・炉 (S→)



第2号竖穴住居跡・炉 (S→)



第3号竖穴住居跡 (E→)



第3号竖穴住居跡・土器出土状況

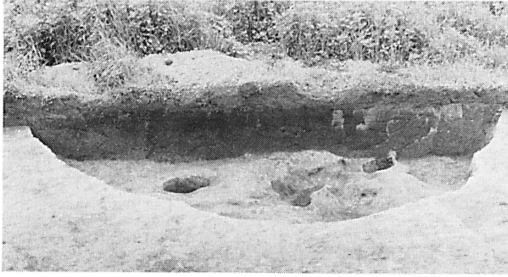


第3号竖穴住居跡 (N→)

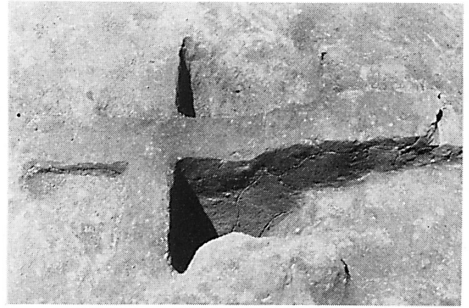


第3号竖穴住居跡・炉 (N→)

写真14 富ノ沢(2)遺跡A地区竖穴住居跡(2)



第8号竖穴住居跡 (S→)



第4号竖穴住居跡・炉 (S→)



第4号竖穴住居跡・ピット5 (S→)



第8号竖穴住居跡・出土炭化材



第8号竖穴住居跡 (N→)



第8号竖穴住居跡・出土炭化材

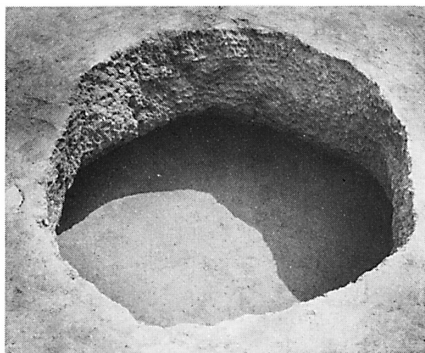


第8号竖穴住居跡 (N→)

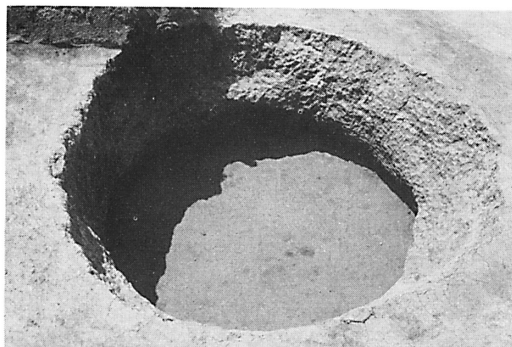


第8号竖穴住居跡・出土遺物

写真15 富ノ沢(2)遺跡A地区竖穴住居跡(3)



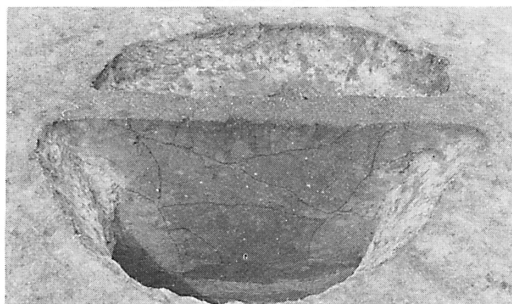
第1号土坑 (W→)



第2号土坑 (E→)



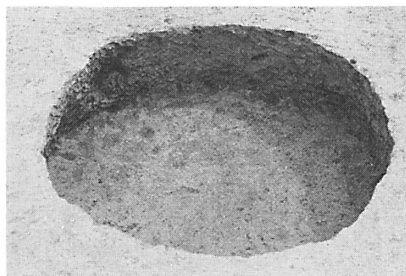
第5号土坑 (E→)



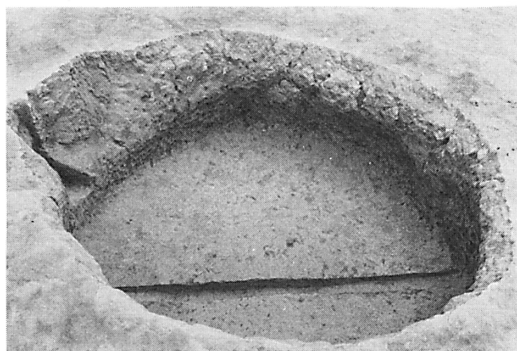
第6号土坑 (E→)



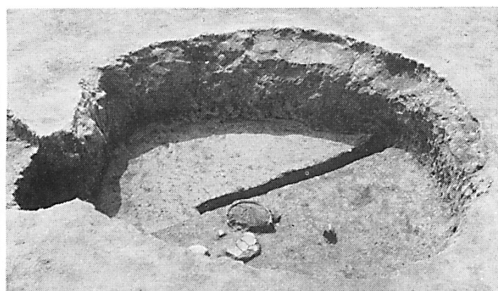
第7・16号土坑 (N→)



第10号土坑 (N→)



第12号土坑 (S→)



第13号土坑

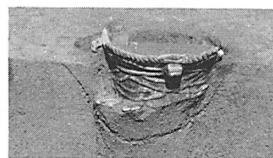
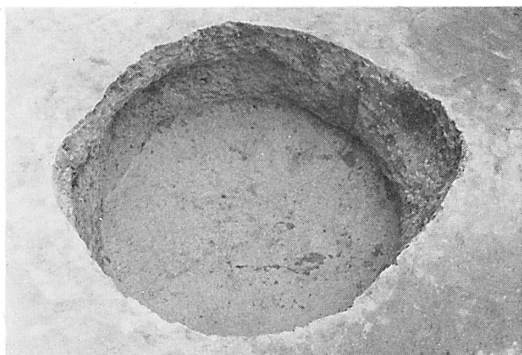
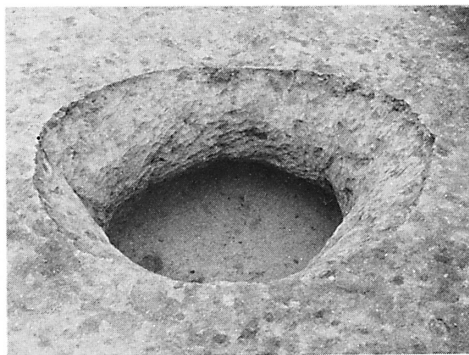


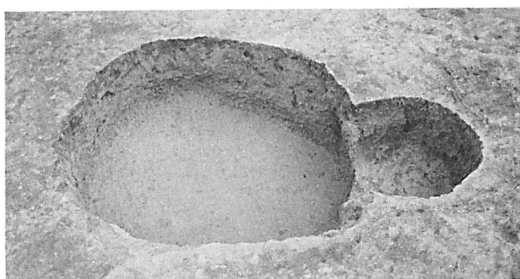
写真16 富ノ沢(2)遺跡A地区土坑



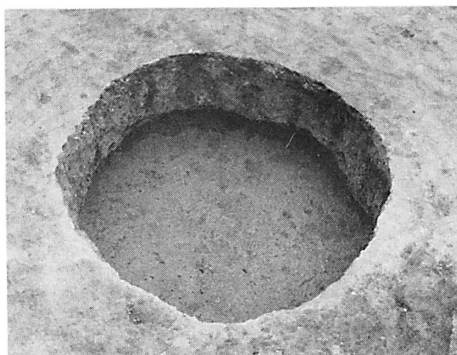
第21号土坑 (W→)



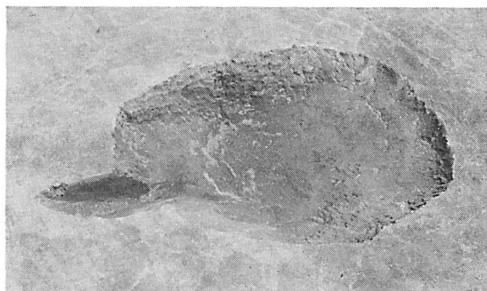
第22号土坑 (W→)



第23・24号土坑 (N→)



第25号土坑 (W→)



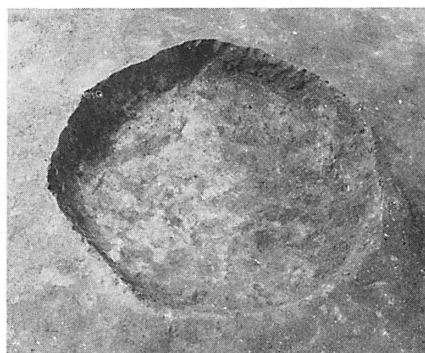
第26号土坑 (W→)



第1号烧土状遺構 (E→)



第1号屋外炉土層断面

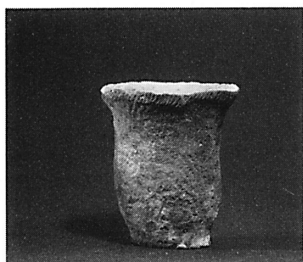


第1号屋外炉 (S→)

写真17 富ノ沢(2)遺跡A地区土坑・烧土状遺構・屋外炉



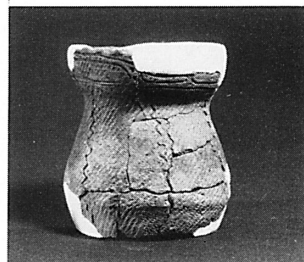
1



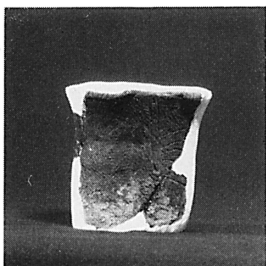
2



3



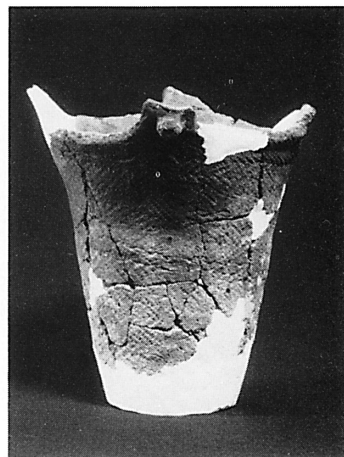
4



5



6



7

写真18 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器 (1)

(1H)

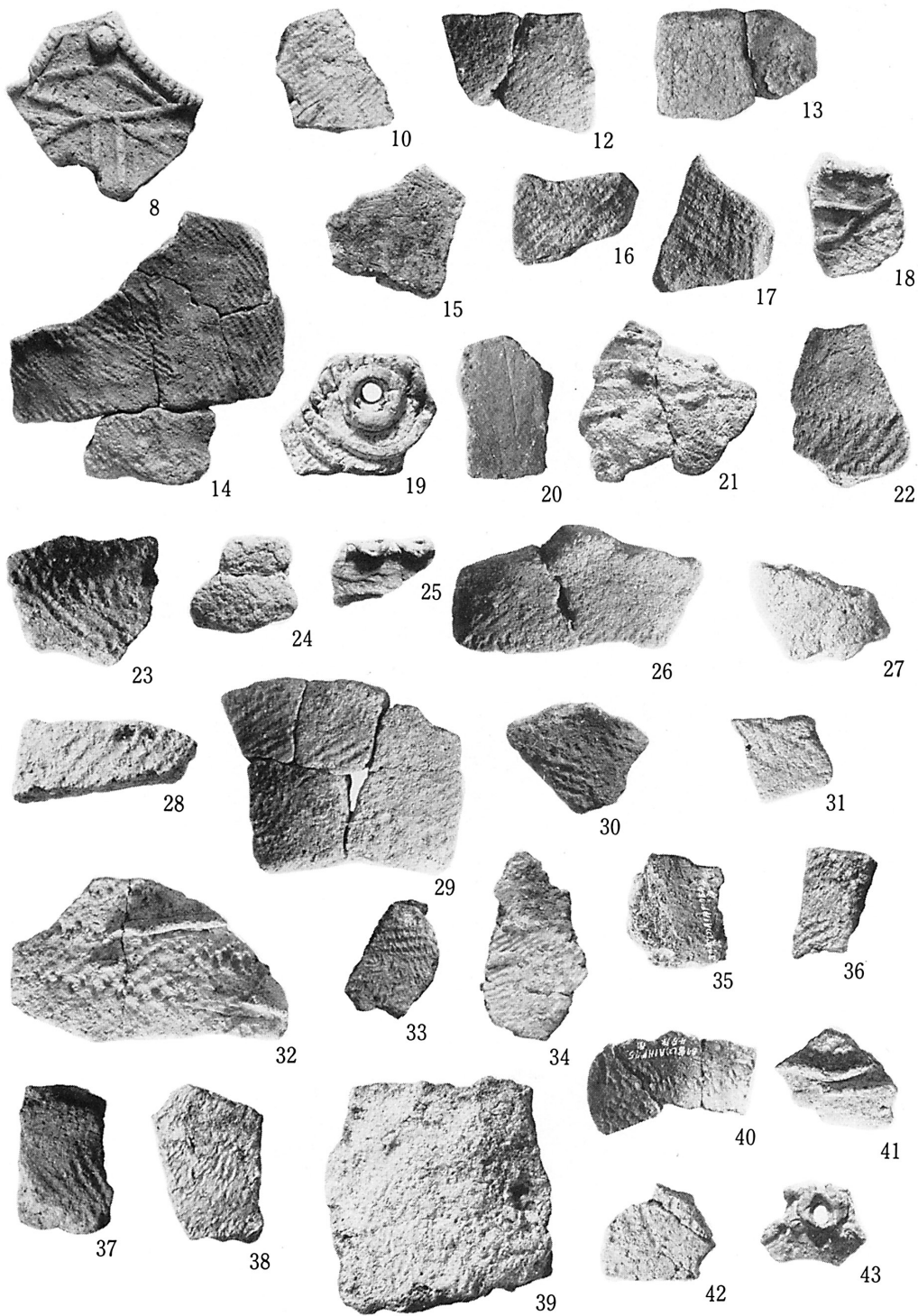
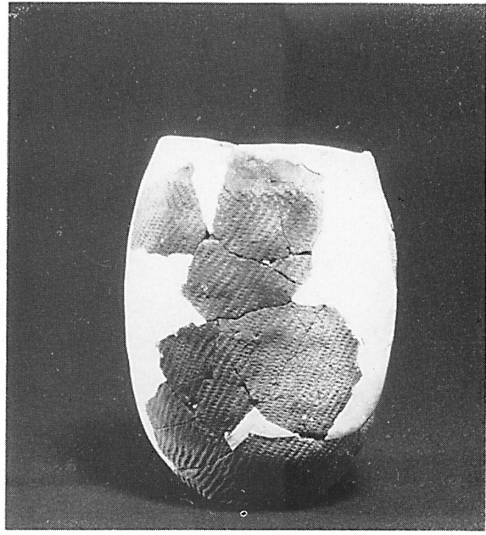


写真19 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(2)

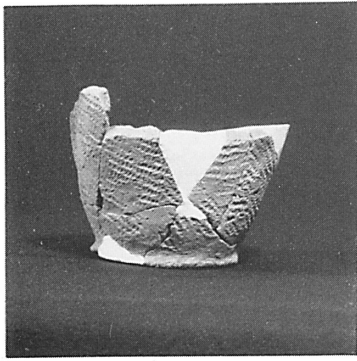
(1H)



1



2



3



4



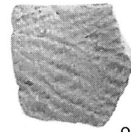
5



6



7



8



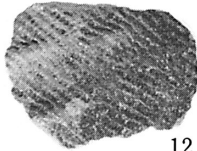
9



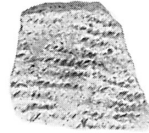
10



11



12



13



14



17



18



19



27



28



33



35



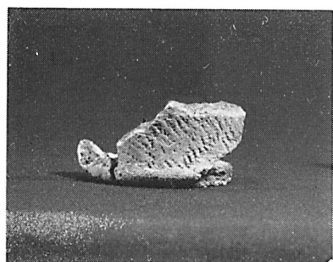
36

写真20 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器 (3)

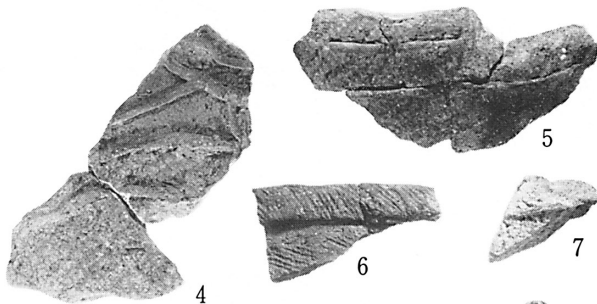
(2 H)



1



2

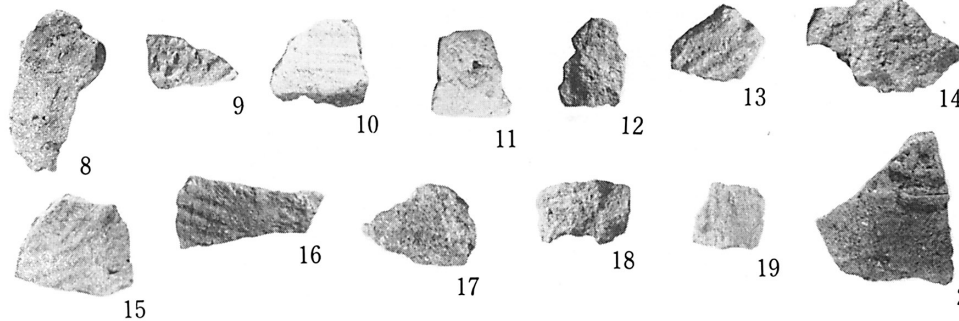


5

4

6

7



8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

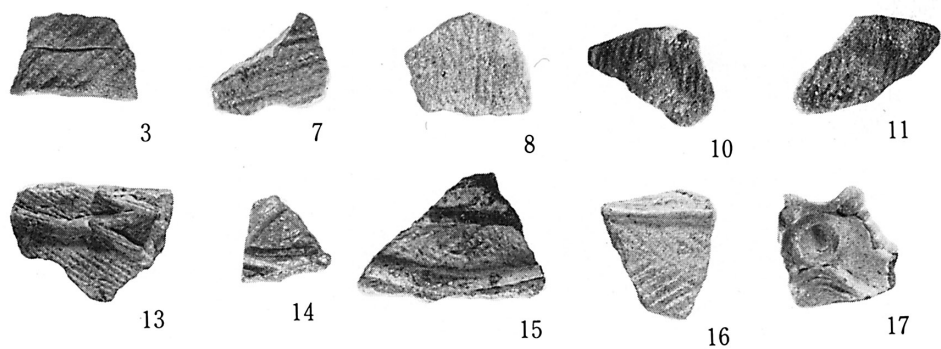
18

19

20

写真21 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(4)

(3H)



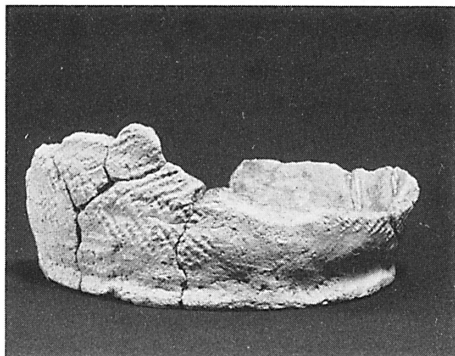
(4 H)



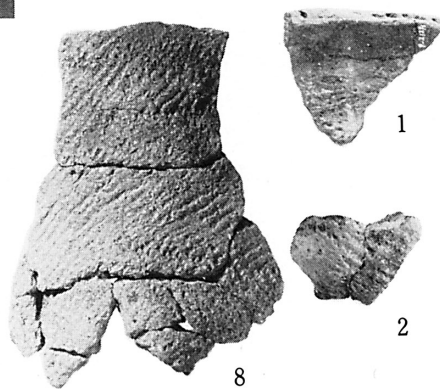
5



6

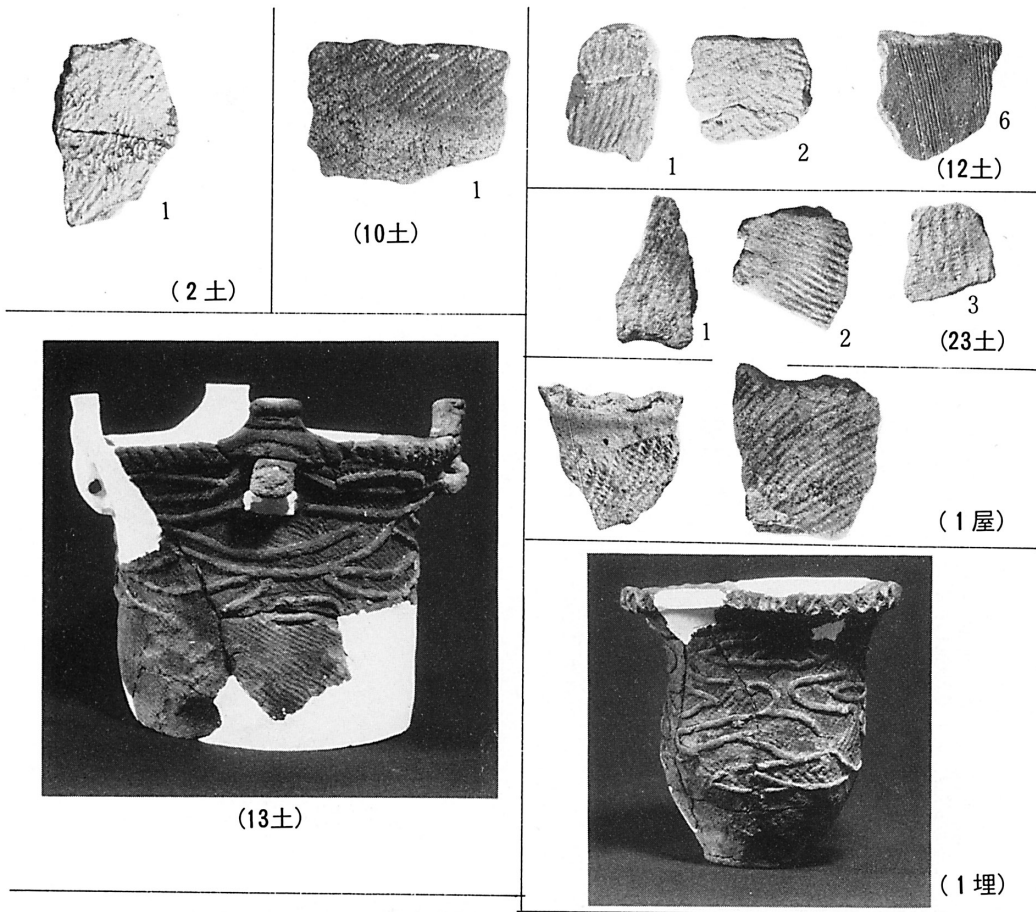


9



(8 H)

写真22 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(5)



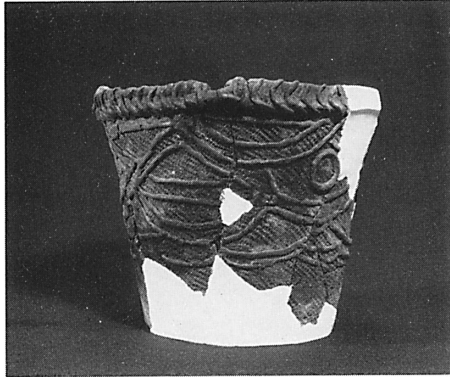
(25土)
 写真23 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(6)



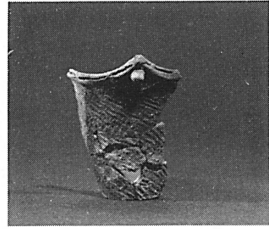
1



2



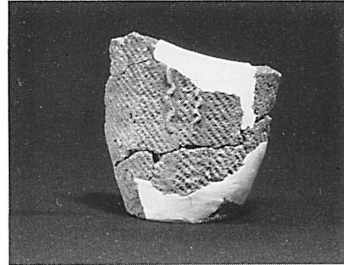
3



4



5



6

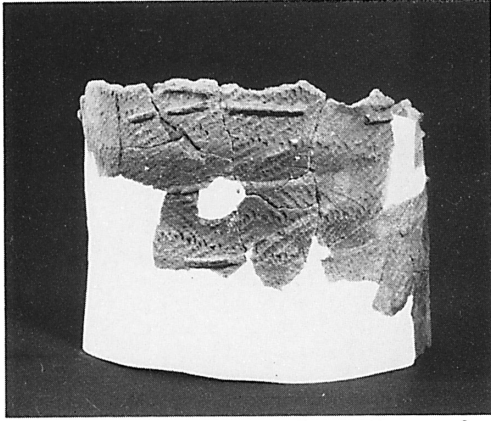


7



9

写真24 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器 (7) [Ⅱ群3類 (1) ~ (3) · (5) ~ (7) · (9)]
[Ⅱ群4類 (4)]



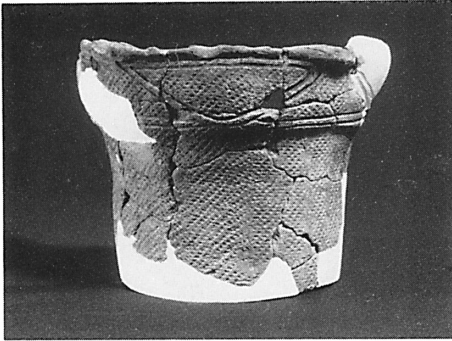
8



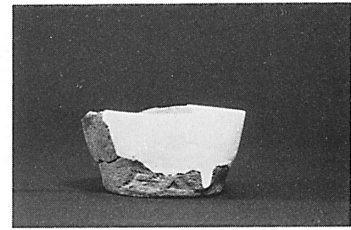
10



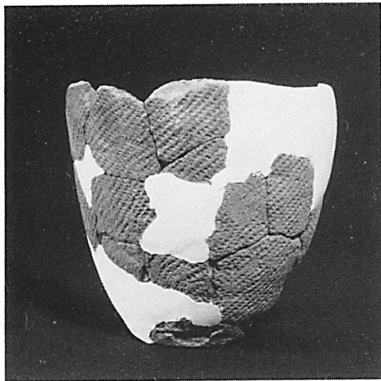
11



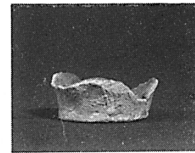
12



15



16



18



20

写真25 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器 (8) [Ⅱ群3類(8)・Ⅱ群5類(10)・(16)・(18)・(20)]
[Ⅱ群6類(11)・(12)・Ⅲ群2類(15)]

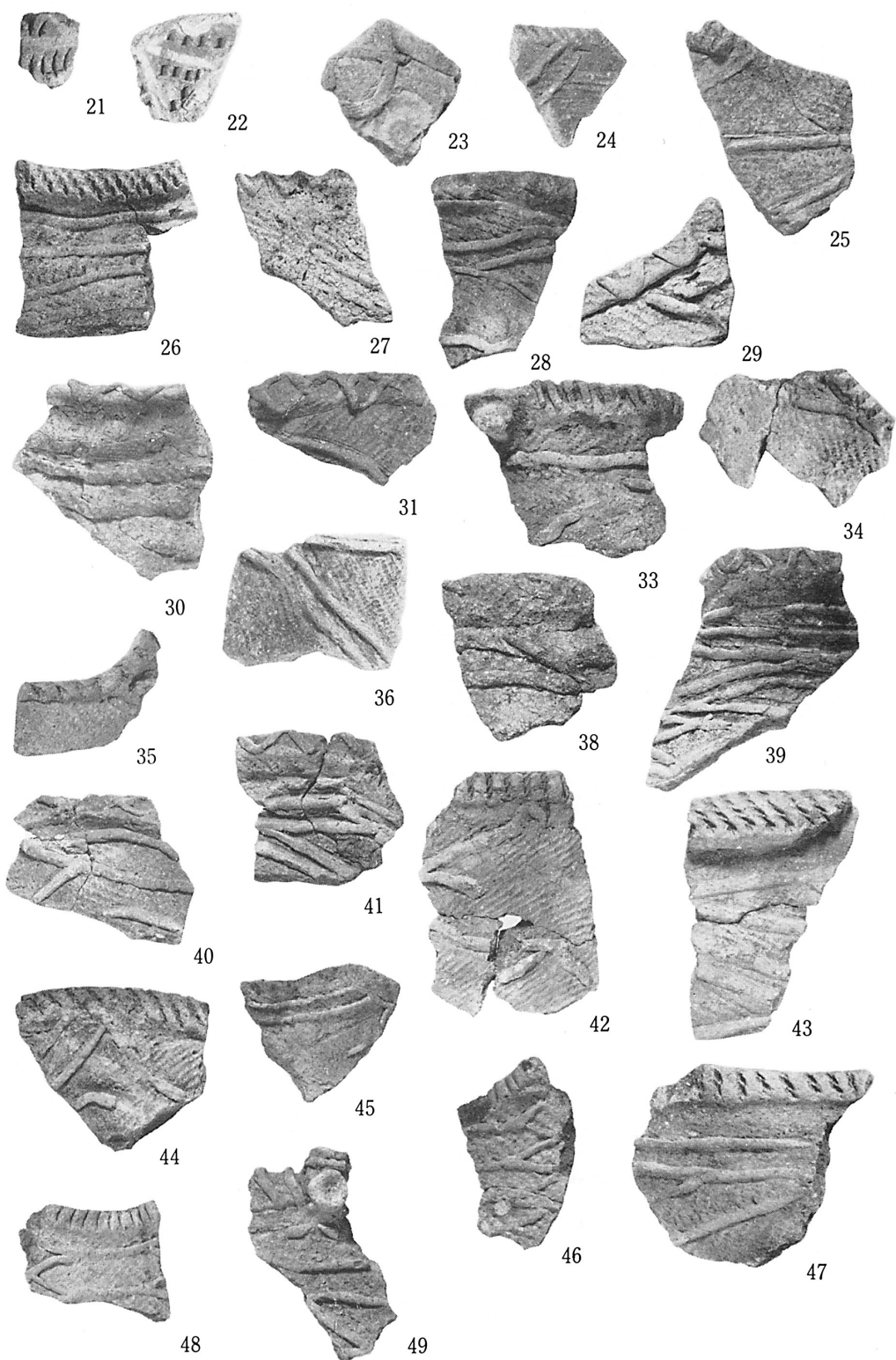


写真26 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(9) [Ⅱ群2類(21)・(22)]
 [Ⅱ群3類(23)～(49)]

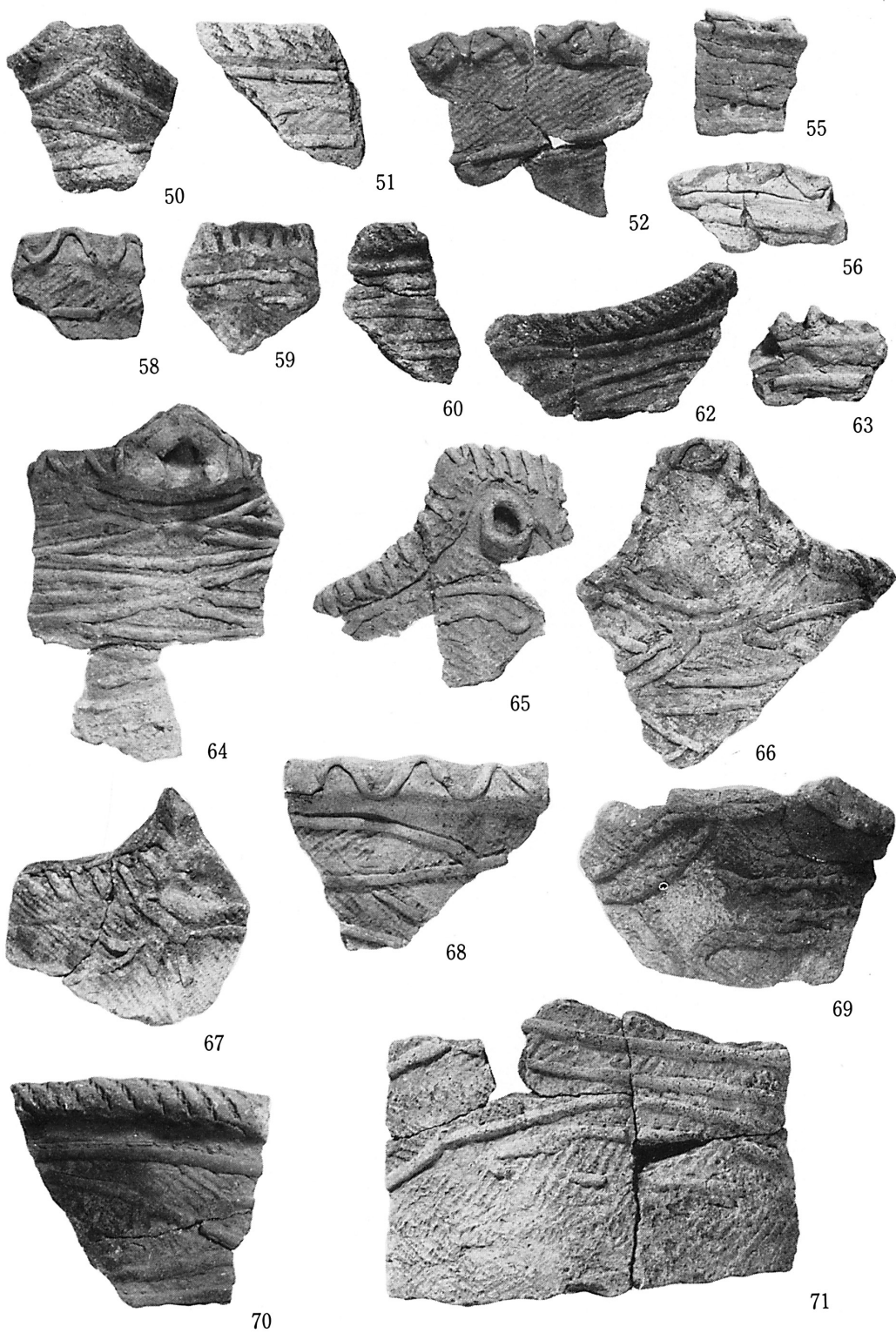


写真27 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(10)(Ⅱ群3類)

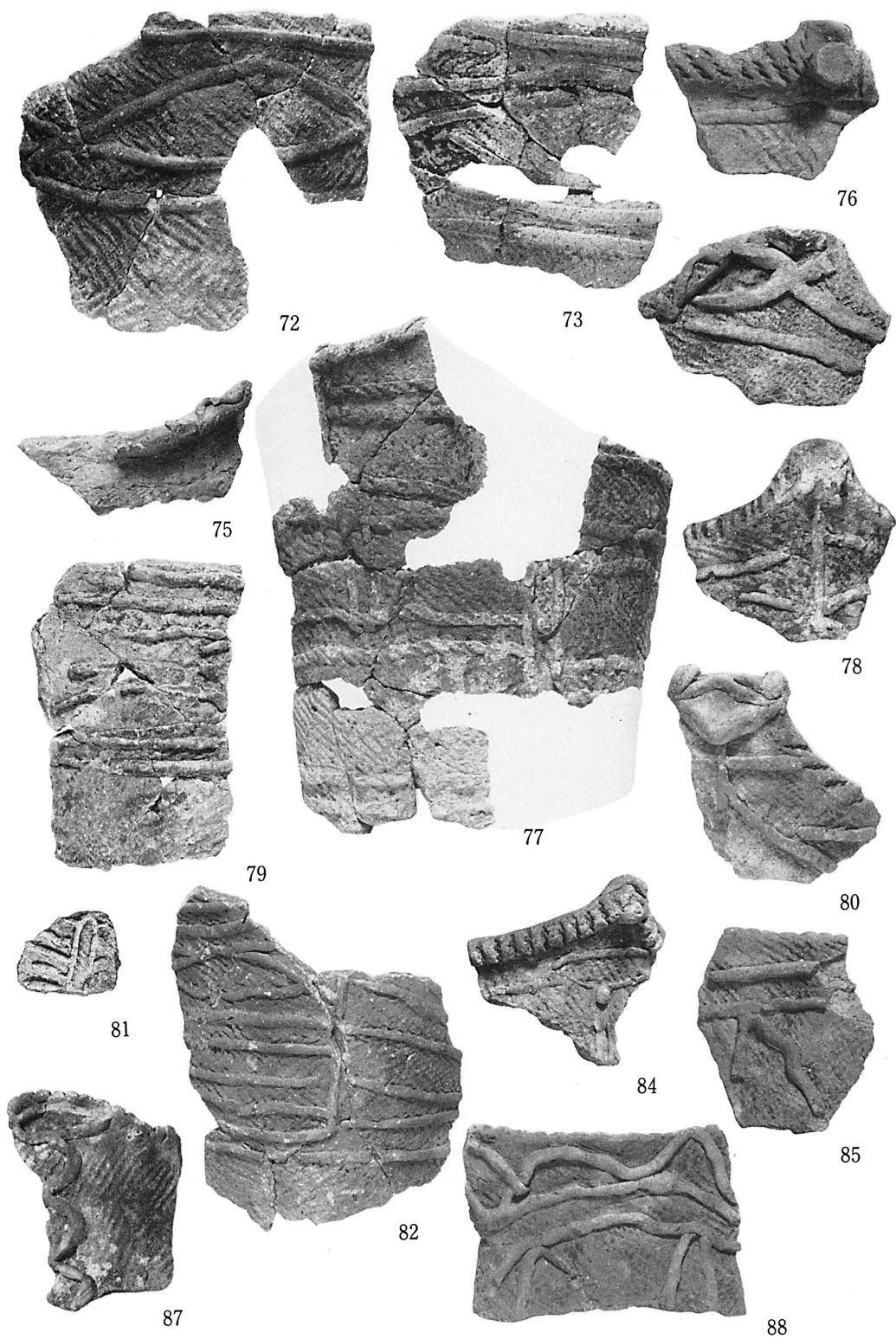


写真28 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(11)(Ⅱ群3類)

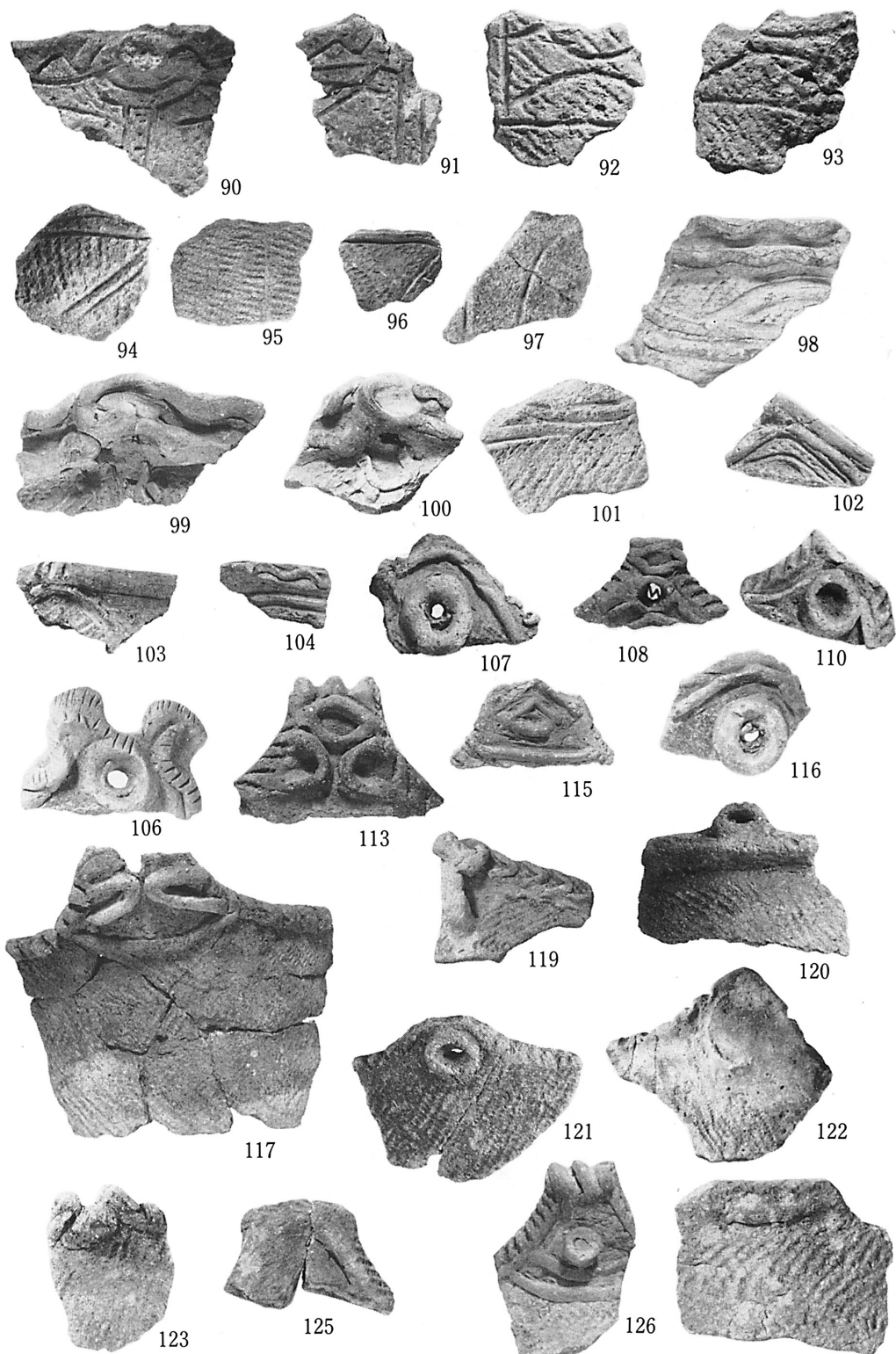


写真29 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器 (12) [Ⅱ群4類 (90) ~ (105)] 127
 [Ⅱ群5類 (106) ~ (127)]

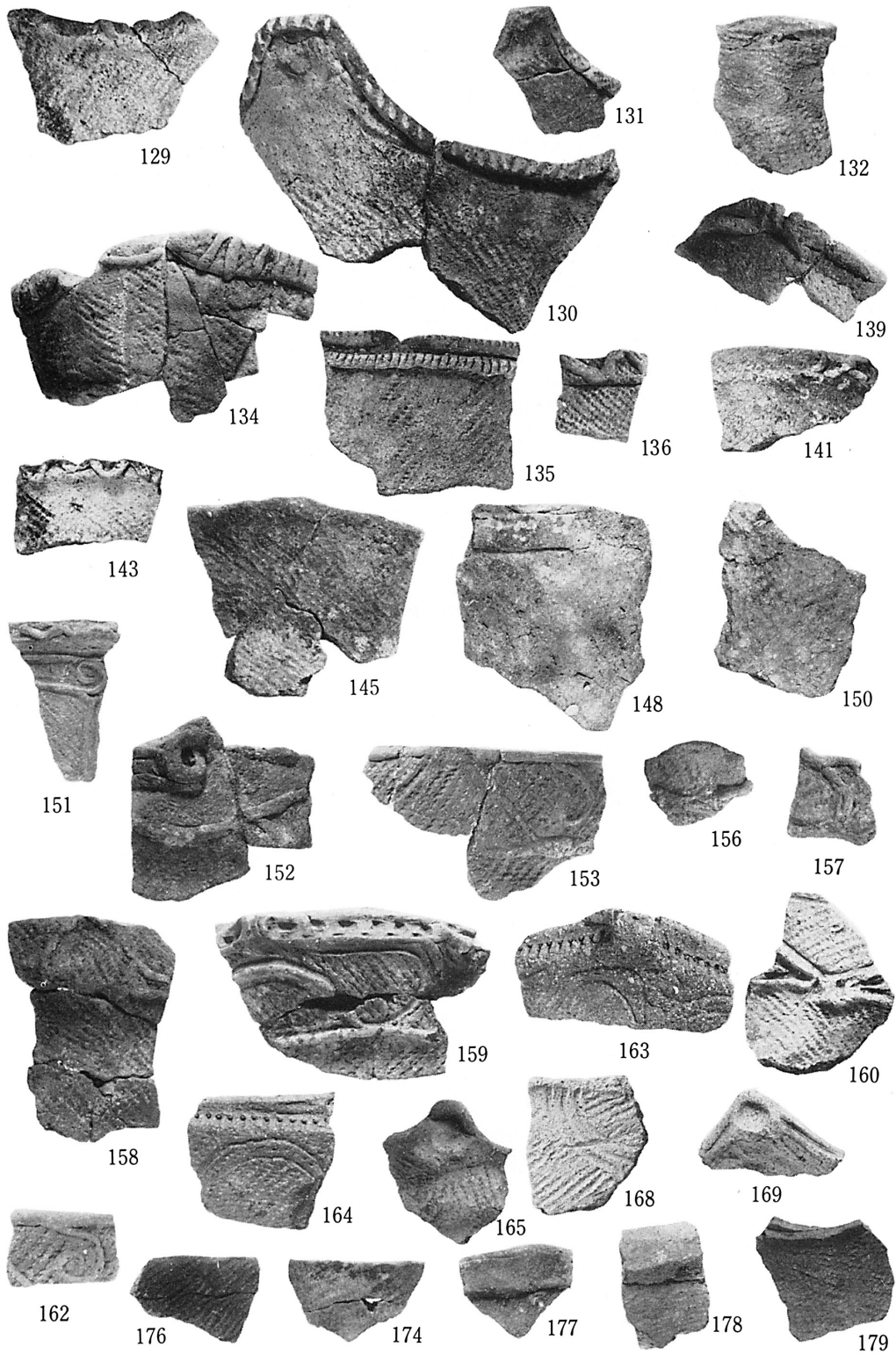


写真30 富ノ沢(2)遺跡A地区出土土器(13) [Ⅱ群5類(129)~(150)・Ⅱ群6類(151)~(162) Ⅱ群7類(163)~(169)・Ⅲ群2類(176)~(179)]

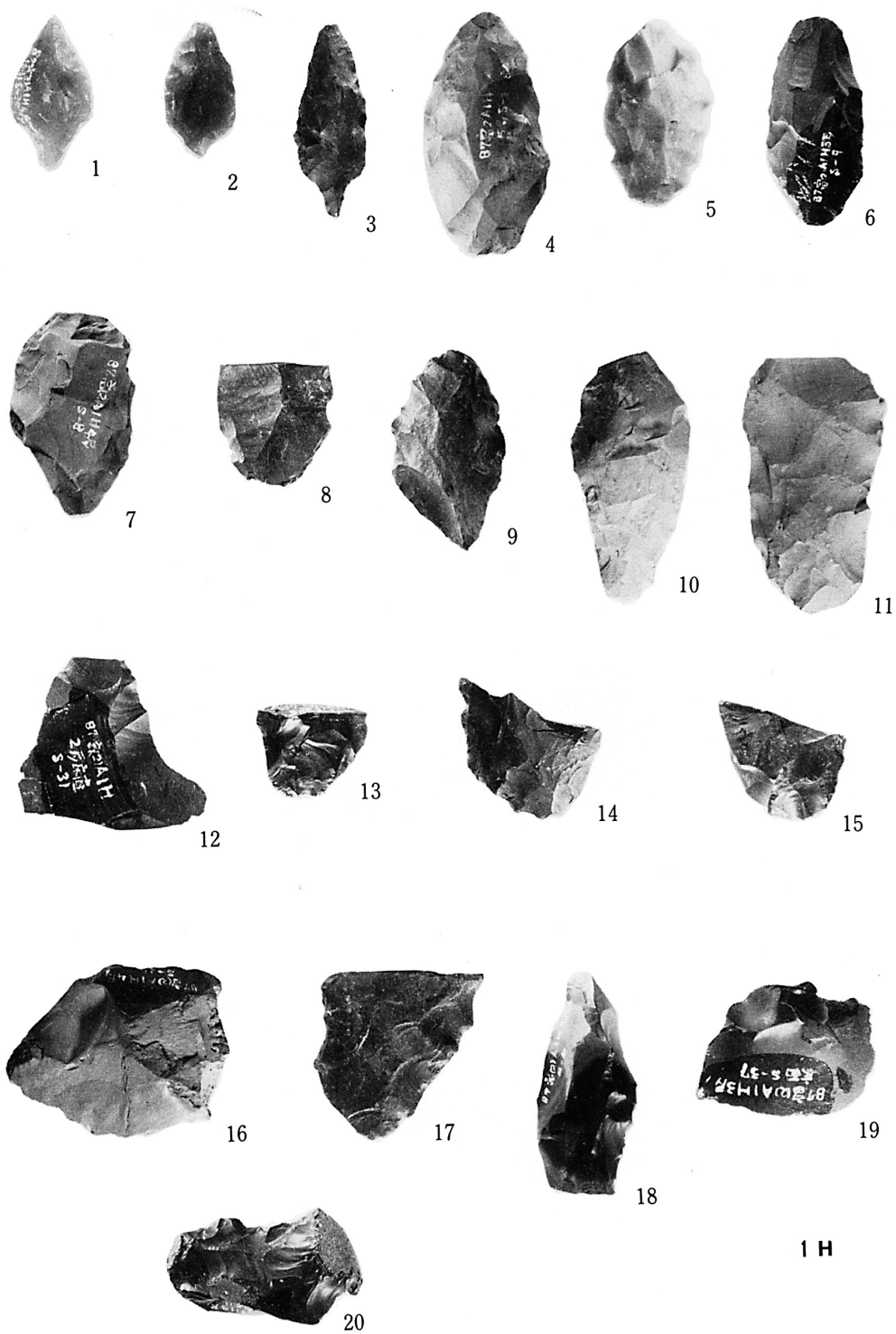
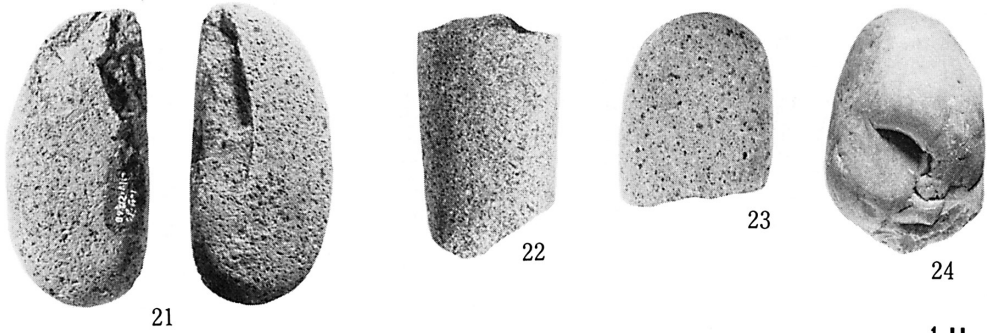
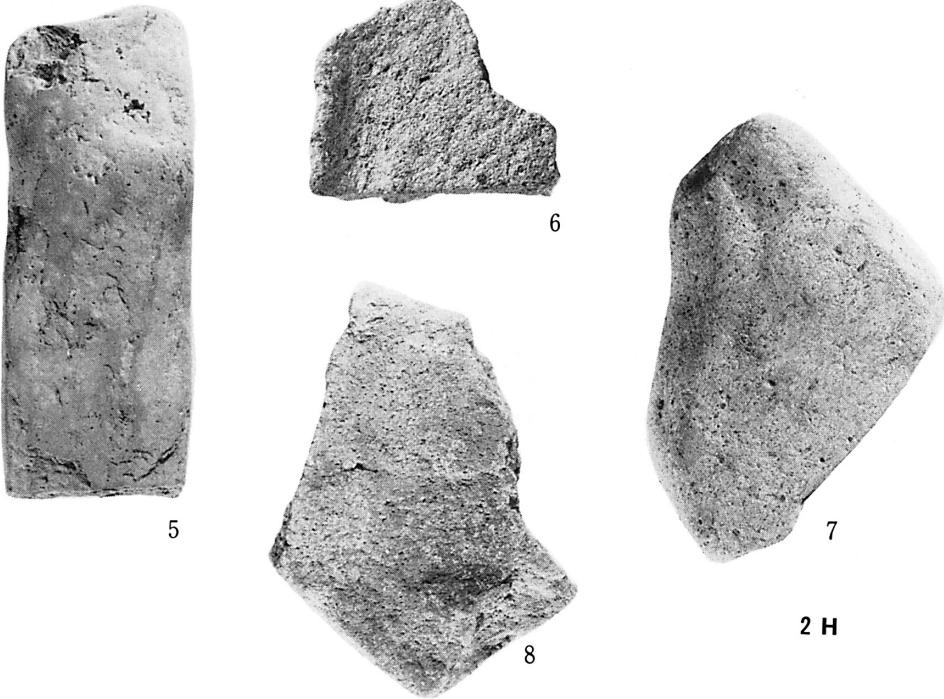
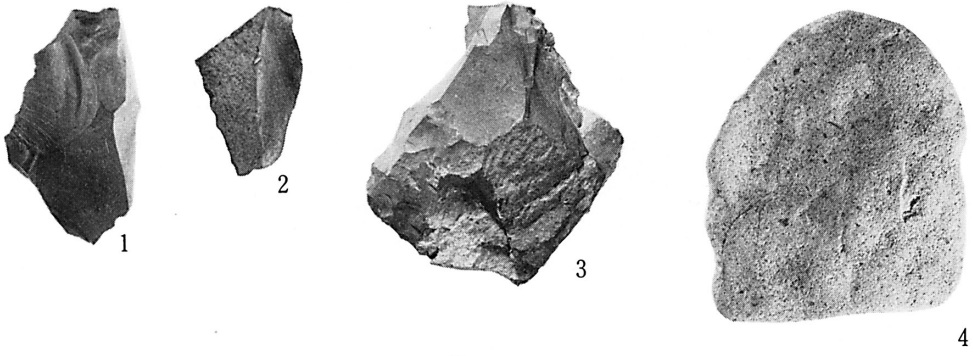


写真31 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(1)

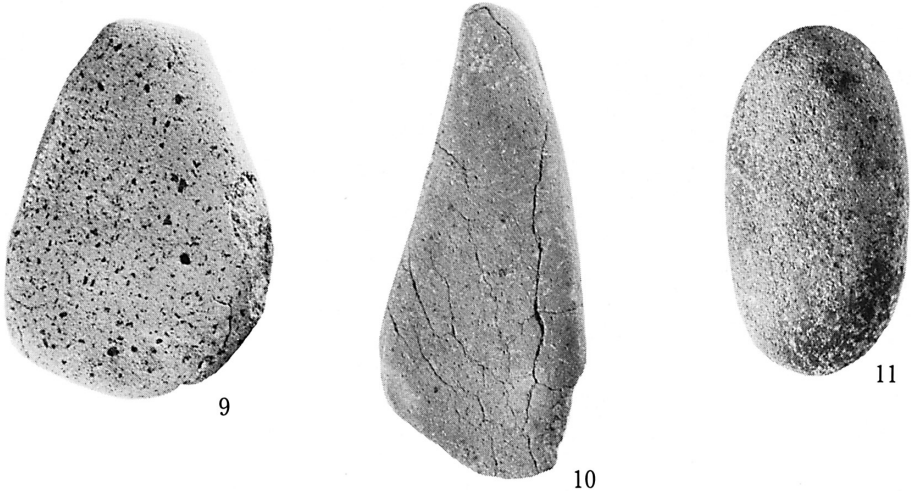


1 H

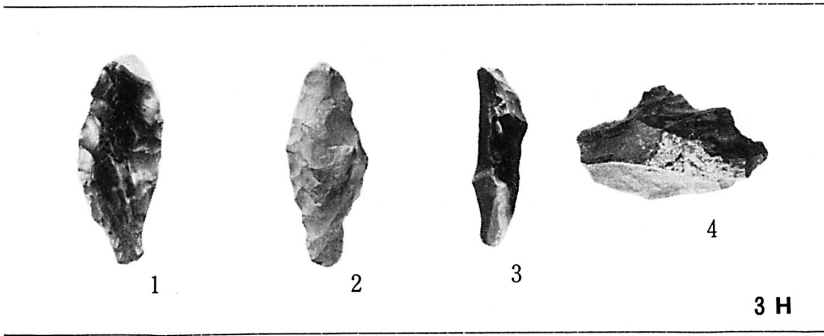


2 H

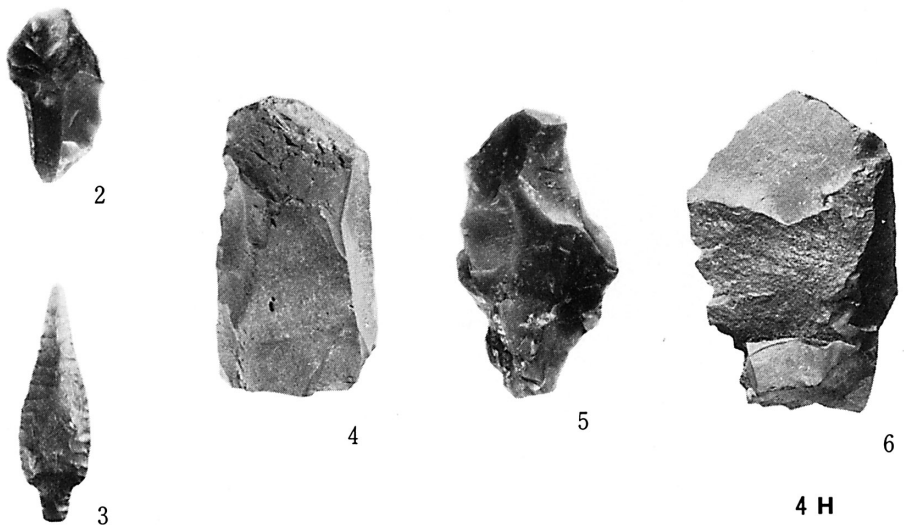
写真32 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(2)



2 H



3 H



4 H

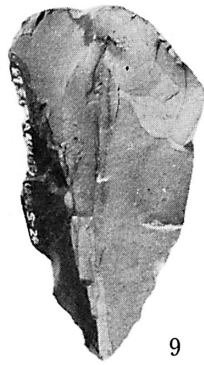
写真33 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(3)



7



8



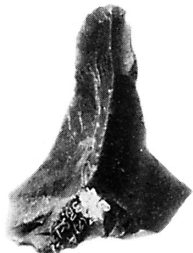
9



10



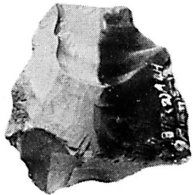
11



12



13



14



15



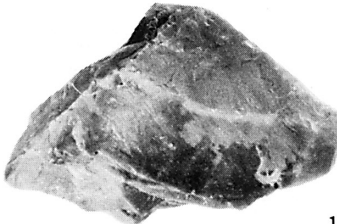
16



17



18



19

4 H

写真34 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(4)

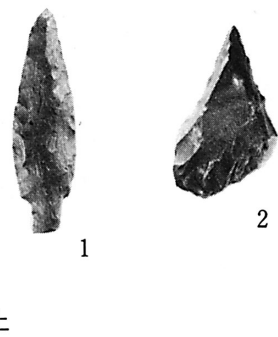
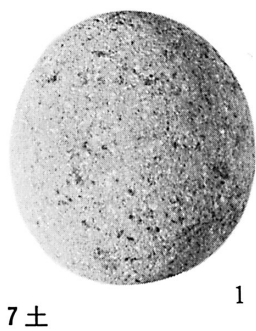
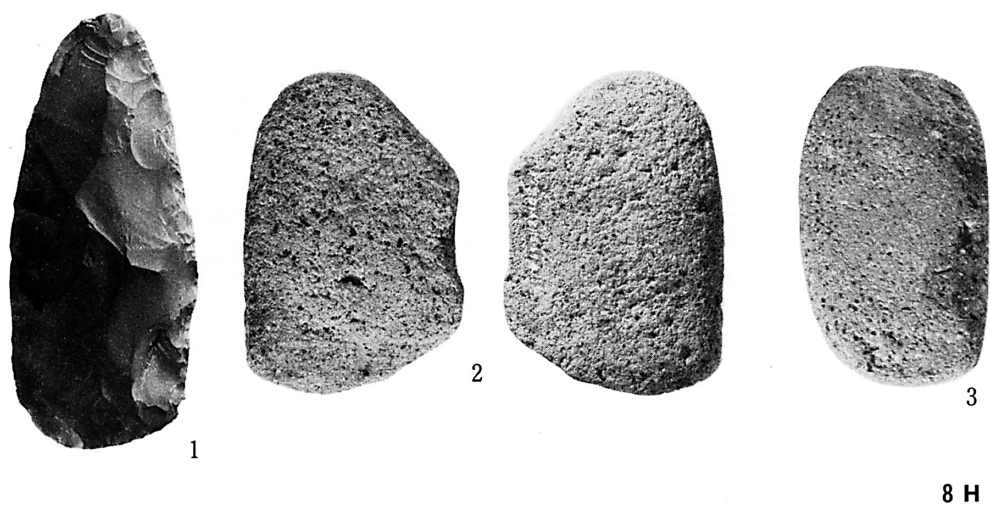
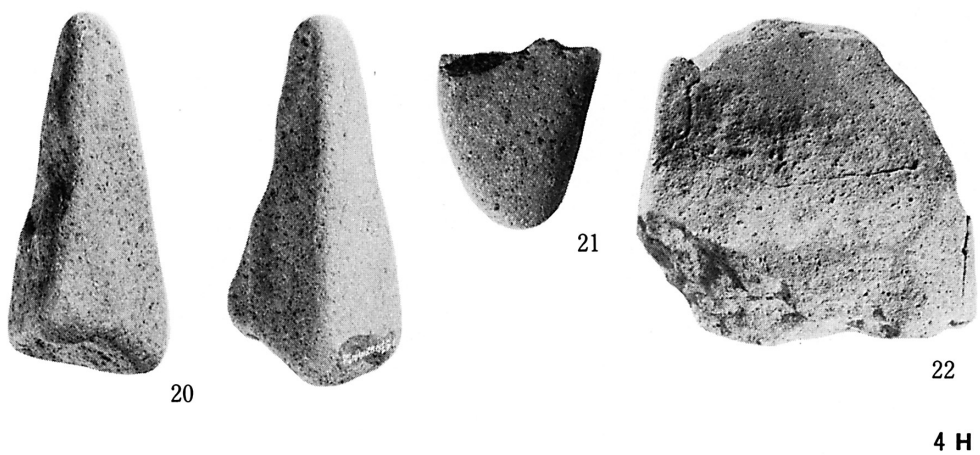


写真35 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(5)

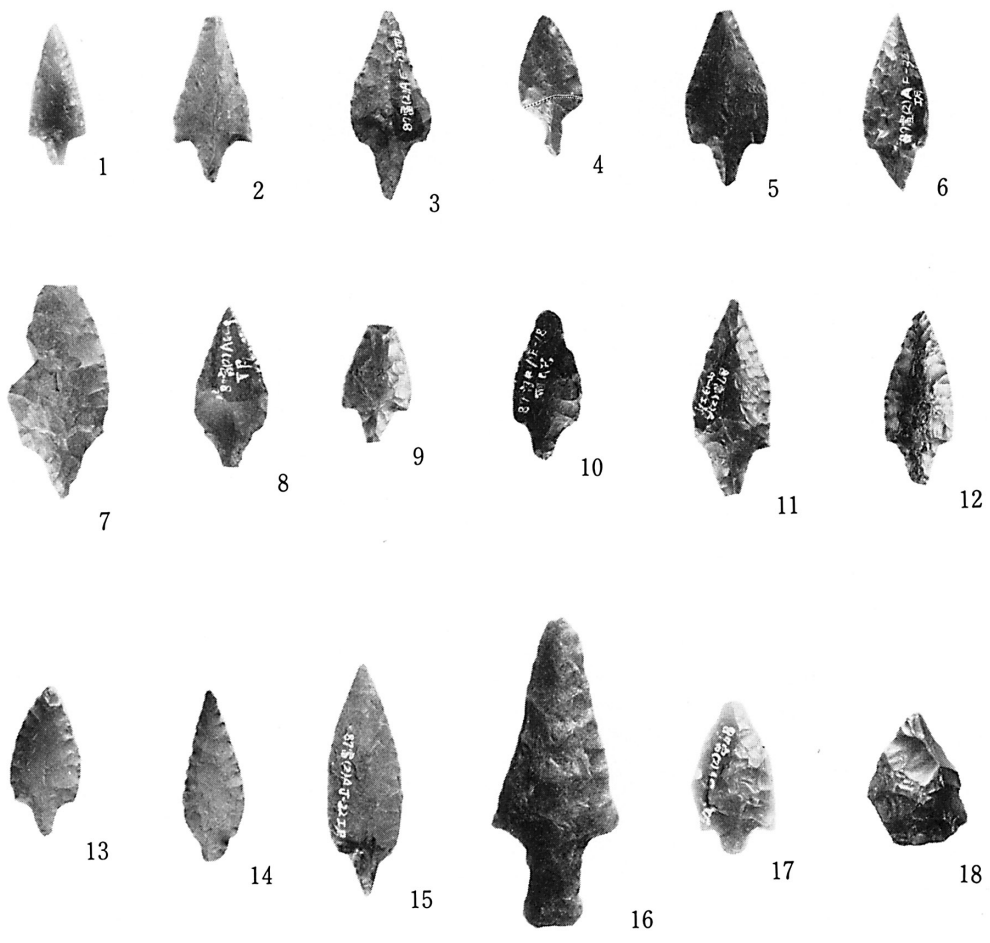
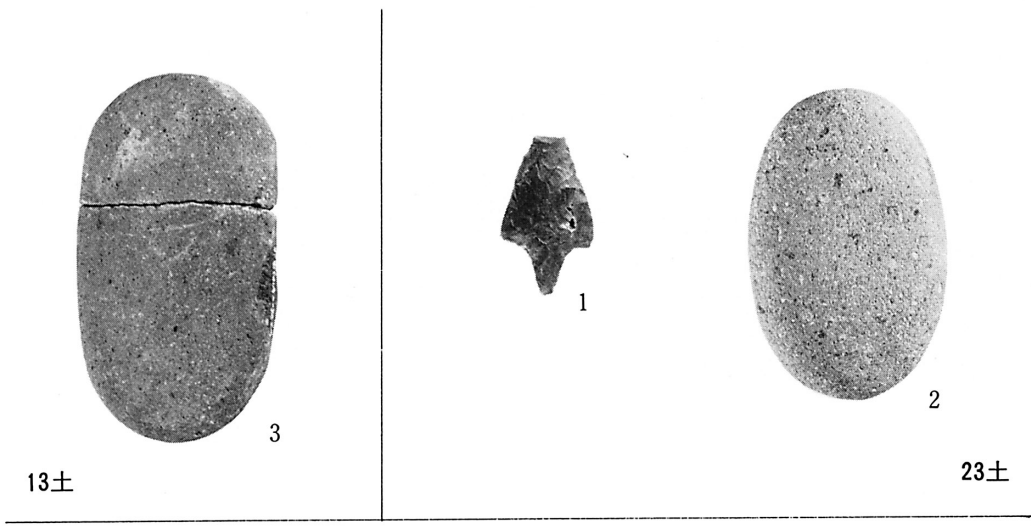


写真36 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(6)

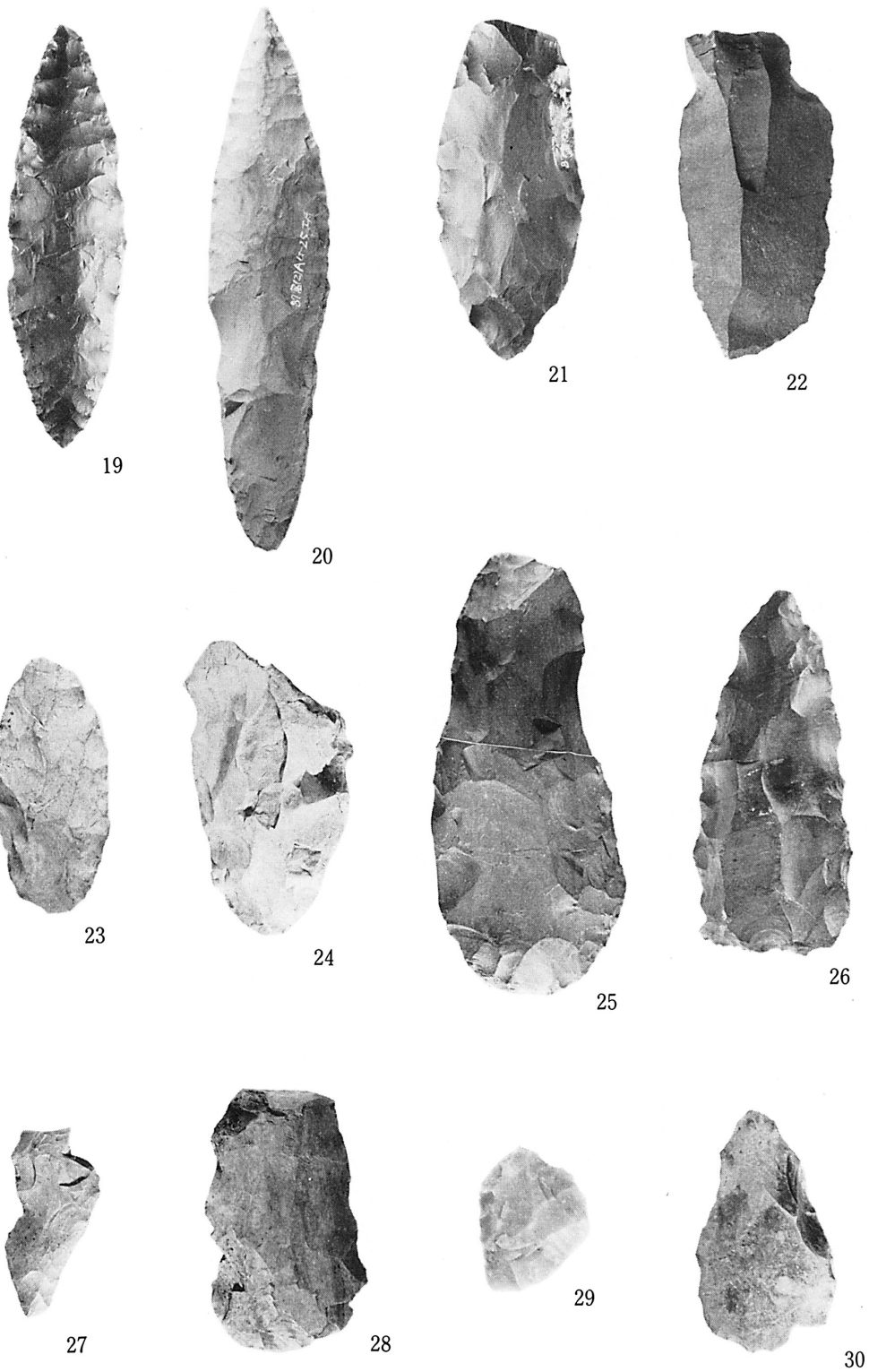
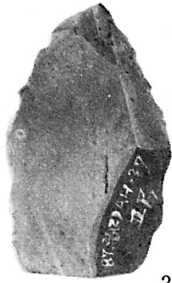


写真37 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(7)



31



32



33



34



35



36



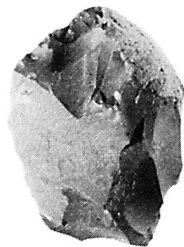
37



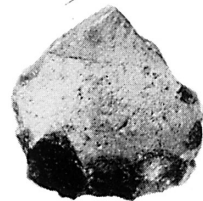
38



39



40



41

写真38 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(8)

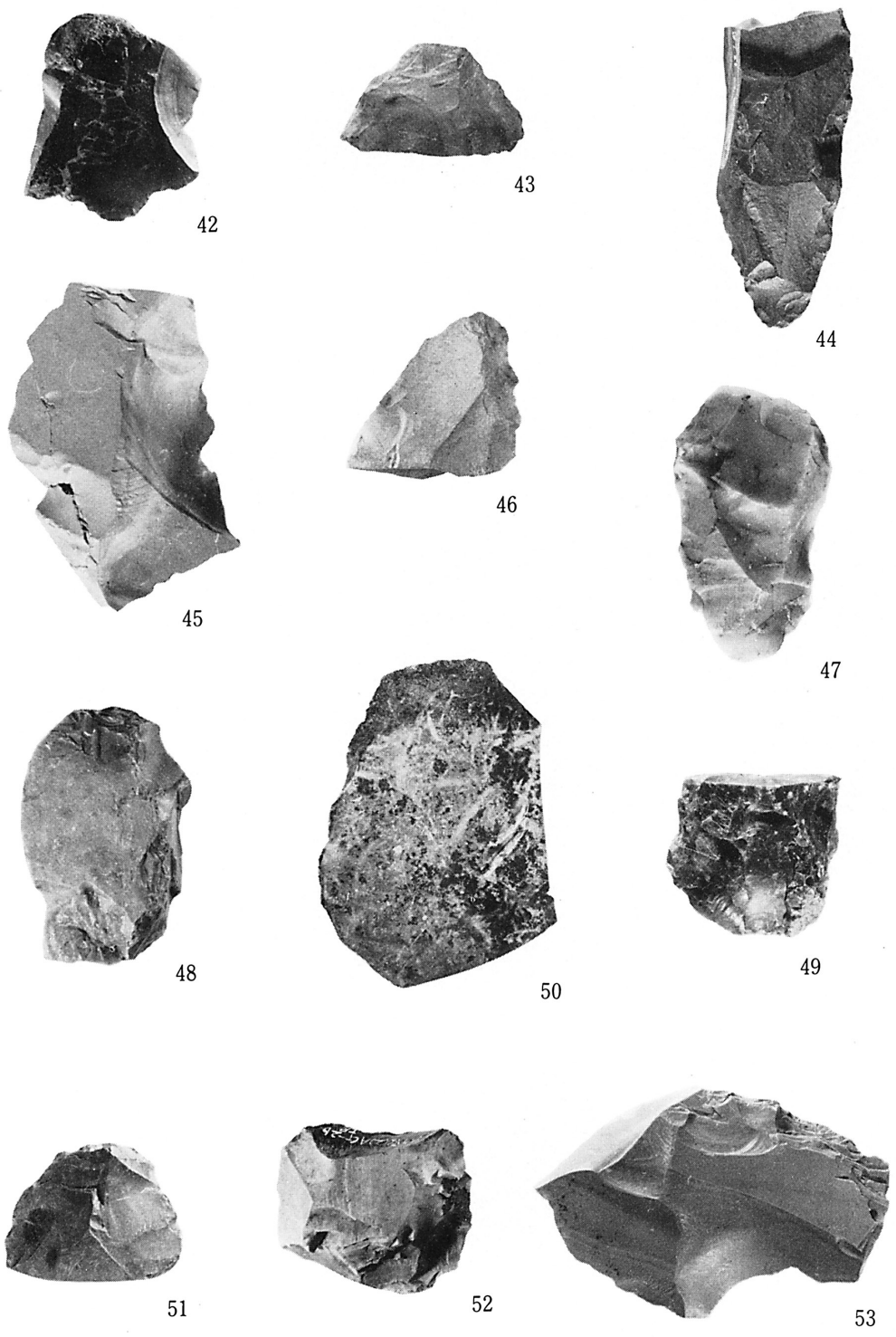
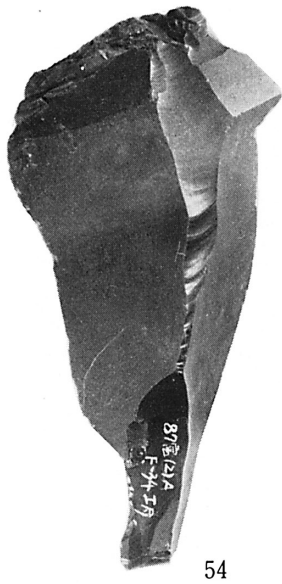


写真39 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(9)



54



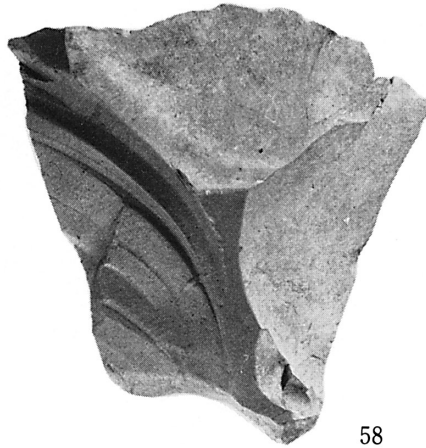
55



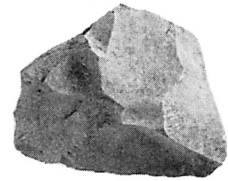
56



57



58



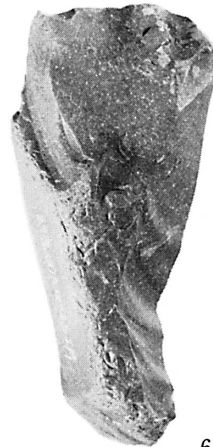
59



60



61

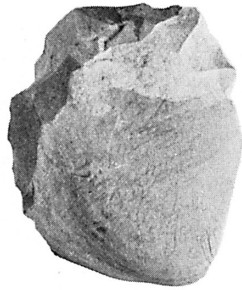


62

写真40 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器(10)



63



64



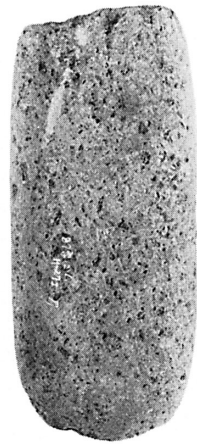
65



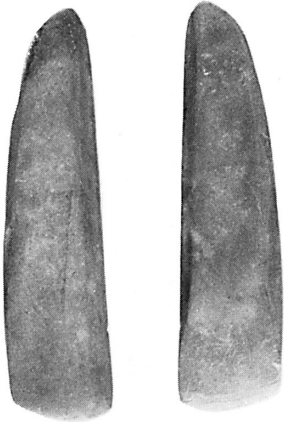
66



67



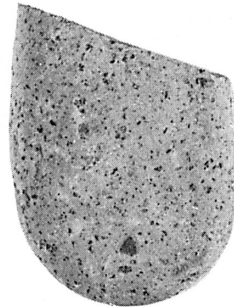
68



69



70

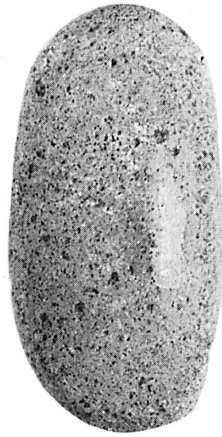


71

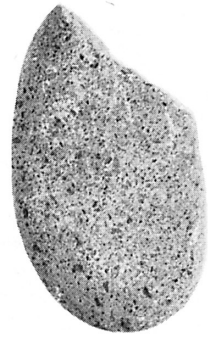
写真41 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器 (11)



72



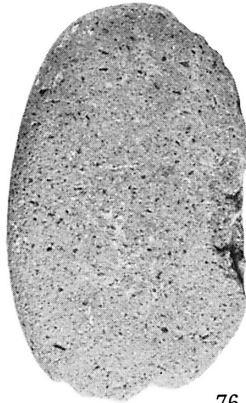
73



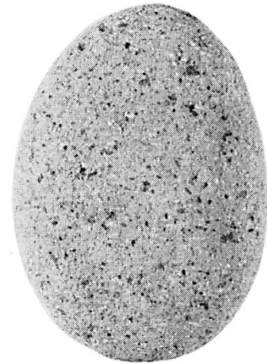
74



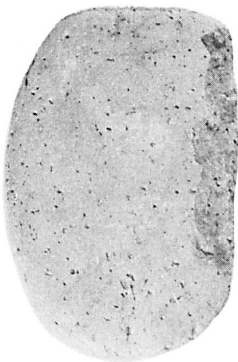
75



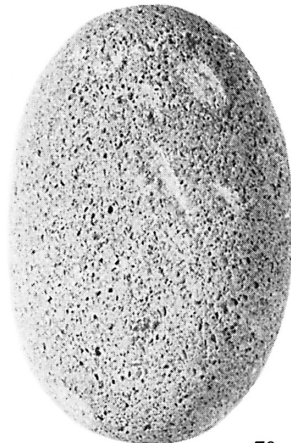
76



77



78



79



80

写真42 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器 (12)

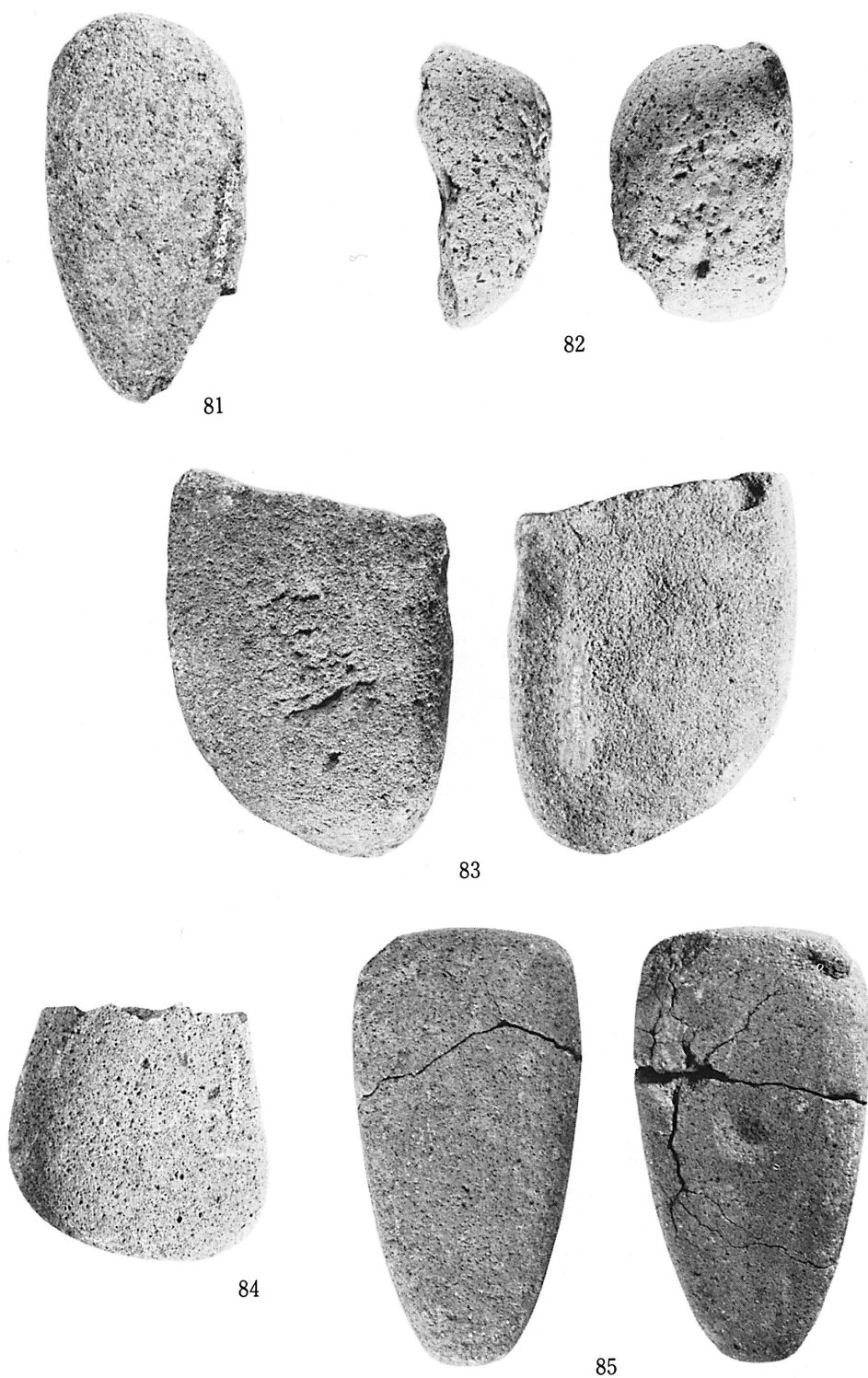
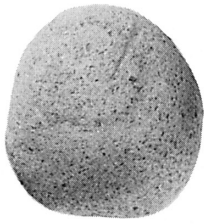


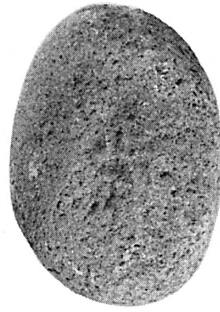
写真43 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器 (13)



86



87



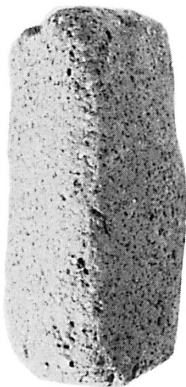
89



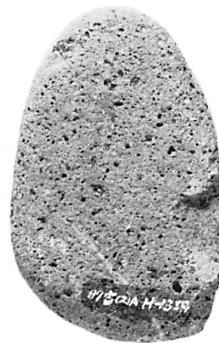
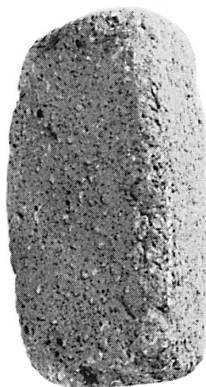
88



90



91

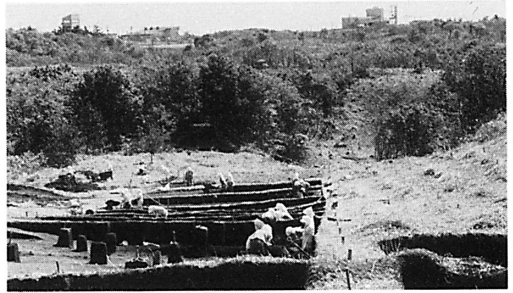


92

写真44 富ノ沢(2)遺跡A地区出土石器 (14)



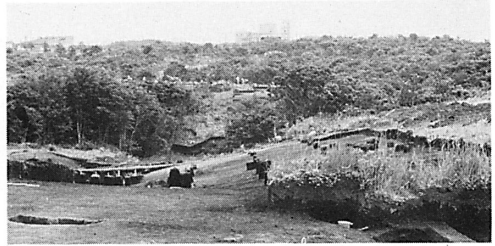
作業風景



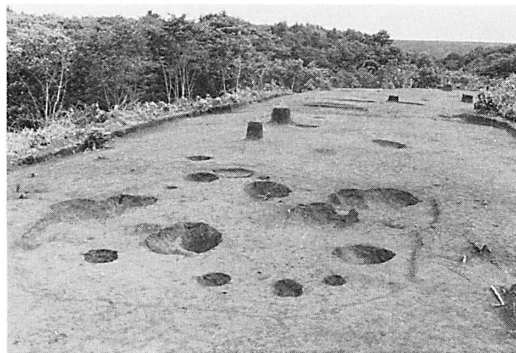
遠景写真 (W→)



作業風景



遠景写真 (W→)



遠景写真 (N→)



第6号竖穴住居跡 (E→)



第6号竖穴住居跡・炉

写真45 富ノ沢(2)遺跡B地区遠景・竖穴住居跡



第7号竖穴住居跡 (N→)



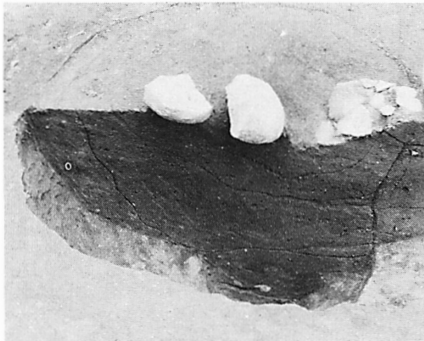
第7号竖穴住居跡 (W→)



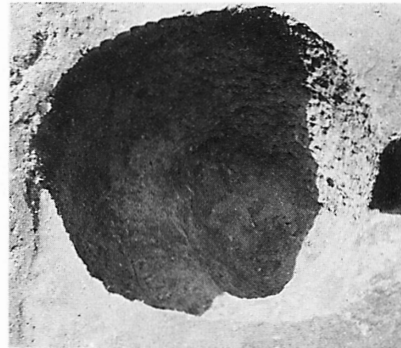
第7号竖穴住居跡・炉



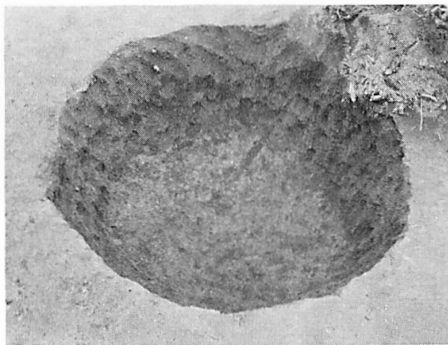
第7号竖穴住居跡・炉



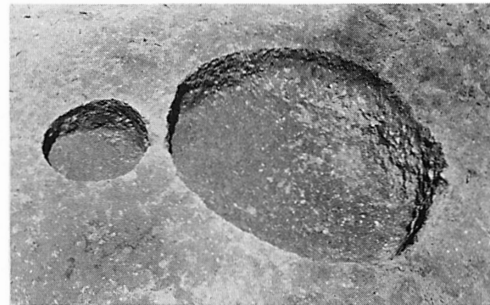
第35号土壙土層断面



第35号土壙 (N→)

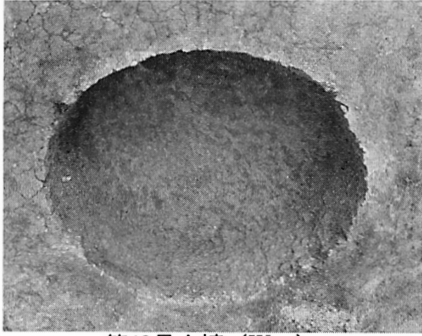


第39号土壙 (E→)

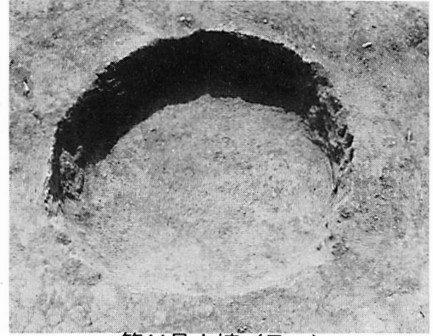


第34・40号土壙 (S→)

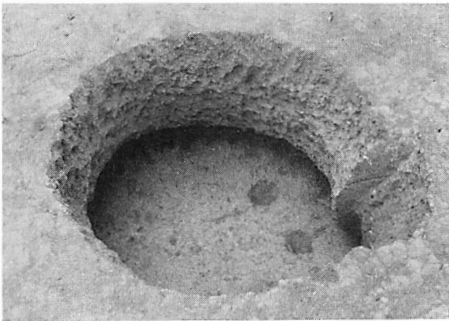
写真46 富ノ沢(2)遺跡B地区竖穴住居跡・土壙



第42号土坑 (W→)



第44号土坑 (E→)



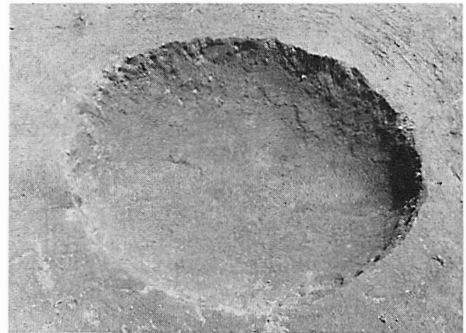
第45号土坑 (E→)



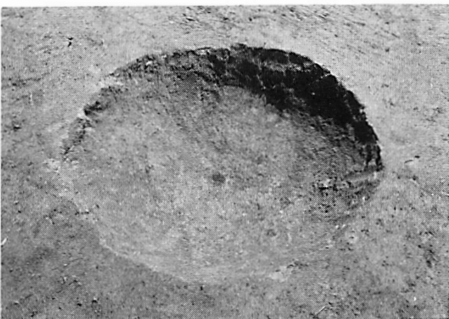
第48・59号土坑 (S→)



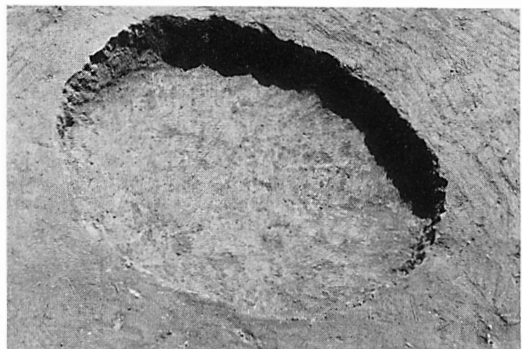
第51号土坑 (W→)



第52号土坑 (W→)



第53号土坑 (W→)

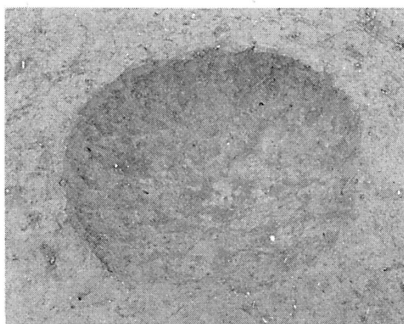


第54号土坑 (E→)

写真47 富ノ沢(2)遺跡B地区土坑(1)



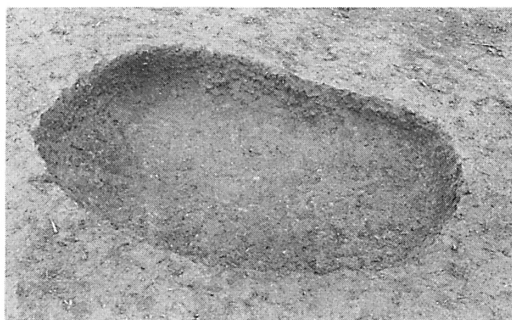
第55・56号土坑 (S→)



第60号土坑 (W→)



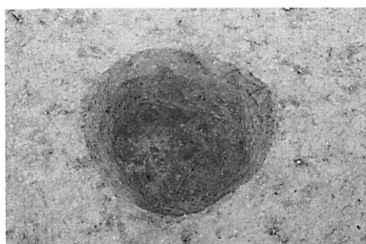
第62号土坑土層断面図



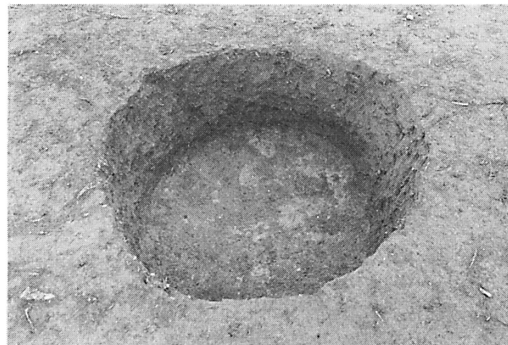
第62号土坑 (W→)



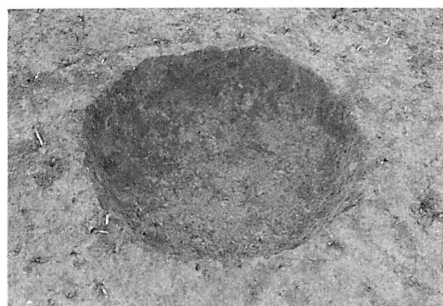
第62号土坑土器出土状況



第63号土坑 (S→)



第64号土坑 (N→)

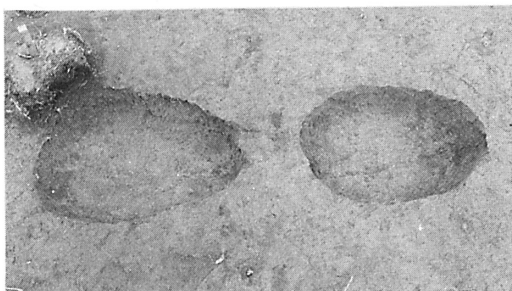


第65号土坑 (W→)



第66号土坑 (N→)

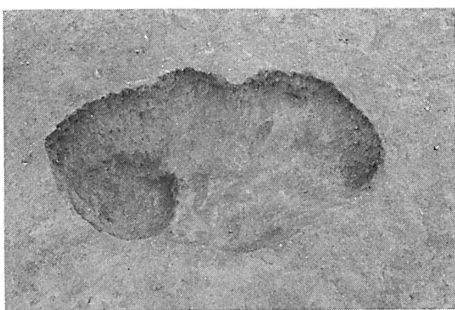
写真48 富ノ沢(2)遺跡B地区土坑(2)



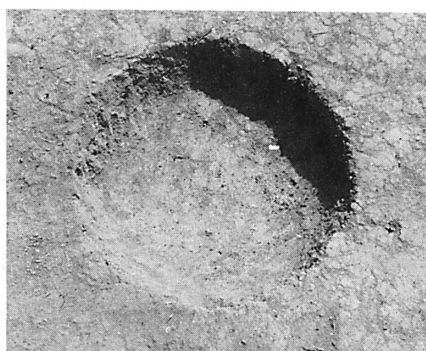
第67・68号土坑 (S→)



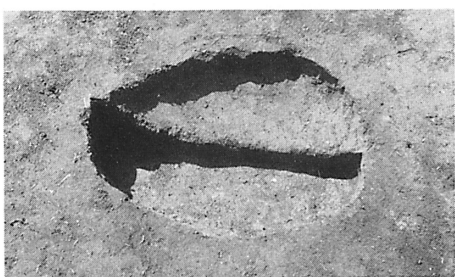
第69号土坑 (N→)



第70号土坑 (W→)



第2号焼土状遺構 (W→)



第3号焼土状遺構 (N→)



第4号焼土状遺構 (N→)

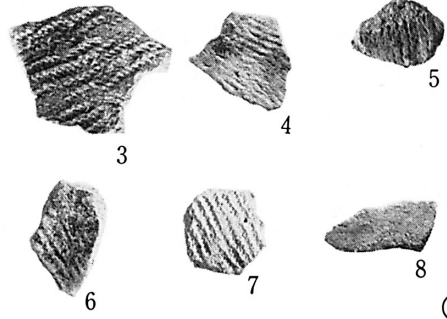


第5号焼土状遺構 (S→)

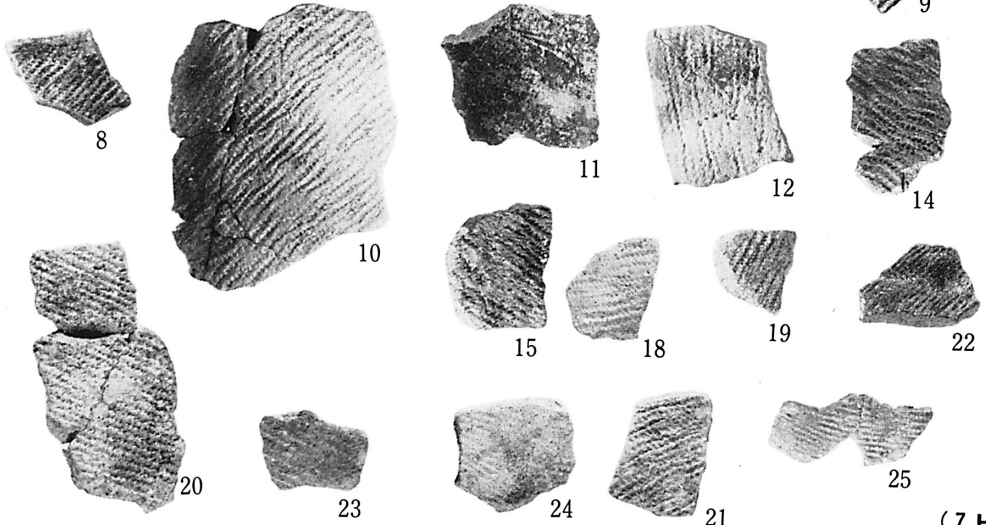
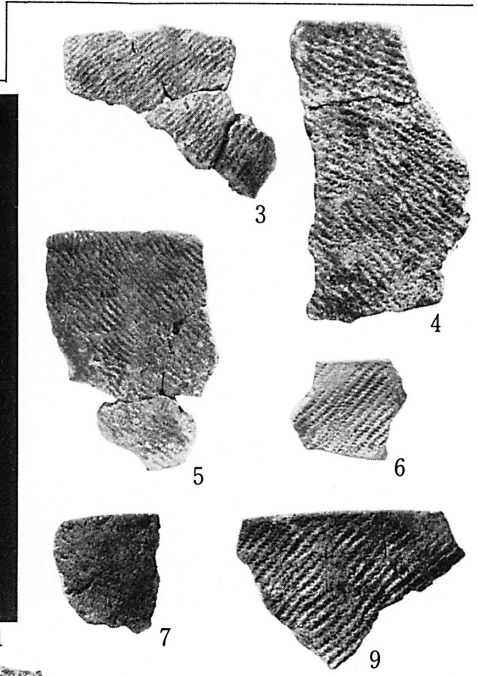
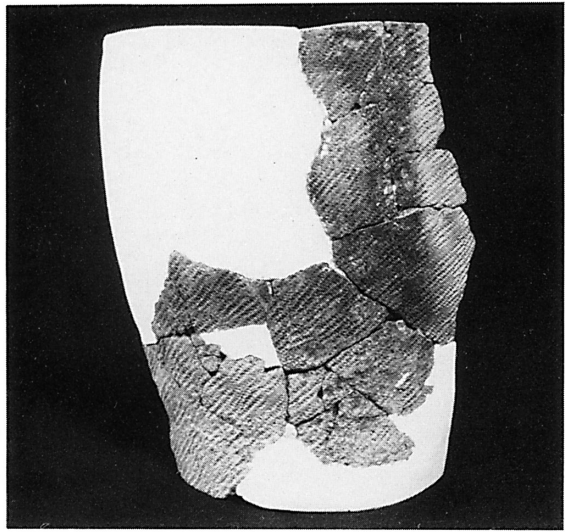


第1号ピット群 (N→)

写真49 富ノ沢(2)遺跡B地区土坑・焼土状遺構・ピット群



(6 H)



(7 H)

写真50 富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器 (1)

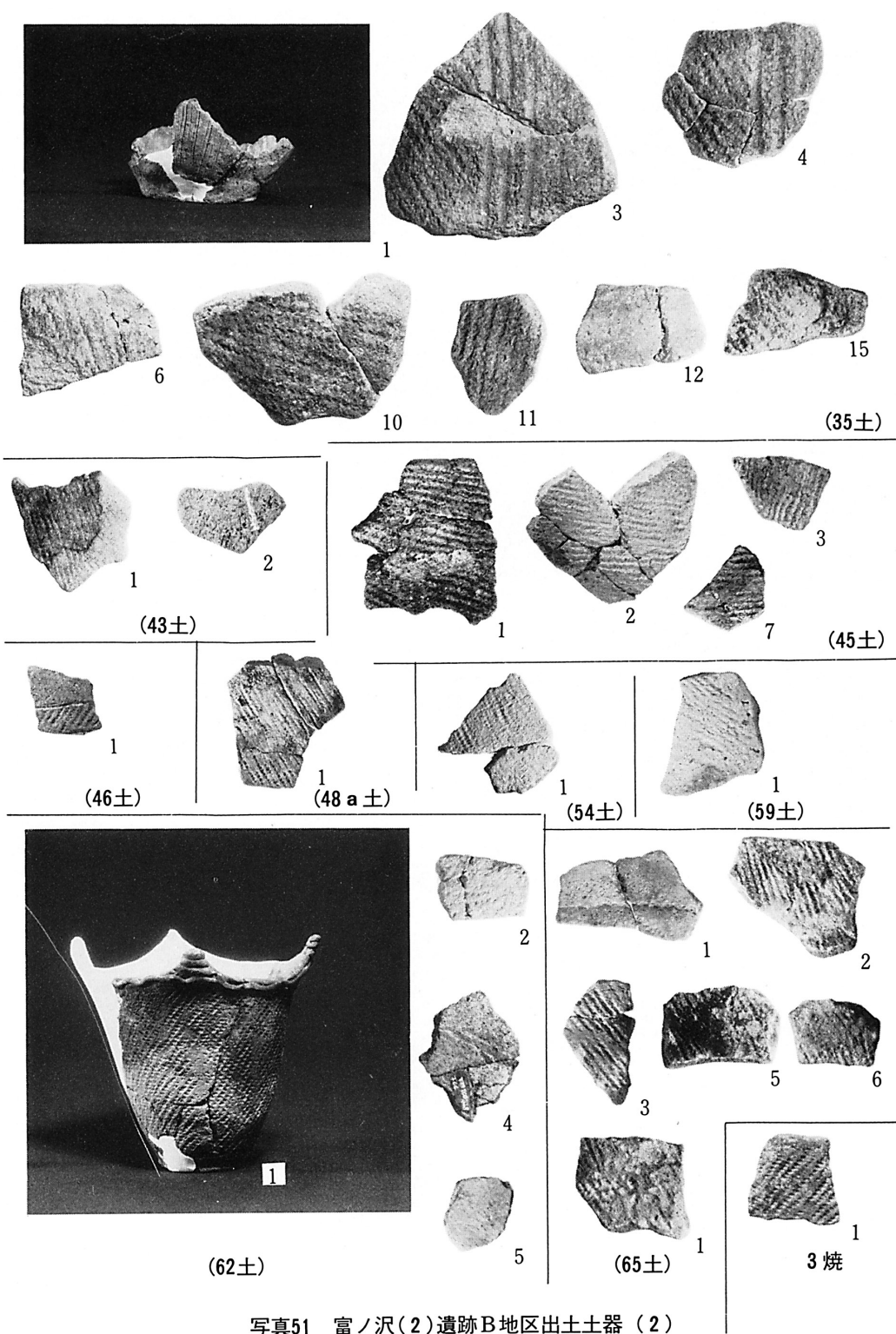
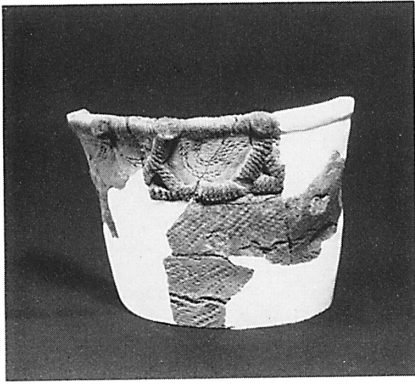
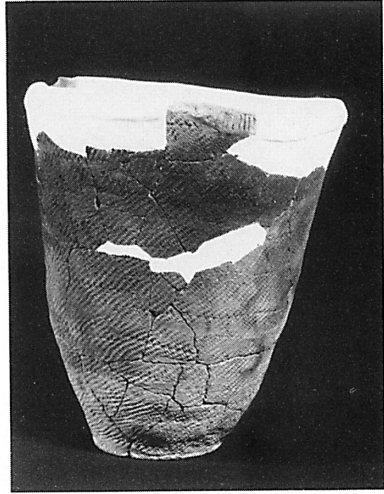


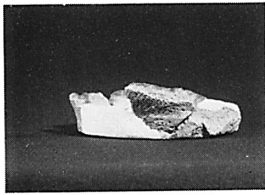
写真51 富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器(2)



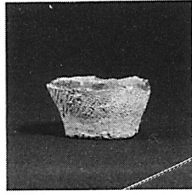
1



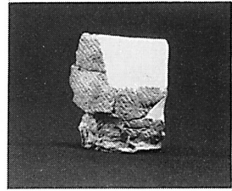
4



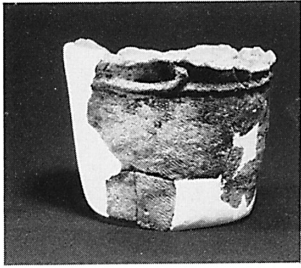
2



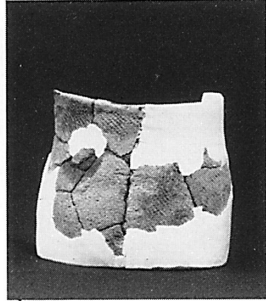
3



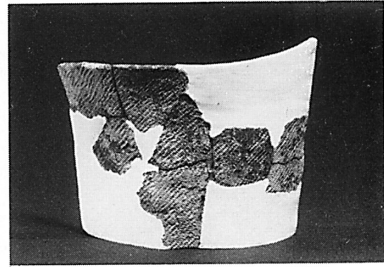
5



6



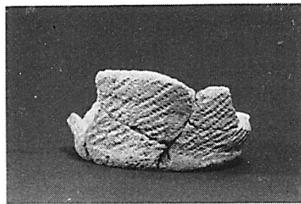
7



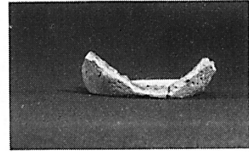
8



12



13



14



12



13



14



16

写真52 富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器(3) [Ⅱ群1類(1)・Ⅱ群5類(4)・Ⅲ群1類(6) Ⅲ群2類(2)・(3)・(5)・(7)・(8)・(12~16)]

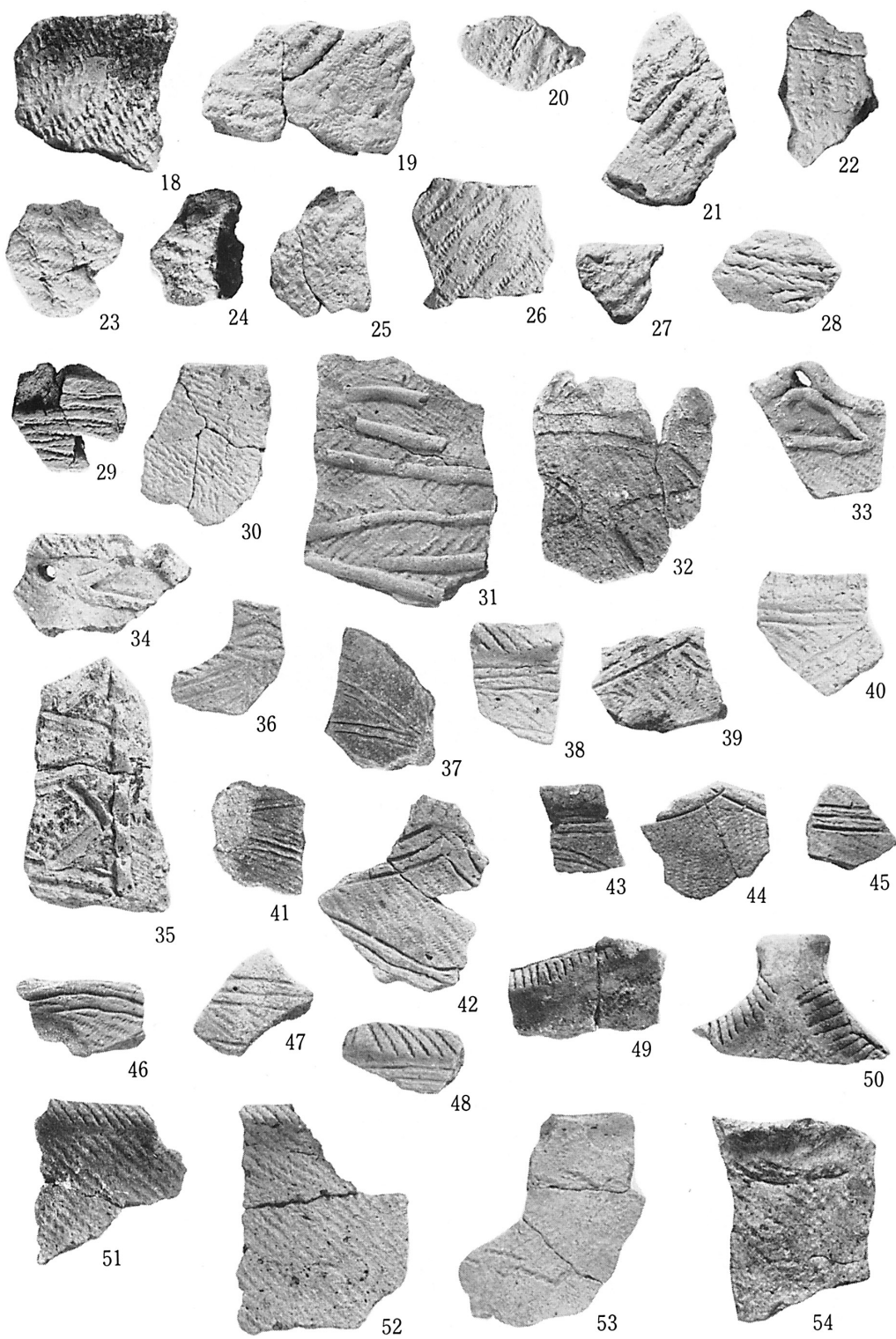


写真53 富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器 (4) [I群2類 (18) ~ (30) · II群3類 (31) ~ (34)]
 [II群4類 (35) ~ (48) · II群5類 (49) ~ (54)]

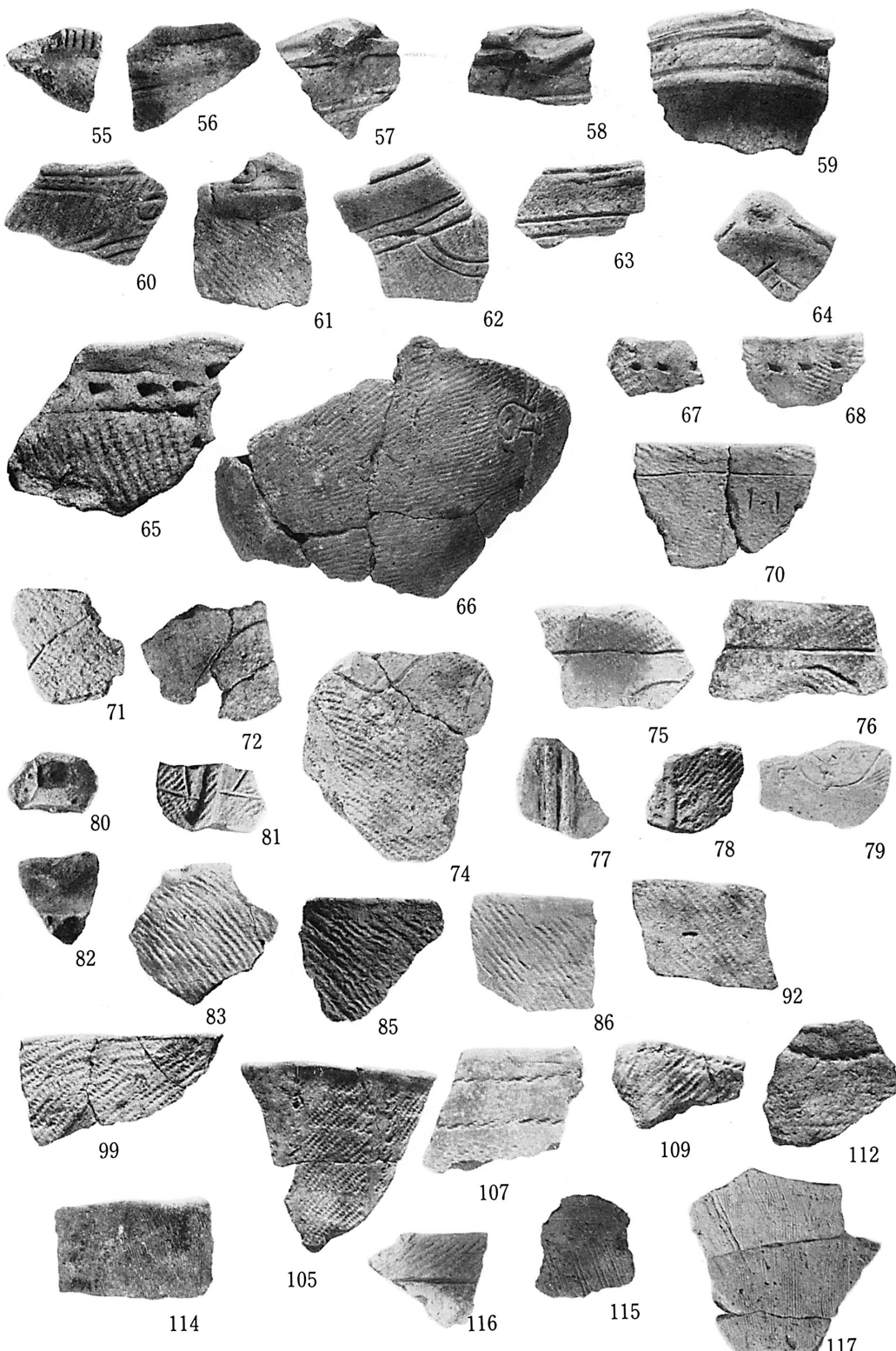


写真54 富ノ沢(2)遺跡B地区出土土器(5)

Ⅱ群5類(55) ~ (56)	Ⅱ群6類(57) ~ (61)
Ⅱ群7類(62) ~ (64)	Ⅱ群8類(65) ~ (69)
Ⅱ群9類(70) ~ (77)	Ⅲ群1類(78) ~ (82)
Ⅲ群2類(83) ~ (117)	

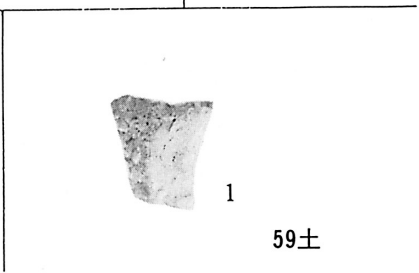
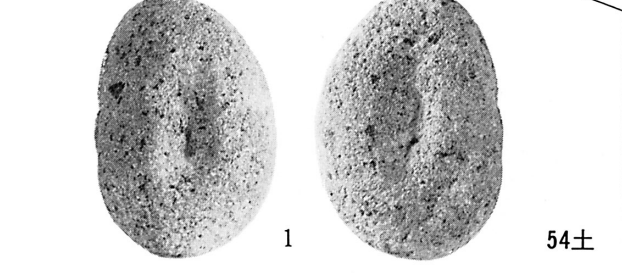
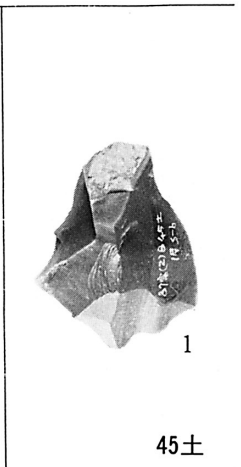
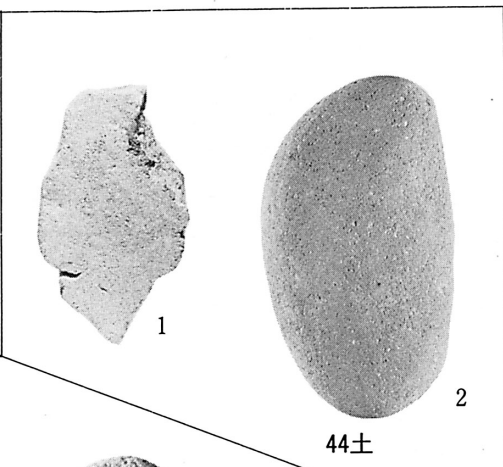
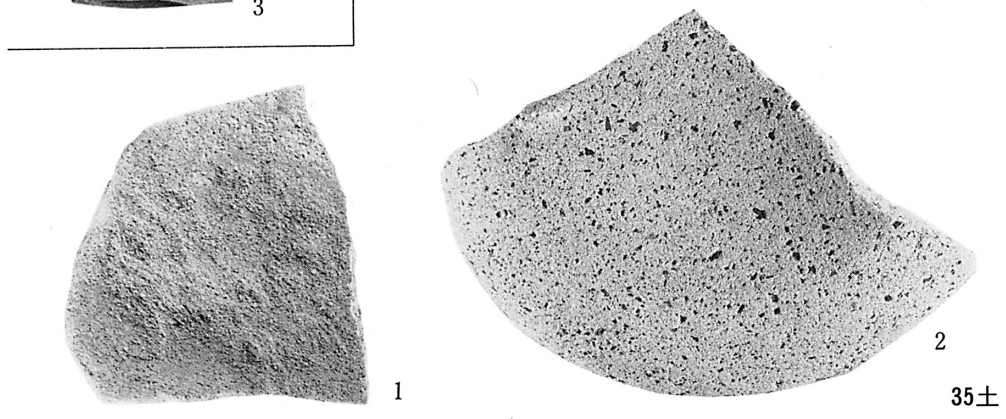
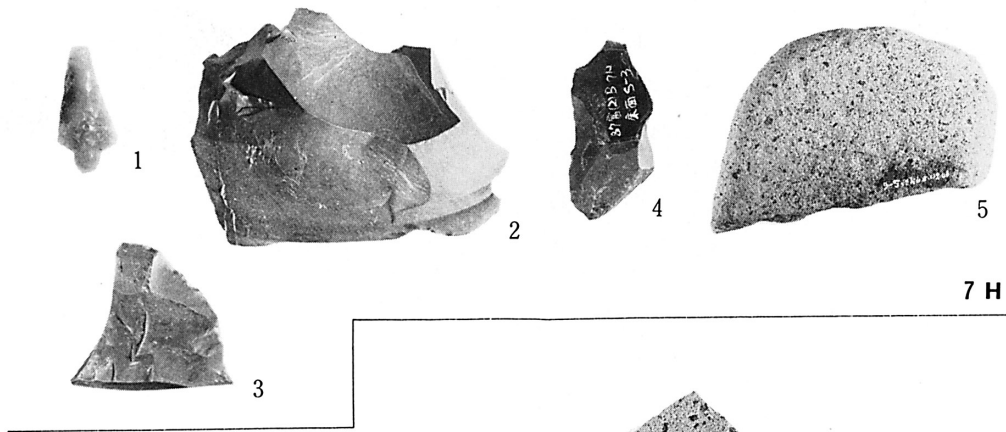


写真55 富ノ沢(2)遺跡B地区出土石器(1)

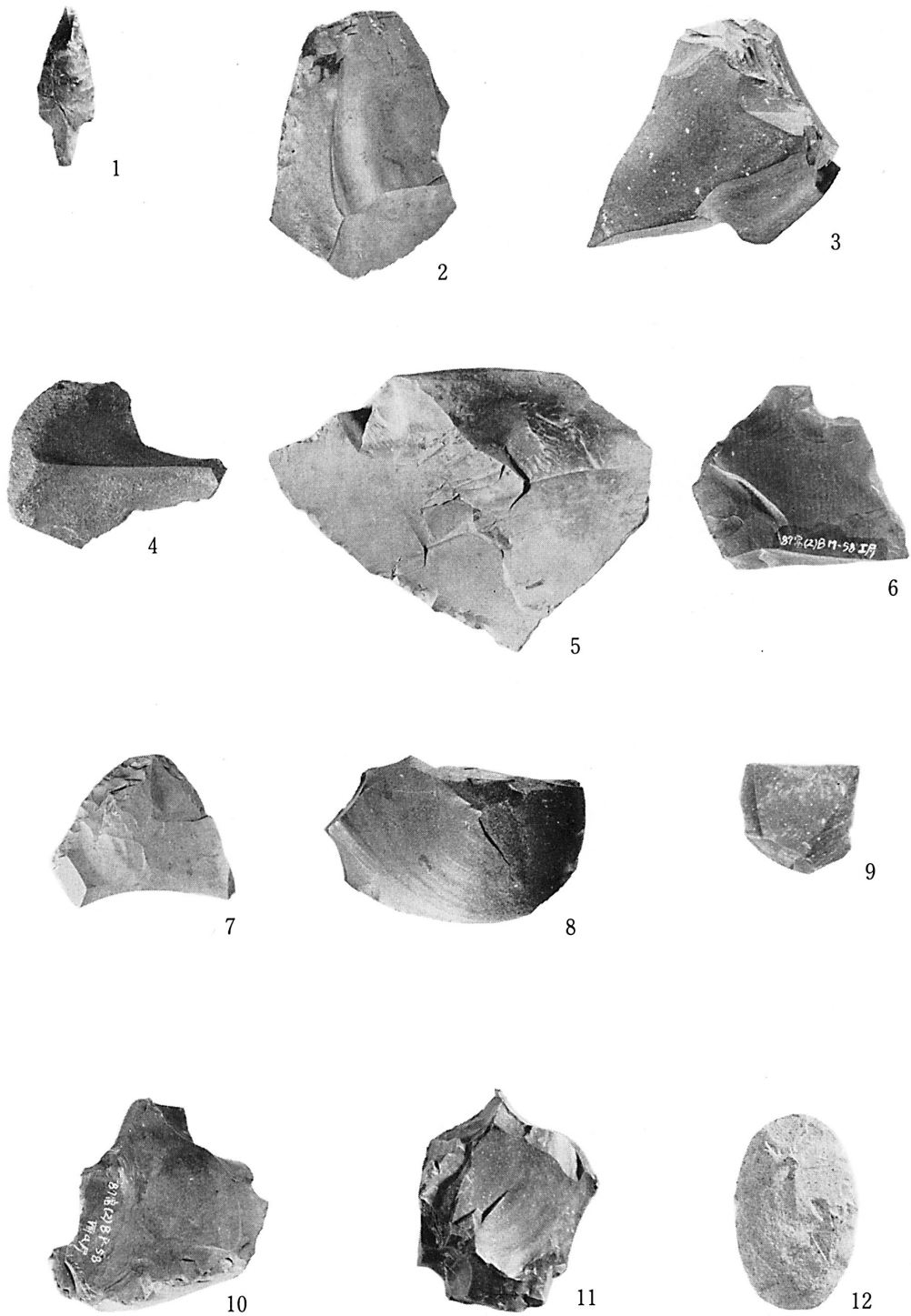


写真56 富ノ沢(2)遺跡B地区出土石器(2)

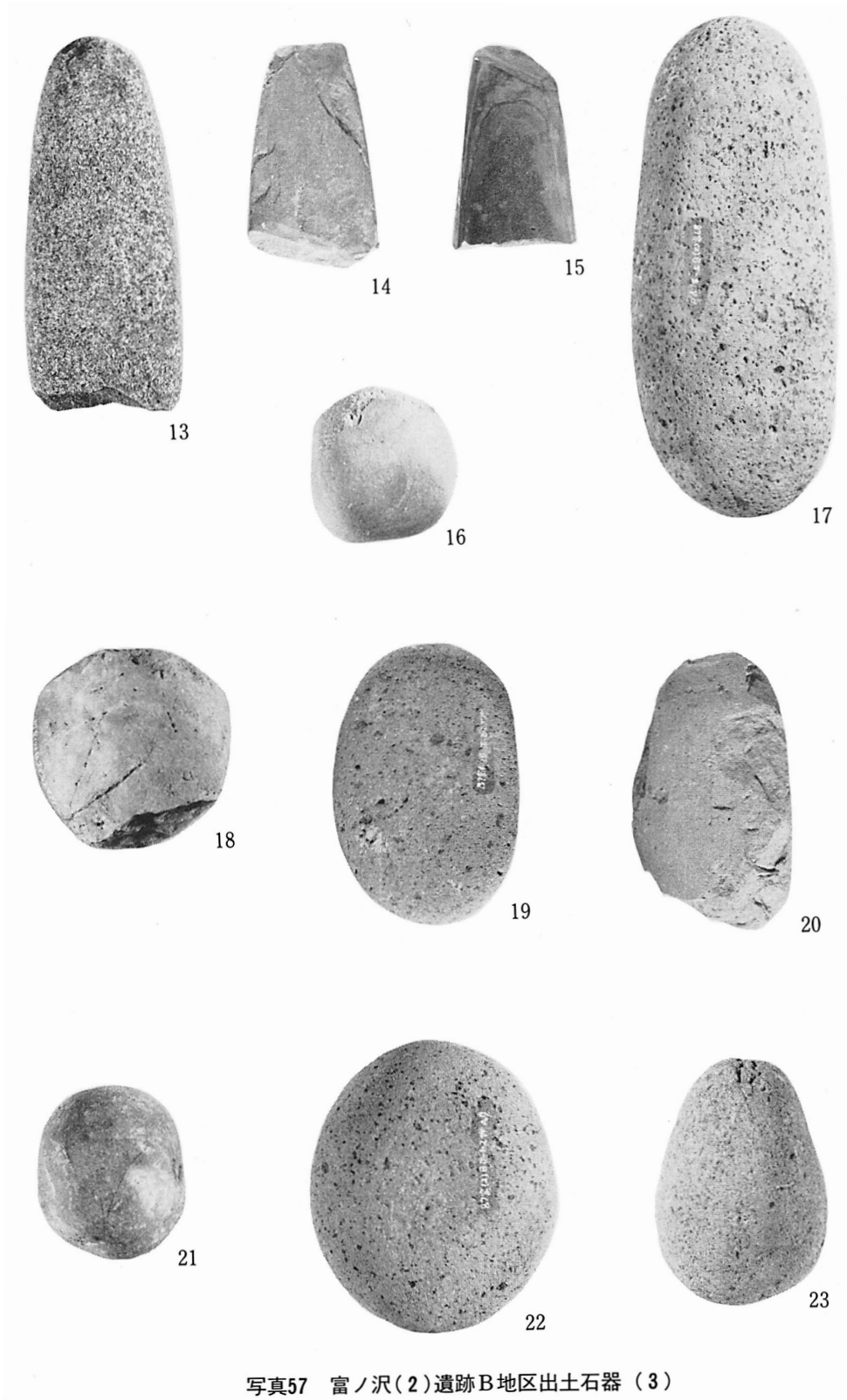
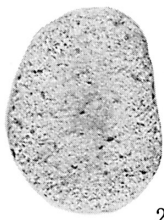
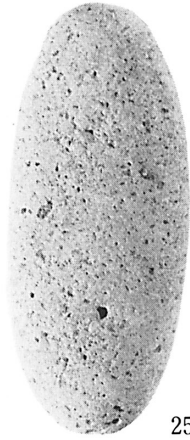


写真57 富ノ沢(2)遺跡B地区出土石器(3)



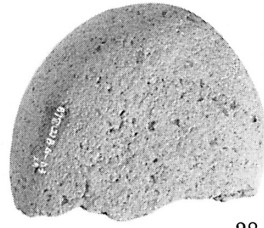
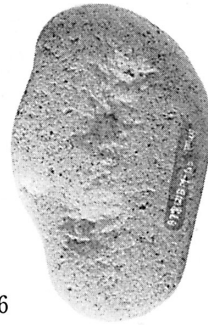
24



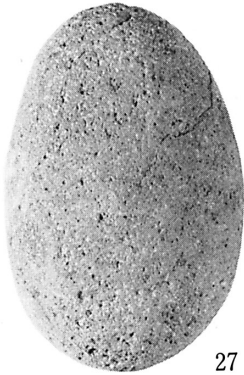
25



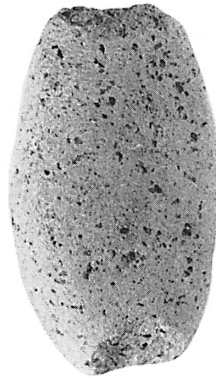
26



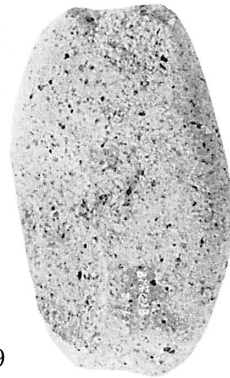
28



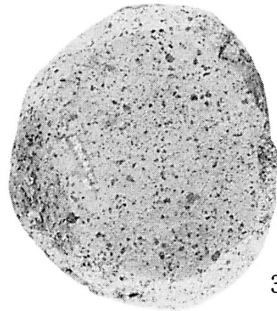
27



29



30



31



32

写真58 富ノ沢(2)遺跡B地区出土石器(4)

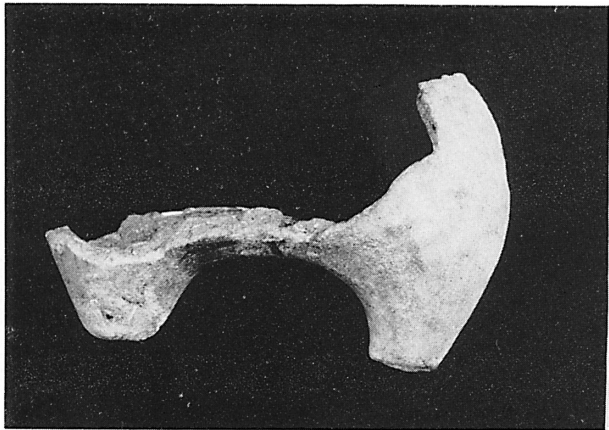
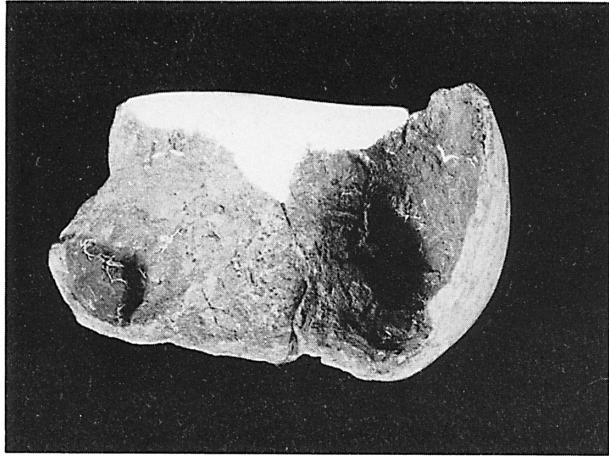
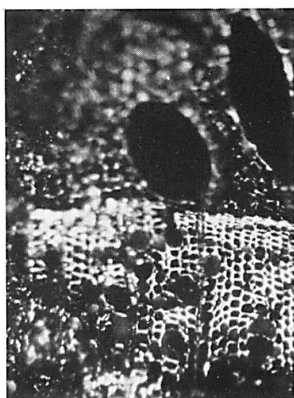


写真59 有足土器



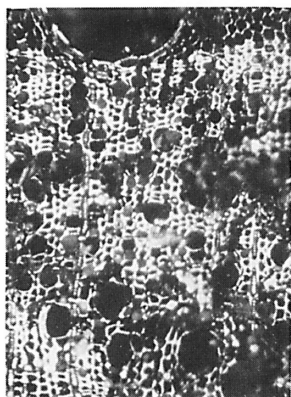
1. クリ木口



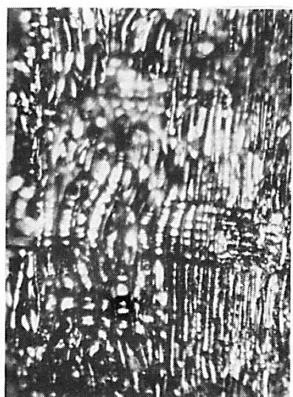
12. クリ木口



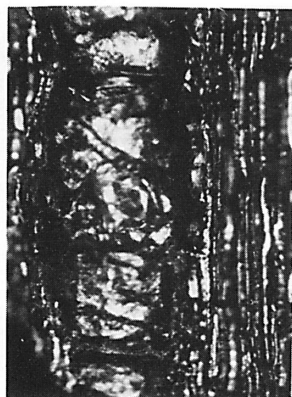
12. 同左板目



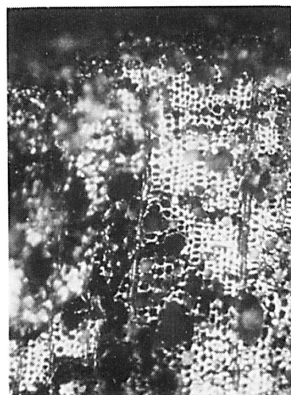
13. クリ木口



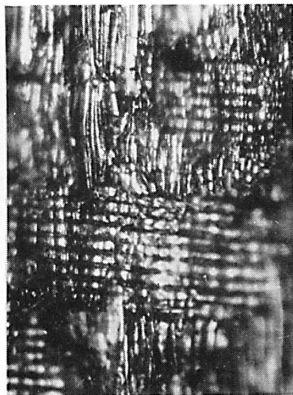
13. 同左柱目



13. 同左板目



8. クリ木口



8. 同左柱目



8. 同左板目

番号は試料番号すべて×50

写真60 富ノ沢(2)遺跡出土の炭化木

青森県埋蔵文化財調査報告書 第118集

富ノ沢(1)・(2)遺跡

—むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日	平成元年 3月31日
発行	青森県教育委員会
編集	青森県埋蔵文化財調査センター 〒030-02 青森市大字新城字天田内152-15 電話 0177-88-5701・5702
印刷	東北印刷工業株式会社 〒030 青森市合浦一丁目2番12号 電話 0177-42-2221